

sword art online 一黒
と灰一

戒斗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デスクゲームと化した次世代ゲーム

《ソードアートオンライン》通称《SAO》

【黒の剣士】キリトには相棒でありライバルでもある友がいた。

背丈程ある大剣と鉤の短剣

異なる武器を手ゲームクリアのため楽しむために最前線へと赴く少年。

その名は【双刃】アルト

SAO・ALOはダークソウル、GGOはMGR風味になってます。随所にFate

要素を散りばめています。

アインクラッド編完結

フェアリーダンス編完結

ファントムバレット編完結

アインクラッド回想編完結

キャリバー編完結

ロスリック編完結

オーディナル・スケール編完結

アリシゼーション編スタート

注意

作者のフアランへの愛が爆発した結果産まれた作品です。

読み手を選ぶ可能性があるなので、ご注意ください。

アドバイス等あれば幸いです。

ダークソウル要素はアインクラッド回想編とロスリック編に含まれます。

最初から書き直すか思案中

目次

番外編

短編集その1	1
短編集その2	7
温泉回	14
バレンタイン アルゴ編	21
a pure heart	29
遊園地 木綿季&藍子編	37
そーどあーと・おふらいん その1	42
そーどあーと・おふらいん その2	51
あり得たかもしれない世界線	58

あり得たかもしれない世界線 その2	64
ピンクの悪魔	80
第二回 SQUAD (スクワッド) JAM	85
(ジャム)	85
【双刃】と【毒鳥】	101
罪の代償	111
いつかの思い出	115
Fatel (フェイタル) ball e	127
t (バレット)	127
第六特異点	136
第七特異点	150
ささやかな日常 過去編	164

起源 (ルーツ)	172
アインクラッド編	
第1斬：七十四階層迷宮区攻略前	
哨	189
第2斬：七十四階層迷宮区攻略	
197	
第3斬：二刀流と特双剣	208
第4斬：決闘	218
第5斬：黒歴史とサプライズ	228
第6斬：ユイ	238
第7斬：心の形	255
第8斬：死闘	280
第最終斬：譲れないもの	297

幕間	
虚栄の英雄	316
凶刃の思い	326
仲間 (友)	334
今は遠い記憶	344
黒のいない日	352
貫き通す思い	359
【閃光】 vs 【双刃】	367
フェアリーダンス編	
cher	376
第1翔：the Abyss	
Wat	
第2翔：意思の力	386
第最終翔：帰還	398

幕間

日常と世界の種子	410
ユイの夏休み	416
戦闘狂の日常	425
剣禅一致	436
大人の嗜み	445
フアントムバレット編	
第1弾：銃の世界	453
第2弾：氷の弾丸	468
第3弾：死銃	484
第4弾：第三回BOB予選	492
第5弾：浮遊城の亡霊	509
第6弾：推理そして本選	519

第7弾：凶弾	533
第8弾：逃避行	555
第9弾：剣士、再び	572
第10弾：決着	590
第11弾：幕引き	616
第最終弾：Debriefing（帰還報告）	632
幕間	
弾丸よりなお速く	643
氷解	653
聖夜の過ごし方	659
アインクラッド回想編	
Prologue（プロローグ）	

第1刀：剣の世界	685
第2刀：ビーター	699
第3刀：灰の仔狼	713
第4刀：赤鼻のトナカイ	726
第5刀：黒の剣士と狼剣士	739
第6刀：闇を喰らう者	795
第7刀：灰の大狼	811
第8刀：ファランの不死隊	827
第9刀：罪科	844
第最終刀：鋼の刃	865
キャリバー編	
第1戦：地の底	886

第2戦：魔性菩薩	896
第最終戦：命の価値	911
ロスリック編	
Prologue (プロローグ)	944
第1火：灰の審判者	954
第2火：火継ぎ	970
第3火：呪いの大樹	991
第4火：火の導き	1010
第5火：異形の聖堂	1029
第6火：狼の騎士	1047
第7火：アルトリウス	1058
第8火：亡国の王	1070

第9火：神喰らい	1087
第10火：双王子	1031
第11火：古竜の頂	1191
第12火：無名の王	1241
第最終火：火継ぎ	1141
幕間	
つかの間の休息	1155
オーディナル・スケール編	
Prologue	1162
第一節：意志	1171
第二節：疑心	1182
第三節：確信	1195
第四節：疑念	1205

第五節：変生	1214
第六節：魔性	1223
第最終節：可能性の獣	1234
Epilogue (エピローグ) という	
名の prologue (プロローグ)	1246
幕間	
微睡みの夢	1257
アリシゼーション編	
アリシゼーション予告編	1265
第一章：アンダーワールド	1272
第二章：《メガロス》	1284
第三章：お伽噺	1293

第十四章	果ての山脈	1302
第十五章	天職	1322
第十六章	旅の門出	1337
第十七章	新たなる相棒	1349
第十八章	心意そして暗雲	1358
第十九章	オーシャン・タートル	1369
第二十章	メガロス征伐	1381
第二十一章	世界の真理	1389
第二十二章	廻り始める物語	1401
第二十三章	暴虐の化身	1408

番外編

短編集その1

アルトとリーファ 初邂逅

「お兄ちゃんがSAOでお世話になりました」

「……………」

「どうしたんだ？アルト」

「胸デカ!!」

「ふえ!?!」

「ブン殴るぞテメエ!」

アルトとシノン 衣装替え

「シノン、服変えたのか？」

「ええ。あの子を使うために出来るだけ装備重量を減らそうと思って。似合ってる……かな？」

「……ああ」

「よかった……」

「いい尻してる」

「!!」

「まさに尻ノン」

「ハラスメントコードで訴えるわよアンタ!!」

アルトとキリト　いつもの

「アルトおおお!!」

「キリトおおお!!」

「あの二人いつも戦ってて飽きないのかしらねえ」

「むう」

「ほらアスナ、ヤキモチ妬かない」

「あ! クラインさんが巻き込まれました!」

「この人でなし！」

アルトとヒースクリフ 最強とは

「醤油だ」

「味噌だ」

「醤油こそあの丼の中に揃った役者たちの味を引き出し、新しいステージへと押し上げる」

「味噌はコツテリとしたスープがあらゆる食材に染み込み、食材の味とスープの旨味、その両方を味わえる」

「醤油こそ至高！」

「味噌こそ最強！」

「えつとオチは？」

「そんなものはない!!」

アルトとアルゴ 情報戦

「つまりだな、アル坊はツンデレなんだヨ」

「ぬああ！離せクライン！あの鼠を黙らせないと俺が死ぬ！」

「いいじゃねえかよう。いっつもお前に弄られる俺たちの身にもなりやがれ」

「アル坊ツンデレ情報その1。ぶっきらぼうな癖に気配りができて何気に優しい」

「うんうん」

「あああ！キリト！クライン！同意してんじやねえ！」

「ツンデレ情報その2。おまえのためじやねえって言って力を貸してくれる」

「アルト君ってそう言うところあるよね」

「分かります。私の時もそうでした」

「アスナ！シリカ！頼むから否定してくれ！」

「ツンデレ情報その3ー」

「もうやめろアルゴ！いくらでもスイーツ奢ってやるから！」

「ニヤハハハ！時に情報は力より強いんだゾ、アル坊」

アルトとアスナ 呼び名

「鬼嫁、創業主婦、抜刀妻、バーサークヒーラーにアスガンナーぬああ！」

「何か言ったかな？アルト君？」

「アスナ？ 顔は笑ってるのに目が怖いぞ？」

「はは！ キリト君、私はいつも通り笑ってるよ？」

「……………笑いながらフラツシング・ペネトレイターとか笑えねえ」

「アルト君、ちよつとつとお話しがあるから外に逝こうか？」

「ニューアンスが違う!?!」

アルトとシリカ アイドル

「無理ですよ〜！」

「諦めんなシリカ！ もつとあざとく、そして媚を売れ！ S A O プレイヤー達の心の癒しとなる、その時まで俺がマネージングしてやる！」

「なんでそこまで熱血なんですかあ！」

「さあレッスン再開だ！」

「助けてキリトさん！」

数日後……………

「シリカ？ どうして前線に？」

「皆のアイドル、シリカたんが応援に来ましたよ〜！」

「シ、シリカ……たん？」

「さあ！モンスターなんてやっつけてシリカたんを一杯いっつぱい愛でてください！」

「いぞシリカ！それでこそ俺が見込んだ原石だ！」

「アルトオオオ！」

「ぬぼあああ！」

短編集その2

邪魔者

「ねえ？アルト。私たち組んでから半年も経つけど、お互いのこと余り知らないわよね？」

「んだよシノン。知るも知らねえもネットゲのアバターだろ？なら上辺だけの付き合いでいいんだよ」

「この鈍感は……！」

「ほら、お互いのことをよく知ってれば、連携も今以上に上手くなるかもしれないでしょ」

「取って付けたような理由だな」

「うっ……！」

「で、でもー」

「こんなところにいました！さあ！早くなじってくださいー！」

「うるせえ！DMが！」

「もつとです!!ああ！逃げないでくださいー！」

銃士Xから逃げるために遠ざかっていく背中を止めることができなかった。

邪魔者 その2

「親睦を深めるべきだと思ふのよ」

「またその話か」

そんなに嫌そうにしなくてもいいじゃない。

「人には踏み込んでいい領域とそうじゃねえ部分があんだ。あまり強要するもんじゃねえよ」

「相棒のことを知りたいと思ふのは、そんなに悪いことかしら？」

「……………」

あと一押し。

「それに、その腰にぶら下げてる物を買うのに協力したのは誰だったかしら？」

「……………何が知ってえんだ？」

「そうね……………まずはひやあ!!」

何がどうなったかと言うと突然抱き寄せられ、岩影に連れ込まれた。

嫌じゃないけど。こ、こういうのはもっと親しくなつてからー

「切り替えろ。敵だ」

……ああもう！

やるせない思いを八つ当たり気味に相手にぶつけた。

影

「アルトは友達いるの？」

「開口一番、失礼なこと言うのな」

正直に言えば、居たとしても片手で足りそうだし。

「……キリトにアスナとユイ、リズ、シリカ、エギル、クライン、リーファ……あとはアルゴか」

9人で止まったんだけど……え？本当に少ない？

「んだよその目は。重要なのは数じゃなくて繋がり**の強さ**だろうが」

「それはまあ、そうだけど……」

5人も女性の名前があった。誰かと恋仲だったり……。

「いや、アルゴの奴はなにかと甘味をたかるし、弱味を掴んで揺すってくるし、友人って言えんのか？」

言わないと思う。

「ロリの癖に年上振るし、色仕掛けなんざ10年早えつっの」

……ふーん。

「おい、聞いておいて不機嫌になるんじゃないねえつつの」

「別に」

親しそうな異性がいたからって不機嫌になんてなるわけないじゃない。

「女心と秋の空ってか？」

「つてことがあつたんだが理由分かるか？」

「……それはアル坊が悪いナ。女の子の前で他の女の子の名前をだすものじゃないヨ」

んだよそれ。

「デザート追加デ」

「おい待てコラ。20k分²も食^万っておいてまだ食うか」

「女の子はみんな、甘味は別腹なんだヨ」

限度があんだろうが！

逃亡

「いやああああ!!!」

「口閉じてろシノン！舌あ噛むぞ！」

《ヘカート》を手に入れ、ダンジョンからの脱出をアルトに任せた私がバカだった。

《グロック18C》以外の装備をストレージに仕舞った私を背負い、ダンジョン内を爆走するという暴挙に出た。

背負われた時ドキリとした私を殴りたい。

「ちよつと！変なトコ触らないでよ！」

「そんな余裕なんざねえよ！落ちたくねえならしつかり掴まってる！」

モンスターを避けない時には壁を走り、拳げ句の果てには天井も使って走って逃げ
る。

下手なジェットコースターよりも命の危険を感じる。

「いやああああ！死ぬ！死んじやう!!」

「うるせえ！耳元で騒ぐな！」

いやああああ!!!

言葉の刃

「ーっということがあったんだよ！兄ちゃんらしいよね！」

「ユーちゃんのブラコン振りには流石のオネーサンも脱帽だよ」

ALLOにダイブして冒険をするわけでもなく、変態が購入したログハウスでなぜか私、ユウキ、アルゴによる3人だけの女子会を開くことになった。

離れた椅子には変態とアルト、クラインにエギルさんが楽しそうに談笑してる。

「ユウキはアルトのこと好きなの？」

「おーシノのん、随分踏み込んだ質問だな」

「ボクもだけど姉ちゃんもそうだよ。結婚もしたいな！親戚なら結婚できるからね！」

「ブーーーー！」

「汚ねえ!!」

アルトが飲んでいたコーヒーを変態に吹き出してたけど、こっちはそれどころじゃない。この子は何て言った？

「ユウキ！何言ってるやがる！」

「クライン！エギル！アルトを取り押さえるぞ！」

「おうよー！」

「離せテメエら！ユウキを止めねえと俺が死ぬ！」

後ろが騒がしいけど気にする余裕はない。

「た、確かに親戚なら4親等から6親等になるから、日本の法律上は問題ないけど……」

アルゴさん口調が素に戻ってる。

「おい！アルトのHPが減ってるぞ！」

「なんでだ!?!」

「でもねユウキ？近い血縁同士の結婚は世間の目が厳しいわよ？」

「愛さえあれば問題ないよね！」

「……アル坊がここまで誑たらしだったとハ……ツンデレロリコンの称号を贈ろう」

「アルトのHPがゼロになった！」

「戻って来い！アルト！」

温泉回

アルゴの情報で五十五層の火山地帯を抜けた先に温泉があるかもしれないという情報に、女性陣の意味不明な行動力が発揮され俺、キリト、アスナ、リズ、シリカの五人で火山地帯を抜けることになった。

「あつち〜」

「ほら男共！シャキツとするー！」

リズの奴、本当アグレッシブっつーか。

「あとどれぐらい掛かるんですか？」

「え、と。アルゴさんの情報だとこの洞窟を抜ければすぐらしいけど……」

ズンズン進んでいく女性陣を尻目に俺たち男二人組のテンションは駄々下がりがだった。

「なあキリトよお」

「言わんで良い」

「ここで俺たちだけ引き返そうと言いたかったが、そのあとが怖い。」

出てくるモンスターは女性陣が蹴散らし、男組はただ後ろを着いていくだけのなんと

も言えない行軍の果てにようやく洞窟を抜け外に出れば、硫黄の匂いと湯気が立ち昇っていた。

数メートル先には男女に分かれた脱衣場が見える。

明らかにプレイヤーが来ることを予想して作られたもんだな。

「「温泉だ〜!!」」

「「ハア……」」

テンションが天元突破した女性陣を見送り、キリトと顔を見合わせ同時にため息をついた。

「あゝ〜」

「たまにはこういう息抜きもいいもんだな」

来るまでは不満タラタラだったが、いざ入ってみればこう言うのも悪くないと思える。

「ひつろ〜い!」

「ちよつとリズさん!ちゃんと体を洗ってから入ってください!」

「絶景ね。来てよかった〜」

女性陣の姦しい声が聞こえる。

「キリトたちも入ってる〜?」

「ちよっ! リズさん!」

うるせえな。風呂ぐらい黙って入れ。

「なあアルト。杓が置いてあるけど、あれなんだ?」

「飲泉って奴だな。温泉に入るだけじゃなくて飲んで体内に取り込むことで効能の効果を高めるらしい。本当に高くなるのかどうかは分からねえがな」

「へえ。RPGで温泉って言えばHPの回復の定番だから、SAOでもそうなのか?」

「さあな。ここに来るまでは女性陣がハッスルしてたし、効果を確かめれるとしたら女性陣だろ。」

杓で岩の窪みに溜まったお湯を掬い口に含む。

「いい景色だな。オイラも情報提供して良かったヨ」

「ブーーーー!」

「汚ねえ!!!」

口に入れたお湯を全部キリトに吹き掛けちまったが、それどころじゃねえ!

アルゴ!?! 嫌な予感しかしねえ!

い、いや! あいつも情報屋としての矜持があるはずだ!

「情報を確かめてくれたお礼として、なにか一つ何でも聞いてくれてもいいヨ。例えば、アル坊の恥ずかしい話しとカ。キー坊のでもいいヨ」

アアアルゴオオオ!

あのヤロウ!人がそつち女湯に入れねえことをいいことに!

「それじゃキリトさんの話がいいです」

「私も私も〜!」

「キリトくんのをお願いしようかな?」

助かったんだろうが納得いかねえ……!」

「アル坊は不人気だナ。キー坊のついでにアル坊も話そうカ」

「キリト!風呂桶持ってこい!ありったけだ!」

「あいさ!」

「死に晒せアルゴオ!」

柵の向こうにいるであろうアルゴに向け、キリトが調達した風呂桶をSTR型のパワー全開で投擲する。

「はう!痛いですよ!アルトさん!」

「恨むならアルゴを恨め!」

「痛ッ!何すんのよ!この脳筋!」

「黙れ！脳金があー！」

「ニヤハハハ！」

「……不毛だ」

女湯からの反撃でキリトが早々に脱落。湯船に浮いてるがそれは無視。疲れをとる場所ので何で疲れなきやならねえんだ。

「あつちからの攻撃が大人しくなつたわね」

「さすがにやり過ぎかな？」

「キリトさんとアルトさん、大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だ。二人とも暇潰しのように戦ってるからナ」

好き勝手言つてんじゃねえよ。

「それで？アルゴはアルトみたいなのがタイプなの？」

「ニヤ!?そ、そんなわけないだ口！な、なんで私があんなデリカシーゼロ男のこと！」

「あはは！しゃべり方が素に戻ってるよ〜？これは凶星かな〜？」

「〜ツ！リーちゃんなんて嫌いダ！」

「怒らないでください、アルゴさん。リズさんも！誰を好きになるかは人それぞれなんですから！」

「シリカちゃんフォローになってないよ」

女子つてホント恋ばなが好きだよな。

「なあキリト。お前、今日来た3人の中で誰が一番好みだ？」

バシャバシャと音を立て柵の前で止まった。

ふーん、そこまで気になるか。当の本人は気絶したままだけどな。

「出歯亀は感心しねえぞ。ちなみにキリトはお前たちの攻撃で気絶してる」

「「アルト（くん／さん）のバカあ!!」」

聞こえねえな。

「いや／＼さつぱりした／＼」

「本当ですな。もう一度来たいです」

「その時はまたみんなで来よう？」

「なあ俺、途中からの記憶がないんだけど」

「知らねえな。てか、温泉で汗流したのにまた洞窟通るんじゃ、また汗かくんじゃね？」

「それは野暮ってヤツだヨ、アル坊」

バレンタイン アルゴ編

バレンタイン

それはリア充と非リア充との格差。

何気なしに下駄箱や机の中を確認、若しくは興味のない振りをして期待する男子生徒諸君。

本命、義理。

その他にも贈る側と受けとる側との関係で名前を変える。異性、同性の区別なくお世話になった人間に贈られる物らしいのだが……。

「うおおおん！」

結局なにが言いたいのかというところ、男泣きするクライ独リ身ンには関係のない話、ということである。

「どうしたんだあれ？」

「今日はアレだろ？バレンタイン」

「ああ〜」

SAOに閉じ込められ2回目のバレンタイン。

1 回目の頃は、まだプレイヤー全員がその余裕がなかったこともあり、なし崩し的に男同士で泣きながらチョコを渡し合うという世にも珍しい現場に居合わせてしまった。

「キリトは獲得数ゼロの心配はねえな。行く先々で現地妻作ってるみてえだし」

「圏外出やがれこの野郎！」

喧嘩なら言い値で買うぜ？ 勿論、拳で払うけどな。

「そう言えば、前は何かイベントあったっけ？」

「知らねえな。アルゴにも聴いてー止めとく。それをネタにからかわれそうだ」

主に、チョコ欲しいの力？ とか言ってくる筈だ。

ほぼ間違いない。

「アルトはそう言うのに興味ないのか？」

「何がだよ」

「チョコに決まってるんだろオ！」

「ツ!!」

クライイン！ 急に絡んでくるんじやねえ！

「……興味ねえよ」

「嘘だ！ ぜってえ嘘だ！」

「クソうぜえ……」

「バレンタイン。それは女の子から男へと贈られる甘酸っぱくもほろ苦いー」
「で？今日はどうする？」

「この様子じゃ攻略組もマトモに機能しないし、階層攻略は後日になるな」

長々バレンタインやらチョコやらを力説するクラインを無視。今日の予定を組もうとも思ったが、攻略組が動かねえんじや情報の流れも止まっちゃうし、ボス部屋を見つけても意味ねえよなあ。

「で？」

「んだよ」

「本当に興味ないのか？」

「ねえよ。そもそも甘いのは嫌いだ」

「無視すんなあ！」

うるせえしティーブル叩くんじやねえ。

「ヨ！暇力？」

「キリトくんはアルトくん、それにクラインさんも」

「あんたら、本当にいつも一緒にいるわね」

「3人とも本当に仲が良いんですね」

「よう。4人勢揃いでクラインの心を折りに来たのか？折れかかってるヤツを折り来る

なんてよっぽど暇なんだな」

「あんた本当に口悪いわね。折角作ってきたチョコあげないわよ?」

脅しのつもりかっつての。

「いらねえよ。甘いのは嫌いなんだ」

「おめえ、そこは嘘でも受け取っておくべきだろ……」

信じられないもんを見る目は止める。

「嫌いなモンを嫌いっつて何が悪い? テメエに嘘吐くぐれえならハッキリ言っただ方がマシだつての。そもそもバレンタインに託^{かこ}つけて好意を示す? バツカじゃねえの?」

「……そっか……そうだよナ……」

「あ?」

アルゴがなんかを呟いたかと思えば、背を向け走り去ってしまった。どうしたんだアイツ。

「おめえ、流石にあれはねえよ」

「サイテー」

「あんまりですよ。アルゴさんが可哀想です」

可哀想って……ああそう言うことかよ。

「お前らは勝手にやっつてろ。アルゴ探してくる」

「アルトくん？ちゃんと誠心誠意、頭を下げてね」

「……ああ。分かってる」

俺は自分の考えを言っただけ。

だがいつの時代でも、男は女に弱いものなのだ。

「アルトのぼか」

主街区を見下ろせる時計塔の上でブラブラと足を揺らしながら、
デリカシーの欠片もない馬鹿トに対して悪態を吐いていた。

アルトが甘い物が嫌いだと言うのは初めて知った。でも、だからと言ってあんな物言いはないと思う。

『バレンタインに託つけて好意を示す？バツカじゃねえの？』

……駄目だ。目の前が滲んできた。

アルトの物言いも尤もかもしれないけど、女の子にとっては記念日というのは特別なものなのだ。

どのくらい経っただろう？もうすぐ日没。

あくあ、無駄になっちゃったな……。

この日だけの女性プレイヤー限定クエスト。

戦闘には向かないステ振りの私だけど、アーちゃん達に協力してもらい、手に入った《チョコの原料》をアーちゃんに手解きを受けながらーと言つても食材に調理器具を翳すだけだけどー初めて異性に作つた物。

というか、何であそこで逃げちやつたかな私。あれじゃアルトに好意を持つてるって白状してるも当然なのに。

今日は顔を見せられないな。

……明日からはいつものーいや、【鼠】のアルゴを演じられるかも不安だ。

「……やつと見つけたぞ」

「!!……アルト……」

「手間掛けさせんな……って俺が言えた義理じゃねえな」

隣座んぞ、と断りを入れながら私と同じように腰掛けて時計台の外に足を投げた。

「何しに来たのさ」

「用もねえのに来ちや悪いのかよ」

そう言いながらも、何か言い淀んでいるように頭を掻いている。

「その……悪かったな」

「何に對しての謝罪なのか分からない」

「……」

「……」

「こういうことに関して上手く言えるか分からねえけどよ。お前の想いを踏みにじるような事を言つて悪かった」

「……」

「許してくれとは言わねえ。ただこの謝罪だけは受け取つてもらえると助かる」

「……逆」

「は？」

「この鈍感は……」。

「今日は逆。これをアルトが受け取るの」

「データ上の物だけど、込められた想いは本物。」

「ハッピーバレンタイン、アルト」

「……おう」

「無理して食べなくていいよ。甘いのは嫌いなんでしょ？」

「受け取つて貰えただけで十分。なのに——」

「包装紙を丁寧に剥がし、6粒入ったチョコの1つを躊躇いなく口に放り込んだ。」

「……次」

「え？」

「次作る予定があんなら、ビターで頼む。アレなら食えるからよ」

それつきり何も言わず、渡したチョコを黙々と口に運ぶアルト。

ホント、ツンデレで面倒臭いなあ。

「……了解ダ、アル坊。【鼠】印のチョコはオイラからじゃないと食べられないからナ？」

a pure heart

バレンタイン

それはリア充と非リア充との格差。

何気なしに下駄箱や机の中を確認、若しくは興味のない振りをして期待する男子生徒諸君。

本命、義理。

その他にも贈る側と受けとる側との関係で名前を変える。異性、同性の区別なくお世話になった人間に贈られる物らしいのだが……つてこの前にもやった気がするな。

ようやく自由となった左腕を鍛え直しながら、何気なしにカレンダーの日付を目で追う。

クラインは今ごろ男泣きしているかもな。

貰える貰えないは別にして。

バレンタインの由来である一説には、3世紀ごろローマ帝国の皇帝クラウディウス2世は、兵士達の士気が下がる事を防ぐため婚姻を禁止。これを憂いたキリスト教司祭のウアレんティヌスは秘密で結婚させが皇帝がこれを知り、ウアレんティヌスを投獄し処

刑した。その処刑された日が2月14日である。

まあもつとも、この説は異教を排除する目的で作られた創作であるとも言われてるし、売上げ狙いの製菓企業の策略とも言える。

「兄ちゃん！ハッピーバレンタイン！」

「……せめて呼び鈴ぐらい鳴らせ木綿季」

人ん家に殴り込んで来んな。

「はいチヨコ！」

「人の話聞いちゃいねえな」

紫色の包装紙を手渡し、ニコニコと笑みを絶やさない。

木綿季は俺が甘いものは苦手なのは知ってるはずだし、手作りにしても考えてるだろう……多分。

「てかお前1人か？藍子と一緒に来るもんだと思ってたんだが……」

「んー？なんかねー自分をラッピングし始めたから置いてきた」

「なんつー酷い妹だ。まあその判断は正しいけどな」

自分をラッピングしてどうするつもりだ。

……いや、知りたくないし分かりたくもない。

包装紙に包まれたまま冷蔵庫に突っ込み、いつの間にか増えてた木綿季用のマグカッ

プにミルク多め砂糖多めのコーヒーを淹れる。

「今日の予定は？」

「特にはねえな。せつかくの休みだし、本でも読んで潰すつもりだ」

「ええくもつたいない」

「ブーブー言うな」

「ぶーぶー」

「お邪魔するわよ」

「お前もお前でナチュラルに入ってくるのな」

本日二人目の招かざる客は朝田。

こいつもこいつで、普通に家に入ってくるようになったよな。

「はいバレンタイン」

「恥ずかしがる素振りもねえのな」

「別に恥ずかしがるようなことでもないでしょ」

「イジリ甲斐のねえの」

「うるさい」

これもまた、いつの間にか増えてた朝田のマグカップにミルク少なめ砂糖少なめのコーヒーを淹れる。

こいつらが家に来るようになってから、コーヒーマシンの稼働率がかなり増えた。比例して砂糖さらミルクやらを買う頻度も増える。

こつちが出迎える側である以上、飲み物を出すのは当たり前だが俺が使わない物を買って揃えるというのは何か釈然としない。

「ーでね？ 兄ちゃんが『見返りを求める努力こそ報われねえもんだ。報われてえなら、周りなんざ気にすんな』って」

「突き放してるようにアドバイスしてるんだからツンデレよね」

「ツンデレ言うな」

高校の時の話だな。ほとんど覚えてねえけど。

「なんだかんだ言って面倒見はいいから、高校生時代は随分モテたんでしょうね」

「な訳あるか。男子校だつーの」

「あれ？ でも兄ちゃん、チョコ貰ってたよね？」

「やめろ思い出させるな」

お前、どこからそんな情報仕入れた。

「え？ それってつまりー」

「頼むから思い出させないでくれ」

「確か机の中にー」

「木綿季―？」

「びいー！」

「……ああ、そういうこと」

ニヤニヤすんな！生暖かい目で見ろな！

日も暮れ始め、颯真に木綿季を駅へ送ってくると彼の部屋をあとにし、その道すがら前から疑問に思っていたことを口にした。

「木綿季は颯真のこと、どう思ってるの？」

「好きだよ」

「即答なのね」

「小さい頃からずっと一緒だったし、自分に用事があつてもボクたちに時間を使ってくれたり、ね。姉ちゃんもボクも兄ちゃんが大好きなんだ」

家族としてだけじゃない。異性としても颯真に惹かれている。

「素直じゃないから誤解されやすいし、誰にも理解されようとしなから敵を作りやすいんだけどね」

……うん。その背中を見てきたからよく分かる。

彼の外面だけで判断しようとするれば、口が悪くて孤高を気取っているように見えるかもしれない。

でも内面を知ってみれば、言葉を選ばないだけで他者を気に掛けることのできる少しく뮤니ケーション能力に難があるだけの男性なんだ。

「だから兄ちゃんに守られるだけじゃない、兄ちゃんを守れるようになりたいんだ」

木綿季だけじゃなく木綿季のお姉さんも同じ気持ちなんだろう。

「SAO事件に兄ちゃんが巻き込まれたとき、兄ちゃんが誰かに殺されちゃうんじゃないかって、ボクたちは兄ちゃんに守られたときから何も変わってないんじゃないかって本当に不安だったんだ」

明日奈から聞いたことがある。

他のSAOプレイヤーに襲われたことがあるって。

原因は颯真の歯に衣着せぬ物言い。

自らの命を人質に颯真を襲った。

『殺さないし殺せない』

その考えが彼もしくは彼らを駆り立てた。

「SAOから帰ってきて兄ちゃん仲間だつてキリトたちを紹介してくれたときは本当に嬉しかった。『ボクたちだけじゃない。兄ちゃんを理解してくれる人はちゃんといなんだ』つて。だから詩乃さんもありがとう。兄ちゃんを好きになつてくれて」

「えっ……いや、私は……」

「ふふくん。隠し事はダメだよ？ボクの観察眼は兄ちゃん譲りだからね」

「……つたく。なかなか帰つてこねえと思つたら道端でなんつー話してんだよ」

なんか重要そうな話をしてるみてえだったから、咄嗟に隠れちまったが話題はどうやら俺のことらしい。

素直じゃないとか理解されようとしなないとか。

前者はともかく後者は受けとる側次第であつて、その判断を相手に委ねてるだけだ。

結果として俺と距離を取るようになるとしても、それは相手の判断なのだから変に口出しすることじゃないというだけだ。

上辺だけの付き合いも打算ありきの仲間意識も必要ない。俺には俺の相手には相手の考えがあるってだけだからな。

「邪魔者は退散するとしますかね」

いつまでもこうしてても仕方ない。

「子供は子供らしく遊んでればいいんだ。大人ぶって難しいことなんざ考えなくていいんだよ」

俺はいつだってお前らの味方なんだしな。

でももし、その時が来たなら頼らせてもらおうさ。

藍色の包装紙から取り出した小分けにされたプレートを口に運ぶ。カカオマスの苦味と酸味を楽しみながら帰路に着いた。

遊園地 木綿季&藍子編

「兄ちゃん!」

「……」

「兄ちゃんつてば!」

「……………」

「駄目よ木綿季。兄さんは今読書中。集中すると周りのことが見えないこと、木綿季も知ってるでしょ?」

「そうだけどさ〜」

兄ちゃんは来年に全寮制の高校に上がる。それに僕たちも引越すことになって、今までみたいに会えなくなると思ってた遊びに来たはいいけどずっと本を読んだまま。少しは構ってくれてもいいと思うのに、たまにノートに書き写すぐらいで動きがない。

親戚で家も近所だったから顔を会わせる機会も多かったし、共働きで家を空けがちだった両親の代わりにボクと姉ちゃんの面倒をみてくれて、文句を言いながらあれこれ世話を焼いてくれた。

姉ちゃんの話だと……つんでれ?とか言うらしいけど。

「……………ん？もう昼前か」

「もー！兄ちゃんつてば！」

「おお……もしかしてずっといたのか？」

「そうだよ！……少しは構ってくれてもいいと思うんだけどなあ」

「……………悪かった。どっか行くか？」

「兄さんが行きたいところならどこへでも」

「ボクもー！」

「お前らなあ……………」

「遊園地つてデートのてっばん？だよね！」

「デートとか言うな。社会的に死ぬ」

「夜は兄さんとホテルでー」

「おい待て小学生」

「来年で中学生です」

「それでもアウトだ。社会的に殺す気か」

兄ちゃんに連れて行つてもらつたのは、行きたいなあつて思つてたネズミのマスコツトキヤラクターで有名な遊園地。

でもなんでここなんだろう？

「兄さんは木綿季が行きたそうにしてたのを知つてたのよ」

「藍子もだろうが。それよりもフリーパスも買つといた。今日一日遊べるぞ」

ホントは連休の時に連れて来たかつたんだけどなあ、つてぼやいてるけど今日だけでも本当に嬉しい！

「兄ちゃん！早く行こー！」

「兄さん？」

「走るなアホ」

そう言いながら手を繋いでくれる。

つんでれ？だよね。

「兄ちゃん！次あれ乗りたい！」

「兄さん次はあっち」

「待て腕がもげる」

「兄ちゃん次！」

「次はあれに」

「やめろ体が裂ける」

「むむむむ」

「……………」

「睨み合うな。喧嘩すんなら帰るぞ」

「あく楽しかった〜！」

「ええ。もう思い残すことは何もない」

「勝手に死ぬな馬鹿野郎」

「でも楽しかったのは本当だよ？」

空も赤を過ぎて暗くなり始めてる。

楽しかったな。

「兄ちゃん」

「ん？」

「大好きですよ」

「……ふん。10年経ってから出直せ」

うん。そうする！待っててよ？兄ちゃん！

そーどあーと・おふらいん その1

そーどあーと・おふらいん 出張版

「と言うわけで司会のアスナです」

「解説のキリトです」

「今回はロスリック編前までの軌跡を振り返ってみたいと思います」

「本当に色々ありましたね。……主にあいつ絡みで」

「ゲストとしてキリトくんのライバルであり親友でもあるアルトさんをお呼びしました」

「……………」

「どうしたの？不機嫌そうだけど……」

「不機嫌にもなるだろ。訳も分からねえまま連れて来られて、変な番組に出ろだなんて詐欺もいいところだ。大体なあー」

~~~~~しばらくお待ちください~~~~~

「……までオールカットで」

「おい待てキリト」

「あははは……それではそーどあーと・おふらいん出張版スタートです」

「おいアスナ、俺はまだー」

「皆さん、解説のユイです。アルトさんが好んで使う大剣ですが本編にもあつた通り、一撃の威力に優れる反面、非常に重く取り回しに難がある設定になっています。それを片手で振り回すだけじゃなく、鉤状の刀身を持つ短剣を用いることで鉄壁と言えるほどの防御力を兼ね備えています。アルトさんはすごい力持ちですね。以上、トリビア出張版でした」

### プレイバックコーナー

「これまでの軌跡を振り返りつつ、本編で語られなかった裏側も紹介するコーナーです。

アルトくんは気に入ってるシーンはある？」

「気に入ってる、ねえ。まずはあれだなS A O最後のキリトとヒースクリフとの一騎討ちを賭けた闘い。俺自身、思いの丈もぶちまけたし、それなりに気に入ってる」

「こっちは生きた心地しなかったけどな。と言うか、一騎討ちする必要が本当にあったのか？」

「あるに決まってるんだろ。台詞でも言ってたしな」

『人間、どこまで文明を発達させようが所詮はエテ公。誰が一番上か証明しないとままならない。つまり、俺とお前。どっちが上かはつきりさせようってこった。わかったか？』

『分かるわけないだろ!?!』

『分からない？違うな、分かるうとしてねえだけだ。構えろキリト。今の俺はお前の……敵だ』

「見返えすと、ちと恥ずいな」

「敵意むき出しで、主人公とは思えない顔になってるしな」

「茶化すんじゃないねえ」

「お互いがライバルだから負けたくない。そう言うことなのかな？」

「そう訳じゃねえよ。ただ単にどっちが上が決めたかった。それだけだ」

「ライバルつてのを認めたくないんだろ？」

「……………（イラッ）」

「ぎゃああああ!!」

「次は頭イツとくか？」

「そ、それでは次のシーンです」

『『俺たちでテメエお前を打ち負かす!!』』

「これって…………」

「あのホスト崩れの時か？」

「息びつたりで本当に仲が良いよね」

「仲良くないねえ!」

「はいはい。素直になりなよ二人とも」

「仲良く?あり得ないね。こんなバーサーカーで口が悪くて、ぶっきらぼうなツンデレな奴なんか」

「こつちこそ願ひ下げだ。アスナのことになりや頭に血い昇る根暗の真つ黒黒すけなん  
ざい」

「やるか？」

「上等だ」

~~~~~しばらくお待ちください~~~~~

「二人ともなにか言い訳はあるかな？」

「イエエ、ナニモアリマセン」

「それでは次はこのシーンです」

『キリトを殺していいのは俺だけだ！』

「ちよつと待て！何で残ってんだ！」

「アスナ、このシーンって……」

「クラデイルの両足を斬り飛ばした時の台詞だね。アルトくんにとってキリトくんが
どれだけ大事か分かるシーンだと思うよ？」

それは決まった動きを始点から終点まで行うもんだ。どんな体勢からでも決まった構えをすりや一応は発動できる。例えば弾かれた盾を引き戻し己を眼前に掲げる、とかな』
『……………』

『そしてアンタを茅場だと言い切る根拠はもう一つ。せつかく自分で造り上げた世界だ。その中に入り、その世界で生きてみたいと思うのは当然だ。俺もそうだしな。そしてさつきも言った通り、攻略組をコントロールするなら実力とカリスマ、そして伝説が必要だ。どんな戦いでもイエローまで落ちることのない鉄壁の防御力。伝説としては十分だ』

『前提が一つでも狂えば崩れる危うい推理だが……君の推理通り私がこのゲームの創造主、茅場晶彦だ。君に一つ問いたい。リアルにもこのアインクラッドのような浮遊城があるとー』

『ある。所詮現実なんて目で見て脳が真実だと判断した情報群でしかねえ。それに』
『それに?』

『そつちの方がロマンもあるしな』

「ーーんで、ヒースクリフ……茅場と取引をした。決着を着けたい奴がいる。それが終

わるまではこのゲームを終わらせる気はねえってな」

「お前って頭が良いのか、脳筋なのか分からなくなるときがあるよな」

「言ってる」

「本編にもあつた通り95層までにキリトくんが団長の正体に気が付かなかつたら、その場でアルトくんと団長が戦つて、それまでに気が付いたならアルトくんとキリトくんが戦つて生き残つた方が団長と戦う。で間違つてないかな？」

「攻略組を茅場が思い描く通りに操作する、も付け加えてくれ」

「そんなことができるのか？」

「人の注意を向ければ簡単だ。マジックと同じでな」

「ユイです。アルトさんのパーティでの役割はタンクですが、盾は持ちません。これは視界を塞ぐ盾よりも小回りが利き、非常に軽い短剣の方が便利だからですね。これは大剣と短剣を組み合わせた攻勢防御がメインになるSAO時代にあつたユニークスキルの名残でもあります。相手の攻撃を短剣で弾き、大剣で薙ぎ払う。高火力かつ堅牢な防

御力にパパも何度も苦しめられているようです。以上ユイでした」

「さて、今回のそーどあーと・おふらいん出張版はここまでです。アルトくん、今回が初めてだったけどどうだった？」

「俺以外の回だったら来てやってもいい」

「また呼んで欲しいってことだろ？」

「……もっぺん、イツとくか？」

「勘弁してくれ！」

「では、またお会いしましょう」

そーどあーと・おふらいん その2

「……………あ？もう始まつてんのか？……………そうか」

そーどあーと・おふらいん 出張版

「……………と言うわけで司会のアルトだ。今回あの二人は出てこねえ。落胆しろ。……………あ？

……………今日はゲストが来てる？自称愛の探求者クラインだ」

「変な別名をつけんよ！」

「うるせえよ。いきなり呼び出されて司会をやらせて言われたこっちの身にもなれ」

「の割りにはキツチリやつてるよな」

「始まつちまつたもんは仕方ねえからな。やるだけやってやるさ。放送事故は確實だろ

うけどな」

「駄目じゃねえか！」

トリビア出張版

「こっちも俺がやるのかよ。……まあいい。クライン率いる「風林火山」はS A Oでは新興ギルドながら攻略組の一端を担っていたのは、まあ周知の事実だと思う。

リアルでも顔馴染みで、息の合ったチームプレーは素直に称賛するところだ。タンクが二人、ダメージディーラーが三人のバランスの良いパーティ構成って言えるな。

本当ならもう一人居たらしいが、いないってことは……まあ言うことなんだろう。……トリビアでもなんでもないな」

悩み質問コーナー

「このコーナーは送られてきた質問や悩みに俺やクラインが答えるコーナーだ。確実に人選間違えてる気がしないでもないが、まず1枚目。『真っ直ぐな葉っぱ』からだ。変なペンネームだな」

「そう言うのは回りくどいぐらいが丁度良いんだって」

「そういうもんか？……『お兄ちゃんの悪戯癖を直したいです。どうしたらいいですか？』だってよ」

「年頃の女の子なら、そんな兄貴を持つと大変だな。ところで、その娘の歳とかー」

「『真つ直ぐな葉っぱ』にはスタンガンを着払いで送っとく。今度やられそうになつたら、出力MAXで殺つてやれ」

「テレビとして不適切な発言！しかも着払い!？」

「それじゃ2枚目だ」

「なんの解決もしてないよな!？」

「解決はするぞ？その兄が原因不明のショック死でー」

~~~~しばらくお待ちください~~~~

「確実にカットされるな」

「おめえつてやつぁ……」

「気を取り直して2枚目、『エリザベスのアナグラム』……これつてリズー」

「知り合いでも名前出したらアウトだからな!」

「わーつたよ。『好意を寄せてる男の子がいます。ですが、その男の子は朴念仁ほくねんじんで、どう思われてるか分かりません。どうしたらいいですか』。恋愛相談か」

「青春だなあ」

「年寄り臭いぞクライン。そいつは朴念仁でどう思われてるか分からない、か。中々難

しい質問だな」

「お？アルの字でもそう言うこと言うんだな」

「当たり前だろ。その前に朴念仁つてのは本来、頑固で物分かりの悪い人間のことを言うからな？それが転じて、好意に鈍い人間を意味するようになった訳だ」

「いきなりなんの話してんだ？」

「気にすんな。それでええと……どう思われてるか、だったな。こういうのはストレートに聞くのが一番だがー」

「朴念仁つて言われるぐれえだからなあ。そいつから見れば仲の良い女友達ぐれえだろうな。あー！羨ましいい！」

「黙れクライン。『エリザベスのアナグラム』には遊園地のペアチケットを着払いで送つから、倍の料金を俺に払え」

「デートさせて二人の距離を縮めようつてことか？アルの字も気が利くなあも思ったけど、最後の言葉で台無しだ。しかもまた着払い」

「それじゃ最後はー」

「最後は俺様の悩みを聞いてくれよ！俺あよ？念願だった異性のメルアドをゲットしたんだけどよ？メールはくれるし、労ってくれるし俺なんかには勿体無いほどのー」



## トリビア出張版

「さつきもやったよな？……まあいい。今回はクライインにメルアドを教えたスクルドについてだ。

『ノルン』もしくは『ノルニル』とも呼ばれる過去・現在・未来を司る三人の女神。それぞれがウルズ、スクルド、ヴェルダンデイだ。一度は聞いたことはあるかと思う。

因みにノルンは単数形だから、三人まとめて呼ぶ場合はノルニルになる。運命の三女神もしくは三姉妹とも言われることもあるが、血の繋がりはねえし最初から運命を司っていた訳じゃない。

それにスクルドだけが主神オーデインの尖兵せんべいとして戦乙女ヴァルキリーの一面もあるつてもの特徴だな。名前のは責務や義務って意味を持つが、現在を司つてることから『これから成すべき義務』って意味合いもある。少しは為になったか？」

「ーそれでもよお？俺も男だ。おめえらみてえなハーレムにも興味があるんだよう」  
「もう土に還れよお前」

「どうしてキリの字やおめえばかりモテて、俺はモテねえんだあ！」

「そうやってがつついてるからだろ。黙ってれば良しとして、顔は……まあ好みが別れるかもしれないねえな。結局、お前は自分より他人を優先しすぎなんだよ。SAOのデスゲームが始まった直後もキリトに着いて行かねえで、仲間のところに向かったらしいじゃねえか」

「だってようSAOに誘ったのは俺だし、言い出しつぺの俺がアイツらを見捨てるんなら、漢クラインの名が泣くだろ！」

「ご立派ご立派。それが自分よりも他人を優先するってことだ。例えばクラインが惚れた女が自分の仲間に惚れてたらどうする？」

「そりや四の五の言わねえで身を引くぜ」

「それだよ。がつついてる癖に変なところで律儀なんだよ。男気は十分なんだ。お前から行くんじゃないくて、その男気で引っ張って行きや自然と集まってくるさ……多分な」

「おおうアルの字！心の友！」

「だあく！引っ付くな！」

くくしばらくお待ちくださいくく

「うんうん。アルトくんもちゃんと司会できるじゃない」

「アスナいたなら代われ、そして締めろ」

「はいはい。それじゃ今回のそのどあと・おふらいん出張版はここまでです。クライ  
ンさん、初めての出演でしたがどうでした？」

「中々面白かったぜ？全体的にあんま喋ってねえ気もするけどな」

「カメラの回ってねえとところで散々話してただろうが」

「ふふつ。それでは次回もあれば、またお会いしましょう」

## あり得たかもしれない世界線

俺がその少女と出会ったのは、第一層ボス攻略戦の時だった。

乱暴に結び上げた灰混じりの黒髪、周りを威圧するように上がった碧眼。周りは男性プレイヤーばかりだから、その小柄な体がよく目立つ。

物々しい鎧に身を包み、両手剣を片手に《センチネル》を相手取ってる。

闘い方は力任せでラフ。

正直に言えば無駄が多い。

なのに――

その無駄を含めて剣術なのだという印象がある。

「くたばりやがれ！」

剣で斬るだけじゃなく蹴りや体術も混ぜた闘い方は、剣士というより戦士に近いかもしれない。

「一気に畳み掛けんぞ！遅れんな！」

少女に負けじとパーティーを組んでるらしい男たちも果敢に攻めていく。

「凄いわね。彼女」

「ああ、戦い慣れてる印象がある。まさかー」

彼女もβテスター？

いや、攻略会議の時もそんな素振りもなかった。

「その程度でオレの前に立つんじゃねえ！」

「出てこいよ！βテスター共！」

《イルファンング・コボルト・ロード》を討伐後、キバオウの言葉から広がった疑心暗鬼の波。

「このままじゃー」

「アホくさ」

疑心の声の中でもよく通る少女の声。

ここにいるプレイヤーの視線が一人の少女へと向けられるが、意に介した様子もなく睨み返してる。

「誰がアホっちゅうねん!」

「テメエら全員だ。ここにいる全員が命懸けてんのに誰が悪い、誰のせいだとか無駄なことに無駄な努力して、それを見てアホ臭いって言ったんだよ。理解できたか? 奸物」

「か、奸物う? こ、の……女だからいうて調子に乗りくさー」

キバオウは最後まで言葉を続けることができなかった。

少女の持つ剣の切っ先が、その喉元へと向けられていたから。

「テメエ……オレを女って言ったな? 二度目はねえぞ。んで、お前」

お、俺!?

「お前もだ。二度とオレを女として見るんじゃねえ」

……女の子にしか見えません。

アスナと別れ二層へと続く門を潜ったところで、あの少女を見つけた。

「な、なあ」

「んだよ」

「キミはどうして、あくその……」

「チツ、言いたいことがあるならはつきり言えつての」

「女の子……いやいやいや！剣を向けなくてくれ！」

少女は渋々剣を引き肩に預ける。

「アルトだ。お前は？」

「キリト。それでキミはなんでボス攻略戦に？それも男より男らしく前にい！」

「男扱いするんじゃないやねえ！」

女の子扱いも駄目。かといって男扱いしても怒る。

面倒臭いな！この子！

その後、アルトと名乗った少女と肩を並べ、時には背中を預けて戦うことになるなんて、この時の俺には知るよしもなかった。

「首から下を埋めてやる！」

「やめてくれ!!」

いつの日かの出来事

「もう女の子がまたそんな格好して！」

「動きやすいから良いだろ！あとオレを女扱いー！」

「それ以前の問題なの！」

赤いジャケットに白いチューブトップ、そしてホットパンツというかなり露出度高めな格好にアスナのお人好しに火が点いた。

「ねえ！キリトくんからも何か言ってよ！」

「……正直、目のやり場に困ります」

「俺様は構わないけどな！目の保養になる！」

「……クロス」

クライイイイン!!

七十四層 《グリーン・アイズ》



「仕方ねえ！こんなところで使う気はねえんだが、こうなったら四の五の言ってる暇はねえか！」

その言葉と共に彼女の体を赤い稲妻が弾ける。

「そんなに長くは持たねえ！さっさと仕留めるぞ！」

降り下ろされた大剣を目にも止まらない速さで躲し、飛び上がって四連斬。

風ぎ払われた一撃を飛び退いて躲したところで、アスナもクライン率いる【風林火山】と入れ替わり《グリーム・アイズ》へと攻撃を加えていく。

「Take that you fired！」

両手で構えた剣へと赤雷が集まり、降り下ろしと共に光条となって放たれる。

ってビーム!?

咄嗟に横つ飛び。間一髪で巻き込まれずに済んだ。

「……ヤベツ、ガス欠。あと頼んだ」

「……ああ！任された！」

## あり得たかもしれない世界線 その2

「明日奈く着いたぞ〜」

「まったく、嫁の迎えなら自分で行けよな。」

「何をしたのやら知るよしもねえが、和人は明日奈の親御さんが苦手らしい。」

「ダイシーカフェに向かう道すがら、明日奈を拾って現地で落ち合うことになってる。」

「二度言うが嫁の迎えなら自分で行け。」

「颯真さん、わざわざありがとうございます」

「世間話は後だ。さっさと乗れ」

「どこに行くのかしら?」

「投げ渡したメットを被りサイドカーに明日奈が乗り込んだところで、家から出てきた女性の声が響く。」

「母さん……」

「あなた、私の言ったことが理解できてないのかしら? もう時間を無駄にしてる暇はないの。遊び歩く時間があるのなら1秒でも長く机に向かっている方が有益なの」

「ウザッ、典型的なスパルタ母ちゃんかよ。」

「三神さん……私、今の学校から転校することになったの」

「ああ、和人から聞いてる。今日だって和人の奴が迎えに来る予定だったんだろ？でもお前から別れを切り出したって言ってた」

SAOに囚われる前のエリートコースへ復帰させるために自由な時間を割りき、朝から晩まで勉強三昧。

和人に寂しい思いをさせるぐらいなら、踏ん切りをつけた方がいいと。

「……なあ」

「あなたは？」

「三神颯真。明日奈はアンタの人形か？」

「何が言いたいのかしら？」

「いい歳して人形遊びなんざ、恥ずかしくねえのか？」

ピシリ、と空気が凍った。

「人形遊び？」

「だってそうだろう？明日奈を自分の思い通りに着飾ろうとしてる。それを人形遊びと言わず何て言うんだ？」

「全ては明日奈のためよ。輝かしい未来が待っているの、私と一緒にそれ以上のキャリアを積んでもらい、将来立派な職に就いてもらわないと困るのよ。あなたにわかるかしら」

らっ？」

「それじゃアンタは明日奈の気持ちを考えたことがあんのか？立派な職に就いてもらわないと困る？笑わせんな。結局はテメエのためじゃねえか。強いられた未来になんの価値がある？テメエの利己のためにテメエの子供を巻き込んでんじゃねえよ」

「名誉毀損で訴えるわよ」

「好きにしろよ。そんなに大事な名誉なら後生大事に懐にでもしまつとけ。もつともこの程度で傷つく名誉なんざ、たかが知れてるけどな」

歯噛みする明日奈の母ちゃんを尻目にバイクを走らせる。

バイクを走らせ暫しダイシーカフェに到着。

「もう、口が悪すぎるよ三神さん……心臓に悪いよ」

「なにかを強いる、押し付ける奴は大嫌いだね。もつとも他所様の家庭事情に首は突っ込みたくねえが、和人が絡むんなら話は別だ」

「和人くんのこと大好きだもんね」

「誤解の招く言い方はやめろ」

お店のなかに入って見渡してみたけど、和人くんの姿はない。

「あ、やっと来た。颯真遅ーい！」

「うるせえぞ里香、店ん中で騒ぐんじやねえ」

「和人くんは？」

「明日奈にフラれたのが結構シヨックだったみたいよ。ALOに入ってきてても解散するまでずーつとボーつとしてるんだから」

「そう、なんだ……」

「けどま、どこかのツンデレプレイヤーに発破掛けられていつも通りに戻ったけどねー」

「奇特な奴も居たもんだ」

「明日奈さん、三神さんがなにか失礼なことをしませんでした？」

「人を問題児扱いしてんじやねえぞ珪子、俺だつてTPOぐらい弁えるっつーの」

「『いい歳して人形遊びなんざして恥ずかしくねえのか？』颯真さんの悪事は全部録音済みです」

「悪事言うなユイ」

わたしが、くよくよ迷っていたから……。

悔悟の念とともに強く唇を噛んだ。

最初からユウキの心情に従っていれば、と。

ごめん、と口にしようとした私の手にユウキが自らの手をそつと触れさせた。

「ごめんね、アスナ。ボクの短気にアスナも巻き込んだんじやって。でもボク、後悔はしてないよ。だってさっきのアスナ、出会ってから一番いい笑顔で笑ったもん！」

ユウキのその言葉に手を握り返して応じた。

「わたしこそ、役に立てなくてごめん。この層は無理かもしれないけど、次のボスは絶対みんな倒そう！」

私たちのやり取りは、「スリーピング・ナイツ」の全員にも伝わったようだった。全員がぐつと頷き、円陣を作って前後に備える。

後方から殺到してくるおよそ三十人のプレイヤーたちは、既にギルドメツセージか何かで状況を伝えられているらしく、全員が抜剣済みだ。

円陣を作った七人に対して、前後のプレイヤーたちが勝ちを確信した笑みを浮かべた……その直後。

わずか二十メートル先にまで迫っていた敵増援部隊の、更に後方から。回廊の緩く湾曲する壁面上を、何かが……誰かが横向きになつて疾駆してくる。あまりのスピード故に、人影は黒く霞んでいる。

人影は、超高速の壁走りで増援部隊をまるごと追い越すと、悠々と床に飛び降り、靴底のスパイクから盛大に火花を散らしながら制動。敵増援とアスナたちの中間地点で背中を見せて停止した。

その人影……否、黒衣の剣士は、右手を霞むほどの速度で閃ひらめかせ、背中黒革の鞘から薄青い刃の片手剣を引き抜くと盛大な音を立てて足元の石畳に突き立てた。

その気迫に吞まれたかのように、三十人のプレイヤーたちが立ち止まる。

「悪いな、ここは通行止めだ」

響くその声に、新参の三十人のみならず、私たちの後ろにいる二十人も、そしてスリーピング・ナイツの面々までもが絶句した。

その黒衣の剣士……キリトくんの肩の上では、ナビゲーション・ピクシーのユイが手を振っていた。

余りにも不遜なその振る舞いに、最初に反応したのは増援部隊の先頭に立つ瘦身のサ

ラマンダーだった。信じられないとばかりに大きく頭を振る。

「おいおい、ブラツキー黒ずくめ先生よ。いくらアンタでも、この人数をソロで食うのは無理じゃねえ？」

全身の黒色に由来するあだ名を持つ剣士は、好戦的に笑いながら答えた。

「いいや、アンタらを相手にするのはもう一人いるぞ？こつちは俺たちに任せてボス部屋に進め！」

その言葉を聞いても動けない。

もう一人味方が来ると言っではいるが、キリトくんがいたとしても、二人でこの数を相手にするのは――

「大丈夫だ！俺たちを信じてくれアスナー！」

その時、回転しながら落下してきた影が増援部隊の中央に落下。数人のプレイヤーを巻き込みポリゴンを散らすと同時にその手に握る大剣と短剣を周囲に一閃、辛うじて防御が間に合ったものの大きく体勢を崩された。

「楽しそうなことしてんな。俺も混ぜてくれよ」

右手に大剣、左手に短剣を握った異形の二刀流。

灰色の髪を揺らし、獰猛な笑みを溢すプレイヤーはこの広いALOでも一人しかない。



「バ、狂戦士<sup>バーサーカー</sup>?!!」

「よーし、お前は真つ先に殺す」

実力者の噂を聞いては飛び回り、その全てを打ち倒してきたアルトくんにつけられたあだ名。

敵に囲まれながらも悠々と歩きキリトくんと並び立つ。

「もう一度言う。ここから先は通行止めだ」

「死にたい奴から前に出な」

「多勢に無勢、しかも背水の陣ときた」

「逃げるなら今のうちだぜ？」

「ハッ！冗談！これだけ燃えるシチュエーションもそうそうねえだろ」

ホント、バーサーカー。

後方部隊から放たれる魔法を上位ソードスキルで相殺し、真つ正面から切り崩していく。

「キリトよーい！まだ生きてるかー！」

「遅えぞクライオン！全部喰っちゃまうぞ！」

「全滅させる必要はないんだけどな！」

話が変わるがSTRで反映されるのはなんだと思う？腕力、装備の最大重量、RPGならそうだと答えるだろう。

「どここのフルダイブ型VRなら？」

STRが上がれば物を持つ、剣を振るう、人を背負う、など筋力が必要とされる動作が可能になる。

力が入る動作にSTRが反映されると言えるわけだ。

「何が言いたいのかと言うとー」

「つっ掴ままああふふええふふええふふああ」

剣を咥えて受け止める、という荒業もやってのけるアホも居るといふわけだ。

物を噛む。つまり咬合力もSTRに依存する。それを発見したのはつい最近、ある馬鹿が偶然にもPVPで実行したのだ。今現在も実行してる馬鹿が。

首の力で咥えた剣をもぎ取ると反対側から迫っていた敵の胸目掛け放り、剣を奪われた相手の頭を下から短剣で突き上げるといふ目を覆いたくなるような惨状だ。

「化け物だ……」

そう言いたくなる気持ちはよく分かる。俺もそう言つてやりたい。

## 後日

結論から言ってしまうと増援部隊及び先見部隊合わせて総勢五十人の部隊は、たった三人のプレイヤーに壊滅させられることになった。

戦意を喪失して逃げていったやつらも居るが、キルされたプレイヤーの殆どは戦闘馬鹿がやった。闘うことでアイツに並ぶことのできる奴は人間を止めた部類の人間だろう。

闘うことを悪いとは言わないが、頼むから嬉々として剣を振り回さないでほしい。割りと切実に。

「んで？ 【絶剣】とやらとは本当に戦う気か？」

「ん？お前は戦わないのか？」

【絶剣】の噂を聞いた身としては真っ先にコイツが戦いたがると思ったんだけど……。

「まあ別に戦ってもいいんだが食指が動かねえ」

「??」

「なんつーか部類としては俺側なんだろうが、本気で命を懸けてるって言えばいいのか？ S A O時代の俺を見てるみてえでな」

なんとなく分かる気がする。

「つー訳でアッチから挑んで来ねえ限り俺は干渉しねえ。過去の自分を見せられてるよ  
うでなんかな」

「今もS A Oの時とあまり変わってないけどな」

「どういう意味だ？ 言いたいことがあるなら剣で語れ」

そういうところがだよ！ バーサーカーー！

「この音はなに？」

「音？」

母さんをALOにダイブして貰って説得する。

宮城のお爺ちゃんたちの家を思わせるあの風景を見て泣き崩れる母さんを支えたとき、明らかに異質な音を問われ視線を巡らせる。

火花を散らしながら二つの人影が雪の降る杉林のなかを疾走する。

片や二振りの剣、片や大剣と短剣。

剣が振るわれる度にその剣圧で降り積もった雪が巻き上げられ、巻き上げられた雪の壁を切り裂いて再び斬り結ぶ。

「どうしたよ！ フラれて傷心中か!? 剣先がブレてんぞー！」

「うるさい！ 俺はアスナを諦めない！ 絶対なんだ！」

「ハッ！ 事実フラれた奴がなに言ってるんだ！」

嵐とも言える剣戟がぶつかり合い、金属音が衝撃波のように響き渡る。

「あれはどうなってるの？」

素人目にはどうして勝負が成立しているのか理解できない。ただ闇雲に剣を振るっているように見えているかもしれないけど、事実はその逆で嵐のような剣戟全てが並の相手なら一瞬でなます切りに出来るような代物。

彼らの戦いを毎日のように見てきた私だから、彼らの動きを目で追える。

「二刀流の方がキリトくん、大剣の方がアルトくん。あの二人はいつも戦ってるんだよ。」

SAOの頃からずっと」

「キリト……桐ヶ谷くんね。アルト……」

「ここじやリアルはタブーなんだけどね。アルトくんは三神さん、三神颯真さんだよ」

「三神、颯真……」

「口は悪いんだけどね、本当は優しい人なんだよ。言葉の裏に隠した想いを汲み取らないといけないんだけどね」

アルトくんが人形遊びと口にしたのは、『親の考えを子供に押し付けるな』ということなんだと思う。

親の言葉通りに動く子供を人形に例えのかな？

「諦められるかあー！」

「今のお前に何ができんだ!？」

「俺の想いを全部ぶつける！大した学も将来性もない俺にできるのはそれだけだ！」

降り積る雪を融かしてしまいそうなほどの熱<sup>想</sup>を剣に乗せ、アルトくんへと斬り掛かる。

「凄いのね……彼」

「うん……」

「……明日奈、大学には必ず通いなさい。それが約束できるなら、卒業まで今の学校

に通うのを認めます。でも今まで以上に成績を上げること。これが条件」

「母さん……」

「それと彼……桐ヶ谷くんとの交際は黙認します。ただし、少しでも貴女に不利益になると判断した場合は——」

「ならないよ絶対」

「支える覚悟があるのね。なら今よりも強くないと駄目よ」

その言葉に視線を外へ戻せばアルトくんが目が合った。

キリトくんの思いを母さんに聞かせるためにわざとここで戦ってたんだ。

ありがとうアルトくん。でも、あとでお話しがあるから覚悟してね。

明日奈と和人が元鞘に納まった。

学校の方も今まで通りだそう。

あれこれと柄にもなくフォロウに回ったが結果が伴い良しとする。

そして、ふと思いつくのは新生アインクラッド二十七層フロアボスを突破したギルド  
〔スリーピング・ナイト〕<sup>眠れる騎士達</sup>。

噂では聞いたことがある程度だが、その実力は恐らくSAO攻略組と遜色ないほどのレベルだろう。それは「スリーピング・ナイト」単体で新生アインクラッドのフロアボスを突破した実績が物語ってる。

所属メンバーはその動き方からフルダイブ馴れし過ぎていると言ってもいいかもしれない。ハッキリ言ってしまうえば一般プレイヤーではなくSAOサバイバーに近い。

アバターの動かし方を頭と体の両方で理解する。

これは長い時間を掛けて培っていくもの。アミスファイア発売当初からの古参プレイヤーなら完璧といかないまでも思考と動作の誤差を限りなくゼロに近付けることは可



能だろう。どれだけリアルでの時間を惜しみ、フルダイブに注いだとしてもそこまでが限界だ。

なら彼らは？

その答えを知るのもう少しあとになる。

アスナが【絶剣】の口から語られた真実。

【スリーピング・ナイツ】に共通する秘密。

そしてその名に込められた想いを。

この時ほど運命というものを呪ったことはないだろう。

何かを残し、誰かの記憶の中で生き続けるために彼らは命を燃やしている。

誰かの記憶の中で生き続ける限りお前は死なない。

だから安心して眠れ、ユウキ。

## ピンクの悪魔

「今日はなんだかプレイヤーの数が少ない？」

フィールドに出て最初に感じた違和感。

グロツケンの方もざわついてたと言うか、いつもより落ち着きが無いように見えた。狩りに出てるプレイヤーも心なしか少ないし、モンスターを狩り終えてもずっと周りを警戒してた。

「なんだろう？」

いつもとは違う雰囲気（ピーちゃん）に《P90》を握る手に力が入る。

その時に岩影の向こう側から銃声と共に男性の声が上がった。

「ツ！出やがった！」「ミヌアーノ」だ!!

「弾幕張れ！近付けさせるな！」

「クソツ！よりによつてこんなときにも！」

え？ええええええ!?

銃弾の雨の中、ただ真つ直ぐに疾走する人影。

弾道予測線を掻い潜り、直撃弾だけをその手に持った赤い刀で斬り落としていく。

【ミヌアーノ】

噂程度なら聞いたことがある。

フィールドで見かけた場合、近ければ息を潜めて見つからないことを祈れ。遠ければ急いで引き返せ。

鉢合わせたのなら、諦めろ。

銃が支配するこの世界で刀をメインで使うプレイヤーは数少ない。

一時期、第三回B o Bの影響で刀剣使いのプレイヤーが増えたらしいけど、挫折して銃を握り直したプレイヤーも少なくないとか。

一刀の元に斬り伏せられ四散していくプレイヤーを見届けながら、近くの岩影に身を投げた。

気付かれてる可能性もなくはないけど、奇襲を仕掛けるなら気を抜いた一瞬を狙うしかない。

相手の実力は未知数。

少なくとも三人のプレイヤーを無傷で切り抜けるほどの猛者。

正面からやり合えば、まず勝ち目はない。

セーフティは外してある。あとは相手が背中を見せた瞬間に引き金を引けば――

「おいチビ助、こんなとこでなにしてんだ」

頭上から降りてきた声。

反射的に銃口を向け引き金を引いた。

「おいおいヒデエ挨拶だな」

避けられた……！この距離で……！10mもないのに！

「その銃……FN P90か。防弾チョッキを貫通する5.7×28mm弾薬……至近距離で人様に向けるモンじゃねえな」

紅い光が視界の隅で煌めき、咄嗟に仰向けになりながら飛び退く。着地を気にせず飛び退いた結果、眼前を紅い刀身が横切った。

「チビ助め……的が小さい分、殺りにくいな」

物騒なこと言ってる!?

だらりと下げた右手に持った刀をそのまま掬い上げるように斜めに振り上げたのだと気付いたのが、背中から倒れてそのまま後転してピーちゃんを構え直したとき。

「まっピンク……目が痛えな」

「か、可愛いから良いじゃないですか!」

「程度つてもんがあるだろ。アイツじゃあるまいし、全身単色で揃えるか?普通」

アイツ?

「……まあいいか。見敵必殺サチ&テストロイつてな。殺る覚悟があんだ。殺られる覚悟もあんだろ?」

「ヒッ！」

目の前に瞬間移動もかくやのスピードで迫られ、左手でピーちゃんを抑え込まれ、刀が振り上げられた。咄嗟にナイフを引き抜いて、降り下ろされた刀を受け止める。

けどその拮抗も一瞬、まるで熱したバターのように切り裂かれ左腕が宙を舞った。

「高周波ブレード……」

「ご明察。コイツを防ぎてえなら同じモンを持ってこい」

ピーちゃんを抑え込んだ左手で胸ぐらを掴み上げあげられ、そのまま地面に叩きつけられた。

右手首を踏みつけられ構えられた刀に咄嗟に目を閉じる。

「……あれ？」

斬られた感覚もキルされたウィンドウも表示されないことに恐る恐る目を開けてみれば、刀の切っ先が眼前で止まっていた。

「ーいや？辻斬りの途中だ。そっちに合流するか？」

左手を左耳に当てて……あれはインカム？誰かと話してる？

「それは面倒だな。分かった。すぐ行く。あんまウロチヨロすんなよ？……ハッハッ！悪かった悪かった」

刀を鞘に戻して踵を返した。「ミヌアーノ」に銃口を向け――

「運が良いなお前。今殺してもいいが、仲間のところに行く方が優先順位が上なんadena。次会うことがあれば今日の分も含め確実に殺る。理解できたか？ 脳内ピンク」

「そう言い捨て、まるで風のように遠ざかっていく。」

「――って言うか！」

「脳内ピンクってなんだこの野郎――！」

「いろんな意味で失礼なプレイヤーに向け、負け犬の如く吠えたのだった。」

## 第二回SQUAD（スクワッド）JAM（ジャム）

「他のチームが結託してこっちに向かっているう？」

「ああ、七チームが結託してリーダーを除いた総勢二十九名がな」

「二十九人か……大所帯でゾロゾロと雁首揃えてきたか。」

「どうする？」

「高い金を払って用心棒まで雇っているんだから、そんなの決まってるでしょ？」

「皆殺し皆殺しだよ」

「おお？先生え分かっているねえ」

「馴れ馴れしくすんな。金を積まれた以上それに見合った仕事をする、それだけだ」

「あつははは！仕事人だねえ」

「自分でできることをやる。ソレすらできねえ奴がやっていけるほど世の中甘くねえよ。」

「あつそうそう！レンチちゃんは私の獲物だから手を出したら……殺すよ？」

「へえへえ、露払いに徹してればいいんだろ」

「ピト……本当にあいつは信用できるのか？」

「なによエム、私の目を信用できないの？」

「いや、そういうわけじゃないが……」

奴には敵も味方もない。ただその場の判断で誰が敵かを決めている。直感だが奴からはそんな危うい空気を感じる。

もしかすれば、寝首を搔かれる可能性も……

「だいじょぶよ。あの手の人間は積まれた金の分の仕事はするタイプだし、そう簡単には死ぬ人間でもないしね」

「何故そう言い切れる」

「あいつがSAOサバイバーだからよ」

「なっ!？」

「【双刃】……エムだって聞いたことぐらいはあるでしょ？」

「SAO攻略組【双刃】アルト……それがあの【ミヌアーノ】だと？アバター名が一致するとはいえ、本当に本人かどうかは——」



「あの身のこなし、相手の動きを先読みする観察眼……なにより私と同じ匂いがする。私と同類の匂いがね」

ピトと奴を戦わせることはできない。奴が本当に【双刃】なら彼女より実力は上だろう。

だとしたらー

「信じられる!? S A Oの攻略組でこの広いG G Oで巡り会えるなんて、これはまさしく運命よ！アハ……アハハハハ!!」

「鳥肌が立ってきた……」

いつも通り、辻斬りでドロップ品を漁っていたところを毒鳥ピトフライに見つかり、金を弾むからとS Jに参加要請。

別段、断る理由もなく当分は金銭に困らない額だったので了承したはいが……、

「ピトフライならぬフツケバインだったか」

醜い脚という意味だがドイツの絵本に出てくる悪戯好きのカラスから転じて不幸をもたらす凶鳥という意味もあり、戦闘機のコードネームなんかに使われている。傍若無人なあの女にはピッタリだろう。

戦いと言うよりも殺し殺されることを愉しんでる、そんな節もありなるべく避けてきたんだが、あまり付きまとわれても俺が困る。

あの女、結構しつこそうだな。

「お、やっとききたか」

「【ミヌアーノ】!？」

「たった一人でこの数を相手にする気か!？」

「数だけいたってしょうがねえだろ。クライアントからの命令でな。お前ら全員皆殺しだ」

「おおくやってるやってる!」

「信じられん」

完全武装のプレイヤー二十人を相手に刀一本で立ち回ってる。直撃弾のみを選別して刀で弾き、距離を詰め切り捨てる。

第三回BOBの映像は見ていたが、実際に目にして見れば異常の一言に尽きる。

「だから言ったでしょ？そう簡単に死ぬ人間じゃないって。ああ〜！いいねえ！最後はあいつと殺し合いたいな〜」

「ピト」

「なによ〜」

「アイツとは戦うな。頼むから戦わないでくれ」

言っても聞く耳を持たないのは身を以て知っているが、それでも言わざるを得ない。

敵対すれば容赦も慈悲もなく斬り捨てるだろう。そうなればピトは――

「言っとくけど、邪魔したら殺すよ」

「片付いたぞ」

「お疲れ〜あと残ってるのはレンちゃんのチームと【MMTM】、【SHINC】それと

……【T—S】か〜」

「一つ減ってるな」

「ソレならさつき片付けたわ」

「仕事が早いことで……なら、あとは俺の独断でいいんだな？」

「【LF】 ってチームに手を出さないならね」

「【LF】 ……それが例の？」

「そ、レンちゃんのチーム」

「了解した。【LF】 以外のチームは喰っちまっても良いってことだな」

「倒した……？」

喉に噛みつくという野性的な倒し方だったけど、ピトさんのHPはゼロで死亡判定も出てる。

私……勝ったんだ。あのピトさんに……

「おめでとさん、と言いてえとこだが満身創痍で呆けてんのは感心しねえな」

突然の声に身構えながら周囲を見渡すけど人影はない。

だけどここの声どこかでー

「おつと悪いな。これじゃ見えねえか」

何も無い筈の空間にボロボロのマントを纏ったプレイヤーが現れた。

「メタマテリアル光歪曲迷彩だ。効果は身を以て知ってたが凶悪だな、こりや。これ買

うのに手付金が全部吹き飛ぶとは思わなかったが」

マントをストレージにしまいその姿が露になる。

対弾防護スーツに左右非対称の両腕、後ろ腰に回した一振りの刀。

……左手に何か持ってる？

「あなたは……」

その姿はよく知ってる。

一度だけ対峙したことがある。

「……成る程。お前がレンだったのか」

「レン、誰こいつ」

「【ミスアール】……」

GGOで物好きにも刀で戦いその名を広めて、人のことを脳内ピンクとか言うとにかく失礼な奴。

「フカ……武器は？」

「文字通り丸腰。レンは？」

「私も」

クラレンスから譲<sup>奪</sup>つて貰<sup>た</sup>った弾倉はあるけど肝心の銃がない。

「そんな身構えんな。確かに殺し損ねた分、次は確実に殺すとは言ったが丸腰相手にな」  
「それじゃ他のチームのところに行ったら？」

そう言えば、左手に持ってた物を無造作に放り投げた。グレネードかと身構えたけど、足元に転がって来たのはフルフェイスヘルメットの頭つまり生首。

「残ってるのはお前らと毒鳥<sup>ビートル</sup>のチームに入ってる俺だけだ。こいつらはお前らが戦い終わんの物を陰で見てた。チキンプレイ自体に文句は言わねえが、せつかくの決闘を台無しにさせるのみな」

アフターサービスって奴だ、と皮肉げに笑って見せる。  
呆けてるのは感心しない。

つまり「ミヌアーノ」が倒してなければ私たちが殺されてた？

「ようやく理解が追いついたって顔だな。ま、油断してる方が悪い。ここはGGOなんだからな」

……そうだ。ここはGGO。油断してる方が悪い。

「クライアントからの命令はお前たちが心置きなく戦えるように露払いに徹することであって優勝じゃねえ。仇討ちは依頼に入ってねえし興味もねえから、優勝はお前らに譲っても良い。お前らがそれをよしとするなら、な」

「マジか……なあレンナー」

「ふざけるな！勝手を譲る？勝利は自分の手でもぎ取る！譲って貰った勝ちに意味なんてない!!」

「へえ……」

銃がないならナイフで、ナイフがないなら素手で、それもなければ噛み付いてでも！  
「クツ……ハハハハ!!いいねえ！気に入った！最近は大人数が多くてな！手応えもねえから飽きてたところだが、女にしておくのが勿体ねえ上物が来たもんだ！」

ええ……。この感じ、ピトさんと同じだ。

「ごめんフカ、地雷踏んだかも」

「いいってことよ。最後の一戦はド派手に行こうか」

銃はなし。ナイフは地面に転がってる。

倒すのは無理でもせめて一矢報いる！

運が味方したのか私たちの間を割るように間欠泉が噴き上げ視界が遮られ、それと同じ時に地面に転がってるナイフを拾い上げ、フカと二手に別れて挟み込むように回り込む。

だけど回り込んだ先には誰もおらず、危うくフカと激突するところだった。

「ツ！フカ！」

「うあつとお!？」

噴き上げてる間欠泉の中から紅い刀身が飛び出し、仰向けに倒れたフカの両腕が宙を舞った。

少しでも遅れてたらフカの頭が飛んでた。

間欠泉の中に入るなんて非常識過ぎる！

「スリップダメージはあるが即死するほどでもねえ。ここはゲームの中、常識に囚われ過ぎんのも考えもんだぞ」

なら！



「無策の特攻……じゃねえよな！」

ポーチに詰められるだけ詰めてたマガジンを取り出し【ミヌアーノ】目掛け投げ付ける。当然当たらない。だけどあの刀が他所に向いてる今ならー

「言つたら。常識に囚われ過ぎんのも考えもんだつてな」

突き出したナイフは左手を貫くだけに終わり、投げ飛ばされてフカの上に落ちた。

「やっぱ戦意が滾ってる奴の方が殺し甲斐があるよなあ」

足音が近づいてる。あと3メートルもない。

「ダメだこりゃ。勝てるビジョンが全く浮かばん」

「……だね」

「……なんだよ。もう諦めたのか？ チツ、なら二人仲良く殺してやるよ」

微かに聞こえる金属音。刀を振り上げた音。

「今だ！」

ストレージに残ってた最後のマガジンを投げ付ける。

咄嗟に刀で斬り裂いた瞬間マガジン内の銃弾が暴発。周囲に撒き散らされた。

「クソッ！」

左手で両目を抑えてる。暴発した弾が当たったんだ！ なら回復する3分の間に仕留める！

『首や大腿部には主要な血管がある。そこをナイフで斬りつけるだけでも大きなダメージが見込める』

エムさんに教わった通りに右の太ももをナイフで斬り付け、膝を突いたところで首目掛けー

「こ、の……舐めんなあ!」

首狙いのナイフの刃を掴まれ、刀の切っ先が真っ直ぐにこちらに向けられる。

「レンー!」

「そーいや、もう一人いたよな!」

刀を逆手に持ち変えフカの喉を突き刺した。

目が見えないのにどうやって位置をー

「まず一人、次はお前だ」

逆手のまま振るわれた凶刃をナイフを手放して全力で飛び退く。

「俺の目を潰したのは流石だが、目が見なくてもお前の位置は判るぞ」

一気に距離を詰めて振るわれた凶刃を避けながら、距離を離そうにもピツタリと正確に私の場所を狙ってくる。

どうやって……そうか、音だ。水を跳ね上げる音で私の場所を把握してるんだ。

そうと分かればー

「……動き回りもしねえ。流石に気付かれたか」

僅かにある岩場に跳び移り、息を潜めてみれば足を止めて周りの様子を窺ってる。

「……いつまでこうしてるつもりだ。時間制限はねえし、俺の目が回復すりや得物もねえお前には万に一つも勝ち目はねえぞ」

距離はギリギリ届く。

間欠泉の音に合わせて——今！

「しゃらくせえ！」

刃先が左肩を掠め、そのまま斬り飛ばされた。

だからどうした！

ここで距離を開ければ砂粒ほどの勝機もなくなる。なら、とにかく前に！

頭上を飛び越え、刀を鞘に納めた「ミヌアーノ」に拾い上げたナイフを手にして詰め寄る。

柄に手を掛けてない。なら私の方が早い。

なのに——

銃声が聞こえたと同時に視界が180度回転した。

私が見たのは昔テレビで見た居合い斬りの体勢をした「ミヌアーノ」の姿だった。

「俺の……勝ちだ」

ピトさんのチームが優勝を飾った。

「ミヌアーノ」が使ってた刀について調べてみれば、《M16》の機構を鞘に取り入れて引き金を引くことで撃鉄が雷管を叩き火薬を爆発させる。その爆発を受けスパイクが打ち出され鏢を押し出すというもの。

銃弾じゃないからバレットラインも出ない。

というよりも銃弾と同じスピードで打ち出されたそれを空中で掴むとか人間業じゃない。

それを知らず反応も出来ずに斬られた私も悪いのだけど。

まあそれはそれとして豪志さんの案内でピトさんのリアル、神崎エルザさんと対面したその日もう一つの出会いがあった。

「それともう一つ、皆さんに会わせたい方をお連れしてます」

「なんだい豪志くん、そんな話は聞いてないぞ」

「ええ、僕も今はじめて話しましたから」

楽屋のドアが開かれ入ってきたのは灰色の髪をした男性。吊り上がった三白眼が周りを威圧してる印象を受ける。

「彼はー」

「三神颯真。【ミヌアーノ】ことアルトのリアルだ。そのこのストーカーがしつこくてな。渋々来てやった」

なんでもGGOで連日リアルで会って欲しい人がいると連絡をしたそうだ。

「お前がレンか？GGOで見かけたら真っ先に殺しに行つてやる。覚悟しとけデカ女」

リアルでも失礼な人だった。

「彼はSAOサバイバーです」

「「え？」」

「よくやった豪志くん！あとでのご褒美をやろう！」

え？SAOサバイバー？

……もう頭がパンクしそう……。

## 【双刃】と【毒鳥】

「ーで、いつまでそうしてるつもりだ」

「お前……いや、あなたがリアルでピトと会うと確約していただけるまで」

「お互いメリットはねえだろ」

「メリット……つまりあなたに何かしらのメリットがあれば会っていただけると?」

「どうしても俺とあの毒鳥を引き合わせたいのか?」  
「ミヌアーノ」としての俺じゃなく、

SAO帰還者<sup>サブバイパー</sup>としての俺と」

「……っ」

見抜かれてる……。

「簡単なこつたる。男が一人の女のために頭を下げる。理由としちやそれだけで十分だし、俺に思い当たる節はそれぐらいしかねえしな」

そこまで言つて、元々鋭かった目付きがさらに鋭利なものへと変わった。

「だかこそ断るつつつてんだ。なにも知らねえ奴が面白半分<sup>面白半分</sup>に首突つ込んでくんじゃねえよ」

「それは違いますー!」

「あ？」

「SAO失敗者……ご存じですか？」

「さあな」

「彼女は元βテスターでした。ですが正式サービス開始初日、どうしても外せない用事ができてしまいました。その後の人生を左右する重要な用事が」

その後、彼女はデスゲームに参加できなかったことで自傷行為に走るまでに情緒不安定になってしまいました。

リアルでの仕事に打ち込むことで一時的には落ち着きましたが、殺人集団のギルドが存在していたこと、そしてゲーム攻略を目指すプレイヤーたちに倒されたことを知ると、それまで抑え込んでいたものが一気に吹き出しました。

そして彼女はこう考えるようになりました。

SAOに負けた。失敗したんだと。

「それで失敗者、か。で？それと俺がどうして繋がる」

「これです」

「SAO事件全集……『ラフコフ』征伐戦か」

彼女が何度も読み返したページ。

正義の名の元に人が人を殺すことを容認された出来事。



「あなたのことも書いてあります。作戦参加者の中でも最も多く【ラフコフ】構成員を手  
に掛けたと」

「人を殺した感想でも聞かせろってか？ふざけてんのか、テメエ」

「それは違います！彼女に伝えてほしいのです！人を殺すとはなにか、死とはなにかを。  
誰よりも死に近い場所にいたあなたの言葉なら彼女に届く筈なんです」

彼女の心の内に秘める暴力と破壊衝動、死への憧れを消し去ることができなくとも。

「……………事情は理解した。だが過去の話を蒸し返してテメエらに得があつても、俺に  
はなんのメリットもない」

「ピトはリアルだとあるライブハウスを経営しています。今度そこで行われる神崎エル  
ザのシークレットライブに無償で入場できる、というの？」

「別にライブとか興味は……………待て、神崎エルザ？」

「ええ」

「……………人数制限は？」

「10人未満であればなんとか」

ウインドウを開き、ホロウキーボードに指を走らせる。

メールだろうか？操作をやめて数秒後にウインドウに目を走らせたため息を溢した。

「そのシークレットライブのチケットを買えない奴がいてな。そいつと仲間数人の入

場、それが第一条件だ」

「分かりました」

「第二条件、せいづらには一切関わらない関わらせない、引き合わせない。それが守れんなら、会ってやつてもいい」

「そのストーリーカー野郎に付きまとわれた挙げ句、こつちが根負けした訳だ」

彼—三神颯真さんはピトのリアル、神崎エルザと会うための条件を隠し、ただ私に付きまとわれて根負けした。

そう押し通すことで、彼の仲間を彼女に引き合わせないようにした。

恐らく彼の仲間もSAO帰還者。

そのことが彼女に知れば、彼の仲間にも関心が向くだろう。それを避けるための力バースト—リー。

「テメエの椅子になつてるマゾストーリーカーの提案に乗ったのは、テメエの真意がどこにあるか確かめたかったからだ」

「真意？」

「テメエが求めてるのは俺と違つて純粋な闘争じゃねえ。傷付け傷付けられ、殺し殺される。破滅願望、破壊衝動……死への憧れにも似た狂気を感じる」

……この人はどこまで見抜いているんだろう。

私は、見たものを射抜くような鋭い視線を神崎さんに向ける色々三と失礼真な男さの人んを見やる。

SAOサバイバーであり、「ミヌアーノ」の異名を待つGGO界屈指プレッシャーの実力者。放つ雰囲気はSJの時よりも鋭く重い。

「まあ否定はしないよ。傷付けるのも傷付けられるのも、殺すのも殺されるのも、どれもこれも私が生きてる実感を、確かに忍び寄る死の気配を感じるためだからね」

「……ああそうか、お前見てると無性に腹が立つのは昔の俺を見てるからか。生の実感を得る。その為に周囲の人間に牙を剥いてた頃の俺に」

「そうかもね。でも、こうして面と向かい合ってみて確信したよ。私とアンタは似ているけれど違う」

「俺は闘いの中で自分の生を実感できる。お前は生も死も感じるためだけに闘ってる。似てるどころかまったく真逆だ」

お互いが似ていると言いながら、本質は逆であるとお互いに否定し合う。

【バースーカ狂戦士】って通り名もあながち間違いない。戦うことでしか自分を表現できない」

「別に戦うことに狂ってる訳じゃない。戦うことでしか自分を表現できない。ただそれだけのことであって、それで繋がった絆もある」

「それがこの……攻略組最強と名高い【黒の剣士】様って訳だ。『この二人が肩を並べれば勝てない敵はいない』だってさ」

「事実だ。俺とアイツが肩並べて戦って負けたことなんざ一度もない。これまでもこれから。例え、どんな理不尽が相手だろうとしてもだ」

三神さんの言葉から感じる揺るぎのない全幅の信頼。

「ひとつ教えといてやる。死つてのは憧れるほど良いもんじゃない。死の先にはなにもない。全くの虚無だ。それでも死に憧れるってんなら、自分のやるべきことすべてを片付けてからにしろ」

自分の信念を最後まで貫いて倒れるなら本望つてもんだろ？

そう言い残し三神さんは楽屋をあとにした。

自分の信念を最後まで貫く……S A Oでもあの人は最後まで貫いていたんだろうか？自分の信念を。

「これで何回目だよ……」

「こんな美女を目の前にしてゲンナリなんて、失礼極まりないと思わない？」

「G G Oに来る度、お前とエンカウトする俺の身にもなってみろ。つか、何で俺の居場所が分かるんだよ」

「私には追跡な得意な彼氏がいるからねえ」

「追跡じゃなくストーキングの間違いだろ合法ロリ」

「ゲームに私情を持ち込むなんてナンセンス☆」

「黙れ死滅願望者」

「いやん辛辣」

言葉のナイフを容赦なく突き刺すアルトさんに対し、のらりくらりと受け流すピトさん。  
ん。

Mさんからアルトさんの居場所を教えてもらい文字通り飛んで会いに行く日々。

……なぜか私まで連れ回される羽目になってる。

「そのピンク玉の顔見てみろ。お前の都合に振り回されて呆れてんぞ」

「レンちゃんと私は一心同体だからね。どこに行くにしても一緒なのさ……お泊まりはさせてくれないけど」

「両刀のお前と一晩過ごすなんざ願ひ下げなんだろ」

「ひつどーい」

《KTR-09》と《レミントンM870ブリーチャー》を構えるピトさんに対し、アルトさんは腰に携えた《ムラサマ》ではなく湾曲した刃を持つカラビットナイフと無骨な直剣を構えた。

「ようやく【双刃】とご対面だねえ」

「お前がメールでうるせえからな。取りたくもねえ《銃剣生成》スキルまで使って用意してやったんだ……お陰であいつらに浮気だなんだと疑われる羽目になったんだが」

短剣と大剣を組み合わせて戦う様から【双刃】。それを再現した名付けるなら【擬似双刃】。

「つかおまえどんだけ同じモン持ってた？何回売り払ってもキリがねえんだが？」

「リアルマネーって偉大だよねえ」

「廃課金者が」

「それよりも前の話、考えてくれた？」

「お前とステージに立つってやつだろ？悪いが丁重に断らせてもらう」

「音痴なんて誰も気にしないってえ」

「俺は音痴じゃねえ」

「音程バリバリ外してたくせに」

「黙れ」

ピトさんのシークレットライブの案内をするためにMさんが事前にアルトさんと交換、そしてピトさんがMさんから連絡先を聞き出したらしい。

それからちよくちよく会っているそうだ。

まあピトさんからの一方的なものらしいけど。

「だったらこれに私が勝ったら話を飲んで貰うからね」

「勝てたらな」

「言質は取ったからね？それじゃいざ尋常に……」  
「勝負!!」



## 罪の代償

夢を見た。SAO時代の夢。

剣戟の海の中、手にした大剣がプレイヤーを斬り裂きその命を奪って回る【ラフコフ啞う棺桶】征伐戦だ。

俺はあの日、確かに命を奪った。ゲーム内の命だけでなくリアルの命も。

ヒトとしての禁忌。赦される事のない罪。

『お前は悪くない』

そうやって誰も俺を裁くことはしなかった。

まあそうだろう。あの混戦の中、自分の身を守るにはそうするしかなかった。あの場  
にいた連中全員が理解してる。

だが、俺自身は別だ。

だからこそ俺の見る夢はいつだって過去の罪。ただ暗く執拗に陰湿に過去の罪を突き付ける。

見て見ぬ振りはしない。いつだって向き合ってる。

だけどもー

「弱えなあ俺」

目を覚まし天井を見上げながら呟く。

いつでも気を張って生きてれるほど人は強くない。

ふとした隙につけ込まれ、突き崩され、膝を折る。

俺だって人間だ。いつでも気を張れる訳じゃねえ。

それでも今までは夢に見てもいつも通りに振る舞えてた筈だ。原因は恐らく――

【死銃<sup>デスガン</sup>】

浮遊城の亡霊、「ラフコフ」の残党。

S A Oが遺した負の遺産。

そしてザザと邂逅し、改めて自覚した己の罪。

だが、それから目を背けてしまえば人として致命的なナニかから逃げることになる。

俺もアイツも己の弱さを呪い続けてきた。己の罪と向き合ってきた。受け止め背負って生きていくと決めた。

「ああ、そうだ。俺は独りじゃねえ」

どんな過酷な道でも一人で歩いていく訳じゃない。

アイツには背中を支えてくれる奴らがいる。

そして俺の後ろを歩くヤツがいる。

なら折れる訳にはいかねえ。

アイツらに情けねえ姿を見せなれない。

そして過去は無かったことには出来ない。

それはあの世界で散っていった連中を無かったことにすることだ。

人は人生の中で二度死ぬ。

一度目は文字どおり肉体が死んだとき。

二度目は人の記憶から忘れ去られたとき。

あの世界の出来事を無かった事にするなら、そいつらが託した想いも意思も、そしてそいつら自身も無かった事にすると言うことだ。

それをしてしまったら、俺は俺自身を許さないだろう。

どんな過去であれ、己の一部だ。

だからこそ、過去を否定することは自分自身すら否定する事に他ならない。

地獄へ堕ちる身だからこそ、忘れてはならない。

誰よりも己を律して生きなければならぬ。

誰よりも己を赦さず生きなければならぬ。

洗面台の鏡に写る自分の顔を見る。

忘れるな。過去は罪は己の影だ。

どこでどんな風に生きたとしても絶えず付いて回る影法師。

お前は俺アルトで俺アルトはお前だ。

自分の手を見る。

血にまみれた己の手。これでは触れたもの全てを血で汚してしまうだろう。

足元を見る。

凄惨な表情を浮かべた死者が奈落へ引きずり込もうと手を伸ばしている。

玄関のノック音に僅かに気を取られ、視線を戻してみれば血にまみれた手も奈落へ引きずり込もうとする死者の姿もない。

——幻覚……それもそうか。

罪の意識が作り出した虚影。

俺自身が俺自身の心を折ろうと作り出した幻。

ああ、それでいい。他の誰よりも俺は俺を許しちやならない。大丈夫だ。いつも通り嗤えてる。

## いつかの思い出

「魔剣だあ？」

「まだ噂程度なんだけどな」

日課になりつつあるALOでの馬鹿話の途中で切り出されたレア武器の話題。

毎度思うがどっからそんな情報仕入れてんだか。

「前のアップデートで世界樹近くにダンジョンが出来たみたいなんだ。その入口に立ってるNPCによるとー」

「一番奥に魔剣があつて取ってきた奴にそれをやる、つてところか」

「そういうこと。ALOは北欧神話を題材にしてるだろ？アルトなら詳しいんじゃないかって」

「人を辞書扱いすんじゃないやねえ」

北欧神話に出てくる魔剣……。

有名どころならフラガラツハとかカラドボルグとかその辺りだな。

「そんなことよりも《光弓シエキナー》を取りに行きたいんだけど」

「さも当然のようにレジエンダリー要求すんな」

こつち<sup>A L O</sup>にコンバートしてきたばっかだろ。

……不満そうに尻尾を振るな。

「レアリティまでは分からなかったけど、魔剣つて言うくらいなら《グラム》みたいな特殊能力は期待できるはず」

エアリアルシフトだったか？

透過能力持ちで防御貫通効果があつたが、種が割ればどうつてこともねえ。持ち主のプレイヤースキルも高かつたが、能力に頼りすぎてる節もあつた。

「この借りはいつか精神的に返すからさ」

「ちよつと待て、俺が行く前提で話を進めんな」

「とか言いながら、しつかり準備はするのよね」

黙れシノン。

「なあ、あんたらこの洞窟に潜るのか？この洞窟の奥には金銀財宝があるらしいんだが、恐ろしいドラゴンが守つてゐるって噂だ。そのドラゴンを倒してくれれば財宝の半分を

あんたらにやるよ」

《ラインの黄金》

「金銀財宝ねえ、そんな話聞いてねえんだが？」

「言っていないからな」

「よろしくね！シノのん」

「ええ、よろしくアスナ」

最近このパーティーで固定されつつあるな。

「？ユイはどうした？」

「お留守番です。シリカちゃんとリズもが見ててくれるつてくれたから」

「子供を置いて両親が外でイチャついているとか、感心しねえな」

「アルト（くん）!!」

「アルトはこつちでもこんな調子なのね」

人をどうしようもねえ奴みたいに言うんじゃない。

「それじゃ前衛は俺とアルト後衛はシノン、アスナは状況に応じて、出来れば回復メインでやってくれると助かる」

中は結構広かった。四人が横に並んでもまだ余裕がある。にしてもー

「なにも出ねえな」

「一回くらいはモンスターとエンカウントしてもいい筈なんだけどな」

ダンジョンはフィールドに比べてエンカウント率は高く設定されてるはず。なのにまだ一度もエンカウントするどころか見掛けもしない。

「消耗が抑えられるから良しってことで」

「あーウズウズする」

「お前も抑えろ戦闘狂」

「失礼なこと言うんじゃねえ」

「アルトも大概失礼だけど」

尻尾引き抜くぞこのやろう。

「分かれ道か」

右か左か。どっち行っても同じようなもんだらうな。

「それじゃ俺とアスナは左に行くから、アルトとシノンは右を頼む」



「あいさ」

「了解」

「ねえ」

「んー?」

「貴方とあの変態はいつもあんな調子なの?」

「いつも馬鹿やってるのかって? まあな」

前を進むアルトに問い掛けてみれば肯定。

「学校じゃ話の合わねえ連中ばっかだからな。その分ここで羽目を外してる。もし、あいつらと同年代だったら学校も退屈しなかった。そう考えることもあるが、仮にそうだったとしても今みたいな馬鹿はやってねえだろうな」

「どうして?」

「簡単な話だ。俺たちはSAOで文字通り命を預け合ったから、お互い遠慮せずに馬鹿やれてる。喪うものもあったが、確かに得るものもあった。その繋がりには日常を謳歌し

てるだけじゃ絶対に得ることのできない絆だ」

信用して信頼して遠慮の要らない関係……。

アルトたちが命懸けで戦って育んだ絆。

私はどうなんだろう？ どう思われてるのか。

「ねえアルト……ウツ！」

「シノン！」

噴出音と共に噴き出た紫色の見るからに毒と判るガスを吸い込んでしまった。

「おい！ 大丈夫かシノン！」

「え、ええ……毒のアイコンも出てないから吸い込んだ量が少なかったのかも」

「はあ……あんま扱い抜くな」

「ええー偉そうにしないで」

え？

「あ？」

「あ、これは違うのー私の従僕にしてあげる」

なにこれ……声が勝手に……。

「……………」

「下僕とか私の趣味じゃなくてーイイ声で啼いてみせなさい？」

ああ！もう！なにこれ！

「……プツ……アハハハ！！成る程、さっきのガスか」

ガス？

「SAOにも同じようなモンがあつてな、あつちじゃキノコでな？それをキリトに食わせたあとアスナの家に放り込んでやつたら……プツ……アハハハ！」

SAOでも？つてそんなのはどうでもよくて！

「どうすれば治るの？ーそんなのも分からないの？」

「あ、ああ。バフデバフと同じで時間経過で自然に治る……クフツ……アハハハ！だ、ダメだ！思い出しただけでも笑いが……ハハハ！！」

「笑つてる場合じゃないでしょ！ーこの従僕」

一方その頃

「違うのキリトくん！声が勝手にー跪いて赦しを請いなさい女顔」

「止めてくれアスナ、俺のライフはもうゼロだ……」

「お？キリト」

「アルトか。分かれ道でも結局もとの一本道に戻るのか」

「どうした今にも死にそうな顔して」

「な、なんでもない。な?、アスナ」

「え!? う、うん。なんでもないよ? 本当だよ?」

アスナは隠し事が下手だな。

「ふうん。まあなんにせよ、ここが最深部。つまりー」

地鳴りのような呻き声、胸に刻まれた青白い紋様、鱗と甲殻に包まれた巨躯、爬虫類を思わせる縦に裂けた瞳孔。

《F a f n i r》

ニーベルングの指環に出てくるラインの黄金を守護する魔竜ファフニール。

伝承では鋼のような鱗と毒のブレスを吐くドラゴンとして描かれてる。元は人間だけどな。

つーことは手に入る魔剣ってのはー

「来るぞー! 散開!」

地面を踏み砕かんばかりのストーンピングを避け、ストーンピングをした足を支点に全方向を風ぎ払う尾撃をやり過ぎす。

随分アクロバティックな動きをしやがる。

反撃とばかりに大剣を叩き付けるが――

やっぱ硬え……！

分かつてはいたが、まるで金属の塊を斬りつけたかのような甲高い音と共に弾かれる。

「どうする」

「SSかなあやっぱり」

上位のSSなら魔法属性を持つ。物理は駄目でも魔法なら通るか？

結果は通りはしたものの与えたダメージは微々たるもの。これじゃ何時間掛かるか分かったもんじゃねえし、奴を倒す前にこっちがジリ貧だ。

思い出せ、ファフニールはどうやって倒された。

「アルト！奥！」

山のように積まれた財宝の中でも一際目を引く大剣。

あれが……。

「ヘイトは俺たちに任せろ！アルトはあれを！」

「任せたぞ相棒」

拳を打ち合わせたと同時に左右に別れる。

財宝に足を取られながらも財宝の山に突き刺さった大剣の元まで走る。

《魔劍ノートウング》

柄に手を掛ければそんなウィンドウが表示され長々と説明文が流れるが知ったことか。

《ノートウング》を取られたことに事に気付いたファフニールがキリトたちに目もくれず真つ直ぐに向かつてきた。

《ノートウング》を構えればSSを使うためのSPが減つてることに気を取られたが奴の鉤爪を避けて顔面目掛けて振り抜く。

すると光の奔流が《ノートウング》から放たれファフニールを消し飛ばした。

……なんか出た……。

ハプニングもあつたが無事《魔劍ノートウング》と多くの財宝を手に入れることに成功し、ささやかな打ち上げをすることになった。

《魔劍ノートウング》

ドラゴン特攻にSPを消費して消費した分を飛ぶ斬撃として放つ。  
斬撃じゃなくてビームだったけどな。

「それじゃアルト、《ノートウング》についての伝承をどうぞ」  
「しばき倒すぞ teme」

### 《ノートウング》

ニーベルングの指環に出てくる英雄ジークフリートが振るつたとされる剣。

バルムンクとも呼ばれるが、そっちはニーベルングの歌での呼称で、実はノートウングもバルムンクも元は魔剣グラムの別称だったりする。

元々はジークフリートの父シグムントが所有していて、主神オーディンとノルニル三姉妹の加護を受けていた。

シグムントの妻となるヒョルディースはフンディングという王族からも求婚されていたが、シグムントを選んだことに激怒、ヒョルディースとシグムントの国へと軍勢を差し向けた。

主神オーディンとノルニル三姉妹の加護を受けた剣を振るうシグムントは優勢であつたが、突然オーディンが現れグラムを折ってしまった。

老齢に加え、剣の加護を無くして命運尽きたシグムントは、折れた剣をヒョルディー

スに託し、「その剣から新たな剣が生まれるだろう」と言い残して息を引き取った。

「そしてニーベルングの指環でファフニール討伐のために名剣を探していたジークフリートが折れたグラムを見つけ鍛え直したのがバルムンクであり、ノートウングと言うわけだ……ってなんつー目で見てやがる」

「詳しくすぎでしょ。流石の私も引くわ」

「もー、リズさん。せっかくアルトさんが話してくれたのにその反応はひどいですよ」  
「そういうシリカも顔が引き吊ってるけどな」

決めた。何があっても伝説やら伝承やらは絶対に話さねえ。絶対にだ。



## F a t e l (フエイタル)      b a l l e t (バレット)

「マスター！昨日は楽しかったですね！」

？そうだね。

クレハはどうだった？

「まさかキリトさんたちと知り合いになれるなんてね。あんたのリアルラックはどうなってるのよ」

クレハはすっかり呆れているようだ。

「お、いたいた」

「マスター、キリトなのです」

「キリトさん、こんにちは」

「あー、良かった。今日も来ててくれたんだな」

？どうかした？

慌ててるようだけど……

「いや、前に集まった時に用事で来れなかった奴がいてさ、今日は来れるって言ってたから君たちを紹介ー」

「話が長え……で?こいつらが例の?」

強化外骨格というやつだろうか?左右非対称のアーマーを着た男性が現れた。

「えっ……とキリトさん、この人は?」

「【ミヌアーノ】って言えば伝わるかな?俺たちよりも先にGGOに来ててさ、結構有名ならしいけど」

「【ミヌアーノ】……ってあの百人斬りの!?!」

知ってるのクレハ?

?百人斬り!?

「……アルトだ。それに関しちや周りが勝手に騒いでるだけだ。特別なことなんざしてねえし、百人も斬っちゃいねえよ」

「あはは……口は悪いけど根は良い奴だから安心してくれ」

友好度イベント

## R a n k 2

「……なんだお前か。キリトたちなら出払ってるぞ」

？（ち、近寄りがたい……）

あ、えっと、その……

「あのアファシスとやらは一緒じゃねえのか。ここはGGOだぞ？油断してれば横から搔つ攫われる。レアなtype—Xなら尚更な」

クレハと一緒に買い物に

？心配してくれてるんですか？

「アホか。あのアファシスがいねえと《フリーユージェル》に行けねえんだろ？《フリーユージェル》に挑戦出来ねえとなるとキリトたちの努力も無駄になる、それだけだ」

？キリトと仲が良いんですね

それってやっぱり心配してくれてー

「ん？まあ二年近くの付き合いになるしな。けどな、俺とあいつは息が合うだけであつて仲が良い訳じゃねえ。そこんとこ勘違いすんな」

## R a n k 3

「ーある程度片付いたか?」

? 十人以上いたプレイヤーを刀だけで……

未来でも見えてるの?

「そう大したことじゃねえよ。人間つてのは体を動かす前に筋肉に力が入る。VRでもそこは変わらねえから、それを見極めて相手の動きを先読みしてるってだけだ」

? 銃弾だつて弾いてたし……

「銃弾つてのは銃口から真っ直ぐに飛ぶモンだろ? いくら速くてもそこに来るって分かつてんなら対処のしようは幾らでもある。まあ湿度とか風の影響を受けて直進はしねえし、マズルジャンプで結構バラけるけどな。バレットライン様々だ」

? 人間じゃない……

「ははっ、まあよく言われるが突き詰めりゃ相手の動きを先読みしてバレットラインが表示されるよりも早く動いてるだけって話だ。ま、気が向いたらコツぐらいは教えてやるよ」

## Rank 4

「――精度はイマイチだが、見えるようになってきたな」

?いきなり対人!?

「実践に勝る修練なし、だ。頭で理解するのと体で覚えるのとじゃ後者の方が実戦で役に立つ」

?スパルタだ!

この人でなし!

「強くなりてえんだろ?ならゴチャゴチャ文句言つてねえで動け、見ろ、そして殺せ。とにかく場数を踏んで自分なりのコツを掴め」

?そのコツを教えてください……

「俺の感覚がお前の感覚に当て嵌まるとは限らねえ。だからこそ実戦でコツを掴めつて言つてんだろうが。さあ次が来たぞ、さっさと逝つてこい」

?ニューアンスが違う!?

光剣スキル《ミヌアーノ》習得

銃撃をしてきた相手に対して銃撃を無効化しながら接近し、斬撃を浴びせる。空中の敵に対しても有効。

AGIが高いほど威力が上昇。

攻撃回数 I? 3回 II? 4回 III? 5回

クールタイム I? 20秒 II? 15秒 III? 10秒

光剣スキル《ソードマスター》習得

10秒間、光剣によるダメージが上昇。

倍率 I? 100% II? 150% III? 200%

R a n k 5

「アルゴの情報じゃここら辺か」

??ここを??

また対人ですか?

「レアな武器をドロップするって情報を仕入れてな。お前の特訓に付き合っただけだから、今回は付き合え」

「？銃、使うの？」

「質問が多いな。銃も嫌いじゃないがチマチマ狙いを定めるより、寄って斬った方が性にあつてる……つと来たな」

「ちっ、L Aはお前か」

「？なにか違和感が……」

「やったー!!」

《電磁フィールド発生装置》

「……レアモノだな」

「あちやく、アスナ出遅れたみたいだ」

「キリトくんが寄り道なんてしてるからでしょ？」

「ご夫婦揃ってこんなとこまでデートか？」

「ところで何がドロップしたんだ？」

? ? これなんだけど

「お? L Aは君が決めたのか? ? ? ? ふーん」

「なるほどね〜」

? ? ?

「実はさ、ここのボスはL Aを決めたプレイヤーに合わせたアイテムをドロップするらしいんだ。つまりー」

「アルトくんが本当にその気ならL Aを自分で決めていた。そうでしょ?」

「さて、なんのことだかな。用事も済んだし先に帰る」

? ? あ、行っちゃった? ? ? ?

「はは、随分アルトに気に入られたな」

? ? そうなの? ?

かなり素っ気ないけど? ? ? ?

「アイテムがドロップアイテムを調べて譲ってる時点だね。まあ、そういうことを口にするタイプじゃないから」

? ? だから最後L Aを決めさせた? ?

「だね。勘違いされやすいけど、仲間思いのいい人だから仲良くしてくれると嬉しいな」

「けど、かなり戦闘狂の面もあるから戦いを挑まれたら逃げた方がいいな」



「主な被害者はキリトくんだもんね」  
「き、気を付けます」

ガジェット《電磁フィールド発生装置》入手  
30秒間、自身に向けて放たれた銃弾を逸らす。

## 第六特異点

気が付けば目の前にいるのは体格に見合わない盾を携えた紫色の髪の少女とベルトを締めた白い服を着た少年。どっちも年下だろう。

つか、ここどこだ？確か俺はSAOでキリトと戦って死んだ……んだよな？の割りに体の感覚はリアルソレとあんま変わんねえし、むしろ生身の時より調子が良い気がする。

「先輩……」

盾を構えた少女の後ろへと少年が下がる。

随分と嫌われたもんだな。俺の悪名も広がってるだろうから警戒されても仕方ねえかもだが。

「クラスはバーサーカー、装備を見る限りでは中世辺りの方でしょうか？」

「誰がバーサーカーだ！この野郎！」

人の事とやかく言える立場じゃねえが、失礼すぎんだろ！

「す、すいません……意思の疎通が取れますね。ベオウルフさんやナイチンゲールさんと同じ理性のあるバーサーカー、ということでしょうか？」

ベオウルフって巨人グレンデルを打ち倒したあのベオウルフか？ ナイチンゲールはクリミアの天使フローレンス・ナイチンゲール？

「ああくそ、何がどうなってやがる」

「あ、あの……お話しよろしいでしょうか？」

特異点、英霊、サーヴァント、聖杯、人理焼却、グランドオーダー……突拍子も無い話で頭が混乱してるな。

取り敢えず盾娘とカルデアマシユと呼ばれる場所から彼女たちに指示を飛ばすモヤシロマニから得た情報を整理する。

「つまるところ死んだ英雄が英霊になってマスターと呼ばれる魔術回路を持った人間が英霊の側面を喚び出すのがサーヴァント……で合ってるか？」

「サーヴァントの事に関してはその認識で問題はありません。それにしても驚きです。全く異なる世界の方がサーヴァントとして喚び出されるなんて……」

悪い人じゃなそうだ

? 並行世界ってやつなのかな?

『僕からはなんとも言えないね。【座】は成した偉業や人々の信仰によつて英雄が英霊として記録される。もしかしたら彼も何か偉業を成したのかもしれない』

「むしろ逆だな。俺は俺の欲の為に多くの人間を巻き込んだ。英雄つて柄でもねえし間違つても呼ばれることもねえよ」

アイツとの決着を着けるために多くの人間を巻き込んだ。非難されても賞賛されることじゃない。

まあ誰かの恨みを買うなんて今更だけどな。

「まあまあお三方、頭を悩ませるのは後にして明日は大事な一戦が控えてるんだ。休める内に休んでおいた方がいいよ?」

「それには俺も賛同する。体力も集中力も限界がある。いざというときの判断を見誤らない為に休める内に休んでおいた方がいい」

ダ・ヴィンチの言う通りだ。マスターである藤丸が判断を誤ればそこで何もかもが終わる。

藤丸と盾娘の背中を見送り今後どうするべきかを考える。異世界召喚とか小説の中だけの物語だと思っていたが、まさか俺が体験することになるとは思っても見なかつ

た。

だからと言ってこいつらに手を貸す理由はない。

「さて君には色々聞きたいことがあるんだけどいいかな？もちろん拒否権も黙秘権もあるよ」

「Give and takeだ。情報をもらった以上、俺も話すしかねえだろ」

「粗暴な口調の割りには筋は通すタイプかな？ステータスだけじゃ個人を量れない。敵対する意思がないのなら人間らしく言葉を交わすべきだと私は思うのさ」

ダ・ヴィンチの問答は日が登るまで続いた。

サーヴァントには食事も睡眠も必要ないらしい。便利な反面、人間じゃなくなつたのだと思ひ知らされたな。

つかこいつ、ダ・ヴィンチの癖に外見はモナリザだ。なんでも自分が見てきた中で一番美しい女性の姿に自分を改造したそうだ。

訳が分からねえ。結局、天才の考えることは凡人には理解できない、ということだな。藤丸と盾娘は焼却された未来を取り戻すため、各時代に配置された聖杯によってねじ曲げられ特異点と化した歴史を修正してると。

聖杯を使い歴史をねじ曲げる奴らとそのカウンターとして召喚されたサーヴァントと協力し、今までで五つの特異点を修正したそうだ。

そして今、六つ目の特異点に乗り込み明日聖都へと殴り込みに行くらしい。

アーサー王とその元を集った円卓の騎士たちが今回の敵。

「悪いが俺は降りる」

「……まあなんとなくそんな気はしていたよ。この世界は君にとって無関係だし、なによりサーヴァントとしてまだ幼い。サーヴァントに成り立ての君を連れていくのは、あまりに不安要素がありすぎる」

「だろうな。体の感覚に頭が追い付てねえ。こんな状態で格上と戦うんざり自殺行為だしな。藤丸と盾娘にはそっちから言つといてくれ」

「……………始まったか……………」

遠目に見える白亜の城。聖都キヤメロット。

砂塵に覆われ、微かに剣撃の音が聞こえる。

別にアイツらが死のうが俺には関係ない。

あれはアイツらの戦いであって無関係の俺が割り込んでいいものじゃない。

未来を取り戻す戦い。

ダ・ヴィンチはそう言った。

敵の破壊工作によってマスターは藤丸ただ一人。

まだ高校生ぐらいであろう少年に人類の未来が懸かっている。

それは規模こそ違うもののSAOクリアのため奔走する少年の影と重なる。

「キリト……お前ならきつと打算なく協力を申し出てたんだろうな。お前はお人好しす

ギョウ」

足は自然とキャメロットへ向いていた。

「どうせ逝きかけの駄賃だ。英雄の面を拝ませて貰おうじゃねえか」

「これは太陽の映し身、あらゆる不浄を清める焰の陽炎」

「敵、宝具発動します！」

タイムリングは最悪だ。マシユの宝具は間に合わない！

「エックス転輪する勝利の——」

もう少しなのに……！

「させるかよー！」

マシユの脇を抜けた灰色の影が円卓の騎士ガウエインへと向かう。疾走する勢いのまま右手の大剣と左手の異形の短剣でガウエインの聖剣を受け止め壁際まで押し退けた。

「よう藤丸、まだ生きてるか？」

「貴方は……」

「ここは俺が引き受けた！ボサツとしてる暇があんならさっさと進め！」

「させない！」

「つれない事言うなよ。もう少し俺に付き合ってもらおうぞ！」



聖劍をその異形の短剣で裁き、お返しとばかりに右の大剣を振るう。

「アルトさん！」

？マシユ、行こう

「……はい」

けたたましい剣撃の音が聞こえてくるけど決して後ろは振り向かない。あの人ならきつと大丈夫。

「流石、太陽の騎士ガウエイン。ここまで実力差があるとなると笑いしか出てこねえ」

左腕は焼かれ右目を潰され満身創痍の状態。

それでも戦意は折れず、眼前の敵を見据える。

「私も無名の英霊にここまで粘られるとは、私自身思ってもみなかった」

「白々しいなバスターゴリラ。こっちは満身創痕、そっちはまだ手傷を負った程度だろ」  
剣から炎を撃ち出すとか反則だろ。

「せめての手向け、たむ聖剣の炎で焼き払いましょう」

「ガラティーン……エクスカリバーの姉妹剣、か。まさか本物を見れる日が来るとはな」  
サーヴァントつてのも悪くねえな。

「最後に言い残すことは？」

「騎士の矜持か？なららひとつ、手傷を負った獣を前に舌舐めずりは命取りだぞ」  
宝具は英霊の生きた証であり生き様。

サーヴァント擬きの俺でもあの世界で刻んだ思いがある。

「ストレイド・アインクラッド《闘争こそ人の可能性》！」

「エクスカリバー・ガラティーン《転輪する勝利の剣》！」

特異点を修正しカルデアへと戻ってきたけれど、あの人はいない。

サーヴァントとして円卓の騎士たちに劣ると言い残して姿を消したけど、自分達の危機に駆け付けてくれた。

そのお礼をまだ言えてない。

「二人とも特異点の修正お疲れ様、獅子王が残した最後の特異点の特定まで時間が掛かる。それまで二人ともコンディションを整えて置いて」

ドクターの言葉に自室へと戻ってベッドへ身を投げる。

? 眠れない……

「酷え面してんな。誰か死んだか?」

? ?え?

この声……

「数時間振りの再開だな。俺もてつきりガウエインと相打ちなつて終わりかと思つてたが、気が付けばカルデア? にいてな。あちこち見て回つてて挨拶が遅れた」

色んな時代のサーヴァントがいて、なかなか見飽きなくてな、なんて茶化して右手を差し出してくる。

「改めて、サーヴァント・バーサーカー真名アルトだ。よろしくなマスター」

ステータス（f g o 風）

真名：アルト（三神颯真）

性別：男性

属性：混沌・善・人

クラス： Berserker

レアリティ： ☆4

カード配分： Q A B B B

Q： 3 hit    A： 2 hit    B： 3 hit    ex： 4 hit

LvMAX時

HP： 11560    ATTACK： 12860

筋力： A    耐久： C    敏捷： C    運： A+    魔力： D

宝具： C

スキル

攻勢防御： A+

無敵状態を付与（2回・3ターン）

防御力UP（3ターン）

防御力UP大（3ターン）

リチャージ： 7?6?5

人体理解（目）： A

人型特攻・特防状態を付与（3ターン）

クリティカル威力UP（3ターン）

リチャージ：8？7？6

双刃：A

攻撃ヒット数を倍にする（1ターン・攻撃力半減・スキルレベルに応じて威力UP）

自身に毎ターンスター獲得状態を付与

リチャージ：7？6？5

クラススキル

狂化：C

バスターカードの威力が少し上昇

先見：A

サーヴァントのクリティカル発生率を大きく減少

宝具

バスター宝具

ストレイド・アインクラッド  
《闘争こそ人の可能性》

自身に必中状態を付与（1ターン）敵単体に防御無視の超強力な攻撃（オーバーチャージで効果UP）

敵の攻撃力と防御力down（オーバーチャージで効果UP）

召喚時

「こう言うときは前口上が決まってんだってな。クラスバースーカー、真名アルトだ。強え奴がいたら俺を呼べ、損はさせねえよ」

## 第七特異点

第七特異点 絶対魔獣戦線バビロニア

魔術王ソロモン自らが配置した最後の聖杯。

その聖杯こそソロモンの居城を示す最後の道標。

神代最後の残り香。

「アルト殿」

「レオニダスか……他の戦線は？」

「アルト殿が単騎で持ち堪えてくれているおかげで、兵士たちの戦力も充分に回せました」



「……つたく、英雄王も無理難題を押し付ける。俺だけで城門前を守れとか」「信用されていますな」

「せめてセイバーじゃなくてバーサーカーで喚べつての」

どういわけか俺も座とやらの登録されたらしく、憶えのない記憶記録がある。

それはそれとして今回ギルガメッシュ王に召喚された訳だがクラスはセイバー。

まあ戦い方自体は変わらねえけど。

「前木童子バーサーカー殿は何処かへと姿を消し、アーチャー殿は敵の幹部と相討ち。戦況は芳しくありませんな」

「そうだな。数も質もあつちが上。さらに無尽蔵に増えるときた。魔獣母体とやらを潰さねえとジリ貧か」

「とはいえ我々では防戦で精一杯。敵の神殿に攻め入り、打ち倒すための戦力はありません。となると……」

「カルデアとやらのマスター、か。文字通り最後の希望つて訳だ」

つい先日、ここにレイシフトしてきた。

親しげに話しかけてきたが、アイツと馴れ合ってるのはバーサーカーの俺であり、セイバーとしての俺ではない。

英霊の一側面を切り取りクラスの枠に押し込めサーヴァントとして召喚する。

頭では理解してるが俺じゃない俺がというのなんとも複雑怪奇だ。というよりも何故俺ごときが英霊となってるのか甚だ疑問ではあるが。

「さて私は兵士たちの訓練へ戻ります。アルト殿もあまり無茶を為さらぬようお気を付けてください」

「無茶して勝てるなら誰だってそうするさ。まあ気には留めとく」

……前に休んだのはいつだったか。

眼前に広がる光景に辟易しながら、ブラック企業も真つ青な連戦に身を投じた。

「次……」

サソリ擬きとライオン擬きの死屍累々。

大地は血に染まり、河のように血が流れていく。

本当に嫌になる。

戦うことは好きだが、ただの殲滅戦はあの日を思い出す。

「いい加減に……しやがれ！」

無限とも思える物量。

頭を割った程度じゃくたばらない生命力。

毒を持った尾や強靱な四肢による一撃。

俺の持つスキルの影響で周辺一帯の敵が俺へと殺到する。

あの英雄王もこれを見越して俺一人を配置したんだろうが、オーバーワークにもほどがある。

バーサーカーの俺よりも反骨精神の強いセイバーの俺は出来ないのかと言われれば否と答え、現状に至る。

今日も今日とて殺戮日和だ。

魔獣<sup>ゴルゴーン</sup>母体の出現と撃破、イシユタルの懐柔、ケツアル・コアトルの襲撃と同盟、英雄王の過労死騒ぎなどカルデアが来てからなんとも目まぐるしく物事が進んでいく。

冥界の女主人エレシユキガルの協力も取り付け、決戦に備える。

その相手は――

神々の母、女神ティアマト

魔獣母体と呼ばれていたゴルゴーンは隠れ蓑に過ぎず、ゴルゴーンの撃破と共に真の魔獣母体であるティアマトを目覚めさせてしまった。

そしてティアマトが産み出した新たな敵ラフム。

雲霞の如く押し寄せる様はまるでイナゴのようだ。

すべてを侵食する泥、ケイオスタイド。

イナゴラフムの大量。

そして生命を生み出す原初の海そのものにして、惑星規模で既存の生態系を駆逐し新たなものに書き換える一種の生体テラフォーミングシステムとも言えるピーストII

《ティアマト》

はつきり言って勝ち目はない。

だが挑まなければならぬ。

人は自らの足で歩むものなのだから。

「……なんとか見せ場には間に合ったか？」

「アルトさん！」

『ええ!?!ラフム一万相手に生き残ったのかい!?!』

「ジャガーマンとか言うナマモノに助けられた。とは言っても満身創痍だけだな」

左腕は肩から先がなくなり、大剣も半ばから折れてしまってる。

「英雄王……あの母性愛を拗らせた化け物を一歩でも止められれば勝率はどれだけ上がる?。」

『無茶だ!そんな状態で……それに近づく足場もない!』

「足場なら五月蠅く飛び回ってんのがいるだろ」

「なるほど……ラフムを足場にティアマトめの元まで飛び移る腹積もりか。それだけの大口を叩くのだ。ティアマトめの歩み、見事止めて見せよ狂剣士！」

「言われるまでもない」

ラフムを足蹴に飛び移り、邪魔な奴は斬り捨てていく。

とは言え一直線にはティアマトの元には行けず、飛び移り、斬り捨て、次の足場を探し視線を巡らせる。

時間は掛けれない。

カルデアのマスターをウルクへと帰すためにラフムを相手取り、霊基に一撃をもらった。

消滅しようとする体を気合いで留まらせているが、刻一刻とタイムリミットは近付いている。

残り100……！

ギリギリ届くかどうかという距離だが、これ以上足場となるラフムはいない。

持てる全ての魔力を刀身の折れた大剣へと巡らせ、有らん限りの力で跳躍、ティアマトの顔面目掛け大剣を突き出す。

一步は無理でも、せめて数秒……！

そんな思いを嘲笑うかのようにラフムの一群が濁流のように押し寄せる。

ラフムの壁を抉り突き進むが、確実に勢いを殺されていく。

届かない……！

ラフムの壁を突破できたとしてもティアマトには届かない。届いたとしても歩みを止めるだけの威力がない。

なにもかもが半端の俺には当然の末路か……。

諦めが心を支配し掛けたその時、突き出した右手にまるで誰かの手が重ねられたような熱、そして抜け落ちていく魔力が満ちていく感覚。

咄嗟に右手に視線をやれば、金色の光を纏った黒衣の右手が重ねられ、その手を辿って視線を上げれば背中を預け共に戦った相棒の姿があった。

……世話が焼けるな相棒。

どんな声だったかとも思い出せないが、確かにそんな声が聞こえた。

魔力を噴出させ、推進力とする。

『届けえええ!!』

「見事ー!」

アルトさんが一条の光となってティアマト神の顔へと着弾し、その巨体が傾ぎ一歩、

そしてさらにもう一步と後退した。

「狂剣士アルト！ティアマト神の足止めという大役を見事に成し遂げた！大義である！」

それでもまだ足りない。でも皆が作ってくれた好機を無駄にはしない。

死闘はまだ続く

山の翁による死の概念の付与、エレシユキガルとマーリンの援護。

「火力に不安があるのか？ならば仕方ない。この我が手オレを貸そう」

「あ、あなたはー」

「サーヴァント、アーチャー。ギルガメッシュ、喧しいので来てやったわ。なあに、この程度の常識ルール破り、許容範囲というものであろう？」



「無事だったのですね、ギルガメッシュユ王！」

「フツ。空気を読んだまでの事。ここは冥界故な、些かの余地はある。それにここにいるのは我<sup>オレ</sup>だけではないぞ？」

黄金の後ろに控えるのは必要最低限の鎧に身を包み、全身を燻らせた異形の剣士。

「あなたは……！」

「サーヴァント、バーサーカー。神殺しと聞いて砕けた霊基を無理矢理繋げて来てやつたぞ。……まあ相棒の手助けもあつたが」

「相棒？」

「気にすんな……にしても原初の海ティアマト神が相手か。龍殺しに神殺し、その両方に挑めるなんてな。サーヴァントつてのも悪くない」

「ティアマトめの喉元に噛み付きそうな狂犬よな。神が相手と聞いて尚、猛るか」

「時代は巡るものだ。栄枯盛衰、盛者必衰、神の時代もいずれ終わる。人の時代もいずれ終わるとしても、神の加護がなくなるとも、人は自分の足で立って歩ける。それを示すための闘いだ。昂るなと言う方が無理だろ」

「まさか狂犬と意見が合うとはな。終幕の時だ。この一戦を以て鎮まるがいい」

ステータス (f g o 風)

真名：アルト (三神颯真)

性別：男性

属性：混沌・善・人

クラス：saber

レアリティ：☆4

カード配分：Q A B B B

Q : 3 hit    A : 4 hit  
B : 3 hit  
ex : 4 hit

L v M A X 時

HP : 12560

ATTACK : 11860

筋力 : A    耐久 : C    敏捷 : C    幸運 : A+    魔力 : D  
宝具 : C

スキル

悪辣の弁舌 : B

ターゲット集中 (3ターン)

防御力UP (3ターン)

防御力UP大 (3ターン)

リチャージ : 7?6?5

人体理解 (目) : A

人型特攻・特防状態を付与 (3ターン)

クリティカル威力UP (3ターン)

リチャージ : 8?7?6

双刃：A

攻撃ヒット数を倍にする（1ターン・攻撃力半減・スキルレベルに応じて威力UP）  
スター集中度UP（3ターン）

自身に毎ターンスター獲得状態を付与（3ターン）  
リチャージ：7？6？5

クラススキル

対魔力：B

状態異常耐性をUP

先見：A

敵全体のクリティカル発生率を大きく減少

狂化：C

バスターカードの性能を少しUP

宝具

バスター宝具

《ストレイド・アインクラッド闘争こそ人の可能性》

敵全体に人型特攻攻撃（オーバーチャージで効果UP）

敵全体の攻撃力と防御力down（オーバーチャージで効果UP）

スター大量獲得（30個固定）

「サーヴァント、セイバー。真名アルトだ。役割はタンク……って分からねえよな」

## ささやかな日常 過去編

「兄さん、おはようございます」

「藍子か、おはよう」

「兄ちゃんおはよう！」

「朝から元気だな木綿季、おはよう」

中学へ登校するため身支度を整えて朝食に舌鼓を打ち、食後の特製スムージーを飲んでいた所へ、ランドセルを背負った藍子と木綿季がリビングに顔を覗かせた。

「そういや、昨日は泊まったんだっただか。」

「あんまりゆっくりしていると遅刻するよ？」

「中学校まで自転車で10分、私たちよりも近いから大丈夫」

「そういうこつた。ほらさっさと行け」

「はい！行つてきまーす！」

「兄さん、行つてきます」

天真爛漫な木綿季と落ち着いた雰囲気な藍子。

「二卵性とはいえ双子でここまで性格に差が出るもんなのかね？」

「颯真」

「んー？」

次に顔を覗かせたのはお袋だった。

艶やかな黒髪を後ろで結び、パンツスーツを着こなし、少し慌てた様子。

「今日は非番だったけど、本庁に行かないといけなくなっちゃったの」

「親父も？」

「ええ。帰ってこれるのは夜遅くになりそうだから、藍子ちゃんたちの夜ご飯お願いね」

「あいあい了解。氣い付けて」

「颯真もね。それじゃ行つてきます」

つてことは帰りはスーパーだな。

まったく、非番だつつの警察官は多忙だな。

下校中スーパーの入り口で藍子と遭遇。

そのまま二人で買い物を買ませることになった。

「木綿季はどうした？」

「公園で学校の友達と遊んでいます」

「了解。晩飯のリクエストはあるか？」

「ハンバーグなんてどうでしょう？あの子も喜ぶと思いますし」

「お前は？」

「兄さんが作ってくれるなら、どんな料理でも完食します。例えばダークマターでも」

「んなもん作らねえよ。これでも煮る焼く炒めるはきんだ」

「男の料理ですね。分かります」

「の……」

「兄さん、挽き肉は赤身が多くて色味が鮮やかなものを選んでください。玉ねぎは表面の皮に傷がないもの、硬く締まって重みのあるものを」

「へいへい」

「どっからそんな知識を仕入れてんだか。」

「花嫁修行です」

「ナチュラルに思考を読むな。それにまだそんな歳じゃねえだろ。」

「玉子はまだあつたな」

「それならパン粉と牛乳です。牛乳に浸したパン粉を使えば柔らかいハンバーグが作れます」



固い方が肉を食ってる感があって好きなんだけど……まあ子供受けする方が木綿季も藍子も喜ぶか。

そんなこんなで買い物を済ませ藍子と共にキッチンで調理開始。

「ハンバーグは形を整える前にちゃんと空気を抜いてください。割れる原因になります」

「へえへえ」

何でお前の方が手際がいいんだ。

妬んでる訳じゃない。絶対。

「新婚さんみたいですね」

「ブツ！」

「唾が飛びます」

「お前が変なこと口走るからだ！」

「私にもつと身長があつたらそう見えるだろうな、と思っただけです」

「初めからそう言え！ いや、だとしても新婚はない！」

お互いそんな歳じゃねえ！

「たっだいまー!」

「おう、お帰り……って泥まみれじゃねえか。藍子は続きを頼む。木綿季は玄関で待つてろ。タオルに乗せて風呂場まで運んでやる」

タオルの上に座らせ脱衣所まで引つ張つて運ぶ。木綿季の服は別で洗濯だな。まったく。

夕飯を食つて洗い物も済ませ宿題も終わらせた。

あとは自由時間。二人はテレビなりゲームなりで時間を潰させて俺は読書だ。

《ジークフリートの英雄譚ニールンゲンの歌》がいいところなんだよ。

ちなみにニールンゲンの歌は前半がジークフリートの英雄譚で後編が殺されたジークフリートの嫁であるクリームヒルトの復讐譚だ。

「兄さん、木綿季も寝たので私も寝ますね」

「……おう」

ぺらり

「そろそろ兄さんも部屋に戻った方が」

「そうだな」

ぺらり

「兄さん」

「聞いている」

「はあ……」

ふと左肩に重みを感じ視線を向ければ藍子の頭が乗っかってた。

「なにしてんだ」

「いえ、どんな内容なのか気になったので」

「英雄譚だしな。お前には難しいぞ」

漢字だらけだし、女子供には難しいだろ。

その前に肩に頭を乗せるな。

「兄さん、どうしてタブレットで読まないんですか？」

「本つてのは文字を読むだけじゃねえ、紙の臭いやら肌触り、ページをめくる音だったりを楽しむもなんだよ」

スマホで文字を読むより紙の方が頭に入ってくるのは、そういうのが理由だったりするらしい。

文字の情報だけじゃなくページをめくる指の感触だとか、覚えようとする情報に他の情報が紐付けされるから、らしい。

まあ親父の受け売りだけど。

「どうしてジークフリートは死んでしまったんですか？」

「義兄と嫁が対立して、戦争を防ぐためにはジークフリートが死ぬしかない状況に追い込まれ、そして暗殺された。簡単に言えばこんなところだな。人々の願いを叶えてきたジークフリートが最後に願われたのは自身の死とはなんとも皮肉だな」

英雄は怪物を殺すが、英雄を殺すのは人であり、その人を殺すのは怪物である。

大抵の英雄譚は最後には守ってきた人々に殺されている。よほど人望がなかったのか、その力を恐れられたか、もしくは女絡みだったりする。

「人は身勝手ですね」

「まあな。とはいえ小学生が読むようなもんじゃねえし気にすることでもねえ。さっさと寝ろ」

「それではお休みなさい」

「おう、お休み」

「あ……そうだ兄さん」

「ん？」

「なにがあろうと私は兄さんの味方です」

「そういうフラグを建てるな」

「というか俺がしでかすこと前提かよ。」

「兄さんは何かと勘違いされやすいですから」

「うるせえよ、ガキが要らねえ心配すんな」

悪戯が成功した子供のような顔でリビングから出ていく藍子を見送り、ため息を溢す。

「まったく、子供は子供らしく自分のことを考えてりゃいい。それを見守るのが年長者の務めだからな。」

「なにせ俺は、お前らの兄貴だしな」

「あいつらが真つ当な道を進めるように俺が道を踏み外す訳にはいかねえだろ。仮にも警察官の息子が。」

さて、親父たちがいつ帰ってきてきてもいいように夜食でも作っておきますかね。

## 起源（ルーツ）

「なあ親父、どうしてもスーツで行かなきゃダメか？」

『ドレスコードがないとはいえ最低限の礼儀はある。それにお前の私服にはセンスがない』

「実の息子に言うことか？」

『胸にバスターだとかアーツだとか書いてるシャツが格好いいと思ってる内はな』

「いや、あれ部屋着なんだけど」

テレビ電話で久々の親父と顔を会わせた。

遅れ馳せながら親父が予約したレストランで大学入学祝をすることに。

「あ、お袋から聞いたけど昇進したんだって？おめでとう」

『……直接会って話そうと思ってたんだが……母さんめ口の軽い』

「親父が固すぎるだけだって……ああネクタイが絡まった」

『普段から練習をしておけば苦労はしない』

「それもそうなんだけど……ゆくゆくは警視正？」

『いや、人の上に立たなければ見えないものもあるが、同時に見えなくなるものもある。』

私は、その見えなくなるものを大事にしたい』

「見えなくなるもの？現場の状況とか？」

『それもあるが大事なのは人の心だ。人が何に苦悩し犯罪に手を染めてしまうのか。私たち警察官は犯人を捕まえることだけが仕事じゃない、その苦悩から解放する手助けすることもある』

「つまり犯人の心を救う？」

『私は人の善性を信じる。例え悪の道へ逸れてしまったとしても、その心を救うことが出来たのなら必ず真つ当に生きてくれるはずだと』

「……ふふ」

『どうした？』

「いや、親父の息子で良かったって再確認しただけだよ」

髪もワックスでセットしようとも思ってたけど、なかなか決まらず結局オールバックに。

『……堅気に見えないな』

「おい、親」

四苦八苦しながらネクタイを締め直し、スーツの袖に腕を通してみるが着せられてる感が半端ない。

『馬子にも衣装だな』

「誉め言葉じゃないから」

『そういうえば大学の方かどうか？上手くやっていけそうか？』

「入学してまだ1ヶ月しか経ってないんだけど……まあ上手くはどうかは別にしてやっていけそうだよ」

『……警察官にはならないか』

「親のコネで警察官になつたとか言われたくないし……俺はさ、世界を見たい。そのあとは宇宙<sup>ソラ</sup>を目指したい。いずれは親父たちを連れて行ければなつて」

『……お前は私たちの想像を飛び越えて行くな』

「今までは親父たちの期待に応えるのが楽しみだったから。これからは、その期待を越えられるようになって心を入れ換えたいわけですよ」

果てのない宇宙<sup>ソラ</sup>。

そのステージに立てれば、人類は新しい歴史を刻むことができる。

そう考えただけでも胸が踊る。

『そうか……なら、盛大に祝おう』

「了解……にしてもよく予約取れたね。あのレストラン、前にも一緒に行ったけど結構な人気のある場所だった記憶があるんだけど」



『言つてなかったか？あそこのオーナーは高校時代の後輩だ』

「うわ、思いつきりコネじゃん」

『伝手はあつて困るような物じゃない。颯真も誰かとの繋がりは大事にすることだ』

「なあ親父……いや、直接会った時に話すよ」

『浮わついた話か？』

「なわけない」

『私に似て顔は整つてるんだ。真摯に向き合えば結果は後からついてくる』

「息子をダシにした自画自賛ですか」

『私と母さんの出会いをー』

「物心ついた頃から聞かされてるよ」

結婚して何年も経つてるのに新婚のように距離が近い。

それを見てるこつちの身にもなつてほしい。

『そろそろ母さんも帰ってくる。今日はなにがなんでも定時で上がるって言つてたからな。全く親バカだ』

「前日から休み取つてる親父が言える立場じゃないだろ？」

『息子の大事な祝い事だからな。私も無理を言つて休みを取つたんだ』

「親バカは親父も一緒……つと準備完了」

『そうか。なら母さんを迎えに行ってくる。待ち合わせ場所は駅前だ』

「分かった。運転には気を付けて」

『勿論だ』

少し早く来すぎたかな。

約束の時間まで二十分近くある。

着慣れないスーツを気にしながら両親を乗せた車を待つ。

お袋と親父に直接顔を合わせるのは大学へ入学したとき以来になる。

お袋からは毎日のようにテレビ電話が掛かってくるし、親父からも同じようにメールが届く。

よくもまあ話題が尽きないものだと思えながら、嬉しくもあつたりする。

マザコンファザコンと揶揄されるかもしれない。

元々、排他的なきらいのある性格が起因していると自覚しているが、あの人たちの存

在はそれだけ大きい。

自らの正義を貫く両親の背中を見て育ち、いつかあの背中を越えられるように教養を深め、体を鍛えた。

自分の夢を貫けた時、あの背中を越えられるだろう。

東都大学入学もその足掛かりにすぎない。

より多くの知識、技術を身につけて世界を回る。

いずれは宇宙<sup>ソラ</sup>へ。

それが俺の夢。

「あ……来た」

遠目に見えた一台の乗用車。

少しずつ乗っている両親の顔が見え、駅前<sup>駅前</sup>の駐車スペースへ入ろうとしてー

その横からトラックが突っ込んだ。

トラックに押されるままビルへ叩き付けられ、その勢いそのまま押し潰される。

ひしやげる車体、砕け飛ぶ破片、行き交う人々の悲鳴と衝突音が酷く遅く感じる。

俺の全てはその日、なんの前触れもなく失われた。

事故の原因はトラック運転手の虚血性心疾患。

コントロールを失ったトラックは不運にも俺の両親が乗った車へ突っ込み、重症軽傷合わせ二十名、トラック運転手及び俺の両親合わせ三名死亡。そして両親の遺体は原型を留めないほど損壊していた。

「――それで遺産の分配なんだが――」

「――あなたたちは十分に稼げてるんだから――」

「――あの子を引き取った方が手っ取り早い――」  
 ピシリ、と何かがひび割れる音が聞こえる。

「――随分稼いでみたいだな――」

「――優秀な人間だけが稼げるのよ――」

「――死んでありがたがられるのも珍しい――」

バキリ、と何かが外れる音が聞こえる。

「――これで清々するな――」

「――ああ。自分の考えを押し付けて――」

「――馬鹿な正義感を振りかざして――」

ガラリ、と何かが崩れる音が聞こえる。

両親の葬儀に参列した親戚一同の声に何かが抜け落ちていく。聞こえていないとでも思っているのだろうか。

「なあ颯真くん」

掛けられた声に顔を上げれば、嫌な笑顔を張り付けた親戚<sup>赤の他人</sup>。

「君さえ良かったらウチの子にならないか」

「おい、あいつ抜け駆けして――」

ああ、そうか。こいつらは――

ヒトの形をしたケダモノだ。

拳が顔面に突き刺さり、前歯を折る感触が伝わる。

「颯真くん！落ち着いて！」

聞き慣れた声と共に羽交い締めにされるが知ったことか。

「何しやがる！」

「へえ……前歯がなくても喋れんのか。安心しろ、前歯なんざなくても物は食える」

突然の凶行に葬儀所は静まり返り、親戚を名乗る乞食共も両親の仕事関係者たちも信じられないものを見る目で俺を見ていた。

「警察官の息子が市民に暴力を振るって良いのか!？」

「市民？笑わせんな！糞に集るハエみてえに集まってきたケダモノ共が！親父たちの死を悔やむこともしねえで金金金！テメエらには人間性の欠片もねえ！ただの亡者だ！」  
俺を引き取ると言い出したのも、俺に相続される遺産目当てなのは考えなくてもわかる。

薄っぺらい善意を振りかざし、欲望の赴くがままに搾取し食る。

それが罷り通る正義なら、そんなもの俺はいらない。

「金が欲しいんだろ!?!ならこれを持ってさっさと失せやがれ！あの人たちが遺した物には指一本も触らせねえ！」

参列者たちから手渡された水引を床に叩き付けてやれば、非難がましい目をしたまま親戚を名乗る乞食共はそそくさと会場から出ていった。

しっかりと水引は持ち去りながら。

結局残ったのは仕事関係者と――

「紺野さん……」

「……颯真くん、気持ちは確かに分かる。けれどね、手を出してしまえば彼らと変わらない。暴力じゃ何も解決しない」

「……始めましょう。お騒がせしてしまい申し訳ない」

葬儀は淀みなく終了。

火葬も終わり、あとは骨壺を持って帰るだけ。

だというのに体が鉛のように重く動かない。

火葬場から動けず、ベンチに座ってからどれだけ経っただろう？

二つの人影に顔を上げれば、妹分の双子が大粒の涙を流したまま立ち尽くしていた。

「お前ら、いつまで泣いてんだよ」

「兄ちゃん、んが、泣かな、いからだよ……」

「……泣いてるさ」

「泣いて、ない、です」

「兄ちゃんずっと怖い顔してるもん」

そう言われ窓ガラスに写る自分の顔を見る。

目は射殺さんばかりにつり上がり、全てが敵であるかのように睨みを利かせている。

明らかに堅気の顔じゃない。

「悪い。今は一人にさせてくれ」

「兄ちゃん……」

「兄さん……」

裏路地に鈍い音が響き、うめき声と共に人影が崩れ落ちる。

「も、もうやめてくれ……」

「おいおい、先に喧嘩吹っ掛けてきたのはそっちだろうが」



左腕で無理矢理立たせ、顔面に右の拳が刺さる。

最後の一人も先に転がって三人同様、地面に沈む。

あの日以来、全てが灰色だ。

あの日以来、喧嘩に明け暮れてる。

「足りない……」

あの葬儀の日、顔も知らない誰かを殴ったあの瞬間に俺の中でなにかが目覚めた。

喧嘩の度に感じる高揚感。

相手を打ちのめした時に感じる達成感。

与えられる痛みが、誰かを殴った感触が俺に生きてる実感をくれる。

受信を知らせるスマホの振動に相手も見ず電話に出る。

「はい、三神です」

『颯真くん、少し話がある』

「話はなんですか、紺野さん」

呼び出されたのは紺野さんの自宅。

都内から横浜まで電車を乗り継ぐことになったが、別にどうでもいいな。

「……随分寡やっれてるね。ちゃんと休めてるかい？」

「俺の体調なんて貴方には関係のないことだ。この程度で死ぬなら俺はその程度だった、それだけでしよう」

「君は——」

「All, s right with the world。誰がいなくなつたとしても世界は回る」

命を軽んじるつもりはない。

だが結局は早いか遅いかだけの話だ。

「颯真くん——」

頬に走る鋭い痛み。

熱心なクリスチャンであり、誰よりも暴力を嫌う紺野さんの平手打ちに脳がフリーズする。

「君は！ 投げ出すつもりかい！？ 今まで積み上げてきたもの全て——」

「俺にとつて！ あの人が指針だった！ 俺が思い描いた夢もあの人たちを越えるために——」

「自分が進むべき道は自分で決めなさい。確かに君の理想と思想は立派だ。しかし進む

べき道も生きる理由もご両親に依存し過ぎた。これは試練だ。君自身の足で立てるか  
どうか」

「……………夢に見るんですよ。潰れていく車の中、親父たちの顔が」

その夢を見る度に声をあげて飛び起きた。

そうしていく内に眠ることができなくなっていた。

灰色の世界の中、生きている実感を得るために喧嘩に明け暮れた。

「大学から電話があつてね。無断欠席に暴力沙汰、私も耳を疑ったよ。確かに君の心の傷は私にも計り知れない。でもね、それを理由に投げ出しちゃいけない。逃げないで向き合いなさい」

「はい……………ひとつ聞いてもいいですか?」

「……………そうだね。きつと誰かの正しさは誰かの理解を遠ざけるものなのかもしれない。でもあの人たちは誰かに強いられたものではなく、誰かに共感したものでもなく、ただ真つ直ぐに自分たちの正しさを貫いた。その事実は君がよく知っているはずだ」

理解も共感も必要ない。ただひた向きに己の信じるもの、信じたものを最後まで貫き通す。

それが、親父たちの正義……………。

「兄ちゃん……………」

「兄さん……」

「藍子……木綿季……」

「兄ちゃんはまだ生きてるよ？だから……だからあ……」

「叔父さん、叔母さんの分も立って歩いてください。辛いときは何時だつて支えますから」

涙で顔をぐしゃぐしゃに濡らす双子を抱き寄せ、声をあげて泣いた。

堰を切ったように溢れ出す涙を止める術を知らず、ただ感情のまま赤ん坊のように泣いた。

その後、親父たちの家は紺野さんが管理してくれることになった。

いずれ俺が帰るべき場所となるように。

けど、俺はまだあの家に帰るつもりはない。

両親が俺を自慢の息子だと誇れるようになるまで。

俺が俺の意思を貫けるようになるまで。

それまでは少しお別れだ。

それから数ヶ月後

「何はともあれ恩人、になるのか？俺はアルトだ」

「逃げた先が一緒だっただけだよ。俺はキリト」

俺にはない強さを持った奴と出会ったのだ。

おまけ

東都大学内 とある研究室

「ああ！電源が落ちた!?!どうして……………パソコンのコードが抜けてるんすけど!?!誰かの知らないツスか!?!」

「あ、悪い。足、引っ掛けた。わざとじゃない、許せ」

「なにしてんスカ！三神颯真！」

「何故にフルネーム？」

「データが全部吹っ飛んだんスカけど！どうしてくれるんスカ!？」

「前提を間違えた研究データなんて、役に決まってんだろ」

「つまりこういうことかしら？前提を間違えたデータを指摘するのが面倒だったから電

源コードを抜いた」

「まあな、神代隼子そばかす」

「やっぱり、わざとじゃないスカ！」

「いちいち騒ぐな、比嘉健アニオタ」

「変な呼び名を付けないで欲しいツス！」

## アインクラッド編

### 第1斬：七十四階層迷宮区攻略―前哨―

このゲームがデスゲームとなつてから二年に差し掛かろうという今日この日。閉じ込められた一万のプレイヤーも六千人を切るのも時間の問題だろう。

「この調子で百層到達時には何人残つてることやら」

「そんなこと言わないでくれ。気が滅入る」

俺ことアルトの眩きにゲンナリとした調子で、隣に座るキリトがぼやく。

基本ソロで動くことの多い俺たちは、七十四層主街区の転移門前でとある少女と待ち合わせをしているのだが、一向に姿が見えない。

何度か転移してくる奴も居るが、待ち合わせ相手じゃねえから一瞥して終了。

立ち上がり背負った背丈程ある両刃の「大剣」を揺らしながら周囲を見渡すも件の相手は見つからず。

俺が背負つてる「大剣」は「両手剣」のエクストラ<sup>上</sup>スキルである。火力こそ高いものの必要STR値が高く、武器自体も「両手剣」よりも重い。だから出現条件が開示されても、「大剣」を使っているプレイヤーは少ない。

使ってる奴も、パーティを組んで遊撃役だろう。

だが俺は、チマチマと攻撃するのも性に合わねえからコイツ大剣を使ってる。

それはそれとして

迷宮区の探索がしてえっーから待ってるのに音沙汰すらねえってのはどーなのよ。

ガジガシと黒味の強い灰色の髪（染色ではなく自前）を乱暴に掻き、俺ら二人を待たせてる相手にメッセを送ろうとした時だった。

「きゃあああ!?!ど、どいてええ!?!」

「わぶっ!!」

転移の光と共に飛び出てきた白い影（影なのに白とは此如何に）がキリトを押し倒し、揉みくちやのまま地面に倒れ込み数秒。

「……っ!嫌あああ!!」

「げふう!!」

白い影一面倒だからアスナーの実に見事な平手打ちがキリトの頬に炸裂し、砲弾の様にぶつ飛ぶキリトを受け止めることはせず、転移門を取り囲む支柱にぶち当たったのを確認、アスナーに視線をやれば自身の体を抱き締め、顔が赤い。

ああ、いつラッもキースのあれスヶか

「ようアスナ。胸でも揉まれたか?」



「アルト君!! デリカシーがないよ!!」

茶化すように声を掛ければ、烈火の如く切り返される。

キリトもキリトで右手の感触を確かめ「や、やあ」と吃りながら声をかける始末。

正直に言おう、変態かと。

このままでと埒が明かねえから、キリトの首根っこを猫のように掴み上げようと手を伸ばしかけた時、再び転移エフェクトが現れ光が収まれば白い鎧―血盟騎士団の鎧―に身を包んだ三十代後半から四十代半ばほどの男。

……なんと言うか不健康そうと言うか、神経質そうと言うか、粘着質、ストーカー気質、まあそんな属性を盛り込んでそうな男は周囲を見渡し、俺とキリトの後ろに隠れたアスナを見つけヒステリック調を声をあげた。

「アスナ様、勝手なことをされては困ります。さあギルド本部へ戻りましょう」

「嫌よ! 今日とは活動日じゃないし、それよりもどうして朝から私の家の前に張り込みでるのよ! 団長からはそんな指示はありません!」

「勿論、団長の指示がなくとも私の判断でアスナ様の護衛の為、一ヶ月前から張り込みの任務についております」

現行でストーカーだよ、コイツ。しかも判断じゃなくて独断な。

珍しくアスナもキレ気味だし、これ以上予定を先送りにするのもあれだ。

「そこまでにしとけよオッサン。今日一日、オタクの副団長殿は俺ら二人の貸しきりだ。団長殿にもそう伝えてる筈だがな」

「そ、そうよ。団長からも許可は貰っております。ですのでクラデイル、貴方の護衛は要りません」

俺の意図に気付いたアスナの同調にストーカーもといクラデイルは頬を引き吊らせて、アスナの腕を掴むという強行手段に出ようとするが、俺ら二人相手じゃ遅すぎる。「アルトも言っていただろ？今日一日貸しきりだって。アンタよりもレベルが十は上の俺たちの方が護衛に向いてるんじゃないのか？」

「キリトー、独占欲バリバリじゃん？」

「茶化すなー」

コントしつつもクー、クラ？クラゲ？の足を俺が払い、キリトが体勢を崩した奴の腕を絞め上げながら、拘束する。

立ち上がるうともがいているようだが、STR値は俺程振ってないにせよ、相手はキリトだ。拘束を振りほどくことも出来ねえだろ。

「不意討ちとは汚い真似をオ、正々堂々と出来ないのか！」

「意表を突くは勝負の常。そんなこと言ってるなら武器なんぞ使わねえで男らしく素手で来い」

「お前のSTRで殴られたら首から上が無くなりそうだよな」

まあ確かにほぼSTR極振りと言える俺のステータスで殴れば確かに首が飛んでいくだろう。リアルならな。

まあそんな事どーでもいいんだよ。

「まあそういう訳だオッサン。金輪際アスナの前に現れるなよ?」

「アルト君?」

「アスナ、結婚する相手はちゃんと気を付けろよ?独占欲が強い奴は、例え顔見知り程度の男でも近くに居るだけで爆発すつから。あんな風に」

「何の話?!俺とアスナはそんな関係じゃないからな!」

キリトを指差しながら言つてやれば、キリトが噛み付いてくる。

アスナは「結婚?キリト君と?」なんて頬を染めてトリップしてる始末。

我ながらどうしてこうなった。

時間は流れて、迷宮区のマッピング中。

あの後、激昂したクラゲ野郎とキリトが何故か決闘。

【両手剣】の突撃スキル【アバランシユ】をキリトが軌道をずらしたソードスキルで迎撃。クラゲ野郎の武器を破壊して終了と相成った。

クラゲ野郎はアスナ直々に解任命令を受け本部待機。

プライバシーの侵害等でペナルティを与えなかつただけ温情だろ。

個人的には黒鉄宮にぶち込んで欲しかったが。ああいう奴は逆恨みしやすいし、今回の原因でボス攻略中に後ろからグサリは嫌だしな。

「腹あ減ったなあ」

「もう、アルト君つたらさつきからそればかり」

「せめてボス部屋が見つかるまで、我慢してくれ」

「もうやだこの効率厨。脳死プレイヤーでも可」

「喧嘩だな？喧嘩売ってるんだな？」

文句タラタラだが、マツピングはほぼ八割方出来たと言ってもいいだろう。今歩いてる道もRPGお馴染みのボス部屋までの一本道。

周りの風景の変化からそうアテをつけるが、あなが強ち間違いじゃねえだろ。

ボロボロに擦りきれた赤い外套を宙に踊らせ、右腕一本で振るった横一閃の一撃は容易く《デモニツシユ・サーバント》の盾受けを崩す。

アスナが防御の崩れた相手の体勢をさらに崩し、キリトがトドメ。キリトが仕留めきれない場合に俺が備える事もあるが、大抵は初撃の崩しで終わっちゃうから、ぶっちゃけ暇。

ソロの方が経験値ウハウハだが、パーティを組んでマツピングが目的だし楽が出来ると言いつ聞かせる。

因みに俺の装備はとあるボスのドロップ品で、革製の防具の下にチェインメイルを着込み、肩当ては左だけ、籠手も着いているが右籠手に至っては肘から手首までという軽装。防御力よりも動きやすさに重点が置かれているそれは、やはりダメージカット率はさほどよくはない。

だがAGI値の補正が高く、さほどAGIに振つてない俺でもキリトと渡り合えるのだから、レベルだけじゃなく装備の組み合わせも重要なんだろう。

それと外套がボロボロなのは最初からで耐久値の限界と言うわけではない。

……誰に言い訳してんだろ。

そんなこんなで、如何にも扉の前。

この中のボスの強さは如何程か、知らずのうちに口角が上がってしまう。

クオーターポイント毎に強力なボスが配置されていることから、七十四階層という事を考えても他の階層主よりも手強いことは確かだろう。

討伐が目的じゃないが、最低でもボスの使用武器と行動パターンの収集、攻撃時の癖など確かめる必要があるため、軽い交戦は仕方がないだろう。

まだ誰も戦ったことのない相手と一戦交えるというのは、不謹慎だがワクワクするな。

「行くぞ」

キリトが彫刻の掘られたボス部屋への扉を開け放った。

## 第2斬：七十四階層迷宮区攻略

キリトが扉を開ければ、青い炎が部屋の中を照らし輪郭だけだった部屋の中央に鎮座する石像を照らした。

否、あれこそがこの階層の主だろう。

山羊の頭にボディビルダー真っ青の筋骨隆々の体。

腰からは蛇のような尾が生えている。

手には無骨な大剣。物理攻撃型のボスであることは予想はできる。

「誰も挑んでない相手と戦う。血沸き肉踊るって奴だな」

背負った大剣〔フアラン〕を引き抜き、右手で肩に預け相手の動きにいつでも反応できよう、集中力を高めていく。

HPバーは六本。その上に表示された名は〔The Gleameyes〕。

【輝く目】もしくは【光る瞳】。

パツと見悪魔をモチーフにしてるであろうモンスターにしてはイカす名前だな。

「転移結晶をいつでも使えるようにな？ 少しでも危険を感じたらー」

転移で逃げろ、と続けようとして被せて来るように咆哮。

ビリビリと空気の衝撃波が走り抜け、グリーンムアイズが臨戦態勢に移行したのが分かる。

「キリト、アスナやるしかねえ。ダウンさせてその隙にー」

「いやああああ!!」

「うああああ!!」

「はい?」

後ろを振り向いてみれば、奇声と共に遠ざかって行く見慣れた後ろ姿が。

置いて行かれた!?

「.....」

正面に向き直れば、心なしか気まずそうなグリーンムアイズの姿。

「に、逃げる訳じゃねえからな!準備もせずソロで戦えるかあ!」

伝わるはずもない捨て台詞と共に突き出された巨剣を振り上げた「フアラン」で軌道をずらして、ボス部屋の外へと恥も外聞もなく転がり出る。

ボスは共通してボス部屋の中からは出てこない。つか、出てこれるなら、茅場の顔面を陥没するまで殴ってやる。

ボス部屋解放と同時にエリアを徘徊する階層主。

無理ゲーだったっの。



敵前逃亡をやらかした二人はボス部屋から五分程離れたモンスターが侵入できない安全エリアで仲睦まじく肩を並べて、休憩してやがった。

「敵前逃亡は重罪。尚且つ独り身にリア充振りを見せつけた。裁判なしの極刑だ」

「俺だけ!？」

予備動作なしからの振り下ろした一撃は、攻略組の中でもまともに反応できるのは僅か一握り。

その中で完全に脱力していた状態で、間一髪とはいえ魔剣【エリユシデータ】を引き抜き、防ぎきったキリトの反応速度がいかに飛び抜けてるか嫌でも分かるだろう。

「はいはい二人とも。じゃれ会うのはそこまでにしてお昼にしよう?」

「アスナさん!?!危うく俺、真つ二つになるとこだったんですけど!?!」

アスナの奴、大分イイ性格になってきたな。良いではなくイイ。そこがミソだ。

キリトの方も俺が本気で攻撃してるきてる訳ではないのを知ってるから、それ以上

ツツコミを入れることなく、アスナの隣にまた腰を下ろした。

「はい。前にアルト君から注文があったB L Tサンド」

二人の正面に腰を下ろして、受け取ったB L Tサンドを頬張る。

「オーロラソース味、完成したんだな」

「ちよつと時間が掛かつちやつたけどね」

知ってる人も居ると思うが一応解説。

アスナは【料理】スキルを完全習得コンプリートしたことで、調味料の制作と味覚パラメーター可視化によってリアルでの調味料に近い味が作れるようになったのだ。

・・・誰に言ってるんだろ。

因みにオーロラソースとはマヨネーズとケチャップを混ぜ合わせたソースで英語のオーロラではなく、明け方を意味するフランス語のオーロラが由来らしい。

マヨネーズとケチャップが混ざりあった色合いが明け方の空に似ていることからついたそうなの。

完全に蛇足だな。

逃げた理由の問い詰めは面倒だから、取り敢えず初見での情報開示といこう。

「体格からするに物理メインのボスだとは思いますが」

「ブレスもあるだろうね」

「蛇の尾っぽも生えてたから、後ろに回り込めば安心、とはいかねえだろうな」

「後ろも正面も危険度はあまり変わらないみたいだな。となるとセオリー通りにタンク役が剣の攻撃を受け止めて、その隙に削るのが妥当か」

「……人付き合い苦手なくせに攻略とかそういう話になると饒舌になるよなキリトつて。」

「盾持ちが十人は必要だろうな。それもSTR特化の奴」

「ローテを組まないといけないから、最低でも三十、贅沢を言えば四十人必要だ」

「盾と言えばキリト君はどうして盾を持たないの？片手剣のメリツトつて盾を持てることでしょ？」

生存率重視のアスナらしい質問だな。俺も気になってたし、丁度よかったか。

「い、嫌ーそれは、その……」

頬を掻いて目を泳がすキリト。

怪しい。疑ってくださって言うてるようなもんじゃねえか。

アスナもジトーと擬音が付きそうな目で見てるし。

「ふーん。まあいいわ。スキルの詮索はマナー違反だしね」

「スイツチもPOTローテも知らなかったご令嬢がこんな立派に……」

「アルト君!!」

感極まって泣いたフリをすれば、顔を真っ赤にしたアスナに怒られ、ウンウンと頷くキリト。

「甘いな、人をからかう事に全力を尽くす俺が隙を見逃すはずがないだろ。」

「厨二だったキリトが今や攻略組のトッププレイヤー。爺は嬉しゅうて涙が出ます」

「何歳だお前!?!それに俺は厨二じゃない!!」

「ツツコミのテンポが悪いな。お前はノリツツコミで対応するべきだ。アスナを見習え」

「まさかの駄目出し!?!」

「二人とも本当に仲が良いね。ちょっと妬けちゃうかも」

放課後の教室でするような馬鹿話がしばらく続き、後ろから掛けられた声もあえて無視する。

「・・・無視しないでくれよう」

「「リーダー!?!」」

「よう、クライン暫く振りだな」

年甲斐なくいじけ始めた赤い野武士、クラインを見るのも飽きた。

年上相手にはそれ相応の敬意は払うが、クラインは別だ。敬ってほしいと言うなら、女相手に鼻の下を伸ばす癖をやめろ。

「アルトよう。俺あお前さんになにもしてないよな？嫌われることなんてしてないよな？」

「当たり前だろ。だから抱き付くな」

正確には足にすぎり付いてるんだが、男に密着されて喜ぶ野郎はいねえ。

STRにものを言わせて、右足を振り回すがクラインが剥がれねえ。こいつ妙なところで変な技を。

その後、クラインがアスナにお見合いめいた自己紹介をして「心に決めた相手がいますので」とやんわりと断られてたな。

キリトも地味にダメージを受けてたみたいだが。

ふーん。

「まあ元気出せ。初恋つてのは往々に実みのらない」

「初恋なんかじゃない」

肩を組んでからかうように言ってるやれば、思い詰めた表情で呟かれた。その顔はどこかで見ることがあつて。

・・・ああ、あのクリスマスの時の。

「悪い。流石にデリカシーが無さすぎた」

「いいさ。受け止めて折り合いをつけなきゃいけないことだから」

まあ多少、前に歩き出したわけだ。

良い傾向だな。過去を振り返るならまだしも、囚われてちゃ目の前のものも見えなくなるからな。

マッピングも粗方終了ということで、クラインのギルド【風林火山】と共にまだ踏破していない部分をマッピングしてから、街へ戻ろうとクラインの提案をアスナが了承。

キリトはクラインに思うところがあるのか、あまり良い顔をしなかったが。

「厄ネタが来たな」

取り敢えず、入り口への道に戻ろうと踵を返して見えたのが統一された防具に身を包んだ四十人ほどのプレイヤー。

【アイ<sup>A</sup>ンク<sup>L</sup>ラッド<sup>F</sup>解放軍】、【軍】と略称される奴等だろう。

「あまりややこしくするなよ？特にクラインとアスナ。アスナは【血盟騎士団】の副団長。クラインは言わずもがな。【軍】とのいざこざはギルド同士の衝突に発展しかねえ」

「了解」

「あたぼうよ」

「アルトって頭が良いのか悪いのか分からなくなるときがあるよな」

「頭の出来と趣味趣向は別ってただけだ」

キリト、後で埋めてやる。

【軍】の連中が、俺たちの前で立ち止まるとリーダー格らしき男の「休め」の声と共にその場に座り込んでしまった。

安全エリアとは言え不用心すぎる。連中の様子を見るにマトモな休息をしないまま迷宮区を探索でもしてたんだらう。

ここはゲームの中だから肉体的な疲れはしなくても精神的な疲労は溜まる。その疲れを溜めたまま、迷宮区の攻略なんて自殺行為だ。

「私は【アインクラッド解放軍】コーバツ中佐だ。君たちはこの先のマッピングは終了しているかね？」

あ？

「終了している場合、そのマッピングデータを提供していただきたい。これは要請ではなく命令である」

提供じゃなくカツアゲの間違いだろ。一層にいるあいつから話は聞いていたが、横暴にも程がある。

「な、なんだそりゃ!? あんたらマッピングの苦勞は知ってるはずだろ!? それをタダで寄

越せなんざ虫が良すぎるじゃねえか!」

「我々はアインクラッドに囚われたプレイヤーの解放のために戦っているのだ。君たちには我々に協力する義務がある」

「八割方のマッピングでよければ」

「キリト!?!」

「いいんだクライン。どうせ街に戻ったら無料で公開するつもりだったし」

確かに。好きに探索して得たデータで一儲けなんざ、それこそ虫が良すぎる。何よりアスナが許さねえだろ。

「俺も賛成だ。マッピングデータでなくとも稼ぐ手段なんざ幾らでもある」

俺がクラインを宥めてる内にキリトはコーバツツにマッピングデータをの送信を終了。

マッピングデータ一つでいざこざ無しで終われるならその方がいいだろ。お互いな。

「協力感謝する。行くぞ! 貴様ら!」

コーバツツの喝にノロノロと腰をあげる【軍】構成員。

だいぶ疲労が溜まつてるな。まさかこの調子でボスを攻略なんざしねえよな?

「二つ忠告しておく、一目だけボスを見てきた。今のあんた達じゃボスの攻略は絶対に



できない一度本部に戻って作戦を起してからの方がー」

「我々【軍】はそこまで軟弱ではない!!」

重々しい行軍の足音が遠ざかって行く。

「なああいつら本当にあの調子でボスと戦うつもりじゃねえよな?」

「キリトが注意も警告もした。その上であいつらが死んだら、コーバツツって奴の判断

ミスだ。俺たちが気にすることじゃねえよ」

「口ではそんなこと言いつつ、その足はボス部屋へ向かっていたのでしたまる」

「キリト、後でもぐ」

「ナニを!?!」

## 第3斬：二刀流と特双剣

「なあ【軍】の連中もう帰っちゃまったんじゃないのか？」

クラインの言う通り後はボス部屋へと続く一本道だけだ。

コバ なにがし 某が的確な判断ができていいるなら、転移結晶を使つてすでに引き上げている可能性もある。

「もしそうならレベル上げがてら街に戻れば良いだけだ」

まあ、あの様子なら引き上げている可能性は低いだろうな。

【軍】の連中は凝り固まったプライドの塊のような奴等だ。キリトの忠告でプライドを刺激されたら是が非でも行動に移すだろう。

その結果がどうなるか、最悪の可能性すら考えることなく。

最初と同じように骸骨剣士《デモニツシユ・サーバント》を蹴散らしながら、ボス部屋の前まで到達する。

「うあああああああ．．．」

消え入りそうな悲鳴が響きボス部屋から一人の男が投げ出された。目元を覆っていたヘルメットが砕け、男の顔は驚愕の色に染まっていた。

防具の耐久値が限界を迎えたということは、クリティカルをもらったのか、よほど手痛い一撃を防ぎきれなかったのか。

どちらにせよ判断ミスへの代償を自分の命で払った。それだけだ。

「だからキリトが言つたろうが、テメエ等じゃボス攻略は無理だつてな」

「あ、ありえない・・・」

それは俺に向けた言葉か、己の命が刈り取られたことか。

声からコバなにがし某と分かつた男は無数のポリゴンとなってゲームから退場した。無論、

リアルからも。

ボス部屋からは剣戟の音が僅かに聞こえる。

生き残りがまだいるのか。

「駄目ー!!」

悲痛な声と共にアスナが細剣に手をかけながらグリーンアイズに向かつてしまった。確かに彼女の剣技であればグリーンアイズの注意を【軍】から引き離すことが出来るかもしれないが、それは同時に彼女自身が狙われることとなる。

「待て、アスナッ!!」

キリトも彼女の後を追いボス部屋に駆け込み、俺もそれに続いて駆け、背後ではクライン達もやぶれかぶれで入ってきた。彼らも恐怖はあるだろう、しかし、それ以上に目

の前の地獄絵図をただ傍観することはその場にいる誰にも出来なかった。

再び視線をグリーンムアイズに戻すと、アスナの細剣が不意打ちの形で決まっていた。しかし、HPは殆ど減っていない。グリーンムアイズはその光り輝く双眸でアスナを睨みつけると彼女に向かって巨剣を振り下ろす。

弾かれるようにそれを避けるアスナだが、余波が凄まじく地面に転がってしまふ。その隙を突くようにグリーンムアイズが第二撃を叩き込もうとしたが、間に入ったキリトがその攻撃を受け止める。

だが片手剣一本であるの巨剣の一撃を耐えるのははつきり言つて無謀だ。

「クライン、【風林火山】のメンバーで【軍】の奴等を頼む」

「おうよ！」

「キリト！ そのままあと一撃耐えてくれ！」

「わかった!!」

【フアラン】を両手で握り手首を返して切っ先を地面ギリギリまで下げる。

大剣の重突撃ソードスキル《アーヴェント》

その名の通り、赤い光を纏い空中に赤い剣閃が描かれる。

輝く剣閃は的確にグリーンムアイズの足首を捉え、ヤツはそのまま膝を付いた。それでもHPバーはまだまだ残っている。

グリーンムアイズの正面に陣取り嫌悪値ヘイトを集中させる。振り下ろされる巨剣と振り上げる大剣がぶつかり合い火花が散った。

俺がこのまま囷になったところでグリーンムアイズが俺だけに狙いを定めてくれるとは限らない。もし少しでもヤツがほかの連中に気が付けば、確実にそちらを狙いに行くだろう。HPが三割を切っている【軍】の奴等が攻撃を受ければ一撃で持つていかれるだろう。

答えは一つしかない。

「キリト、アスナ、クライン、もう四の五の言ってる暇はねえ、コイツはここで倒すぞ！

ヤツの攻撃はオレが全部受け止めるから、その隙にソードスキルをぶち込め!!」

切羽詰った俺の声に三人は返事はしなかったがそれぞれ頷くと、クラインはグリーンムアイズの足元へ、キリトとアスナは胴体へ向かってソードスキルを放つ。

連続して放たれるソードスキルにグリーンムアイズのHPバーは先ほど以上に早く減少していくがそれでもまだ足りない。

その光景を攻撃を受け止めつつ見やる俺は自身の残りのライフを確認した。攻撃は全てガードできているといっても、ガードは万能というわけではなく、少しずつだがHPは減少する。ライフは三割方減っていてまだグリーンゾーンではあるものの、このままのペースだと最悪の場合、全員が死ぬ可能性も出てくる。

・ ・ ・ やるしかねえか。

左手を後ろ腰へ回し、振り下ろされた巨剣の一撃を赤い外套で隠されていたそれを引き抜くと同時に巨剣の横つ面に叩きつける。

逸られた一撃にグリーンムアイズの体勢が前のめりに崩れ、体をそのまま時計回りに回転させつつ前進、右膝の裏目掛け「ファラン」を振り抜く。

振り抜いた体勢を先程とは逆に回転させ遠心力が存分に乘った一撃を奴の首目掛け、思い切り叩きつける。

たたらを踏みつつも、すぐさま巨剣を振りかざすのを確認するよりも早く、重心を下げ「ファラン」を引きずるように疾走する。

両手に握った武器にソードスキルの光が灯る。

振り下ろされた一撃を再び左手の武器で弾き、右手の「ファラン」を右下から斬り上げ、勢いを殺さず体を回転させ手首を返した左の短剣で右から横一閃、真上から「ファラン」をグリーンムアイズの頭目掛け振り下ろす。

今度こそ完全に体勢を崩したグリーンムアイズは背中から地面に倒れ込む。

「アルト、お前それ．．．」

俺の左手に握られていたのはククリナイフもしくは鉤を思わせる異形の刃を持つ短刀。

別にそれ自体は珍しいものではない。

肝心なのは異種の武器を両手に装備しソードスキルを放ったという事実。

本来ソードスキルは武器を一振りのみ装備している時のみ発動できる。

武器を両手に装備した場合、システムエラーが起りソードスキルを放つどころかシステムも立ち上がらない。

俺が装備している防具をドロップしたボスを討伐した時に発現したスキル《特双剣》。

大剣と短刀を同時に装備でき、専用のソードスキルを発動できる他、短刀で相手の攻撃をパリイしたとき、STR値が上回っていた場合相手の体勢を完全に崩し初撃のみダメージに補正が掛かる。

初撃が連撃系ソードスキルの場合には連撃全てに補正が掛かる。

「奥の手を出したんだ。確実に倒させてもらおう」

アルトもユニークスキルを？

俺ことキリトは目の前の光景に思わず剣を振るうことを忘れ、見とれてしまった。

鉤状の刃を持つ短剣でグリーンムアイズの一撃を弾き、体勢を崩したところに大剣の一撃を与えていく。

短剣によるパリイからの一撃はダメージレートに補正が掛かっているのか、既にHPバーの二本目のレッドゾーンまで削れている。

だが、それでも一人じゃ火力が足りない。

何より通常の武器防御よりもHPバーの減りは遅いが、このままじゃギリ貧になる。

・・・俺もやるしかないのか。

「頼む、あと十秒耐えてくれ!!」

キリトの声に返事をすることなく振り下ろされた巨剣を弾くことで承の意を伝える。オレンジ色の火花が散り、俺の頬を掠めた。

だがグリーンムアイズは止まらない。大木のような豪腕でオレを殴りつけた後、再び鈍い光を放つ剣を振るう。

「大盤振る舞いだ」

グリーンムアイズに背を向け、「ファラン」を背負うようにして奴の攻撃を防ぎ、一瞬の停滞を見逃すことなく体を半回転。同時に振り上げの一撃で巨剣を弾き返し一気に肉



薄する。

完全になら空きになった懐に潜り込み、ソードスキルを発動させた。

特双剣の上位連撃ソードスキル、その名も。

「ナインライヴス」

両手の得物での高速九連撃。

最後の交差した両手で斬り開く二閃には吹き飛ばしと僅かなスタン効果があるが、当然ソードスキル後の硬直も長い。

HPバーはあと三本。任せたぞ、キリト。

「キリト！ スイッチ!!」

掛け声と共にキリトが俺の真横を疾走する。

その瞬間俺は目撃した。彼が握っている剣が一つではないことに。

右手にはいつもの漆黒の剣【エリユシデータ】。そしてさらに左手には緑青色とでも言うべき鮮やかな色の剣が握られていた。

二振りの剣による同時攻撃でグリーンアイズはその場で大きく仰け反り、胸にはクロスするようなダメージエフェクトが刻まれている。

「スターバースト・ストリーム……!」

名は体を表す。

成る程その通りだと思った。

二振りの剣の斬撃とそれに灯ったソードスキルの光ポリゴンが弾け消えていく様はまさに星の燐光だろう。

グリーンムアイズが最後のあがきとばかりに、左手で今まさに自身を斬り裂こうとした【エリユシデータ】の一撃を受け止め、あれだけ連撃を受けながらも手放さなかつたその巨剣で、キリトを貫かんとばかりに突き出されるがそうは問屋が卸さない。

特双剣の重突撃スキル《ウルプス》

構えは《アーヴェント》と同一。左手の短剣ごと「フアラン」の柄を掴み、疾走する。狙いは勿論、初速を終えそのままの勢いでキリトを貫かんとする凶刃。

「ああああああ!!」

金属同士が弾き合う音と火花を散らし、緑青色の剣による突きがグリーンムアイズの胴体に突き刺さった。

一拍おいて碎け散るグリーンムアイズだったポリゴン。

congratulationの文字が宙を踊るがそんなものに割ける気力もなく俺とキリトは互いに背を預けて座り込んでしまった。

「よう相棒。まだ生きてるか?」

「死んでたら返事出来ないよ、相棒」

「様式美だ分かれよ馬鹿」

首の力だけでキリトの後頭部に自分の後頭部をぶつける。

俺もキリトも互いに数ドットだけHPを残している状態だった。

【軍】がグリームアイズのHPを僅かでも削っていなかったら、アスナのソードスキルが決まっていなかったら、俺が一度でも攻撃を捌くのをミスしていたら。

何か一つでも欠けていたら、勝てるはずもなかった薄氷の勝利を確かに掴んだのである。

## 第4斬：決闘

七十四階層攻略完了の翌日。

俺は街に繰り出すー

「ふ、あああ〜」

ことなく自宅で情眠を貪っていた。

と言うのも特双剣の戦いかたは非常に頭を使う。

相手の攻撃を弾く方向、角度、タイミング e t c . e t c .

リアルであれば情報過多で頭痛に苛まされること請け合いだな。

俺の家があるのは、森に囲まれ主街区も木造の建物で統一された六十七階層だ。

森林地帯ではあるが鬱蒼うっそうを生い茂っている訳でなく不便さを感じない程度に開拓されている。

コンクリートジャングルで生まれ育った俺の自然の中で暮らしてみたい、と言うささやかな夢を叶えるのにドストライクだったのである。

朝になれば鳥の囀さえずりずりが聞こえ、日が落ちればフクロウに似た鳴き声が心を落ち着かせてくれる。

今は朝十時前。昨日は夜九時頃からの記憶がないから、恐らく十二時間ほど爆睡していたのか。

リズのとこ行って武器のメンテして、エギルんとこでポーシヨンの補充。あとなんかあつたけ？

ベッドの心地よさに予定を丸投げにし、静かに押し寄せる眠気に瞼が落ちかける。

「起きたか？アー坊」

「半分寝てる。つかどうやって入ってきた？」

「つれないこと言うなヨ。扉開けっぱなしで床の上で爆睡してたアル坊をベッドに運んだのはオイラだゾ」

ウッド調の家具で統一した部屋にある異物。

ロリもとい情報屋【鼠】のアルゴ

βテスト時代にクエストのクリア報酬の【体術】スキルを確かめようとしたところ、クエストを受注出来るNPCにクリアしないと消えない髭を描かれ、クリアしないままクエストを断念。

以降、その髭をトレードマークとして情報屋をしていた為【鼠】の名がついたらしい。

そのクエストのクリア条件は素手で岩を砕くというもので、一万回クリティカルを出さないと砕けないという仕様。

話を戻そう。

「AGI<sup>敏捷</sup>特化の逃げ専のステ振りで俺を運べるか」

「扉開けっぱなしだったのは本当だけどナ」

マジか。不用心過ぎだろ俺。

そのままPKされて得意様が少なくなるのは、寝つきが悪くなるから、と言う理由で見張りも兼ねて休ませてもらっていたというのがアルゴ弁。

「それも嘘デ、本当はアル坊と熱い一夜をー」

「もう少し成長してから出直しな」

ロリは恋愛対象にはならない。

「無理矢理部屋に連れ込まれたって、アーちゃんに報告だナ」

「おま！それは反則だろ!!」

サイテーと言われ家畜でも見る目で見られるのは間違いない。それだけは回避しねえと！

「アルゴさん？ここにフロリア限定のスイーツ食べ放題のー」

「話を聞こうカ」

アルゴの買収になんとか成功し、変な目の冴えかたをしたおかげで二度寝をする気もなくなった。

かといってレベリングをする気分でもないしな。

今日はテキトーに時間を潰して明日から、解放された七十五層でレベリングとモンスターのドロップデータの収集、「特双剣」の熟練度上げを平行してやって、アルゴに売り付けよう。

取らぬ狸のなんとやらだが、予定がないよりマシと思うことにしよう。キリトに暇人と言われたら立ち直れない自信がある。

アイツだけには負けたくないが、俺に負ける姿も見たくはない。矛盾しているが、男子特有の複雑な感情というやつだ。

日付が変わり、俺がいるのは先日解放された七十五層転移門の前にある巨大なコロシームの観客席。

どういいうわけかキリトと「血盟騎士団」団長サマが決闘をすることになったらしい。ことの顛末をエギルの店で二人でイチャコラしていたキリトとアスナを聞いた。ただしところ、アスナは「血盟騎士団」を脱退しようとしてヒースクリフを説得しようとしたらしいのだが、キリトは売り言葉に買い言葉で奴の申し出を承諾。結果このようにデュエルをすることに。

まあキリトの気持ちも分からなくはないが、アスナを戦利品として扱うのはどうかと思う。

今回の相手はこのアインクラッドの中で最強の異名をとる男、ヒースクリフだ。奴を表す言葉は最強のみではなく、生きる伝説やら聖騎士など。

奴もまた俺やキリトと同じユニークスキル保持者だ。俺達よりも早く発現したそのスキルの名は

### 【神聖剣】

十字を型どった盾と剣とを装備した攻防一体の力。何度かボス攻略戦で見たことはあるが、奴の盾を貫いた攻撃は今まで見たことがない。

それだけ奴の防御力は鉄壁なのだ。俺でさえアレを突破できるかどうかは分からない。キリトもその防御力は重々承知はず。

勝機があるとすれば二刀流による手数勝負。



そう考えていたところでロシアム全体が湧いた。闘技場中央に目を向けるといつもの黒衣のキリトが現れた。背中には二本の剣が吊られている。

そして彼から少し遅れて赤い鎧と白のマントを装備した【血盟騎士団】団長、ヒースクリフが現れた。

二人が現れたことで会場のボルテージは最高潮だ。確かにユニークスキル保持者同士が戦うともなれば興味を引かれるのも無理はない。

闘技場中央でメニユーウィンドウを操作しているようで、それが完了した後、互いに距離をとって得物を構えた。

恐らくあいつ等の視点にはカウントが始まっているだろうが、第三者観客からはそれが見えない。それでもあいつ等から伝わってくる気迫は相当のものだ。

先手を取ったのはキリト。地を蹴り、黒剣をヒースクリフに向かって突き出す、十字盾に防がれる。

それは予想済みだったのだろう。キリトは攻撃の手を休めず、次々に攻撃を放つていく。

ヒースクリフはそれらを一切表情を変えることなく盾で見事に捌く。時に盾を突き出すことでキリトの視界を狭め、細身の長剣でカウンターを放っている。動きに一切の無駄がなく、キリトに付け入る隙を与えない攻防は凄まじいの一言だ。

盾と剣の攻撃によって大きく弾かれたキリトは体勢を整えるが、その隙にヒースクリフが一気に距離を詰め、キリトが応戦しようとしたが、奴は剣でフェイント、本命の盾でキリトの腹部を穿った。

だが、その程度でやられる男ではない。キリトは右手の黒剣がを黄色いエフェクトが包み込み、次の瞬間にはヒースクリフの盾に直撃していた。

金属と金属がぶつかり合うけたたましい音が響くが、ヒースクリフも無事ではなかったようで、その場から弾き出されるが悠然としたステップで着地すると、キリトに向き直って何か言っているようだ。

鉄壁の名に偽りなしか。

再びの剣戟音に視線を戻すと、キリトとヒースクリフが交差するように剣戟をほとばしらせていた。火花が散り、砂塵が舞うその光景は互いに持てる力を出し切っていることは攻略組でなくとも分かるだろう。

その剣戟の中でキリトの反応速度と攻撃速度が一足飛ばしに上がっているように見えた。

ヒースクリフの鉄壁の防御をキリトの剣が突破し、奴の頬に傷を与える。

掠めた程度故か、ダメージ判定はなし。それでもその一撃は大きい大きい意味がある。

動揺か驚愕か、ヒースクリフの動きが遅れをみせた。その隙をキリトが見逃すわけはなく、グリーンムアイズ戦で見せた十六連撃を放つ。

弾ける燐光が星屑のように煌めき、走る剣閃は剣戟というよりも剣の奔流に等しかった。

凄まじい剣閃によつてついにヒースクリフの防御をついに弾き、ヒースクリフへ振り下ろされた左の剣が奴の身体に食い込みそうになった瞬間。

「ッ!？」

一瞬、ほんの一瞬。コンマ数秒。刹那の瞬間。

ヒースクリフの弾かれた盾がコマ飛ばしのように引き戻された。キリトの剣が受け流され、背中を晒したキリトにヒースクリフの長剣が貫く。

勝負は確かにヒースクリフの勝利で終わった。

キリトが放った最後の一撃。弾かれた盾は間に合わず、確実に直撃する一撃だ。

だがあの一瞬の時間のブレのようなものが勝敗を逆にした。

・・・確かめてみるか。

「ヒースクリフ」

「やあアルト君。七十階層攻略の時以来だね」

コロシアムの舞台裏。控え室から裏口へと続く廊下でヒースクリフを見つけることができた。

【血盟騎士団】の本部があるグランザムに戻られれば、一介のプレイヤーでしかない俺は接触ができない。まさに千載一遇のチャンスというわけだ。

ヒースクリフの野郎はアレだけの戦闘の後だというのに随分と疲れを感じさせない。鉄仮面の奥に隠しているのか、精神力で押し殺しているのか。

もし後者であれば、それだけの強い精神があるからこそ最強ギルド【血盟騎士団】を設立することが出来たのだろう、と賛辞を送るところだ。

「ヒースクリフ、アンタあの一瞬なにをした」

「なにをとほ？」

「キリトの剣がアンタの盾を弾いた瞬間だ。あの瞬間だけアンタの動きは速過ぎだった」

「ほう」

オレの言葉に彼は感心した様な声を漏らした。純粹に感心したという声色。

「残念だが、先ほどの戦闘はおかしなことなどないよ。がむしやらに引き戻した盾が間に合い、キリト君の攻撃を防ぎ、彼に勝利した。それだけのことさ」

「そうか。なら、そういうことにしておいてやる。でも覚えておけよ、アレは明らかにおかしかった。特にアンタの目の前にいたやつはそう思ってる」

「キリト君に尋ねられたとしても同じ回答しか出来ないがね。君が七十階層攻略の時言っていた言葉『理性よりも本能が勝る時もある』。そう言うことさ」

考えるより先に体が動いた。

言うに事欠いてそれか。

「私も君に一つ話がある。よかったらグランザムへ来てくれるかね」

## 第5斬：黒歴史とサプライズ

ヒースクリフとキリトの決闘から数日が経った。

キリトの〔血盟騎士団〕としての初任務。七十四階層でアスナのストーリーカーをしていたクラゲ野郎が〔笑う棺桶ラフィン・コフィン〕、通称ラフコフに所属していたことを暴露。

任務の引率役であった〔血盟騎士団〕隊員を殺害。

キリトも殺そうとしたが、嫌な予感がすると首根っこを捕まれ連れ回された俺とアスナによって阻止され、クラゲ野郎は黒鉄宮にぶち込まれることに相成った。

キリトのことしか頭になかったのだろう。

地面に引き摺られる俺の制止を無視して、アスナはただひたすらに駆けた。〔閃光〕の名に恥じない疾走振りだった。

その時の詳しい描写？ 思い出したくもない。

言いたい事が一つあるとすれば〔フアラン〕を背負った俺をどうすればアスナの筋力値で引き摺り回せるのか、なのだが詳しいことを気にすれば負けだろう。

その事件があつて、キリトとアスナは結婚

吊り橋効果甚だしいが、知っている奴らからすれば遅くね？ というのが率直な感想で

ある。

それ以外の問題とさえばー

「あああ〜」

自宅のベッドでゾンビの如く呻きながら悶える俺なのだが。

なにがこいつを殺していいのは俺だけだ、だよ！

ああ恥ずい！穴があるなら入りたい！！

クラゲ野郎の両足を斬り飛ばし、切っ先を突きつけながら思わず口から出てしまった言葉。

今の俺の心境を表すなら、格好いい言葉の羅列したフリート黒歴史単語帳を大人になって見つけたときの心境だろ

う。

「こいつを殺していいのは俺だけだキリツ（キリツ）」

「アアアルゴオオオ!!」

「ニヤハハハ！」

アルゴロリっ子に知られてなきや、傷は浅かっただろうが。

アルゴに傷口を抉られ、心傷を抱えたまま取り合えずリズのところに向かったのだが、それが間違いだと気付いていなかった。

「こ<sup>キリト</sup>いつを殺していいのは俺だけだ」

「ガフツ」

入店早々、俺の姿を見るなりそう宣<sup>のた</sup>まったりズに思わず膝から崩れ落ちる。

「何で知ってんだよ!?!」

「昨日アスナに相談されたのよ。アルトとキリトがそ<sup>B</sup>ういう関<sup>L</sup>係じゃないって分かっているけどモヤモヤするってね」

アスナさん!?!相談内容は百歩譲っていいとしても言わなくていいことがあるんじゃないかねえ!?!

「もう一思いに殺してくれ」

「目が死んでる!?!」

「それで今日は何の用?大剣と短剣の研磨は昨日したばかりでしょ?」



確かに武器の研磨は昨日済ませてある。

大剣と短剣。二つ合わせて「フアラン」と銘打たれたそれは、耐久値がそれぞれ別でありながら一つの武器として分類される特異な物。

一つの武器として分類される事から、パリイからのダメージ補正はこの短剣からでなければならぬし、逆に耐久値が別だから状況に応じて使い分けもできる。

便利なのか不便なのか。

そんなことはどうでもいいんだよ。

「あくそれなただけだな」

「珍しいわね。アンタが言い淀むなんて」

失礼な。俺だって思い悩むことぐらゐあるっつの。

「リズはアイツらの結婚祝い、なに贈った？」

「結婚祝い？ 私は食器よ。多くあっても困らないし」

食器か。確かに数に限度はあるだろうが無難なところだな。エギルのやつは調理器具一式だつて言つてたし。

「アンタまさか・・・」

「こうゆうのは初めてだからな。正直勝手が分からん」

同じ十代で結婚した奴に何を贈れば良いかなんぞ分かるわけがない。と言いたいが、

リズは特に悩むことなく食器を選んだらしいから俺がズレてんのか？

「まあ変なところで真面目なアンタらしいちやあらしいわね」

「うっせ」

「別に高いものじゃないとダメって訳でもないんだから、なにか食材とかでもいいんじゃない？ 要は心が籠ってればいいのよ」

食材、食材か。

「サンキュー、リズ。参考になった」

「お得意様の相談に乗るのも商売の基本よ」

勿論相談料として金を取られた。

逞しい商売根性だよ。ホント。

あのあと数日間、目的の物が手に入るまでひたすらフィールドを回った。

アルゴに情報を買って、からかわれ。

エギルに備品を買って、からかわれ。

クラインからは特になかったが殴っておいた。

正に理由のない暴力がクラインを襲うってやつだな。

アルゴからの情報で俺にも二つ名がついたらしい。

というのも、グリームアイズの討伐でキリトの記事だけでなく俺のことも少なからず書いてあつたらしく、大剣と短剣を使う様から「双刃」。

何の捻りもないことで。

だがそのお陰で、こうして人目も気にせず振るえるのだから良かったと思うことにする。

因みに俺が装備してる一式をドロップしたボス部屋は、今は固く閉ざされ、クエストを受注したNPCも居なくなっていたらしい。

あんなクエストは二度とやりたくないけどな。

暫くしてようやく目当てのモンスターがPOPした。あのモンスターのドロップ品こそが今回の獲物。

両手の得物を握り直しモンスターへと突貫する。

## 二十二階層。

ここに結婚して休暇中の二人がいる。

この階層の殆どが常緑樹の森林と多くの湖によって構成され、モンスターも存在せず、主街区も小さな村程度のものだ。あの二人が静かに過ごすにはうってつけの場所と言える。

「俺の家よりのどかなもんだ」  
六十七階層

六十七階層ならゆっくり過ごすのに飽きれば、主街区から出ていつでも狩りが出来るから程よい刺激が得れる。

モンスターが出ないここ二十二階層じや、暇潰しと言えば釣り位だろ。

小さく息をつきつつ歩いているとやがて視線の先にそれなりの大きさのログハウスが見えた。外周に程近いためかハウスの奥には蒼い空がよく見える。

メッセを送ったから家にはいるはず。

「キリト俺だ」

「いらつしやいアルト君」

ノックしてから声を掛けて見れば、私服姿のアスナが応対してくれた。

「おうアスナ。これ遅ればせながら結婚祝いだ」

「これって」

ストレージに入れておいたアイテムをオブジェクト化にして、直接手渡す。

トレード画面を操作するよりも直接渡した方がいいか、と考えたわけだが当のアスナの反応はイマイチのようだ。

やっぱ、そのまま食えるのがよかったか？

けど、調理した食材はストレージに入れねえし、【料理】のスキルも持ってねえから消し炭になるのが目に見えてるしなあ。

「アスナ？どうした？」

「おうキリト。結婚祝いで旨いもん食える様になって食材持って来たはいいんだが、アスナの反応が薄くてな」

どれどれ、とアスナが手にしたテレビで見るような肉塊を覗きこむ。恐らく【鑑定】のスキルでも使ってたんだろ。

「お前、これ」

「取るのに苦労したが、喜んでくれれば幸いだと思ってるな」

「S級食材・・・」

「《ローストバイソンの肉塊》・・・」

そう俺が捕って来たのはS級食材《ローストバイソンの肉塊》。通常は《ローストバイソンの肉》なのだが、規定数集めることで《ローストバイソンの肉塊》になる、らしい。《ローストバイソン》の出現場所をアルゴから買い、エギルのところでドロップ率をあげるアイテムを大人買い。

あとはひたすらマラソンするだけなのだが、これが苦行だった。

S級の名の通り出現率が極端に低い。倒したとしてもドロップするのはドロップ率を上げていても多くて二つ。

肉塊にするには十個必要な上、未調理の食品アイテムということで二日もすれば耐久値限界ですべてペア。

ホント疲れた。

「あ・・・」

「あ?」

「ありがとぅ!!」

「うお!!」

レアアイテム好きのキリトの反応も薄くハズレだったか、と内心肩を落としてたが、いきなり顔を上げた二人に抱きつかれることでようやく逆だったのだと思い至る。

つまりは、驚きすぎて反応出来なかった、と。

こういうのも悪くないな。

その後、アスナが調理した《ローストバイソンの肉塊》を三人で舌鼓を打った。キリトにあの言葉を言われ、俺が崩れ落ちたのは蛇足だな。

そして、その二日後に記憶をなくした少女を保護したとメールが来たのだった。

## 第6斬：ユイ

記憶喪失の少女を保護した。

そのメッセージが届いたのは、つい先日。

本当ならば、だからどうしたと一蹴するところだが、気になるのは”記憶をなくした”ということ。

そんなことあり得るのかと思うが、考えてみればこのSAOは電気信号を脳に流し込み、仮想世界に反映してるのだから、記憶が無くなればそれも反映されるのか？

「あーわっかんねえ」

考えてみても直接会ってみないことにはなんとも言えねえな。なによりまた弄るネタができたのだ。退屈はしねえだろ。

場所を変えて再び二十二階層。

キリトたちの愛の巣もといログハウスに足を運び、アスナと戯れている幼女に目を向



ける。

「ふーんあの子が例の？」

「ああ。少し前にこの階層で幽霊騒ぎがあったんだけど、その正体がこの子、ユイだった」

「キリトが産んだ子か」

「話聞いてないだろお前！ていうか何で俺が子供を産んでるんだよ!!」

ギャンギャン騒ぐキリトを無視し、もう一度アスナと戯れるユイと呼ばれた少女を観察してみるが、一層にある施設で見た覚えがない。

キリトの話では他の階層でこの子の親が亡くなり、そのショックで記憶を無くしてしまつたのでは？ということ。

有り得なくはないが、戦い方も知らないような幼女が、他の階層からここへ来れるか？

見た目は十歳前後。確かに年端もいかない子供が居ない訳でもないが、どうもな。

「取り合えず、一層に向かうぞ」

「一層？どうしてまた」

「あそこには子供たちを保護してる施設がある。なにかしら手掛かり位はあるかもな」

あそこには孤児院的な施設がある。あそこなら顔見知りがいるかも知れねえ。

「先方には連絡をいれておく。四十秒で支度しな」

「もう少しくれれば嬉しいしネタが古い」

それぐらい自覚はある。

苦笑するキリトを急かしウィンドウを開いた。

一層《はじまりの街》

あのチュートリアルからもう二年になるのか。

二年掛けで七十四層。

計算上ならばあと一年掛ければクリアできるが、次のボスは最後のクォーターポイント<sup>七十五層</sup>。

どれだけの犠牲が出るかわかったもんじゃない。

「置いて行くことはないだろ」

「行き先は分かってたんだ。先に行こうが行くまいか結果は同じだ」

《生命の碑》の前で落ち合おうと勝手に出て来たのだが、十分も待たないうちにお三方の姿が見えた。

相も変わらずこの街は閑散としていて、NPC達の声が寂しく響くだけだ。ユイに見

たことがある景色がないか聞いていたアスナとキリトもそれを訝しんでる様子だ。

「アルト君、今この街にどれくらいの人がいるの？」

「【軍】も合わせて二千いない程度。殆どは戦うことを拒否した腰抜け。それが悪いとは言わねえがな」

まあ結局、と続け

「向き不向きの問題だ。荒事が得意な奴もいれば、アルゴみてえに情報収集が上手い奴、エギルとかりズみてえに商売に長けた奴」

閑散とした街を巡りながらキリトが見覚えがないかユイに聞いているが、あまり進捗はねえみたいだな。

「力の形はそれこそ千種万別。人の数だけ存在する。俺みてえに戦う力を持つ奴、アスナみてえな誰かを思える奴、キリトは、まあ心が折れてもまた立ち上がれる奴になるか」  
途中で疲れてしまったユイはキリトの背中であまり眠ってしまった。まあユイに街の様子を見せるために止まったり、迂回したりしていたから疲れてたのか。SAOに疲労感はないから気分の問題だろ。ガキには難しい話だしな。

「ラフコフみてえに誰かを傷付け悦に浸る奴、【軍】みてえに自分より弱え奴にしか強く出れねえ奴」

「よく見てるんだな」

「まあな。力ノブリス・オブリージュを持つ者の務め。それを理解できない結果が今の【軍】って訳だ」

そんなことを話しているうちに孤児院である教会が見えてきた。門の辺りで止まり、すこし大きい目の声を張り上げた。

「サーシャ！ いるかー!？」

その声が反響し、木霊すると教会の扉が開けられ眼鏡をかけた女性、サーシャが現れた。彼女はこちらに気が付き軽く頭を下げたが、なにか扉の向こうでござこそとやつていようだ。

それに「どうかしたか？」と声をかけようと近づいたところで、扉が勢いよく開け放たれ、大勢の子供たちが俺に向かって突撃してきた。彼等はそのまま容赦なく押し倒し、上にのしかかって来る。

「アルにいひさしぶりー!」

「最近全然こなかったじゃんか!」

「ねえねえ新しく手に入った剣みせてー!」

「わかった! わかったから! 痛つてえ! 髪引つ張んな!!ぐお!?! マントを引くな首が絞まる!!」

やたらめつたら引つ張つてくるもんだから外套が首に絡まるわ、髪を引つ張られるわ、頬をつかまれるわ散々だ。

ガキ共を一旦落ち着かせ、何とか立ち上がり軽く体をポンポンと叩くと、申し訳なきようにやってきたサーシャにジト目を送る。

「ごめんなさい、アルトさん。中で待ってて置いて置いたんですけど、みんなアルトさんが来るって知ったら歯止めが利かなくなっちゃったみたいで・・・」

「オレそんなに人気者だったか?」

「まあ子供たちからすると攻略組の方たちは憧れですし。それで、私に御用がある人たちというのは?」

サーシャが問うて来たので背後にいるキリトとアスナを紹介しようと振り向いたのだが、そこには子供たちに囲まれてあたふたしている二人がいた。

「はあ」

子供たちを捌けさせるために適当な剣やらメイスやら斧やらをオブジェクト化して教会の庭に放り投げる。

「ガキ共、その剣とか好きにしていざ」

それを言うと子供たちは我先にと剣のほうに駆けて行った。その様子を見ていたサーシャがまたしても「ごめんなさい」と小さく謝る。

解放された二人は苦笑いを浮かべ、眠っていたユイも目を覚ましてしまったようだ。この場で紹介しようかとも思ったが、サーシャが先に中へ促してるし、ガキ共は武器で

遊んでるし、あとでいいだろ。

通された部屋で椅子に座った俺達にサーシャは熱いお茶を出してくれた。

「それでお話というのは？」

「ああそうだった。この二人はオレの友人のキリトとアスナだ。二人とも、この人がサーシャ」

それぞれを紹介すると三人は互いに頭を下げた。そのままキリトにユイのことを話すように促す。

結果的に言うとサーシャはユイのことを知らなかった。

まあなんとなく予想はついていたのでやっぱりかと思つたが、キリトとアスナは残念そうに俯いていた。当のユイは特になにか残念がるとか悲しそうにする様子はなかったが。

「すみません、お力になれなくて」

「いえいえ。あ、そうだ。アルト君とはいっお知り合いに？」

暗くなった空気をアスナが解消しようとするサーシャに尋ねた。彼女の問いにサーシャは顔色を伺う視線を送ってきたので、肩を竦めて返した。彼女もその意図を理解したのかアスナとキリトに話を始めた。

「アレは大体一年くらい前でした。うちはアレだけの子供たちがいるので生活費を圏外のモンスターを狩って稼いでいるんです」

「それはサーシャさんが？」

「いいえ、私は小さい子達の面倒を見なくてはいけないので、この教会の中でも年長者の子達が稼いでくれているんです。なのでここで生活しているプレイヤーの皆さんよりもそれなりに生活には余裕があるんですが、ただそのせいで目をつけられてしまつて」

「目をつけられた？」

「【軍】の徴税部隊。あつちの言い分は守ってやってんだから金を払えつてな。ふざけた奴らだ。街の中ならモンスターも入ってこねえつてのにな」

「そうです。最初は教会の外で騒ぐ程度だったんですけど、段々と過激になってきて・・・。その時にアルトさんが工面してくれてその場はなんとか」

「へえええ〜」

キリトとアスナがなんともいえない笑みを浮かべながらこつちを見てくる。そんな目で見えるんじゃないかねえ。

「勘違いすんな。奴ら軍のやり方が気に食わなかった。それだけだ」

行儀悪く座りながら弁明するが、アスナとキリトは相変わらずニヨニヨとしている。

そんなにおもしろいか。

「私達に生活費の足しという事で何度もお金をくれたんです。本当にもう感謝をしてもきれないくらいですよ」

「なるほど。そんなことやってたんですねえ」

「人は見かけによらないってのはまさにこういうことだよなあ」

「うっぜえ」

なんで羞恥責めなんでされなきやならねえんだ。

部屋の扉が何の前触れもなく大きな音を立てて開け放たれ、入って来たのは数人の子供達。

「サーシャ先生！ 大変だ！」

「こら、お客様に失礼でしょ！」

「それどこじやないって！」

赤毛の少年が目には涙を浮かべながら訴える。そして彼から出た次の言葉に全員の顔が強張ることになる。

「ギン兄イ達が、【軍】の奴等につかまっちゃったよ！」

「場所は!?!」

表情を強張らせ毅然とした態度で立ち上がったサーシャがたずねると、少年は涙を溜



めたまま言う。

「東五区の道具屋裏。十人ぐらいで道をブロックしてる。コツタだけが逃げられたんだけど……」

少年はサーシャをもう一度見た後、俺の方を見てきた。それは彼だけではなく、その他の子供たちも頼みこむような表情をしていた。

「つたく、しよーがねえな。」

俺は渋々、アイテムウインドウを展開。椅子から立ち上がってフィギュアを操作し大剣を背負った。

「おまえらはどうする?」

キリトとアスナに問うと二人は互いに頷きあった。子供たちの救出には俺、サーシャ、キリト、アスナが向かうことになった。ユイは置いていこうと思ったのだが、どうしてもついていくというのでキリトが背負う形に。

ほかの子供たちは危険だということとサーシャが止め、俺達は子供たちがいるという空き地に向かう。

その途中、サーシャは告げてきた。

「アルトさん。最初は私が交渉します」

「了解」

彼女の言葉に少し迷いつつも頷いた。交渉が通じる相手であればいいけどな。

そのまま走り、尚且つショートカットを繰り返していたのであつという間に目的の東五区にたどり着いた。前方の路地に見覚えのある装備をした奴ら。数にして十人。徴税部隊で間違いねえな。

サーシャが最初に路地に足を踏み入れたことで連中が彼女に気が付き数人が振り向いた。

「おっと、保母さんの登場だぜ」

バイザーをしていても口元の下卑た笑みはよく見える。ああいった笑みほど胸糞悪くなるものはない。自分よりも弱え奴を虐げ、優越感に浸る最悪な人種だ。

「子供たちを返してください」

拳を握り締めて言うサーシャだが、軍の連中は相変わらず笑みを浮かべたままだ

「そう睨むなつて。ちよつと常識つてもんを教えてただけだよ」

「そうそう。市民には納税の義務があるからなあ。俺達〔軍〕の活動のために」

甲高い声を上げて笑う男達の理不尽な言い分にサーシャの腕が震えている。相変わらず馬鹿な連中だ。

なぜコイツらは学習をしないのだろうか。しないのでなく出来ないのか？

前方ではサーシャが子供たちに呼びかけ、〔軍〕の連中と交渉しているが、結局そこを

動くことをせず、あまつさえサーシャたちにここで滞納している税金を払えというのだ。しかも金だけでなく、装備品や衣服、アイテムも全て。

背後でアスナが一步を踏み出そうとしていたが、それを片腕を上げて制する。

「お前らは下がってろ。」

今の俺は随分酷い顔をしているだろう。そんなことは別にどうでもいい。目の前にいる最悪な人間を排除できればそれで構わない。

サーシャを退かせ前に出る。男達のざわめきが聞こえるが、背中の「フアラン」の柄を握ると、一気に彼等に肉薄し、目の前にいた二人の男目掛け横一閃。

「え?」

マヌケな疑問符が聞こえたが、容赦なくに振り抜かれた一閃は、男達に直撃。そのまま中空に舞った奴等は子供たちがいる空き地にまで吹き飛び、壁に激突した。

圈内だからダメージはねえが、精神的なものとは別。

圏外なら死ぬかもしれねえ攻撃を受け続ければ、精神がもたねえだろ。

「(あッ!?)」

「ぐえッ!」

壁に叩きつけられ、短い悲鳴を上げた男達は砂煙を上げて空き地へ落下。二人を吹き飛ばしたことで「軍」の連中は大口を開けていたが、すぐに我に返ると怒鳴りつけてく

る。

うるせえなきやんきやん喚くな。

「な、なんだテメエ！ 任務を邪魔するのか!!」

瞬間、男顔面を目掛け切っ先を突き出す。剣が己の顔に迫ってくるのは相当の怖えだろ。

「この野郎！こつちは出るとこ出たつていいんだぞ 圏外出るか圏外!!」

そういつた男とその周りの連中は頬に僅かながら汗を浮かばせているものの、笑みを浮かべていた。大方圏外に出れば逃げ出すと思つてんのか？甘えな。

「圏外？いいねえ出てやろうじゃねえか」

「え？」

そんな言葉に驚いた男が呆けた顔をするが、その男の胸倉を左手で容赦なく掴み上げ、そのままズルズルと引き摺る。

やつぱ、こいつら大してレベリングもしてねえな。大方カツアゲばつかしてたんだろ。

「は、離せ!!」

「おいおいそつちが誘つたんだ、今更離せはねえだろ」

「ヒツ!?お、おいお前ら、見てないでさっさと助けるよ!!」

俺を止めようと回り込もうとした連中の足が一斉に止まる。

止める気あんのかよ。

「赤い外套に大剣、こいつ攻略組の【双刃】アルト!？」

「【双刃】!?! 攻略組きつての戦闘狂!?! で、でもなんでそんなヤツがここにいんだよ!!」

「知らねえよ!!」

戦うのは好きだが戦闘狂って訳じゃねえ。自分より強い奴がいるなら戦ってみてえのがゲーマーだろ。

「ま、待つてくれ! あのがキ共に手を出そうとしたことは謝るから! 圏外は、圏外だけは勘弁してくれ」

「駄目だな。お前はあのがキ共を傷つけた。知ってるか? 人を呪わば穴二つ。どんな生き方であれ、全部テメエに還ってくんた」

因果応報。いずれ報いを受けるときが来る。俺だけじゃなくこの世界に囚われた奴も、リアルの人間も全員。

「い、嫌だあ!! 死にたくない、死にたくない!!」

「殺しやしねえよ。俺は、な。両手両足斬り落としてモンスターの前に放り投げるだけだ」

「本当に、本当にもう二度とあの孤児院には絶対になにがあっても近づかないから許し

てくれ!いや、許してください!!」

「許せだあ?今までテメエらが言われてきた言葉をそう簡単に使うのか?巻き上げた金を豪遊に使つてたテメエらが」

「つ、使つた金は返すから!命だけは!」

・・・まあいいか。

胸倉を掴んでいた男を棒立ちになっている奴らに投げ捨てる。

「そのままとつとと本部に戻れ。気の変わらないうちにな」

「し、しし失礼しましたああああ!!」

連中はそのままだタドタと騒がしく帰っていった。大剣を背に戻し、ぐるりとガキ共を見るが全員無事のようにだ。

サーシャたちを見ているとユイを背負つたキリトとアスナが俺の肩に手を置いてくる。

「お疲れさん」

「そんな疲れてもねえさ」

「でもアレはちよつとやりすぎよ」

「ほつときやお前だつて細剣で脅してたら」

「うっ」

痛いところを疲れたのかアスナは声を詰まらせた。

沸点低いんだから注意しろっての。

サーシャたちがやって来て子供たち共々頭を下げた。

「ありがとうございます、アルトさん。また助けていただきて」

「気にすんな。言つたろ？ 奴らのやり方が気食わねえだけだつてな。ガキ共も大丈夫か？」

「うん。兄ちゃんかつこよかつたぜ！」

「俺もあんな風になつかい剣を振り回してみたい！」

ガキ共の素直な感想に笑みを見せ、アスナとキリトも同じように笑っていた。

「バーカ、戦うのは俺達だけで十分だ。お前らはお前らの家族を守つてればいいんだよ」

しかし、その時小さな声が聞こえた。

「みんなの・・・みんなのこころが」

声のする方を見やるとキリトにおぶさっていたユイが虚空を見上げて右手伸ばしている。皆がそちらに目をやってもそこには何も無い夕暮れの空が広がるだけだ。

けれど彼女は同じような言葉を繰り返している。ことの異常さにキリトが彼女に呼びかける。

「ユイ！ どうしたんだ、ユイ!!」

キリトが呼びかけることでユイはキョトンとした表情を浮かべ、アスナも心配そうに彼女の手を握る。

アスナが入ったことで元々かなり小さい声が確認できなくなったが、表情は苦しげだった。

瞬間ユイの体が大きく仰け反らせ悲鳴をあげる。

同時に俺の耳にノイズ染みた音が響き、ユイを見ると体が透けるようにノイズが走っている。

驚いているのも束の間、アスナが彼女を抱きしめていた。

少ししてその現象は止まり、強張りを見せていたユイの体からも力が抜けていく。

「みんなの、……ころ？」

ユイが右手を空に掲げていた時彼女が言っていた言葉を思い出し、頭を捻ったが結局それがなんなのかわからなかった。



## 第7斬：心の形

あの後ユイは物の数分で目を覚ました。特に異常も見られずキリトは帰ろうといったのだがアスナがそれに反対した。あのような怪現象の後に転移するという移動法をとりたくなかったのだろう。

サーシャの薦めもあり、教会の空き部屋に泊まることになったのだが、親馬鹿の片鱗を垣間見た気がするな。

下らないことを考えに肩を竦めて、部屋の中にポツンとある洗面台で顔を洗った。それに続けて歯も磨く。

この行為自体に大した意味はなく、物心ついた頃からの習慣でしかない。やっていないと落ち着かないというのも勿論あるが。

SAOでは風呂に入ったりなどのことは出来るが、アバターが汚れて異臭を放つこともないから、殆どのプレイヤーは風呂に入らない。口も同じで歯垢が溜まったりはしないので歯を磨いたりする者は少ない。

朝のルーチンも終え、考えたことはユイが発作を起す前の言葉。

あの時彼女は確かに「みんなのこころ」と言っていた。「みんな」と言うのがどの「み

んな」であるのか、「軍」の連中か、解放されたガキ共とサーシャであるのか、それともあの場にいた全員か、更に言えばアインクラッドにいるプレイヤー全員か。

抽象的な表現である可能性も捨てきれないが。

もし本当の意味で心が分かるのだとしたら一体何モンだ？

出入り口に続くエントランスに出てみれば、サーシャにキリト、アスナの姿がある。

開かれた入り口にいるのは「軍」の女性用制服に身を包んだ女性の姿。銀色の髪をポニーテールに後ろで纏めた女性はやはりというべきか美人であった。瞳は鋭く、怜悧という様が良く似合っているが怖さは感じられない。

「おはようアルト」

近くに寄ったところで俺に気が付いたキリトが声をかけてきた。銀髪の髪の女性の視線が向けられ、彼女は軽く頭を下げてくる。彼女からは敵意は感じられず、むしろ友好的な雰囲気伝わってくる。その様子から昨日の一件での抗議というわけではないことは分かった。

「はじめまして。私は「<sup>A</sup>アインクラッド<sup>L</sup>解放軍<sup>F</sup>」のユリエールです」

「アルトだ。んで？今日は何のようだ？」

やや挑発気味に聞いてみると彼女は少し目を泳がせる。

公にはしたくない用件か。

「サーシャ。今使つてない部屋使わせてもらつていいか？」

「はい、大丈夫です。どうぞ」

サーシャが中に入るように促すとユリエールは深く頭をさげて「ありがとうございます」と礼をした。

ユリエールが通された部屋に入り、本題に移る。

「ではまず昨日の件なのですが、誠に申し訳ありませんでした。派閥は違ふとはいえギルドの連中が多くなる迷惑をかけたようです」

彼女は俺達を前に深く頭を下げる。

自身に非があるなら謝罪する。基本だが歳を重ねればしづらいことだ。すんなり頭を下げるつてことは随分と人間が出来てるみたいだな。

「アルトさん。連中に痛い目を見せてくれたこと感謝します」

「やっぱあの情報は正しかった訳だ」

「あの情報？」

「昨日の内にアルゴに確認を取ったんだが、【軍】じゃ穏健派と過激派で睨み合つてる状況らしい。その一つがキバオウ筆頭の過激派。徴税部隊が所属してんのもその過激派だろ」

「キバオウって確か」

アスナはハツとして口元に手を当てた。キリトも眉間に皺を寄せている。

「まだ一層のボス攻略を前にβテスターは武器を渡せと正気を疑う行動を見せたあの毬栗頭のことだ。」  
イカヅリ

「そいつはもう一方の穏健派。ギルドマスターであるシンカー派。そうだろ？」

「はい。仰る通りです。元々は【ALF】という名ではなく、【MTD】という名でした。聞いたことはありませんか？」

【MMOトウデイ】の略。SAO開始当時の、日本最大のネットゲーム総合情報サイトで、サイトの管理者がギルドを結成した、とアスナの疑問にキリトがスラスラと自慢げに話していた。

ドヤ顔かよ。俺を見ながらとか喧嘩売ってんのか。

「凶々しいと罵られるでしょうが、覚悟の上でお願いします。シンカーを助けて頂けないでしょうか」

「なにがあつた？」

【軍】の心象は、はつきり言って最悪だ。一般プレイヤーからすれば【軍】内部の派閥争いなど知るよしもなく、過激派による行動ばかりが印象に残ってる。好き勝手しておいて困ったときに誰かに頼ろうなんざ、確かに凶々しいと言われても仕方ねえが、俺を含

めここににいる三人はその事を知っている。

「七十四層で軍の部隊が多大なダメージを負った事は知っていますか？」

「あの場にいたからな」

「そうですか。では話が早いです。あの日、部隊を送り込んだのはキバオウです。彼は自身の一派の中で不満が溜まっているのを察知し、それを解消するために配下の中でも特に高レベルのコーバツツ達を派遣したんですが、結果は知つてのとおり。このことでキバオウは激しく糾弾され、後一步でギルドから追放することができるところまで行つたのですが、彼はシンカーを迷宮区の最奥に通じる回廊結晶を使って罠に嵌めたのです。シンカーは『丸腰で話し合おう』という言葉に騙され、装備の類はおろか転移結晶も置いて行つてしまった。これが、三日前の出来事です」

「み、三日前!? それじゃあシンカーさんは……」

アスナの焦りも尤もだ。

装備もなくモンスターが徘徊する迷宮区に三日も放置されれば誰だつて生存を諦める。

しかし、帰つてきた答えは否。

「黒鉄宮の《生命の碑》を確認したところ生存は確認できました。私が助けに行こうにも迷宮区のレベルが高すぎて私ではとても。でもそんな時に攻略組の方達が現れたと聞

き、ここに来た次第です。本当に不躰で身勝手だとは思っています。ですが、どうか私と一緒にシンカーを助けていただけられないでしょうか」

ここに来て何度目かの頭を深く下げて懇願するユリエールに小さく息をつく。キリト達は俺の方を見て訝しむような、疑念を抱いているような視線を送ってきた。

彼等の視線は十二分に理解できる。SAO内で人の話を簡単に信じることは出来ない。今の話が全て嘘で、逆に俺達が迷宮区に閉じ込められてしまう可能性もある。それに今回は【軍】の問題というのものもあるから尚更慎重に行きたいと言うのが本音だろ。

それぐらいいは分かっている。それでも誠意には誠意で報いるのが俺の主義だ。

「いいぜ。行つてやるよ」

「ほ、本当ですか!?!」

「嘘は言わねえことにしてる。お前の話も嘘じゃなさそうだ」

肩を竦めて言うが、そこでキリトに肘で小突かれた。もっと警戒しろということなんだろう。

「一体なにを根拠に了承したんだよ」

「目を見れば大体分かる」

小声で言ってくるキリトに返すが眉間に皺を寄せている。アスナも同じであるようで、言っている事が本当なら助けたいと思つているようだが、裏づけが取れない限りは

と言う感じか。

すると、今までアスナの隣でつまらなそうにしていたユイがユリエールを見やって二人に告げた。

「だいじよぶだよ。パパ、ママ、その人うそついてないもん」

その言葉は今までの舌足らずな幼児のような発音ではなく、歳不相応とも思えるしつかりとした口調で断言。

本当に何モンなんだか。

「ほらな？チビもこう言ってる事だし大丈夫だろ。ガキは大人より感情の機微に敏感だっけ言うしな」

「チビってユイちゃんのこと!？」

「おうさ。つーわけだ行けるか？」

出来ればすぐにも離れたい。主に憤怒の表情を浮かべるアスナから。

「ぬおおおおお」

気合の声を上げながら右手の剣を振るい。

「りゃあああああ」

今度は左手の剣で続いて突撃してきたモンスターを切り裂く。

久々に「二刀流」を使用してストレス発散をするように戦うキリトを眺めていた。戦いぶりからして相当体を動かしたかったみたいだな。

アスナはアスナで、はしゃいでいるユイを留めていた。

二人はユイのことを教会に預ける気であったが、結果は二人が折れ、ついて来ることになった。

ユリエールの情報によると迷宮に出現するモンスターのレベルは、六十層程度らしい。この情報によってレベルが87であるアスナと、90を越えるキリトと俺がいるのだから問題はないだろうという結論に至ったわけだ。

今潜っている迷宮区は意外にも《はじまりの街》の地下に展開している。ここは上層の進み具合で解放されるのだろう。

迷宮に入って最初はキリト達は戦闘に参加せず、俺が戦うのみに留めておこうということだったのだが、戦いを見ていたキリトが触発されたようで現在はキリトが戦っている。

「シンカーの様子は？」

「はい。場所は探知できているので安全地帯にいますと思われます。そこまで行けば転移結晶が使えるでしょう」



彼女が言いながらウインドウを開くとアスナ共々覗き込めば、確かに紫色に発光するウインドウの中にシンカーの名前と、彼のカーソルが赤く表示されていた。

「でもいいんでしょうか。キリトさんに任せきりで……」

「鬱憤が溜まってたみたいだしいいんじゃないやね？ 鬼嫁にでも色々制限されたんだろ」

本能に任せて短剣の「ファラン」を引き抜き、叩き落とすように振るえば、金属が弾ける音と共に軽い手応えを感じる。

アスナの細剣「ランベントライト」だろう。

「すこし痛い目を見てみますか？」

目だけをそちらに向けるとイイ笑顔のアスナがいた。

完全に鬼嫁だろ。

「心の底からごめんなさい」

「わかればよろしい」

アスナは言いながら細剣を納める。

それを見ていたユイはさぞかし怖がったことだろうと彼女を見てみたものの、ユイは楽しげに笑っていた。随分肝っ玉の据わったガキだ。

「いやー戦った戦った」

巨大ガエルの大群を蹴散らしたキリトの表情は実にすつきりとしている。

「なんかドロップしたか？」

誇らしげにアイテムウインドウから赤々としたグロテスクなものを一つ取り出した。それを見た瞬間、アスナが短い悲鳴を上げる。

「これ、さっきのカエルの肉か」

「おう。《スカベンジトードの肉》ってアイテムだ。アスナこれ後で料理して——」

言うが早いかキリトの手の肉の肉は姿を消した。見るとアスナが遥か後方に放り投げた後だった。さらに後ろでは煌めくポリゴンとなつて消えたのが見える。

「あーあ、もつたいねー」

「もつたいねー」

アスナがなにやらウインドウを操作してるが、共通化されたストレージから《スカベンジトードの肉》を破棄でもしてんだろ。

「ユイちゃん。女の子がそんな言葉遣いしちゃいけません。アルト君もユイちゃんの教育に悪いから言葉遣いに気をつけて」

「いくらなんでも捨てることはないだろアスナ！ ゲテモノほど旨いつて言うじゃないか！ 一回ぐらい料理してくれても」

「絶対嫌ツ!!」

「普通の蛙ならまだしもスカベンジ、腐った肉を主食にしてるのはなあ」

正しくはスカベンジャーで、腐肉食生物のことを指す。文字通り腐った肉を主食としてるわけだ。

普通の蛙や蛇だったら鶏肉に近い味がするが、その肉だけは食指も動かねえよ。

「個人的には蛇の方が好きだが。アスナー」

「どんな理由があろうともカエルは絶対に料理しません！蛇もね！」

「えー!!」

「まだ何も言っただけじゃねえじゃん」

「お姉ちゃん、はじめまして笑った！」

キリトは心底残念そうにへこたれたが、このやり取りを見ていたユリエールが「ぷつ」と吹き出し同時にユイが嬉しそうに声を上げる。

その声は本当に嬉しそうな声だった。そしてふと思いつく。昨日ユイが発作を起したのは、ガキ共が笑顔を浮かべたときじゃなかったか？

時間にして二時間ほど迷宮を進み、水生生物系からゴースト系やゾンビ系のモンスターを相手にし、キリトが黒い骸骨剣士を吹き飛ばしたところでその奥に光の漏れる通路が見えた。

間違いなく安全エリアだろう。先ほど確認したシンカーの位置情報と照らし合わせ

でもあそこでほぼ間違いないだろう。

【索敵】スキルを使用して通路を観察すると、グリーンのプレイヤーがいた。ほぼ確定でシンカーだな。

「いるな、あそこ」

「ああ」

同じく索敵スキルを使用したキリトも頷いたところで、ユリエールが駆け出した。

「シンカー!!」

安堵と嬉しさの色を孕んだ声でシンカーの名を呼びながら駆ける彼女の後を追った。

安全地帯までの距離はさほどなかったようで、十字路の手前までやってきた。その先には安全地帯である光の漏れる小部屋が見える。

「ユリエール!!」

「シンカー!!」

感動の再会というヤツに笑みを浮かべるものの、シンカーが漏らした次の言葉でそのムードは一気に破壊されることになる。

「来ちゃダメだ!! その通路には!!」

一瞬彼の言葉に走る速度を緩めそうになったが、強く地面を踏み込んで速度を上げた。前方を行くユリエールはシンカーの声が届いていないようで走る速度を緩めてい

ない。

十字路の右側の死角となつている通路に黄色いカーソルが現れ、その下には見覚えのある定冠詞の固有名が表示された。

《The Fatal—scythe》。直訳すれば「破滅の鎌」。

「待つて！ 止まつてユリエールさん!!」

後ろからアスナの悲痛な声が聞こえる。それよりも早く駆け、前を行くユリエールに接近すると彼女を抱きこむようにして跳躍。横断する通路を飛び越し、安全地帯の手前に倒れ混む。

体が交差点に侵入した瞬間、黒い影が僅か数センチ上を通り過ぎていったようだ。

影はそのまま左の通路へと移動したが、ユリエールを即座に立たせ、彼女をシンカーのいる安全地帯の方へ放り込む。キリトとアスナも合流し、ユイをユリエールに預けると、二人はシンカーのいる安全地帯へと退避した。

大剣を構えながら先にボスと対峙しているキリトの隣に立つ。しかし、ボスを見上げた瞬間息が詰まるのを感じた。

ボスの姿は一言で表せば死神。骸骨の頭には人間と同じように目二つだが、その上には更に二つの穴が開き、ボロボロの外套を纏い手に持つ大鎌からは鮮血が滴り落ちる。

人間の恐怖を具現化したような存在に思わず溜息をつくが、問題なのは恐怖感とかそ

ういうもんじやない。

隣のキリトもこのボスの異常さを察知したようだ。

「コイツ、データが見えねえぞ」

「ああ。たぶん九十層クラスだ」

アスナが背後で声を詰まらせ、キリトの頬にも汗が浮かんでおり、かなり焦っているようだ。

「キリト、アスナ。お前等は安全地帯まで退避して転移結晶使って転移しろ」

「・・・」

「アルト君は!？」

「後から行くさ。シンカーは装備なしでここを切り抜けたんだ。フル装備なら何とかなる。行け!!」

弾かれるようにしてキリトがアスナを抱えて安全地帯に退避した。それと同時に俺に向かって凶悪な光を宿した鎌が振り下ろされた。

それに応えるように大剣を振り上げ衝突する。恐るべき衝撃と圧力が上から加わったり、大剣の刀身と鎌が凄まじい火花を散らせ、床に降りかかっている。

重いつ!!俺の筋力値でも相殺できねえのかよ!

今まで体感したことのない衝撃に思わず膝をつきそうになるが、ここで態勢を崩せば

間違ひなく殺される。

幸い防御のタイミングが良かったからかHPはまだグリーンゾーンだ。だが次の攻撃を喰らえばイエローは確実。直撃を受ければレッドか死が待っている。

それだけはなんとしても避けなくてはなるまいと後退し、追撃に備える。

つ！あいつ等まだ安全地帯に！

「早く行け!!　そこなら脱出できるだろ!!」

怒声をあげた瞬間だった。下から掬い上げるような一撃。防御を跳ね上げられその衝撃に耐え切れず、吹き飛ばされ壁に叩きつけられる。

「ぐっ!!」

なんとか持ち直して大剣を杖代わりに立ってみるものの、今の攻撃でHPはイエローの後半まで削られていた。直撃ならば死んでいただろう。

態勢を立て直す間にも死神は大鎌を掲げて俺を殺そうと近づいてくる。

「いいねえ、ようやく暖まってきたところだ」

突撃型のソードスキル《アーヴェント》なら、一撃加えつつ離脱出来る。例え九十層クラスのボスであってもソードスキルが通用しないことはねえだろ。

「ダメー！　戻ってユイちゃん!!」

その声に反応し声のしたほうを見ると、キリトとアスナの制止を振り切ったユイが

しっかりとした足取りでボスに向かってきている。

「なにしてる！ 戻って転移しろ、ユイ!!」

怒声交じりのオレの声に動じた様子もなくボスに向かって行くユイ。彼女の瞳には一切の恐怖は見えなかった。そして彼女は凜とした声音で俺達に向かって告げた。

「だいじょうぶだよ。パパ、ママ」

言うが早いか死神はユイに気が付き彼女のほうに向き直る。そして大鎌をオレではなく彼女に向けて振り下ろした。

次の瞬間襲ってきたのは金属同士がぶつかり合った時のような大音響。そして俺は見た。ユイの頭上に「Immortal Object」の文字が表示されているのを。それは決してプレイヤーが持つことのない文字。システムによって保護された絶対的な不死の表示だった。

「どうなってる?」

驚愕の声を漏らしたのも束の間、ユイが右腕を上げたかと思うと、轟!!という音とともにその手から紅蓮の火焰が巻き起こり、辺りを炎色に染め上げた。

一度周囲に散った炎は再びユイの手に凝縮し、形を変える。そして現れたのは炎と同じ色をした剣だった。しかしその大きさは桁違いで俺が持つ「ファラン」の数倍以上はある。



その剣が纏う火焰によってユイの服は焼け落ちるが、彼女が元々着ていた白のワンピースだけは残っている。彼女はそのまま空中にふわりを浮き上がると、長大すぎる剣の重さを感じていないかのように振るう。

それだけで炎熱が巻き起こり、周囲を赤く照らし出す。死神は奇怪な声を上げながら防御の姿勢に移ろうとするが、ユイはそれに一切の容赦なく紅蓮の巨剣を振り下ろした。

鎌の柄で一度は防御されたものの、剣はあつさりと柄を斬り裂き、死神の脳天に剣が食い込み、断末魔のような声を上げるが、そのまま真つ二つに切り裂いてしまった。

同時に放たれた眩い光で目が咄嗟に左腕で目を庇う。

やがて炎の熱さも消え、静寂が訪れた。

目を庇った腕を下ろし回りを確認するが、そこには死神の姿はなく、ユイが持つていた炎剣によって発生された残り火が煌めいているだけだ。その奥には白いワンピース姿のユイがいる。

更に奥にはあつけに取られた表情をしているシンカーとユリエール。そして驚きを露にしているキリトとアスナがいた。大剣を背中におさめたところでのいつの間にかここまでやってきたユイに声をかけられた。

「大丈夫ですか？アルトさん」

「あ、ああ。大丈夫だけど、ユイ、お前は一体？」

「全部、お話しします。わたしがどのような存在であるのかを、すべて」

安全地帯には俺とキリト、アスナ、そしてユイの姿があった。シンカーとユリエールには先に戻ってもらっている。

ユイの話を聞いたものの、想像を遥かに超えたものだった。

彼女の話ししたことはこの《ソードアート・オンライン》というゲームの根幹の話だ。この世界は巨大なシステムである《カーディナル》なるものによって制御されているという。それは人間の手を必要としないシステムで、二つのコアプログラムが相互にエラー訂正を行い、無数のプログラム群によってこの世界は調整されているらしく、NPCやモンスターのAI。その他アイテムの出現率や通貨など、全てが《カーディナル》によって調整されているということだ。

ほぼ完璧ともいえるシステムにも綻びがあったらしい。それは人間の精神性に由来するトラブルだ。そればかりはシステムである《カーディナル》も対処が出来ず、ゲームマスターが必要とされるはずだったという。

そしてここからがユイがどんな存在であるのかの話だった。彼女の正体は開発者達

が試作した《メンタルヘルス・カウンセリングプログラム》、M H C P 試作一号、コードネーム《Y u i 》。それが彼女の正体だった。彼女は A I だった。

自らのことを告白した彼女の双眸からは止め処なく涙が溢れ出し、同時に彼女はキリトとアスナに謝っていた。『感情模倣機能によってもたらされたこの涙も偽物』なのだと。

アスナがユイを抱きしめようと一歩歩みだしたものの、ユイは被りを振ってそれを拒否した。

だが疑問が残る。A I である彼女が記憶喪失などに陥るのだろうか？

ユイは一度顔を伏せるとぼつぼつと語り始めた。

《ソードアート・オンライン》が正式サービスを開始した日。《カーディナル》はユイにプレイヤーとの一切の干渉禁止命令を下したらしい。それによってユイはプレイヤーたちをただモニタリングすることに徹したらしいが、状況は最悪だった。

プレイヤー達は恐怖、絶望、怒りといった負の感情に心を支配され、時として狂気に陥ったものもいたらしい。本来ならばユイがその場に赴いてプレイヤーをケアするのだが、《カーディナル》によって身動きの取れなくなったユイはただただモニタリングをするほかなかつたのだ。そうしたことが続きエラーを蓄積させたユイは、やがて崩壊して行ったのだという。

目の前のモニタで恐怖や狂気に囚われるプレイヤー。しかもゲーム開始当初は、外周から落ちればログアウトできるという根拠もない情報のせいで、多くのプレイヤーが身を投げた。中にはこの世界で生き残ることを選ばずに、自ら命を捨てた者もいる。

それら全てをモニタリングしていたユイが壊れてしまうのは、仕方ないのかもしれない。普通の人間がその状態であつたら心神喪失してしまうだろう。

その状態であってもユイはモニターを続けていたらしい。そして今までとはまったく別の感情、喜びや安らぎ、けれどそれ以外にもある不思議な感情を持つプレイヤーが現れたのだという。それがキリトとアスナだったのだ。

ユイは二人に興味を抱き二人のモニタリングを続け、いつしか二人に会って話してみたいという感情を抱くようになったらしく、二人が結婚した後、一番近いコンソールから実体化してやってきたと。

「アルトさん、あなたにもお礼を」

「俺はなにかした覚えはねえけどな」

「そんなことはありません。あなたがお二人の側にいることで笑顔が溢れていました。そのお陰で私はキリトさんとアスナさんに会ってみようと決意できたんです」

それに、と続け

「あなたの感情はゲーム開始当初から変わることはありませんでした。キリトさんやア

スナさんのような喜びや安らぎ、嬉しさというような感情ではなく、このゲームを純粋に楽しむという幸福感に満たされました。あなたはこのゲームを心の底から楽しんでる。今もそうでしょう?」

「参ったな、全部お見通しか」

「はい。最初からどこが変わった人だなあって思っていました」

「それぐらい自覚はある。……お前はさっき言ったな。キリトとアスナに興味を抱いて、自分の意思でコンソールを操作して、二人に会いに行った。これはお前の言う偽物の感情なのか?」

「それは」

「確かにお前はプログラムで感情を模倣してるかもしれないねえ。けどよ、その感情から生まれたもんが偽物って言い切れねえだろ」

その感情が偽物だとしても、それから生まれた意思や思考が偽物だと誰が決めつけられる?」

誰かの為に流した涙が偽物な訳ねえだろ。

「お前が望むことはなんだ?」

「わたし、わたしは……」

ユイは両手をいっぱい広げ、涙ながらに告げる。

「ずっと一緒にいたいです！パパ、ママ！」

その声に我慢しきれなくなつたアスナが涙を流しながらユイを抱きしめた。キリトも二人を抱きしめる。

システムとかプログラムとか、関係ねえ。

「でも、もう遅いんです」

彼女の言葉にオレも含め全員が疑問を抱いた。ユイは自分の座っている立方体に触れる。

それはゲームマスターが緊急アクセスするためのコンソールだという。

彼女が操作すると光の柱が立ち、電子音の後に淡く発光するホロキーボードが展開された。

「先ほどのボスモンスターはプレイヤーがこれに触れないようにするために、配置されたものだと思われます。わたしはアレを倒すためにコンソールからアクセスし、《オプジェクトレイサー》を使用してボスモンスターを削除しました。それと同時に言語機能も復元できたのですが、《カーディナル》は今まで放置していたわたしに気が付き、注目してしまっています。今はコアシステムがわたしを走査していますから、すぐにでも異物として削除されるでしょう」

「そ、そんなー！」

「どうにかならないのか、ここから離れたらすれば!」

「パパ、ママありがとう。これでお別れです。アルトさん、パパとママをよろしく願います」

「……………」

健気で消えてしまいそうな細い声に、俺は答えなかった。いいや、答えるための言葉を持ち合わせていなかった。

ユイの体が僅かに発光しはじめた。ついに削除が実行され始めたのだろう。

「ダメだ! ユイ、行くな!!」

「パパとママがいればみんな笑顔になった。わたしはそれが嬉しかったです。だから、これからはわたしの代わりに…………みんなを、助けてあげてください。二人の喜びを…………みんなに分けてあげて…………」

「嫌だ!嫌やだよ、ユイちゃん!ユイちゃんがいなかったら私笑えないよ!!」

消えてしまいそうな手を握りながらアスナは大粒の涙を流す。ユイは彼女に答えるようににこりと笑みを浮かべて、彼女の頬を撫でるが――

一際眩い光が視界を支配した。再び目を開けるとそこにユイの姿はなく、ただただ泣き崩れるアスナと悔しげに膝をつくキリトの姿があった。

その二人を見て、目頭が熱くなるのを感じた。そして俺の瞳からも涙が溢れ始める。

「……ぎげんな」

小さく呟きながら背中中の「フアラン」に手をかけ、黒い立方体に迫り振り下ろした。的確に振り下ろされた一撃は立方体を捉えたはいたものの、発生したのは立方体の破壊ではなく、「Immortal Object」と表示される紫色の無機質で機械的な冷たい表示。

「ふざけんじやねえぞ!! テメエにユイの生き方を奪う資格があるのかよ!! まだこいつ等と一緒にいたいと言った!! ユイがAIだろうがなんだろうが関係ねえ! アイツには自分の意思があつた、それをエラーコード一つで奪うんじやねえ!!」

この行動に意味があるとは思えない。それでも自分を抑えることが出来なかつた。

絶叫し、一際強く大剣を振るつたところで剣が吹き飛ばされ、背後の石畳に突き刺さつた。相変わらず表示されるのは「Immortal Object」の文字唯一つ。不意にキリトがホロキーボードを展開した。

「キリト、お前なに……」

「今ならまだGMアカウントでアクセスしてシステムに割り込めるかも知れない。お前の言う通りだ。これ以上、好き勝手はさせない!! 俺とアスナの娘を返してもらおう!!」

言いながら凄まじい速さでキーボードを叩き、いくつものコマンドを入力する。そして小さなプログレスバー窓が出現し、横線が右端に到達しようとした瞬間、突如として



黒い立方体が発光し、キリトの体を弾き飛ばした。そのまま床に叩きつけられたものの、駆け寄ったアスナに笑みを見せ、掌にあったものをアスナに渡した。

大きな涙滴型のクリスタル。

「これは？」

「ユイの心だよ。さつきGMアカウントでアクセスしてシステムに割り込みをかけて、ユイのプログラムだけを取り出してオブジェクト化したんだ」

「それじゃあユイちゃんは……」

「ああ、そこにいる」

その言葉に驚きを通り越して感動を覚えた。あの一瞬でシステムに割り込みをかけて自分の娘を救ったのだ。

「まったく、大したヤツだよ。お前は」

キリトは苦笑いを浮かべ、安堵の涙を流すアスナの肩に手をかけた。その光景に幸せそうに微笑むユイの姿が見えたような気がした。

## 第8斬：死闘

七十五層のボス部屋が発見された。

クォーターポイントであること、七十四層のボス部屋が結晶無効化空間であったことを踏まえ、今回は二十人の偵察隊を派遣し、先遣隊として十人がボスに侵入。

だがボス部屋の扉が突如として閉まり、次に開いたときには誰もいなかったという。

七十四層では結晶無効化空間ではあったらしいが、ボス部屋の扉は開いたままだったはず。結晶が使えるうえに退路も絶たれる。ファーストコンタクトがラストアタックになるわけだ

「今回ばかりはあんた以外死ぬかもな」

「その場合はそれまでだったということだ」

「それで？ 休暇中のあの二人も駆り出す訳か」

「そうでなければボスは倒せない。君も理解しているはずだ」

確かにあの二人が抜けた穴は大きい。

一人は戦力として、もう一人は士気として。

「感傷かね？ だが、契約を忘れてもらっては困る」

「分かってるよ。けどあんたも忘れんなよ。契約の報酬を」  
「承知しているとも」

二人とも悪いな。死地に駆り出すことになる。  
だけど俺にも譲れねえもんがある。

二十二層のログハウス。

気が重いな。何がつて、新婚生活を満喫してるあいつ等を駆り出さないといけない  
てことに。

ヒースクリフの野郎、わざと俺を指名しやがったな……！

わざわざ呼びつけてまで何のようかと思ったら、七十五層のボス攻略の為に休暇中の  
二人に参戦するよう説得しろと来た。

あの二人はユイの一件以来、何時にも増してイチャつくようになった。晩飯に誘ってくれんのはありがたいが、目の前でイチャつくのは止めて欲しい。

時節キリトのヤツがドヤ顔してくるもんだから、殴り飛ばしてしまったのは間違いないやねえだろ。

そうそう【軍】は、一気にその勢力を縮小した。

キバオウのヤツも除隊させられたとか。

シンカー器器具に対して水が多くなりすぎた結果が勢力を二分にぶんする原因になったわけだ。

などと思考を明後日の方向に投げやっても目の前の問題は無くならねえんだよなあ……。

ログハウスの玄関まで来たはいいが、どう切り出せばいいのか。

「アルト君?」

「メッセージも送らないで来るなんて珍しいな」

後ろを振り向けばキリトとアスナの姿。

どっかに出掛けてたのか、アスナの手にはバスケットが握られている。

「おう、二人とも。どっかに出掛けてたのか?」

「湖の主釣りに」

「凄い大きかったね。アルト君にも見せたかったよ」

新婚生活を満喫しているようでなにより。

見つかった以上、切り出さないわけにはいかねえよなあ。

肩を落とした俺を二人は不思議そうに首を傾げていた。

「アルトの奴どうしたんだ？」

「さあ？」

ログハウスに通され、取り敢えずヒースクリフからの用件とボス部屋の情報も知る限りのことを伝えた。

「説得するよう言われたが、ぶっちゃけ俺は来て欲しくはない。個人的には八十層が攻略されるまでな」

「用件は分かった。アルトの気持ちも嬉しい。けど行くよ、俺たち。それにアルト以外が説得に来てたら、追いついてたし」

「うん。アルト君にばかり負担がかかるでしょ？」

「はあ、全くお人好しだな。」

「ヒースクリフには了承したと伝えとく。日時はあとで知らせるから、それまで精々イチャついとけ」

「「アルト（君）!!」」

リアルの日時なら十一月七日。この日七十五層コリニアの転移門広場には多くのプレイヤーが集まっていた。

俺を含めここにいる連中は攻略組。ボス攻略の為に集められているが、キリト達はやはり目立つんだろう。周囲のプレイヤーはキリトの姿を見てざわついている。

「来たな」

「当たり前だろ？最後のクォーターポイント。死力を尽くさないと勝てないかもしれない相手だ」

「やるからには本気。アルト君の流儀でしょ？」

キリトとアスナだけじゃなくクライン率いる【風林火山】、戦う店長エギルの姿もある。

よく見れば、数は少ないが【軍】の団員もいるようだ。

「アルトにキリの字、久しぶりだなあ」

「よう、クラインまだ生きてたか」

「当つたり前よう」

「当たり前だろキリト。地球が滅んでも生き残つてそんな奴だぞ?」

「どういう意味だそりゃ?!」

G以上の生命力がありそうだ。

やいのやいのと談笑してたが、「血盟騎士団」のメンバーが転移してきたのをきつかけにプレイヤー達のざわめきが一気に消えた。

ヒースクリフは周囲を見回すと一度軽く頷いた。

「欠員はないようだな。皆、よく集まってくれた。状況は既に察していると思うが、これより始まる戦いは今まで以上に厳しく、熾烈なものとなるだろう。だが私は、君達のみならず突破できると信じている。——解放の日のために!」

ここから希少アイテム回廊結晶を使い、ここにいる全部隊を直接ボス部屋の前に転移する手筈になっている。

確かにその方が迷宮区を通つてボス部屋に辿り着くより部隊全体の消耗を抑えられる上に、足並みも崩れない。

ボス攻略の為とはいえ、希少アイテムを使うことに躊躇ためらわないとは流石懐が広い。

「では皆、ついてきてくれたまえ」

一度部隊全体を見回した後渦の中に足を踏み入れる。それと同時に奴の姿は消滅し転送された。そして続くように「血盟騎士団」の幹部クラスが続き、その後には部隊のメンバーが続々と光の渦に飲まれていった。

「皆、分かっていることだと思いが今回の討伐に際してボスのパターンは分かっている。基本的には前衛を我々K.O.Bが務め君達にはそれぞれ柔軟に戦ってもらいたい」

全員が頷くとヒースクリフは扉に向き直った。

「行くか」

奴が扉に歩み寄って扉に手をかける様子を他のプレイヤー達は緊張した面持ちで見ているが、俺は胸が高ぶるのを感じた。悪い癖だ。強い相手がいると聞くとついつい戦いたくなってしまう。

周囲を確認すると既に殆どのプレイヤーが抜刀していた。そして真正面を見ると巨大な扉は一人が通れるくらいまで開いている。

全員が抜刀し終えると、一番最後にヒースクリフが長剣を抜き、正面に掲げた。

「――戦闘、開始！」

力強い声と共に彼がボス部屋に足を踏み入れ、それに部隊全員が続く。

中に入ると部屋がドーム状であることが分かった。広さはかなりある。グリーンムアイズ戦の比ではないだろう。



そして皆が室内に入り中央辺りまで来た直後、背後で轟音と共に扉が閉められた。やはりボスが死ぬかプレイヤーが全滅するか出られない仕様の様だ。

けれどそれから少しづつ時間が経過しても一向にボスが出現しない。

「おい——」

沈黙に耐えられなくなった誰かがそう漏らしたが、部屋の上部で何かか軋むような、こすれあうような音がするのを感じた、瞬間。

「……上よ!!」

アスナが鋭い叫びを上げた。それにつられて全員が天頂部を見上げるとそこには巨大な百足のようなモンスターがいた。

人間の脊椎のようなものの節からは細い骨で出来た足が生え、頭頂部は人間の頭のよくな頭蓋骨が乗っかっている。けれどその頭骨は人間のものとはかけ離れており、窪んだ眼窩が四つ、その奥には敵意をむき出しにした蒼い炎が宿っている。顎には凶悪さをあらわすような牙が整然と並び、頭骨の両脇からは大鎌を思わせる鋭利な刃が覗いている。

表示されたカーソルにはHPバーと同時に名前が表示された。《The Skull reaper》直訳すれば《骸骨の刈り手》とも言うのだろうが、ゲーム風に言うなら《髑髏の死神》の方がしっくり来るだろう。

長いから骨百足でいいだろ。

全員がボスだと確信した瞬間、気持ち悪く天井を這い回っていたボスは自身の身体をささえていた足を一気に広げて部隊の上に落下してきた。

「固まるな！ 全員距離をとれ!!」

ヒースクリフの鋭い声に呆然としていたプレイヤー達が一気に距離をとり始めるが、反応が遅れたのか三人が逃げ遅れている。

キリトが三人に逃げるように叫び、奴らは我に返ったようにこちらに走ってくる。しかし、走り出すと同時に髑髏百足が降り立ちフロア全体が大きく揺れた。逃げ遅れた三人はそれに足を取られて纏れさせた瞬間、大鎌にも似た刃が彼等の身体を横薙ぎに薙いだ。

容赦ない横一閃の攻撃をまともに喰らった身体は宙を舞い、その間にもHPは凄まじい速度で減少する。その勢いは一気にイエローになったかと思うと、それに続いてレッドへ移行。

そして彼等のHPはゼロになった。

HPが底をついたことで三人の身体にノイズが走り、ガラスが割れるような音と共に空中で砕け散った。

その光景にアスナが息を詰まらせキリト達が愕然としていた。今回の攻略組のパ一

ティーのプレイヤーは皆上位プレイヤーだ。レベルも殆どが八十五を越えているだろう。

先ほどの三人であつてもそれは同様だ。しかしそんな奴らでさえもたった一撃。

「最終クォーターポイントらしい鬼畜難易度だな」

軽く肩を竦めつつも骨百足を見据えると、ヤツは別のプレイヤーの一团に狙いを済まして向かつて行く。プレイヤー達は恐怖で逃げ惑うが、容赦など一切ない大鎌が振り下ろされ、それを防ぐようにヒースクリフの十字盾が阻む。骨百足はもう一方の鎌を振り上げてプレイヤー達を薙ごうとした。

全力で地を蹴り、突き立てられようとしていた鎌の真下まで行くと大剣を下段に構える。同時に黄色の光が刀身を包み、大鎌と大剣が激突した。

「らああ!!」

雄たけびと共に大剣は振り抜かれ、火花と共に黄色の燐光が弾ける。スキル《ライジングドラゴン》。

この攻撃は無意味ではなかったようで、骨百足を見ると大きく身を仰け反らせている。

「デケエ鎌は俺とヒースクリフで請け負う! テメエ等は足を掻い潜って一撃離脱を最優先! ぜってえ深追いすんな!!」

「ふむ。見事な采配だ。指揮官としての素質があるのではないかね？」

「ハッ！冗談！俺に人を率いる資格なんざねえよ！」

鼻で笑いながら返すが余裕がある訳じゃねえ。

ヒースクリフと入れ替わり立ち替わり骨百足の大鎌をソードスキルで弾き、鉄壁の盾で阻む。

その間も全部隊が、絶え間なく骨百足を体を攻撃しているが、防御力が桁外れなのかHPバー一本辺りの総量が多すぎるのか。

未だ一本目のイエローゾーンにすら届いていない。

「耐久じゃこっちの分が悪いっつーのに！」

死闘は始まったばかりだ。

遂に骨百足の巨体がダウンした。

一時間以上掛かったか？ようやくラスト一本のレッドゾーンにまで削ることができたわけだが、正直生きた心地がしねえ。

ポリゴンが弾ける音と悲鳴。正面に陣取った俺は一つでも捌き損ねれば即死。

だが、一度ダウンすればあとは削りきるだけだと思っていた。すべての足を切り離し、蛇のように這いずるのを見るまでは。

自切行動とか蟹かよ!?

「クソがつー!」

先程まで以上の速度の速度で動き回り、その攻撃力をもってプレイヤーに襲い掛かる。

高火力・高機動を両立させたその形態に悪態をつく。

バランスブレイクどころの話じゃねーぞ!?

幸運なのは形態変化の間も攻撃が集中したお陰か、ヤツのHPはあと数ドットであることか。

一撃でも加えられれば勝敗は決するが、如何せん速すぎる。

タイミングを図り損なえば骨百足に轢き殺されるか、巨体で磨り潰されるか、あの鎌で両断される。

相討ち覚悟でやるしかねえ……!!

恐怖はない。胸が張り裂けんばかりに脈動するが、死を乗り越えんとばかりに全身に力がみなぎる。

もちろん幻覚かもしれない。それでも出来る。俺ならやれる！

骨百足の正面から突貫し、ヤツの間合いに侵入する。キリトの制止する声が聞こえるが、既に鎌の一撃は放たれた。

右からの攻撃を地面に倒れんばかりに姿勢を下げることでやり過ぎし、時間差で振られた左の鎌を身を捻りながら飛び上がって回避する。

目の前には轢き殺さんばかりに迫る骨百足の頭蓋。

「いい加減！くたばれええええ!!」

身を捻った勢いそのまま振りかぶった「フアラン」をヤツの眉間目掛け振り落とす。

結果は直撃。ヤツのHPをゼロにすることに成功したが、その勢いそのまま撥ね飛ばされ無様に地面を転がることになった。

くそ、あのまま着地して決めるつもりだったんだが……。

レッドゾーンに入り、減り続ける自身のHPを口に運んだハイポーションの回復量で打ち消す。

「無茶するなよ……」

「結果オーライだ」

差し出されたキリトの手を取り立ち上がろうとするが、結局その場に座り込むのが精々だった。

「うへえカツコ悪い」

二つ目のハイポーションでようやく回復量が上回ったんだろう。HPがグリーン手前のイエローまで回復した。

全く冷や冷やさせる。

熱血かと思えば冷めていて、クールかと思えば表情豊かで、脳筋かと思えば頭が回って、捻くれてる。

でも芯が強くて我を押し通す信念がコイツにはある。

俺にはない確かな強さを持つている奴で、正直に言えば、尊敬している。相棒と言われたときは嬉しかったし、アスナにはアルトの話ばかりだと呆れられたこともある。

ガキは嫌いだとか言いながら、孤児院の子供たちには戦う以外の強さを教えていたし。口ではあーだこーだ理由をつけるが、なんだかんだ言っつて力を貸してくれるそんな奴だ。

だからこそコイツだけには負けたくない。

「何人死んだ」

「二十三人」

「そうか」

でもたまに見せる無感情さには、言い知れない何かがある。

自分が興味のない人間の名前は憶えないし、助けようともしないこともあった。今、亡くなった人数を教えても人ではなくその数字に反応したように見える。

でも一先ず七十五層のボスは攻略した。

みんな疲れてるみたいだし、転移門をアクティベートして街に戻ろう。

アルトから離れアスナの隣に座り周囲を見渡せば、みんなその場に座り込んでいる。

無理もない。それだけの死闘だったんだ。精神的な疲労は計り知れないだろう。

その中でただ一人、ヒースクリフを除いて。

やつぱりHPがイエローまで落ちてない。

ポーシオンを使っていた様子はなかった。バトルヒーリング【戦闘回復】スキルを使っていたとしても

イエローにもならないなんてあり得るのか？

その時頭の中でないかが噛み合った。

ボス戦でもイエローに落ちないHP、ユイのシステムの不死、そして以前のデュエル。

「キリト君？」



まだ誰も気付いていない。確かめるチャンスは今しかない……！  
気付かれないよう中腰になり、そのまま駆ける。

座り込むプレイヤーを避け、奴と直線になった瞬間にソードスキルを発動する。

片手剣の基本スキル《レイジスパイク》

突きを繰り出すこのソードスキルは、俺が使うなかでも最速を誇り、突きという特性上最短距離で奴に届く。

ーははずだった。

見馴れた夕日を思わせる鮮やかな紅色の光に包まれた、これもまた見馴れたーいや、毎日のように見ていたあいつの大剣が俺の剣を下から弾き上げたのだ。

「なんで……どうしてお前が……？」

俺の前に立ちはだかったのはー

「どうしてだよ!?! アルト!!」

## 第最終斬：譲れないもの

「どうして……どうしてだよ!?アルト!!」

俺の絶叫に大したリアクションもなく鼻で笑うだけだった。

「大した理由はない。言うなれば利害の一致だ」

利害の一致? ヒースクリフに協力することでなにか優遇されることがあるのか?

「俺とお前は性格は真反対な癖に思考は似ている。考えたはずだこのゲームの創造主、茅場晶彦はどこで監視し調整をしているのかってな」

……そうだ。でもそれと利害の一致になんの関係が?

「これが答えだ」

後ろを振り向かないまま、「フアラン」を一閃。

その切っ先はヒースクリフの喉元に届く寸前、SAOプレイヤーには有ってはならない現象によって阻まれる。

【Immortal object】

システムの不死。

システムによって保護され、決して殺すことのできない存在。

つまり……。

「そう……S A Oきつての最強が茅場晶彦だったわけだ。最強が一転、最悪のラスボスとはなかなか俺好みの展開だな、先輩」

「楽しんで貰えたようだなによりだ。そう私こそがこのゲームの創造主、茅場晶彦本人だ。本来であれば九十五階層で正体を明かす予定ではあったが……やはり君の言う通りだったようだ、アルト君」

「だから言つたろうが、アンタと直接戦つたキリトは勘づいてるつてな」

「確かに。しかしこんな早く看破されてしまうとは思わなかったがね。やはり君達はこの世界において不確定因子だったわけだ」

何を……何を言ってるんだ？

「先輩……？」

「……ああ、言つてなかったか？俺と茅場は同じ大学の先輩後輩だ。つってもS A Oが始まる少し前にやっと会話した程度の仲だけだな」

「お互い自分の興味のあることしか頭に無かった、とも言えるがね」

「言ってる」

「……つまりお前は最初から？」

「この世界にはいるだろうとは考えてた。カーディナルだって完璧じゃねえ。必ず茅場

本人が細かい調整をする必要がある。外部からじゃなく内部から見ねえと分からねえこともあるからな。まさか最強ギルドの頭とは思っても見なかったが」

ヒースクリフは目を閉じて笑みを浮かべたが、彼の横で【血盟騎士団】の団員がゆつくりと立ち上がり、戦斧を構えた。男の瞳には耐え難いほどの苦悩の色が広がっており、表情は憎悪に満ちていた。

「俺達の忠誠——希望を……よくも……よくも!!」

「大事なメイスイベントの最中なんだ。ゲーマーならスキップが出来ないことくらい分かるだろ?」

降り下ろされた戦斧を鉤短剣でいなし、がら空きになった男を蹴り飛ばす。

「茅場」

「やれやれ」

ヒースクリフ、いや茅場はウインドウを操作するような仕事をすると、生き残ったプレイヤーが俺を除いて崩れ落ちた。

HPバーを見てみれば麻痺のバッドステータスの表示。

「ここで全員殺して口封じでもするつもりか」

「そんな理不尽なことはいらないさ。だが、こうなってしまった以上、私は予定通り《紅玉宮》で君たちが訪れるのを待とう。しかしその前に、私の正体を看過した君たち二人に

は報奨を与えねば」

「報酬、だって……?」

「彼が私の正体を見破り、私とデュエルする権利を与えようとしたのだが断られてしまつてね」

「当たり前だ。途中で終わるゲームほど萎えるものはねえ。その代わり、ある条件をつけたのさ」

九十五階層までに俺がヒースクリフの正体を見破れなかった場合、茅場とアルトがデュエルし勝てばゲームクリアとしてその段階で生き残ったプレイヤー全員を解放する。

その代わり、アルトは茅場の指示に従う。

そして見破った場合――

「俺とお前が戦い、生き残った方が茅場と戦う。単純明快だろ?」

どうして……

「どうして俺なんだ……?」

「どうして、どうしてか」

その時に初めてアルトは笑みを溢した。

でもそれは、いつも俺をからかった時に見せる笑みではなく背筋が凍りそうな初めて

見せる顔だった。

「俺とお前は対極だ。反発し合うくせに息が合うし、どうしようもなく引かれ合う。ああ、恋愛なものじゃないぞ?」

いつもの軽口を叩くが言い返せない。

確かに息が合うが、意見の対立もすることもあった。

でも、ソロで行動してるときもアルトならどうするだろうと考えたこともある。

「人間、どこまで文明を発達させようが所詮はエテ公。誰が一番上か証明しないとままならない。つまり、俺とお前。どっちが上かはつきりさせようってこった。わかったか?」

「分かるわけないだろ!」

「分からない? 違うな、分かるうとしてねえだけだ。構えろキリト。今の俺はお前の……敵だ」

言い終えるよりも早く飛び上がったアルトは頭上から「ファラン」を降り下ろす。

大剣の重量、アルトの筋力値から放たれる一撃はまともに防げば防御ごと叩き潰される……!

地面を転がるよう身を投げ凶刃を避ける。

「ダメだ! 戦う理由がない!!」

「理不尽はいつだつて襲ってくる！理由がない？甘えこと言つてんじゃねえ！理由がなくとも戦わなきゃならねえことだつてあんだよ！」

首を狙つた短剣をバックステップで避け、駒のように体を回転させて振り抜かれた大剣を交差させた剣で受ける。

距離を開けようにも回避先を読まれているかのように体を割り込ませてくる。

「どうして俺たちが戦わなくちゃならない!？」

「どちらが上か決めるためだと言つたはずだ！」

「今じゃなくてもいいだろ!？」

「違うな。リアルな命とリンクしている今だからこそだ！所詮ゲームだからと心のどつかでブレーキが掛かることもねえからな！」

命を賭けた全力の戦い。

それこそがアルトが求めた俺との決着。

でも……それでも……！

「お前とは戦えない！」

暴風のような連撃から逃れ、距離を取ることができたけど剣を構えることができない。アルトとは肩を並べ背中を預け今まで一緒に戦ってきた。そんなアイツと戦うなん



てできない。

けれどアルトはどちらかが死ぬまで戦おうとするはずだ。

アルトを殺したくないし、殺されたくもない。

「どうしても、か」

俺の気持ち传达ったのか、武器を下ろす。

分かってくれたのだ、と考えた俺が甘かった。

「なら、戦う理由を作ろうか」

アルトが歩き出した先には麻痺によって動けないアスナの姿。

まさかー

「ア、アルト君……嘘、だよね……？」

「赦<sup>ゆる</sup>るしは請わねえ、怨めよ」

「やめろ……」

アスナは先のボス戦が終わってから回復してない。アルトの攻撃を受けたらー

「やめろおおお!!」

振りかざした大剣が断頭台の如く振り下ろされるよりも早くその背中へと疾走する。

アルトは……敵だ!!

「アルトオオオ!!」

ヤツの体を挟み込むように左右から剣を振るう。

が、こちらに向き直りながら振り下ろしから振り上げへと変化した大剣で「ダークリ  
パルサー」を短剣で「エリユシデータ」を受け止める。

「ようやくその気になったか」

「……お前を、殺す!!」

何十合と打ち合っただろう？

十？二十？

それだけ斬り結んだというのに短剣によるパリイを警戒するあまり攻勢に出れない。

右の突きをアルトの左腕が蛇のように絡み付き、ヘッドバッドをもらう。

仰け反りながら空きになった腹にアルトの左膝が刺さり、宙に浮いた俺に追撃とばかり

に右のソバット。

「どうしたキリト!? 剣で斬り結ぶだけが戦いじゃねえだろうが!」

「く、うおおお!!」

向かってくるアルトを左の突きで向かい打とうとするが、切っ先が届く寸前ヤツの姿が消えた。

いや、消えた訳じゃない!

スライディングのように地面を滑り、左手の短剣をブレーキのように突き刺していた。

同時にそれを支点に回転。下から襲ってくる大剣を「エリユシデータ」で受けるが弾かれる。全身をバネのように反回転、さっきの軌道を逆になぞるように振り払う。これも「ダークリパルサー」で受けるが無意味とばかりに防御をこじ開けられた。

止まるかと思せ、大剣を真上から地面に叩きつけ反動を利用しながら一回転つつ跳躍。そして放たれる遠心力、重量、腕力。すべてを乗せた正に全力の一撃。

両手は弾かれ、引き戻すのは間に合わない。

下がって最小限のダメージで凌ぐ!

数歩下がり、後ろに身を投げるが切っ先が体を掠めただけで吹き飛ばされた。

「甘いなキリト。それがお前の全力じゃねえだろ?」

「っ……………」

「止めろ！アルト！お前とキリトが戦う必要はねえだろうが!!」  
クライン……。

「こんなのおかしいよ……!! やめてよ二人とも！」

アスナ……。

ごめん。止まらない。

そんなことがあっても、コイツだけには負けたくないんだ！

「全力で来い！俺を殺して見せろ！」

「ああああああ!!」

左の剣が降り下ろされた大剣によって防がれ、右の剣を振るおうと力を込めた瞬間、

飛び上がったアルトの蹴りを屈んで避ける。

突き上げた右の剣を短剣で弾かれ、下から掬い上げる大剣を身を捻ってやり過ごし、勢いを乗せた両剣を水平に風ぎ払う。

アルトは着地することなく背中から地面に倒れ、鼻先を掠めながら避け、逆立ちの要領で立ち上がる。

一進一退。その攻防は十分以上続いている。それでも食らいつきアルトの間合い、さらにその内側に張り付くことができていた。

「キリトおおお!!」

「アルトおおお!!」

アルトの顔は隠しきれないほどの喜色に満ちていた。

戦いを、殺し合いを心の底から楽しんでいる。

自身より強い敵と戦うことを楽しんでいる節は前からあったが、ここまで感情を出すことはあまりなかったはず。

いなし、捌き、防がれる。

避け、逸らし、やり過ごす。

大振りな大剣と小回りの利く短剣によって巧みにそして的確に処理される。

凶刃を両手の剣と体を使って紙一重で処理する。

互いのあり方が対極と言った意味が分かった気がする。

戦い方一つとっても正に両極だ。

強い。

本気で戦ったことがない訳じゃない。でも、全力でぶつかって初めて分かった。今まで戦った奴の中で一番強い。未来予知染みた先読みに攻撃方法の選択、体捌きに防御。どれもがS A Oプレイヤーの中でも抜きん出ている。

実力は拮抗。互いの手札が解っているからこそ一つでも読み違えれば、そこから切り崩される。

その拮抗も崩れることになった。

左の突きを短剣で往なされ、勢いのまま走る俺をアルトは後ろに回り込んで、大剣を振り落とす。

咄嗟に横に飛ぶことで体に当たることこそ避けることができたが、「ダークリパルサー」の刀身に直撃し、耐久値にまだ余裕のあったそれを一撃で碎かれ、左手から消失。それに構わず時計回りに体を回転、首を狙った短剣を弾き返しアルトの体が完全に開いた。

払った右腕を肘を曲げることで引き戻し、切っ先をアルトの胸目掛け「エリユシデー」を突き出す。

これで終わる！アルトを殺して……………殺して……………？

その瞬間、今まで共に過ごしたことを頭に過った。

からかわれ、馬鹿にされながらも、背中を預け、肩を組んで大笑いしたこともある。

一緒に馬鹿やって、一緒にアスナに怒られて……………。

「躊躇ったな」

「しまっ……………」

意識が引き戻されそして見た。

弾き返したはずの短剣が平突きで繰り出した刀身に引っ掛かっている。

外側へと弾かれ、次に体が開いたのはこちらだった。

「言っただけだ全力で来いと。見ろ、躊躇した結果がこれだ！」

繰り出されるのは俺と全く同じの平突き。

ただし、アルトの剣には鮮やかな青の光を纏っている。

時間が引き伸ばされ、迫る大剣がひどく遅く感じる。

パリイされた影響が引き伸ばされた時間の影響か体が全く動かない。

ソードスキルの一撃はダメージ補正がなくても容易く俺のHPを削りきるだろう。

俺……………死ん……………

「キリト君!!」

何故かは分からない。でも結果的に言うところアルトの剣は俺の頭上を掠めた。アルトが外した訳じゃない。

アルトは初めて見せる驚きの表情でこちらを見下ろしている。

驚きは一瞬、信じられないことにソードスキルの光を纏ったまま大剣の刃を返して振り下ろそうとしている。

それを知覚した瞬間、考えるよりも早く反射的に体が動いた。

しゃがんだ状態のまま体を捻り、飛び出しながらの横一闪。

ソードスキルの光を纏ったままの縦一闪。

「……………」

誰もが固唾を飲み耳が痛いほどの静寂が訪れる。



「ああ……クソ……やっぱ強いなあ……お前は<sup>キリト</sup>」

アルトは崩れそうな体を気合いのみで立て直し、上を仰ぎながら掠れるような声で呟く。

手が震える。

俺は何を斬った？反射的とはいえ、俺が斬ったのは……

「気に病むなよキリト……お前は裏切り者を始末しただけだ。それに俺が望み、その上での決着だ。お前に殺されるなら……ああ悪くない。裏切り者の最後としてはな。茅場……このゲーム最っ高だった。アスナ、悪かったな……怖がらせた。クライン……本当は戦う必要はなかったのかもしれない。けどな、俺はそれしか知らねえんだ」

肩越しに俺を見た顔はどこまでも穏やかだった。

「生きて帰れよ？相棒……お前なら茅場にだって負けねえよ」

「アルト!!」

肩に触れる寸前、無数のポリゴンとなってアルトの体が砕け散る。その光景が目には焼き付き、膝から崩れてしまう。

「アルト君……………」

「アルト……………」

アスナもクラインも言葉がでない。

何も考えられない。

手にはまだアルトを斬った感触が生々しく残ってる。

メッセージの着信に意識を向けると差出人は

アルト? どうして…………? 今日の前で…………

『必ず勝て』

恐らく自分が死んだ場合、自動送信されるように設定されていたようだ。添付アイテムがありそれをオブジェクト化。

スケールダウンされて片手剣の分類になってるけど、これってアルトが使ってた大剣

…………?

ステータスは「エリユシデータ」と同等。だけど「エリユシデータ」よりも遥かに重

い。

「いやはや、HPがゼロになったにも関わらず十秒以上留まり続けるとはね。システム

を凌駕する堅牢な意思のなせる技、か。さて、アルト君の契約通り生き残った者と戦わねばならないのだが、キリト君はもはや戦意を喪失している。戦う意志を持たない者と戦うというのは契約外。よって私は《紅玉宮》にて君たちが訪れるのを――

「待てよ」

この剣の重さはアルトの意志そのもの。大きすぎるものを託されたんだ。ここで折れるわけにはいかない!!

「まだだ……まだ、終わってない!!」

「その剣は……成程、全くもって彼らしい。自身の命すら利用価値のあるもの、というわけか」

左手に握られた剣を見た茅場は少し驚いた表情を見せた後、ウィンドウを操作する。

本当にアイツらしい。アイツが悪役を買って出るときはいつだって誰かのためだった。

そして、自分自身を俺に殺させることで暗に伝えている。

『ここで立ち止まることは許さない』と。

アイツのことはSAOにいる誰よりも理解していたはずなのに……。

「戦意を取り戻したならば、このゲームのクリアを賭けた勝負といこう。オーバーアシストも不死設定ももちろん解除する。HPは互いにイエローからだ」

レッドまで落ちたHPがイエローの半ばまで戻る。  
システム権限一つで、なんでもありだな。

場違いな感想を抱きながら、両手の剣を握り直す。  
頼むアルト。力を貸してくれ。

『しようがねえな、相棒』

そんな声が確かに聞こえた気がした。

### 次章予告

——アルトを制し、ヒースクリフとの最終決戦に辛うじて勝利した俺は、現実世界へ

帰還することが出来た。

それでも一緒に戻れたはずのアスナが目を覚まさない。

アスナだけじゃない未だに三百人もの人たちが現実に戻れていない

そんなときある一通のメールによって事態が動き出す

「アスナらしきプレイヤーがいるのはALLO。アルヴヘイムオンラインというゲームの中らしい」

手がかりを求め、偶然知り合った女の子と共に目指す世界樹。そしてその世界の真実を知る。

「優れた王には優れた騎士が付き物だろうか？」

本当は戦いたくなんてなかった

ずっと後悔していた

他にもやりようがあったんじゃないか、と

俺の行く手を、深淵の監視者が阻む。

次章アルヴヘイムオンライン

《The Abysss Watcher》

過去の罪が迫る

## 幕間

## 虚栄の英雄

「つらあー！」

水平に切り払った後、さらに体を回転させ遠心力を乗せた一撃で逆袈裟に斬り上げる2連撃ソードスキル《ノリブス》で《トレ<sup>牛</sup>ンプリング<sup>擬</sup>・オックス<sup>き</sup>》をかち上げ、仰け反ってまま爆散した。

《イルファング》を倒し、前線が第二階層へと上がってから1ヶ月が経とうとし、明日階層主へと挑むことになっている。

それにしても牛擬きを見てたら肉が食いたくなってきた。分厚いステーキなら尚良し。

「……………こいつも限界だな」

一階層で手に入れた《バスタードソード+5》の耐久値を見ながらぼやく。

強化を都合五回繰り返し、火力面では問題はないが耐久値の伸びが雀の涙程度。そろそろ代わりとなる物を手に入れたいが、情報どころか噂も聞かない。

「お、アルトも武器の噂を聞いたのか？」

「……ああ真つ黒黒助か」

「名前を覚えろ！色で人を判断するな！」

ギャンギャンうるせえなあ。個人を特定出来てる分まだマシンなんだぞ？

「つか噂？」

「この先の洞窟で手に入るらしい。とは言つてもドロップする武器種はランダムだし挑戦できるのは一回だけ、しかも一層の武器もドロップすることもあるらしい」

「行き当たりばつたりの運試しか」

プレイヤーのリアルラックを試されるのか。その分、強力な武器をドロップするかもしれない。

「悪いことばかりじゃないぞ？パーティを組んでメンバー全員にドロップしたらしい」

「吉報とは言い難いな。要はパーティーメンバーの中で武器性能のバラつきが出るってこつた。仲良し小吉のなあなあで付き合ってる仲間内なら兎も角、命が懸かっている現状じゃ妬みの対象にしかならねえよ」

「そいつを寄越せえ!!」

「こつちに来るなあ!」

テメエばつか美味しい思いしやがって!

何がどうしたかと言えば、真キつ黒黒助トの野郎が両手剣をドロップした。

アイツの話じや二階層で手に入る物の中では上位に食い込む性能らしい。しかも野郎は使わずにコレクションに加えると宣のたまいやがった。

「渡すから! 無料でいいから勘弁してくれ!」

不当な暴力に屈した瞬間である。

「よしー!」

「よしー! じゃない! ……つたく、そういえばアルトはちゃんと休んでるのか? 街であまり見掛けないし……」

「ここ最近はあるま寝てないな。街には戻るが人目のつかない場所で休むぐらいだ。宿屋の鍵じや《開錠》スキルがあれば開けんだろ?」

「スキルの熟練度にもよるな。もつとも、この段階でそれぐらい出来るのは人に言えないようなことをしてる奴だろうけど」



だつたら尚更だ。信用もできねえ人間がいるところで寝るなんて出来るか。

「で？そんなこと聞きに来たわけじゃねえだろ？」

「まあな。実はー」

知り合いの武器強化を鍛冶屋に頼んだところ、その武器が破損したと。だが《全アイテムオブジェクト化》によって破損したはずの武器が手元に戻ってきた。

武器強化による破損はエンド品、つまり最大強化した武器を強化した場合にしか起こらない。

武器強化を騙った詐欺行為であることは間違いない。

強化を依頼された武器を、強化を行う最中に何らかの方法でエンド品と交換し、武器が壊れたという証明にするのだ。そして、手元には依頼者の武器と素材、手数料が残る。エンド品は無強化の同じ武器に比べてかなり安く取引されるので、差額を考えればかなりの儲けになることだろう。

「つーか、答えなんざ殆ど出てるもんだらうが」

「え？」

「人を呪わば穴二つ。誰かを騙してんならそれ相応の報いを受けるべきだ。個人か組織的なもんなのかは知らねえし興味もねえけどよ、いずれバレて罰せられるのも覚悟の上だろうよ」

「お前……まさか……」

「言い触らす、なんて趣味じゃねえが今後の攻略に支障が出てこられると迷惑だ。なら早々に不安要素は排しておくべきだろ？」

「もしかしたら殺されるかもしれないんだぞ?！」

「だからどうした?言つたろ、罰せられるのも覚悟の上だろうつてよ。人を騙したツケをテメエの命で払うことになる。それだけだろ」

それだけ……お前……本気で……。

鍛冶屋ネズハは《フルダイブ不適合<sup>F</sup>》で遠近感覚にハンデを負ってる。

彼が所属してる「伝説の英雄たち<sup>レジェンドプレイヤーズ</sup>」が彼を見捨てず遠近感覚に左右されない《投剣》スキルを習得させたものの実用的ではないことが判明。そして運の悪いことにその時にはすでに攻略組と彼らは埋め難いレベル差があった。

失意のなか《黒いポンチョの男》に今回の武器強化詐欺を教えてもらったのだと言う。近接職<sup>ソートマン</sup>が習得できる派生スキル《クイックチェンジ》を利用した強化詐欺を。

『はじまりの街で引きこもっている？……そんなことになるなら、ただ腐るのを待つくらいなら……!』

死んだ方がマシだ。

彼はそう言った。

それでも戦う武器を手に入れ、今回のボス戦で戦えることを証明して詐欺行為を働いていたことを謝罪するとそう言った。

「お前は人の善性を信用しすぎだ。親愛や友愛よりも悪意の方が強い。どうしてか分かるか？」

「どうしてって……分かるわけ無いだろ」

「ま、そうだよな。人間には野性動物みてえな外敵が少ない。結果、人間の攻撃性は他の人間に向けられ易いのだ。愛が深すぎれば憎悪になるように、羨望が嫉妬になるように、善は容易く悪に反転する。信を裏切れば敵意を抱くのは普通だろ。そいつ、そいつらが死のうが殺されようが、リンチにあつてボロ雑巾になろうが、俺に実害が無ければどうなろうと知ったことか」

《アステリオス・ザ・トールスキング》を打ち倒し、事態が動いた。

アルトが行動を起こしたんだ。武器強化詐欺をプレイヤーが集まっているこの瞬間に広げた。

階層攻略に赴いてるプレイヤーたちはネズハと【伝説の英雄たち】レジェンド・プレイヤーズを殺せと声高に叫ぶ。

「まあ聞けよ。殺したらそこで終わりだろ？ソレじゃつまらない。どうせなら馬車馬の如く働いてもらって、手に入ったりソースを被害者に分配する。そうすれば実利も入るし、楽もできる。悪い話じゃねえと思うが」

それに嘸み付いたのがキバオウだった。

「ジブンなに言うてんのか分かつとんのか？人の命を軽々しく物みたいに言いおつて！何様やー！」

「別に俺は被害者じゃねえし、どっちにも肩入れするつもりもねえ。ケジメの付け方を提案してるだけだ」

「ケジメやと？」

「そうだ。殺しちまえばそこで終わり、その場の感情でその後の利益を失うのは勿体

ねえって話だ。こいつらが手に入れた金は使っちゃまったんだろ？なら、こいつらを殺しても手に入るのはこいつらが持つてる武器だけ、なら生かして利用できるだけ利用して絞りカスになったら捨りゃいい。お前らは手を汚さずリソースを手に入れる。人命が大事なら精々死なねえように見張つてりゃいい」

パアン、と叩く音がボス部屋に響いた。

「……満足か？お嬢様」

「最っ低……」

そう言い残し、アスナは足早に上層へと向かっていった。

「まあそんなわけだ。生かすも殺すもお前らの自由。その場限りの実利を取るかその後の利益を取るか、好きな方を選べばいい」

「アルト！」

三階層へと上がり、やっと奴に追い付いた。

「……ああお前か。俺を殴りにでも来たのか？」

「ああそうだ。けどその前に聞かせろ。なんであんなこと……助けるわけじゃなくその場を乱すだけ乱して……」

「その様子だと殺された訳じゃねえみてえだな。なら良かったじゃねえか殺されずに済んで」

「そういう問題じゃない！ネズハもブレイブスのメンバーも無茶な攻略をして死ぬかもしれないんだぞ！」

「かもな。けどあのままじゃその場で殺されてた。無駄な延命かもしれねえが、その場で殺されるよりはマシだろ」

延命？

「昨日言つたろ？今後の攻略に支障が出てこれると迷惑だつてな。攻略に参加できるパーティは少しでも多い方がいい。リソースを稼ぐためにあちこち動き回ってればレベルも上がって攻略組との差は縮まるし、攻略組の物資も確保できる。問題はレジエンドなんちゃらって奴らだけじゃ攻略組の物資を確保するのは難しいってことなんだよなあ。攻略組以外に物資を提供できる組織でもありやいいんだが……」

「攻略組を支える調達組……」

「お？いいなそれ。その調達組がいりや攻略のスピードも上がるだろうよ。もつとも詐

欺の被害に遭った連中がアイツらを許せば、だけどな」

「……取り敢えず歯を食いしばれ」

「VRなんだから必要ねえと思うっ!!」

握り締めた拳を腹目掛けて下から突き上げるように殴る。

「……歯あ食い縛った意味……」

「ちよつとは事前に教えてくれてもいいだろ。アスナだつて……」

「お前らの演技力には不安があつたからな。反省も後悔もしてねえよ。何かあつても恨まれんのは俺だし、疎ましく思われんのは慣れてるしな」

「そうだろ? ビーターさん。」

「そう言つて皮肉げな笑みを浮かべるのだった。」

## 凶刃の思い

「死ねー！【凶剣士】！」

「うざってえ！黙って寝てろ！」

複数のプレイヤーによる襲撃に遭った。

手持ちの武器は失い、ポーシヨンも底を尽き、止めに入る者もない。

口は災いの元と言うが、まさにそれを体験する破目になった。もつとも誰かと仲良くするつもりもねえし、打算ありきの繋がりもごめんだ。

《体術》スキルでなんとか対処できてるものの数の差、なにより殺されることがないという慢心が奴らを駆り立ててる。

きっかけは……なんだったか。心当たりが多すぎて思い出せないが、誰かの恨みを買うなんざいつもの事だしこうして実力行使で来られるのも……まあよくあることだ。

グリーンの俺を攻撃して奴らのカーソルはオレンジに変わってる。そのお陰で遠慮なく反撃できるんだが、如何せん数が多い。

攻撃を捌いて反撃しようにも別方向からの攻撃にも対応しなきゃならない。そうしてる間にも切っ先が掠め徐々にHPが削れられていく。



殺さないように手加減はしてるが、それが余計に奴らを助長させてる。

『コイツは俺たちを殺さない。殺せない』

全くもって面倒だ

こいつらは所詮有象無象。俺にとってはその他大勢、関わりもない路傍の石に過ぎない。

生きてようが死んでようがどうだっていい。

「……調子に乗んな。そんなに死にてえなら今ここで殺してやろうか!」

「っ……怯むな! 数の差は——」

「そこまでよ!」

他のプレイヤーも通り掛からないであろう十九層の片隅に聞き覚えのある少女の聲が響く。

「あの装備……【血盟騎士団】の……」

「PK行為の通報があり、【血盟騎士団】のメンバーがこの階層を搜索中です」

「ちっ……退くぞで」

忌々しげな舌打ちを溢し、少女の脇を抜けて奴らの背を見送り視線を少女へと戻す。

「高々プレイヤーのPKに【血盟騎士団】が動くわけねえだろ。嘘ならもつとマシな嘘にしたらどうだ、お嬢様」

敵意を隠さない瞳は以前より鋭さを増していた。

主街区の門の前で再び少女と向き合う。

「まさか命を拾われるとはな。てつきり嫌われてるもんだと思つてたぞ、お嬢様」

「ええそうね。私もあなたを助けることになるなんて思つてもいなかった。でも一層で借りもあるし、これで貸し借りゼロ」

貸し？なんの事だ。

「偉そうに説教しておいて覚えてないのね。それとも覚えておくほどの利益も実利もな  
いってこと？」

「説教？……ああ、あれか。説教のつもりもねえし、ただ単に俺の考えつてただけだ。理解も共感も必要ねえ」

人として大事な道を違えてる自覚はある。それでも俺は俺だし、今さら考えを変える

気もない。

「そうやって周りを拒絶して格好付けてるつもり？人を侮辱して貶して蹴落として、貴方は何がしたいの！」

「生き残る、それだけだ。その為に利用できるものはすべて利用する」

「それが人の命でも？」

「利用する価値があるならな。それが嫌なら主街区に引き込もるなり、前線に出て来なきゃいい。そうすりゃ俺と関わることもねえだろ？」

「自分勝手ね。協調性の欠片もない」

「付和雷同、日和見、事なかれ主義者の偽善よりはマシだろ。口を噤つぶんで周りの顔色窺うかがつて唯々諾々と従う奴よりはな」

お嬢様の眉間に寄った皺がより深くなる。

「その点で言や、及第点だよお嬢様。現にこうして俺に噛み付いてる。遠慮も配慮もなくな」

それができてりや上出来だ、と皮肉げな笑みを溢し人を見下したような物言い。

『口は悪いけど根は悪い奴じゃない……多分』

キリトくんはそう言っていたけど、この人のどこがいい人なのか。他人を見下して利用して、自分が生き残ることを考えてる。

「そう睨むなよ。俺にソツチの趣味はねえし、それにせつかくの美人が台無しだぞ？」

「あなたに褒められても嬉しくないわ」

「ならキリトには？」

「な、何でキリトくんの名前が出てくるの!?!キリトくんに褒められても別に私は……!」

「はは、顔を赤くして吠えても説得力がなあ」

冷静に、冷静によ明日奈。弱味を握られたら何をさせられるか——

「初々しいもんだ。その想いを成就させてえなら精々死なねえように頑張んな」

「待って」

雑踏の中に消えようとする彼を呼び止める。

「貴方は人をどう思ってるの？」

「それは個人か？それとも総体か？」

「両方」

「……人間は好きだ。何かを成し遂げようとする奴は特にな。泥でまみれても、汗だく

でも、その挙げ句みつともないと言われてようが、そいつがその果てに何かを成し遂げられるなら喜んで手を貸す。逆にテメエ自身の魂を腐らせてる奴は悉く否定してやる。俺も少し前まではそうだった。もしかしたら同族嫌悪ってやつかもな」

人が好きだから道を間違えた人を見ていられない。

それは多分過去の自分を重ねているから。

何があつたのかは聞いても答えてはくれないだろうし、その権利は今の私にはない。

「全てを頭ごなしに否定すんのは簡単さ。多分、周りからは俺はそう見られてるかもしんねえけど、そんなことはねえからな？ そいつを見て、そいつの言葉を聞いて、そいつの信念を理解して、その上で吐き捨ててる。考えの押し付けかもしれねえけどな」

考えの押し付けるつもりは毛頭ねえんだけどな。

そう言つて彼は今度こそ雑踏の中へ消えていった。

見て聞いて理解する。

上辺だけじゃなくその中身まで見定めた上で共感するのか敬遠するのか。

彼の考えは何となく理解できる。【伝説の英雄たち】を殺さずに利用する価値を示すことで生かしたのだとキリトくんから聞かされた。

それでも彼をまだ信用できない。確かに根はいい人なのかもしれないけど、口の悪さが周りの理解を拒絶してる。

私にできるのは彼を矯正すること。

「貸しを作るだけ」

そう自分に言い聞かせる。

少しでも彼の態度を改めさせることができれば、今回のように誰かに命を狙われる事も少なくなるはず。

破壊された両手剣の代わりとして、ストレージに仕舞い込んだままだった《バスターソード》をオブジェクト化。

両刃だった《バスターソード》とは違い、片刃の鉄塊と形容できる巨大な物体が背負われ、押し潰されそうな重みを背中で受け止める。

必要STRに届かず十分な性能を発揮できない、という旨のメッセージが表示されるが間に合わせだし、もう少しでSTRも必要値に届く。

予定が少し早まっただけと前向きに考えよう。

「夢を抱き締めろ……っつか？」

とあるソルジャーの言葉だ。

剣繋がりでロールプレイでもしてみるか？

……止めとこう。黒歴史が増えるだけだ。

昨日は柄にもなくお嬢様とだらだらと話し込んだりしたが、理解してもらおうなんて毛ほども思っていない。

俺は一人でいい。喪う痛みには怯える必要もない。

## 仲間（友）

「あー……邪魔くせえな」

場所は二十五階層。

クオーターポイントであるフロアボス戦なのだが、千手観音を彷彿とさせる多腕が特徴的な事以外、特筆するところはない。

真<sup>キ</sup>つ黒<sup>リ</sup>黒<sup>ト</sup>助に紹介された鼠<sup>アルゴ</sup>に仕事の斡旋を受けて、情報収集の為にボス部屋に赴いた方がいいが、壊滅しかけてる「ALS」ー「アインクラッド解放隊」が仕事の邪魔。

勝手に自滅してる分には俺は構わねえけど、行動パターンの収集や特殊攻撃の把握など請け負った仕事を果たせねえのも癪だ。

「死にたくねえなら、さっさと退け！」

降り下ろされた手を刀身の腹で受けつつ逸らす。

力のベクトルを曲げるといふ荒業をやったのけ、連続で放たれる手を同じように捌いていく。

戦意を喪失し、もたつきながらもボス部屋から全員が出ていったのを確認して改めてボスと対峙する。



倒すのは依頼に入っていない。あくまでも情報収集が目的であり深追いは必要ない。  
「あーメンドクセエ……」

人助けは柄じゃない。

真キつ黒黒助トのような見ず知らずの人間を助ける人間性も、お嬢様アスナのような生真面目さもない。

俺は善でも悪でもなく、どっち付かずの中立仄だ。

その場の判断、その後を考えてどちらにもなりうる風見鶏かざみどり。

己にとつて有益かどうかでしか人を判断できない。

それはきつとあの日、両親が遺した遺産に群がってきた乞食共こじきを見た日から。

死んだ人間を惜しむこともなく、どのように分配するかを俺の目の前で話し合い始めたあの瞬間から。

人間は好きだ。

剣の柄を砕かんばかりに握り締める。

人間が嫌いだ。

きつと俺は人間として壊れてるんだらう。

「オ？帰ってきたナ」

「【鼠】、HPを半分まで削ってきた。それまでの行動パターンの記録を送る」

「半分って……深追いは必要なイって言っタロ？」

「こうして生きて帰ってきたんだ文句はねえだろ」

そういう問題じゃないんだけどな。

なんかダウナー気味？自棄<sup>ヤケ</sup>つぱちのようにもー

「勘繰るな。少し昔の事を思い出したただけだ」

昔、か。話しては……くれないんだらうな。

無意識かどうかは分からないけど、この鈍ちゃんは人の悪意を集めやすい。

傷付かない訳じゃない。

人の悪意を受けて傷付かない人間はいない。

痛ましいまでにボロボロな体を鋼の心で踏ん張らせて前を見据えてる。きつと這つてでも前へ進もうとするんだらう。

しよーがない。オネーサンが一肌脱ぎますか。

「そう言えバ、キー坊とアーちゃんから連絡が来ててサ、一緒に来てくれる力？」  
「行く理由がない」

「そう言わずにサ」

護衛がそんな調子でどうするのさ。弱った姿なんて見たくないんだよ。

キー坊もしくはアーちゃんと引き合わせれば、いつもの調子に戻るんじゃないかと考えて実行。

我ながら名案、と思つたのけれどー

「なにこの空気……」

敵意とまではいかないまでもピリピリとした空気が場を満たしていた。

二層でアル坊が仕出かした事が原因でアーちゃんの反感を買つたらしい。今では幾分か丸くはなっているけれど、ここまでとは予想外。

「な、なあアスナ、アルトだってあのとき悪気があつた訳じゃー」

「だからって人を物みたいにー」

「邪魔者は退散するとしますかね」

ツンケンしてるアーちゃんをキー坊が宥め、その様子を見てたアル坊が席を立つ。  
ああもう！人の気も知らないで好き勝手に！

「ごめんなさいアルゴさん、頭では分かっているつもりなだけ……」

「まあ気にするな。アル坊はアル坊で齒に衣を着せず言いたいことを言うシ、それに反感を覚えるのは当然だよ」

アル坊を同席させた理由をアーちゃんに話してみればすんなりと理解してくれた。  
キー坊は止める間もなくアル坊のあとを追っていった。

アーちゃんもアーちゃんでもアル坊の事は気にしてくれていた。けれど、いざ本人を前にするとその思いが上手く表にできないらしい。

「キリトくん、うまく説得できると思う？」

「うーん……アル坊の言葉に心が折られる力、少年漫画よろしく拳で語ってる力、最悪の事も考えられるケド……」

「その一線だけは越えないと思うな。十九層でプレイヤーに襲われてたときだって、そ

の一線は越えないようにしてたし」

あーもう！と机に突っ伏したアーちゃんが窓の外に視線を向ける。

「言葉と行動がチグハグなのよ。人を傷付けたいのか、そうじゃないのか。口は悪いくせに行動は真逆だし」

「アーちゃん、酔ってル？」

「ゲームの中じゃ酔えないんでしょ？」

まあそうなんだけど、アーちゃんが愚痴を溢すなんて珍しいこともあるんだなって思っただけ。

「アル坊はきつと人を心の底から信用できないんだと思う。過去に何があつたかなんて分からないけど、他人に対する攻撃性は不信の裏返しなんじゃないかな」

信じられないから威嚇して遠ざける。

まるで野性の獣みたい、なんて思ったりもするけど大きめの外れな考えでもない気がする。

人は一人じゃ生きていけない。

それを理解してるから最低限の繋がりは確保してる。キー坊がいい例だ。

私も仕事という繋がりはあるけれど、彼にとってはそれだけ。私がこんなに気を掛けるというのに。

「好きなの？アルトくんのこと」

「にや、にやにを言ってるのか分からにやいな！」

失敗した。盛大に嘔んだ。死にたい。

「待てよアルト！」

「うるせえ付いてくんな」

アルゴから話を聞き、あいつの本心を聞き出すためにあとを追った。

口が悪くて人を見下すこともあるけど、全てが悪意からじゃないのは何となく理解してる。

「お前が他人に対してどうして高圧的なのかは知らないけど、それは全部その個人に対しての警告なんだろ？その部分を直さなきゃその内、後悔するっていう」

「……はあ？勘違いも甚だしい。はなは寝言なら寝て言え。俺がそんなお人好しだとも？都合よく解釈してんじやねえ」

「アスナに言ったんだろ？『人間は好きだ』ってさ。人間が好きだから間違った道に進む

のが見てられないから口にするんだ。言い方は悪いけどさ」

「勝手に意識すんな。確かに人間がは好きだ。だが個人は嫌いだ。後先考えず己の利益を優先する奴は特にな」

「だからそうならないように釘を刺してるんだろ？」

「だからー」

「口ではなんだかんだ言うけど、お前は根っからの善人。お人好しだ」

「……ざけるな」

アルトが小さく言葉を溢した瞬間、視界が反転して空を見上げてた。

殴られたのか、なんて他人事みたいに考えながら。

「ふざけんな！俺はお人好しなんかじゃねえ！利用される側の人間じゃねえ！食い物にされる弱者でもねえ！テメエらが疎ましがってた人たちが死んだ瞬間、ハイエナみてえに群がりやがって！テメエらなんかには渡さねえ！あの人たちが遺したモンに指一本触れさせねえ！」

アルトの言葉は支離滅裂でなんの事を指してるのか理解できないけど、アルトの地雷を踏み抜いた事だけは理解できた。

「アルト……」

「テメエも……テメエも奴らと同じか！俺からなにもかも奪おうとする奴らと！穢させ

ねえ！あの人たちが遺した意思も誇りも誰にも汚させねえ！」

きつとアルトと俺は似てるんだ。大事な人を亡くして周りを信用できなくて……。

拳で語るとかキャラじゃないけどー

「来いよアルト。ぶん殴つてでもお前を止める」

ありつたけの思いを込めてお前をぶん殴る。

素手での戦闘は日が登るまで続いた。

圈内だったからHPが減ることはなかったけれど、精神的な疲れが酷い。決着は着かず、お互い道端で大の字で転がることになった。

「俺の両親は馬鹿がつくほどのお人好しだよ。俺も呆れてたけど、誇りにも思ってた。けど、どういうわけか親戚からは疎ましがられてな、死んだと判った瞬間、ハイエナみてえに遺産に群がってきた」

両親を亡くした子供の前で遺産をどのように分配するか話し合い始めたらしい。それも通夜の最中に。



人間不信にもなるだろうな。両親を亡くして悲しんでくれる人は居なくて、両親が遺してくれた遺産を欲望のまま貪ろうとする人たち。

話を聞いてるだけでも憤りを覚える。

「あの人たちの血を引いてる俺もお人好しだろうさ。でもな、それだけの人間にはなりたくねえ。都合よく利用される人間にはなりたくねえんだ」

嘘偽りのない心の奥底から零れた言葉。

「お前は笑うかもしれないねえけど俺がS A Oを始めたのは目的があつたからだ。実現可能な夢物語、机上の空論だつてのは理解してる。それでも損得勘定を抜きにした対等な関係、それを築ける奴がいるはずなんだ」

人を信用したい。けれど信用し切れない。

それはきつと人間の欲望を間近で見たから。

「なら一人だけでもいいから、友達を作ることから始めろよ」

「うるせえ」

お前は気付いてないかもしれないけど、きつと俺とお前の関係は友達以上だと思うんだ。

「キリトの癖に生意気言うな」

## 今は遠い記憶

戦いとはなにか

それは人類史が始まる頃までに遡り、ある者は生きるために、ある者は奪うために、ある者は守るために、ある者は強さを示すため、またある者は生の実感を得るためにその手を血に染める。

人は犠牲なくして生を謳歌できない獣とはよく言ったものだ。

それに戦いは人間だけが行うものでもない。縄張りを守るため、生きる糧を得るため、番となる者を奪い取るために戦う。

つまり、地球上の生物は本能的に争うことを遺伝子レベルまで刻み込まれている。

戦うことを是とするか否とするかは人それぞれだろうが、闘争本能そのものは確かに根付いている。

S.A.O. ここには多くの人間がいるが、そいつらを見れば分かるだろ？ 剣を持ち、戦うことを受け入れ、生を謳歌してる。確かに戦えない奴も一定数はいるが、戦うことを選んだ奴の方が遥かに多い。

普段は理性で抑え込んでる人間の攻撃性って奴が戦うことでしか生きれないと知っ

た瞬間そのタガが外れた。

戦えない奴らはきつと傷付けるのも傷付けられるのも恐れてるんだろう。平和ボケとも言えるが真つ先に戦うことを選んだ奴らに比べれば人間らしい理性を持つてるって言えるな。

「ーだから俺が戦いたがるのも当然ってことだ。生理現象つてやつだな」

「いや、だからもなにも理由になつてないし……」

「Don't think Feel」

「お前何歳だよ……」

「知つてるお前も大概だからな？」

ネタを振れば突つ込んでくる。逆もまた然り。打てば響く悪ふざけも同年代の奴らとやったこともない。一人でいた方が気が楽だし、わざわざ他人に合わせる必要もない。

誰だボツチとか言つた奴。

誰にも縛られることなく自由気ままに自分のために時間を使える。素晴らしいじゃないか。

少年漫画のような殴り合いの果てにキリトとはこんな関係になつたが、あのとときの俺

はどうかしてた。いくらあの日を思い出したからと言って、錯乱に近い状態に陥るとか。

自分を騙し続ければいつの日か溜め込んでいた感情が吹き出すとは言うが、俺は自分を騙したことはない。いつも自分の心に従って動いてる。

「いい加減、アスナとも話し合ってみろよ。アスナなら分かってくれるだろうし、周りが敵ばかりだと前みたいになるぞ？」

「その内になー」

お嬢様と俺の価値観は違う。いや、人はそれぞれ違う。歩む歩幅も歩むべき道も善悪でさえ。

きつと俺とお嬢様の歩む道は交わることはないだろう。

俺の在り方はお嬢様は受け入れられないだろうし、お嬢様の正義は俺には縁遠いものだ。

信頼できなくても信用できる人間は一人がいい。無闇矢鱈に人を囲い込んでも本当に信用できる人間がいるかどうか怪しいもんだしな。

「つーわけで強え敵が出てくるとこ知ってんだろ？」

「何がというわけなのか分からない」

「融通の利かない奴」

「融通も何も自分に利のあるように喋ってるだろ」

「一割冗談でな」

「九割本気!?!」

「なんつーか、戦ってる時の方が『俺生きてる』って実感できんだよな。アドレナリンがドバドバ出てるのも実感してつから脳内麻薬中毒かも」

アドレナリンは交感神経から分泌される闘争<sup>fight</sup>か逃走<sup>flight</sup>のホルモンだ。色々と作用・副作用があるが、度を過ぎなければ日常生活にも役立つ。

主にスポーツをする奴。

「なんだ、ただのジャンキーか」

「言い方を考えろ」

「バトルジャンキー、戦闘狂、バーサーカー、戦争中毒、焼け野原ひろっ!!?」

「少し黙れ」

そこまで狂ってねえ。戦争屋と一緒にすんな。

「今のはグーだ……」

「チョコキの方が良かったか?」

「具体的にどこを狙うつもりだ」

「目。刺して広げる」

「猟奇的過ぎる……」

「悪い奴じゃないんだよ。ちよつとつと過激で手が早くてバーサーカーだけだ」

「全然ちよつとじゃない。実力はともかく言動が問題。キリトくんが言う通り、悪い人じゃないかもしれない。けどボス攻略の時だって協調性もなく単身で突撃するし、口を開けば人を小バカにしたような物言い。それが原因で彼の周りは敵だらけ」

「確かにアイツは歯に衣着せず言いたいように言うけど、裏を返してみればアイツなりの気遣いだったりするんだぞ」

「だとしても言葉を選ぶのは人として当然のこと。わざわざ反感を買うような物言いをしなくてもいいはずでしょ？それとも反応を見て楽しんでいるのかしら？」

「どれだけアスナから反感を買ってるんだよ……」

「……冗談」

「え？」

「だから冗談。彼が完全に悪い人じゃないのは何となくだけど感じてる。口の悪さも善意の裏返しだっつこともね。だけどー」

言葉を切ったアスナの視線の先にはフィールドボス相手に孤軍奮闘するアルトの姿。ソロで挑むような相手じゃないはずなだけどな。

拳で殴り、足で蹴り、剣で叩き潰す。

その戦い振りはまさにバーサーカーだ。

「あれだけは理解できない」

「激しく同意」

闘争こそ遺伝子レベルで刻み込まれた本能だとアルトは言ったが、その度合いは人それぞれなんだと思う。

人類全員がお前レベルだったら……考えたくもないな。

「今回はキミの顔を立ててあげる」

フィールドボスを下し、行きよりも生き生きと帰ってきたアルトとアスナは対面した。

開口一番に問われた戦闘思考の答えをアルトは小難しい言葉で返した。

「Va ou tu peux, meurs ou tu dois ってな」

「ヴァ? ウ?」

何語?

「行くべき場所に行き、死ぬべき場所で死ぬ。フランスの諺よ」

「誰かが決めた正しさなんざ興味もねえ。行く場所も死ぬ場所も俺が決める。ハタから見りや自分の価値観だけに従ってる俺は異端だろうさ。でもな、他人の意思に従ってる奴とどう違う? 思考を投げ捨てりや木偶デクとなんら変わらねえ」

「貴方の考えは理解できた。でも言葉にしなきゃ伝わらないこともあるはず。貴方の場合、他人を傷つけて遠ざけて放置したまま。理解を拒むなら行動よりも先に言葉にすべキナ」

「俺は俺の価値観を押し付けるつもりはねえ。俺の考えが万人に受け入れられるものだとも思っただねえからこそ、弁明もしねえんだよ」

「……なら橋渡し役になつてあげる」

「あ?」



「他の人と貴方を繋ぐ橋渡し役に」

「バツカじゃねえの？そんなつまんねえことしてお前になんの得があんだよ？」

「勘違いしないで欲しいわ。別に私の考えが貴方に理解されるなんて思っていないから」

「……仕返しのもりかよ。まあいいさ、やれるもんならやってみろ。そう決めたならやり通して見せろ。俺は俺の在り方を崩すつもりはない」

ブレないアルトと素っ気ないながら氣に掛けてたアスナは友達と言うにはピリピリとした空気を漂わせながら、一応の和解を果たした。

俺が姿を眩ますまでの間、基本的にはこの三人で行動することになる。

二人で馬鹿やってアスナに怒られ、殴り合いをしていれば仲裁と称した制裁で二人とも伸のされたこともある。

決して余裕があった訳でも辛いことがなかった訳でもないけれど、満ち足りていて笑いの絶えない時間だった。

アルトの言っていた生の充足というのはあの時のようなことを言うんだろう。

戦いに偏った思考はしているけど根は悪い奴じゃない。アスナが言った通り口は悪いけどそれは善意の裏返しであって恩着せがましいのは性に合わないし、真摯に接するのも肩が凝るからしない、らしい。

本当に面倒な奴だ。

## 黒のいない日

「これで終いだ！」

STR全開で階層主の顔面へと降り下ろされた一撃は見事にHPを削り切り、盛大なファンファーレと共に祝福の文字が宙を舞う。

だが、俺の胸の内は燻ったままだ。

いつもならラストアタックを競うように戦っていたのだが、生憎とその相手がいないからだ。

大方どつかでお人好しでもやってんのか、はたまたどつかのギルドにでも入ってレベリングを手伝ってるのか、或いは――

「お疲れ」

「お？いつもなら声も掛けないお嬢様が殊勝なことで。なにか良いことでもあったか？」

前回の出来事から幾分か軟化したが、まだどこか刺々しいアスナが珍しく労いの言葉をかけてきた。

「分かかって聞いてるなら、余り面白くない冗談ね。それとも反応を見て楽しんでる？」

「そうカッコするなよ。どうせキリトのことだろ？ 戦闘中もどつか上の空だったし、その状態で戦場に出てりや近いうち死ぬぞ、お前」

戦場では注意を怠った奴から死んでいく。

それをフォローする俺の身にもなってほしい。

「どうせ、じゃない。今までの階層攻略で一度も姿を見せないなんて何かあったんじゃ

……」

「へーへー」

「心配じゃないの?」

「全く微塵も」

アレでもアイツは前線を支える一級の剣士だ。そこまでの心配は要らねえだろうし、なにかありやメツセージぐらい飛ばすだろ。

「貴方たち仲間でしょ?」

「仲間? ハツ冗談。俺とアイツはそんな仲じゃねえ。もつと単純で複雑な関係だ」

アイツの強さはよく知ってる。

人との繋がりがアイツの強さになる。

だが人と繋がれば繋がるほど自分自身を縛ることになる。そんな強さは認めねえ。

アイツも俺の在り方を認めたくもりはねえだろうしな。

互いを知りながら認めず、それでも近くにいる。

俺とアイツの関係を言葉にするならそんな感じだろう。

「ストーカーもとい献身的な後方援護をする奴が四六時中張り付いてたんじゃ、落ち着けないだろうしな」

「それが誰のことなのか、じっくり聞かせてくれないかな？大丈夫、時間は取らせないから」

おっと藪蛇やぶへび藪蛇。つい口が滑つちまった。

恐えろ。どんだけAGIに振ってんだあいつ。

どんなに全力で走ってもピツタリと背後に張り付いてくるアスナを転移門で振り切り、どうしたもんかと思案する。

ほとぼりが冷めるまで身を隠してるのが無難だが……

「あの……もしかして攻略組の方ですか？」

「あ？」

掛けられた声に振り向けばお世辞にも上物とは言えない装備のプレイヤーがいた。

恐らく攻略の後発組、中堅プレイヤーか。

『まず第一に相手を威圧するような話し方はダメだからね』

脳裏をよぎったのは何かとあれこれ口を出してくるようになった栗毛の少女。

『貴方は話の流れを切りがちだから、どうしてそう思ったのか聞くだけでも自然に会話は続くし相手の反発も買いにくい』

「確かにそうだが、どうしてそうだと思った」

「見たことない装備だし、空気がその……他のプレイヤーとは違うと言うか……」

へえ、なんとなくでもそう感じれるなら将来有望だな。それまで生きていられば、だが。

「俺【月夜の黒猫団】って同じ学校の奴らとギルド組んで、いつか攻略組の仲間入りをしたいと思ってー」

「攻略は命懸けだぞ文字通りな。お前だけじゃなくそのお仲間も前線に立つ覚悟はあるのか？ 絶えず付いて回る死のリスクを負う覚悟は？」

「攻略が危険なのは勿論知ってます。それでも、なにもしないままこのゲームがクリアされるのを待つのは絶対に嫌だ。少しでも攻略組の方々の力になりたいんです」

攻略組はそんな華々しいものじゃない。

「デスクゲームをクリアするためにフィールドに繰り出しモンスターを狩ってレベリングする日々。」

強い武器を手に入れるため素材集めのマラソン、効率を考え旨味のある狩り場の探索  
e t c . e t c . . . .

はつきり言って殺伐としてる。

同じことの繰り返しじゃ心も荒れるし、集中力も落ちる。レベリングの途中で命を落とした奴もいるだろう。

「調達組、だっけか？ 攻略組を支えたいっつーならそっちでも問題ねえんじゃねえのか？」

武器素材やアイテムを調達し補給する調達組の結成で攻略組はレベリングのみに集中できるようになった。

確か頭張ってるのはキバオウだったか。

「確かにレベルの足りない俺たちじゃ追い付くのはまだ先です。調達組に参加して攻略組のお手伝いになるかもしれません。でも……」

何を言われても攻略組に参加したい。

揺るぎのない意思が目に宿ってる。

こりやなに言っても無駄だな。

「攻略組に参加するなどは言わねえ。でもな足を引っ張ることだけはするな。邪魔になるようなら容赦なく置いて行かれるぞ」

攻略組に参加するならそれ相応の実力を示し続けなきゃならねえ。何度か新参ギルドが参加したものの、足手まといだと判断され落とされた奴らもいる。本当にシビアな場所だ。

「攻略組を目指すなら妥協はするな。絶えず実力を磨け、考えることを止めるな。それでやっとスタートラインに立てる」

長々と話しちまったが、俺もレベリングしに新しい階層を奔走しなくちゃならねえ。休憩も終わりだ。

「そろそろ俺も上に戻らねえと。俺の言ったこと頭の片隅にでも入れとけ」

「はい。アドバイスありがとうございます」

転移門の前でウィンドウを開き、転移する階層を選択。転送させる直前

「あ！俺ケイタって言います！必ず追いついてみせますから！」  
「やってみせろ。上で待ってる」



## 貫き通す思い

「キリトくー」

愛しい彼女の声が途切れ、ポリゴンが弾けて宙を舞う。

それは幻想的ではあったけれど、何処か現実味がなくてー

「綺麗なもんだろ？命の終わりは」

その元凶はまるで血を振り落とすように大剣を一閃させて俺と向き合った。

「愛しの彼女を失ってもまだ戦う理由にはならねえか？」

ゆっくりとした足取りで俺に近付いてきてる。それでも俺は反応を返せなかった。

アスナを失うと分かっていたのに動けなかった。

「ここにいる全員を殺しても動けねえだろうな。意思の折れたお前に用は無い。せめてもの手向けだ。苦しまねえよう一撃で逝かせてやる」

仰向けに蹴り倒され、首を短剣と大剣が挟み込むように構えられる。

「……どうしてこうなっちゃったんだろうな……本当なら死ぬのは俺だけで、お前がこのゲームをクリアするはずだったのに……」

間近にいる俺でも聞き逃してしまいそうなほど小さな声。

「アルト……お前……」

「茅場を討ち取れるチャンスをついにする訳にはいかない。いろいろと手を回してはいたんだが……ああ、きつと前提から間違ってたんだな俺」

「きつとそうだな……なあアルト、みんなのこと頼む」

「……他に言い残すことは？」

「地獄に堕ちろ相棒」

「言われるまでもねえ」

交差させた得物で切り開くようにキリトの首を切り裂いた。

何もかもを読み違えた俺のミスだ。

赦しは請わない。怨まれるのも覚悟の上だ。

「友を手には掛け尚、立ち上がるか」

「元々そういう手筈だろうが。それにあの征伐戦から膝を折らねえと決めた。アイツらを手を掛けた今、立ち止まるわけにもいかねえ」

地獄に堕ちろか。手巖しいな、ほんと。

「人殺し！」

「地獄に堕ちろ！裏切り者！」

「なんとでも言え。俺は俺の目的のために動いてただけだ。一度でも俺がお前らを仲間だと言ったことがあるか？仲間でもねえ奴に裏切りだの的外れだと思わねえか？」

恨め、憎め、俺はその十字架を背負って生きていく。

「さあそろそろ始めようか？あの日の誓約を果たす時だ。茅場」

「ふむ、そうだな。実のところ私は君と戦うことを楽しみにしていた。君のその【特双剣】は全プレイヤーのなかで最も情報処理能力に秀でた者に与えられるもの。このSAO開始直後から、もしやとは思っていたがやはり君が手にしたな。反応速度に優れた者に与えられる【二刀流】、情報処理能力に優れた者に与えられる【特双剣】、その二つのスキルが君とキリトくんに与えられたのも何かしらの運命、というやつかな」

「今日はよく喋るな先輩。ゼミで会ったときなんざ、碌に喋ることもしなかった癖に」

「ぬかせ」

俺がSAOを始めた理由のひとつ。

同じゼミの先輩である茅場が作り出したもうひとつの世界を体感してみたかった。まさかデスゲームと化し巻き込まれるなんざ、考えもしなかったが。

「それでは始めようか。お互いHPはイエローから、もちろん私の不死属性は解除する」  
攻略組に所属するプレイヤーたちの呪詛を浴びながら茅場と対峙する。

相討ちは許されない。負けは論外だ。

先手は茅場。

【神聖剣】の代名詞とも言える十字盾を構え、その影から剣を振るってきた。

その一撃を短剣で弾き、盾ごと茅場を叩き潰そうと大上段から大剣振り落とすが、僅かに体を沈み込ませただけで直ぐに体勢を立て直し大剣を流しつつ反撃とばかりに剣が振り下ろされた。

受け流され体勢が開いたものの短剣で同じように受け流し、蹴りを放つ。

盾で防がれたものの追撃される前に距離を離して体勢を整える

茅場相手にソードスキルは使えない。奴はこのゲームの開発者であり天才だ。ソードスキルのモーションとパターンは全て頭の中に入っていると考えていい。

通用するのは今まで培ってきた己の技量のみ。

「中々によく動く。その先読みも感嘆に値する。いやはや、未来が見えてると言われて

も納得できるほどの正確性だ」

「アンタの守りも真つ正面からやり合うのは遠慮したいほど完璧だ。まったく、天才つてのはこれだから」

「方向性は違えど君もその部類だと思うがね」

「冗談。俺は凡庸そのものだつーの」

「君が凡庸なら世の中は戦闘狂だらけだな」

「誰がバーサーカーだこの野郎」

弾き、防がれ、受け流し、阻まれる。

お互い戦闘スタイルは防御型。相手の攻撃を防ぎ、その隙を突く。

それを身をもって理解できているからこそ、僅かでも隙があったなら、そこを突かざるを得ない。だがその一撃だけは確実に読まれてる。そこに待っているのは肉を切らせて骨を断つ確殺の刃。

そのため踏み込みを緩める他なく、有象無象の剣戟と成り果てる。

……泥沼だな。

短剣を口に咥えて大剣を両手で構える。

使うのは使用後のデイレイが短い基本突撃型ソードスキル。

黄色い閃光が弾け茅場の十字盾に切っ先を突き立てるものの、その盾を貫くことなく

後ろへと受け流される。

そして無防備な背中へと剣が突き立てられ――

「なっ……」

ることはなく振り向き様に奴の切っ先を左手で受け、そのまま鏢元まで押し込み鏢ごと奴の手を掴み、左手と切っ先が食い込んだ左肩で剣を封じる。

肉を切らせて骨を断つなら、肉も骨も切らせて命をもらう。

大剣を手放し茅場の左腕を抑え込んでそのまま押し倒し、首元へ啜えた短剣を押し当てる。

「ふっ……君の勝ちだアルトくん……いや、三神くん」

ああ、アンタの負けだよ先輩。

喉を掻き斬り茅場のアバターがポリゴンとなって碎け散る。

HPに意識を戻せば数ドットしか残っていないなかった。あとコンマ数秒遅ければ茅場と相討ち、最悪俺の負けだった。

「アルト……オメエ……」

「クリアは果たされた。あとは俺が犯した罪を精算するだけだ」

「この大馬鹿野郎お」

「ああそうだな。重々承知してるよ」

見通せず、読み違い、前提を間違えた。

裏切り者の末路は、誰も辺り知らぬ場所で誰にも知られることなくのたれ死ぬと相場が決まっている。

ゲームクリアを知らせるアナウンスが流れるなか、疲労感や虚脱感……まあいろいろな感覚に襲われ腰を降ろした。

もう頭を働かせるのも億劫だ。

生き残ったプレイヤーたちの呪詛を聞きながら目を閉じる。

なあキリト、もしそつちで逢えたら好きなかだけ殴り倒して貰って構わねえ。

だからさ一回だけでいい。俺のこと友達と呼んでくれるか？

その後、リアルに復帰したアルトこと三神颯真は入院していた病院から姿を消した。警察以外にも彼と繋がりのあったS A O サバイバーたちも捜索に参加したものの手掛かりはなく、完全に見失った。

けれどただひとつ、彼の相棒であったキリトこと桐ヶ谷和人及びアスナこと結城明日奈が入院していた病室に彼が残したと思われるローダンセの花束だけが置かれていた。

ローダンセの花言葉は『変わらぬ思い』『終わりのない友情』



## 【閃光】 vs 【双刃】

七十五層が解放され少し経った頃、俺とアスナは何故か七十四層にあるコロシウムで対峙していた。

「見世物小屋に放り込まれた気分だ」

「目立つのは苦手？」

「むしろ逆。目立ってつから余計な注目を浴びたくねえだけだ」

「悪名という意味じゃ確かに目立ってるもんね」

「まあな」

キリトとヒースクリフほどではないが、コロシウムには多くのプレイヤーがいた。

コロシウム中に響き渡るのはアスナに対する歓声と俺に対するブーイング。

ずいぶん嫌われようだ。

「それじゃルールの確認。デュエル方式は初撃決着、私が勝ったら私の言うことに従うこと、貴方が勝ったらー」

「これまで通り好き勝手にやらせてもらう。みんな仲良く右向け右は性に合わねえしな」

方向性が違うからこそ人は面白い。

デュエル通知にOKをタップ60秒間のカウントが始まり、お互いの得物を構える。「言い訳も手加減もなしだよ?」

「ハツ相手見て物言えよ。この手に関しちや手も抜かねえし、ただ全力でぶつかるだけだ。それぐらいお前だつて分かつてるだろ?」

「それもそうだね。それじゃ……いくよ!」

アルトくんの防御の堅さはよく知っている。

なのに――

開幕と同時に放ったトップスピードからの突きは、苦もなく短剣で逸らされ、続く二撃三撃も軌道をずらされ彼を捉えることなく空を突く。

崩せない……!

彼は冷静に自身に迫る切っ先を叩き落としていく。

フェイントを入れても、死角からの攻撃も、意味を為さないと言わんばかりに。

「確かにお前の突きは俺でも目で追えない。けどな、お前の視線がどこを狙ってるか教えてくれる。腕の力み具合でタイミングを教えてください。すべての動きは本人の体が前もって教えてくれんだよ」

異常なまでの動体視力、情報処理能力。

その二つが未来予知染みた先読みの正体。

そう頭で理解できていても攻めなければ勝てない。

攻めるには動かなくてはならない。

だけど動くほどに行動を先読みされる。

キリトくんは並外れた反応速度で対処できているけど、私にはキリトくんほどの反応速度もアルトくんのような正確な先読みもない。

なら一歩でも早く、アルトくんの動体視力を超える速度で動くしかない。

「速すぎんだろ……」

まばたきよりも速く大剣の間合いの内側へ、それを見たアルトくんが思わず口にしたと思える言葉に僅かに喜色が滲んでいた。

対戦相手ではなく倒す相手だと認識を改めた証左。

「舐めんなー！」

振るわれた大剣を潜り抜け、突き出した《ランベントライト》は手首を返した大剣の柄で弾かれる。

続けて振るわれた短剣を飛び退いて躲し、独楽のように回転して断頭台のように上から襲い掛かってきた大剣を横に身を投げて避ける。

地面が割れるかと思うほどの衝撃と轟音。

S T R 極振りのステータスから放たれる渾身の一撃はまさに必殺。反撃されることを考えず、防御も回避も捨て去った捨て身の一撃。

いや違う。考えが甘かった。

戦うことに關して彼に妥協はない。

どこに隙があるのか、どうすれば隙を突かれないか自分の戦い方を研究し尽くしてゐる。

現に反撃を想定して左の短剣を構えてる。

強い……。

力任せの攻撃と堅実な守り。僅かに見える隙はそこを突く敵を仕留めるための罠。生半可な攻めでは崩せず、対してこちらは迂闊に防げばその上から叩き潰される。

「どうしたよ？ 足が止まってんぞ」

「どうすればその守りを突破して、一撃を入れられるか考えてるだけだよ」

「捨て身で来てみるよ。案外簡単に懐に潜れるかもだぞ?」

「畏だつて判つてて潜る人なんていないよ」

「違いねえ」

意表を突いて視覚外から一撃を入れる。

突破口としては間違つてはいないはず。

火花が散り、甲高い金属音が響き渡る。

周りの声も自分の呼吸音も遠退き、アルトくんへと自分の感覚が研ぎ澄まされていくのがわかる。

これがキリトくんが見てる風景。

まるで世界に二人だけになったかのような感覚。

男の子つてずるいなあ……。こうして剣をぶつけ合うだけで、相手の心を独り占めにしちゃうんだもん。

「らあ!!」

「はああ!」

お互い一步も引かず、アルトくんの《ファラン》と私の《ランベントライト》がぶつかり合う。

反撃を許さず、システムアシストのない突きをひたすらに繰り返す。

ダックインと呼ばれる斜めに沈み込みながら喉元目掛け、最速の突き。当然の如く弾かれるけどその時、僅かにアルトくんの体勢が崩れた。

ここで決める！

細剣の上位連撃ソードスキル《フラッシング・ペネトレイター》

9 連撃からなる高速突き。体勢が崩れた今なら……！

1 撃目、短剣で防がれる。

2 撃目、同様。

3、4 撃目、軌道をずらされた。

5、6、7 撃目、大剣に阻まれる。

8 撃目、防御が間に合わない回避される。

「……チツ、お前の勝ちだ。アスナ」

ラスト9 撃目はアルトくんの左肩を貫いた。

宙に舞うWINNERの文字が踊っているけど、正直喜ぶことができない。

理由は決まっている。

「アルトくん、どうしてパライイをしてから攻撃をしなかったの？手を抜かないって言ったのに」

そう全力を出すと言っていて《特双剣》のメリットであるパライイからの反撃をしてこ

なかった。

初見殺しとも言えるあれを使っていたら間違ひなく勝っていたのはアルトくんだ。

「まだ分からねえか？《特双剣》のメリットであるパライからの初撃にはダメージブーストが掛かる。俺のSTRとダメージブースト、お前のHPと軽鎧けいがいのダメージカット率、それを考えりや答えは簡単だろ」

一撃でHPを全て減らす可能性があつた。

初撃決着であつてもHPが全損した場合どうなるか。

下手をすれば私はここで死んでいたかもしれない。

「お前を殺しちまえば全プレイヤーから袋叩きだし、なにより真つ先にキリトに殺されるだろうしな」

最初からハンデを負つて戦つてたんだ。自分が不利なのを理解しながら……。

「言つとくがハンデだとか考えてねえからな？元は対人向けのスキルなんだが、このデゲームの中じゃそんな簡単に使えるもんじゃねえ。下手打ちや一撃だ」

……やっぱり、口ではなんだかんだ言つて周りの人のことを考えてるんだ。

「んだよその目」

「ううん、何でもないよ」

「嘘臭え。まあいい、お前が勝つたらなんでも言うことに従うだつたよな？どうする？

首輪でも着けるか?」

「アルトくんが着けたいならどうぞ。私は一切看過しません」

「ヒゲエ」

酷くない。人をなんだと思ってるの。

「えつとね、笑わないで欲しいんだけど……」

「滅多なことじゃ笑わねえよ」

「友達になってほしいの」

「は?」

気の抜けたような声で呆けるアルトくん。

「二階層の一件以来仲直りもしてないし、こういうのはちゃんと区切りをつけるべきだ  
と思ってる……」

「そのためだけに、こんな大舞台を用意したのか?」

「だってアルトくんは何かにつけて煙に巻くし、逃げ場がない状態なら言い逃れもしな  
いでしょ?」

「そりやまあこんな大人数の前で負かされちゃあな」

ちゃんと仲直りもしてないの一緒にいて、肩を並べて戦ってた。

アルトくん風に言うなら『なあなあで済ませた』だ。やっぱりこういうのはちゃんと



しておかないと。

「ぷっ……ハハハハ！」

「笑わないって言ったじゃない！」

「いや悪い悪い。てつきり俺が好き勝手出来ないよう飼い殺すもんだとばかり思ってたな。それに俺にしてみればあの日から……そのなんだ……友達だと思ってたしな」

尻すぼみに声が小さくなり、そつぽを向いた態度からいつもの飄々とした雰囲気はな  
い。

「あの日？」

「初めてお前が俺に噛みついてきた……まあいい、なんでもねえ」

……そつか、こつちが素のアルトくんなんだ。

「んだよその目」

「ううん、なんでもないよ」

これからもよろしくアルトくん。でも密かに計画した性格矯正計画はそのまま進めるつもりだから覚悟してね。

## フエアリーダンス編

## 第1翔：the Abyss Watcher

あの鉄の城から解放され一ヶ月が過ぎた。

すっかり筋肉が削げ落ちた体を戻すため二週間ほどリハビリに費やしたわけだが。

ヒースクリフこと茅場晶彦との最終決戦はアルトが遺した剣を取り、アスナにクライ  
ン、あの場にいたプレイヤーたちの声を受け、激戦の果てに討ち取った。

そして、アインクラッドに生き残っていた六千人近くのプレイヤーが解放されたはず  
だった。

SAO内での情報と引き換えにナーブギアとアスナに関する情報を聞き出したとき、  
アスナが未だリアルに戻ってきていないというのだ。

アスナが運び込まれた病院を聞き、何度かお見舞いに行ったが、レクトの須郷と名乗  
るアスナこと結城明日奈の婚約者から金輪際来ないでくれと言われた。

その時、リアルの連絡先を交換していたエギルこと本名アンドリユー・ギルバート・ミ  
ルズからのメールで目を見開かされた。

限界まで引き伸ばしたんだろう。

解像度が悪く輪郭や髪らしき色しか判別できなかったけど、俺にはわかる。

この人影はアスナだと。

詳しい話をエギルの店で聞き、あの画像は妖精たちがメインのオンラインゲーム、アルヴヘイムオンラインの中で撮影されたものだとか教えてもらった。

最高難易度のグランドクエストなるものをクリア出来ないプレイヤー達が、ロケット方式で世界樹の上を目指して飛んだ結果この画像を撮影できたのだという。

残念ながら運営側はすぐに対策し、限界高度を設定。同じ方法で上を目指すことが出来なくなった。

つまり、アスナと会うためには世界樹を攻略しなければならなくなったわけだ。

『俺たちのSAOはまだ終わってない』

幸いなことにエギルから借りたこのアルヴヘイムオンラインはナーヴギアの後継機アミュスファイアでなくても起動できるらしく、俺をあの鉄の城に閉じ込めたナーヴギアでログインすることにした。

取引を持ちかけてまでこのナーヴギアを手元に置いておきたかったのは、あの茅場が

手掛けたということもあるけど、何よりSAOのデータが残ってる。

つまり、俺とアスナの娘ユイもこの中にいるんだ。

一波乱あつたけどなんとかアルヴヘイムに入ることができたが、そこでまた一つの問題と直面した。

俺のステータスの大部分がSAOのものだったのだ。

このゲームのフォーマットにはSAOのデータが使われているということ、あの事件があつたプログラムをそのまま転用するなんて正気の沙汰じゃない。

でもアスナを助け出すためには、力が必要なのも事実だつたし、そのお陰でユイとも再会することができたから、幸いだったと考えることにした。

プライベートピクシーの姿となつたユイのナビゲートのもと飛行の練習を兼ねて、近くにいたプレイヤーと接触することにしたんだが、妖精同士の関係がここまで悪いのだと思ひ知らされた。

確かにPK推奨というのは知っていたが、一人相手に三人掛かりというのは如何なるのかと思う。

赤い装備から火の妖精サランダーであろう男三人。

緑の装備から風の妖精シルフだろう女の子。

どつちに味方するかなんて考えるまでもないだろ？

サラマンダー<sup>サラマンダー</sup>の妖精たちを撃退し、リーファと名乗った少女に世界樹まで案内してもらったことになった。

サラマンダーの猫妖精<sup>ケットシー</sup>とシルフ両領主の襲撃をなんとか防ぐことができ、一息つくことができた。

シルフのサクヤさん、ケットシーのルーさんから勧誘されたけどリーファのお陰でうやむやにすることが出来た。

でも二人ともくつつく必要はなかったんじゃないかな？俺も男だし、そう言うのは正直に言えば嬉しいけど俺にはアスナがいる。

すぐく柔らかかったけど……サクヤさんはほら……。

……話を戻そう。

世界樹の下にある《アルン》という街に着いて、街の奥にある世界樹の門を潜ることでグランドクエストに挑戦できるらしい。

今日はこれから定期メンテナンスのためログアウトしないといけない。だから詳しい話は明日になる。

翌日は妹の直葉を伴って明日奈の見舞いに行ったが、問題が発生した。アルヴヘイムにダイブした時、ユイがアスナのIDを世界樹の上に確認できるというのだ。ユイがシステム警告でメッセージを送れば、システム管理者が持つデータのカードキーが落ちてきた。

間違はなくアスナは上にいる。

居ても立つても居られずリーファの制止を振りきり、グランドクエストに突撃したものの、門を潜りひたすら上にある扉を目指すのだが、周囲の壁から守護騎士が生まれ善戦したものの、質を押し潰す量によって半ばにも届かないところで殺されてしまう。

蘇生待機状態の俺をリーファによって救出され回復してもらったものの、再びグランドクエストに挑戦しようとしたところを止められ、理由を話したときに問題が発生した。

リーファが直葉であったこと、俺のことを兄妹以上の対象として見ていたがアスナがいることで身を引くが、桐ヶ谷和人俺に似たアルヴヘイム内のキリトに好意を抱くようになった。だがキリトの正体はリアルで諦めたはずの俺だった。

スグはその衝撃に耐えられず、衝動的にログアウト。

俺も後を追い、リアルに戻ってスグの部屋に向かうが涙を堪えたスグに思いの丈をぶ

つけられる。

スグの想いには応えられない。

アスナがまだ、リアルに戻って来れていない。

俺の心はまだSAOから戻ってきていないのだと。

再びアルヴヘイムに潜り、スグを抱き締めながらそう言えば戻ってこれるよう力を貸してくれるのだと答えてくれた。

本当ならスグに斬られるのを覚悟してたんだけど、スグも同じだったようで、俺に斬られることで俺への想いを断ち切ろうとしたのだという。

血は繋がってなくとも兄妹なのだと思い知ったな。

そしてシルフの少年、コペルを混じえグランドクエストに挑むことになる。

だけど、そこでまた新たな問題が発生した。

守護騎士の装備が変わっていたのだ。

弓を装備している奴はそのままだが、剣をもっていた奴だ。

柄の両端に刀身がある双刃の剣ではなく右手に大剣を肩に担ぐように構え、左逆手に鉤状の刃を持つ異形の短剣。

アイツを思わせる装備と構えに冷静だった頭が一気に沸騰した。

あれはアイツの……！アイツだけの武器だ……！

気付いたときには守護騎士を三体まとめて薙ぎ払っていた。

所詮プログラムで再現されたもの。アイツには到底及ばないが、目下の問題は守護騎士のPOP率。

扉に近づくほどそのPOP数は増えていき、ユイ曰くプレイヤーが攻略できない難易度に設定されているのでは、とのこと。

ならばそのPOP数を上回る突破力で一気に扉まで到達するだけだ……！

守護騎士が目の前を塞ぐように増え、活路を見いだすためコペルが非常に重いデスペナルティ覚悟で、身体中を串刺しにされながらも自爆、大きな風穴を開けた。

だが、その穴を眼前にして守護騎士のPOP数が跳ね上がり、開けた穴も数秒で塞がってしまう。

三人じゃ無理だったのか、と諦めたが新たな援軍が現れたんだ。

話はアルヴヘイムに初めて潜った頃に戻り、SAOのステータスがそのままアルヴヘイムに移行できていたなら、SAOの時に持っていたアイテムやお金はどうなっていたのか。

答えは、当然引き継がれていたけど、アイテムは文字化けしていてGMに目をつけら



れる前に捨てた。使わないけど見た目が気に入っていた武器とかがあったけど、背に腹は代えられない。

所持金は初心者が持つてはいけない金額で、装備を整え余っていたものをサラマンダーの襲撃に遭ったサクヤさんとルーさんに渡しておいた。

そのお金で装備が整った両軍が援軍としてグランドクエストクリアのために現れたんだ。

両軍の活躍のお陰で攻略不可能な数にまで膨れ上がった守護騎士を散らしてくれたお陰で、リーファから借りた刀と俺の大剣で守護騎士の壁を突破。

クエストクリアフラグではなく、システム管理者権限で閉ざされた扉にアスナから渡されたカードキーをユイが転写。

世界樹の中へと転送された。

そうしてアスナを見つけ出し再会を喜んでいたのも束の間、突然周囲を暗闇が覆い、ユイがなにかに拒まれるように姿を消した。

「遅かったじゃないか、桐ヶ谷くん。いやこの世界ならキリト君と呼んだ方がいいかな？」

「その声……須郷か!？」

「妖精王オベイロン。そう呼んで貰わなくちゃ」

オベイロンと自らを呼んだ須郷。

アスナを閉じ込めた元凶はこいつか!？」

「キリト君、私以外にもSAOからここに閉じ込められてる人たちがいた。その人たちは多分、何かの実験に利用されてるみたい」

アスナだけじゃなく他のSAOプレイヤーまで!？」

「実験!?! 一体なんの!?!」

「人の記憶、感情、思考まで自在に操ることのできる神の御業! それを僕が手に入れられるまで後少しなんだ。邪魔をしてもらっては困るよ」

須郷が指を鳴らした瞬間、どこからともなく鎖付きの手錠によってアスナが拘束され、須郷のもとへと運ばれてしまう。

「さてテイターニア、おいたが過ぎたようだ。少し反省してもらわないとね」

須郷はアスナの薄い生地 of 服に手をかけ、そのまま引き裂き羞恥によって目尻に浮かんだ涙を舐める。

その行為にアスナと再会したとこで多少冷えた頭が再び沸騰した。

「須郷オオオオ!!」

「五月蠅いなあ。君の相手は僕じゃないよ」

本能に任せて後ろに飛び退く。

数瞬前まで俺がいたところに、何かが落下した。

「紹介するよ。次のアップデートで実装予定の一週間毎にランダムで刻まれる《深淵の証》。そして、それを宿したプレイヤーを狩る為に現れた神出鬼没のエネミー、《深淵の監視者》だ！」

砂煙が晴れていき、隠された姿を現す。

大剣を逆手に地に突き刺し、左逆手に握られた鉤状の刃を持つ異形の短剣。

魔女の帽子を思わせるような鉄兜。ボタンで留められ立てられた襟で顔は見えない。

革鎧の下に着込んだチェインメール。必要最低限の籠手と脚甲に左だけの肩当て。

そのほとんどがアイツがSAOで装備していた防具。

どこまで……！どこまで汚せば気が済む……！

SAOからデータを流用していたヤツの事だ。この敵もデータで再現したものだろう。

だからこそ許せない！アイツの剣には確かな意志があつた。それをなんの感情もないプログラムで再現されているのが！アスナを汚し、傷つけたことが！

「須郷オオオオ!!」

## 第2翔：意思の力

監視者を無視し須郷に向かおうとするが、こちらの考えを読んでいるかのように絶妙なタイミングで体を差し込んでくる。

首狙いの短剣。屈んで避ければそのまま回転し、掬い上げるように大剣が迫る。

身を捻ってやり過ぎしつつ勢いを乗せた大剣を降り下ろすが、引つ掛けられた短剣で下へと向かう力を前にずらされ体が伸びる。

羽を伸ばし前宙のように空中で姿勢を入れ換え、横薙ぎの大剣に俺の大剣をぶつける。

アイツみたいな戦い方を……！

攻めれば短剣でいなし、隙あらば大剣の一撃。

懐に潜れば、短剣が首を跳ねるために振るわれ大剣で弾き出される。

距離を開ければ、突きと共に一足飛びで迫る。

隙がない。いや、あるにはあるがそれは畏。

本来の意味でアイツと同じ戦い方をしているなら、そこに飛び込んだ瞬間、斬り捨てられる。

相手の思い通りな戦いをさせないのが、アイツのやり方だった。

「そこを、どけえ！」

斬り上げ、袈裟斬り、薙ぎ、払う。

手の内を読まれているかのような気持ち悪さを振り払うように一気に攻めるものの、短剣による防御を崩せない。

俺が攻めあぐねている間にもアスナは須郷に辱しめられている。こいつに構っている暇はないのに！

「ふーん。結構粘るねえキリト君。そのステータスは上限目一杯まで引き上げてるはずだけど、やっぱりSAO事件解決の立役者様は格が違うってことかな？」

俺だけの力で解決できた訳じゃない。

あそこに囚われたSAOプレイヤー全員の活躍があつて、出会いと別れがあつて、前に進もうとした人たちがいたから、あの場所で茅場と戦うことが出来たんだ。

それをお前みたいな男に理解されて堪るか！

「だけどただ斬り合うだけじゃ、面白みに欠けるよねえ。苦痛に顔を歪めてもらわないと。ペインアブソーバーをレベル8に変更」

大剣が頬を掠め、焼け付くような痛みが走る。

VRじゃ痛みは感じないはずなのに!?

ペインアブソーバー。

須郷が操作したのは、VR世界で痛みからプレイヤーを守るための痛覚緩和機能であり、SAOにおいて茅場でも解除も変更もしなかった代物。

「君は懲りずにまたナーブギアでダイブしてるんだろ？だから段階的にレベルを下げていつてやるよ。レベル0じゃ現実にも影響が出るみたいだけど、関係ないよねえ。君とは金輪際、顔を見合わせることもないんだから」

アイツなら罵詈雑言を浴びせるだろう。

だけど俺にはアイツのような回る口も頭もない。だからありつたけの想いを剣に込める！

『お前は人外に片足突っ込んだ反射神経。俺は未来予知染みた先読み。俺とお前が戦えば千日手になるのは当然だろ？』

ある日アイツは俺にそう言った。

俺は感覚から得た情報の処理能力がずば抜けているからこそ、後の先で相手の手を潰せるのだと、自分は相手の呼吸・視線・重心から相手の手を読み、先の先で相手の手を潰す。

アイツと同じ戦い方なら、俺の方に分がある。

「それにしても君たちは冷たいよねえ。剣で打ち合えばわかるかとも思ったけど、これ

じゃ彼も浮かばれないんじゃない？」

「アイツの、アルトの戦闘データを使ってるんだろ？それぐらい戦い方を見ればわかる！」

アルトと戦ったのはあの時75階層が初めてじゃない。

その前にも何度も剣を交えた。

青春漫画じゃないけど、だからこそ分かり合えたこともある。

アスナもアイツと一緒に戦ったのは一度や二度じゃない。間近で俺たち二人はアイツの戦いを見てきたんだ。間違えるなんてするわけがない。

「アヒヤヒヤヒヤ！そうじゃない！そうじゃないんだよ！キリト君！」

「何を……」

「お披露目といこう！感動の再会だアッ！」

鉄兜のポリゴンが弾け、立てられた襟も霧散する。

黒みの強い灰色の髪、目尻がつり上がった三白眼。

しかし、その目には意思が感じられず、俺というより俺を含めた空間を虚ろげに見える。

「ア、ルト……？？」

「嘘……どうして……？」

「ナーブギアで脳を焼かれる前にデータをここに移したのさ」

SAOからALOに？でもそれじゃ……

「苦労したんだよ？誰にも気づかれず死ぬ間際のそれを移すのは」

「須郷！貴様！アルトに何を……！」

「何って、何もかもさ！電子ドラッグに情報過多による脳への直接的アプローチ。意識もない癖に1ヶ月も拒み続けたけど、つい先日ようやく成功したのさ。君たちが好む言い方をすれば、ついに心が折れたって奴だ。君が寄り道なんてしないで真っ直ぐここへ来られればそれもこんな目に遭うこともなかったろうにね」

俺が……？間に合わなかったせいで……？

「でもそのお陰で人の意思を自在に操る技術を手に入れられることが出来た。感謝するよキリト君。それはもはや忠実な下僕、優れた王には優れた騎士が付き物だろう？まあ後は戦闘パターンをすべて記録すれば用済みだけどね」

「どういう意味だ」

「彼の病室を訪ねてみたのさ、主治医の話ではあと半年も意識が戻らなければ危篤状態に陥る。だから君と戦ってもらって戦闘データを収集、コピーして心置きなく死んでもらうだけってわけだ」

「貴様……貴様あああ！」



許せない！アルトの意思だけじゃなく心まで踏みこむこいつが！

「相手は僕じゃないって言ったる？」

迫るアルトの大剣を弾き飛ばし、弾かれた反動を利用して体を捻り、振るわれそうになった短剣を足蹴りで阻み、アルトの脇をすり抜けようとした瞬間、大剣を弾き飛ばされ空いた右手が俺の首を捉え、振り回され地面に叩きつけられる。

「ぐうー！」

「まだ殺すな。キリト君には彼女が僕の物になる瞬間をその目で見届けて貰わなくちゃ」

万力のように締め上げていた手が緩むけど、押さえ付ける力はそのまま。下手をすればこのまま首をへし折られるだろうけど俺の目には須郷によつて辱しめられているアスナしか映っていなかった。

これは、報いなのか。

薄れていく意識の中で、ぼんやりと思った。

大切な人を目の前で辱められる。そしてそれに手を貸すのがこの手で殺したと思っていた、意思を奪われたアルト。

ゲームの世界なら俺は最強の勇者で……。

いや……勇者なんかじゃない。

あの時のアルトは俺よりも遥かに強かった。

それはステータス的な強さじゃない。強い覚悟を宿したあの剣は、確かに俺を凌駕していた。

けど俺には何の力も……覚悟もない……。

だから、この結末は当然の結果なんだ。

アスナを助け出す事もできず、アルトに殺される。

『心が何度折れてもまた立ち上がる、それがお前の強さだ』

……そうだ。アルトも言っていたじゃないか。何度心が折れても立ち上がれなきゃ、力を持っていてもなんの意味もない！

『——それでいい』

遠くで声が聞こえる。

それは抑揚が無く、俺の心が語りかけるようだった。

『——心が折れること、それはあの戦いを、ひいては彼の託した物を汚す言葉だ』

更にはつきりと聞こえる声。それは俺の中からじゃない……。

気付けば、目の前に誰かが立っていた。

『思い出したまえ、私にシステムを上回る人の意思の力を示した彼の心、そしてその心を託され立ち上がった君の強さを』

両手をポケットに突っ込んだ白衣の男……。

「お前は……」

『——立ちたまえ、キリト君』

白い世界が砕け散る中で、あの男は確かにそう言った。

——ああ、そうだよな

さっきの光景が何なのか、今はどうでもいい事だ。

「確かに痛い……でも……」

所詮こんなものデータ上のもの。

あの時のアルトの剣はもつと重く、鋭く、魂に響いてきた！

「ぐっ！」

「……!?!」

腹と膝を曲げ、アルトの腹部を蹴り上げる。

その反動を利用して地面に手で押し、立ち上がる。

「やれやれ……妙なバグが残ってるなあ？もう殺していいぞ」

アルトは地に突き刺さった大剣を引き抜き肉薄してくる。

焦りはない。所詮その剣にはアルトの意思がない。

「システムログイン……ID『ヒースクリフ』」

「な……なに!?　なんだ、そのIDは!」

「システムコマンド、管理者権限変更」

大剣の切っ先が俺の頭を貫く数ミリ手前で制止した。

恐らくシステム管理者に攻撃できないようプログラムでもしてたんだろう。

俺にとって好都合だけだな。

「ぼ、僕より高位のIDだとお!?　ありえない!　僕は支配者!　創造者だぞ!!!　この

世界の王!!!」

「なにが王だ……」

未だに事実を認めようとしないう須郷に小さく吐き捨て、俺は顔を上げる。

待つてろ……。今、お前を呪縛から解放してやる!

「いい加減、目を覚ませ!この馬鹿野郎!」

リアルなら爪が手に食い込むほど強く握りしめた拳をアルトの顔面に叩き込んだ。

吹き飛び、地面に背中から倒れ両手から武器がこぼれ落ちる。

どれぐらい経っただろう。ピクリともしないアルトに内心、やり過ぎたか?と思いは

めたときだった。

「……つてえ……死んでも痛みは感じんのかよ……」

もぞりと上体を起こしてぼやく。

声、喋り方、仕草間違いない。

「ここどこだ？死後の世界ってやつ？つか頭いつてえ」

「アルト……」

「あ？誰だお前……」

頭から足の先までじろじろと眺められ居心地の悪さを感じる。

「真っ黒装備……お前、キリトか？」

「ちよつと待てなに見て判断した」

「色」

「俺の認識、色!?!」

色で人を識別すんな！

「アルト君!」

「ん？アスナか？……人の趣味に口出しする気はねえけど流石におにーさん、アスナの将来が心配だ」

「え？いや、ちよ！見ちやダメ！」

「アルト、お前見るな！」

「お前だつて見たんだろ？なら俺にも権利はある」

「どういう理屈だそれはあ！」

ああ、こういうやつだったけ。

決めるときは決める癖に抜けてると言うか天然と言うか。口は悪いけど嫌味を感じさせないと言うか。

「いつまでコントしてるんだよお！」

「あの身持ち崩してそんなホスト崩れは誰だ？」

「須郷伸之。解放されるはずだったSAOプレイヤーを自分の実験に利用してた。ついでに言えば、アルトの意識を奪って操り人形みたいに扱ってー」

「へえ……」

あ、これヤバイやつだ。マジ切れ3秒前。

「詳しい話はあとにしよう。やれるか？アルト」

「俺とお前が組めば勝てねえ敵はいねえ、だろ？」

「ああ、当たり前だ」

心が折れても立ち上がれば負けじゃない。

俺とアルト。二人が肩を並べてるんだ。どんな敵でも打ち倒して見せる。

「システムコマンド、オブジェクト《エクスキャリバー》をジェネレート！」

呼び出したレジェンダリーウェポン《エクスキャリバー》を無造作に須郷へ放る。

コマンドひとつで伝説の武器を使い放題か……。

「ゲーマーとしては複雑な気持ちだな。

「まあそうだよな。丸腰の相手をフクロにしちや鬱憤も晴れねえ」

「物騒なこと言うなよ。ペインアブソーバーもレベル0まで落とした。ここでの痛みは現実にも影響が出るぞ」

「だからどうしたって話だな。武器は一流でも使い手が三流以下じゃ事故つても当たんねえよ」

結果フクロですな。分かります。

さて切り替えよう。

相手はこの世界の王。世界を盗み、玉座の上で踊る憐れな王。

打ち倒すのは鍍金の勇者。そして王の呪縛から解き放たれた獣。

戦意は十分。世界が相手でも恐れはない。

「俺たちでお前デメエを打ち負かす!!」

## 第最終翔：帰還

「逃げるなよ……あの男はどんな場面でも臆した事はなかったぞ。あの、茅場晶彦は！」  
「か、かやつ、茅場アツ！そうか……あのIDは茅場の……！なんで、なんで死んでまで僕の邪魔をするんだよオツ!!」

「……だったら茅場の協力者として、後始末くらいはしておかないとな。大口叩いて真っ先に死んだし、俺」

「アルト……」

「気にすんなよ。お前のこと恨んでねえし、あの時の選択に後悔もねえ。強いて言えばちと恥ずいな。あんな退場したのにこうして生き残ってるなんざ……行くぞ、ホスト被れ。今までの礼をしてやる」

「ああアアアアッ！」

先陣を切るのはアルト。

地を這うような低い姿勢で須郷へと迫る。

素人丸出しの構えから振るわれた《エクスキャリバー》を短剣で弾き、舞の様な動きで須郷の脇をすり抜ける。



続けて俺が躍り出る。

V字を描くように大剣を振るい《エクスキャリバー》を跳ね上げた。そこからは一方的だ。

須郷の前から後ろから嵐のような剣舞。

足を斬り飛ばされ、腕を斬り落とされ、腰から両断され、首を刈られる。

実は戦う前にシステムコマンドによつて須郷のHPがレッドに落ちたら全回復するように設定していた。

ついでに自発的なログアウトも。

つまり、俺たち二人の気が済むまでこうして切り刻まれなきやならないわけだ。

「あびやーげひおーた、助け……」

「キリト、もう飽きた。何が楽しくて野郎の悲鳴を聞き続けなきやなんねえんだ？流石に耳が腐る」

「奇遇だな。俺もだ」

前後から腰を挟むよう、すれ違い様に横一闪。振り返り、アルトは下から俺は上からの縦一闪。

打ち合わせもしないでここまで息が合うなんて、思つても見なかつたな。

「正直、テメエが誰かなんぞ知らねえし、興味もねえ。俺に何をやったのかも知るつもり

もねえ。けど……お前はキリトやアスナを苦しめた。だから——地獄に落ちろ、ゲス野郎」

両手の得物で切り開くように二閃。

同時に回復設定を解除。HPがゼロになり須郷のアバターはポリゴンとなって四散。あれだけの悪事を働いたにしては、呆気ない最後だな。

「キリト君……終わったの？」

アスナを拘束する手枷を解除して、彼女を抱き締めた。

間違いなく彼女はここにいる。ここにいるんだ。

「現実世界は多分もう夜だ……でも、すぐに君の病室に行くから」

「うん、待ってる。最初に会うのはキリト君が良いもん」

勿論、必ず会いに行くよ。

「アルト君、また会おうね」

にっこりと笑って、全身を光り輝かせたアスナがそう口にしたのと同時に光の粒子と  
なって消えてしまった。

「また、か。いいのか？お前たちと一緒にいても」

「当たり前だ。友達だろ？」

「ホントお人好しだよな、お前ら」

「まあな。アルトも帰す前にやることがあるな。——そこにいるんだろ？ ヒースク  
リフ」

何も無い虚空へ声を掛けた。すると俺たちの上から何かが実体化し、ゆつくりと地面へ降りてくる。

「久しいな、キリト君。そしてこの姿で会うのは何時振りかな、アルト君」

「ヒース……いや、茅場晶彦」

「生きていたのか」

「そうであるとも言えるし、そうでないとも言える。私は、茅場晶彦という意識のエコー……残像だ」

「相変わらずわかりにくい事を言う人だな」

「脳の高出力スキャンニング……成功率は1パーもねえって聞いたが……成功したのか」

脳の高出力スキャンニング？

言葉通りに受け取るなら、脳をスキャンしてデータに変換して……そうか！

目の前にいる茅場は、脳をスキャンしてデータ変換した茅場の意識体。

「SAO事件の黒幕がデータの海に逃亡……完全犯罪だな。リアル警察は捕まえられ  
ねえ」

「だがこの姿となったことで私は、私の夢を追い続けることができる。空に浮かぶ鉄の

城。幼い頃より夢想し続けた夢をね」

「だが残念。もうラーメンは食えねえな」

ラ、ラーメン？

「それだけが心残りだが。なに、どうとでもなるさ」

「あんたとはもう少しラーメン談義したかったが……そういやキリト、お前はどっち派だ？」

「醤油こそ至高」

「味噌こそ最強だ」

え？急に振られても困るんだけど。

アルトが味噌で、茅場が醤油。

「どっちかと言うと塩ー」

「よろしい。ならば戦争だ」

「醤油、味噌、塩。三つ巴だが勝つのは味噌だ」

収拾がつかなくなった!?

ヒートアップしていく二人を宥め、なんとか本題へ。

「須郷に操られていたお前を助けるのに手を貸してくれたのが、ヒースクリフだったんだ。まあ、なんにしても礼を言っておくよ」

「礼は不要だ。君と私は無償の善意が通用する仲間ではなからう。もちろん代償は必要だよ、常に」

「……何をしろというんだ？」

問い返した直後、頭上に眩い光が差し込んだ。

黄金に輝くそれはゆつくりと落ちてきて、俺の両手に収まる。

見た目は黄金に輝く卵……といえば良いだろうか。

「これは……？」

「それは世界の種子、《ザ・シード》だ」

「《ザ・シード》……？」

「芽吹けばどういふものか分かる。その後の判断は君たちに託そう。消去し、忘れるもよし。しかし、もし君たちがあの世界に憎しみ以外の感情を残しているのなら……いや、やはり止めておこう」

そこから先をヒースクリフは敢えて口にしなかった。

けど、『それを世界に広めてほしい』……なんとなくだけど、そう言うんだと俺は感じ取る。

憎しみ以外の感情、か……。最初は悲観したけど、それでもあの世界で過ごした日々は楽しかったな、俺は。

「では…私は行くよ。だが、いつの日かまた会うことがあるだろう。それまで暫しの別れだ、キリト君、アルト君」

最後にそう言い残し、ヒースクリフは地面を蹴って闇の中に紛れる。

瞬間、目の前に縦に亀裂が走り、そこから黄金の光が差し込むと一気に視界に広がった。

思わず腕を目の前に掲げてやり過ぎすと、夕日が差し込む鳥籠の中に戻っていた。

「……は……?」

「アルヴヘイム・オンラインの中だ。ユイ!大丈夫か!」

「パ。パッ!」

良かった無事だったんだな。

プライベートピクシーの姿のユイが目の前に現れ抱きついてくる。

「ユイ!無事だったか!」

「はい!パパのナーヴギアのローカルメモリに退避したんです!」

「ユイ、か?随分ちんまくなったな」

「このゲームのプライベートピクシーってナビに姿を変えてるんだ。だからいつでもあ

の姿に戻る」

「お久しぶりです。アルトさん」

ユイは指でつつくアルトを払おうとしてるものの、抵抗しきれず結局、つつかれるままだ。

いい加減やめろ。俺だって我慢してるんだ。

「……真面目な話、どうなるんだろうな。この世界」

「良くて長期メンテの名目でデータの精査と一新。最悪、全フルダイブ型VRの廃止……だろうな」

そう……だな。プレイヤーが幽閉される、なんて事態が二度も続けば、廃止を呼び掛ける人たちも出てくるはずだ。

そうなっても俺たちには何も出来ない。

それでもSAOで繋がったものまでは消えない。

「じゃあ俺は、ログアウトしたらアスナの病室まで行ってくるから。アルトもログアウト出来るように設定し直した。目を覚ましてすぐは地獄だぞ」

「そうかい。けどなお前とは鍛え方が違う。すぐ歩き回れるようになる……キリト」

「……? どうした?」

「いや……杞憂だったら良いが、あのホスト被れは強制ログアウトされたんだろ?」

「ホスト……須郷の事か。HPが全損したから、そうだろうな」

「だったらお前に復讐する事だって考えられる。用心してスタンガンの1つくらいは持ってけ」

「そんな物騒なものはないけど……でもそうだな、用心する」

システムコマンドを立ち上げ、囚われたまま立ったプレイヤーたちを解放、後はログアウトするだけだ。

「三神颯真だ」

「？」

「リアルでの名前。今まで背中預けてた相棒の名前を知らないのもあれだろ？」

「うん、そうだな。桐ヶ谷和人だ」

三神颯真……。

アスナの次になるけど、お前のところにも見舞いにいくよ。

「じゃあな和人。次はリアルで」

「会えれば、だけどな」

拳を打ち合わせ、視界が白く染まった。



あれから1週間。

ようやく流動食から味気ない病院食に変わった頃。俺はあの日の事を思い出していた。

キリトリー和人の活躍のお陰でリアルに戻る事が出来た。

最初に眼にしたのは、真っ白い天井と枯れ木のように細くなった自分の手。

体を起こすのもやつとで、枕元にあるナースコールを押すのもしんどかった。

両親はSAOにダイブする半年前に死んでるから、俺が目覚めましたと言う連絡は、横浜にいる親戚のところに行つたらしい。

横浜からわざわざ埼玉まで来てくれるのだけでなく、俺の着替えまで用意してくると言うのだから、あの人たちには頭が上がらない。

家族ぐるみで親交があつたおかげだな。

「兄ちゃんー！」

「おう、よく来たな」

病院だつつのに大声出しやがって。

走った勢いのままベッドに上体を起こした俺に抱き付いてきたのは、親戚んとこの双子の妹。

入り口で姉の方が花束を持って立っていた。

「病院で走っちゃ駄目でしょう？」

「だって、だってえ……」

あー入院着に抱き付いたまま泣くな。

「ご両親は？」

「兄さんを診ていたお医者様に詳しい話を聞いてます」

「親戚なんだから兄はやめろ」

「兄さんは兄さんです」

妹が妹なら姉も姉か。

ベッドサイドの花瓶に花を差しながらも目尻に涙が溜まるとこ見れば、こいつも泣きたいのを我慢してんだな。

キリトに殺されるのも悪くないと思ってたが、こいつらにも心配かけてたんだよな

……。

「兄ちゃん？」

「兄さん？」

二人の声に我に帰れば、不思議そうな顔で覗き込んでいた。

「心配かけたな二人とも。ただいま、今帰ったぞ」

お帰り、と泣きながら抱き付いてきた二人を抱き締めながら、俺はリアルに戻ってきた実感を嘸み締めた。

## 幕間

## 日常と世界の種子

人が睡魔を感じるのはどんなときだと思う？

集会で校長の長話を聞いているとき？

単調な作業をこなしているとき？

完璧でイベント周回しているとき？

心地いい陽気で公園のベンチにでも座っているととき？

まあ色々あると思うが、俺は——

「Gというのは重力加速度を示していて、9.8メートル毎秒であらゆる物体に作用しています。これは——」

退屈な授業を受けているときだろう。

てか重力加速度なんて工業高校出身者なら習っていることだろうし、わざわざ元大学生を集めてやることでもないだろ。

「では三神さん、等速自由落下における式を——」

「速度を求めるなら  $v \parallel g t$ 、落下した高さを求めるなら  $y \parallel 1/2 g t$ 、時間が必要な

いならvll2gy」

んな簡単なことで指名してくんな。

担当教師が対応に困ってるのを尻目に落ちてきた臉に逆らわず身を任せた。

頭に軽い衝撃で意識が戻り、その感触から教科書辺りだろうと目を開けば栗毛の少女が見下ろしていた。

「んだよ明日奈」

「また寝てたね。これで何回目？」

「いちいち数えてねえよ」

「先生も困ってたよ？成績は良いのに生活態度が悪すぎるって」

「言わせときゃいい。この学校にはPKした連中を監視しやすいようにすし詰めになれてんだ。本来なら大学に戻ってるはずの俺がここにいるのがその証拠だろ」

「口ではなんだかんだ言っても、ちゃんと出席してる辺り根は真面目だよね」

「俺のことよりも旦那のことを気に掛けてやれ。今日だって船漕いでたぞアイツ」  
うつらうつらと頭が何度か落ちかけてた。

大方、レア物を探して徹夜でもしてたんだろ。

「颯真さんは、なんというか放っておけないんだよね」

「ダメンスウオーカー？」

今じゃすつかり聞かない言葉だけだな。

「ちよつとお話しがあるんだけど時間大丈夫かな？大丈夫だよね」

「安心しろ。今の発言は俺にダメージがあつた」

自分でダメ男って言ってるようなもんだし。

場所を変えてダイシーカフェ

「眠い」

「頼む颯真！あとここだけ手伝ってくれ！」

「知るか」

今日は異様に眠い。

つーか、電子工学はお前の十八番だろうが。

「三神さん、ここの式の組み立て方なんですけど…」

「ん?……因数分解か。懐かしいな、俺も解き方が解らないで引つ掛かった覚えがある。まずはだなー」

「待て。なんでスグの方に乗り気なんだよ」

「お前はあとだ。自業自得だろ?」

「うぐつ……」

授業中に寝てた罰だよ。

一通り課題も終わらせ和人<sup>直</sup>妹<sup>葉</sup>はカウンター席で里香たちと楽しく談笑中。

「そういえば」

「ん?」

「颯真は茅場と同じゼミに通ってたんだよな?」

「まあな。とは言っても俺がゼミに入った時にはナーヴギア開発で忙しいのか、あんま顔も出さなかつたからな」

茅場がゼミに顔を出しても碌に言葉も交わさなかつたし、俺も茅場も自分の興味のあ  
る事しか興味がなかつたってことだな。

「けど、あいつは間違いない天才だ」

自身の夢を追い、そして実現させた。

空に浮かぶ鉄の城。

まあそれが本当に茅場の思い描いていた物だったのかは本人しか分からないことであり、俺たちが推測を重ねても憶測の域を出ないが。

「この間、神代凜子さんと会って来たんだ」

「……………ああ、あの人が」

「お前忘れてただろ？」

「忘れてねえよ。思い出すのに時間が掛かっただけだ」

「それを世間一般では忘れてたって言うんだけどな。まあいいや、茅場から託された

《ザ・シード》についてな」

「茅場と同じこと言ってただろ。『あの世界に憎しみ以外の感情があったなら』って」

「あの人の場合、茅場に憎しみ以外の感情があったならって言ってたよ」

確かに憎む人間もいるだろう。

だが同時に感謝の念もあるはずだ。

フルダイブ型MMOは誰もが手を伸ばせる形で茅場が作り出したもうひとつの世界だ。



だがSAO事件、ALOでの人体実験騒ぎでフルダイブ型MMOは衰退の一途を辿っている。

しかし和人の手の中には、その世界を救う手立てがある。

「ま、俺がとやかく言うことじゃねえな。《ザ・シード》は茅場からお前に託されたモンだ。ソイツを生かすも殺すもお前の自由。どう扱おうと茅場も恨みはしねえだろうよ」  
「……そっか。お前がそう言うんだから、そうなんだろうな」

憎しみ以外の感情は確かにある。

あの世界があつたからコイツらと出会えた。あの世界がなかったら、俺は今でも喪う痛みに怯え大事なものを作らず日々を暮らしていただろう。

あの世界が俺たちに与えたのは絶望だけじゃない。

それだけでも上等だと思わないか？

そして《ザ・シード》が世界に蒔かれた。

何が芽吹くかはあとのお楽しみだ。

## ユイの夏休み

『ALOで鯨を見れる場所を知らないか?』

「頭ん中りセットしてから出直しやがれ」

引っ越しのために荷物を纏めてるところで問われた声にイラつきを隠すことなく返して電話を切る。

俺はさほどALOに詳しい訳じゃねえし、ダイブはしてたが意識もねえし記憶もねえからノーカンだ。

「まったく、人が引っ越しで忙しいってのに意味の分からねえこと聞いてきやがって……。」

「今度はなんだ……!」

『悪かったって。実はー』

要約すればSAOで主釣りを果たした自慢話をアスナと一緒にユイに話したところ、鯨を見たいと言いついたそうさ。

「そーいやまだ海も見たことがないんだっただか?」

「……………」

明日は帰還者学校からの呼び出しもあるし、その時に直接話をするか。

呼び出しもというのもS A Oでプレイヤーズをキルしたことによるカウセリングだ。

リアルでも同じことをするんじゃないかねかと危惧した政府がわざわざ専門家を用意したそうだ。

呼び出しは口実だった。

菊岡の野郎がS A OとA L Oでの出来事を把握したいが為に臨時カウセリングの体を装って俺とキリトを誘き寄せたって訳だな。

お陰で丸一日潰れ、思い出したくもねえことを思い出した。どういうわけか、女性陣はプールを貸し切ってキリト妹の泳ぎの特訓をしたが。

「時間調整のためとはいえ、リアルじゃ夕方なのにこつち<sup>A L O</sup>じゃ真つ昼間とか体感時間が

狂うな」

「いいじゃねえか、青い空、青い海、白い砂浜それに……ぐへへ……」

おい、エロオヤジ。

クラインの視線の先には浅瀬で戯れる女性陣。

いつもと違うところと言えば服装だろう。

布面積が少なく肌面積の広いソレ。

「ハア……」

「なに目え逸らしてんだよ！ムツツリグフウ!!」

「一遍死ね」

「おおキレイなアツパーカットだな」

我ながら腰の入った良いアツパーが打てた。

確かに良い目の保養にはなるんだろうが、不躰に舐め回すように眺めるのは違うだろ。

「よう、待たせたな……クラインの奴が埋まってるが何かあったのか？」

「砂風呂だ。気にすんな」

「いや、頭から砂に突っ込む砂風呂があるか」

「なんなら全身をー」

「やめて差し上げる。ナチュラルに人を埋めようとするな」

「……なんか機嫌悪くないか？」

「リアルでちよつと、な」

ゴチャゴチャうるせえな。

鯨が出るかもしれないと言われてる南端の海底にある神殿のクエストに挑むことになった。

《深海の略奪者》という名のクエストなんだがN e R a K Kとか言う爺、あの名前どっかで見た記憶があんだよな……読んだんだったか？

「アルト！そつちにー」

「分かってらあ！」

馬鹿正直に真つ正面から突つ込んできた魚を大剣で受け止め、左の短剣で切り裂く。海底だからか出てくる敵は魚介類ばかり。

……寿司が食いてえ。

神殿の最奥には両手で抱えられるほど巨大な真珠。

あれを持ち帰ればクエスト達成か……おかしいな。

あれを盗んだ賊もいねえし、盗んだものをわざわざ目立つような場所に置いておくのもおかしい話だ。

神殿の入り口に戻り、キリトが抱えた真珠を差し出しかけた所で頭の中に浮かんだピースが噛み合い、キリトを後ろへ投げ飛ばしながら短剣で奴の喉を掻き切り蹴り飛ばした。

「ア、アルト！いきなり危ないだろ！」

「うるせえ！ゴチャゴチャ文句言う暇あんならさつさとソレを元あつた場所に戻してこい！コイツはー」

「羽虫が小賢しい真似をお！」

「クソツ！この……！」

無数の吸盤を持つ触手が煙の中から飛び出し、無様にも絡め取られた。

奴の頭の上に表示されていたNeRaKKの文字がKRakeNークラークンへと変わる。アナグラムか。

伝承や文献によつては海蛇や竜の姿で語られているが、多くはタコやイカなどの頭足類の姿で描かれる。北欧伝承に出てくる海の怪物だ。

「ツ！これ真珠じゃない！何かの卵よ！」

「つまり《深海の略奪者》って俺たちのことか！」

「この神殿に張られた結界は私では通れない。故に貴様らのような愚かしい夭逝を待つていたのよ」

「ああそうかい！説明ありがとう、よ！」

両手の得物で体に巻き付く足を切り裂いて拘束から脱出するが、状況は変わらず最悪だ。

ダメージを負わせても瞬間に回復し、水中という不利な環境にあつてこちらの動きは遅くあちらは速い。

と、頭上から降ってきた三又の槍がクラークンの眼前に突き刺さり奴の動きを止めた。

三又の槍……トライデント、海、クラークンと来れば有名なのは一人、いや一柱しかない。

Leviathan the sea lord

海王リヴァイアサン

何やら問答をしているようだが、クラークンが撤退し卵を返せば、地上まで送り返してくれるという。

その送り返す手段が鯨だった。

夕日に照らされながら、鯨の背に乗りユイのテンションはうなぎ登りだ。

「そーいや、何でアルトは今日来てくれたんだ？」

「なんだ藪から棒に」

「いやさ、引越して忙しそうにしてたし無理かなって思ってたからさ」

「別に大した理由はねえよ」

「ユイちゃんのためでしょ？」

「ユイの？」

「メールで聞かれてね。『ユイは海を見たことがないのか』って」

「んなことはねえよ。荷造りに疲れたからただの息抜きだ」

「またまた〜」

「知ってるか？鯨ってのは肉食らしいぞ」

「止めろ馬鹿！」

お前らまとめて食われちまえ！



くおまけく

「そう言えばお兄ちゃんとアルトさん……颯真さんってどんな関係なんですか？いつも喧嘩してる割りには仲が良さそうにも見えますし……」

「あーあれ？気にしなくても良いわよ。キリトと戦<sup>ア</sup>闘<sup>ル</sup>馬鹿<sup>ト</sup>が戦ってるのなんて日常茶飯事だし」

「もーリズさん？キリトさんとアルトさんの関係を言葉にするなら……戦友？が近いですかね。戦ってるのもコミュニケーションみたいなものですし」

「へえ、そうなんですね。私はあまり話したことがないので……話しかけられても『キリト妹』ですし……」

「ふふふ、愛称みたいなものだよ。SAOの頃なんて口が悪すぎて周りは敵ばかり

だったし」

「確かに。でも言ってることは正論だからね。口が悪くて頭も回るとか質たちが悪すぎるわよ」

「でも根はいい人ですよ？なんだかんだ言ってる」

「そうそう！なんだかんだ言ってるねえ」

「ふふふ……なんだかんだ、なんだかんだ」

「ぶえつくし！」

「汚え！こつち向きながらくしやみするな！」

「なんか好き勝手言われてる気がする」

「その前に俺に謝れ！」

## 戦闘狂の日常

A L O事件から幾月が経ち、和人が広めた《ザ・シード》によって様々なV R M M Oが芽吹き、茅場の手掛けたもうひとつの世界が息を吹き返したと言える。

俺こと三神颯真はリアルに復帰してなお二週間近く病院のベッドの上で寝たきり生活。

その後は血反吐を吐くようなりハビリの結果、一ヶ月程で日常生活に支障がない程度には回復することができた。

退院後は部屋を借りてる大家の婆ちゃんに丸二年分の家賃が滞納になってると告げられたときは膝から崩れ落ちたな。

俺も被害者な訳だし多目に見てくれないかとも思ったが、払えず引越すとなっても次の部屋が見つかるまでは居ていいとのこと。

……期限付きではあるが。

問題の先送りはあまりしたくはないんだが、背に腹はかえられない。総務省通信ネットワーク内仮想空間管理課の職員、菊……岡？と交渉、仮住まいを用意させることに成功。ついでにナーヴギア後期型フルダイブハード《アミスフィア》を融通してもらった。

トントン拍子で話が進んだもんだからキナ臭い。

話をした翌日にアミスフィアを用意したもんだから、恐らく菊岡の野郎も前もって用意していたのかもしれない。

あの笑顔の裏には何かある上、腹に何かを抱えている。直感ではあるが、あの男は信用できない。

深入りはせず、お互いに利用し合う程度の付き合いでいいだろう。業腹ではあるけどな。

まあそんなこんなで新生ALOにダイブしたわけなんだが

「和人……キリトの奴はまだ来てねえのか」

「開口一番にそれ？ 久しぶりに会ったんだし、他に言うことがあるでしょうが」

「久しぶりだな、そばかす鍛冶屋」

「ちよつとつと表に出なさい。鍛冶屋のSTRをその身に教えてあげるわ」

「まあまあリズさん、アルトさんが失礼なことを言うのは今に始まったことじゃありません」

せんから」

「へえ、言うようになったな口リカ。口ばかり成長してんのか？」

「身体的特徴を貶すのは良くないと思います！」

「アルの字は今日も絶好調だな。リアルの方が忙しいって聞いてたけどよ、この分じゃ要らねえ心配だったかもな」

「だが少し前までは入院してた身だ。目は光らせておいた方がいいだろう」

「老婆心は身を滅ぼすぞ？」

「けっ、口の滅らねえ奴だこと」

「全くだ。可愛げの欠片もない」

うるせえ。俺は俺なりのやり方で……いや、なんでもねえ。

「とりあえず、当面あんたの武器はそれよ」

「両手剣か」

片手剣よりも一回り長い刃渡り、かろうじて片手で振り回せるであろう重量のソレ。

確かにALLO開始直後のステじや大剣なんてまともに振ることもできねえから、丁度良いと言えば丁度良いんだが少し物足りない。

「てか、両手剣を片手で振り回そうとしてる方がおかしいのよ」

「短剣もくれ」

「人の話を聞きなさいよ……まあそう言うだろうと思って一応用意はしてるんだけど」

リズから渡された耐久値に重点を置いた短剣を左逆手に握り、右手の両手剣と交互に振る。

「今の鍛冶スキルじゃソレが限界。もつと良いものが欲しいなら、ジャンジャン良い素材を持つてきなさい。その見返りに武器を打つてあげるわ」

「Yeah h a a a !」

「……人の話を、聞けええ!!」

「ははは……相変わらず、嵐みたいな人ですね」

「はあ……まあ、被害に遭うのは他の武闘派プレイヤーだけどね」

「戦闘狂は未だ健在、か」

「だな」

「そらそらどうした！」

A L O が新しく生まれ変わったと同時に実装されたソードスキルを短剣で往なし、勢い余つてすれ違つたところを逆手に持ち直した両手剣を腰付近に突き刺し、踊るように立ち位置を入れ換えて再び持ち直しながら振り払う。

大剣ほどの火力はないものの両手半剣とも言える刃渡りのおかげで大剣よりも自由が効く。

横薙ぎの剣を飛んで躲し、その顔を踏み台にして跳躍。その背後で羽を広げて飛びたとうとしている奴の腹目掛けローリングソバット。

蹴りの反動を利用して回転、踏み台にした奴の頭上から躊躇なく振り落とす。

「なんなんだ……お前……」

「ん？……強いて言うならリハビリだ。久々のPVPだったからな。多少は楽しませてもらつたぞ」

唯一の生き残つたプレイヤーの言葉になんてこともなく返す。

別段、こいつらを襲つた特別な理由もない。

強いて言うなら視界に入った、つてとこだな。

観察してる分にはこいつら纏めても辛勝はできると踏んで挑んだわけだが、セオリー通りの対人戦しかしてなかったのか前衛後衛がはつきり分かれすぎていて分断しちま

えば、あつという間に崩れた。

前衛と後衛の間に飛び込めば、後衛は前衛を巻き込みかねないと判断したのか魔法を打たねえし、前衛も前衛で俺を後衛から引き離せばいいものを馬鹿正直にそのまま戦闘に持ち込んできた。

まあ、こいつらが対人慣れしてねえってことだな。

気を取り直して次だ、次。

そんなこんなで4パーティ程潰して回ったんだが、洞窟に逃げ込んだパーティを追っていたら意外な大物と遭遇した。

《Nidhoggr》

世界樹ユグドラシル根元、冥界ニヴルヘイムに住まうドラゴン。

神々の最終戦争《ラグナロク》すら生き延び、世界終末のときには死者の魂をその背に乗せて飛び去ると伝えられている。



深追いしなきゃよかったなあ。俺のステータスじゃまともに太刀打ちもできねえし。でもま、勝てねえからって逃げるって道理もねえよな。

ここにいるのはニーズヘッグだけでなく無数の蛇が左右を挟み、ニヴルハイムと来れば有名な猟犬ガルムが入り口を塞いでいる。

前門の蛇、後門の猟犬……ってか？

攻撃パターンを見るためにゾンビマラソンをするのも手だが、それだとデスペナルティが痛い。

ほんと、深追いしなきゃよかった。

両手の得物を握り締め、両サイドから津波のごとく襲いかかる蛇を躲しニーズヘッグへと飛び込んだ。

ドラゴンスレイヤーは男のロマンだ。

結局3回死んだ。

リスポーンと同時に武器を直し、凶悪極まりない毒対策に解毒ポーションを買い漁り、奴の攻撃パターンを分析する。

戦って分かったのは倒せないことはない、ということ。奴の最大の武器である毒ブレスをなんとかすればだが。

てか、あれはない。

時間の経過と共に毒のダメージが倍になっていく。おまけに吐き出された毒は地面に残り、足場がなくなっていく。

最終的に地面が見えなくなったときは笑うしかなかった。

まあ、俺も飛び慣れてねえから飛んで回避せず、地に足付けて戦ってたんだが。

「くそつたれー」

ガルムに噛み付かれた左腕を切り落とし、左腕ごと蹴り飛ばす。静かに忍び寄っていた蛇を踏み潰し、ニーズヘッグの毒ブレスを空を飛ぶことで回避。

間一髪で仕切り直すことはできたが、部位欠損判定によりHPが減っていく。

「どうすつかな」

ニーズヘッグのHPはあと3本。配下の蛇とガルムもまだいる。ここで死んでもう一度挑むのも手だが、これ以上のデスペナルティは避けたい。

「アルトさん！」

これは風属性魔法？

吹き荒れる風がにじり寄っていた蛇を吹き飛ばし、続く影がガラムを切り裂いた。

「お前……」

「初めまして！リーファです！お兄ちゃん……キリト君の妹でー」

続く言葉はニーズヘッグの咆哮に掻き消され、否応なく意識を引き戻される。

「やるしかねえか……やれるか？キリト妹」

「リーファです！……大丈夫！戦えますよ。それでもALLO歴は長いですから」

「ヘイトは俺が稼ぐ。あとは……分かるな？」

「了解です。とにかく斬って斬って斬りまくれば良いんですね？」

「……………兄貴と同じで脳筋だな」

「どういう意味ですか！」

そういう意味だよ。

「ああく疲れた」

「ぜつつつたい二人で挑む相手じゃないですよ……ましてや一人でだなんて……」  
「勝てねエから戦わないってのも違うと思うけどな」

無事ニーズヘッグを撃破。

ドロップ品《邪龍の毒牙》をゲット。

こいつでリズに頼んで剣を打ってもらおう。

「何はともあれ、援軍感謝する」

「クラインさんに頼まれたんですよ。『無茶してないか見張っておいてくれ』って」

大きなお世話だ。

「ALOなら私の方が詳しいですし、これでも剣道で全国行ってますから」

「そんなデカイもんぶら下げて良くもまあ」

「つつ!? セクハラです!」

「そんなことより左腕くっ付けたいんだが、どうすりゃいいんだ?」

「そんなこと!?!」

赤ら顔で捲し立てるキリト妹。

弄り甲斐があるのは妹も同じか。

「ああそうだ。キリトはどうしてんだ？」

「うう、この人自由すぎるよ……。キリトくんは1からALLOを始めるためにコンバートしてる途中ですけど」

「……キリト妹、もう少し付き合え」

「だからリーファです！でもどこへ？」

「キリトの剣、その素材集めだ」

アイツと戦うなら対等な条件じゃないとな。

そのあと散々連れ回し、非難轟々だったのは言うまでもない。

## 劍禪一致

劍道部の練習が終わり帰路に着く。

今日はお兄ちゃんも学校は午前中だけって言ってたし、もう家に着いてるかな？

買い物に付き合ってくれるって言ってたし忘れてなければいいなあ、なんて。

新生ALOの誕生と共にお兄ちゃんはデータを一新。

アイテムや武器を揃えるためにあちこち飛び回ってる。

そんなお兄ちゃんに悪態を吐きながら付き合っているアルトさん。

お兄ちゃんに言わせれば『ツンデレバーサーカー』なんだそうだ。

『勝ち負けは二の次。戦うことが好きで剣を振るうことを楽しんでる。口が悪くてデリ

カシーもない』

散々な言い様だと思いつつ聞いてたけど、最初に出会ったときを思い出して合意した。

だけど、と眉間に寄せた皺を和らげて

『アイツはどうしようもないお人好しなんだ。言葉を信じるんじゃない、言葉の持つ意

味と想いを信じればアイツの人となり分かるよ』

額面上の言動を信じない。

それがあの人と付き合うミソなんだってお兄ちゃんは笑った。

玄関で靴を脱ごうとしたとき、知らない靴が置いてあるのに気付いた。

紺色のメンズブーツ。

お兄ちゃんのものじゃない。

それじゃ誰の靴なんだろうとリビングを覗いてみれば、お兄ちゃんと楽しそうにお話ししている三神さんがいた。

「あ、スグお帰り」

「邪魔してるぞ、キリト妹」

「あ、はい……じゃなくて直葉です」

「そうだったな、和人妹」

「おい、颯真」

窘めるようにお兄ちゃんが名前を呼んでも肩を竦めるだけで、堪えた様子はない。

「和人の奴がバイクのエンジンの掛からねえって連絡が来たから、わざわざ見に来てみればバッテリーが上がってな。今はスターター持ってきて充電中」

そういえば、お兄ちゃんのバイクの隣に見たことがないバイクが停まっていたような？

あれって三神さんのバイクだったんだ。

「颯真が充電器を持ってて助かったよ」

「スマホも充電できるジャンプスターターも売ってんだから予備として買っとけ。バッテリーが上がる度に俺を呼ぶつもりか？」

「本当にすまないと思ってる」

「微塵も思ってたねえわ、こいつ」

「でも頼られて悪い気はしないだろ？」

「言ってる」

言葉の端々に感じる信頼感。

悪友に近い距離感。

「そう言うわけでスグ、買ひ物はバッテリーの充電が終わるまで待つててくれ」

「俺のバイクと繋げてエンジンを掛けても良いんだが、エンジンに負荷掛けちゃうからやりたくねえ。だから、わざわざ往復までしてスターターを持って来てやったって訳だ」

「そうゆうこと。形あるものは壊れるにしても長く使えるようにするのは持ち主の役目だからな」

「偉そうに言うな。俺の受け売りだろうが」

「そうだったか？」



「そうだよ。てか今日言ったことも忘れるとか、痴呆には早えんじやねえか？」

「うるさいバーサーカー」

「口が過ぎるな黒ボツチ」

「ボツチはお前もだろ」

「……………やるか？」

「二人とも仲が良いのか悪いのか。」

「スグ、道場使わせてくれ」

「木刀があれば尚良し」

「流血沙汰だよ!？」

「勝利!」

「打ちのめされたお兄ちゃんを踏みつけ、高らかに竹刀を突き上げる三神さん。」

「剣道には程遠い剣撃の応酬。」

「竹刀握るなんざ何年振りだ？ 案外まだ手に馴染むもんだ」

「え？ 三神さんって剣道やってたんですか？」

「親父の影響でな。 つつても一年もやってねえけど」

竹刀を肩に預ける胴着姿の三神さんは確かに板に付いてる。

「辞めちゃったんですか？」

「中学の時、上級生を打ちのめしたら出禁になった。 先輩面するもんだから、どんだけ強いのか気になってやった結果だ。 後悔も反省もしてない」

ええ……。

お兄ちゃんを足で蹴りながら壁際まで寄せた後、いきなり手首を掴まれ手のひらを指でなぞり始める。

「いいいい、いきなりなにを!？」

「ふーん……全国優勝ってのは見栄でも虚勢でもねえみてえだな」

「え？」

「親父と同じ箇所と同じようなマメができてる。 女子としては複雑だろうけどな」

「え、と。 三神さんのお父さんも剣道を？」

「ん、剣道六段。 一応、警察の剣道大会でも受賞されてる。 お袋は三段だったな……そう言や、親父にもお袋にも一本取れなかったな」

そう言つてどこか遠くを見るような目をする三神さんはどこか寂しそうだった。

「不躰に悪いな。お詫びに一本やろうか」

「三神さんがやりたいだけなんじゃ……」

「それもある」

そう言つて悪戯が成功した子供ののような顔で笑つた。

防具を付け直して、互いに向き合う。

……威圧感が凄い。まるで餓えたライオンを目の当たりにしているような……。

「スグ！呑まれるな！」

お兄ちゃんの声に我に帰れば、三神さんの竹刀は私の喉へ躊躇うことなく伸びていった。

間一髪、横から叩き落として伸びきつた手首目掛け竹刀を振り下ろす。

でもこれは柄で防がれ、押し返された。

「思い切りも判断力も悪くない」

今の一合だけで分かってしまった。

この人……強い。

「ALOでの戦い方を見た時から思ってたが、型に嵌まり過ぎだ。教本通りの戦い方だから、次の手が丸分かりだぞ？」

突きを出そうとした竹刀は下から打ち上げられ、咄嗟に面打ちに切り替える。

けどそれは同じく面を打つ三神さんの竹刀で止められる。

弾かれそうな竹刀を必死に握り耐える。

竹刀が軋み、折れんばかりに歪む。

「木の葉落とし……」

「お？結構マイナーな技なんだが知ってたか」

別名、面打ち落とし面。

相手が面を打つと同時に自らも面を打つ。

必然的に竹刀同士が真っ正面からぶつかり、そのまま相手の竹刀を弾き返して面を打つというもの。

「やっぱ久しぶりだと上手くいかねえな」

手首を返し、三神さんの後ろへと流される。

振り返った時には三神さんは片手で胴を放っていた。

完全な意識外。

剣道においてももつとも一本が取りにくい左側。

即ち逆胴。

引き延ばされた時間の中すべての思考が抜け落ち、まるで体が自分のものではないよう動く。

構えた竹刀を立てて柄で防ごうとするけど、受け止める筈だった柄は折れ勢いを殺すことなく折れた柄ごと私の胴を捉えた。

「まさかあれに反応されるとは思わなかった」

「片手打ちで竹刀の柄を折るとか、どんな腕力してるんですか……いてて」  
「腕力というか全体重掛けただけなんだが……」

「竹刀と防具越しに打たれたのに赤くなってる……」

試合的には一本とは言い難い。

けど私が体勢を崩し倒れてしまって、なし崩し的に終了となった。

「颯真！お前、人の妹に手を出すとは何事だ！」

「傷物にしたわけじゃねえんだから、人聞きの悪いこと言うな！」

お兄ちゃんと三神さんはあの調子だし。

「はっ倒す！」

どうしてそうなるの!?

三神さんは竹刀を右手に二刀流用の短い竹刀を左逆手に持って、竹刀二刀流のお兄ちゃんを迎え討つ。

結局、買い物には行けず二人には後日スイーツを奢って貰うことになった。

## 大人の嗜み

引越しも済み新居に漸く慣れてきた頃、クライン……遼太郎の呼び出しでダイシーカフエに赴いていた。

「お？来たな」

「遅えぞアルの字！」

「アルの字言うんじゃねえ。それで何か用か？」

「お前、先月誕生日だったんだろ？二十歳になって立派な大人の仲間入りって訳だ」

「そこでエギルと話して大人の階段つてやつを登らせようって話になってな？ここ夜はバーだろ？」

「酔い潰れても一晩ぐらいなら泊めてやる」

「デロンデロンにしてやるぜ」

「帰る」

「まあまあまあまあ」

アルト は にげたした！

しかし まわりこまれた！

両脇を固められカウンター席に座らされる。

そして出されたのはグラスの縁にレモンの切り身を差し込んだ炭酸入りの酒。

「まずは一杯目だ」

「そらググイーっと」

「……………」

意を決してグラスを持ち口へと運ぶ。

レモンの酸味と炭酸の刺激、甘さもなく呑みやすい。

「手始めは呑みやすいレモンサワーだ。度数も低めに作ってある。よほどアルコールに弱くなきゃ悪酔いもしにくい。お前さん酒は初めてだろ？」

「初めて飲むならチューハイだよなあ。俺も最初はそれで酔っぱらったもんだ」

「それでどうだ？」

「……………不味くはない」

「それはそうだろう。不味い酒出してたら店が潰れちまう」

「旨い酒を目利きできて一人前よお。エギルの出す酒に外れはない」

「嬉しいこと言ってくれるな。だが、アルトの分の料金もお前さん持ちだからな」

「つか俺まだ学生なんだが」

「形の上ではだろ？ 本当なら大学生で二十歳になってんだから呑んでも問題ねえさ」



「分かった。問題になったらお前に無理矢理吞まされたって言っとくよ」

「俺は二十歳になったばかりの友人を連れてくるとしか聞かされてない」

「お、お前らなあ……」

「ところでお前は好みの娘とかいるのか？」

「なんだ藪から棒に」

「いやよ、俺も二十歳の頃は彼女作るのに必死だった頃ですよ？」

「それは今でも変わらんぞ」

「んん！キリの字には彼女もいるし、女の子に囲まれてるだろ？お前はどうかなのかなって思ってたよ」

「確かにそんな話聞いたことがないな」

「別に作ろうとも思ってたねえよ」

そこで一度区切りソルティドック？グラスの縁に塩を乗せたやつを一口。

「彼女がいるからどうだとか俺には縁の無い話だ。相手のことを考えて行動とか疲れるだけだしな」

「かあー！勿体ねえ」

「今はそれでいいだろうよ。だが、恋愛つてのは感情論だ。これでもかかってぐらいに主観的な話だぞ？歳の差があるうが、人種が違おうが、惹かれちまうのはしょうがないもんだ。いずれお前さんにもそういう相手が現れるさ」

「そういうもんかねえ」

俺の隣に誰かいる。

……全く想像できねえ。

「人の事ツンデレだのなんだのってアイツらはー」

「アルトのやつ大分酔ってきてるな」

「腹割って話すなら酔わせちまう方が早い。アイツはなんだかんだ言っで自分で背負い

「だんじまうきらいがあるからな。人の悪意を」

「ほんと似た者同士だよな。コイツとアイツ」

「おい聞いてんのかお前ら」

「聞いてる聞いてる」

「人を酔っぱらいみてえに扱いやがって」

酔っぱらいだからな。俺がクラインの話に乗ったのはコイツが心配だったからだ。キリトには背中を支えてくれる思い人と仲間がいる。だがコイツは？

もちろん俺たちは仲間だと思ってる。

けどコイツは人の悪意を受けても飄々としてるような奴だ。外見上は。

弱音は吐かないし、精神的に弱ってる様子も見たことがない。だが人間である以上ストレスは溜まる。

コイツが爆発したらどうなる？

暴力沙汰で国家権力のお世話になる可能性が高い。

溜まったストレスをキリトと戦うことで発散してるのかもしれないが、別の発散の仕方を見せてやるのも大人の務めだ。

「お前らに話した事あったけか、俺の両親SAO事件の半年前に死んだって」

「いんや初耳だ」

「だな」

「お袋と親父は警察官でさ、真面目が取り柄みたいな人たちだった。あの人たちが親で良かったと思うし、息子であることを誇りに思う」

SAO事件の半年前、俺は大学に合格して両親も喜んでくれた。けどあの人たちも忙しくて、ゴールデンウィークを利用して遅ればせながら入学祝をすることになったんだ。

けど両親が乗った車にトラックが突っ込んでな。……即死だった。原因はトラック運転手の心筋梗塞で誰も責めれない事故だった。

しばらく荒れたよ。俺の中で何かが壊れた気もした。人として大事な何かが。

疎遠だった親戚は親が残した遺産に群がってさ、殴り飛ばしてやった。仲裁に入ってくれた親戚がいて、その双子に言われたよ。

『兄さんは生きてる。両親の分も立って歩いて』

ってさ。

目が覚めた気分だったよ。年下に糺されて情けなくもあつたけどな。

時間は掛かったが、いつも通りに振る舞えるようにはなった。けど周りを威圧して踏み込ませないようにしてた。

親の事がトラウマになってたんだろうな。

大事な人が失われることに。

どんなに大切に思っても無くすのは一瞬で、その喪失感に耐えきれなくて、自分でも知らない内に大事なものを作らないようにしてた。

けどさ、そんな俺でもあの世界で大事なものが出来た。二度と無くしたくないものが……出来てたんだ。

それに気付いたとき俺は決めた。どんな手を使っても失わせない守ってみせるって。その結果、そいつらに嫌われて二度会えなくなるとしてもだ。

……実はS A Oでキリトと戦った最後の日、わざと死ぬつもりだった。アイツに殺されるなら本望だし、誰かを殺せる覚悟ができたアイツなら茅場に負けることもねえ。分の悪い賭けだったけどな。

「その覚悟を作るために自分の命を使ったってのかわ？」

「まあそうなるな。どうせ人を殺した命だ。その命を使ってアイツらをリアルに帰すことができないなら、躊躇う理由もなかった。なんだかんだ生きてたけどな俺」

「馬鹿野郎だお前は」

「重々承知してますよーっと」

コイツはコイツなりの信念を貫いた。例えば自分が死んでも仲間を現実に戻すために犠牲になろうとした。

その手段が間違つてたとしても自分なりのやり方で、誰かのために戦つてた。

「エギル次い」

「飲みすぎだ。ニユービー」

「ういゝ」

「完全にベロンベロンじゃねえか」

「あつつい」

「ああ！服脱ぐな！外に出ようとするな！」

暴走し始めちゃいるが手が出てないだけマシだ。

やれやれ店を閉めてからで助かったな。

「エギル！助けてくれ！」

「はなせばかやろー」

さてこの馬鹿野郎を寝かし付けるとしますかね。

## フアントムバレット編

## 第1弾：銃の世界

実弾銃の発砲音が木霊し、用済みとなつた藁莖が吐き出され地面に落ちる。吐き出された弾丸は目標を捉えることなく壁を穿つ。

銃声からして敵は少なくとも3、あるいはそれ以上。

銃声に掻き消される地面を蹴る音。

紅い軌跡が宙に描かれ、銃声がひとつ消える。

再び吐き出される弾丸は壁を穿つか紅い軌跡に弾かれ、斬り落とされる。

銃声が全て消え、足音が近づいてくる。

《グロツク18C》をホルスターから引き抜き、近づいてくる足音の主へ向け――

「おいおい、銃は相手を選んで構えろよ」

《グロツク18C》を上から抑え込まれ、声の主を見据えたため息をひとつ。

「遅かつたじゃない」

「待たせたな」

私の相棒たる刀剣使いは皮肉げな笑みを溢した。

「それにしても、よく隠しダンジョンなんて見つけられたわね」

「発見されたダンジョンの位置を統計、配置の傾向から洗い出ただけだ。とはいえ、しらみ潰しに歩き回る必要はあつたけどな」

彼の先導のもとダンジョンを練り歩く。

「お前が罠なんか引つ掛からなきゃ、とつくにボス部屋まで辿り着いてた筈なんだけどな」

「うっ……」

落とし穴なんて古典的な罠に引つ掛かり、即死こそ免れたもののダンジョンの最奥、しかも最高難易度の所まで落ちてしまった。

合流に時間を取られた上、誰も到達した事のない未踏エリアでありマップ情報も無い。おまけにうろつく敵は真正面からやりあうには厳しい相手。

それに残弾に限りのある私はその全てを相手をできるわけもなく、残弾を気にする必要のない彼が奇襲撃破しているわけだ。



「けどこれじゃあ、迂闊に探索も出来ねえな……」

隠れて行動するから移動にも時間が掛かる。

かと言つて真つ正面から切り込むにしてもリスクがある。

よつて敵の気配を感じるといふ訳の分からない感覚を持つ彼が先行・偵察し可能であれば撃破して道を開き、そうでなければ息を潜め敵をやり過ぐす。

どこぞの段ボールを被る蛇にでもなつた気分だ。

鼻歌混じりに進んでいく彼の背中を見て思う。

この状況でもいつもの調子を崩していない。

大胆不敵。不撓不屈。泰然自若。

そして戦闘になると弾丸の雨の中を散歩にでも行くような気軽さで駆け抜ける。

私もいつか彼のような強さを手に入れられるのだろうか？

やがて円形のスタジアムの上に行き着くと、下を覗けば見たことのない大型モンスターがうろついているのを発見する。

「なんだあの牛豚擬き……」

「学名みたいになつてゐるわね」

「ゴミムシダマシ的な？」

「後から見つかつて付けられた名前がダマシなんて酷い話よね」

恐らくこのダンジョンのボス。

ということとは倒せばレアアイテムを落とすかもしれない。

大変魅力的な話だが、たった2人で初見の大型ボスを倒すのはかなり無謀だ。

強さにしてもこのエリアの難易度を考えれば、相当なものはずだし、仮に倒せたとしても帰り道に遭遇した敵と戦うときにどれだけ弾薬が残っているのか……。

「アルト……本当にやるの?」

「まあな。元々それが目的だったわけだし」

後ろ腰に回していた太刀の柄に手を掛け引き抜く。

彼が振るう高周波ブレード《ムラサマ》は、昔のゲームとコラボしたときのものらしく、高周波を流すことで金属、コンクリートすら膺斬りにすることが出来る。

それだけではなく、《M16》アサルトライフルの機構を鞘に取り入れ、鯉口近くの引き金を引くことで、火薬の爆発力を用いてスパイクを打ち出し、そのスパイクに押し出される形で太刀が飛び出し、高速の抜刀を可能にする機構を備えている。

とはいえ、銃がメインのGGOにおいてリーチの差は勝敗を別ける重要なファクターだ。

有名な銃である《ベレッタM92F》を例に挙げると有効射程50m前後。実際の交戦距離を考えれば更に短い、それでもリーチの短い剣よりもずっと長い。

だというのに彼はそんなハンデをもとせず、距離を詰め斬り捨てる。

どこぞのアニメの剣豪のように銃弾を刀で弾くという荒業までやってのける始末だ。

「来やがれ、牛豚擬き」

彼が下の階層へ飛び降り、戦いの火蓋は切って落とされた。

「すうー……はあー……」

緊張に支配された身体を解すために大きく深呼吸した。

スコープ越しの世界ではアルトが大型ボスモンスターを相手に大立ち回りを演じている。

ボスの踏み付けや噛みつき、あるいは尻尾の先端から発射される高出力レーザーを前にしても怯まず、逸らし、いなし、避ける。

しかも額にある弱点であろう刺青のようなマークを私が狙撃しやすい正面に位置取りし続けてくれている。

「……………」

呼吸を整え、ボスの弱点に狙いを定めてトリガーを引く。

額を寸分違わず撃ち抜くきボスが怯んだ隙を狙いアルトが更に追撃を仕掛けた。

『シノン・レーザー来るぞー！』

アルトが叫び、柱の陰に隠れる。モンスターの尻尾の先端が開き、赤いレンズ状の物

体が露になるとそれから高出力のレーザーを発射した。

私の所までレーザーは届かないが、白兵戦を行うアルトは射程圏内だ。対光弾防護フィールドがあっても距離があれだけ近ければ効果は薄れる。

すかさず私がボスの弱点を狙撃。

弱点を撃ち抜かれてモンスターは怯み、レーザー照射が止んだ直後、目にも止まらない早業で両足に斬撃の雨を浴びせる。

これにはさすがのボスも大ダメージによるスタン状態になり、この隙を逃さず私は額の弱点を連続で狙撃する。アルトも見事な剣舞でモンスターを切り裂いていく。

スタンから回復したモンスターが起き上がろうとし、すかさずアルトは両足の膝裏をモンスターの巨軀を潜り抜けながら一閃。

いくら重装甲でも関節までは守れない。

前のめりに倒れ、私に土下座をするように頭を晒していた。

悲鳴を上げ、めちやくちやに動き回るモンスターに慌てることなく動きを見切つて太刀で斬り付けて行く。

——その口元は笑みを浮かべていた。

単純なステータス上の強さじゃない。彼は戦場で笑えるだけの強さを持っている。

その強さの理由が知りたかった。倒せばその理由が分かるかもしれないけど

……いつの間にか私は肩を並べていた。

聞いてみるもはぐらかされて、それならと彼の強さを知るためにその背中を追いかけて、今も追い続けて……。

『シノン、残り1割切った。畳み掛ける！』

「……了解」

インカムから聞こえるアルトの言葉に返し、私は狙撃に集中する。

——氷。私は冷たい氷でできた機械。

頭の中で唱え、トリガーを引き絞る。

愛用の狙撃銃《FR—F2》の銃口から弾丸が打ち出され、額を射抜く。

ボルトアクションゆえに速射は出来ないが、それをカバーしてくれるのがアルトだった。

仰け反ったモンスターへ跳躍、《ムラサマ》の引き金を引き、鞆に納められた太刀が音速を越えて打ち出される。

頭上を飛び越え、音を置き去りにする斬撃で地面に頭を叩き付けられた。

ボルトを引いて薬莢を弾き出し、押し込んで新たな薬莢を装填して、銃口の位置を修正してトリガーを引いた。

アルトが着地したと同時に弾丸がモンスターの額を正確に射抜き、やっと倒れて動か

なくなるとガラスが砕ける音と良く似た音を立ててポリゴンを砕け散らせた。

「……はあ」

ようやく倒れた……倒すのに2時間も掛かったけど。

ラストアタックを決めた私にボーナスが贈られてくる。

それをオブジェクト化すると、《FR―F2》よりも大型のライフルが出現し、受け止めようとしたら思った以上にずっしりと重みがあつて驚いた。

《ウルティマラティオ・ヘカートII》

GGOサーバーでも10挺しかないと言われるアンチマテリアルライフルの1挺だ。

「お疲れシノン。何が出た？」

「《ヘカート》よ。私も実物を見るのは初めて」

「《ヘカート》!?マジかよ!」

子供みたいにはしゃいでいる彼に思わず笑みがこぼれる。

あんなアバター——細身の体躯にポニーテールのように結わえた黒髪。歴戦を思わせる傷跡を湛えた相貌——をしてくる癖にたまに子供っぽい一面が覗く。

「ロープとか持つてないよな?」

「お生憎。持つてないわ」

「しゃーない。そつち行くから動き回るなよ?」

「人を子供扱いしないでくれる？」

「落とし穴なんて見え透いた罠に引つ掛かった奴が言うことじゃねえな」

口は悪いけど、頭に来る程ではなく彼なりのコミュニケーションなんだろう。

それを知らない人たちからすれば、喧嘩を売られてるように感じるかもしれないけど。

「こいつが《ヘカート》か……実物は初めて見るな。どうする？ 売り払えばかなりの金になるぞ」

「そうね。オークションにかければ相場以上になるとは思うけど……」

あのあと十分近く使つてようやく合流できたアルトに《ヘカート》を見せる。

けど、アルト？ 博識なのは知ってるけど、《ヘカート》の由来がギリシャ神話の女神《ヘカテー》から来てるとかどこで知ったの？

頭の出来と趣味嗜好は別？

ああ、そう。

「……けど、これを使おうと思うの」

「使うってそれとか？確かにシノンのステータス的に使えると思うが……」

私の意向が意外だったのか、アルトは首をかしげる。

確かにお金にすれば当分、弾薬費などに困る事はないだろう。《FRIF2》も悪い銃じゃないし。

でも……私が潜っている理由は強くなるため。それに、なんとなくだけでも《ヘカート》に何かを感じたから。

「……ま、個人の戦闘スタイルなんざ自由だからな。俺も人のこと言えねえし」

それ以上理由を問いたださず、おどけるようにしながらも納得してくれた。

性格はあれだけど、人の心情に機微な所もあつて気持ちを汲んでくれるのは有り難い。

「……ありがとう」

「別に礼を言われるような事はしてねえし、礼を言うにはまだ早えだろ。次はここから脱出しなきゃいけないんだから」

「あ……」

そうだった。

改めて思い出すと、私たちは今地下ダンジョンの最奥部分に取り残されている。

ここで死んで、せつかく手に入れた《ヘカート》を失ってしまったら当分立ち直れな



い。

「シノン残弾は？」

「《FR—F2》が残り20、《グロック18C》が30ね。あなたは……つて聞く必要ないか」

「真正正銘こいつ一本だ。こいつのでいいならやるけど？」

太刀の柄に乗せた左手で《ムラサマ》を叩く。

「というか、それに使ってる弾丸は火薬だけだから！」

「交戦は可能な限り避けて……方が一戦闘になった時は逃走優先しかないな」

「どうにか出来そう？」

「どうにかするさ」

「やっぱりシババの空気はうめえな」

「……………」

ピンピンしているアルトとは対照的に私はぐったりしていた。

「……私、金輪際アンタの背中に乗らないから」

「なんでだ？」

「なんでって……」

思わず《グロック18C》をホルスターから引き抜きかけるけど、鋼鉄の理性でなんとか納める。

アルトがやったことは単純明快。私だって信じたくないけど、壁だけじゃなくて天井までも使い走って逃げた。途中遭遇した敵は全部無視。

STR優先でステータスを上げている私と違い、AGI優先だが、STRもそれなりに上げている。

だから、《グロック18C》以外を全てストレージに収納した私を背負って、地下を駆け抜けた。

もうひとつやっている方のゲームはSTR極振りらしく、彼曰く『1から始めんだから、こっちはAGI型でやろうと思っただけ』らしい。

そんな理由でこの世界GGOでトッププレイヤーの一人に名を連ねているのだから、世の中不公平というか。

「ほんつと疲れた。人を背負って全力疾走は重くて疲れ……イエ、ナンデモアリマセン」  
「……よろしい」

私が《グロツク18C》をアルトの脇腹に押し当てると、すぐ大人しくなった。

重くない。私は重くないわよ、絶対に。と言うか女の子に向かって失礼でしようが！  
「かがみんも居ねえし、このままグロツケンに帰るか？それとも、辻斬りといくか？」

アルトがかがみんと呼ぶのは私をこの世界GGOに誘ってくれた新川くんことシュ  
ピゲール。

シュピゲールとはドイツ語で鏡という意味からアルトがつけた渾名だ。

……ギリシャ神話といい、ドイツ語といい彼の知識量には舌を巻く。昔とつた杵柄と  
か言っていたけど、あとで詳しく聞いてみようかな。

「もちろん後者よ。使った分の弾薬費を稼がないといけないんだから」

精神的な疲れはあるけど、それで狙撃を外すほど私は甘くない。

狩られる人たちには、御愁傷様と言っておこう。

「とつろで」

「ん？」

「《ヘカート》をドロップするって知っててあそこに付き合わせたの？」

「まさか。まあLAはお前だし、それはお前のモンだ」

嘘だ。最後の一太刀、あれは僅かに弱点から外れてた。あのタイミングでアルトが外すなんて考えにくい。

そう。わざと外しでもしない限りは。

「……ありがとう」

「なんか言ったか？」

「なにも」

「そうか……まあ俺も《ムラサマ》手に入れるのに付き合わせたしな」

「なにか言った？」

「いや、なにも……つと来たな。《M4》が二人、《FA-MAS》が一人……あれは《SR-25》か？」

「良い銃ね。高く売れそう」

「おお怖っ」

双眼鏡を覗くアルトの脇腹に肘打ち。

対弾皮膜に覆われたパワーアシストスーツに阻まれるが、別に危害を加えようとした

わけじゃない。

「大方、mob狩り専門のスコードロンを襲撃したあとでしょうね」

「だな。足跡の深さが左右バラバラ。装備の重量が偏ってるせいだな」

「いける？」

「当たり前だ」

アンデスに吹き付ける冷たい南風の如く、容赦なく襲い掛かった。

## 第2弾：氷の弾丸

ALOでの一悶着の後、やはりというべきかフルダイブVRゲームに対する風当たりが酷くなり、全VRMMOの中止は免れない……はずだった。

和人が茅場から託された《ザ・シード》が文字通り世界を救ったわけだ。

《ザ・シード》とは茅場が開発したフルダイブ型VRMMO環境を動かすプログラムパッケージで、そこそこ回線の太いサーバーを用意して《ザ・シード》をダウンロードすれば、誰でもネット上に異世界を作ることができるという。

和人はそれを、エギルに依頼して誰もが《ザ・シード》を使えるように世界中のサーバーにアップロードした。

これによつて死に絶えるはずだったVRMMOは蘇り、ALOも「レクト」から全ゲームデータを無料同然で譲り受けたベンチャー企業「ユーミル」によつて《ザ・シード》規格のVRMMOとして復活した。

それだけに留まらず、《ザ・シード》によつて大小様々な仮想世界が生まれ、それらは同じ《ザ・シード》規格であるなら、他所で作ったキャラクターデータを別のVRMMOにコンバートする機能を持っている。

とはいえ、データを同期させるために元のアバターが持っていたアイテムは消えちまうから、知り合いに預けとかないといけないけどな。

難しい話はここまでにしよう。

俺も無事退院することが出来、いざ借りていたアパートに帰ろうとしたとき大家の婆ちゃんに2年分の家賃が滞納になっていると言われた。

提示されたのは、払うか引越すか。

いやまあ、確かに？2年間、病院のベッドの上で眠りこけてた訳だけど、俺も被害者な訳だから多目に見てくれてもいいんじゃないかね？

総務省通信ネットワーク内仮想空間管理課の職員、菊：岡？と名乗る男にちよつとお話しをして一時的な仮住まいを用意してもらった。

……まあ、隣も高校生の一人住まいらしいけど、ドアの鍵が初期型の電子錠つてのは防犯上よろしくねえから、貯金を崩して最新式に取り替えた。

そこまでは良かったが、次は隣に問題があった。

高校生の独り暮らしだから溜まり場になるのもわかるが、時間を考えろ。防音性はさほど高くねえから下品な高笑いが壁越しても響いて来る。

つい頭に来て、隣に殴り込んだわけだがそこでようやく事態を把握できた。

家主は気弱そうな眼鏡をかけた少女、そして今時な男女が数人。

大方、気弱そうなことをいいことに凶々しく部屋に上がり込んでんだろ。

絡んできた少年の顔面に拳を叩き込みたかったが、これ以上騒ぐなら家主含め外に叩き出すと、俺を殴ろうとしていた少年の拳を握り潰す勢いで凄んでやれば、蜘蛛の子を散らすように帰ってった。

札を言われたが、部屋に入る前に、

「誰かを利用する奴は嫌いだ。だが利用されるだけの奴はもつと嫌いだ」

そう吐き捨て、一応の決着がついた。

話は変わるが俺が持ってたナーブギアだが、政府の回収によって手元がない。これもまた菊岡に話を通し、ナーブギアの後継機アミュスフィアを融通してもらい、ソフトも用意した。

A L Oとゲーム内の電子マネーをリアルマネーに交換できる銃がメインの世界ガンゲイル・オンライン、通称G G Oを行ったり来たり、まさにゲーム廃人のような生活をしている。

A L OとG G O。剣と銃。

男心がくすぐられるものがある。男は剣と銃が大好きな生き物なのだ。

今年で20になったが、S A O帰還者サバイバーの為の施設が出来るらしくまた高校生活を送ることになった。



編入されるまでの間、自宅学習という形をとっているが遊び盛りの学生が大人しく勉学に励んでいるわけもなく、大多数は俺のようなゲーム三昧の生活を送っていることだろう。

早速GGOに潜ったが、アバターは完全なランダム。

身に付けてるのは、七分丈のくすんだ赤いジャケット、黒のインナー、同色のジーンズ、顔はあとで確認しよう。

課金すれば再度ランダムで作り返せるらしいが、そこまでガチでやるわけでもねえし、取り敢えずこのゲームを楽しむとしよう。

ALOのファンタジー世界とは異なり、GGOは最終戦争後の荒廃した未来の地球を舞台とした銃の世界。

戦闘方法は当然ながら銃火器といった近代兵器が中心。そんな舞台設定ゆえかややりアルに寄った世界観のため、SAOやALOとは全く異なる意味での現実らしさを感じる事が出来るところは俺は俺は好感が持てる。

所持金は1000クレジット。

PKでもしてドロップした装備を売り払って稼ぐか。

この世界で稼ぐ方法は大きく分けて2つ。

mobモンスターを狩って稼ぐ方法。

PKしてドロップした装備を売り払い稼ぐ方法。

前者はSAOでのギルドに相当するスコードロンなるものを組まなければ、安定して稼げないらしい。

後者はハイリस्क・ハイリターン。返り討ちにあつた場合、自分の装備を相手に渡すことになる。

始めたばかりの初心者が手を出すものではない。

知り合いもないGGOだ。最悪、返り討ちにあおうが悪評はGGO内だけで済むだろう。

と言うわけで最安値のナイフを一本、投げナイフを数本、値崩れし捨て値当然だった投げナイフ用のホルダーを購入しフィールドに出たわけだが、早速洗礼を受ける羽目になっっているわけだ。

身を隠した岩がアサルトライフルから吐き出された弾丸によって、火花と共に削られる。

相手はサングラスと赤いベレー帽の二人組。

「クソ、馬鹿正直に正面から行くんじやなかった」

考えれば、金が欲しいから殺されてくれ、なんて言われれば誰だって躊躇うことなく引き金を引くだろうが。

「せめて弾道が判ればなあ」

音速を越える銃弾を見切るなんざ、余程の動体視力がなければ無理だ。

このゲームはよりゲーム性を高めるため被銃撃者と加銃撃者にあるシステムが設けられている。

バレットライン  
バレットサークル  
弾道予測線と射撃予測円。

前者はその名の通り、被銃撃者の視界に表示される赤い光のライン。銃口から放たれた弾丸がどのような軌道を進むのかを示すもの。

後者は加銃撃者の視界に表示される半透明のライトグリーンの円。弾丸は円の何処かにランダムで着弾する。

「……そうか。判んじやん」

予測線が銃弾の軌道を教えてくれんだから、それから避ければいいだけだ。あとは予測線から実射撃までの間隔を実戦の中で確かめればいい。

実戦に勝る修練なしとはよく言ったもんだ。

そうと決まれば即行動。

岩陰から飛び出し、すぐさま俺の体に無数の予測線が照射される。贅沢を言えば、相手1人で試してみたかったがこれもいい経験だろ。

予測線が一番薄い空間に体を押し込め、それでも当たっている予測線上に腕を振るえば、ナイフを手放してしまいそうな衝撃と共に火花が散る。

実験は成功。銃弾は俺を掠めることなく、やり過ごすことが出来た。

一気に距離を詰めたいが、ステータスはまだ初期値のまま。同じように銃弾の雨をやり過ごし、ジャケットの下に隠した投げナイフを1本投擲。

ベレー帽の左肩に突き刺さったことを確認せずに、サングラスの方へ走り寄る。

相方に気を取られ、ライフルを構え直したときには既に俺の間合い。左相手に持ち直したナイフで下から相手の右の前腕に突き刺し、背後に回り込みつつ右手を相手の右手に重ね合わせて、ライフルをベレー帽に向けマガジンが空になるまで引き続ける。

背後に回り込んだと同時に逆手から順手に持ち変えたナイフを引き抜き、心臓の辺り目掛け背中から突き刺す。

サングラスのHPがゼロになり、ポリゴンとなって四散すると同時にベレー帽に向かつて、もう1本投げナイフを投擲。

銃撃で怯んでいたベレー帽の喉に命中し、あちらもポリゴンとなって四散した。

「やりや出来るもんだな」

さて念願の物色タイム。

とは言ってもドロップ品確認のボタンをタップするだけだけどな。

オブジェクト化したのは大振りなククリナイフと大型自動拳銃《H&K MARK 23》。

《H&K MARK 23》とは、アメリカがドイツの銃器メーカー、ヘッケラー&コッホ社に特殊部隊向けに開発を依頼した名銃であり迷銃。

衝撃力に優れた、45ACP弾を使用し、装弾数は12発、薬室に込めた場合13発。様々な過酷なテストに合格し、米軍特殊部隊に正式採用された。

日本ではSOCOMの名前で有名だな。

重量は約1.6キロと少々重いが初期ステータスでもなんとか装備できるな。

けど、ホルスターがねえからストレージに突っ込んで、ククリナイフだけを柄を左に向け、後ろ腰に装備する。

始めたばっかでも様になるもんだ。

ん？このゲームもポイントを振り分けてアバターを成長させるタイプなのか。なら一応、今のポイントは全部AGIに振るところ。

目の前に現れたウインドウを操作し、手に入ったばかりのポイントを全てAGIに振り分ける。  
敏捷値

理由は特に無い。

さて、と。あと何人が襲って稼ぐかな。

歩き出そうとした時、なんとなく嫌な感じがした。

観察されてるといふか、狙われているといふか……。

自分の感覚を信じて上体を反らした瞬間、遅れて聞こえてきた銃声と共に鼻先を何か  
が掠めた。

銃声が聞こえたのは半歩下がって体を反らしたから右手方向。丁度一キロ先に倒壊

しかけたビル群。

スナイパー狙撃主……!? おもしれえ……先に手え出したんだ。やり返されても文句ねえよな？

あり得ない……！必中するタイミングだった。それを体を反らしただけで……！

『シノン、どうだ？』

「駄目よ。避けられた」

一度きりの契約で組んだスコードロンのリーダーに短く返す。

mob狩りを終えた他のスコードロンを私を含めた6人で待ち伏せして襲撃する予定だった。

けど現れたのは2人組のプレイヤー。その2人組をナイフと投げナイフのみで倒したプレイヤー。

相手は装備を見る限り初心者当然。

なのに纏う雰囲気はトッププレイヤーのそれ。

多分、他のゲームからコンバートしてきたばかりのニュービー。

そのニュービーは今、こちらに向かってきている。

狙撃で足止めしようにも、走るスピードを緩めることなく銃弾が見えているかのように避けながら、距離を縮めてくる。

「こっちに来る。迎撃の用意は？」

『相手は1人だろ？4人で済ませる』

駄目だ。スコープ越しに見ていた私と違って、相手の異常さが伝わってない。それほど名前が売れていないから、私の意見も相手にされない。

スコープを覗き直せば、ナイフ使いはビル陰に隠れてしまっている。これ以上の狙撃はできない。

「相手はたどり着いた。そっちは？」

『……………』

「ちよつと?」

返事がない。銃声も聞こえてこない。

待ち伏せして集中しているのか。

声が出せない状況なのか。

『なんだ!?!あの動き!』

『弾が!弾が当たらねえ!』

『撃ち続けて奴を釘付けにしろ!』

『弾が切れた!カバー!』

とたんに鳴り響く銃声。

インカムからは、けたたましい銃声と共に怒声が響く。

嘘でしょ……………! たった1人で4人相手にしてるの!?

『作戦変更だ。西側の半壊したビルが見えるか?』

「ええ」

『そのビルの2階に移動して奴を狙撃しろ。俺たちが誘導する』

「了解」

《FR—F2》を抱え、目標のビルへと駆け出した。



「こちらにシノン。目標に到達」

また返事がない。

……待つて、銃声も聞こえない？まさか全滅？

このビルに移動するまで10分も経つてないのに？

今回限りの契約だったのだ。仇討ちなんてする義理もない。でも彼を倒せば私は強くなれるかもしれない。

タイムリミットは過ぎた。

これでまた初弾の予測線は見えなくなる。つまり、先ほどまでのような予測線を認識してからの回避はできない。

バイポッド二脚銃架を立て、まだいるであろう彼らがいたビルに照準を合わせる。

「……やつと見つけたぞ、スナイパー」

ッ！後ろ！

咄嗟にバイポッドを立てたままの《FR-F2》を向けるが金属音と共に弾き飛ばされた。

サイドアームの《グロック18C》を引き抜きー

「後学のために教えてやる。接近戦ここじゃハンドガンよりナイフこいつの方が早い」

右手で私の右手首を掴み、踏み込みながら左手に握ったククリナイフを突きつけられる。

負け……？私の……？

あとは振り抜くだけなのに、その気配がない。

彼の視線は、部屋の入口に向けられている。

なんだろう？と視線を向けようとしたら、いきなり彼に抱きすくめられ隣の部屋に飛び込んだ。

数瞬遅く銃声が鳴り響き、私たちがいた空間を無数の銃弾が貫く。

「2人足りねえと思ったならそう言うことかよ」

「どういふことよ……」

助けといて荷物を退かすみたいに床に転がされて、さすがにカチンと来たけど私たちが襲われた理由に気付いているみたい。

「簡単なこつた。餌にされたんだよ、お前」

餌……？

「俺を殺すためか、お前の装備狙いか、或いはその両方か。どちらにせよ利用されたって訳だ」

扉の影に隠れながら隣の様子を窺いつつ、吐き捨てられた言葉を突き付けられる。

最初から信用されていなかった……。

沸々と怒りが湧いてくる。

上等じゃない……！裏切ったこと後悔させてあげる！

彼はふと窓際に走り寄って

「殺した奴らも戻ってきたな。その貧相な体によつほど興味があんのか」

ひ、貧相……！……ふ、ふふ。あいつらの前にこいつを殺<sup>や</sup>ろうかしら……！

「……ドロップ品、73ななさんでどう？」

努めて冷静に切り出す。勿論私が7だ。

彼は意外そうに目を見開いたあと、皮肉げに頬を吊り上げた。

「半々」

「64ろくよん」

「……まあいいか。お前——」

「シノンよ」

こんな殺伐としたゲームをしてるけど、女を捨てた訳じゃない。女の子に向かってお前は失礼でしょ。

「アルトだ。シノン、具体的なプランは？」

「アルトが前衛、私が援護。簡単なことよ」

「銃弾の雨に突っ込めってか」

さっきまでと同じでしょ。文句を言わない。

状況を整理しよう。

《FRIF2》は隣の部屋に落としたまま、そして私を餌にしたスコードロンが2人。アルトの言葉を信じれば、キルした他の3人も戻ってきているらしい。

こっちは2人。相手は重武装が5人。

「やれる?」

「誰に言ってるんだ」

結論から言えば私たち2人はあの窮地を切り抜けた。

アルトが敵の注意を引きつつ前進。私は彼を狙うために身を乗り出した奴を撃ち抜くだけ。

奴らを全滅させて分け前も貰った。

街に戻り一息ついたところで、思い出すのは戦闘中の彼の動き。

スコープ越しに見ていたから分かっていたはずだけど、間近で見るのはやはり違った。

絶えず動き回り、相手に狙いを定めさせないのは当たり前。一番驚かされたのは、引

き金を引く前に回避行動に移っていたこと。

確かに引き金を引かれてから避けるのは、AGIに特化してなければほぼ無理だ。だから引き金を引かれる前に回避しようとするのは判る。

でもそれとは違う違和感がある。

まるで、どこに銃口を向けいつ引き金を引くかを判っているかのような、そんな動きだった。

彼は既にログアウトしてここにはいない。

次会うことがあれば聞いてみよう。どうすればそこまで強くなれるのか。私もそんな強さを手にすることができるのか。

## 第3弾：死銃

シノンと出会ってから数ヶ月とちよつとが経ち、《ヘカート》を操れるだけのステータスを得るために振り回され、服装が変わったシノンをからかえば『ハラスメントコードで訴える！』と烈火の如く怒られた。

だつて半ケツじやん、アレ。

まあ俺も《ムラサマ》を手に入れるのに協力して貰った手前、シノンの申し出は断れねえんだけどな。

オークシヨンに出ていたコイツに一目惚れし、落札するための資金をシノンと稼いだ。

1ヶ月近く付き合つて貰ったんだから、それ相応の対価としてシノンの用事にはなるべく付き合うようにしてる。勿論、口にはしてない。

GGOでの装備も一新できたし、シノンの協力がなければこんな短期間で稼ぐこともできなかった。

……寄生じゃないよな？

ALOではキリトと顔を突き合わせれば戦い。

その都度、リズに打って貰った武器をぶっ壊し、そのあと殴り合いに発展していたところをキリトの妹、リーファが遅れてきたリズに告げ口、俺とキリトがメイスでしかかれてから今日は何をするかを話し合うのがここ最近のルーチンになってる。

インプで始め、SAOと同じくSTR優先のステ振りにしてる。GGOではAGI優先でプレイスタイルが変わるが今のところ問題ねえからよしとする。

STR優先ならサラマンダーが良かったんだが、クラインと被るのが嫌でインプにした。

12月5日

「颯真は最近、ALLOに来る回数減ったよな？何かあったのか？」

「もうひとつやってるゲームの方で世話になった奴がいてな。その礼をしてるっただけだ」

「お礼参り？」

「和人、サツカーしようぜ。お前の頭がボールな」

「体は!？」

お礼参りとか一昔前の不良じゃねえんだから。

俺と和人が菊岡に呼び出され、銀座のとある喫茶店の前にバイクを駐車した。

キリトはスポーツタイプ、俺のはサイドカーを付けるために馬力のあるやつにしたんだが、店員任せにしたから詳しくは知らん。

ハーレー何とかって言ってた気がする。

「やあ二人ともこつちだよ」

眼鏡を掛けた優男、菊岡が手招きしていた席に座る。相も変わらず、ヘラヘラしてる癖にそこが見えねえな。

「今日は何の用だ」

「まあまあ、本題に入る前にケーキでもどうだい？ここのケーキは結構お気に入りだね」  
賄賂のつもりかよ。

「エスプレッソ、ブラックで。和人は？」

「それじゃ俺はー」

注文してたものがテーブルに出され、取り敢えず一息ついたしそろそろ切り出すか。

「それで？」

「せっかちだねえ、君も」

「進んだ針は戻らねえ。時間は有限なんだよ」

はいはい、と言いながら取り出したのは二つのタブレット。



手渡され画面を点けてみれば、リストのように名前と住所が書かれてる。

和人が手渡された方を見れば、画面の中央に再生表示があるから何かの動画か？

「本題と言うのはね。とあるゲームのプレイヤー二人が死亡したことについて。颯真君に渡したタブレットには死亡したプレイヤーの名前と住所、そして死因。和人君に渡した方には、そのプレイヤーをキルしている動画がネットにアップされていてね。あまりに演劇染みてたから、君たちに見てもらおうと言うことさ」

どっちも都内在住の一人暮らし。重度のネットゲーマーで死因は恐らく心不全。発見が遅れたため遺体の腐敗が進んでおり詳しい死因は不明。

確かにこのご時世、ダイブしたまま飲まず食わずで栄養失調を起こし死ぬプレイヤーが多い。

ゲーム内で飲み食いすれば空腹感が紛れ、リアルに戻っても物を食う気にならねえつてのが大きな要因だな。

和人の方は何やら声が歪んでいるが、デスガンとか言ってるな。

「その動画通りに解釈するなら、死銃デスガンに撃たれたプレイヤーは、リアルでも死亡するってことになる。アミユスフィアのセーフティは万全だ。だからー」

「俺と和人に撃たれて来いって？」

「ゲームの壁を越えて人を殺せる。その力を確かめる必要がある。真実か虚構かをね。

もちろんタダで、とは言わないよ」

そう言いながら人差し指を立てる。

「十万か……。ゲームをするだけで十万貰えるなら破格と言える。命を天秤に乗せていなければ、だが。」

「一人頭、だよな？もちろん」

「颯真と俺の命が懸かっているんだ。それぐらい貰わなくちゃな」

ゲームでキルされればリアルでも死ぬ、か。

SAOの時は電磁パルスで脳を焼き切る方法だった。しかし今回は心不全、つまり心臓麻痺ってことになる。

「ナーブギアよりもセキュリティが強化されたアミュスファイアで、そんなことが出来るのか？」

「そのゲームっていうのは？」

「GGO。ガンゲイル・オンラインさ」

『アルト?どうかした?』

「……いや、何でもねえさ」

場所が変わってGGO内。

殺しか事故かあんま判別はできねえけど、死んだプレイヤーの一人が前バレットオブバレットツ優勝者、ゼクシードとか言う奴だったらしい。

特に興味もなかったから憶えてねえんだけどな。

帰る途中で朝田とか言う隣に住んでる奴が、また例の奴らに絡まれてた。

俺の顔を見た瞬間逃げ出したけどな。

よっぽどの何かをされたのか、顔が真っ青になってたからバイクのサイドカーに乗せて帰宅。風呂でも入ってさっさと寝ろ、と促しておいた。

第三回BOBに死銃デスガンが出るかもしれないと言う事で、BOBにエントリーしに潜ったんだが、いつもの余裕がないシノンと遭遇。

少し狩りにでもいかない?と誘われエントリーのことも考えたんだが、当日でいいかとシノンの誘いを承諾。

初めて俺たちが出会ったビル群でmob狩りを終えたスコードロンを待ち伏せしている。

『……ねえ』

「なんだ？」

『私、強くなれてるのかな？』

「ステータス的なもんなら、そうなんじゃねえの？ 珍しいな弱音なんぞ。《ヘカート》を手に入れたあのダンジョン以来か？」

『リアルでちよつと、ね』

強くなれているのかつてのは、リアルのことか。

「シノン、お前何か勘違いしてね？ いくらゲームで強くなろうが、それが現実には反映されるわけじゃねえ。変わるとしてもそれは物の見方、他者の価値観に対する理解ぐらいなものだ。自分はこう考えるけど相手はこう考えてる、みたいにな」

『つまるところ、ゲームで強くなろうが現実で強くなる訳じゃないつてのが、俺の考えな』

インカムから聞こえる声は茶化している様だけど、真摯に私の問いに答えてくれた。

私は強くなるため、ここに潜<sup>GGO</sup>ってる。

けど彼はそうじゃないと否定する。

あの過去を乗り越えるため、弱い私<sup>詩乃</sup>を変えるために私は私<sup>シノン</sup>になった。

私が強くなれば私<sup>詩乃</sup>も強くなれる、そう信じて。

でも現実には、隣の部屋に引っ越してきた三神さんに何度もお世話になつてゐる。

遠藤さんたちの溜まり場になつていた時も、簡単な護身術も教えてくれた。今日だつて遊ぶお金欲しさで私を脅した時もあの人に助けられた。

私は強くなれないの？

『シノンが言う強さつてのが外面的なもんなのか、肉体的なもんなのか、精神的なもんなのかは知らねえけど。何かしらの事情に立ち向かおうとしてんのは判る。だとしたら、立ち向かおうとする時点でお前は十分強いさ。大抵の人間は自分に都合の悪いことから目を逸らしちまうからな』

「貴方は……貴方はどうなの？」

それが一番知りたい。それを知ればきつと私もー

『俺か？俺はお前よりずっと弱え。自分の罪を理解しておきながらそれを含めて俺だつて胸張つてる。要は開き直つてんのさ、救いようがねえほどにな』

## 第4弾：第三回B o B予選

ほんと、どうしたんつつーんだか。

強さがゾーのこの言ってたが、戦う強さと心の強さはイコールじゃねえ。

シノンには強さに拘りを持つてるみてえだから、そこんとは分かっているとと思ってたんだが。良くも悪くもリアルは見た目相応ってことか？

GGOでのシノンを思い浮かべながら、現実の彼女を思い浮かべる、つてー  
「変態じゃねーか」

アバターと現実の姿は違う。

想像したところで意味がない。

ベッドから降り、適当なものでも食おうと思いい冷蔵庫を開けたんだが。

「何もねえ……」

考えてみれば、和人と別れスーパ―に寄ろうとしたときに朝田を見かけ、そのまま連れて帰った。

買い物なんてしてる時間は無かったんだよな。

しやーない。コンビニで済みますか。

バイクのキーを取り、これまた適当なジャケットを羽織って外に出れば、送り帰したはずの朝田の姿。顔色はマシになってはいるが、ふらついてんな。

今は夜9時半過ぎ。出歩くにしてもなにか特別な用事がなければ明日に持ち越すよ  
うな時間帯だ。

「なにしてんだ？寝てろって言ったろ」

「え、つと。ご飯を作ろうと思ったんですけど材料がなくて……」

俺と同じか。

「コンビニか？」

「え？……はい」

玄関に用意していたヘルメットを朝田に放れば、危なげなくキャッチ。キョトンとした顔で俺を見る。

「乗ってけ。行き先は同じだ」

「で、でも……」

「女子供がこんな時間にひとりで出歩くなっつてんだ。いいから乗れ」

バイクのエンジンに火を入れ、サイドカーに乗るよう強めに促してやれば戸惑いながらもヘルメットを被り、失礼しますと断ってからようやく乗り込む。

変に氣い遣ってんじゃねえっての。

サイドカーに乗り込んで、揺らされながら運転している三神さんを見る。ぶつきらばうだけど、時々見せる優しさ。

捻くれてて、何だかんだ言いつつ世話を焼く。

どっちが本当の三神さんなんだろう？

ツンデレ、なのかな？

止めよう。言ったら殴られそう。

そんな思考を止めれば、思い出すのは私の相棒たるアルトの言葉。

彼は罪を犯したと言ってた。それを含めて自分なんだと開き直っている、と。

彼が犯した罪って？開き直れる豪胆さが彼の強さ？

けど、私よりずっと弱いとも言っていた。

どういうこと？彼の言う強さってなに？

「おい、着いたぞ」

ヘルメット越しに頭を揺すられ、気が付けばコンビニの駐車場。

「まだ調子悪いのか？」

「い、いえ！大丈夫です！」



散々この人に助けられてるのに、これ以上の醜態を見せたくない。  
私シノンだけじゃなく私詩乃も強くならなくちゃ。

そう思いながら、ズボンのポケットに入れたお財布を取り出そうとして……あ、あれ？  
ない？

「財布、忘れたのか？」

私は小さくなりながら頷くしかなかった。

もう、幸先悪すぎ……！

アスナに断りを入れ、エギルに全てのアイテムを預け、あとはコンバートするだけ。

颯真……じゃなくてアルトは先にGGOを始めていたらしく、コンバートしたら連絡を寄越せて言ってたな。

潜ったらアルトに連絡、そのあとBOBにエントリーして……装備も整えなきゃいけないのか。

やること多いなあ。

データをコンバート、アバターは自動生成。

SBCグロツケンに転送され、周囲を見渡す。

ALOとは違い、どこか殺伐としてるな。

無事にコンバートできたし、アルトの連絡をー

ウインドウを開こうと腕を伸ばしたとき、なにか違和感を感じた。

まずは自分の手。周囲を見渡してもゴツい男たちばかりでここまで細くはない。腕も華奢だ。

すぐ側の鏡に映る俺を見ればコンプレックスだった女顔がより女の子らしいものに、体も華奢で細木のようにだ。

「なあ、ネエちゃんそのアバター売らねえか？」

ね、ネエちゃん？ま、まさか……。

胸を触るがアスナのような柔らかさははない。

10割筋肉の感触に文字通り胸を撫で下ろす。

しつこくアバターの売却を勧めてくる男に断りを入れ、街の中に逃げ込む。

撒いたかな？気を取り直して、アルトに連絡をー

ウインドウを開こうとしたとき目に入ったのは、この殺伐としたゲームには珍しい女

性プレイヤー。

「すいません。ちょっと教えて欲しいことが」

見た目は女の子だし、第一印象は悪くないはず。

声に気を付ければ大丈夫、ちよつと道を教えてもらうだけ。

打算10割の考えだったけどあとから考えれば、大人しくアルトに連絡すれば良かったと後悔した。

手っ取り早く金を稼ぐ方法を教えてもらい、弾避けゲームをクリア。30万近く稼せがせてもらった。

装備を整えるため、武器屋にも案内してもらい、鏢のない高周波ブレードと光フォトン・ソード剣を購入。これだけで7割飛んだ。

にしても、『アイツみたいに躊躇いなく買うわね』って言ってたけど、誰のことだろ？ そのあとも、牽制用のハンドガン《ファイブセブン》とホルスターにプロテクター、簡単な服を購入。

高周波ブレードを背負い、光剣を腰のカラビナに《ファイブセブン》を左手で抜けるように後ろ腰の左側にホルスターをベルトで固定。

これで準備万端だ。

お金を出してもらったのは流石に申し訳ないな。

「ああ、この！いい加減離せ!!」

「ああ！もつと強く罵ってください!!」

キリトが待つてゐるつっのに厄介、いやそれ以上の奴に見つかつた!

脚にしがみつゐてる奴を必死に引き剥がそうとするが、どういふステ振りしてんだ。

剥がれねえ!

「銃士！いい加減離せ!」

「ならせめてその刀で斬り捨ててください!」

「DMにもほどがあんだろ!」

きつかけは3ヶ月ほど前、《ムラサマ》の切れ味を確かめるため辻斬りをしてた頃、たまたまこいつが銃士巻き込まれた。

睨み付けられたときに何かが目覚めたそうだ。

……分かりたくもねえ!

蔑んだ覚えもねえし、そういう趣味があるわけでもない。

外見が美人なだけに残念でならない。

「エントリーが終わつてねえんだ!だから離せ!」

「B o Bに出るんですね!尚更、ここで準備を!」

なんの準備だ！

「お前もB O Bに出るんだろ!?! だったら我慢に我慢を重ねたあとの方がいいんじゃないの!?!」

徐々に力が緩み、最後には自分から離れてくれた。

なんとかなかったか？

「衆人觀衆の前で斬り捨てられる。……いい！とてもいい！まさか貴方からお誘いを受けるなんて！」

……あ、ダメだこれ。地雷を踏み抜いた。

「本戦まで必ず勝ち上がってください！必要とあらば私が全ての敵を撃ち抜きます！」  
遠ざかっていく変態を眺めながら、先程の言葉を反芻する。思わぬ協力者……か？  
いらねえフラグを建てた気がする……。

って、時間！

なんとか間に合った……。キリトの奴、結局連絡も寄越さねえでなににしてんだ。

「アルト、どうかした？」

「ん？シノンか……後ろの奴誰だ？」

シノンの後ろに黒髪の新顔。何か顔に紅葉が咲いてんだけど。シノンは不機嫌そう

だし。

「別に、ただの変態よ」

「変態はやめてください。死んでしまいます」

「で？変態は何したんだ？」

「い、いえ不幸な擦れ違いがー」

「なにが不幸な擦れ違いよ。大方、私があんたを女だと勘違いしてるのを分かってたんでしょ？その上、装備のお金まで……！」

またなんとも、このアバターで男とは難儀なことだ。ここまで女に寄った見た目なら、そりゃ勘違いすんだろ。

となると、シノンが怒っている理由も見えてくる。目の前の男が少女ではなく少年であると知らないまま、シノンは女性に対してにしか開示しないような真似をしてしまったってところか。

それをそいつは、シノンが女だと勘違いしていることを承知だったにも関わらず、何も言わなかった。

その上、装備を整える資金も出してもらった、と。

事案だな

「変態、名前は？」

「うっ、キリトです……」

キリト!?

つまりあれか？俺よりも女と乳繰り合うのを優先したわけか？

「どこで何をしてるかと思えば……アルトだ」

「ア、アルト!?!悪い、連絡できなくて」

「全くだ。連絡しろって言っただろうが」

キリト、シノン、顔に紅葉、女型アバター。この式で出る答えは……。

ハハア。

「おいその顔やめろ」

「いやいや。到って普通だぞ?」

「絶対嘘だ」

「なに?この変態と知り合いなの?」

辛辣だな。

初対面とはいえシノンにここまで嫌われるとなると、考えられるのは……。

「裸でも見られたか?」

「貴方にデリカシーを期待した私が馬鹿だったわ」

マジか。ここまで来るといつそ清々しいな。

やられる側は堪ったもんじゃねえだろうけど。

「まあ、知り合いつちやあ知り合いだけど」

「相棒だ」

「へえ……。でもここじゃ私が相棒だから」

シノン顔が怖いぞ。

私を強調してるし、なに張り合ってるんだ。

「で？シノンのには許すのか？」

「許すわけないでしょ。この手で撃ち抜かないと気が済まないわ」

「つー訳だ。許してやるから負けるな、だと」

「ちよ！勝手なこと言わないでよ！」

素直じゃねえな。

「なあアルト。俺がこんな姿になったのをアスナたちには言わないでー」

カシヤリ

「おい何した今」

「記念写真」

「ふざけんな！少しは悪びれろ！」

「アスナもユイもきつと笑顔になるぞ？一生の宝物になるはずだ」



「黒歴史だよ！消せ！今すぐ消せ！」

「遅い。ユイに送信した」

「嘘だろう……？」

本当はしてねえけどおもしれえからこのまま放置。

膝から崩れ落ちたキリトが立ち直るまで10分懸かったと明記しておこう。

キリトとシノンがここにいてるってことは、エントリーは終わったのか。なら、あとは  
死銃を特定すればいいのか。<sup>デス・ガン</sup>

「貴方もB o Bに出るの？名声とか興味ないって言ってなかった？」

「俺がどこまでやれるのか、試したくなかった」

「ふーん。前の大会は私が誘っても断ったのに？」

それを言われれば立つ瀬がねえんだけど。

覗き込むように見上げてくるシノンにどう言い訳したもんか。

「ま、まあまあ。まずは予選からだよな？アルトはこのブロックだった？」

「Aブロック。B o B優勝候補ばっかだ。大会の公平さを保つために優勝候補の数を減らす目的だろうな」

「私と変態はDブロックよ」

「シノンさん。いい加減、変態はやめてください」

「うっさい。この変態」

……キリトもアイツ<sup>銃士</sup>みてえに変な扉開かねえよな？

「アルトも変態も対策されたくないなら、装備は控え室でした方がいいわよ」  
「寄らば斬る、寄らずとも寄つて斬る、ただそれだけだ。俺の得物はコイツだけだから」

柄に預けた左手で《ムラサマ》を叩く。

位置が丁度いいから、つい置いちまうんだよな。

「アルト、男前過ぎ」

「……まあいいわ。二人とも必ず私が撃ち抜いてやるから、負けないでよ？」

「シノンはクーデレだなあ」

「アルト!!」

その白い頬に僅かな朱を混ぜながら抗議してくる。

そんな顔で吠えられても、怖くねえよ。

「アルトはツンデレだけだな」

「キリト。打ち上げてやるから爆散してくれ」

「俺、花火!?!」

銃弾の雨を掻い潜り、敵との距離を詰めていく。

恐らく相手には放たれた銃弾を見てから避けているように見えてんだろが、厳密には違う。

銃口の向きから大まかな弾道を予想、腕の力りきみ具合で引き金を引くタイミングを判断。

そうしてから予測線で情報を修正して、銃弾を避けてるわけだ。

栄えあるB o B予選第一試合は市街地で、廃車になった車の影から銃撃してくる相手にA G Iを活かし詰め寄っていく。

「ーったれ！」

弾が切れたのか、再び車の影に身を隠した。

相手が使っているのは《M 6 3》軽機関銃。

1 0 0発のマガジンタイプとは言えその構造上、リロードに時間が掛かる。

走る勢いのまま跳躍。

流石に相手も気付いたのか、《M 6 3》を手放して《U S P》ハンドガンを引き抜き、

俺に向け3連射。

放たれた銃弾を《ムラサマ》で弾き、すれ違い様に右腕を斬り捨て、振り返りながら胴体を両断。

ポリゴンとなって四散する。

試合開始から僅か3分の出来事である。

「ほんと出鱈目ね」

「練習すればあれぐらい出来るだろ」

試合を終えて待機エリアとなる元いた場所に転送された。

二本のフレキシブルアームで固定されたラックから《ムラサマ》を外し、左肩に預けながらボックスシートに身を沈める。

同じく第一試合を終えたシノンが隣に座りながら、呆れている声色で呟く。

俺の視線の先には、キリトのライブ映像。

相手が使ってるのは《FAL》……じゃねえな。

あれはフルオート射撃をしようもんなら銃口が暴れまわるじゃじゃ馬だ。けどセミオートで使う分には高い命中精度があり、一部ではスナイパーライフルの代わりに中距離支援用として使っているらしい。

BOBに出るくらいだ。腕に自信があるんだろうが、それでも相手が悪い。

右手の光剣と左手の高周波ブレードを巧みに操り、銃弾を切り捨てていく。  
こつちでもそれか。<sup>GGO</sup><sub>二刀流</sub>

「なにあれ、銃弾を斬って捨てるプレイスタイルが流行ってるの?」

渴いた笑いで返すしかできねえな。

キリトはやっぱり真つ直ぐにしか突つ込めねえか。

これは、俺とアイツの思考の違いからなんだが。

俺は並列思考で同時に多くの情報を整理できるのに対し、キリトは直列思考。

つまり、1つ1つの情報に対する処理速度が早い。

だからこそ俺は先読みに優れ、アイツは反射速度に優れてる。

「そうだ。アイツの装備にいくら使った?俺が払うぞ」

「別にいいわよ。ただし、これが終わっても私と組みなさい。それが条件」

「告白か?」

「んなっ!」

顔を赤くしながらフリーズしたシノン。

からかったつもりが真に受けてんのか?

とつつき難い性格ではあるが、無感情と言うわけではなく単に自身の興味があること

以外に反応が薄いんだろ。けどまあ気遣いもできるし、引く手は多いだろうけどな。

## 第5弾：浮遊城の亡霊

「初戦突破！」

試合終了後、ロビーへと戻ってきたキリトと手を打ち鳴らす。

「随分と手え焼いたみてえだな。やっぱ剣と銃じゃ勝手が違うか？」

「当たり前だろ？ 相手は間合いの外なんだぞ。使い慣れない武器じゃ牽制が精々だよ」

「だから言つたら？ 『寄らば斬る、寄らずとも寄つて斬る』 ってな」

「侍かよ」

「切腹でもするか？」

「介錯は任せろ」

お前の手に掛かって死ぬのも悪くはねえが、まだやり残したことがあるからな。当分は先送りだ。

「で？ どうだった？ GGO初戦闘の感想は」

「勝手が違うって言うのが一番大きいな。さつきも言つたけど相手は間合いの外、牽制用の銃があるとは言え間合いに踏み込むまでが苦勞する」

「<sup>GGO</sup>こつちじゃSTRの恩恵は装備重量上昇がメインだからな。近接格闘の火力も上が

るっちゃあ上がるが間合いに踏み込む間もなく蜂の巣だ」

だからこそAGIを上げ機動力を高める。

機動力が上がれば被弾率も下がる。必然的に相手を翻弄しつつ距離を詰めることができる。

近距離での戦闘がメインになるSMGをメインアームにしてる連中もAGI型が多い。

とは言え、AGIだけでは装備重量の問題もあり火力不足に陥りやすい。予備弾倉の所持数が少ない上に弾丸をバラ撒き弾幕を張るのが主な仕事で、遮蔽物に隠れた相手を釘付けにしたり、注意を引いた相手の死角から忍び寄って銃弾を叩き込む等がスコードロンを組んでる奴の役割だ。

ただSMGで撃つのはハンドガンに使われる銃弾であり、アサルトライフルなどと比べると射程が短く、貫通力も低い。給弾機構にエネルギーを割くため、同じ弾を使う拳銃よりも一般的に威力が低い……ってだいたいぶ脱線したな。

「まあ何はともあれ本選出場が目的だからな。予選ごときで躓いてもいらねえ。出場が確定したなら適当にやらせてもらおうさ」

「……本当にお前は人に恨まれそうなことを簡単に言うよなあ」

この程度で俺を恨むってんなら、そいつの器量が狭いってだけだ。



「——やはり、そう、か」

掠れた途切れ気味の声。

俺とキリトは弾かれたように顔を上げた。

ボロ切れのような灰色のマント。顔全体を覆う髑髏を模したようなゴーグル、そのレンズ部分だけが赤く光を反射する。

「キリ、ト……ア、ルト……。お前たち、顔見知り、か。ここまで、くれば、確定、だ」

男の声に喜悦が混じる。

「ラフィン・コフィン 啜う棺桶」……」

キリトの溢れた声。

そして見せつけられる特徴的なエンブレム。

類似品でも見様見真似の紛い物でもない。あのギルド関係者でもなければここまで精巧に再現はできない。

つまり目の前の男は「ラフコフ」のメンバー。

変声器でも仕込んでんのか肉声はわからねえが、この特徴的な喋り方、赤いレンズのゴーグル、そして「ラフコフ」。そこまでくれば俺の記憶に該当する男は一人しかいなかった。

「テメエ……【赤眼】だな？」

俺が発したその名前に、目の前の骸骨はくぐもった笑みを漏らした。

「お前たちは、必ず、殺す。必ず、だ。イツツ、シヨウ・タイム……い！」

そう言い残し奴の姿は転送エフェクトに包まれ消えた。

俺たち元SAOプレイヤーにとって忘れられない存在。それが「笑う棺桶ラフィン・コフィン」。

とりわけその首領たる《POH》とそれに付き従う幹部はあまりにも危険すぎた。

積極的に殺しを楽しむ連中だ。奴らもSAOが解放され、現実へと戻ってきていることは理解していた。今現在ではカウンセリングを受けつつ社会復帰してる奴が大半だろうが、その心まで染み付いた衝動は簡単に消えるものじゃない。

「……いや、お手柄だ。アルト」

見れば、キリトの顔は若干青い。しかし先程までにはなかった希望がその目には宿っていた。

「プレイヤー名さえわかれば、現実での本名や住所を割り出すことが出来るはずだ」

俺が先を促すと、キリトはようやく笑みらしきものを見せた。

「これに奴には大きな制限が出来る。尤も奴が死銃であると仮定したらの話だけどな。けど十中八九、間違いないはずだ」

解決に一步前進といったところか。

「……………」

だがキリトの表情は次第に陰りを見せ始める。

それどころか自分の肩を搔き抱き、なにかに恐れるようにボックスシートへ体を沈めた。

アミュスファイアが体調不良、精神不良と判断し強制ログアウトさせてもおかしくない。それほどまでに今のキリトの顔色は悪かった。

「あとは、なんとか奴が本当に殺したんだってという証拠を見つけないと……」

「なあ、キリト」

「なんだ?」

「そこらへんは俺に任せろ。それよりお前、『自分は人でなしだ』とか考えてんじやねえ

だろうな?」

俺がそう尋ねると、キリトの顔が驚きに染まり、そしてすぐに泣き笑いのような表情になった。

「……やっぱ、わかるか?」

「ハッ、お前とどれだけ肩並べて戦って、何回剣を交えたと思ってるんだ。お前の考えなんざ手に取るように分かる」

近くて遠い記憶。SAOという世界で剣を手に生き剣を交えることで通じ合った絆。

あの世界について感じることに、考えることは人によつて異なる。隣にいる奴にとつてはSAOとは未だに心のどこかで囚われている場所。

「奴と会つて、当時のことを思い出して……。その時初めて、俺はあの世界で3人、お前を含めれば4人の人間を殺していることを思い出したんだ」

俺はこうして生きてる。気に病むことじゃねえ。

そう言つてやりたいが、その罪を背負わそうとしてたんだ。中身がなくて軽すぎる。意図的に忘れようとしていた過去。それは奪つた命に対する裏切りではないのか。まるで過去の罪が罰を与えようと迫ってくるかのようなだつたと弱々しく笑う。

溢れ出た当時の罪と現実とは、キリトの心をSAO時代の討伐戦。「ラフコフ」のメンバーを襲撃したあの作戦の頃に戻ってしまった。

……あの日、俺はお前に言つた。その罪は消えることはない。一生背負つて生きていかなきゃならねえ。無かつたことにも乗り越えることもできない。

「SAOは人殺しつー十字架を背負わせただけじゃねえだろ」

「え？」

「あそこであつた出来事全部が今のお前を形作つてる。逃げることも無かつたことにも出来ねえ過去だ」

「お、おい。何を言つて……」

「あの過去から逃げ出せばいずれお前は破滅する。アスナもユイもお前のそんな姿は見たくねえはずだ」

背中を叩いて濁を入れてやりてえが、誰かを励ますだの、慰めるだのは苦手だ。

どんなに無様でも後ろ暗い過去でも立ち向かう覚悟があんなら、自分を奮い立たせるためにも譲れないモノを見定めろ。

かけがえのねえもんを見定められれば、キリトなら地に足をつけて踏ん張って、避けてきた罪にも向き合っていけるはずだ。

こいつにとってかけがけのない人間がアスナとユイだ。

あの二人ならば、過去と向き合おうとするキリトを支えて隣で歩んでくれるはず。

……いや、あの二人だけじゃねえ。

里香<sup>里香</sup>とシリカ<sup>圭子</sup>、クライン<sup>遠太郎</sup>にエギル<sup>アンドリユー</sup>そしてリーファ<sup>直葉</sup>、お前に関わる人間全員がお前の背中を押してくれるはずだ。

少なくとも俺はそう信じるし、お前らの絆はそれが可能だと信じてる。

「……俺だつて悩んで迷つて後悔だつてするさ。けどな、それに足をとられて前に進めねえのが一番後悔するっつーだけだ」

奪った命に対し自身の命を差し出す。

それが本当に贖罪となるのか。

罪の大きさを理解し、背負い、見定めることがあの世界で命を奪った俺たちの命題じゃないかと思う。

俺だつてあの討伐戦で10人殺した。自分自身の命を人質に殺しを続ける奴等を止めるにはそれしかなかった。

もちろん、それを免罪符にするつもりはねえし、人を殺した罪を忘れるつもりもねえ。俺を相棒と呼んでくれる奴に情けない姿を見せたくねえつて意地もある。

「そつか……そうだよな。後ろばかり見てたら回りが見えないもんな」

「後ろを振り向くのもいい。躓いてもいい、立ち止まってもいい。どんな罪を背負うことになろうが、必ず歩き出せ。背中を押してくれる奴の為にもな」

「言つてて恥ずかしくないか？」

「リアルに戻つたら悶えるさ」

「締まらないなあ」

うっせ、と短く返し拳を打ち合わせた。

「……俺、<sup>予選</sup>これが終わつたらアスナたちに会つてくる」

「精タイチャついてこい」

キリトが文句を言おうと口を開いた瞬間、転送の光に包まれその姿が消える。

視線をライブ映像に向ければ、異なる刃を持つ両手の剣で銃弾を切り払い、果敢に攻

めるキリトの姿。

さつきまでの怯えは見えないが、そう簡単に振り払えるもんじやない。心の内にまだ存在しているのだろうか、表に出さずにいると言うべきか。

それを可能にしたのは俺……ではなくアスナとユイの存在だろう。

相も変わらず、仲睦まじいようでも何よりだ。

「大丈夫なの？あの変態。このまま辞退してくれるなら私としては精神衛生上ありがたいんだけど」

「辛辣すぎて草も生えねえな……まあ大丈夫だろう」

きつと過去の影に囚われたとしてもアイツを想ってくれる仲間がいる限り何度だって立ち上がれるはずだ。

それがアイツの強さであり、俺が叩き伏せるべき好敵手の姿なんだからな。

さて、いつまでも年下を激励していらねえ。

俺の心もあの浮遊城に残したままだ。

殺し殺され、奪い奪われ、傷付け傷付けられる。

原初に近い感情が剥き出しだった世界。

現実よりも生きやすく充実していた。

けど俺が生きるべき世界は、<sup>VR世界</sup>ここではなく<sup>現実世界</sup>あちら側だ。だからこそ自身の犯した罪に

押し潰されそうになろうが歯を食い縛って、這いつくばってでも前に進む。  
ありがとよ、相棒。

俺はお前の姿に背中を押されてんだ。



## 第6弾：推理そして本選

順調に勝ち進み俺、アルト、シノンの三人は無事本選出場が決定した。

相手の行動を先読みによって潰すアルト

斬撃によって銃弾を無効化する俺

超遠距離より狙撃によって敵を射抜くシノン

三者三様の一芸に秀でた俺たち。

俺とシノンは同じブロックで勝者は俺だったが、上位2名が本選へと進めるのでシノンも本選へと出場できる。

本選は日を跨いだ明日の夜。

予選で敗退したプレイヤーにも見てもらいたい運営側の配慮なんだろう。

『キリーじゃない和人。まだ推測の域はでねえが、死銃の手口が分かったかもしれねえ』

颯真からの電話で寝起きだった頭が一気に冴えた。

推理、推測ならSAO時代でも颯真の右に出る奴はいなかった。核心でなくてもなにか手掛かりになるはずだ。

颯真の助言で昨日、夜遅くまで明日奈とユイに話をしていて、寝不足気味だったが颯真の自宅に向かうことになった。

「颯真、それで死銃の手口って？」

颯真が淹れてくれたコーヒーに口をつけ本題を切り出す。

「まず、アミユスフィア越しの殺人じゃねえことが前提になる。《人形殺人》……憶えるか？」

もちろん、と答える。

SAOで犠牲者を出した事件の1つだ。忘れるわけがない。

事件の全容はこうだ。

犯人が特定の名前が彫られた人形を破壊すると、その彫られた名前の人間が死ぬ。

ただそれだけのものだったけど、俺だけじゃ解決できなかった事件だ。

相談を持ちかけた颯真曰く、

『目の前のものだけが真実とは限らねえ。圈内じゃ人は殺せねえってことは、そいつは

その時間に圏外にいたってことだろ。大袈裟なパフォーマンスで視線を集め、その隙にトリックを仕込む。マジシャンとアシスタントの関係だ」

つまり人形というパフォーマンスで視線を集め、アシスタントがトリックを仕込む。

確かあの事件の首謀者もー

「ラフコフ」の構成員だった。だとしたら、幹部のザザが知っていてもおかしくねえ」

そうだ、何で気付けなかったんだ。

「俺は殺しの手口がこれしかねえって考えてる。だが、まだ疑問が残る。なぜGGOなのか。どうやって住所を知ったのか」

推測の域を出ない理由はこれだ、と付け加え思案顔に戻った。

確かにその手口ならGGOでなくてもよかったはず。GGOでなければならなかった理由……。

まず第一前提にザザが標的のアバターを撃ったとき、協力者は現実のプレイヤーの側にいること。

第二前提、プレイヤーの住居を知っている。

第三前提、プレイヤーは独り暮らしであること。

「第三前提は、菊岡に見せてもらった被害者の共通点から判断できる。仮に三つ全ての前提が揃ったとしても状況証拠だけだ。肝心の凶器がわからねえことには逮捕までは

踏み切れねえ」

現状ではこれが限界だ、と呟く。

でもこれが解っただけでも大きな前進だ。

「いや、この情報だけでも奴に大きな制限が掛かる。今までのようにはいかないはずだ」  
「だけど、颯真は難しい顔をしたままだ。

どうしたのか、と言いかけたが、先に颯真が口を開いた。

「説明してて新しい疑問が出てきた。目的はなんなのか、だ。殺しだけが目的なら、あんな仰々しいパフォーマンスは必要ねえはずだ。だとしたら、奴の目的はなんだ？まるで誰かに自分の存在をアピールでもしてるか見てえな感じだ」

人を殺すことだけが目的なら、あんな目立つことはしない。目をつけられれば、監視されることもわかつているはずだ。

「後手に回ってるな、完全に」

「それほど用意周到に準備してたつてこつたら。奴が何を企むにせよ、俺たちの仕事は奴の犯行を暴くこと。あとは菊岡の管轄だ」

「そうだ。奴の口次次第じゃこつちの前提は崩れるかもしれないけど、アバター名が分かればその協力者も探し出すことも出来るはずだ。」

「それはそうと和人。お前、シノンに金出してもらったんだろ？」

「う……まあ。プロテクターとか《ファイブセブン》……だったか。そのぐらい」

「つてことは、光剣と高周波ブレードは自分で買ったのか。あれ結構な値段しただろ？」  
「《Untouchable》とか言う弾避けゲームで300k位荒稼ぎしてたけど7割飛んだ」

「は？ゲームで稼げんのか？」

「え？」

「え？」

和人と飯を食ったあとに別れ、俺はもう一度情報を整理した。

大まかな手順は和人に説明した通りだ。

死銃が標的となったプレイヤーを撃つと同時に、リアルでは死銃の協力者がプレイヤーを殺す。

まさにSAOで起こった《人形殺人》そのままだ。

だが、まだ謎が残ったまま。大別して2つ。

第一に協力者がどうやって被害者の自宅に侵入したのか。被害者宅の鍵は壊されて  
いないことは判明してる。

初期型の電子錠だったことから、ハッキング？

いや、ねえな。家の前でそんなことをしてれば嫌でも目立つ。目撃者がいねんだからスムーズに侵入できたはずだ。

最初から家の中に居た？

これもない。被害者は重度のゲーマーだ。外出することも少なく、鍵も閉めたままだろう。いつ忍び込んだのが問題になる。

となると、協力者は合鍵を持ち被害者がダイブしている間に忍び込んだ可能性が高い。

だがどうやって？

被害者の知り合い？

ないことはねえだろうが、知り合い程度の仲で合鍵を渡すか？仮にそうだとしても、別の被害者とも知り合いで合鍵を持っているなんてことがありえんのか？

「あ、あの……」

そして第二に凶器だ。

詳しい解剖はされなかったとは言え、目立った外傷がなかったらしい。鈍器で殴る、刃物で切りつける等の殺害ではない。

あり得るとするば薬物だろうが、人為的に心不全を起こせる薬物なんざ一般人には手に入れるのはほぼ不可能に近い。

全ての問題をクリア出来る人間……。

「あー！くそー！」

「ひゃっ！」

「ん？」

あともう少しで何かが掴めそうで掴めない。

そんなもどかしい思いを吐き出すように声を荒らげれば、小さな悲鳴。

視線を向ければ眼鏡をかけた幸の薄そうな少女。

最近よく見かけんな。

周りを見渡せば、住んでるアパート近くにある公園だった。

「あー悪い。考え事しててな」

「い、いえ。考え事の邪魔をしてしまったみたいで私の方こそ……」

「それで？何か用か？」

「前にご飯を買ってもらったお金を返そうと思って……」

あのコンビニに送ったときのか。

財布から抜き取ろうとした手を抑える。

「別に金には困ってねえからいらねえよ。学生の独り暮らしは金が掛かるもんだ。余計なこと気にしてねえで、節約しとけ」

学生の頃は何かと金が掛かる。

まあ、卒業しても金は掛かるけどな。

それに今見られたら、俺がカツアゲしてるみてえだろ。

「でも……」

「でも、じゃねえ。バイトしてんのか、仕送りなのかは知らねえが、学生が持てる金額なんざたかが知れてる。黙って厚意に甘えとけ」

「え、と。ご馳走さまです?」

疑問符をつけんな。

和人の奴は『ゴチ』の二文字で済ますんだぞ。



不思議な人だなあ。

やっぱりツンデレなんじゃないかな？

前を歩く三神さんの背中を見つめながらそう思う。

素っ気ないのに心配りが出来る。

……うん。やっぱりツンデレだ。

「どうかしたか？」

「い、いえ」

どうしたら、三神さんみたいに強くなれるんだろう？

遠藤さんの友達に殴られそうになったときも、特に慌てることもなかったし、私に護

身術を教えられるほど武術を嗜んでる。

彼<sup>アルト</sup>みたい知識も豊富だ。

「どうしたら、三神さんみたいに強くなれますか？」

普段の私なら絶対に口にしない。

もしかしたら、アルトに似てるからかもしれない。

纏う雰囲気も、話し方も。

でも、彼と三神さんは違う。

だからかな。アルトとは違う答えを教えてくださいませんか。

そんな気がしたんだと思う。

「朝田が言う強さつてのが<sup>肉体</sup>外面的なもんなのか、<sup>精神</sup>内面的なもんなのか知らねえが。誰かを傷付ける強さを手に入れても、より強い力で淘汰される。力以外の強さを知りたいつてんなら、まずは自分の弱さと向き合うことなんじゃねえの？」

自分の弱さ……。

「まあ、誰か<sup>肉体的な</sup>強さを傷付ける力を求めている訳じゃねえのは、何となく判る。だとしたら、<sup>精神的な</sup>強さを自分を変えたいって事なんだろうが、だったら尚更自分の弱さを受け入れることから始めるべきなんじゃねえかな」

弱さを受け入れる……。

私の弱さ……。

脳裏に浮かび上がるのはかつての罪。

「うつ……！」

「……う？おい、どうした？」

込み上げる吐き気と共に膝をついてしまい、三神さんが駆け寄ってくれるけど、今の私に周りを気にするほどの余裕はなかった。

「クソ！まだ吐くなよ！」

三神さんに背負われ、アパートに帰宅。

彼の部屋のおトイレを借り、背中をさすられながら、胃の中のものを全て戻してしまった。

「少しは落ち着いたか？」

「何から何まですいません」

この人の前では、弱さを隠しきれていない気がする。

強くならなくちゃいけないのに……。

「お前、何かあったのか？何かを溜め込んでんなら、話すだけでも楽になるぞ。言いたくねえなら言わなくてもいいけどよ」

そんなこと言わないでほしい。つい甘えたくなくなってしまふ。

けど、この人も私の過去を知ったらー

「……気持ちに整理がついたら聞いてもらえますか？」

「相談に乗るだけならな」

私の意思に反して、口から溢れるのは甘えの言葉。

私は私自身の力で強くならなくちゃいけないのに。

私の過去を知ったらこの人も離れていってしまう。

そうなたらきつと私はー

「三神さんもゲーム、するんですね」

「ん？まあな」

ベッドサイドに置かれたアミユスフィアを見つける。

言い方は悪いけど、ゲームに興味がなさそうに見えてたから少し以外だ。

「意外です。そう言うのに興味がなさそうに見えますから」

「朝田がどういう目で俺を見てたか何となくわかった」

拗ねた風に口にする三神さん三神さんについ吹き出してしまふ。

同年代より歳上と話してる方が落ち着いてる私がいる。

「コーヒー、飲むか？」

「はい、頂きます」

今は厚意に甘えよう。いつか私も三神さんのような強さを手に入れることが出来たら、今までの恩返しをするんだ。

まったく、年下相手になにしてんだか。

大分、顔色が良くなつた朝田を帰し、B o B本選開始1時間前にとある病院を訪れた。菊岡に殺しの手口を説明し、安全を確保するために用意されたのが病院の一室。

本当であれば自宅からダイブし、俺の部屋に侵入する不審者がいれば、張り込んでいる人間に確保してもらおうと思つてたが、来るかも分からない人間を張り込むより、和人共々監視しやすい一室に押し込めた方が経費も掛からないらしい。

大人の事情つてやつだ。

「数時間振りだな、和人」

「菊岡から聞いたぞ。囚役で犯人の協力者を誘いだそうとしてたらしいじゃないか」

「そっちの方が楽だしな。鼠取りを利用した鼠とかいろいろ準備したんだが」

「物騒だなあ」

「犯人に人権はねえ」

「おいバカやめろ」

いつもの軽口を叩きつつ、持参したアミューズファイアを被りベッドに横になつた。

シノンには棄権してもらいてえが、並々ならぬ覚悟でGGOにダイブしてるみてえだから、そんなこと言えば平手打ちの1発や2発は覚悟しないといけねえかも。

死銃については、結局どうやって住所を知り、侵入できたのかは分からずじまい。G

G Oに何かしらの手がかりはあるはずなんだが。

殺しの快楽ってやつに目覚めたレッドプレイヤーの集団が【笑う棺桶<sup>ラフィンコフィン</sup>】。

S A Oの闇。その虜囚<sup>りよしゆう</sup>となり、現実に馴染めなかつた故の犯行なのかは奴と対峙すれば判るはずだ。

ザザこと新川昌一の標的は、都内に住む独り暮らしのプレイヤー。

もちろん例外はあるかもしれないが、果たして本選出場者に該当するプレイヤーが何人いるのか。

もしかしたら、出場者全員かもしれない。

顔も知らねえ奴が何人死のうが知ったことじゃねえが、その火の粉が俺の周りに降り掛かるなら容赦はしねえ。

どれほど罪を背負うことになろうが、何度でもこの手を血で汚そう。

それが俺の覚悟だ。

## 第7弾：凶弾

「じゃあ取り敢えず当面の目標を確認するぞ」

本選開始まで残り数分。

選手控え室に転送された俺とキリト。

本選は予選で勝ち残った各ブロックの上位2名を1つのエリアに転送し、最後の一人になるまで戦い合うバトルロイヤル。まさにfre<sup>な</sup>ee<sup>ん</sup>for<sup>で</sup>all<sup>も</sup>り<sup>あ</sup>って訳だ。

「ザザの野郎を探し出して殺しの手口を自供させる。もしくは協力者の名前および人数を吐かせること」

「やることが多いな」

「文句垂れる前にどう動くか考えろ。SAOみてえに片っ端から斬り捨てりやいいって訳じゃねえんだからな」

「それをやってたのはアルトだろ」

否定はしない。つーか、片っ端からPKしたみてえに言うのはやめろ。

それはそれとして

シノンの奴、遅いな。何かあったのか？

下手打ちやこのまま失格だぞ。

俺としてはザザに目をつけられることもなくなるだろうから、万々歳だが。

……肩入れしすぎか？

「……よかった。間に合った……」

三神さんの言葉を改めて自分で考え直してたら、いつの間にかB o B開始まで残り数分だった。

自分の弱さと向き合い受け入れる、か。

あの人はこれまでもそうしてきたんだろうか。

……うん。きっとそうなんだ。折れず曲がらず己の弱さと向き合ってきたから、あんなにも強くあれる。

アルトはどうなんだろう？

弱さを受け入れているから開き直れるのか。



罪を認めているからこそ向き合えたのか。

「よう、随分ゆつくりだったな。その若きで重役出勤は感心しねえぞ」

「私にもいろいろあるのよ。それよりも相棒だからって手を抜いたら承知しないから」

「その点は大丈夫だよ。戦いになれば、仲間だからって手を抜いたりしないヤツだから」  
……ふーん。別のゲームの相棒だからって、私の知らない顔を知ってるのはモヤモヤするわね。

「戦うのが好きなんだよ。それも自分より強いヤツ」

「当たり前だ。自分より弱えヤツと戦ったって面白くねえし、己の全てをぶつけられる相手ってのはそれだけでも貴重なんだぞ」

「それに振り回される俺の身にもなってくれ」

「なんだかんだ言いつつ、お前だつて愉たのしんでるだろうが」

……むう。

「ちよつと、話しかけといて除け者にするのはやめてくれる？」

「悪い悪い」

悪びれる様子もなく私の頭を撫でてくる。

やっぱり似てる。三神さんに。

払い除けたいけど、もっと撫でてほしいと思ってる私がいる。

完全に手懐けられてるわね。

自分が自分で分らない。

三神さんに甘え、アルトに甘え、変態に張り合ってる。

リアルでもこの二人のような友達がいたら……。

ううん。きっとこの二人も私の過去を知ったら距離を開ける。

今までのような気軽さで話すことも出来なくなる。

どうして……？いつまであの過去に苦しめられなくちゃいけないの？

「シノン、リアルで何があつたか知らねえけど切り替えろ。せつかくの大舞台だ。悩み迷うのはあとでも出来るだろ？」

……そうだ。私はここで強くなる。そうすればあの過去を乗り越えて、怯えることもなくなるはず。

『朝田が求める強さってのはなんだ？』

私が求める強さ……。

答えを出す前に私の視界は白い光に包まれた。

朝田といいシノンといい様子がおかしいな。

ん？朝田とシノン、朝田シノン、朝田詩乃……。

まさかな、安直すぎる。

B o B 本選の会場に転送され、開始からまださほど時間が経ってねえつてのにもう銃声が聞こえるな。

キリトとは最初のサテライトスキャンで、お互いの位置がマップに表示されたら線で結び、その中心で落ち合うことになってる。

他のプレイヤーには悪いが、徒党を組むのも戦術だ。出来ればシノンも引き入れたいが、下手すりゃ話し掛ける前に頭を撃ち抜かれそうだ。

……銃士のヤツもいるよなあ。

あのDM、出来ることなら鉢合わせたくねえ。

憂鬱な気持ち振り払い、マップ南部の田園にスポーンしてから15分。藪に身を潜めつつ、通りかかったプレイヤーを二人ばかり、急襲暗殺したところで端末を起動した。

作戦通り、全体マップに表示された全ての輝点をクリックしてキリトと俺自身の現在地を把握する。

キリトが東部の市街地エリア、俺が南部の田園。

もう少し近けりや楽だったろうにと内心悪態を吐きつつ、互いの点を線で結び大まかな集合地点が決定って訳だ。

で、その肝心の位置は――

「……鉄橋の東岸、てところか？」

――マップ南部の中心寄りに架かる鉄橋の東端から少し先、直線距離にして4キロ前後。

無論、障害物や他のプレイヤーもいるから直線で行くのは不可能だし、そもそも南部にいる俺が橋を渡って東側へ行けばいいのだ。仮に迂回するんだとしたら、距離はもつと伸びる。

どうするかと考えながらも、端末を仕舞って東へ駆ける。

全員の位置情報が漏れちまうから、いつまでもボケっと留まって考えている暇はない。

位置情報から見て取れた周囲数キロ圏内のプレイヤーは三人程。その内の一人は俺の進行方向にいる。

もしコッチに来てんだつたらそろそろ……

「っー」

なんて考えていると、視界に真横から俺を狙う数本の予測線が映る。  
「チツ！」

舌を打ちながら咄嗟にスライディングをする様に身を屈めて近くの木の影に滑り込んだ瞬間、乾いた発砲音と共に弾丸が通り過ぎて行った。

やっぱ見つかったか、面倒臭え……。

意識を撃ってきた相手に向ける。

銃声の間こえた距離からして然程遠くはない。

さて、辻斬り御免といくか。

身を隠した木から離れ身を晒す。鞆に納められた《ムラサマ》を引き抜き、後ろに流しながら疾走。再度銃口を向けて乱射してくるが遅い。

いきなり相手が姿を晒したことに驚いていたんだろうが、戦闘中に呆けるのは命取りだ。

予測線避けながら相手との距離を詰めていく。

銃弾が掠めることなく敵が迫ってくるってのはどんな心境なのか。

だが流石と本選出場者と言うべきか、左手にサブマシンガン《スコープオン》を腰だめに構え、右手にそのままアサルトライフル《Mk. 17》を保持して引き金を引いた。

弾幕張って少しでも足止めしようってことなんだろうが、両手でフルオートの時銃を連

射しようもんなら、銃口の跳ね上りを抑え込むためのSTRはかなり必要のはずだ。その証拠に表示される予測線はさつきよりもかなり散ってる。そうなつちまえばこつちのもんだ。

AGI全開で足を動かし敵へと肉薄。

振り上げた《ムラサマ》で《Mk. 17》をマガジンとトリガーの間から真つ二つに切り捨て、返す刃で左腕ごと胴体を切り払う。

散つていく青い欠片が消えて行くのを最後まで見届けず、すぐさま東へ。あれだけ銃声を響かせれば、嫌でも目立つ。

そうして身を潜めつつ可能な限り速く移動すること十分弱、二回目のサテライトスキャン直前数分前の時間に鉄橋の西側へ辿り着いた。

因みに鉄橋は渡ってない。鉄橋を前にしていい案が思いつかなかったから、ストレージに装備を全部ツツコンで渡河しただけだ。装備品さえ身に付けてなけりや水の中でもある程度動けるつつーのは、SAOから続く《ザ・シード》規格のVRMMO共通の隠れた仕様になってたりする。

水中専用装備の水着でも着てなきや水ん中入るプレイヤーも少ねえから認知度は低い

勿論、ステータス的には最弱状態だから待ち伏せでもされてたら一巻の終わりだったんだが、そんなことなく無事渡河に成功したわけだ。

鉄橋から数十メートル離れた岩場の影に身を潜めてスキャンを待っていた俺の耳に、微かな異音が届いた。

神経を研ぎ澄ませてその音に意識を集中させる。SAOの様な《素敵》スキルの存在しないGGOでは、こうやって自分の五感に頼るしかない分、姿や足音を完全に消し去る様な《隠蔽》スキルも無い。

そうしていると、その異音が徐々にこちらに近づいてきているのが判る。

これは……足音？ 尾行つっけられたか？

だとすれば、水中で襲われなかったことから考えるに、見つかったのは岸から上がりこの岩場に隠れるまでの間。

ソイツの視界に入ったのが極短い時間だったから即強襲されることもなく、こうして追ってきたんだろう。

足元が土ではなく岩である此処では、動けば位置を知られる恐れがあるが、どうしたもんか。《ムラサマ》の鯉口を切りながら思索する。

追われている側である以上、互いに居場所が知れていない今がチャンスではある。正確な位置は不明だが、ある程度の距離と方向は足音から推測できる。

打って出るか？

そう思い、リスク覚悟で飛び出そうとした矢先。

……ん？

迫る足音とは全く別の方向から、何かを感じた。

不自然に捕えた気配……というより、殺気ともいうべき何かに気を取られた俺は、聞えていたはずの足音が不意に途切れたのに気付くのが数瞬遅れた。

……止まった？ いや、違う……上!?

足音が止んだことに気付いた直後、直感に従って《ムラサマ》を引き抜きつつ視線をむける。

「チッー！」

予測線が出る間もなく、マズルフラッシュと共に至近距離で放たれる銃弾の雨を、斬り裂く。何発かは防ぎきれずに喰らったが、致命傷は貰っちゃいないし御の字だ。

辛うじて凌ぎきり、相手が着地をする一瞬の隙を狙って反撃を仕掛けるために駆け出そうとした瞬間——

「ンなっ!？」

目に入ったのは回転しながら飛んでくる《グロック18C》。

つてことは！



出鼻を挫かれ不意を突かれたことで、踏み出した足を止めてしまった。

反射的に銃身を弾いて、顔面にクリーンヒットだとか、弾倉を斬り裂いて暴発からの自爆だとか、そんな間抜けな展開は回避できたが、相手に体勢を整える時間を与えちまったのは痛手だ。

俺が切っ先を向け直すのと同時、相手は新たな得物の銃口をこちらに向けていた。二人の間の距離は5メートルも無い超至近距離。

「気付いてないだろうから、仕留め損なうとは思わなかつけど……やっぱり、クロスレンジじゃ分が悪いわね」

「そんなこたねえよ、俺もギリギリだった。自分の獲物をぶん投げてくるとは思わなくてよ」

「サイドアームを犠牲にするだけでアンタを殺せるなら儲けモノだったし、おかしなこととして不意を突くのはアンタや変態の真似よ。感想はどう？」

「効果的だつてのは身を以て判った。今後の参考にしてやるよ」

「そう、良かった。辞世の句はそれでいいわね？」

「馬鹿言つてんじゃねえ。俺達の得物じゃあ、この距離でまともにやり合ったらどつちもアウトだ」

「はあ……、アルトとは邪魔者がいない一騎討ちで戦いたかつたんだけど……」

「悪いな、シノン」

シノンの視線の先には《ファイブセブン》を構えたキリトの姿。

「出来過ぎなタイミングだな、オイ」

「まあな。それより時間が無いから、早くシノンの説得してくれ」

時間的にもう二回目のサテライトスキャンは終わってるはずだ。

「……私が説得に応じるとでも?」

「シノン、撃とうと思えばいつでも君を撃てた。それをしなかったのは、ここで戦闘音を出したくなかったからだ」

「……どういうこと?」

「色々あんだよ。シノン、悪いがここは折れてくれ。退いてくれんならお前を撃たねえし、その後お前が俺らを殺しに来ても文句は言わねえ」

シノンが強い覚悟を以てGGOの世界いるのは判っちゃいるし、その覚悟を踏みこむ真似もしたくねえ。だが、状況がそれを許さない。

そうして睨み合うこと暫し。

「……………はあ」

溜息を吐いて、シノンはライフルの銃口を俺から外して担ぎ直した。

「悪いな」

「別に、どうせこの状況じゃ犬死だし」

銃を下ろしながら短く発した謝罪に返ってきたのは、拗ねたような声音のそんな言葉だった。

「よし、サクッと移動だ」

駆け出したキリトに俺も続く。間に合わなかったら面倒だ。

「つて、なんでお前も来んだよ」

そんな中、何故か当然の様に俺達に付いて走るシノンに思わずツッコんだ。

物凄くナチュラルについてきたから一瞬気付かなかったわ。

「銃声を出したくなかったって理由が気になったから。しょうもないわけだったらアンタ達を背後から撃てるようにね」

銃に見立てた人差し指を器用に俺の背中へ突き立てながら浮かべる皮肉気な笑み。

何言っても無駄だなと、早々に思考を放り投げた。

試合開始前から合流することを計画していたのか、偶然アルトを見つけて追いかけた私。

二人を追って勝手に付いてって辿り着いたのは、橋から200メートル程離れた、丁度鉄橋の様子が覗ける茂みだ。周りは岩に囲まれているのでアンブッシュしていれば接近されない限り早々見つかることは無いだろう。

でも、此処でいったい何をしようっていうの？

「……何でシノンまでいるんだ？」

「戦うのを避けた理由に納得できなかつたらいつでも後ろから撃てるように、だどよ」  
「それはまた……」

アルトの言葉に引き攀った笑みを浮かべながら、鉄橋を見張ることが目的なんだろうと何となく当たりをつけていた私に視線を向けてくるキリト。

ありつたけの眼力を籠めて睨み返してやる。

「なに？ 文句でもあるわけ？」

「い、いやいや滅相もない！」

「ふんっ」

鼻を鳴らしてキリトから視線を外す。睨まれて謝るくらいなら最初から言わなければいいのに。

昨日の決勝の様につてぶてしい態度で決闘を持ち掛けてきたかと思えば、今のよう  
な低姿勢。

本当によく判らないヤツね。

「いいじゃねえの？逆に言えば、納得できるだけの理由があるなら多少の協力はして  
くれんだろ」

「なに？なにかあったの？」

アルトと変態は顔を見合わせたあと、互いに肩を竦めた。

「死銃……聞いたことあるだろ？」

死銃。

確か、撃たれたプレイヤーはリアルでも死ぬとか。

「その様子だと知ってるみたいだな。俺たちはとある人間に頼まれて死銃デス・ガンの調査をして  
んだ。本当にここゲームの中から人間を殺せるのか、否かをな」

でもあれは都市伝説で、本当に人を殺すことなんて……！

「信じられねえって顔だな」

「でも本当なんだ。ゼクシードと薄塩たらこのプレイヤーはここGGOで奴に撃たれてリアル  
でも死んでるのが見つかったる」

嘘……。

「その死銃って名乗ってるプレイヤーと俺たちは接触してる。あとはここでのアバター名が分かれば、調査を依頼した人間に報告して拘束もしくは逮捕できるって訳だ。到底信じられねえだろうけどな」

変態はともかくアルトがそんなことをしてるなんて信じられなかった。

「だけど俺は、被害者を出したくない。奴に撃たれて死んでしまうなら、逆に言えば奴に撃たせなければいい。だから死銃をここで倒す」

「それに個人的にも奴を止めなきゃならねえ」

個人的にも？

死銃とここ以外のどこかで会ったことがあるの？

「奴の手口は分かっちゃいるが危険がないわけじゃねえ。出来ることならシノンには棄権してもらいたかったがー」

「冗談じゃないわ」

自分でも驚くほど低い声が出た。

命の危険がある？

だからなに？ 私は強くなるためにGGOに潜ってる。強くなるための対価が私の命なら喜んで差し出そう。

「分かった」

「アルト!？」

「しようがねえだろ。こうなつちまえば梃子でも動かねえ。但し、奴を見かけても一人で挑むな。俺たちじゃねえと他のプレイヤーじゃ戦う以前の問題だ」

彼らの言葉が真実であるという事が、何を意味するのか……その恐ろしさから目を背けながら。

「……来たっ!」

キリトの声が耳に届くのと、双眼鏡によつて拡大された視界にダインと思わしき森の方を警戒するアサルトライフルを構えたプレイヤーを捉えたのはほぼ同時だった。

それから遅れること十数秒、今度は青白い全身スーツに身を包んだプレイヤーが現れる。奴がペイルライダーだろう。

ペイルライダーはダインからの迎撃に対して、鉄橋のワイヤーを用いる曲芸染みたアクロバット機動を以て回避すると言う中々常人離れした方法で接近している。

「凄いなアレ」

「多分相当な《軽業》スキル持ちだろうな。普通じゃ無理だ」

「それにSTR型に加えて装備重量を最大限削って三次元機動にブーストかけてるわね。まあ、真つ正面から銃弾を避けたり斬り落として接敵してくるような奴には言われたくないだろうけど」

ははっ、耳が痛えな。

口々に感想を言っている間にも、ペイルライダーはダインを翻弄し続ける。

そうしている内に碌な抵抗も出来ないまま懐に入り込まれたダインは、ペイルライダーのショットガンから吐き出される散弾を数回喰らい、HPバーを消滅させた。

ペイルライダーはザザじゃねえ。

「ラフコフ」の連中は言っちゃまえば、対人特化のプレイヤー集団。あんな三次元機動も出来るヤツはいるだろうが、死銃の動画を見る限り、止めはハンドガンで決めていた。

意識をペイルライダーの方に戻せば、弾かれた様に崩れ落ちるペイルライダーの姿が目についた。倒れ方から見るに森の方から狙撃されたんだろう。

「今、銃声聞こえたか？」

「いや、だが狙撃音をこの距離で聞き逃すつてのは考え辛え」

「小型のレーザーライフルかサプレッサーでも使ったんでしょうね」



「……サブレッツサー?」

何のことか判らなかつたのか、一人疑問符を浮かべるキリト。まあ、FPSやらサバゲーでもやってない限り聞き慣れない単語だろうが。

「消音器とか減音器とかつて装置を銃口に付けたり、中には銃身自体に内蔵してるヤツもある。一般的にはサイレンサーつて言った方が判りやすいか?」

「まあ、消耗品の癖に割高だし、性能に掛かるマイナス補正も結構大きいけどね。減音率は確かに高いけど銃によつてまちまちで完全に音を消せるわけじゃないし」

「なるほど……シノンが使わないの?」

「趣味じゃない」

キリトの意見を一言でバツサリ切り捨てるシノン。

そもそも闘い方なんて人それぞれだから、他人にとやかく言われたくないってのもあるんだろう。

「まあ、シノンが使つてる《ヘカート》は対物ライフルだから、サブレッツサーをつけるよ  
うなもんじゃねえし」

勿論GGOの仕様として付けられるし、リアルでもあるっちゃあるがー

「そ、そっか。そんなことより、ペイルライダーにチラついてるエフェクトはなんだ?」

「——っ!」

いつまでも立ち上がらないのを不審に思つて気付いたそれ。

多分何かしらの状態異常表示なんだろうその状態を見て、シノンと俺は揃つて驚きを顔に浮かべた。

「まさか……電磁スタン弾!？」

「何だよそれ?」

「命中した対象を一定時間スタンさせるシロモンだが、PVPに使うようなもんじゃねえ」

「ええ。効果自体はアルトが言った通り。けど、口径固定の特殊弾頭で、大口径ライフルでしか使用不可能な上にサブレッツサー以上にコスパが悪い。だから、相対的に無駄弾が多くなる対人戦じゃなくて、パーティーで大型mobを狩るときに使うのが一般的、しかもスタン効果の代わりにダメージは殆どない。時間的にそろそろスタンも解けるはず……アレつきり追撃もしないなんて何の意味が——っ!」

不意にシノンの声が止まる。

いや、俺たち全員の息が一瞬止まった。

倒れているペイルライダーの直ぐ近くから、小汚い外套を纏ったプレイヤーが急に現れたからだ。その肩には、シノンの持つ《ヘカート》と同等の大型ライフルが掛けられている。

まさか！ 誰も気付かなかったってのか!?

3人も人間が見ている中、誰にも気取られることなく忽然と現れたという信じがたい事実には思考が止まったのも束の間、声を上げる。

「アイツだ、間違いない!! アイツが死銃だっ!」

「シノン、奴を撃て!」

「は? えっ!?!」

キリトが声を発した瞬間、俺はシノンにそうやって飛び出した。返ってきたのは困惑の声だけだったが、説明してる時間はない。

藪から飛び出し駆け寄る間にも、死銃は動きを止めずにハンドガンを取り出してペイルライダーに向けた。そのまま空いた左手で十字を切る。まるで、神に祈りを捧げる信徒のように。

ほぼ無傷のペイルライダーを斃すには、マグナムでも何でもないハンドガンじゃ無理。それは判っていたが、理性とは別のナニカが撃たせるなど警告を発していた。

だが、どれだけ急いでも走る速さには限界がある。位置が位置だったせいで、回り込むようにしか橋へ向かえないことに歯噛みしながら山道を駆ける。

聞き慣れた銃声と共に死銃は急に上体を反らした。

シノンの狙撃を避けやがった!?

ありえねえ、そう叫びそうになるのを飲み込んでただ走る。

先の一射で当てるのは不可能だと判断したのか、シノンからの援護は無い。

間に合え！

だが、そんな俺の心の声が届くことも無く、奴の握るハンドガンから一発の銃声が響いた。

## 第8弾：逃避行

あの死銃というらしい男を取り逃がした後、私達は鉄橋にいたアルトと直ぐに合流して、一時的に身を潜められる岩場へと移動した。

「どうする?」

「死銃を追う……前に、情報の整理が必要だろうな。妙なことが多すぎる」  
そう言つてアルトが挙げた疑問は三つ。

一つ、誰も近くにいたはずの死銃の存在に気付かなかつたこと。

交戦中でスキヤンを見られなかつた私とアルトはともかく、ダインとペイルライダーを待ち伏せていた以上どちらかは確認していたはずのキリトが驚いていたという事はスキヤンに映つていなかったという事になる。

二つ、私の狙撃が避けられたこと。私自身感じたことだけど、アレは完全に予測線が見えている避け方だった。何処かで私のことを見ていたという事になる。

三つ、アルトが鉄橋にたどり着いたと同時に、霞の様に姿が消えたこと。遠目で見ていた私達にもそう見えていたけど、どうやら見間違ひではなかつたらしい。

「それじゃ一個ずつ考えるか。勿論、辺りは警戒しながらな。まず一個目は水の中に

潜ってたんだろうな」

「水の中?」

オウム返しのように繰り返した私に変態が頷く。

「アルトと合流する直前まで、合流地点まで出来るだけ誰かに見つからない様に川底を泳いで下ってたんだけだ。そういうわけで、水の中というか川底はスキャン範囲外になつてるらしい——」

「ちよ、ちよつと待って! 泳いだってどうやって?!」

言つてることが言つてることだけに、堪らずキリトの言葉を遮つて声を上げてしまった。

だつてそうでしょ?

ただ潜っていったつていうならまだ判る。水中では継続的にHPが減少するくらいのもデメリツトしかないから。でも、泳ぐとなれば話は別。通常の装備じゃ重すぎて、専用の呼吸補助装置でも背負つてなければとても泳ぐなんて無理だ。

それを何のことも無しにやってみせたと?

そんな私の疑問に答えたのは、実行した変態ではなく、話を聞いていただけの筈のアルトだった。

「そんな驚くことじゃねえよ。ストレージに装備全部突っ込んでしまえば何とでもなる。」

俺も鉄橋を渡ったときそうやって渡河してきたしな」

「そゆこと」

常識だとしても言いたげな様子なバカ二人に、空いた口が塞がらない。

「いったいどんな思考回路してたら河を泳いで渡ろうとか戦場で丸裸になろうなんて考えに到るっていうのよ。」

仕方ないから、川底ではスキヤンに引つ掛からないって有益な情報が手に入ったと無理やり自分を納得させることにした。

「二つ目はそれで解決として、問題は二つだ。特に三つ目なんて、透明化のスキルでも無いのか?」

キリトの言葉で意識を元に戻した。

ソレについては、実は心当たりがある。

「三つ目は、多分《メタマテリアル光歪曲迷彩》だと思う」

「おいおい、そんなモン実装されたなんて聞いたこと無いぞ?」

「私だつて聞いたこと無い。でも、目の前で消えるなんてそれ以外考えられる?」

「そうっちゃそうだが……」

私の言葉に疑いの声を上げるアルト。

確かに《メタマテリアル光歪曲迷彩》のプレイヤー向け実装なんて聞いたことは無い

けど、アイツは噂でしか聞かない《アキュラシー・インターナショナル・L115A3》まで持っていたのだ。もし《ヘカート》以上の超低確率レアドロップであろう《メタマテリアル光歪曲迷彩》アビリティ付の装備が存在するのだとしたら、RMT<sup>現金</sup>を通して手に入れていないとは言い切れない。

「ちよ、ちよつと待ってくれ！ メタマテ……なんだって？」

聞き慣れない単語の説明が無いままに話が進んで置いてけぼりになりそうだったのか、キリトが慌てて口を挟んできた。

「メタマテリアル光歪曲迷彩、よ。光学迷彩って言えばわかる？」

「あ、うん、それなら」

「本当なら、一部の超高レベルボスだけが持つてる能力なんだけども。もしかしたら、その能力が付与されてる装備が存在して、死銃が持つてるんじゃないかってことだ」

「それに、これが正解なら私の狙撃が避けられたのも説明がつくわ」

そう言うと、私の言いたいことが理解できたようで、キリトが指を鳴らして頷いた。

「なるほど、その光学迷彩を使って隠れながら俺達のことを何処かで見てたってことか」  
首を縦に振って肯定を示す。

ペイルライダーのすぐ傍に突如現れたのも同じだ。

「何処で見られたのかまでは判らないけどね」



とはいえ、相手が見えなかった以上、些細な問題かもしれない。

「とにかく奴が姿を眩ました以上、俺達が出来るのはなるべく多くのプレイヤーを退場させること、だな。アルト」

「ああ。三手に別れて片っ端から辻斬りだ。奴のアバター名も確認できたしな。Sterben<sup>ステルベン</sup>、ドイツ語で死つて意味だ。安直過ぎるけどな。奴を炙り出すためにシン、力を貸してくれ」

そんな真剣な目で頼まれたら断れないでしょうが。

アルトの頼みを承諾し私達は三手に別れた。

次の標的が私だったと気付いていれば、無理を言つてでもどちらかを呼び止めていたはずだ。

「っ……っ」

なんで、なんで……っ、今になってあの銃が——！

追いかけていたはずの死銃。

電磁スタン弾によって動けない私の前に姿を現し、黒い拳銃を見せつけるように取り出すと、グリツプパネルにある特徴的な黒い星の紋章に思考は凍結し、全身の力が抜け出ていく感覚を私は覚えていた。

黒星<sup>ヘイシン</sup>五十四式。忘れるはずもない……あの時私が撃った銃がなんで、今、ここに、あの銃が……っ。

混乱する私の前に、フードの下の仮面が“あの時の男”と重なって見える。

あいつは私に復讐するためにこの時を待っていたんだ。どんなに足掻いても逃げることはできないんだ。全部、全部無駄だったんだ。どこにいてもこの男に追いつかれて……殺される。

強さの意味、戦うことの意味……アルトと一緒にいれば分かると思ったのに。

……いつからだろう。最初はただ分かりやすい目標だったのに、頼れる相棒と思えるようになったのは。

けれど彼一緒に戦って、肩を並べられるくらい強くなれば……追い越せるくらい強くなれば、弱さを克服できると思っていた。

イヤ、だ……イヤだイヤだイヤだ！ こんなところで死にたくない！

まだ死ねない……死にたくない。その必死の思いが動かない身体をどうにか動かそ

うとする。

諦めたくなかった。この大会で正々堂々と戦って勝つことができれば、何かが変わるはずだから。

まだ約束を果たしてないのに……！

死銃が黒星のスライドをコツキングし、弾を込めると両手で銃を構え、その銃口が私を捉える。

……助けて

こんなのを願っても叶うはずはない。

諦めて目を閉じたときに風切り音と共に一気に抱き抱えられる感覚が襲った。

「ア……ルト……？」

「間一髪。急いで来て正解だったな」

顔が見えなくても分かる。いつもと変わらないアルトの声。

けどいつも聞いているトーンよりも少し低くて、微かな怒りを含んでいるように聞こえた。

でもなんで？……なんでここに？

「おいザザ、お前の狙いは俺かキリトだったはずじゃなかったのか？」

「……そう、だ。お前、たちは、最後の、お楽しみ、だ」

「お楽しみ、ね。悪いがテメエの愉悦に付き合う義理はねえ」

「アルト、悪い遅くなった」

キリトもどうしてここに？

手傷を負ったららしくダメーゼエフェクトだらけのキリトも姿を現す。

「随分遅かったな」

「銃士Xとかって言うプレイヤーと戦ってた。あいつ凄い手強くて、なんかお前の名前をずっと呼んでたけど知り合いか？」

「気にすんな。単なるDMだ」

二人とも口調は軽いのに片時も死銃から目を離さない。それに纏ってる雰囲気もいつもよりピリピリしてる。

「キリト取り敢えず、体勢を整える。シノンを連れてここは退け。大丈夫だ。コイツに俺は殺せない」

「了解」

「え？ちよっー」

アルトが何を言ったかと言うと、小脇に抱えた私を変態に向かって放り投げた。そして変態にあるうことかお姫様だっこで受け止められ、踵を返して走り出す。

アルトにだってされたことないのに！

「待ちなさい！アルトが！」

「シノン、一度ここは退いて体勢を整えるべきだ。それにアルトなら死銃に遅れは取らないさ」

遠ざかっていくアルトの背中に私は無事を祈ることしかできなかった。

「っー！」

轟き渡る爆発音。先程までいた場所から響いたその音に、私は思わず振り向いた。

「死銃の仕業……かな」

「どうでしょうね。あのアルトがそう簡単にやられる筈はない……と思うけど」

どうしても不安になるのは抑えられない。相手はあの死銃なのだ。もし。そう、もし彼が死銃との戦いで敗北し、あの因縁の銃によって心臓を貫かれたなら。

「っ……」

思わず、キリトの肩を借りている右手に力が入る。想像すらしたくない。だが、そん

な相手とたった一人で戦っているのだ。

そんな私の葛藤を悟ったのか、キリトは囁くように言った。

「…… 助けに行きたいのはわかる。だけど、ロクに動けない今の状態じゃー」

「足引つ張るだけだつて言いたいでしょ」

そうだ、今の私では邪魔にしなければならない。《ヘカート》の引き金を引くことすらできなくなつた私には、何の価値もない。ましてやただの拳銃を目の前にして、一步も動けなかつたようでは。

「……………っ」

悔しかつた。自分が求めていた強さをへし折られた事実が。過去のトラウマに心を折られたという事実が。彼に助けられたという事実が。

「ざけんじゃ、ないわよっ……………」

恩を返すどころか助けられた身が、弱い自分が、何よりも腹立たしく悔しかつた。

『大丈夫だ。コイツに俺は殺せない』

どうしてそう言い切れるのか。もしかしてなにかに気づいてる？

彼が私にまだ隠し事をしている。それだけで苛ついてしまう単純な心に嫌気が差す。だが沸き上がる感情に栓をすることは出来ず、気付けば口から文句が飛び出ていた。

「大体、いっつも何の相談もなしに突撃して。少しくらいは相談なりなんなりしなさ

いつての……」

語尾がまるで拗ねたようになってしまふのは何故だろうか。自覚しないままに、私は愚痴を溢していた。

「アルトのこと、よく見てるんだな」

「え？……あ」

苦笑を多分に含んだ声音。それによつてようやく今の自分の言動の意味を理解し、一氣に顔に血が集まるのを感じる。

「これは、その、ちがつ」

「隠すようなことでもないだろ。減るもんでもないし」

「減るわよ！ 色々と精神的なのが！」

主に私のSAN値とかが。

……薄々自覚こそしていたものの、改めて面と向かつて指摘されると、その、色々と死にたくなる。

人当たりが良さそうに見えて素っ気なくて。此方を見るようで見てなくて、なのに肝心な所だけはしっかり見てくれていて。デリカシーなんて欠片もない。

本当、面倒くさいにも程がある。

……まあ面倒くさいところも含めて、良いのかもしれないけれど。

「……………」

「なんで一人で赤くなってるんだ……………」

「うっさい黙れシヤラップ」

「理不尽だなあ」

痺れは完全には取れてないが、段々と体が言うことを聞くようになってきた。足取りがしつかりとしてきたことをキリトが察知し、足を早めて遺跡エリアを北進していく。

「……………このままじゃ、他のプレイヤーに見つかった時になぶり殺しにされるわよ。どうするの？」

だが、やはり足取りは遅い。此処でも私が足を引つ張っていることを理解し、自己嫌悪に似た感情が胸を満たす。

「……………まあ、そうだな。何処かに足でもあつたらいいんだけど」

「そう簡単に見つかったら苦労しないわよって」

ふと視界に映った看板を見て、私は口をつぐむ。ほぼ同時にキリトもそれを見つけたらしく、実に癪なことだが、女の私から見ても見惚れてしまいそうになるほど可憐な笑みを浮かべていた。

「苦労しないで済んだな？」

「……………そうね」



『Rent a Buggy&Horse』。半ば壊れたネオンサインは不気味さを醸し出しているが、首都グロツケンにもあったものと同じ無人営業のレンタル乗り物屋だ。

モータープールに停めてある三輪バギーは、そのほとんどが全損状態だが、中にはたった一台まだ走れそうな奴が残っている。

しかし、乗り物はそれだけではなかった。看板通り、バギーの隣に、四つ足の大型動物が数匹繋がれている。とは言っても、生きた本物ではない。金属のフレームとギア類を剥き出しにしたロボットホースだ。

ようやく立てるようになった私を置くと、キリトはモータープールに駆け込んだ。そして三輪バギーと金属馬のどちらを選んだものか、と迷うように視線をさ迷わせてるけど。

「……その馬は、無理よ。踏破力こそ高いけれど、扱いが難しすぎる。とてもじゃないけど素人に乗りこなせたものじゃないわ」

マニュアルシフト操作が必要な三輪バギーも乗りこなせる者は数少ないが、ロボットホースの気難しさはさらにその上を行く。

「……そう、だな。わかった、バギーで行こう」

一瞬名残惜しげにロボットホースに視線をやると、キリトは頷いて、一台だけ健在の

三輪バギーに走り寄る。始動装置のパネルに触れてエンジンを駆けるまでの動きに躊躇いはない。リアステップに乗るように手招きされ、以前と同じようにキリトもシートに跨がってアクセルオン。太い後輪が甲高く鳴き、足元から直に伝わってくる振動音に思わず身震いをした。

だがこのまま遺跡エリアを突っ切るか、と思いきや。フロントが道路の北側を向いたところでキリトは一瞬マシンを止め、轟くエンジン音に負けじと叫んだ。

「シノン、あの馬を破壊できるか!？」

「え……… つと、うん。出来ないことはないと思う」

ようやく痺れの薄れてきた右手で、左腕のスタン弾を引き抜いて眉をひそめる。この距離ならばスキル補正だけでも必ず命中するだろう。後は、構えて引き金を引くのみ。

肩口に立て掛けていた《ヘカート》の銃口をロボットホースへと向け、トリガーに指を掛ける。そして目を細めると、未だ痺れの残る人差し指を一気に引く――

「つとあうあ!？」

ことができなかった。

突然急発進したバギー。危うく振り落とされそうになったという事実、頭に血が昇る。なにしてくれるのだ、この女装変態は。

「ちよつと、なんのつもりよ!？」

「ツ、すまなかつた。けど後ろを見てくれ……！」

「はあ？」

タイヤ痕を残しながらひた走るバギー。揺れる視界に顔をしかめながら後方を睨むと、そこに奴がいた。

「っ」

激しくはためくポロポロのマント。右手に下がる長大なライフル。すなわち死銃だ。思わずぎゅつと冷たい手で心臓を握られたかのような感覚に陥り、唾を飲み下す。ぐんつという加速感によってバギーから引き剥がされそうになるが、キリトの細い胴にしがみつくことでなんとか回避する。やはり、追ってきたか。

そこでふと、違和感に気付いた。

「……なんで、死銃が此所にいるのよ」

死銃と戦っていたのはアイツだったはずだ。だがアイツの姿は見えない。足止めをしていたのではなかったのか。

爆発音。そして、死銃が此所にいるという事実。

「あ………」

有り得ない。有り得るはずがない。だが、わかってしまった。理解してしまった。させられてしまった。

死銃が、此所にいる。それはつまり、アルトは……

「あ、ああ」

嘘だ。認めない。絶対に認めない、認めてなるもなか。あの飄々とした男が敗北したなんて。あの忌まわしい拳銃で止めを差されたなどと。有り得てはいけない。だって、私は、まだ彼に何も………

「あ………ああ………ああああああアアアアアア!!」

感情が爆発し、脳が沸騰する。ふざけるな。認めてなるものか。ああ認めない。彼があんな骸骨野郎に殺されたなど、認められるはずがない。そんな馬鹿なことなど許さない。

溢れだす憎悪と憤怒。食い縛った歯が嫌な音を立て、両頬がなにかで濡れる。キリトが息を飲むが、知ったことか。

「………ろす。絶対に殺す、殺してやるッ！」

「っ！落ち着けシノンっ………！」

落ち着いてなどいられるか。

ロボットホースに跨がり、此方に迫ってくるボロマント。それを見て、丁度良い、と私は笑った。あの金属馬を何故制御できるのかななどどうでもいい。

奴を、殺せるのなら。

自分でも過去最速であろう速さで《ヘカート》を照準し、悪路で揺れるスコープ越しに死銃を睨む。

それに気付いたのか、死銃も懐から五四黒星式を抜き放ち、此方へと銃口を向ける。だかもはやそれすらも気にならない。ただ身体を満たすのは憤激。

この手で奴を殺せるのなら、私は殺人者でいい。

だから、力を寄越せ！冥府ヘカの女神テ！

「……アルト」

零れ落ちるのは喪った名前。吼え立てる憤怒に身を任せて、私は嗤う。

今から始まるのは戦いではない。ただの、一方的な処刑だ。

## 第9弾：剣士、再び

もし。もしも自分がシノンの立場だったとしたら、どうなっていただろうか。

精密な重心操作によって巧みにレンタルバギーを制御しながら俺はそんな事を思う。もし同じ様な事態になれば、と考えずにはいられない。

もし明日奈を失ったなら、全てを擲なげつても救いたかった者を失った喪失感。自覚した瞬間に全てがどうでもよくなり、灰色に染まった世界。

仇は目の前に、仇を討つ武器は手の中にある。

そして仄暗い感情のまま引き金を引くだろう。

それを今シノンは味わっている。それに気付いた瞬間、シノンを止める事は出来なくなつた。

でもどんな卑怯な手を使われてもアイツは負けない。負けるはずがない。アイツに勝つていいのは俺だ。アイツを倒して良いのは俺だけなんだ。

そう糺したところで、あの銃口が俺に向くだけだ。

「っ……」

ただ無言でバギーを駆り、黒い金属馬からこちらを付け狙う死神の射線を振り切るべ

くハンドルを切る。

「揺れるぞっ！」

「くっ！」

前方にある窪みを見切ると、背後の少女に告げてハンドルを大きく右に切る。凄まじい遠心力がかかり、咄嗟に俺の胴に回されたシノンの手に力が込められる。障害物をギリギリで旋回するようにして回避し、冷や汗をかきながら懸命に死銃を振り切るべく、全く速度を落とさず遺跡地帯を駆け抜ける。

碎けるアスファルト。巻き上げられる砂埃。乾燥した大気は砂漠地帯が近いことを示し、同時に遮蔽物のない砂漠地帯では、後方から放たれる弾丸の回避のしようがないことを悟って、喉の奥で唸った。

「……ちっ」

同時にシノンの舌打ちが聞こえる。

死銃に対して何の攻撃も出来ていないのが現状だ。

攻撃しないのではなく、出来ない。《ヘカート》の性質、そして彼女の状況的に不可能だということだけのこと。

不安定な状況であの恐ろしい程の反動を誇る対戦車ライフルを撃てば、ただではすまない。それが理解できる程度には冷静だった。

「……………無様ね」

苦々しげに吐き捨てられる。下手に反撃すればそのままバギーの転倒に繋がるのは自明の理。しかもそれで当たるのならばまだしも、このような不安定な体勢と猛烈な揺れではこの近距離でも外す可能性は非常に高い。

当たれば、いや掠めただけでも死銃は真つ二つに引き裂かれ死亡するだろう。だが外せば、対物ライフルの凶悪な反動によって、バギーが本当に引っくり返りかねない。そして地面に落下した所を蜂の巣にされ、無駄死にとなる。

それはアルトが身を賭して稼いだ時間を無に帰すことに他ならない。

その事実だけが、シノンに無謀な狙撃を躊躇わせていた。

「抑えろ、シノン。今は奴を撒くことが優先だ」

「無理よ。こっちは二人乗り、あつちは一人…………どう足掻いても速度差がある。このままじゃ、追い付かれて終わりよ」

彼我の距離は着実に埋められていた。現に死銃との距離は100メートルもない。

「っ！」

と、そこまで考えていたところで、シノンは慌てて首を傾けた。

直後に先程まで彼女の頭部があった場所を弾丸が貫き、空気との摩擦音が衝撃波となつて髪を揺らす。100メートルを切ったことを察知した死銃が、本格的に黒星（ヘイシン）を用



いて攻撃を始めたのだろう。黒い骸骨の面を睨み、シノンはぎり、と歯軋りする。

「なんとかして、撃てないかしら」

「そう、だな。どうすれば撃てる？」

「揺れを無くすしかないわね。これじゃ狙撃どころか照準も合わせられない」

「簡単に言ってくれるなあ……！！」

不可能だと匂わせながら言葉を返す。シノンとてそれは理解してるはず、だからこそどうにかする他に活路はない。このままでは、バギーの後輪に穴を空けられるのも時間の問題だ。

恐るべきは敵の精度だ。100メートルという距離でハンドガンという銃身の短さ、火薬の威力で正確に狙撃するのは仮想空間でも至難の技である。ましてや金属馬の背、あの揺れの中だ。

何か、何か状況を打破できるものはないか。

「キリト、あれ！」

「……いける。5秒後だ、やれるか？」

丁度ジャンプ台のように、斜めにアスファルトに突き刺さったスポーツカー。それを視認した瞬間、すでに相互の考えを理解していた。まさに天の采配、絶対絶命の危機ピッチは絶好の好機チャンスへと反転する。

「……………」

「シノン！どうした!？」

「…………ダメ…………引けない……………」

様子の一変した彼女の顔を覗いてみれば、《ヘカート》を構えたまま青ざめていた。

…………確かあの時もあの銃を見て様子が変わった。

「あの銃はダメ…………でも、でもアイツを倒さなきゃ…………」

あのハンドガンは彼女にとって因縁のある銃なのか。

仇を討ちたいという使命感は気丈な強さを見せる彼女を突き崩すほどの因縁が阻む。

アクセルを握る右手を彼女の右手に添え、手を離れたアクセルを左手で握り加速を維持する。

「シノン！カウントを頼む!！」

「キリト!？」

「引き金は俺が引く！照準はシノンに任せる!！」

「…… 3」

ゆつくりと刻むようなカウントダウン。

一直線にジャンプ台に似た障害物へとひた走る。

そして奴もこちらの意図を悟っているはず。

だからどうした。

「2、」

敵は100メートル先。視界は最悪より少しマシ、体勢はほぼ立射に近いだろう。振動こそ消えるが、とてもじやないが安定しているとは言いがたい。最低とまではいかないが、狙撃に適しているとは口が裂けても言えないシチュエーションだ。

口元が弧を描く。だがそれは自身を鼓舞する意味合いが強い。大丈夫、今ならば当てられる。

「1」

そして一際大きな衝撃の直後、全ての衝撃や振動が消え――

「ゼロ。ファイア」

巨大な対物弾。夕闇に螺旋の渦を穿ちながら突進するその軌道は、騎馬の死神を捉え損ね、右へと逸れていく。本来黒い死神がいるべき空間を、捻り切るように貫いた。

「……………え」

思わず呆然とした。

その有り得ざる光景に体を硬直させていた。

「う、そ」

……………外した。

衝撃にも似た驚愕に思考が停止。どのような理由だとしても千載一遇、絶好の好機を不意にしてしまったという事実は変わらない。

「くそ、外したか！」

ついに滞空時間が終わり、衝撃と共にバギーが着地する。蛇行しかけるバギーを危ういところで凌ぎ、キリトは悪態を吐きながらも思考を切り替え、次の狙撃地点……………すなわちジャンプ台を探して目を走らせる。

都合よくそんなものが見つかるはずもなく、まさに進退極まった状況のままバギーは廃墟の隙間を縫うように走り抜けていく。

「……………どうした、大丈夫か？」

「つ、え、ええ」

へたりこむようにしてバギーに腰を下ろす。そして何故外したのか、という混乱の極致の中、ふと後方へと視線をやって凍りついた。

「笑って、る？」

骸骨を模した、悪趣味な仮面。その奥で朧げに光を放つ紅眼が細められ、隠れた口が三日月を描く。本来見えない筈のその表情を、シノンのはつきりと視認していた。そして、同時に気付かされた。

シノンが外したのではない。外されたのだ。

「っ……」

背筋が凍るような感覚に襲われた。圧倒的に隔絶した実力差。これが全て死銃の掌の上だったのだとすれば、彼我の能力差は絶望的だ。

死銃が恐るべき敵であることはもはや疑いの余地がない。このままでは為す術もなく、あの黒星ヘイシンに風穴を空けられた挙げ句殺されることになる。

そう。ゲームの中だけではなく、現実でも死ぬこととなるのだ。

そう思い至ると同時に体は硬直し、今になって胸元から込み上げる恐怖にごくりと唾を飲み込む。

そしてここにはいない彼の背中を幻視した瞬間、全ての思考が吹き飛び怒りと羞恥に視界が赤く染まった。

「っー」

実力差を認識するのは良い。だが奴を、仇を目前にして怖じ気付き、あまつさえ”敵

わかない”などと思考したのは断じて赦せない。私自身が赦さない。

彼はいつだつて不敵に笑つてた。相手が強ければ強いほどその戦意は目に見えて昂つていた。

相手の強さを越える強さ。

それは彼が持ちうる強さであり、『いずれ私も』と目標にしていたもの。

確かに死銃は強い。

ならばそれを越える力でねじ伏せればいい。

——そう彼のように。

「……………キリト。このバギーつて一人なら、死銃を引き離せるわよね？」

「え、まあ。つてシノン、まさか！」

驚愕に彩られた顔が振り向き、無駄に綺麗なそれを一瞥して苦笑する。既に背負うようにして《ヘカート》担ぎ、不安定なバギーの上にしやがむようにして膝を曲げる。

「私は彼のように強くならなきゃいけないの。死銃が彼より強いなら、アイツを殺して彼を越える」

「馬鹿、待てシノン！」

制止の声を振り払い、躊躇いなくバギー後部から跳躍。13キロ以上ある《ヘカート》を担いで跳躍するなど、本来なら無理もいところだ。

だが鍛えられたSTRは難なくそれに耐え、それどころか五メートルを越える跳躍を可能にする。

跳躍のほぼ直後、弧を描くようにして最高点に達したその瞬間に、すでに銃口を死銃へと向けていた。

「死ね」

放たれるは対物弾。第一次世界大戦前であれば、それ単体で戦車の装甲を抜くほどの威力をもつ脅威の弾丸。

だがやはりと言うべきか、予測でもしていたかのように至極あっさり回避される。衝撃波がぼろマントを纏うアバターをぐらりと揺らす、それだけだ。

全く、憎たらしい彼のように未来でも見えているのだろうか。

そう愚痴るように心中で溢すと、仮想重力に引かれ落下し始める。

この高さで重量で地面に叩きつけられればただでは済まないに違いない。元よりそれは予想していたことだが、こうも歯が立たないとなると苦笑しか浮かばない。

地面に叩き付けられ、万が一に即死を免れたとしても身動きのとれない私を死銃はあの因縁のある黒屋（ヘイシ）で撃ち抜くだろう。

それで私は終わる。

唯一未練があるとすれば、それは母親くらいだけど……まあそれも今まで通り親

族が面倒を見てくれるだろう。

母の瞳に私が写ることはあの日からなく、そしてこれからもその機会は無い。

…… デートとか、してみたかったんだけどなあ。

静かに瞼を下ろす。

さようなら。三神さん……。アルト……。今逝くから。

そして、私の体は容赦なく大地に衝突し――



「落ちものヒロイン（物理） ってか？」

そんな幻聴と共に私と死銃の間を裂くようにビルが倒壊。

傾くビルの窓を突き破り、死銃とは違う金属馬に跨がった人影が私を受け止める。

「間一髪、間に合ったみてえだな……ってどうしたよ、いつもの余裕が消えてるぞ？」

有り得ない。これは幻聴だ。今になって未練がましい自分の心が産み出したものに  
違いない。

「……………アル、ト？」

「おうよ。お迎えに来たぜ？お姫様」

結わえた黒髪が風に靡き、多少煤けた顔に浮かべるのは皮肉げな笑み。茫然とする私  
はただ、それを見上げるしかなかった。

「落とされたくねえならしっかり掴まってる」

「え……う、うん」

ふと視界の端でマズルフラッシュが瞬いた。

「ひゃ!？」

「残弾とか気にしねえのかよー」

《ムラサマ》を引き抜き、銃弾を弾く。金属同士がぶつかるを甲高い音にシノンが身を竦ませる。数十メートル先で嗤う赤い目を睨み返すと、小さく舌打ちした。

俺の得物に飛び道具はない。こんなことならハンドガンの一挺でも売り払わずに手元に置いておけばよかった。

「……………重い」

「今なんか言った?」

「イエ、ナニモ」

ぎろりと睨み上げてくる空色の瞳から逃れるように視線を死銃に固定する。

「……ばーか」

なぜか罵倒され、猫のようにぐりぐりと額を押し付けてくる。その感触にくすぐったさを覚えながら、俺は左手に握った手綱を制御してアスファルトの上に散らばる大小様々な障害物を回避していく。

その髪の色と同じ猫耳と尻尾を幻視するなあ。

などと考えながら。

……というか。よく考えなくてもこの状況って色々和不味いのではなからうか。

馬上とはいえ、シノンが真正面から俺に抱きついてに近い体勢だ。

シノンはこの見た目とプレイヤースキルの高さから恐ろしく人気が高い。

GGO以外ならばまだいい。いや、良くはないがALOじゃキリトが言い触らさない限り、仲間内だけで弄られるだけで済む……って自分でもテンパってるな。貧相な体してる癖にちゃんと女してるといっかー

「もう二度と私を置いて何処かに行かないでよ……」

そう押し殺したような声で呟き、再び猫のように額を擦りつける。

「ああ悪かった。もうどこにも行かねえよ」

だから、腕の力を緩めてくれねえかな？

鯖折りよろしく背骨をへし折られそうなんだが。

……まあいい。今は死銃を撒くことが先決だ。

音を頼りに先回りしてビルの支柱を全部ぶった斬り、倒壊させたはいいが、ビルが完全に地面とキスする僅かな合間を駆け抜けやがった。

「アルト、やつぱり無事だったか！」

「やつぱりってどういうことだ、この野郎！このまま北に進めば砂漠地帯に繋がってる！奴を撒いてからそこに行くぞ！」

バギーのエンジン音に負けじと大声を張り合う。

「どうする!?!」

「100m先を右に曲がれ！タンクローリーを爆発させる！」

音を頼りに先回りして役に立ちそうなものを下見しておいて正解だったな……まあそのせいで合流するのに遅れたわけなんだが。

ザザの野郎も射撃は効果ないと判断したのか、射撃の頻度が下がった。それはそれで好都合だ。

「シノン、《ヘカート》の射撃準備」

「え、と……」

「奴に当てる必要はない。あんな奴よりも当てやすいデカイがあるからな」  
「でも……」

馬上かつこんな揺れてちや撃つどころか照準すら難しい。それはシノンも理解しているからこそ煮え切らず、尻込みしてしまってる。

とはいえ、やらなければこつちがやられるだけだ。

「けど俺は知ってるし信用もしてる。GGO屈指のスナイパーであるお前の腕を。俺とお前のコンビで負けたことがあったか？」

「……少しだけ力を貸して」

顔を埋めたシノンの頭に手綱を腕に巻き付けた左手を回す。

俺のような人間に誰かを手助けできるような力があるなどと自惚れるつもりはない。

それでもー

「シノン、10秒後だ。やれるな？」

「……誰に言ってるのよ。私はアンタの相棒。アンタと私がいて勝てない相手はいないわ」

誰かの背中を押せるのなら。

「5……」

交差点を曲がり、路肩に止められたタンクローリーが視界に入る。

「……4」

俺たちに残きザザも交差点を曲がってくる。

「3」

タンクローリーを通り過ぎ、俺の右脇から覗き込む形でシノンが《ヘカート》を構える。

「2」

恐らくスコープを覗き込んだ世界は絶え間なく上下に揺れ、射撃アシストによるバレットサークルも激しく拡大と縮小を繰り返しているはず。

「1」

ミスは許されない。ミスはそのまま俺たちの敗北に繋がる。その重圧はこの小さな背中のにのし掛かっている。

それで俺は信じている。シノンの腕を。彼女と共に歩んだ時間を。

「0」

銃口から放たれた対物徹甲弾は再び《黒星》を構えたザザではなく、今まさにザザが通り過ぎかけたタンクローリーへと着弾。

タンク内の気化したガソリンが対物徹甲弾の熱量を受け爆発的な燃焼を起こし、厚さ数ミリの鉄板を引き裂いて周囲へとその暴威を振るう。

凄まじい爆音と共に吐き出された炎に奴の姿が掻き消えたことを確認し、キリトと視線を交わして砂漠地帯へ向け進路を変えた。

## 第10弾：決着

俺の意識が僅かにキリトたちに外れた瞬間、ボロ切れのマントを翻しキリトたちを追撃しようとして走り出しかけたザザの首を斬り落とさんと振り下ろしの一撃を見舞う。

ギリギリで飛び退き回避。左逆手に持ち変え胴薙ぎ一閃。しかしこれも切っ先が僅かに掠める程度。

「おいおい、無視は困るな」

遠ざかるキリトたちを振り返ること見送り、眼前の敵を見据える。

肩掛けにした《L115A3》サイレントアサシン、そして右手の黒星五十四式。

武器はそれだけじゃねえだろうが、取り出す暇は与えない。あの頃とは違い、こつちはAGI型のステ振りだ。既にアイツは俺の間合いの中。なにかを取り出すよりも早く斬り伏せる。

「テメエが何を企んでるかなんぞ興味もねえ。けどなテメエのしてることを見過ごす訳にはいかねえんだよ」

「正、義の味、方気取り、か？」

「んなつもりは毛頭ねえよ。テメエ悪が気に入らねえ、それだけだ」



人が決めた善悪にも興味はない。

「俺がテメエを敵悪だと断じた以上、ただ斬り伏せる」

「やっ、てみせ、ろ、悪の、敵」

黒星の一射、弾丸の腹に刀身の腹を押し当て逸らす。

間合いを詰めての一閃、バックステップで避けられる。

《L115A3》の一射、電磁スタン弾を頭から切り捨てる。

ポルトアクション故に連射は効かない。そう判断し、さらに踏み込む。

一進一退。

とはいえー

こいつ……手え抜いてやがる……!!

SAOサバイバー  
俺たちの本分は剣だ。

生死を賭けて振るい培ってきた剣技は他のVRプレイヤーたちとは一線を画かくする。

まあ剣に自信がねえから銃を握る。というのは理解できるが【ラフコフ】の幹部格である【赤眼】が剣を不得手にしてるとは考えにくい。

「テメエ……」

問い質す言葉を紡ごうとしたその時、横手からのバレットラインに遮られ飛び退いた。

「遅か、った、な。meth」

「すいませんザザさん。遊び過ぎたようで」

なにもない空間が揺らめいたかと思うと短機関銃を携えた粘着質そうな声の男が現れた。

光学迷彩……これで実装は確実にになったが、持ってるのがザザとその仲間ってのは笑えねえな。

「そつちの男も【ラフコフ】メンバーか……メス、なんて奴いたか？」

「人の足を斬り飛ばしといて、忘れたなんて言わせねえぞ！」

「ギャンギャン喚くなよ。どうでもいい奴を覚えとくほど俺は暇じゃねえんだ」

「なら二度と忘れねえように刻み込め！俺はクラディール！テメエがいなきや【黒の剣士】を殺してた男だ！」

「テメエごとき三流が？ハッ、冗談のつもりなら笑い話にもならねえな」

「この野郎……！」

「挑発に、乗る、な。こ、いつ、の、目的、は、時間、稼ぎだ」

UZIを構えかけたクラディールを【赤眼】が制す。

チツ、挑発に乗ってくれりや楽だったんだがな。

手札の分からねえ奴を相手取るなら、頭に血を昇らせた方がやり易くて助かんだけ

ど。

【赤眼】の動きの始動を見極め飛び出す。

懐から取り出したのは球体状の物体。

それは何度か見たことがあり、俺も何度か使ったことのある代物。破壊力、殺傷範囲ともに広いそれ。

即ちプラズマグレネード。

起動させず宙へと放り、大して狙いも付けず黒星で射抜く。

なんつーデタラメな……！

トツプスピードに乗りかけた体を急制動。《ムラサマ》を引き抜き、爆風に呑み込まれた。

「……………なんとか生きてるな」

即死してもおかしくはなかったが、ギリギリで生き残れたみてえだ。そういうときの悪運は強いんだな俺。

身体に乗った瓦礫を押し退け、天井を見上げる。

プラズマグレネードが炸裂する瞬間、《ムラサマ》で地面を切り裂いて下の空間へと落ちることで逃れようとしたのだが、落ちた穴から入り込んだ爆風に煽られたわけだ。

何かしらの建造物か遺跡かは知らねえが、この空洞がなかったら死んでたな。足元の感触が妙だったから一か八かの賭けだったが、上手くいつて助かった。氣い引き締めねえと。

どこぞのFPSゲームのように受けたダメージは時間経過で回復する。

回復を待つてから半ば倒壊しかけたレンタルバギー屋から唯一残っていたロボットホースを拝借し、微かに聞こえるエンジンを聞き慣れた《ヘカート》の銃声を頼りに廃墟を駆ける。

そうして一悶着はあったが、無事キリトと合流、砂漠地帯にある洞窟の中へと身を隠しつつ、サテライトスキャンをやり過死ぎしてヤツを討ち取るための作戦会議を開いた。

と、概要だけを話せば何てことはないが、洞窟内で話し合ってる最中もシノンが腕から離れない。

振り払わせないためか、太股で手を挟む徹底振り。  
腕全体で柔らかさを感じれて役得だ。

「それで死銃、ザザのことだがー」

「アルト、流星にシノンが無視するのは無理があるぞ」

「シノンは抱きついてない、いいな？」

「アツハイ」

「<sup>シノン</sup>こいつ、前世は猫だったんじゃねえの？

そう思わせるほど猫っぽい。

こうしてる間も抱きついた腕に頬を擦り付けてるし。

それはいいんだよ

「ザザの野郎にはリアル以外にもGGO内にも協力者がいた。クラディールって聞いたことあるか？」

「クラディール!?アスナのストーカーしてたヤツだ!お前も知ってるだろ!」

「は?ストーカーしてたのはクラゲだろ?」

「お前がそう憶えてるだけだ!」

そうなのか?

まあ確かに興味のねえ奴の名前は憶えねえけどそんな名前だったけか?

「まあそれはそれとして置いて、クラゲがGGOに居る理由は特にねえみたいだった。俺たちと奴ら、その決着を着けるためにザザの野郎が用意したのかもしれないねえな」

「死銃があの爆発で死んだって……可能性は？」

「いや、トラックが爆発する直前、馬から飛び降りたのが見えた。無傷とは言えねえが、死んだってのも言い切れねえ」

「つてことは俺たちと同じようにどこかに身を潜めて、ダメージの回復に努めているって事か。それが終わったら——」

「ああ。今度こそ俺たちを殺しに来る」

はつきりと、その言葉を口にする。

間違はなく殺しに来るはずだ。奴の、奴らの執着心は俺たちには理解できない。したくもねえけどな。

「なら、俺はクラディールをやる。アルトはザザを頼む」

「ああ了解だ。もし逆を提案したら、ぶん殴つてでも訂正してたところだ」

ニヤリ、と笑みを交わし拳を打ち合わせる。

キリトはアスナ絡みの因縁。俺は……特にないな。

いや、奴らのあり方が気に入らない。理由はそれだけで十分か。

「……なんで？ あなたたちは怖くないの？ 相手は本当に人を殺せる力を持つてるかも

「しれないのよ?」

「仮想世界から人を殺すことなんざ出来ねえよ」

はつきりと死銃の力を否定するアルトに、私は呆気にとられた。

なんでこうも……なんでこんなにも、この2人は強いのか。それに比べて私は……5年前の私よりもずっと、ずっと弱くなっていたのに……!!

「……私、逃げない」

「シノン?」

「私も2人と一緒に戦う」

「シノンまで無理に戦うことなんて無いぞ?」

「アルトだつて言ったじゃない。『仮想世界から人を殺すことなんて出来ない』つて。もし仮に死銃にそんな力があつて、殺されるかもしれない……私は構わない。さつき、すごく怖かった。死ぬのが恐ろしかった。情けなくて、悲鳴を上げて……そんな私

のまま生き続けるのなら、死んだ方がいい」

そう彼が生きていてくれた。奴を殺してこれからも彼が生きていてくれるなら、私はこれ以上望まない。

「……本気で言ってるのか」

静かに、感情の込められていない平坦な声で呟く。

私はそれに答えず、彼の腕をほどいて立ち上がり、洞窟を後にしようとしたけどアルトの手が私の肩を掴んで止める。

「……離してよ」

「シノン、お前……自分が何を言ってるのか本当に分かってんのか？」

「ええ。もう怯えながら生きるのは疲れたの。別に付き合ってくれなんて言わないわ。1人でも戦えるか——」

その瞬間、強引に私を向き直らせると手を振りかぶり、乾いた音が洞窟内を反響した。何をされたのか一瞬わけがわからなかった。私を打つのだと気付くと頬に手を触れながらアルトを見上げる。

「寝ぼけたこと言ってるんだよ、お前……。死んだ方がいい？何も知らないくせに死ぬなんて口にすんな。死ねばそこで終わりだ。遣された人間はずっと喪った悲しみを背負って生きていくことになる。お前があいつに殺されたら、俺もキリトも悲しむし一生



悔やみ続ける」

「……そんなこと頼んでない。一人で戦って一人で死ぬ、それが私の運命なのよ」

「運命？ お前はそんな、誰の手にも渡ってねえ未来を信じて受け入れてるってのか？ んなモン、クソ食らえだ！ テメエ自分の運命はテメエ自分で決める！ 未来は与えられるもんじゃねえ！」

「アルトには関係ないじゃないっ！ 偉そうに説教して何様のつもりよ!!」

「俺はお前の相棒なんだから!? それ以上の理由が必要あんのか!? お前は俺に言ったな!!

『私を置いて何処かに行かないでよ』ってよ！ 相棒に死んでほしくねえって思いは俺も同じだ！」

相棒……。

そう、私とアルトは相棒。

最初は倒すべき相手だった。次は越えるべき目標だった。その次は互いを預けられる相棒だった。

でも……それだけよ。

私は彼のことをほとんど知らない。

彼は私のことをほとんど知らない。

ここでしか繋がりが無い。私の彼への想いも蜘蛛の糸みたいに細くて切れやすい繋

がり。

「ツ……ならっ！なら貴方が私を一生守ってよ！」

押さえ込んでいた感情が一気にあふれ出し、アルトの肩を掴むと涙を流しながら叫ぶ。

「何も知らないくせにつ！何も出来ないくせにつ！勝手なこと言わないでよ！そんなこと言つて、私のことを知つたらどうせ離れていくんでしよう!? 私は……私の罪を、あなたが背負つてくれるの!? この……この……この、人殺しの手を、あなたが握つてくれるの……!?」

「なんだ、そんな簡単なこと」  
握り締めた右手が、暖かい感触に包まれる。

ごく自然に、アルトは笑いかけながら右手で私の右手を包み込んでいた。

さつきまで怒っていたのに、いつものように笑みを浮かべる彼に思わず虚を衝かれる。

「守る……か、そうだな。茨の道でも道連れがいるなら歩き続けられる。お前がそれを見むなら、一緒に歩いてやる。例えばそれが地獄への道でもお前の隣で笑っていてやるよ」

「つつ!!うああああ……!!」

アルトに胸に飛び込み、親とはぐれた子供のようにつき、声を上げて泣き続け

た。

散々泣いて、散々叫んで疲れきったシノンはまだ壁際に腰を下ろすと、隣に座ったアルトの肩に頭を載せてきた。

「ごめん……もう少し、もう少しだけで良いから」

「別に構わねえよ」

そのまましばらく、誰も口を利かなくなる。けれど静寂を破ったのはシノンだった。

「……私ね、人を……殺したの」

ゆっくり、その言葉を口にするシノン。

それから少しづつ、ゆっくりと自分の過去を語りだした。

それが起きたのは5年前小さな町で起きた強盗事件。

報道では犯人は銃の暴発で死んだことにされたが、真相は違う。本当はその場にいたシノンが強盗から拳銃を奪って、撃ち殺したのだという。

「5年前……？」

「11歳の時……私、それからずっと銃を見ると吐いたり倒れたりしちゃうんだ。銃を

見ると、殺した時のあの男の顔が浮かんできて……怖い。すごく、怖い」

「けど……」

「うん。この世界なら大丈夫だった……だから思ったんだ、この世界で一番強くなれたら、きつと、現実の私も強くなれる。あの記憶を忘れることができる……って。なのにさつき、死銃に襲われた時、すごく怖くて……いつの間にかシノンじゃなくなって、リアルに戻ってた。本当はね？本当は、死ぬのは怖いよ……でも、それと同じくらい怯えたまま生きるのが辛いよ。でも死銃と、あの記憶と戦わないで逃げちゃったら、私はきつと前より弱くなっちゃう……！」

仮想と現実と同じようである、と無意識に思い込むことでシノンは平気だった。

そのお陰って言うのもアレだけど、銃を見たり触ったりしても平気だったんだろう。

けど、そうか……シノンもずっとそれを引きずっていたのか。

「……俺も、俺たちも人を殺したことがあるんだ」

あの時シノンが取り乱していた理由に納得し、俺もポツリと呟いた。

その言葉を聞き驚いたようにシノンは息を呑み、俺そしてアルトを見やる。

「前にも言ったろ？俺たちとあの死銃は他のゲームで顔見知りだったって。そのゲームのタイトルはソードアート・オンライン」

「じゃあ、変態もアルトも……」

「ああ。S A O 生還者だ。そしてあの死銃——いや、ザザとクラデールも」

【笑う棺桶】。現実でも人が死ぬと理解していながら、殺しを繰り返すロクでもねえ連中が所属していたギルドの名前だ」

S A O では犯罪コードに引つかかる行為をすると名前が通常時のグリーンからオレンジに変わる。だから犯罪者を犯罪プレイヤーと呼んだ。

しかし殺人は単なる犯罪であってはならない。

ゆえに、レッド。殺人プレイヤー。

最大の禁忌であるはずの殺人を、自らの快樂の為に幾度となく実行した彼らへの蔑称だった。

彼らの存在は恐怖そのものだった。一般人と攻略組、それら関係なく。彼らの存在そのものが大多数のプレイヤーの安寧を脅かした。

多くの人が犠牲になり、攻略にすら影響が及ぶ段階に至って遂に、彼らを滅ぼすための討伐隊が組織されることになったのだ。

しかし、かといって別に皆殺しにしようとしたわけじゃない。捕縛して監獄エリアに送ろうという計画だった。

「けど奴らの討伐計画が漏れててな。連中は待ち構えてた。そうなりや、あとはもう泥沼の混戦だ。その中で連中を10人、剣で斬り捨てて命を奪った」

「俺も2人、そしてSAOからの解放をかけて2人。この手で斬った」

手を開き、握る。その時の感触が今もこの手に残っている気がした。

「正当防衛？ そうだろうな、俺たちだつて死にたくなかった。殺さなきゃ、こつちが殺されていた。だから仕方がない。皆はそう言つて俺の罪を責めはしなかった。……SAO

が終わつても、そのことを免罪符にはしねえし忘れもしない。もし、またこの手を血で汚さねえといけねえなら何度でも血で濡らしてやる。その業を背負う覚悟はある」

「やつぱりお前は強いな。俺は、もう一度そうする覚悟がない。でもアスナやユイ、俺の仲間に危害が及ぶなら……！」

アルトと違いその罪に押し潰されるかもしれない。

いや、アルトだつて押し潰されそうになつても歯を食い縛つて、膝を折らないだけだ。その罪を背負つても歩き出せることが強さの形の1つだと思うし、そう信じる。

「……………過去と向き合つて受け入れる」

「ん？」

「リアルでそう言われたの。強くなりたいたいならまず過去と向き合つてそれから受け入れることだつて。あの人が言つた意味つて多分、二人みたいなことを言うんだと思う」

「へえ、どんな人なんだ？」

「……………キリト、取り敢えずその話はいいだろ」

アルトのヤツどうしたんだ？

なんか冷や汗かいてないか？

顔も変だし、視線も俺と合わせないようにしてる。

「素っ気ないし口も悪いけど面倒見がいいわよ。なんだかんだ口では言うけど力を貸してくれる、そんな人よ」

ん？それって……………。

アルトの方を見れば両手で顔を覆ってる。

……………おいおい、もしかして——

「他には？」

「他？嫌いだってハッキリ言われたけど、声を掛けてくれるし、気に掛けてくれるし、困った時は相談に乗るとも言われたわよ」

ピンゴ！

「だってさ、ツンデレアルト」

「うっせえ!!なんでこんな身近に知り合いがなんだよ!なんだ!なんだよ!なんでだよ!なんで俺が羞恥責めなんざされなきゃならねえんだ!!」

突然の発狂にシノンは目を丸くしたままアルトを見上げてる。

「……………え?まさか…三神、さん?」

「ああ！そうだよ！キリトテムエ！途中から分かってやがったな!!」  
「仕方ないだろ。こういう機会じゃなきゃ、お前を弄れなれないんだから」  
散々弄り倒されてきたこっちの身にもなれ。

時間的に何回目かのサテライトスキャンが終わった頃合いだな。

羞恥責めによって発狂した脳を切り替えて、なんとか冷静に努める。

マップを確認すればザザとクラゲの表示はなく、俺たち三人を除いた数人のプレイヤーだけが表示されている。

「すごいやクラディールのGGOでの名前は？」

「meth<sup>メクス</sup>。ヘブライ語で死つて意味だな。安直だしダセエな」

ザザといい、クラゲといい、どうしてそんなに死にこだわるのか。

取り敢えずその事はいいんだよ。

「生き残ってるヤツはシノン、お前に狙撃してもらいたい」



「アイツらに狙われてる可能性は？」

なぜ、ザザがいつでも撃てるタイミングだったにも関わらず、勿体振るように引き金を引かなかったのか？

「ないことはない。だが、あの時黒星でシノン撃たなかった。それはつまり、リアルでシノンを殺すことが出来なかったってことだ」

「……ちよつと待つて。どうしてリアルの私になるの？ 奴らはゲームの中から人を殺してるんでしょ？」

「まだ説明してなかったっけ？ アルトの推理になるけどザザがプレイヤーを撃つた時にリアルでの協力者が、プレイヤーに多分薬物かなにかを注射して殺害してるんだ」

「被害者の体に明確な損壊が見られなかった。つまり鈍器で殴る、刃物で刺すとか切るとかなな手口じゃねえ。んで都内に住む独り暮らしかつ初期型の電子鍵の家。これに当てはまるプレイヤーが標的って訳だ。あさーシノンはダイブする前ドアのチェーンロックは掛けたか？」

「ええ、もちろん」

「待て、なにか仕掛けたのか？」

「まあな。チェーンロックを外さないままドアを開こうとすれば、スタンガン程でないにせよピリッと電気が流れるように細工した。1回放電で電池が空になるのがネック

だけどな。しばらく痺れも抜けねえんじやね？」

「なにしてんだお前」

失礼な。防犯だ防犯。

乾電池と電池ボックス、ケーブルとスイッチ、あとは簡単なセンサーを用意できれば誰でも作れるもんだぞ。

「シノンの部屋にはそう簡単に侵入出来ねえよ」

「いや本当なにしてんだお前……」

擬似的な太陽が落ち、夜の帳が周囲を包み始める。

……見られてるな。

予感ではなく確信。姿が見えなくても判る。舐めるような視線を感じる。

キリトは市街地の方へ赴いている。

光学迷彩を利用して待ち伏せしてるはずだ。ほぼヤマ勘だが、砂漠地帯には間違いな

くザザがいる。

《ムラサマ》に置いた左手で柄を掴み引き抜いて、逆手のまま眼前を切り払う。

軽い手応えと共に火線が二つに割れる。

銃声はない。やはり《L115A3》——

151.4キロの長射程を誇るボルトアクションライフル。

《ムラサマ》を右手に握り直し、銃弾が飛来した方向へ向け走り出す。

初弾は見切った。あとは予測線と奴の気配を頼りに銃弾を切り払って距離を詰める

！

頭、右胸、左膝。

銃弾を切り払い、予測線から逃れ着実に被我の距離を詰める。

だが、スピードに乗りきれない。

狙いが正確であることタイミングが絶妙であることが要因だ。

こつちの間合いに入る前に取り逃がしちまう！

それだけではできねえ。奴とはここで決着を着ける！

あと300メートルを切ったところでザザのライフルが火花と共にポリゴンとなっ

て四散した。

シノンの狙撃！尚更この好機逃すわけにはいかねえ！

十秒とかからずザザとの距離は100を切った。

奴は黒星を引き抜くが、ここは俺の間合いだ！

放たれる銃弾を避け、一足飛びで距離を詰め振り上げた《ムラサマ》を袈裟に降り下ろす。

だが、その刃は硬質な金属音と共に阻まれる。

「っ!!」

「接、近戦、が自分、だけだ、と思っ、たか?」

「ちゃんと話せ! 聞き取り辛えんだよ!」

受け止めたのは刺突剣<sup>エストツク</sup>。

並大抵の金属なら切り裂ける《ムラサマ》が、受け止められたことに驚いたのは一瞬。すぐにその正体に気付いた。

「そのエストツク、宇宙戦艦の装甲に使ってる金属が材料か!」

「ご明、察、だ【双刃】」

突きと言う最短で繰り出される点の刺突を斬ると言う線の斬撃で払う。

……攻めきれねえ!

最短の攻撃 切り返し  
点の攻撃と線の斬撃。

どちらが早いかは言わずもがな。

徐々に圧され始める。

「……俺とお前たちは似た者同士、なんて心の何処かで思っていたが、そんなことは無かった。ザザ、お前は……俺以上に救いようの無いクズだった」

「な、に？」

「俺が戦うのが好きだ。その結果俺が殺されようと悔いはねえって胸張って死ぬる。だがお前たちは愉しみながら人を殺した。似ているようで全然違ってたわけだ。そして今も、お前たちはあの世界と同じように人を殺している……何が『本物の死を齎す』だ！ お前も奴も、この世界から人を殺す力なんて持つていねえ！ 卑劣で低俗なただの人殺しだ！」

「違、う」

「だったら俺を殺してみせろ！ 今すぐ！ ここで！」

俺の左胸を貫くはずだったエストックは左脇を抜ける。

俺とキリトを誘き出すのが目的かとも考えたが思いの外、人を殺すことにも拘りがあつたみてえだな。

「そうだ、殺せねえ！ 俺の本当の名前も、どこに住んでいるのかすら知らねえ！ 独り暮らしをしている意識の無い人間の家に忍び込んで毒薬を注射？ 大口叩いてやっている事

は姑息でお粗末な上にPKですらねえ！そんな事しかできない小せえ人間が、俺を殺せるものなら殺してみろ！俺はお前を認めねえし、同情もしねえ！お前は俺の仲間を殺そうとしている……正直、お前をブツ殺してやりてえが、代わりにお前の悉くを否定してやる！」

「俺、を否、定？そん、な、事どう、やつ、て」

「簡単な事さ。お前は俺を絶対に殺せない。そして……お前が未だにあの世界に魂を囚われていると言うのなら、それすらも否定してやる。俺たちが囚われていた鉄の城はもうどこにも存在しない。そして「笑う棺桶」ラフィンゴラインだって無いってな！」

「違、う……違う！俺はザザ……」  
「ラフコフ」の幹部！  
「赤目」のザザだあ！」

「アルト……！」

《望遠》スキルと《暗視》スキルを併用して映し出された視界には、ボロ纏ったプレイヤーに徐々に圧され始めるアルトの姿。

援護したいけど《ヘカート》のスコープは奴の《L115A3》を撃ち抜くと同時に相手からの弾で破壊されてる。

被我距離は1キロを越えてる。

スコープ無しじゃ援護も出来ない。

『お前が望むなら一緒に歩いてやる』

……守られてるだけじゃ駄目だ。肩を並べて歩けるようじゃないとアルトの相棒は名乗れない！

お願い《へカート》……私に……力を貸して……！

《ムラサマ》で地面の砂を跳ね上げ目を潰し、鞆に納める。そして柄に手を掛けたまま腰を落とす。

ザザが砂の壁を突き破ると同時に鞆の引き金を引いた。

撃鉄が雷管を叩き火薬を爆発させる。その爆発を受けスパイクが打ち出され《ムラサマ》の鐳を押し出す。

銃弾と同じ速度で押し出された《ムラサマ》を居合いの様に振り抜いた。

ザザのエストックが右頬を掠め、音速を越えた《ムラサマ》が奴の右肩から腕を斬り飛ばした。

「つつ!!」

その時ザザの視線が自身の左胸に向けられていた。ヤツザザに見えて俺に見えないもの、つまりー

予測線……シノン!?……助けられてばかりだな。アイツのありったけの闘志と今までの経験、そして過去と向き合い受け入れようとする覚悟。その全てを乗せた幻影の弾丸。無駄にはしねえ!!

「お前たちの企みも【ラフコフ】も全て！これで終わりだあ!!」

振り抜いた右腕を引き戻し、奴の胸目掛け突きだした。

光学迷彩を起動し奴の姿が消えるが俺には見える。

奴の体格、体勢、足跡。あらゆる情報から俺の目には奴の姿がはつきり見えている。

「甘え!!」

《ムラサマ》の切っ先は寸分変わらずザザの胸を貫き、左下に斬り落としたあと、傷痕をなぞるように斬り上げ真つ二つに切り裂いた。

砂上に転がるザザに一息着ける。

ひとまずこれで終わりだな。

「ま、だ、終わら、ない……あ、の人、がお前、たちを、必ず……」

「Pohのことか？来るなら来い。どちらにせよお前らは終わりだ。リアルリアルの協力者も



すぐに捕まる」

こいつらにかける情けはねえ。

因果応報。

テメエ自分の生き方は全部テメエ自分に返ってくる。自分の快樂のために周囲を省みなかった。そのツケが自分に返ってきた。それだけだ。

踵を返せば、シノンがこちらに歩いていた。

「……終わつたの?」

「取り敢えずG.G.O.ここでは、な」

そうここまでは決着が着いた。

だが、協力者が捕まらない限りまだ終わりとは言えねえよな。

それに――

「お前ともケリをつけねえといけねえよな?」

「当たり前だろ。これで “はい終わり” って訳にもいかないだろ?」

視線の先には両手に異なる刃の剣を持つキリト。

お前がいるのに剣を交えねえと落ち着かねえよ。

「俺たちは剣士だ。戦うだけだ。そうだろ?」

## 第11弾：幕引き

「本当に戦<sup>や</sup>るの？二人とも」

「当たり前だろ。アルトとは勝率五分五分なんだ。ここで勝ち逃げさせてもらおう」

「言<sup>ア</sup>つてろ。あ<sup>ス</sup>つち<sup>ロ</sup>じや互いの手札は解<sup>リ</sup>り切<sup>ッ</sup>ちやいるが、こ<sup>ッ</sup>つち<sup>ロ</sup>じや全部新ネタでな。そう簡単に勝てるなんざ思<sup>ワ</sup>ねえことだ」

キリトとの距離を離さず、シノンから離れる。

「シノン、合図を頼む」

「はあ……分<sup>カ</sup>つたわよ。それじや《ヘカート》を撃<sup>ツ</sup>つからそれが合図よ」  
互いの視線は互いを離さない。

西部劇のガンマンの様に、眼前の相手に己の全てを注ぐ。

——そして、空気を震<sup>ワ</sup>わせる《ヘカート》の銃声と共に動き出し、互いの得物をぶつけ<sup>ケ</sup>合わせた。

「アルトオオオ！」

「ハハハハッ！」

本当に愉しそうだなこの戦闘狂。

光剣の一撃を体を後ろに倒して避けたが前髪を数本掠め、焼き切れたそれが舞う。

左のハイキックに光剣を握った右手首が捉えられ、手から零れた光剣が宙を舞い地面を転がって行く。

取りに行く暇はない。

何より目の前のコイツがそれを許さない。

左手の高周波ブレードを右手に持ち直し、アルトと剣を交える。

袈裟斬り、斬り上げ、刀を鞘に納めつつ身を捻って、鞘の引き金を引いて逆袈裟斬りからの斬り上げ。

怒濤の四連撃。最後の斬り上げを防ぎ切れず、砂の上を転がってしまう。

体勢を立て直せばアルトは既に刀を振り上げ飛び掛かっているとところだった。

降り下ろされた一撃を体を捻って避け、ブレードを横風ぎに振るえば背中に背負うように構えられた刀に阻まれ、互いに切り払いながら距離をとる。

戦闘スタイルがALOと真逆なのに、まるでSAOからこの戦い方だったのかと思わせるほど体に馴染んでる。

そして示し合わせたみたいに、全く同時に走り出し鏢競り合う。

「この程度が限界じゃないだろ!? その先を俺に見せてくれ!」

「うるさい! この戦鬪狂!!」

ブレードを跳ね上げられ、柄頭のスパイクでこめかみを突かれ、体を一回転させ勢いを乗せた横風ぎで構え直したブレードを左に弾かれ、咄嗟に後ろに飛び退いたけど下からの斬り上げで左目を切り裂かれ、視界の半分が黒く塗り潰された。

アルトが距離を詰め、左下からの斬り上げをバックステップで避け、振り上げながら右手が逆手に変わる。降り下ろしながら左手を離し、刀身が半円を描き手首を返した左手に持ち変え手首のスナップで一閃。

降り終えた刀を右手に持ち直し、振り上げながら両手で構え一閃。

隙生じぬ三連撃。

二撃目を敢えて受け、三撃目をありったけの力で弾き返し、アルトの手から弾き飛ばされた刀が5メートル離れた砂上に突き刺さる。

「もつと愉しませてくれ、キリト!」

槍の様に繰り出された蹴りが俺の腹部に突き刺さり、追撃をかけようとした俺を容易く弾き返した。

「武器を無くしただけじゃ、そう簡単にはいかないか」

「体こそ武器。得物が無くなったから戦えませんが、なんざ三流以下の素人だ」  
相変わらず辛辣だよな。

けど俺も同感だ。俺も左目が見えないけどだから戦えませんが、なんて言うつもりはない。

何よりアルトと戦ってるんだ。その程度の理由で敗けを認めるなんて有り得ない。

投げ飛ばされ、地面に叩き付けられ、殴られ蹴り飛ばされる。

かと言ってやられつ放しじゃない。

アルトもダメージエフェクトが目立つようになってきた。

降り下ろしたブレードをアルトは信じられないことに、白羽取りで受け止めやがった。

「アルトオオオ！」

「キリトオオオ！」

けどSTRはこつちにコンバートしてきた俺の方が上だ。

力尽くで振り抜いたけど浅い！切っ先がアルトを掠めただけ。削り切るにはまだ足りない！

「ハハハハッ！いいぞ！」

突き刺さった刀を引き抜き、構え直しながらアルトは声高らかに笑う。

データの中だけどアルトが纏う雰囲気を感じる。

まだ上がある。まだ上がる。

コイツは戦う度に剣を交える度に強くなる。

もつと速く、もつと高く、もつと先へ。

お前となら限界の向こう、いや極限のさらに先に行けるかもな。

「ほんと、男って単純ね」

言葉は軽いけど目の前の戦いは、これまでのGGOのセオリーをぶち壊すほど衝撃的だった。

アルトと変態の武器は超至近距離でこそ、その真価を発揮する刀剣だ。

別にGGOじゃなくてもいいんじゃないか、と言うのが率直な感想ではあるけれど、二人の戦いはそんな感想を吹き飛ばすに足るものだ。

斬り結び、弾き、払い、叩き落とす。

まだ3分も経っていないのに、既に20回以上剣を交えてる。

アクロバティックな変態の動きに対して堅実にそして確実に切り返すアルト。

死銃と戦っているときとは違う。

初めて出会ってから、背中を追い掛けるようになり、その背中を預けられるようになつても今のような顔を見せたことはなかった。

心の底から楽しんでる。剣を交えるだけでお互いの思いが通じ合つてる。

……男の子つてズルいなあ。

ハッキリ言えば嫉妬してる。

私の知らないアルトをあの変態は知ってる。

……それがどうしても気に入らない。

私の罪と向き合おうとすれば体が竦みそうになる。

でも彼の言葉が私の背中を支えてくれる。

今はそれでいい。いつか私自身の足で歩き出せるようになったとき、彼の背中を押し上げるんだ。

やっぱ、強えなキリトは。

苛烈に攻め立ててるっつーのにまともな致命打が未だに入らない。

攻め切れねえし、防ぎ切れねえ。

このままじゃお互い、集中力が切れて山も谷もなくグダグダになって終わる。

戦意は際限なく高まつてるつてのに、そんな終わりだけはゴメンだ。

視線がぶつかり、剣が交わり、火花が散る。

たかがゲーム？ 所詮遊び？

だからなんだ！

一般プレイヤー  
お前たちには分からねえだろ。

SAOサブバイパー  
俺たちが振るう剣の意味が。

己の命、意思、ブライド 矜持。

培ったもの、譲れないもんを剣に乗せ、自らの意思を押し通す為に剣を振るった。

俺はあの日間違えた。

互いに譲れないもんがあるなら、例え命が懸かってなくても今ののように全てを置き去りにして戦える！

あああ  
嗚呼、堪らない！

キリトの切っ先が俺の眼前を掠め、こちらの切っ先がキリトの首元を掠める。

《ムラサマ》を鞘に納め、右腕を垂らしの力を完全に抜く。キリトは一足飛びでこちらの間合いに入った。



勝負は一瞬。

キリトが高周波ブレードを振るうために力を込めた瞬間、俺も鞘の引き金を引き打ち出された《ムラサマ》を空中で掴み、キリトの左腕を斬り飛ばした。

キリトの顔は驚愕の色に染まり、斬られた反動で体勢が完全に崩れている。《ムラサマ》の刃を返し左肩から袈裟斬りで真つ二つに切り裂く。

「143戦72勝だ」

聞こえたかどうかは分からねえがポリゴンとなって散ったキリトは祭りが終わった子供みてえな顔をした。

……そうだな。同じ気持ちだよ。

《ムラサマ》を打ち出す時はいつも柄に手を掛けてたが、さつきみてえな空中でキャッチしてそのまま振り抜くつてのは初めてだったが上手くいったな。

あんまり意味はねえんだけど。

「……凄いわね。あなたとあの変態」

「そうか?」

「そうよ」

あんまり自覚ねえんだけどな。

俺たちは他のプレイヤーと比べて二年間丸々VR世界にダイブしてたから、こっちで

の体の動かし方を熟知してらっただけ。条件が同じならここまでは出来ねえよ。

「二応チエーンロックのトラップはあるが、ログアウトしてもいきなり動くなよ？ 薄目で目の前に誰もいないことを確認してから体を起こせ。それから各部屋の確認をー」

「分かってるわ。過保護過ぎよアルト」

「そうか？ だが、『ラフコフ』ってのは人殺しの集団だ。警戒して然るべき相手。やり過ぎて足りねえくらいだ。俺はアパートじゃなくて、別の場所からGGOにダイブしてるが俺が行くまで誰も部屋に上げるな。誰が協力者か分かったもんじゃねえからな」

シノン——朝田は間違はなく奴らのターゲットになってる。だがザザからの合図がなければ、危害を加えることも出来ねえはずだ。

俺が行くまでの時間稼ぎもあるから間に合うだろ。

「さて約束通り、戦るか？」

「……女の子相手に『やる』とか言わない方がいいわよ。セクハラで訴えられたくなかったらね」

冤罪だ。濡れ衣だ。

男はいつでも女の嘘で泣かされるもんなのかね。

世知辛い世の中だ。

「どちらにせよ万全じゃない貴方と戦っても意味無いから、そろそろ終わらせよつか」

「戦うんじやねえならどうやって」

「ちよつと目線、合わせてくれる?……うんそのぐらい。第一回B o Bは二人同時優勝だったの。どうしてか分かる?」

1人にならねえと終わらねえのに同時優勝?

考えられるとすれば共倒れー

「これ持って」

「おう」

なんか手渡された物体、ごく最近見たような。しかもそれで死にかけたような。しかもこれ起動してねえか?

「答えは優勝するはずだった人がお土産グレネードに引っ掛かったから」

「お土産グレネードって、ツ!!!」

何がどうなったかと言うと、シノンが言ったことを理解して手渡されたグレネードを投げ捨てようとした瞬間、抱き付かれた。グレネードを持った右手ごと。しかもキスのおまけ付き。

あまりの情報の多さにいつもなら冷静に回る頭がフリーズ。気付いたときには目の前が、シノンの顔のドアップとグレネードが起爆したことによる閃光に包まれてた。

やつちやつた……………。

引いてないかな？大丈夫だよね？

一通り部屋の安全を確認できたあと私は一人ベッドの上で悶えていた。  
彼が<sup>アルト</sup>あの<sup>三神さん</sup>人だったなんて……………。

確かに似てるとは思ったけど、本当にその人だなんて思うわけないじゃない。

安全を確認するために三神さんが来てくれるって言ってたけど、どんな顔で会えばいいんだろう？

笑顔……………はおかしいわね。

鏡の前で一人百面相をしていてふと唇に触れる。

まだ感触が残ってる。

瞬間私の顔はトマトのように真っ赤に染まった。

くっつ！バカア！思い出しちゃダメ！

ドアのノック音に茹で上がった頭が一気に冷めた。

どっち？死銃の協力者？それとも——

「朝田さん！僕だよ！B O Bの優勝を祝おうと思つて居ても立つてもいらなくてさ」  
新川くん！よかつた……。

「ちよつと待つて、今ー」

『誰が協力者か分かつたもんじゃねえからな』

ドアノブに伸ばした手が止まる。

……大丈夫。新川くんなら信用できる。

チエーンロックに仕掛けた簡易スタンガンのスイッチを切り、新川くんを招き入れる。

その時、私は見逃していた。

三神さんが玄関に備え付けてくれた簡易スタンガン。そのランプが消えてることに。

ランプが消えてるということは既にスタンガンが起動して電池がなくなっているという事。

つまり部屋に誰かが入ろうとしたという事。

買ってきてくれたケーキをテーブルに置き、それぞれ腰を落ち着けた。

「左手どうしたの？ なにか庇ってるみたいだけど？」

「あ……ここ、ここに来る途中でどこかにぶつけちゃったみたいだね。朝田さんが優勝して僕も舞い上がってたみたい。改めて優勝おめでとう、朝田さん」

「そんなことない。イレギュラーが重なってくれたお陰よ。私だけなら上位に食い込めるかも怪しいわ」

私が求めた力は死銃によって打ち砕かれ、過去の罪は乗り越えることはできなくて、あの二人に助けられた。

罪は乗り越えるのではなく向き合い、受け止めること。あの二人に説かれてなければ、どうなっていたんだろう？

きっと立ち直れないほどに打ちのめされ、あのまま死銃に撃たれ死んでいたかもしれない。

「そんなことはないよ。朝田さんは本当の力を持つてる。死銃なんか目じゃない」

「新、川くん……？」

「……どうして新川くんが死銃のことを知ってるの？」

「<sup>じ</sup>実の兄とはいえ他の男に朝田さんに触って欲しくないよ」

「実の兄？ ザザの正体は新川くんのお兄さん？ ということは新川くんが死銃の協力者

である可能性も――

そう思い至った瞬間、私は新川くんを押し倒された。

左脇腹にナニか冷たくて固いものが――

「死銃がなんで黒星を使ってるか分かる？ あれはね僕が君のことを知ったときにあの銃にしようって決めたんだ。朝田さんがあの銀行強盗を射殺した銃だよ。日本中探しても朝田さんだけだよ、人を殺したことのある女の子は」

新川くんが何を言っているのか分からない。分かりたくない！

「やめてよ新川くん……」

「だから朝田さんにGGGを薦めて朝田さんと一緒にいられる時間を作ろうとしたんだ。それにゼクシードのやつ！ AGI万能論なんて大嘘つきやがって！ いいザマだ！ 殺されて当然だ！ 僕の世界はあそこ<sup>G</sup>。あそこ<sup>G</sup>しかない！ あそこだけだったのに！ 僕の居場所を奪いやがった！ それにアルトの奴もそうだ！ 僕からシノンまで奪いやがって！……もういいよね、朝田さん。一緒にGGGみたいな、ううん。もつとファンタジーな世界でもいいや。結婚して子供も作ってき、きつと楽しいよ？ 一緒に次に行こう？」

……もう何も見たくない。何も聞きたくない。

『それでいいの？』

仕方ないよ。強くなろうとしてもなれなくて、追い掛けたものも幻想で。信用してた

新川くんに裏切られた。

人殺しの私に味方はいない。

『アルトの——三神さんの言葉、忘れたの？』

三神さんの言葉……？

『詩乃私が望めば地獄でも一緒に歩いてくれるって、そんな彼の背中を支えられるようになるんでしょ？』

そうだ。どれだけ時間が掛かってもあの人を支えられるようになるんだ！諦めない！諦めたくない！！

『詩乃とシノン今まで私たちは自分のためにしか戦ってこなかった。だからあキリトとアルトの二人みたいに誰かのために戦ってみよう？』

「……あああああ！！」

右肘を新川くんの顎目掛け振るい、左手で左脇腹に押し当てられた注射器を払い落とす。

振るった右肘を鳩尾に当て、左の掌底を喉仏に叩き込んで体の上から落とす。

三神さんに教わった護身術。人間の急所を狙う技しか教えてもらってないけど。

今の内に外に！外に出れば三神さんも間に合うはず！

体のバランスを崩しながら何とか玄関に走り、ドアの鍵を開けようとして、新川くん



に足を引つ張られてまた組み敷かれた。

「駄目だよ、シノンは僕を裏切っちゃダメなんだ！」

「いい加減にしてよ！アンタの妄想を私に押し付けないで!!」

「……おい」

頭上から掛けられた声と共に新川くんの胸倉が掴まれ顔に拳が突き刺さった。

仰向けの私を跨ぎ派手に吹き飛んだ新川くんの右腕を掴むとうつつ伏せに組み敷き捻りあげた右腕を右膝で押さえた。

「三神さん？」

「おう。なんとか間に合ったな、ナイスガッツだ」

## 第最終弾：Debriefing（帰還報告）

事の顛末を語ろうと思う。

ザザこと新川昌一の弟、新川恭二は朝田の殺人未遂及び他二件の殺人に関与した疑いで逮捕。もちろん新川昌一も逮捕された。

使用された薬物は筋弛緩剤《サクシニルコリン》。塩化スキサメトニウムの名前で医療に使われるものだった。

同時にそれを注射するための注射器も痕跡をなるべく隠蔽するために無針注射器を使用してたことで、計画犯罪であることが証明され、二件の殺人に一件の殺人未遂により十年年、或いは何十年とムシヨのなかで暮らすことになるだろう。

罪の代償は己の人生で払うことになった訳だ。

新川弟をサツに引き渡したあと取り調べを受けた。

余談だがドラマとかであるようなカツ丼とかの差し入れない。賄賂だとかになるらしく規則で禁止されてるんだと。食いたかつたな。

ついでに朝田の玄関に仕掛けたスタンガンについても取り調べを受けた。ただの護身用にしては威力がありすぎるとの事。

まあ一回で電池が空になるからな。相当な威力だろう。

朝田に關してもあんなことのあった部屋で寝させる忍びねえから俺と和人がGGOにダイブしてた病院の一室に放り込んだ。

サツの警護もあるから俺も帰ろうとしたんだが、あの洞窟以上に引っ付いてくる朝田を引き剥がせず、結局俺も同じ病室で一夜を明かした。  
疚やましいことは一切してねえし何も無かった。

朝田が俺に好意を抱いてんのは分かっているが、年下相手に本気になれねえよ。年齢的にな。

せめて成人するまで、つてなに言ってるんだ俺。

……5年前の東北で起きた強盗事件、か。

……まだふらつくわね。

遠藤さんたちに呼び出され、私を脅す為にお兄さんから借りてきたというM1911を奪い『私は平気』だというアピールをして、その場を切り抜けたはいいいけどトラウマをそう簡単に払拭できるはずもなく、人目のない校舎裏で発作を抑え込んだ。

小さいけれど確かな一歩。

あの日、三神さんは一晩ずっと私の手を握ってくれていた。私が眠りについて目が覚めるまで、だ。

皮が固くなってゴツゴツとした大きくて熱いくらいに暖かい手。

今日はこのあと三神さんの待ち合わせがあるんだから、これ以上の心配はかけたくない。

そう言えば、待ち合わせはしてたけど何処に向かえばいいんだろ？場所を聞かなかった私も悪いけど、言わなかったあの人も悪いと思う。

「朝田さん！校門にいる男の人！知り合い!？」

え？

さして仲も良くない女生徒の声にまさかと思う。

いくらなんでも学校まで迎えに来るはずがないし、そこまであの人が非常識だとは思えない。

そんな私の思いとは裏腹に校門の前にはサイドカー付きのハーレーが停まっかけて、それに腰掛けるように三神さんが立っていた。

「三神さん!？」

「お、悪いな朝田。待ち合わせ場所言うの忘れてたから迎えに来たぞ」

いやそう言うことじゃなくて、こんなところにいたら嫌でも目立つし、変な噂が流れちゃうじゃないですか！

文句を言う前にヘルメットを投げ渡され、サイドカーに乗るように促される。

連れてこられたのは銀座の喫茶店。

結構な値が張りそうな調度品で揃えられた店内に萎縮しながら、三神さんの後をついていく。案内された席に座っている先客に三神さんは手を上げながら声をかけた。

「よう和人。菊岡はまだ来てないのか？」

「ああ……後ろにいるのは？」

「こいつは桐ヶ谷和人でキリトだ。で和人、こっちはー」

「朝田詩乃。シノンよ変態」

「変態はもうやめてください」

止めるわけじゃないじゃない。人の下着姿を見といて、そう簡単に許されると思わないで。

「それで三神さんー」

「敬語はやめろ颯真でいい。アルトとシノン俺にそんな他人行儀は必要ねえだろ」

「そ、颯真……ここで何をやるの？」

「朝田にも関係あることだ。死銃絡みでな」

私は名字呼びなんだ……。

「やあ、待たせちやったかな？」

「遅<sup>おせ</sup>えぞ。人呼んどいて待たせんな」

どうしたんだろう？ 眼鏡をかけたスーツ姿の男性が現れてから二人とも棘のある雰  
囲気が変わってる。

「そう言わないで欲しい。取り調べの調書を整理してたんだ」

「そうかい。それで今回もアンタの奢りつてことでもいいんだよな？」

「そう言いながら結構高いの頼んでたよな」

いつの間に……。

エスプレッソを口に運ぶ様子はかなり様になっていて、すごく大人っぽい。

彼の一挙手一投足に注目してる私がいる。彼に飼われてるペットになった気分。  
……断じてそんな趣味は持ち合わせてないから。絶対に。

「ザザこと新川昌一とその弟の恭二は全面的に罪を認めてる。すべての始まりは、前B  
OB優勝者ゼクシードのAGI万能論によって恭二くんが大きく弱体化してしまい、G  
GOの接続料も払えなくなってしまうことだね。両親はダイブ型VRに否定的で恭  
二くんは黙ってGGOに潜っていたようだ」

ゼクシードによるA G I万能論。

情報戦略でゼクシードにとって有利になるように多くのプレイヤーたちを誘導した。称賛されることではないけれど、自分のプレイスタイルをそう簡単に変えてしまった方も悪いと思う。

新川くんはお兄さんに相談し、今回の殺人計画を画策したのだと言う。

お兄さんはS A Oで殺人ギルド【ラフィン・コブリン笑う棺桶】に所属していた。その事を話し、新川くんの目には英雄か何かに見えていたのだと言う。

「くだらねえ。人を殺せるのが本当の力？ 笑わせんな。覚悟も信念もねえ奴が自分テメエの快樂のために殺してただけだろうが」

「そうだ。罪を背負うことも罰を受けることもしないで自分の欲求に従っていただけだ。それは強さなんて言わない」

「それでリアルでの実行犯は二人。恭二さんとジョニー・ブラックこと金本敦。金本敦は自宅に突入したときにはもぬけの殻。無針注射器とサクシニルコリンを所持したまま逃亡中だ。近い内に逮捕されるだろう。G G Oでm e t hメスと名乗ったクラディール、本名倉本孝之は自宅で自殺しているのが見つかった。サクシニルコリンを自ら注射してね」

無針注射器とサクシニルコリン。この二つは新川兄弟の両親が病院を経営していて、

そこから盗んだらしい。電子錠を解錠できた理由も救急隊員が緊急時に使用するマスタークーキーだった。

住所は光学迷彩を手に入れた昌一が、B o Bの景品にモデルガンを選んだプレイヤーが総督府で住所を入力するのを盗み見して得ていた。

颯真曰く、『SAO時代からあった抜け穴だ。確かに真つ正面からなら認識阻害されるが鏡に写ったりすんのはその対象外だった』らしい。

望遠鏡とかで見えていたのかもしれない。

犠牲者を出したものの、この件は一応の決着がついた。そう菊岡さんは語った。

「新川昌一からの伝言だ。『まだ終わらない。終わらせない。あの人が必ずお前たちを殺す。It's show time』以上だ」

「ふん。誰かに共感すんのは悪いとは言わねえが、そいつをアテにしてる時点でお前の負けだ。そう奴に伝えとけ」

「誰が来ようと俺たちは負けない。お前たちがどんな卑劣な手を使っても必ず勝つ。そう付け足してくれ」

凄いなあ。SAOで何度も生死を共にして、何度もぶつかり合って繋がった絆は世界が敵になろうと二人で立ち向かうかもしれない。そう感じさせるほどにその繋がりは強固で揺るぎないものだ。



「了解した。……今回の会計も僕が持とう」

カード使えたかなあ？なんて眩きながら菊岡さんは席を立った。

……さすがに頼みすぎたかな？

「朝田、このあとも予定は空いてるか？」

「はい……ええ、大丈夫」

「それじゃ俺は先に向かつてるよ」

「朝田は朝田で頼んだもん食っちゃまえ」

……はい。

御徒町の一角にあるDダIイCシEシー CカAフFフEエの前にバイクを駐車して颯真は躊躇わずに中に入っていった。

……closeって書いてあったけど大丈夫なのかな？

「もう！遅い颯真！アツプルパイ二切れも食べちゃったじゃない！」

「知るか。自制できねえお前が悪いわりだろうが」

親しそうな女性の声に言い返す颯真。

……ふーん。

まあ別に？ 颯真が誰と親しかろうと私には関係ないけど。

「朝田、早く入ってこい」

促され中に入ってみれば私と同年代であろう少女が二人。このお店の人かな？ カウンターに立っている男性。颯真は変態と窓際の席で楽しそうに談笑してる。

「貴女がシノンさん？」

「え？ ええ、朝田詩乃よ」

「私は結城明日奈」

「私は篠崎里香。よろしくね」

「俺はこの店の店主、アンドリユー・ギルバート・ミルズだ。今じゃすっかり溜まり場になってるが昼は喫茶店、夜はバーになってる」

よろしく、と答え三人と握手を交わした。

颯真の仲間、なのかな？ 海外の人とも仲が良いなんてすごいグローバルというか。

「颯真、来たみたいだ」

「ん？ だな。俺が出るからそのまま待ってる」

誰が来たんだろう？

外に出た颯真に続いてお店の中に入ってーうそ……

「朝田は憶えてる、のか？ 5年前の強盗事件でお前が守った郵便局の女性ひとだ」

颯真の声も頭に入ってこない。

憶えてる。忘れるわけがない。あの日のことは今でも夢に見るんだから。

「詩乃さん……で合ってるかしら?」

「え? あ、はい」

「遅くなつてしまつてごめんなさい。どうしてもお礼を言いたかったのだけど、私妊娠していてあの日のあと病院にいたの」

「5年前の強盗事件で、当時そこで働いてた人間を探すのは苦勞したぞ。事情を話して遙々来てもらつたつて訳だ」  
はるばる

「しのおねえちゃん?」

左手を包む暖かさに視線を下げれば、小さな女の子が私を見上げていた。

「はいこれ」

手渡されたのは画用紙に描かれた家族の絵。

『しのおねえちゃんありがとう』

「おかあさんをまもつてくれて、ありがとう」

「うとうああああ……」

目が熱い。込み上げてくるのを我慢できない。

視界が滲み、口からは声にならない感情が漏れる。

血で汚れた私の手を握ってくれる人がいる。

暖かい。心だけじゃない。この世界はこんなにも明るくてこんなにも暖かい。

「しのおねえちゃん？どこかいたいの？」

「大丈夫、大丈夫だから……」

「胸を張れ。犯した罪はなくならねえが、誰かを守った事実もずっと残る。お前は奪っただけじゃねえ、産まれてくる命も守ったんだ」

## 幕間

## 弾丸よりなお速く

……アイツ、今日は用事があるとか言ってたわね。

アルトの協力のあつて《ヘカート》を手に入れてから暫く経ったある日。私はダイン率いるスコードロンに参加することになった。

参加すると言っても今回限りの契約だ。私は私一人の力で強くならなくちやならぬ。ソレはソレとしてコンビを組んでいる彼の強さも知り、その上で彼に勝つことができれば私はいー

……集中しなきゃ。私は氷、冷たい氷でできた機械。

『シノン、目標は見えたか？』

「ええ、情報よりも2人多い」

マントを着たプレイヤーが2人。

武器も持たないで最後列を歩き、前に行くプレイヤーも後ろを気にしていない。

『マントを着た大男ともう一人か、武装らしい武装は見えない。恐らくSTR極振りの運び屋だな。メンバーの弾薬とかドロップアイテムを運んでるんだらう。軽機関銃を持ってる奴が一人いる。そいつを狙ってくれ』

それでも不確定要素が多すぎる。

運び屋だとしても武装もさせずに最後列を歩かせてる。敵は前から来るとは限らないのに。

「……了解」

距離は一キロは優に越えてる。

でも私と《この子》なら問題ない。

軽機関銃を装備したプレイヤーに照準を定め引き金に指を掛ければ、着弾予測円が心臓の鼓動に合わせて拡大と収縮を繰り返す。

そして引き金を引き切った瞬間――

ツ！気付かれ――

銃口から放たれた対物弾は狙い通りにミニミを装備したプレイヤーを撃ち抜いた。仲間が消え、一時的な恐慌状態に陥った敵スコードロンをスコープに捉え続ける。

マントを着た大男じゃない方。フードで顔までは見えないけど引き金を引き切った

瞬間、確かにこちらを見ていた。

この感じ何処かでー

その時、大男が動いた。

マントを投げ捨て背負った鉄塊を腰だめに構える。

GE M134ミニガンーっ！

『アイツはベヒモスだ！』

『北部大陸を根城にしてる奴が何でここにいるんだよ！』

『知るか！護衛でも受けたんだろ！』

過重ペナルティを受け、移動スピードは非常に遅い。

が、それに余りあるだけの攻撃範囲と火力があり、味方はその攻撃範囲に敵を駆り立て、ベヒモスがそのミニガンで蜂の巣にする。

個人ではなく集団戦で真価を発揮するタイプね。

そしてもう1人。

スコードロン全員が戦闘中なのに動かない人物。

ジツとこちらを見ている。

『撃つていい』

そう言われているようでその瞬間、私の中の何かが一気に吹き出した。

「舐めるな！」

フードから僅かに覗いた口元に笑みが浮かんでいるのを認めると同時に引き金を引いた。

放たれた銃弾はマントを掠めるだけに終わり、それを合図に動いた。

「ベヒモス」

声を掛けたが元から寡黙な男は返事をする事もなく視線だけを俺に向けた。

「悪いがスナイパーアは俺の獲物だ。そしてー」

後ろ腰に移動させていた得物を左腰に移し、右手でそれを引き抜きつつベヒモス目掛け振り払った。

「お前たちもな」

両断されたベヒモスは消失し、突然の奇行に敵も味方も動きを止め俺を見ていた。

「【ミヌアアノ】！お前！裏切るのか！」

「裏切る？ー1度も仲間だとは言ってねえぞ」

裏切りは仲間に対して使う言葉だ。



護衛で雇われただけであって仲間じゃねえ。

てか「ミヌアーノ」とか、アンデス山脈に吹く冷たい南風が二つ名になってるのか小一時間、問い詰めたところだ。

それにアイツとのタイマンはあの日以来だし、なし崩しに共闘になったしな、誰にも邪魔はさせねえよ。

「あの太刀……」

血を吸ったように紅く、鏢元から切っ先に向かつて稲妻が走るソレは、銃メインのGでメインウエポンとして使っている物好きは1人しかいない。

敵味方区別なく切り裂き、銃弾を避け、弾き、戦場を駆けていく。

ベヒモスが倒れ、敵の武装は光学銃のみ。

それだけならばハッキリ言ってしまうば楽だ。

けど相手側ーいや、第三の単体勢力だけは常に注視しなきゃ駄目だ。アイツは銃を無効化し、あつという間に詰め寄せられ斬り捨てられる。

狙撃は駄目。気付かれ弾道予測線パレットラインが出てる今なら尚更。

かと言つて弾幕を張れる銃は持ち合わせてない。

廃ビルが視界に入り、頭の中でピースが浮かび上がった。

「ダメだ！勝てるわけがない！」

ダインの悲痛な叫びが響く。

こつちのスコードロンは完全に戦意を喪失している。

気持ちは分かる。こつちの攻撃は無効化され、一刀の元に斬り伏せられる。

理不尽に心が折れるのは仕方がないと言える。でも戦いもせず敗北を認めるのは納

得できるかと問われれば、答えはNOだ。

「男ならゲームの中でくらい、戦つて死ね！」

「へえ……」

戦意喪失で物陰に隠れたかと思えば、打つて変わつて別人のように果敢に撃つてくる。

何があつたのか、何がアイツらを突き動かしたのかは知らねえし興味もねえけど、歯応えがねえよりはマシだ。

四方からの銃撃を駆け回り、弾き、払い落としていく。勿論、全ての銃弾に対応するのは無理だ。

だからこそ直撃コースの銃弾を認識し、選別し、必要最低限の防御のみで銃弾の雨を最短距離で突き進んでいく。

「くそつたれえー！」

テンガロンハットを被った男が物陰から飛び出し、その手に持ったグレネードが起動してすることに気付く。

「相討ち覚悟の自爆か。感動的だな。だが無意味だ」

砂の上を滑るように進みつつ身を屈め、両足を斬り飛ばし、その背中を蹴り飛ばし跳躍。数瞬おいて起爆したグレネードの爆風を背に受けながら、一気に距離を稼ぐ。

寄って斬り、逃げる相手にも容赦なく刃を振るう。

まあこんなもんか。

目ぼしい敵は全て斬り捨て、戦意を喪失した奴は既に戦場から消え失せた。

さしてお膳立てはしたぞ。どこから狙ってくる？

目を閉じ、全神経を研ぎ澄ましていく。

アイツなら同じ場所からの狙撃なんてするわけがない。

スナイパーライフルの特性上、正面切つての突撃は不得手。

身を隠し俺を狙える場所に移動しているはず。

砂の丘陵の影、廃ビル、岩影 e t c ……

身を隠すには十分過ぎる。

視線を感じると言う言語化しにくい感覚を頼りに体の力を抜いていく。

と言うのも力が入っている状態より、脱力している状態からの方が体の反応が早いからだ。

チリチリと熱にも痛みにも似た感覚に上体を仰け反らせると同時に眼前を横切るように火線が通り過ぎた。

廃ビルか……撃ち下ろしには絶好のポジションだよな。

「……つたく、つくづく化け物じみた直感よね」

完全な視覚外からの狙撃を見もせず、自身の感覚を頼りに回避する。

流石に衝撃波で体勢を崩しているけど、それ以上の成果はない。

コツキングして葉莖を弾き出し、次弾を装填し直した時にはもう動き始めてる。

室内戦を想定してクレイモアとかを持ってきていけば良かったとも思うけど、アイツがそんな簡単な手に引つ掛かるとも思えない。

それに閉鎖空間じゃ遮蔽物が多すぎるし、点の射撃じゃ回避されるか斬り落とされるのが目に見えてる。面で撃てるショットガンでもあれば話は別なんだろうけど……。

引き金に掛けた指に力を込めーすぐに離す。

どうせ撃つても避けられるのは分かりきってる。

なら、少しでも勝機のある室内戦に持ち込んで意表を突くしかない。

そう思い《ヘカート》を背負って《グロック18C》を握る。

さつきまでの銃撃音が嘘のように静まり返り、耳が痛いほどの静寂の中、なるべく足音を殺して来た道に戻る。

もうアイツはこのビルの中に入ってきてるはず。

曲がり角では息を潜め、耳を澄まして異常がないのを確かめてから進む。

結局、スナイピングポイントから下の階へと降りるだけでも10分近く掛かってしまった。

右足に軽い手応えを感じ、慌てて視線を下げれば小石が音を立てて転がっていく。

しまった、と思った時にはもう遅い。自身の呼吸ですら耳障りなほど静まり返っている中、明らかに異質な音が響いていく。

急いでその場を去ろうとして突然床が抜けた。

違う。アイツが天井を斬ったんだ。

瓦礫と化した床と共に落ちながらそう確信する。

となると次の一手は――

「ッ！」

「つぶねッ！」

地面に叩き付けられながら《グロック18C》をチラリと見えた人影に向け引き金を引き絞る。

同時に紅い軌跡が煌めき、私の手から《グロック18C》を弾き飛ばした。

立ち上がりながら《ヘカート》を喉元へ突き付けるのと切っ先が眼前に突き付けられるのは全くの同時だった。

「アンタの《ムラサマ》と私の《ヘカート》、どっちが上か確かめてみる？」

「馬鹿言え、この距離じゃどっちが上にせよ俺の方が速え」

私の相棒たる憎たらしいアイツは<sup>アルト</sup>皮肉げに笑みを溢すのだった。

## 氷解

「やべえ……着る服がねえ……」

死銃事件が一段落し、ようやく一息をつけるかと思いきや新たな問題が発生した。

ファッションとかそんな興味もねえから服はあまり買わねえんだが、去年……まではS A Oに居たから3年前になるのか、ソレまで着ていた冬服を整理していたら虫食いやサイズが合わねえやらで、着れる物がなくなった。

本格的に冷えてくるまでは大丈夫だろ、などと考えてたんだが物臭ものくさが祟つたな。

買いに行かねえといけねえんだが、服選びのセンスはお世辞にも良いとは言えない。しかもダセエ服を着てれば和人たちに何を言われるか分かつたもんじゃねえ。

さて、どうしたもんかな。

「そこで私に白羽の矢が立ったのね」

「人間きの悪いこと言うんじやねえ」

白羽の矢が立つというのは人身御供<sup>ひとみごくう</sup>、神に捧げられる生け贄に選ばれた人間の家に立てられた矢を指す。

つまり犠牲者として選ばれる、というわけだ。

「冗談よ。貴方にはお世話になってるし、日頃のお礼つてことでお付き合ひさせてもらうわ」

「よろしく頼む」

学校帰りの朝田をバイクに乗せ都内の服屋へ。

「ブティックを服屋つて呼ぶ時点で貴方が如何に興味がないが分かった気がするわ」

「さっさと選んでくれ」

「はいはい。颯真は身長が高めだから、よほど変な服じゃない限りは合いそうかな。なら無難にジーンズとロングTシャツ、アウターかジャケットを合わせれば……好みの色は？」

「派手な色は趣味じゃねえ」

「寒色系か……すみませーん」

手慣れてんなあ。流石、現役女子高生。

……ん？ちよつと待て、俺と朝田は他の奴らからどう見られてんだ？



制服姿の女子高生に服を選ばせてる成人男性。

「事案だな。いや兄弟とか親戚で押し通せばー」

「お待たせ……どうしたの？変な顔して」

「なんでもない」

「？まあいいわ。とりあえずこれ試着してみて、私は他の服を見てくるから」

「あいよ」

手渡された数着の衣服を手に試着室へ、そこで着替えてみたはいいがー

「あいつ、なんで俺のサイズ知ってるの？」

好んで着る大きめのロンT、ジーンズのウエストサイズまで全てがピッタリ。逆に怖えんだけど。

「取り敢えず着てみたぞ」

「んー……やっぱ青は合わないわね。上下単色で揃えるのもNGだし……うん、新しいの持つてくるから着替え直しておいて」

「おー」

紺のジーンズにカーキ色のショートブーツ、灰色のシャツに黒のダウンジャケット、他数点を購入した。

それで買い物物の札にファミレスで晩飯を奢ってるわけだがー

「颯真は食べないの?」

「甘いのは苦手だ。見てるだけでも胸焼けしそうだ」

アルゴほどじゃねえがテーブルに置かれた器の数に水を飲んで、甘くなった口の中を洗い流す。

デザートを食ってねえから錯覚な訳なんだが、あの山のように積まれた器の数を思い出しただけでも本当に胸焼けしそうだ。

「……ねえ、これってデザートよね」

「ぶふっ」

水を吹き出すなんて愚行は起こさなかったが、気管に入った水を取り除くのに噎せてしまった。

いきなり何言い出すんだこいつは!

「貴方の服を買って、今こうして食事をしてる。立派なデザートだと思うんだけど?」

「仮にそうだとしても口に出すんじゃないやねえ」

「あ、もしかして援kー」

「それ以上はいけない。つか女子がそんなこと言うんじゃないやねえ」

本場に捕まる。

「大丈夫よ。制服なのはあなたも一緒だし、違う学校の生徒同士が逢い引きしてるぐら

いにしにかー」

「結局はデートじゃねえか」

「いいじゃない。私だって年頃の女の子なんだから、そういうことに興味はあるのよ」

「GGOで灰色の青春を送ってる奴が言う台詞じゃねえな」

「あら？その片棒を担がせたのはどこの誰だったかしら？」

「少なくとも数ヶ月前からだな」

つか、先にプレイしてんのはお前だかんな。

「……ALO、だったかしら？楽しいの？」

「まあな。馬鹿やれる仲間もいるしな」

「ダイシーカフェにいた人たち？」

「SAOからの腐れ縁だ」

颯真はなんでもなさそうに口にするけど、SAO事件は今でも大きな爪痕を残している。

もし、彼がSAOで亡くなっていたら私はどうなっていたんだろう。きっと今でも突けば崩れるような強さを求めてGGOに潜っていたかもしれない。もしかしたら死銃に撃たれて新川くんに殺されていたかもしれない。

人生何事にも意味がある。

きっと颯真とあのいけ好かない黒ずくめの女顔と出会えたのも何か意味があるのかもしれない。

命を救われ、強さの意味を糺された。

うん。十分に意味があつた。

そして私は貴方に惹かれてる。

素っ気ないのに気が付けば側において、口が悪いのに行動は真逆。お人好しなのに指摘すれば否定する。

本当に面倒臭いにもほどがある。

だけど、そんな貴方だから私は惹かれた。

他でもない貴方に。

朝田詩<sup>私</sup>乃は三神颯<sup>貴</sup>真<sup>方</sup>を好きになってもいいですか？

## 聖夜の過ごし方

「くあ……」

「大きい欠伸ね」

「仕方ねえだろ。朝までぶっ通しでキリトと戦ってたんだからよ」

「仕方なくないわよ。今日学校でしょ？」

「高校でやる範囲は全部頭に入ってる」

「それとこれは別。しっかり寝なさい」

「お前は俺のお袋か」

「それも良いわね。ずっとあなたを見てられるし」

「冗談だから真に受けるな」

……完全に墓穴掘ったな。

死銃事件  
あの事件後、朝田の距離が近い。

物理的に。

「朝食は軽めの物にするから、シャワーでも浴びてスッキリしたら？」

「そうする」

つつても男のシャワーなんざ30分もあれば余裕で終わる。目を覚ます為に一度冷水を浴び、それから全身を洗えば終了。

「きやつ！」

「ん？」

「ふ、服を着て！」

「ズボンはー」

「上もよ！」

「今取りに行くんだよ」

「浴びる前に持っていきなさいよ！」

別に見られて減るもんでもねえんだけどな。

それに間取りはお前の部屋と変わらねえんだから、着替えを取りに部屋に行くはキツチンを通らねえといけないのは知ってんだろ。

「着たぞ」

「……まったく」

「別に全裸でもねえんだから、そんな目くじら立てんなよ」

「そういう問題じゃない！」

「んだってんだよ……」

まるで拗ねた子供のような口調でお味噌汁に口を付ける颯真。

妙なところで常識がずれてるといふか、配慮が足りないというか、まあデリカシーがないのは前から知っているけれど異性の半裸を見たら誰だって声を荒らげると思う。

それも意中の相手なら尚更だ。

それにしても、と思う。

幼い頃に見た父と違い、筋骨隆々とまではいかなくとも十分に鍛えられ引き締ま  
てー

「鼻の下伸びてんぞ」

「つつ!?!」

そんなことはないと思いつつ、さつきまで考えていた事が事だけに意識せず口元を抑えてしまう。

「ククク……」

「だ、騙したわね!」

「騙したなんて人聞きの悪い。カマ掛けただけだ」

ほつつんとうに口の減らない……!!

「ああそうだ。明日、予定空けとけよ」

「へ? あ、明日?」

今日は12月23日。明日は――

クリスマススイブだ。

そわそわと落ち着かない。

授業も頭に入ってこない。

颯真があんなこと言うから。

GGOなんて灰色なゲームをやってはいるけれど、女を捨てた訳じゃない。

恋バナだつて好きだし、恋愛にも興味はある。

というよりも今まさに恋をして――



そこまで考えて頭を振る。

BOBでは勢い余ってあんなことをしてしまったけれど、この想いを伝えてはいないし、この颯真との距離感を楽しんでいたいと思っっている自分がいる。

答えがYESでもNOでも、きつとこの距離感が変わってしまうから。

「朝田さん、少し変わったよね」

「え？」

「うんうん。意中の相手でもいるのかなあ？」

「え、いや、私はー」

クラスメイトの言葉に狼狽えながら否と返そうと試みたものの思い出すのは朝に見たシャワー上がりの颯真の姿。

一瞬で顔が茹で上がり、その反応をクラスメイトたちが見逃すはずもなく。

「あ！もしかして先週校門前にいた人？」

「え？あのバイクの人？」

「ねえねえ！片思い？それともー」

恋バナに飢えたクラスメイトたちに質問攻めに遭うのは想像に難くない。

颯真のばか。

「シノのん疲れてる？」

「え？え、ええ。学校で少し、ね」

「もしかしくなくてもアルト絡みでしょ？デートにでも誘われた？」

「う……」

放課後、早々に帰宅し逃げるようにALOへとダイブしたのだけどリアルでの疲れが顔に出ていたのかもしれない。リズにズバリ言い当てられ押し黙る事しかできなかった。

「え？本当に？」

「デート、とは言われなかったけど明日予定空けておいてくれて」

「あの戦闘馬鹿でデリカシーの欠片もないバーサーカーが？」

「リズ？……アルトくんは回りくどいのは好きじゃないから、ストレートに言ってくれるのは助かるけど明日はイブだし好きな相手からそう言われたら意識するなっていう方が無理だよな」

「でもまあ期待はしない方がいいんじゃない？相手はあのアルトでしょ？大方、バトル

に付き合わされるわよ」

確かに誰かのご機嫌取りなんて軟派な姿は想像できない。

「シノのんはクリスマスになにかあげるの？」

「一応用意はしてるけど」

「甲斐甲斐しいわねえ。あのバーサーカーには勿体ないわ」

「アスナとリズはキリトになにか渡すの？」

「あの唐変木に？用意してるけどここALLOで使えるアイテムよ。リアルじゃアスナが独占するだろうし、邪魔しちゃ悪いしね」

「もうリズったら……でも珍しいよね？アルトくんが内容を伝えないで予定を空けといて、だなんて」

「肝心なことと言わないで、さっさと行動するタイプだからねえ。アルトと付き合うなら置いていかれないように追い掛ける覚悟が必要だわ」

追い掛ける覚悟……。

彼の背中を支えられるように強くなると決めただけど、本当にそんな日が来るんだろうか？

我が強くてデリカシーがなくて、ぶつきらぼうだけど自分の認めた相手には甘い。そんな彼を。

「来たな。ほら乗れ」

約束した時間の少し前に部屋の外に出てみれば、バイクのエンジンに火を入れている彼にヘルメットを投げ渡された。

A L Oで女子会をしたあと眠れないまま朝を迎えてしまった。

「眠れなかったのか？」

「目が冴えちゃってね」

「遠足前の小学生かよ」

「うるさい」

せめてもの抵抗と彼の脛を蹴ってみるけど、少しも堪えた様子はなく喉を鳴らして笑ってる。

「てつきりA L Oで戦うのに付き合わされるかと思ってたわ」

「分別は付けるさ。今日はイブだしな」

『記念日を祝うなんてキャラじゃねえが』そう付け加えてさっさとヘルメットを被ってしまう。

それってやっぱリー

「惚けてないでさっさと乗れ」

「予約した三神だ」

「三神様ですね。お席へご案内します」

連れてこられたのは高級そうなレストラン。

ドレスコードはないものの、店内を見渡して見ても裕福そうな人たちがいない。

「あんまキョロキョロすんな。格式張ってはねえが、最低限のマナーはある」

「ご、ごめんなさい」

案内された席へ座り、颯真が手慣れた様子で次々と注文していく。

「ここに来たことあるの？」

「両親とな。ここのおーナーと顔見知りなんだ。伝手はあつて困るようなもんじゃねえ

し、なにかと融通も利くからな」

「ご来店ありがとうございます。三神様」

「お久しぶりです。おーナー」

テーブルに來たのは老年の男性。

「あの日以来ですね。またお越し頂き、重ねてありがとうございます」

「あの日は突然のキャンセル申し訳ありません」

「いえ、わたくしもお通夜に顔を出せず申し訳ありませんでした」

「……？あの日？お通夜？」

「そういえば颯真のご両親って……」

「ええつと……」

「ああ悪い。オーナー、今日は世話になったこいつに礼を含めて食事をしよう」と

「成る程。畏まりました。ごゆっくり当店のお食事をお楽しみください」

オーナーの背中を見送り、向き直った颯真は気恥ずかしそうに視線を逸らす。

「まあ聞いた通りだ。GGOで死銃を捕まえることができたのは、お前の尽力があったお陰だ。その礼……ってのもおかしな話だが、それ以外でも世話になったからな。全部含めての礼ってことで」

「……………」

「自慢じゃねえけど、この手のことは自信もねえから俺の知る限りで一番良い店で食事でも」と

「……………」

「礼を以て礼を尽くすつてな。恩はきっちり返しておかねえと俺の気も済まねえ」  
「……………」

「……………いい加減、なんか言えよ」

「え？あ、ごめんなさい……………なんだか、ね」

「柄にもねえつて？」

「そういうことじゃなくて、颯真は言葉は悪いけどこういったことに興味が無さそうに見えるから」

「朝田がどういう目で俺を見てんのか何となく分かった」

「いつか言った言葉に小さく吹き出してしまう。」

「口に合えば良いけどな」

「颯真が言う立場じゃないでしょ？」

「……………」

運ばれてきた料理に颯真が軽口を叩き、私が素早く切り返す。  
料理はとても美味しかった。

「颯真これ」

「ん?」

「開けてみて」

食事を終え、オナーに挨拶を済ませ、いざ帰ろうとバイクに跨がる颯真へ紺色の包装紙でラッピングされた小包を渡す。

訝しげながら包装紙を破らないよう開け、中身を取り出して見れば灰色のマフラーが顔を出した。

「メリークリスマス、颯真」

「別に物を貰うようなことはしてねえんだけどな」

「あなたが私にお世話になったように私もあなたに救われたのよ。未長く宜しくね颯真」



## アインクラッド回想編

## Prologue (プロローグ)

朝田が守った人との再会から数日経ったある日、いつものようにエギルの店で屯たむろして、アパートの自室の鍵を開けようと思ったんだが――

「鍵が開いてる?」

スマホを電子錠に翳かざせば鍵が開くようになってるが、許可設定をしているスマホでなければ開かない。勿論、許可してるのは数人しかいねえ。

となると鍵を開けたのは限られる。

「兄ちゃんお帰り〜」

「木綿季!?!お前!?!」

鍵を開けた犯人はリビングでゴロゴロしてる親戚の紺野木綿季。

冬休みに入るのは連絡アプリで教えてられてたが、まさか冬休み当日に来るなんざ分かるわけねえ。

とうか、時間帯を考えれば――

「お前まさか――」

「泊めて?」

思わず頭を抱えてしまった。

冷蔵庫に残ってた食材で簡単な食事を済ませ、家族会議ならぬ親戚会議。

「ここまでどうやって来た?」

「貯めてたお小遣い使って電車を乗り継いだ!」

笑顔で言うな。Vサインをやめろ。

つーことは突っぱねるのは出来ねえな。ここまで来たとなると貯めてた小遣いも殆んど使っちゃまっただろうし、泊めるしかねえのかなあ。

「兄ちゃんもゲームするんだね」

「まあなALLOとGGO、行ったり来たりだがな。ってなんでベッドの下を見てんだ」

「え? 姉ちゃんが言ってたよ? 男の人はここに宝物を隠すって」

宝物つっても男にとつてのもんだろうが、藍子の奴も適当なこと教えやがって。

藍子つてのは木綿季の双子の姉。

二人とも体が弱くてちよつと体が冷えれば風邪をひくし、毎年インフルエンザに罹る。

だから学校を休みがちだし、休んでる間はアミユスファイアでダイブしてんだっけ?

「じゃん！ボクもアミュスファイア持ってきてるから一緒にやる！」  
テンション高たえなおい。

この時間ならあいつらもまだいるだろうし、ついでに紹介しとくか。  
「分かった」

1台のパソコンで2台のアミュスファイアを接続できんのか？結構高えやつを買ったから処理速度は問題はねえと思うが……。

「潜つたら世界樹のところに集合だよ！」

「はいはい、分かった分かった」

はしゃぐ木綿季を宥なだめながら予備で買った布団を敷いて横になる。

ベッドは木綿季が既に寝そべってるが……まあ1日位なら我慢できんだろ。

「あ、ボク30日まで泊まるから」

「はあ!？」

「リンクスタート！」

ちよつと待て。30までつてなると一週間あるぞ。

金はGGOで稼いでつから問題ねえけど、年頃の女子が親戚とはいえ男の部屋に寝泊まりすんな。

ALLOにダイブし世界樹を目指し羽を震わせる。

新生ALLOでは飛行制限がなくなり、どこまでも自由に飛び回れるようになった。つっても生まれ変わる前のALLOじや意識が奪われてたし、気が付けば訳の分からねえ場所にいたからほとんど知らねえけど。

木綿季にアバターの名前を聞くの忘れたな。アイツからも俺は分からねえだろうし、どうすんだ？

世界樹の下にある《アルン》に着いて早速途方に暮れた。

「あれ？アルトくん？」

「ん？ああアスナか……旦那はどうした？」

「キリトくんならお風呂に入ってくるって言ってたから、戻ってくるまでまだ時間がかかるかな」

旦那は否定しないのな。

バカツプルもここまですればいつそ清々しいな。

「アルトくんは【絶剣】の噂、聞いたことある？」

「ランナーとかが背中に張るやつか？」

「それはゼッケン。噂の方は絶対無敵の剣って書いて【絶剣】」

絶対無敵、ねえ……。

「その人が言った訳じやなくて、デュエルを見ていた人たちが付けた呼び名だからそこまで気にしなくても……。」

……顔に出てたか。強えヤツの話の話を聞くとつい、な。

「それで？その【絶剣】とやらはどこにいった？」

「不定期で辻デュエルしてて場所もバラバラだから、特定の場所にはいないみたい。」

「辻デュエル？」

「うん。デュエルで勝つことができれば景品として片手剣汎用オリジナルソードスキルOriginal Sword Skillが貰えるんだって。それも驚異の1ー1連撃！」

凄えな、そりや。

前回のアップデートで追加されたOSS。これはプレイヤー自身が攻撃パターンを入力することで、自分だけのSSを編み出せるのだがこれがまた難しい。

OSSの連撃数が増えればそれに比例して火力も高くなるが、アスナでさえ5連撃が限界だつてのにそれを超える1ー1連撃か。

そこまで繋げられるって並大抵の努力じゃねえな。

「……なんか周りが騒がしくねえか？」

「本当だ。何かあったのかな？」

人波が向かってるのは世界樹前の広場か？

人の流れに従って足を運べば、人だかりが輪を描いて広がってる。

「なあなんかあったのか？」

「辻デュエルだよ。【絶剣】のな」

へえ。噂をすればなんとやらか。プレイヤーネームは《Y u k i》、ユウキって読むのか？

木綿季？まさかな。

「ボクの勝ちだね！次の挑戦者はいるかな？」

「俺が行こう」

「アルトくん？」

【絶剣】ってのがどれ程のもんか確かめさせてもらおうじゃねえか。

「次の相手はお兄さんかな？」

「そうだ。その前にお前は木綿季か？」

ニユ<sup>飛</sup>ア<sup>音</sup>ンスの違いだが本人なら分かんדר。

「もしかして兄ちゃん？」

マジか。【絶剣】が木綿季かよ。世間は狭<sup>せめ</sup>えな。

後ろ腰に差した鉤短剣を引き抜く。

どんなときも全力で挑むのが俺の流儀だが、手始めはこいつだ。

「兄ちゃん、背中 of 剣は抜かないの?」

「はは、抜かせてみな」

そう答えてやれば、ムスツとした顔に変わる。

デュエル承諾のボタンをタップし、カウントダウンが始まった。

知り合いのかな?

アルトくと「**【絶剣】**」と呼ばれてる女の子は親しげに話していたみたいだけど。

「アスナ、どうしたの?」

「シノンさん。アルトくんの病気が……」

ああ……、という顔をするシノンさん。

本人が聞けば病気扱いすんなって怒りそうだけど、病気で伝わるようになったのはアルトくんが悪いと思う。

キリトくと顔を会わせれば戦う。強い人の噂を聞けば飛んでいく。戦ってる間も

ずっと笑ってる。

私はよくバーサークヒーラーなんて呼ばれるけど、アルトくんの方が狂戦士バーサーカーだと思  
う。

「凄いわね、あれ」

上下左右、そして突き。

苛烈なまでの攻めを短剣だけで捌き続けてる。

未来が見えていると言われても納得できるほど、その立ち振舞いには余裕がある。

「ねえ戦ってる女の子、アルトの知り合い？」

「……ふーん？」

「ちよっ!?ち、違うから!私はー」

「大丈夫。ちゃんと分かっているから」

「分かっている!!」

分かっている、分かっているから。

好きな男の子が知らない女の子と親しそうだったら気になるよね。



へえ、結構やるな。

目まぐるしく動き回るユウキ。

その反応速度はキリトと同等か一步劣るほど。

2年もの間、SAOで培ったキリトの反応速度に引けを取らねえとなると天賦の才か。末恐ろしいな。

突きを軌道を逸らすのが、僅か一步で体勢を立て直し振り返りながら横風ぎ。躊躇いなく首を狙った剣を短剣で阻む。

「兄ちゃん！そろそろ本気、出したくなってきたんじゃない？」

「ハッ！バカ言え！言ったら、抜かせてみるってな！」

「む。それじゃ……本気で行くよ！」

ユウキの剣がSS特有の光を纏う。

噂の11連撃か！

燐光が弾け、光の奔流が迸る。

ボクの切り札、OSS《マザーズロザリオ》。

捉えた手応えはあったけど、仕留めきれてない。

砂煙に隠れた兄ちゃんを警戒して剣は構えたまま。

「ええ〜……」

砂煙が晴れ、大剣と短剣を逆手に交差させて構えた兄ちゃんの姿。ほぼ無傷、自信無くすなあ。

「やるじゃねえかユウキ。抜くつもりは毛頭なかったが、抜いちまった以上俺も本気でいくぞ」

「あ、あはは……お手柔らかに」

目がギラついてる！怖い！

地面を滑るように距離を詰めて突き。

間一髪で避けられたけど、そこからはまるで狼を思わせるような乱舞。

攻めに回れない。リーチが違う武器を両手に巧みに操り、守りを短剣で攻めに大剣を振るう。

むう〜、兄ちゃん強すぎ！つてマズ！

振り上げた短剣の一撃でボクの手から剣が弾き飛ばされた。そして、振り上げた大剣を両手でー

思わず目をつぶっちゃったけど、どれだけ経っても剣で斬られる衝撃が来ない。恐る

恐る目を開ければ、ボクの目の前で大剣が止まっていた。

「流石に遊びすぎたか」

「え？」

目の前に表示されたデュエルのリザルトウインドにはドロローの文字。……引き分け？

あー楽しかった。

ユウキのやつ結構やるな。まあ、キリトって前例のお陰で直列思考型との戦いには慣れてたからな。

「それで君とアルトはどんな関係なんだ？」

「兄ちゃんです！」

「え？お兄さんなの？」

「親戚んとこの双子の妹だ。別に俺が呼ばせてる訳じゃねえからな」

キリトとアスナが金を出し合って買ったログハウスの<sup>家</sup>で、今日残ってたキリトとアスナそしてシノンと俺にユウキが集まった。

……とところでシノンの視線が痛いんだが。

「シノンどうかしたか？」

「別に」

際ですか。取り付く島もねえな。

そつぽ向いたよ。その癖、猫妖ケットシ精特有の頭にある耳が動いてるし。

「そう言えば、ここにいる人でシノンさん以外はS A Oで知り合っただよだね？」

「そうだな。キリトと最初に会ったのは《ホルンカ》だったか《バラライカ》だったか言う村だったよな」

「バラライカはロシアの楽器よ。銃の名前にもあるけど取り合えずそれはいいわ。私も興味があるし、よかつたら聞かせてほしいわね」

「別にいいが、今日は遅おそえから明日ダイシーカフェに集合だ」

「了解！それじゃボクは先に落ちるね」

本当、無邪気だよな。

裏表もねえし、いつでも全力だから嫌味も感じねえ。ただ人懐っこいが危機感が足りねえけど。

「ユウキはアルトが迎えに行くのか？」

「いや、アイツは俺の部屋に泊まる。30までな」

「えっ！」

どうしたシノン。いきなり変な声出して。

「あの子、颯アーアルトの部屋に泊まるの？」

「まあな。俺の部屋に来るまでに小遣いも殆んど使っちゃまっただろうし、突っぱねるのもどうかと思つてな」

「ふーん……」

またそっぽ向いたよ。耳も動いてるし。

興味あるのか、ねえのかどっちだ。

「ふーん」

おいバカツプル。ニヤニヤしてんじやねえ。

あれから一夜明け、木綿季をサイドカーに乗せてダイシーカフェに向かう。

結局シノンの機嫌は直らねえし、あのバカ<sup>キリトとアスナ</sup>ツプルは生暖けえ目で見てくるし、散々だったな。

「今日は里香も珪子も来てんのか」

「颯真さんお久しぶりです」

「なによ、いちや悪いわけ？」

悪い訳じゃねえがー

「初めまして！紺野木綿季です！よろしく！」

自己紹介はいいが、タイミングを考えろ。

見ろ。全員、呆気に取られてるぞ。

「遼太郎は？」

「休みが明日からだそうだ。本当は来たがってたがな」

取り敢えず、全員の自己紹介も終わったし本題だ。

「木綿季が聞きてえのはSAOでのことだろ？」

「うん！」

あまり良いことばかりじゃねえんだけどな。

まずはどこから話すか。

## 第1刀：剣の世界

まずは……そうだなキリトと俺が初めて会った日からするか。あれはSAOのデスゲームが始まって2日も経ってない位だったか。

切っ掛けは俺が《リトル・ペネント》っつー名前の食人植物の実を割っちゃったことだった。偶々《森の秘薬》とか言うクエストを受けてたキリトが近くにいたことが幸いした。

### 第一層 ホルンカの森

「ハハハハッ！なんだあれ！気持ち悪い！」

「笑ってないで足を動かせ！」

笑っちゃもうもんは仕方ねえだろ。

考えても見ろ、食人植物が群れをなしてこつちに向かってんだぞ。ざっと数えても10は越えてる。

はつきり言つて気色悪い！

「つーか誰だお前！」

「今はそれどころじゃないだろ！」

「ごもつとも。」

「モンスターは村には入らない！このまま走れば《ホルンカ》まであと2分で着く！」

「MPKにならねえよな!？」

MPK。

モンスタープレイヤーキルの略で、アクティブ状態のモンスターを他のプレイヤーに押し付けることでキルする事。

M M O R P G じゃ一番嫌われる行為だ。

「大丈夫だ！殆んどのプレイヤーはまだ《はじまりの街》から出てきてない！」

なら大丈夫か。

巻き込まれちまつたらご愁傷さまだ。

「よう、まだ生きてるか？」

「……なんとかな」

なんとか《ホルンカ》に入り九死に一生を得た。



村に入るときのヘッドスライディングは是非とも見てもらいたかったが、残念ながらNPCしかいねえ。

「何はともあれ恩人、になるのか？アルトだ」

「逃げた先が一緒だっただけだよ。キリトだ」

「キリトは何であの森にいたんだ？クエストか何かか？」

「《森の秘薬》ってクエストのクリア報酬が一層じや最強クラスの片手剣、《アニール・ブレード》なんだ。アルトは……両手剣使ってるのか？」

焼<sup>ア</sup>きなまし<sup>ニール</sup>、ね。

正確にはアニール処理って言って、加工した金属が歪まないようにする熱処理のことだ。

「まあな。チマチマ攻撃するのも性に合わねえし、槌とか斧も肌に合わねえからな」

それに剣の世界なんだ、剣の方がいいだろ。

「お前ボツチか？」

「初対面の人間に言うことか、それ！」

「悪いな。本音を隠せねえ質<sup>たち</sup>なんだ。丁度俺も一人だからお前、俺と組め。損はさせねえよ」

それから1ヶ月経ち、ようやく第一層攻略会議が開かれることを耳にした俺たちは

《トールバーナ》へと赴いた。

色々あつた。

金の使い道や戦い方、夜を明かす宿屋の選び方でも意見がぶつかった。

《トールバーナ》の広場でプレイヤーが集まり、ステージの上には軽鎧けいがいに身を包んだ男性がいる。

多分、今回の攻略会議を開いた中心人物だろう。

気に食わないアイトアイトは街を見てくると言ってから姿が見えない。ボスに挑むからと逃げ出した訳じゃないのは短い付き合いでも分かる。

逆に敵が強いほど燃えるタイプだ。

「はい！それじゃ始めたいと思います！俺の名前はディアベル。気持ち的にナイトやってます！」

ディアベルの声に意識を戻す。

結局アイト戻って来なかつたな。どこで何をしてるんだか。

「つい先日、俺たちのパーティーは迷宮区でボス部屋と思われる扉を発見した。情報屋

の話ではボスの名前は《イルフアング・ザ・コボルドロード》。武器は斧と盾。HPバーは4本あり、1本無くなる毎に《ルインコボルド・センチネル》をPOPさせる。最後のHPバーがレッドゾーンに入ると使っていた斧と盾を捨てて湾刀、《タルワール》に持ち換える。攻撃力は上がるみたいだけど、逆に防御力が下がる」

βテストと変わらない。油断さえなければ必ず倒せる。

「意味的には『牙獣の王』と『廃れた獣の衛士』ってところか？ 廃れた獣ってなんだよって話だけど……いや、『遺跡の獣衛士』か」

「アルト、今までどこに……っつて」

アルトの声に後ろを振り返れば、オブジェクト化した食べ物や両手に頼張っていた。

「お前いくら使った」

「10k位？」<sup>万</sup>

「武器強化に使う金だつて言ってただろ！」

何してるんだこいつ！

ここに来る前に手にいれた《バスタードソード<sup>両手</sup>ソード<sup>剣</sup>》の強化に使うって自分で言ってたよな！

「まあいいじゃねえか。お前だつてやってみたいと思つたことねえか？ メニュー見てここからここまで下さいってやつ」

「それは……………まああるけど」

こいつ、人が否定し切れないことを……………!

「ちよお待ってんか! ワイはキバオウつちゅーもんやここにいる全員に言いたいことがある!」

キバオウ曰く「今日までに死んだ二千人の多くは他のMMOではベテランだった者達だから、彼らが死んでいったのは無責任にも《はじまりの街》から出奔して、いの一番にリソース稼いだβテスターの所為だ。でなければ今日この場にもつと多くの人間がいたはずなのだから、βテスターは死んだ二千人と自分たちに謝罪、賠償しろ」だそう  
だ。

それにデカイ黒人のプレイヤーが《ガイドブック》を話に挙げて「情報に関しては少なくともβテスターが提供したモノがあつた筈だ」と反論、責任を追及すべきじゃないとした。言い返す言葉が見つからないのか悔しげに黙り込んでしまう。

……………なんとか、凌げたか?

と思つた俺の考えに反してアルトの声が溢れた。

「……………アホくさ」

「あ、アホやと!?! 誰や、今アホ言うたんは!」

思いの外零した言葉が大きかったのか、それとも話が終わりそうなタイミングだった

所為か耳に届いたらしい。誰だ誰だと怒鳴るキバオウに、横に座ったアルトにどうするんだと意味を込め肘で突いく。

肩を竦めたアルトにあとは任せよう。

……飛び火しませんように！

「俺が言つたんだよ。サボテン」

「さ、サボテン!? サボテン言うたか!？」

「悪いな、名前覚える気なくてよ」

「ワイにはキバオウっちゅうイカした名前があんのや、覚えとき！ って、名前なんてどうでもええねん！アホっちゅうのはどういいう事や！ 何がアホや言うねん！黙つたらんでさっさと——」

「単に本音が出ただけだ」

「だからそれが何なのか聞いとるんじゃボケ！」

また怒鳴りだすキバオウ。

頼むからそれ以上、ヒートアップさせないでくれ。

「テメエはなんでここにいんだよ」

「は？」

「何が言いたいのかわからねえってか？ テメエはさつき言つたよな。β テスターがさつ

さと《はじまりの街》から出ずに、ビギナー共にレクチャーしてたら二千人も死ななかつたって。だったらなんでテメエが代わりに、ビギナー共が集まつてる《はじまりの街》でレクチャーしねえで、この攻略会議に参加してんだよ」

「そ、そんなん……そんなん……そんなん言うたら、おのれかてそうやないか！ それにワイはテスターやあらへんのや！ それを歯ア喰いしばってここまで来たのに文句あるつちゆうんか！」

「確かにその通りだ。俺も他のヤツらを見捨ててココにいる。だがココにいる連中全員にも言えんだろ。テメエも含めて、ココにいる連中は全員、ビギナー共より自分のことを優先した自己中しかいねえんだ。《はじまりの街》に残ってる奴らならともかく、今ここにいる連中にβテスターのことをとやかく言う資格なんぞ欠片もねえ。死んでいった二千人の中にβテスターがいた可能性も全く考慮してねえ。そんなことも判らねえで自己満足の正義感振りかざしやがった上に謝罪だのなんだの言つてつからアホくせえつつつたんだ。謝罪しろつてだけならまだしも、この場にいる奴に賠償しろとか結局はテメエがリソースを欲しがってるいい証拠だろうが」

一気に畳み掛けられると、顔色を赤くしたり青くしたり白くしたりと忙しく変えていくキバオウ。だが意外にもまだ何か言うだけの気力が残っているらしい。

「お……おのれもβテスターなんやろ！ せやから自分の責任逃れの為にそんな小難し

い言葉並べ立てて正当化して、ワイらのことまで巻き込んだんや！　そうに決まつとる！　おのれらみたいなきず共がいる所為でワイらテスターとちやう人間がバカ見て——」

「テメエ馬鹿か？　いや馬鹿だな」

「——は？」

「全員が全員本当に平等だとも思ってたのか？　MMORPGつてのはリソースの奪い合い。今時の小学生だって速いもん勝ちつてのは知ってるぞ。平等つてのは自らの長所を見つけられねえバカ共の戯れ言なんだよ。理解できたか？　ああ!!」

何とも言えない空気が広場を満たしてどれくらい経つただろうか、突如手を鳴らす音が響いた。音源を辿れば、胸の前で手を重ね合せた姿のディアベル。手を叩いたのはアイツみただいな。

「やめようぜ皆！　ここでお互い疑心暗鬼になつたらボス攻略もままならない。俺も何度も死にかけながらここまでたどり着いた身だ。キバオウさんの言いたいことも判る。けど、さつきエギルさんが言った通り、今は前を見るべきだ。ここでβテスターに責任を迫及したせいで戦力を欠いちや元も子もない。そうだろ!?　それじゃ6人パーティーでレイドを組んで！」

6人!?　俺とアルト……あと4人足りない!

視線を巡らせても既にパーティーを組んでいたプレイヤーが殆んどで、溢あふれてるプレ

「イヤーなんて……」

「いたな？」

「ああ」

フードを被ったプレイヤーが1人、ポツンと座ったまま動かない。誰も近寄らないし、パーティーを組んでる様子もない。そう言えばあの子この前のー

「君、1人？良かったらー」

「お前、俺たちと組め」

何を言ってるんだコイツは！

そんな上から目線で、パーティーを組もうなんて言う奴がいるか！

「アルトー！」

「ボスはソロで挑むもんじゃねえんだろ？それが分かってるからコイツはここにいるはずだ」

「そう言うことじゃないんだよ。……連れが悪かった。今回限りでいいから、パーティーを組んでほしい」

「……………」

なにも言ってくれないけど、パーティー勧誘のメッセージを送ればプレイヤーの名前がパーティーに追加された。



《Asuna》……アスナって読むのかな？

「皆、パーティーは組めたかな？それじゃ明日の昼迷宮区前に集合だ！」

明日の昼か……。

日も落ちたが、明日の攻略戦に向けてまだ多くのプレイヤーが噴水広場に集まっている。

アルトは『使った金を稼ぎ直してくる』と言い、また姿を消した。アイツの使う《バスタードソード》はそのままで一層で手に入る両手剣カテゴリの中でトップクラスの火力を持つが、万全を期すのであればやっぱり強化をしておいた方がいい。

溢れ組はボスの取り巻きを相手取ることになる。その取り巻きをいち早く倒せれば、それだけ他の援護に回りやすくなる。

「隣いいかな？」

噴水広場から離れた裏路地に見慣れた姿を見つけ、断りを入れながら許可をもらう前に腰かける。

……許可をもらわなかったのは悪かったけど、無言で距離を開けないでください。

「そのパン美味しいよな」

「……本当に美味しいと思ってる?」

「勿論。1日に1回は必ず食べてるよ。ちよつと工夫はするけど」

小瓶をオブジェクト化してアスナとの間に置く。

「そのパンに塗ってみろよ」

躊躇いしつつも小瓶をつつき、その指をパンの上で滑らせれば誰が見ても美味しいと分かるクリームが塗られる。

一口齧り、そのまま息も継がずに食べきってしまった。気に入ってもらえたかな?

「《逆襲の雌牛》ってクエストをクリアすると手に入るんだ。良かったら攻略方法教えるけど」

「別に要らない。美味しいものを食べるためにここにいる訳じゃないから」

「それじゃなんのために?」

「私が私でいるため。このゲームに負けたくない」

「難しく考えすぎだっつーの」

視線を前に戻せば、姿を消していたアルトがまた両手一杯の食べ物を持って立っていた。

「お前、またー」

「お前らも腹減ってると思って、買ってきてやったんじゃねえか」

反論しようとして口を開いた瞬間、アルトが持っていたホットドッグを振じ込まれた。

アスナも同様に突っ込まれた。

「命が懸かっているように、このSAOがゲームであることには代わりねえだろ。私が私であるため？ゲームに負けたくない？その考えは否定しねえが、負けたくねえってんなら楽しめ。その上で足掻いて見せろ。リアルもゲームも関係なく、それが生きるってことなんじゃねえの？」

「……………」

「ヤンキー先生」

「おいキリトなんつった？」

ヤバイ本音が！

……結局眠れなかった。

《バスタードソード》を振り回すアルトに朝まで追い回された……。

「……ふふ、バカみたい」

「うっぜえ」

アスナは昨日からあんな調子だ。

肩の力が抜けた分には良い傾向なんだろうけど、納得いかない。迷宮区に繋がってる森を歩きながら、釈然としない思いを抱く。

「スイツチとPOTローテの手順は覚えてるよな？」

「当たり前だ」

「スイツチ……ポット……？」

マジですか……。

MMO初心者だったのか。そうじゃないかな、とは思ってたけどまさか本当に初めてだったなんて。

「貧乏クジだったな」

「ちよつと強引に組んでおいて、その言い草はなに？」

「何でもねえよ、お姫様」

頭痛が痛い……。

## 第2刀：ビーター

キリトとの第一印象は最悪とまではいかねえけど、あまり良くはなかつたな。

アスナもどこか肩肘張つてて、ツンケンしてたし。そうそう今の朝田みてえに……朝田、明日奈、俺が悪かったからそんな目で見ないでくれ。

なに?……いや俺はβテスターじゃねえ、真正正銘VRMMOはSAOが初めてだ。それより話の続きだな。第一層攻略戦の話だ。

「俺たちは、まだ《はじまりの街》にいるプレイヤーたちに示さなきやならない。このゲームがクリア可能だと言うことを！皆、俺から言うことは1つだ！勝とうぜ！」  
おーおー、ヤル気満々だな。

初のボス戦が露払い程度なのが癪だがな。

俺達は、取り巻きの《センチネル》と戦闘中。

事前に打ち合わせていた通り、キリトが《センチネル》の攻撃をソードスキルでいなし、弾きあげたところでスイッチ。アスナが《リニアー》で的確に《センチネル》の首元を打つ。俺は削りきれなかった《センチネル》を叩き潰す。

それを繰り返すこと既に数十回、「なるほどな」と内心頷いた。

キリトが言うだけあってアスナの《リニアー》は凄まじい。明らかにシステムアシスト以上に自らの運動信号によってブーストされた速度に、ここまで一度も外すことのない正確さ。

これでMMO初心者とか、末恐ろしいな。

そんなことを考えながらも戦闘の手を弛めることは無い。

「スイッチー！」

キリトが下から上へ斬り上げる単発ソードスキル《ライジング》で《センチネル》の斧槍を弾いてその声を上げると、一瞬で後ろから飛び出して《リニアー》を放つ。その一撃でほぼ尽きかけていた《センチネル》のHPを、更にもう一突きして消し飛ばした。

「G J」

「二人もね」

明らかにオーバーキルな戦い方。この前キリトと二人で迷宮に潜ったとき、アスナにキリトはそう言ったと聞いた。初めてアスナに会ったとき、彼女は殆ど無くなっていた敵のHPを再び《リニア》で吹き飛ばしていたらしい。ソードスキルはその一撃が強力な分、その後でできる技後硬直による隙もまた相応に大きい。つまり、スキルの無駄打ちはそのまま危険へと繋がりがねない。

それが今では無駄のない洗練された動きになりつつある。

どこで、どうやって死んでも、遅いか早いかだけの違い。キリトにそう言ったらしいアスナも変わりつつあるみたいだ。

キリトがアスナを変えた、か

そんな風に思う。

どこか危なげなキリトも、アスナといれば或いは――

ふと違和感を覚えたのは《イルフアング》のHPバーが4本目のレッドゾーンに突入し、武器を変えてからだ。

あの武器、本当に湾刀か？

遠くから見ているのではつきりとは判別出来ねえが、湾刀にしては細身に見える。

二人の会話が終わると同時に、アスナともども素早く駆け寄り、駆け出そうとするキリトを呼び止める。

「どうした？」

「《イルファンング》の武器。アレ、湾刀にしては細くねえか？」

「なんだって!？」

顔を歪めたキリトが《イルファンング》視線をやると、その表情を驚愕に変えた。

「あ、ああ……………」

何事かとそちらを見ると、そこには《イルファンング》に一人駆け出していくディアベルの姿があった。

「だ、ダメだ、下がれ！全力で後ろに跳べ……ッ！」

キリトの叫びはしかし、《イルファンング》が真紅のライトエフェクトと共に放った全方位への水平切りにかき消された。

何だ、あれは……………」

攻略本に載っていないなかったソードスキルの発動で俺の思考が停止している間に、その攻撃を喰らったディアベル達はそのままだ直スタン。更に《イルファンング》は連撃を仕



掛け、弾き飛ばされたディアベルは駆け寄ったキリトの腕の中で――青い欠片となつて、散つた。

ディアベルの死に騒然となるレイド。しかし、敵は落ち着くのを待つてくれるわけではない。

「キリト、お前今の技知つてたか？」

「……ああ。あれは刀のソードスキルだ。上層の敵が使つてたから覚えてる」

「お前なら、相手できるか？」

「……やれる」

「なら……行くか」

「私も行くわ。……パーティーだし」

ディアベルの死で他の連中は呆然としてる。

援護は期待できそうにねえな。

「腰抜け共！死にたくねえなら下がつてろ！」

棒立ちになられてちや邪魔で仕方ねえ。

キリトがソードスキルで《イルフアング》の刀を弾き、アスナが《リニア》で突き飛ばす。

アスナの頭上を飛び越え、降り下ろしの単発ソードスキル《ガリア》を叩き込む。

《イルフアング》のソードスキルはキリトが捌き、通常攻撃であるなら俺が防ぐ。

その隙をアスナがレイピアで文字通り突く。

イケる！

そう思ったが、途中で軌道を変えたソードスキルでキリトが吹き飛ばされ、アスナを巻き込んで地面に転がった。

ヤツの攻撃を防ぎ罅迫り合いになりつつも、横目でキリトのHPを確認すればギリギリイエローゾーンで止まっている。

突然、剣に掛かる重さが消え視線を前に戻せば、ヤツの姿が消え、横殴りの衝撃に吹き飛ばされ、支柱に叩き付けられる。

その隙に《イルフアング》はキリトたちの元へと走り出す。

「ぐッ………キリト！アスナ！」

俺の声に我に帰ったアスナがキリトを抱き抱え、咄嗟に横に転がる。

ヤツの一撃でアスナのフードがポリゴンとなって散ったが、二人ともなんとか無事のようにだ。だがアスナのSTRじゃキリトを抱えたまま動き回れねえ、一撃目はなんとか避けれたが二撃目は確実に当ててくるはず。

スタンさえ解ければ……！

「うおおおおりやああああ!!」

《イルフアング》の一撃を両手斧を持った黒人プレイヤーがソードスキルで弾き飛ばした。

……確かエギ、ル？とか言ってた……。

「おい、大丈夫か!？」

「……あんたら」

「エギルさんのレイドに入ってる。ヤツの攻撃は俺たちが防ぐから、君たちで決められるか？」

腰<sup>壁</sup>抜けだけじゃなかったか……。

タンク役がいるなら確実に仕留めれる！

「当たり前だ！」

「よう、まだ生きてるか？」

「当たり前だろ」

それは重<sup>ちやうじやう</sup>畳。

「私も行けるわ」

「手順はさつきまでと同じだ。このラストアタックで仕留めるぞ」

「了解！」

キリトを先頭にアスナと共に駆ける。

キリトが捌き、アスナが間隙を抜い、俺が吹き飛ばして距離を広げる。エギル率いるタンク部隊がヤツを取り囲み、自由を奪うが如何せん数が足りねえ。

《イルフアング》はソードスキルでタンク部隊を弾き飛ばし跳躍。支柱間を跳び回り、エギル達に狙いを澄まし刀にソードスキルの光が灯る。

「キリト！」

名前を叫び、アイコンタクトで俺が何をしようとしているか理解したキリトが、砲丸投げの体勢になった俺の左手に飛び乗る。

「ブツ飛べキリトオー！」

「言い方考えろ！」

STRに物を言わせた投擲に合わせキリトが跳躍。凶刃を振るう直前の《イルフアング》にソードスキルを振るい叩き落とした。

あと数ミリ！

2連撃ソードスキル《ノリブス》。

水平に切り払い、さらに体を回転させ遠心力を乗せた一撃で逆袈裟に斬り上げる。

仰け反りヤツが見上げた先には、光を纏う《アニールブレード》を振りかざしたキリ

トの姿。

「これで終わりだあ！」

落雷を思わせる一撃。

1 拍置いて攻略隊に大きな被害をもたらした牙獣の王はポリゴンとなつて砕け散つた。

盛大なファンファーレと共に Congratulation の文字が宙に踊る。

……ようやく終わった。長かったな。達成感もあるがヒリヒリとしたあの緊張感、癖になりそうだな。

フィールドにいる雑魚とは違い圧力と言うべきか、存在感が段違いだった。

「Congratulation! 今回の勝利はお前たちのものだ」

「サンキュー、エギル。お前たちがいなかったら勝てなかった」

「なんとか勝てたわね」

「あの緊張感、癖になりそうだ」

「もうやだこの戦闘狂」

失礼な。

「なんでや!!なんでディアベルはんを見殺しにしたんや!」

「あ?」

「見殺し?」

「そうやるがい!ボスの使う技知つとつたやないか!それ伝えとつたらディアベルは死なずにすんだんや!」

自分で突っ込んで自滅したただけだろうか。イチャモンつけんのも大概にしろつつの。

「きつとあいつβテスターだ!だからボスの使う技を知つてたんだ!」

「そ、そうだ!他にもいるんだろ!βテスター共、出てこいよ!」

「……魔女狩りかよ。付き合つてらんねえな」

「な、なんやと!」

うっわ、恐つ。

「そうだろうが。居るかも分からねえβテスターを探したつて意味ねえし、仮にコイツがβテスターだつたら全責任を押し付ける気だろ?それで?責任を全部押し付けて、リッチか?絞死刑か?コイツを殺せばそれで気が晴れんのか?それにこの先の攻略もβテスターがいねえと儘ままならねえだろ。全員が命張つてんだ。死んだ命を惜しむならともかく、それを口実に憂さ晴らししてんじやねえ!!」

今のSAOは全プレイヤーが命を張っている。誰かが死んだ責任を誰かに押し付ける。それは死んだヤツの意味も誇りも全て、踏みにじることだ。

「ディアベルがなぜ突っ走ったのかは知らねえが、あいつの『このゲームがクリアできることを証明する』と言った言葉に嘘はなかった。

サボテンはその言葉すら踏みにじろうとしてる。

「βテスト？ そんな奴等と一緒にしないでくれ」

キリト、お前——

「千人のテストの殆どはレベリングのやり方も知らない初心者ばかりだった。俺がボスの刀スキルを知っていたのはもつと上の階層で、刀スキルを使う敵とイヤと言うほど戦ってきたからだ。もつと知ってるぜ？ 情報屋なんか必要ないほどにな」

……そう言うことかよ。

「なんやそれ……そんなんチートやチーターやないか」

「βのチーター、βーターだ！」

「テメエら寄って集って、それで満足なのかよ……！」

「βーターか、良い呼び名だな。そうだ。俺はβーターだ。これからは、たかがテストター（β）と一緒にはしないでくれ」

黒いコートを纏い、ボス部屋の奥へと向かっていくキリトを背を追い、上の階へと続く階段でようやく追い付いた。

「全部一人で背負い込もうとしてんじゃねえよ」

「仕方ないだろ。ああでもしなきゃ、他のテスターたちに矛先が向くだろ？ そうなれば攻略どころじゃなくなる」

「それぐらい途中で気付いてたつての」

確かにあれが最善だったかも知れねえがー

「やつと追い付いた……」

アスナか。態々追って来なくても良いだろ。

「貴方たち、私の名前、どこで」

息切らせてるみてえだけど、VRなんだからそこまで疲れねえだろ。

「パーティに参加するとHPバー辺りに表示されるんだ。読み方、合ってたかな」

きよとんとした顔をしたあと、何が面白いのか吹き出して笑ってる。

初心者丸出しで、よくここまで食い物にされなかつたな。大抵は利用できるだけ利用されて捨てられるもんだが。……あのツンケンした雰囲気じゃ誰も声は掛けねえか。

「……なにか失礼なこと考えてない？」

「何でもねえよ、お姫様」

「信頼できる人ができたら、その人のパーティかギルドに入ることをお薦めするよ。それだけでも生存率も上がるし、レベリングも捗るからさ」

「貴方たちは……」



「あんなこと仕出かしちや、パーティー組む奴もいねえだろうしな。当分は基本ソロ、たまにコイツとパーティーを組むぐれえだろ」

「……勝手に決めるなよ」

「効率を考えりや、たまに組むぐれえがお互い丁度良いだろ。基本的なことはお前にレクチャーして貰ったしな」

「……ぞと言うときは歳不相応な度胸を見せる癖に、ふとした瞬間に年相応な脆さを垣間見せるコイツには強引なぐらいが丁度良い。」

「……で一旦お別れだな。なんかあったときのためにフレンド登録しておくか」

「だな。何かあればメッセージ飛ばしてくれ」

今生の別れじゃねえんだ。お互い生きてりやまた会えんだろ。

「死ぬなよ」

「誰に言ってるんだ」

「必ず生き残って、また3人で会おう?」

当たり前だ。

キリト、俺、アスナの3人で拳を突き合わせる。

第一層攻略戦では大きな犠牲を払ったが、このデスゲームが攻略できることが証明出来たんだ。次の階層では同じ轍は踏まねえ。

この先に何かがあるのか、考えただけでもワクワクが止まらねえ。探索系RPGの醍醐味だよな。

### 第3刀：灰の仔狼

第二層主は麻痺のデバフが厄介なボスだったな。流石、雷光の名は伊達じゃなかった。……ん？《アステリオス》と雷光が関係あるのかって？

話せば長くなるんだけどな。ミノタウロスは知ってるよな？……そうそう、ミノス王の牛って意味なんだが朝田よく知ってるな。

ギリシヤ神話において、ミノス王の妻であるパシパエが、雄牛との間に産んだ人の体に牛の頭を持つ生まれつきの怪物。扱いに困り果てたミノスは工匠のダイダロスに命じてラヴリユスーつまりラビリンスを造らせ、そこに閉じ込められたのがミノタウロス。その正体が雷光の意味を持つ名前を与えられたパシパエの息子、アステリオスってわけだ。

その伝承からSAOでは迷宮の主として配置されてたんだろ。そう言やアステリオスの名前を与えた理由に、パシパエが息子を産んだ日は嵐の夜で、稲光と共に産まれたからって説があったな。

………なんだよその目は。ともかく！アステリオスと雷光の関係はこれでわかっただろ！話の続きだ！

攻略の最前線が四十五層まで上がったある日、俺は情報屋《鼠》のアルゴから強力な両手剣をドロップするかもしれないと言うクエストを受けるために第三十層まで降りてきてた。

狼の魂を意味する両手剣、《ルプス・アニメ》を背負い、三十層の外周区にある村に訪れたわけだ。

「《鼠》の話じゃここら辺のはずだが……」

村は閑散……と言うより焼き討ちにでも遭ったかのような酷い有り様だ。

「おお、旅のお方。この村はご覧の通り、酷い有り様での。客人を持って成すことができん  
のじゃ」

この村の長老であろうNPCに近付けば、聞いてもいねえのにそんなことを宣い、頭  
上にクエストフラグが建つ。

「はあ……何かあったのか？」



「早速お出ましかー！」

空気を震わせるほどの咆哮。

小高い丘の上に腰蓑だけを身に纏った体長3メートルはあろうかと言う大男。手には岩を削り出し、そのまま剣にしたかのような石斧剣。

纏う空気はまさに強者のそれ。

やべえな。武者震いが止まらねえ……！

S A Oが始まって以来、初めて感じる死の恐怖。

理性は逃げると叫ぶが、本能でねじ伏せる。

逃げてでも追いつかれ、くびり殺されるだろう。

《ルプス・アルマ》を引き抜き、右肩に預ける。

表示された名前は《B e r s e r k a h e r o》

直訳すれば《狂った英雄》もしくは《荒れ狂う英雄》と言ったところか。

だがH Pバーが表示されない。カーソルは赤く表示されてんだがー

地面を踏み砕き、刹那の内に迫られ降り下ろされた石斧剣の一撃を紙一重で避けたが、余波で吹き飛ばされ地面に叩きつけられた。

「紙一重じゃダメってか……？」

余波事態には攻撃判定はなかったらしく、H Pはさほど減ってはいない。あの攻撃力

じゃ防御してもその上から叩き潰される。だからと言って生半可な回避じゃ、さつきみてえに吹き飛ばされて追撃もらって終わりだ。

とは言えヤツの攻撃は大振りな上に直線的だ。付け入る隙はある。

「ああああああ!!」

「■■■■■■■■■■!!」

暴風のような乱撃を掻い潜り、胴に横一線。

呻き声と共にヤツは膝をつく、がー

「なッー」

腹に刻まれたダメージジエフェクトが消え、何事もなかったかのように立ち上がりやがった!

「不死身ってか!」

<sup>S A O</sup>ここがゲームである以上、倒せるはずだ。

地面を砕く一撃を飛び散る礫つぶてを浴びながらやり過ごし、がら空きになったヤツの顔面に叩き込む。

「クソッ!どうなってやがる!」

金属同士をぶつけ合わせたような硬質な音と共に弾かれる。単発突撃型ソードスキル《アドバン》をヤツの左胸目掛け放てば、これは通る。







「この敵考えたやつアホだろ……」

戦巧者と言えば聞こえは良いが、相手取るとしたら勘弁してほしい。

《半神半人の首》

まんまヘラクレスだな。

神ゼウスと愛人の間に生まれたアルケイデス。もしくはアルケイデース。

ゼウスの妻であるヘラはアルケイデスを疎ましく思っていたらしい。……夫と愛人の子だから仕方ねえかも知れねえが。

とある巫女に《ヘラの栄光》という意味のヘラクレスと呼ばれたが肝心のヘラからは嫌われ、アルケイデス本人もヘラからの無茶振りで愛想を尽かしていたらしい。

それでもヘラクレスと名乗り続けたのだから、ヘラに対して何かしらの思いはあったのかも知れねえな。

ちなみにヘラはギリシャ神話きつてのメンヘラでありヤンデレであったが、それでも主神ゼウスは他所の女神や地上の女と子供を儲け、時には自分で子供を産んだらしい。

……余程の女好きだな。クラインもそうなるか？

ともかく、このアイテムをあの村長に渡せばクエストクリアだな。

「ほらこれで良いのか？」

「おお、旅のお方。よくぞご無事で……この首は間違いなくこの村を襲った大男のもの。かたじけない。ささやかなもので申し訳ないが、こちらをお納めください」

大剣《アルゴノウト》

ヘラクレレス繋がりが？ギリシャ中の英雄が乗った船の名前だよな。しかも大剣？両手剣じゃないのか？

ステータスを確認してみれば確かに《大剣》の文字がある。詳細を開けば、両手剣の熟練度が規定値を越えることが獲得条件みたいだな。

早速装備すれば両手剣よりもズシリとした重さを感じる。今のSTRじゃ片手で振り回せねえな。見た目は完全にさつきまでヤツが振るっていた石斧剣。

背負えば鞆もねえのにどういう原理なのか何かに固定される。突っ込んだら負けか？

なににせよこれでクリアだな。《鼠》に連絡して今日はもう寝るか。流星に疲れた。

「クウーン……」

「……なんだこれ」

目で見たものを言葉で表せば、トラバサミに左後ろ足を噛まれた灰色の……仔犬？つら面

構えは狼っぽいが。

カーソルは赤じやねえから、何かのイベントか？HPバーはイエローからレッドにはいる寸前。

名前は《Grey little wolf》、灰色の仔狼って見たまんまだな。  
「仕方ねえな」

トラバサミを開き、仔狼が足を抜いたのを見計らい手を離せば、火花が散る勢いで歯が閉じる。

よく食い千切られなかったな。

「ちよつと待て」

食い千切られなかったとは言え、足を引き摺りながら歩く様は見るに耐えねえ。

「グルルル……」

「毒じやねえから安心しろ」

ポーシオンを取り出せば警戒心丸出しに唸るチビ。

人間が仕掛けた罠に掛かれば、そうなるか。

ポーシオンの口を切り半分口に含んで、残りを差し出せば恐る恐るポーシオンの匂いを嗅ぎ、毒がねえのが確認できたのか瓶を口に咥え、残った半分を一気に飲み干した。俺が口に含んだ残りをチビの左後ろ足に吹き掛ける。

足のダメージエフェクトが消え、HPバーもほぼフルまで回復した。これで大丈夫だろ。

「次は引つ掛かるんじゃないぞ」

「ガウ！」

踵きびきを返して歩き出せば、軽い足音が後ろから聞こえてくる。

「付いて来んな」

「ガウ！」

「分かってねえだろお前」

「ガウガウ!!」

「それで連れて来たわけか」

「連れて来たわけじゃねえ。勝手について来ただけだ」

そう四十五層の酒場にまでチビが付いて来た。偶々、酒場で暇を潰してたキリトに見つかり席を一緒にしたわけだ。椅子に座れば、膝の上に飛び乗るチビ。なんでそこまで

懐ついてんだよ。

NPC達が騒がねえってことは、モンスター扱いじゃねえみたいだな。

「タイムか？」

「どうだかな。罾に掛かってたんだぞ？なんかのイベントって考える方が自然だろ」

「ガウ！」

言ってる意味、分かってて吠えてんのか？

「わあ！可愛い！」

「お？アスナか」

キリトの居るとこアスナの影ありつか？キリトといるとアスナのエンカウント率

半端ねえんだけど。

俺の膝に座ってたチビを抱き抱えて頬擦りしながらトリップしてんなアスナの奴。

「この子の名前は？」

「あ？」

「名前よ名前」

「チビ」

「ブラックハヤテ号」

「貴方達!!」

冗談通じねえな。つかキリト、Greyって書いてんのに黒はねえだろ。

「シフ」

「え？」

「シフでいいだろ、なあ？」

「ガウ！」

シフが一吠えすれば名前が《Grey little wolf》から《Sif》に変わる。

気に入ってもらえたようで何よりだ。

## 第4刀：赤鼻のトナカイ

次にキリトに会ったのはクリスマスの日だったな。

どうした木綿季。……シフに会ってみたかった？

そうか……そうだな。お前にも会わせれたら良かったんだが。

12月23日 四十七階層

クリスマスを翌日に控え、人生的な意味のソロプレイヤーはその鬱憤をフィールドモンスターにぶちまけていた。

この数カ月で俺の腰位まで成長したシフ。

どういう訳か爪や牙でなく俺が渡した片手剣を啜え、剣士の如くモンスターを切り裂いていく。

攻略の最前線が四十九層まで押し上げられ、年明け前には五十層まで上がれんのだろ。



現在の俺のレベルは68。ソロであれば階層+10のレベルが必要だから安全マー  
ジンは十分だな。

《アルゴノウト》の適正STR値にも届き、片手で振り回せるようになったお陰でもう片  
方の手が空き、取れる戦略の幅が広がった。

「どうした？ シフ」

「ガウ！」

剣を地面に突き刺し、明後日の方向を向くシフに声を掛ければ一吠え。

「アルトくん、シフちゃん」

「ガウ！」

「アスナ、どうかしたのか？」

「キリトの姿が見えない？」

「うん。3ヶ月ぐらい前から姿も形も見えなくなっちゃって……」

俺が借りている宿屋に案内し、切り出されたのはキリトの行方。アスナが3ヶ月探し  
て見つからねえとなると前線やどっかの迷宮区じゃねえってことか。

「フレンド登録してんなら、《追跡》で何処にいるかぐらい判るだろ」

「私そのスキル習得してないし、そのスキル使ってキリトくんに会いに行ったらストーリーカードと思われちゃうでしょ？」

その片鱗は十分に垣間見てるけどな。

「《鼠》は？」

「アルゴさんにも頼んでるけど、それらしい人を見てないし、会ってもいないって……」  
本当にそうなのか誰かに口止めでもされてんのか。

「……それに明日はクリスマスだし」

成る程、せつかくのクリスマスだしキリトと二人つきりで過ごしたいって訳だ。

「アルトくんその顔やめて」

「別にそこまで変な顔してねえだろ」

「人を弄る時の悪い顔してる。ね、シフちゃん」

「ガウ！」

マジか。そこまで顔に出やすいか？

「でも、なんでいきなり姿を眩ましちゃったんだろう？」

「大方、鬼嫁にーイーエ、ナンデモナイデスアスナサン。……例え話として聞いてくれ、来年人生を左右する大事な試験があるとす。趣味に走らず、寝るときや食事以外の時

間は全部勉強に使う。アスナは続けられるか？」

「無理、だね。一月も続けられたら良い方かな」

それだけ続けられりや十分だろ。

試験なら明確な終わりが見えてるが、このSAOじゃ百層までどれぐらいの時間が掛かるか分からねえ。ただでさえ自分の命と引き換えに攻略するとなりや、精神的なストレスはバカにならねえ。

攻略が嫌になって逃げ出したのか、友人のギルドにでも誘われたのか、はたまたお人好しを発動させてどっかの誰かさんのレベリングでも手伝ってんのか。

一つ目であるのならー

「キリトくんを探してもらえないかな？」

「最善とは思えねえ人選だな。シフはどう思う？」

ベッドの上で丸くなってるシフに問い掛ければ、地面の匂いを嗅ぎながらぐるぐる回ってる。

探せってことか。

「わーった。引き受けてやる」

「本当にー」

「ただし、お前のためじゃねえ。あのバカを前線に戻すためだ。勘違いすんじゃねえぞ

？」

「君のご主人は素直じゃないねえ」

「ガウガウ！」

うるせえ。

「アスナ、シフを頼む」

「了解」

「お？アルトじゃねえか」

「クラインか、お前もキリトのバカを？」

三十五層の迷いの森。

少し前に一際大きなモミの木にクリスマスマスの装飾がされたらしく、そこに現れるボスが蘇生アイテムをドロップするらしい。

蘇生アイテムが実在するかどうかは分からねえが、仮に実在するとすればそのアドバンテージは計り知れない。

キリトも蘇生アイテムを狙っているとしたら、間違いなく現れるだろう。

「キリの字をフレンド登録してるからな。フレンド追跡機能使って《風林火山》のメンバーで後を尾けてるってわけよ」

「アイツに何があつたのか知ってるのか?」

「詳しいことは分からねえが、どつかのギルドに入ってたみてえだ」

そのギルドが壊滅して蘇生アイテムで復活させようってところか。……………バカ野郎が。

「キリの字よーい!」

クラインが声をあげれば小せえ背中をさらに縮こめた藍色のコートを羽織ったキリの姿。振り返ったその顔は生気がゴツソリと削れ、その目は淀み濁りきってる。

「クラインに……………アルト……………」

「クリスマスボスに挑むのか?なら俺たちも一緒に!」

「止めとけクライン、キリトを尾けてたのは俺たちだけじゃねえみてえだ」

少し離れた木々の影から統一された重装備に身を包んだプレイヤー達が現れる。

鎧に刻まれたエンブレムは《聖竜連合》か。今は亡きディアベルが組んだレイドパーティーを核に組まれたギルド。

今ではレアアイテムの為ならオレンジ<sup>犯罪者</sup>プレイヤーになることも厭わない、悪質とも言えるギルドになり果てた。

「俺たちも尾けられてたってことか」

「クリスマスボスがドロップする蘇生アイテムはこの先、攻略するのに必要なものである。ソロプレイヤーが占有して良いものではない」

「言い分は尤もらしいが、結局はテメエらがレアアイテムを独占してえだけだろ。1度でも階層攻略で提供したことがあったかよ」

「必要時を見極め、使い時を誤れば無為になるだろう。その為に我々は一括して管理しているのだ」

イライラするな。こいつらここで殺して良いか？

「キリト、アルト先に行け。こいつらは俺たち《風林火山》が引き受けた」

「いいのか？ 数的にはあっちが上だぞ」

「戦いようは幾らでもあらあ。気にしてねえでお前達は行けよ」

「……なら任せた」

踵を返すキリトに続き不可視の壁の向こうへと飛び込んだ。

「それで？何があった」

「アルトには関係ない」

「大方、死んじまったギルドメンバーを生き返らせようってこつたる？」

電飾に彩られたモミの木の前でようやく本題を切り出せた。

今のキリトは絶望し、あるかも分からねえ希望に縋ってる。ハッキリ言や、その姿に腹が立ってる。

「……守るって決めた人がいたんだ。サチが、その人が最後に俺になにかを言ったはずなのに、俺には解らない。だからー」

「だから、あるかも分からねえ希望に縋りついてその言葉を聞こうってか？ふざけてんじゃねえぞー！」

気が付けば俺の拳がキリトの頬に突き刺さり、雪が積もる地面に投げ出され、大の字に倒れたキリトの胸倉を掴み上げ激情に任せ真実を告げる。

「その蘇生アイテムってのは、脳が焼き切れた人間すら蘇生できるシロモンなのか！少し考えれば分かんたらー！」

「あ……あああ………」

「お前が死んで、そのサチって奴が生き残っていたら、お前はそいつに必ず生きて欲しいって願うんじゃないのか!?そのサチって奴がどんな奴なのか俺は知らねえ！けどな

「お前が死ねば、お前に託した想いが無駄になるんだぞ！」

こいつの希望を握り潰すことになろうが知ったことじゃねえ。こいつのこんな姿を見たくねえし、アスナにも見せられねえ。

「後ろを振り向くなどは言わねえ！お前はまだ生きてんだろ！なら死んじまった人間の分も歯あ食い縛って立って歩け！」

俺の両親が死んだとき、あの双子に言われた言葉。あの言葉があったから、俺は立ち上がった。

親しい人間の死。

信じられるものが突然消え、なにもかもが灰色に染まった世界で、なんのために生きるのかを見失ってしまったあの時の俺に、今のキリトはよく似てる。

突然鳴り響くベルの音。

空を見上げれば、光の尾を引く何かが夜空を飛んでいた。

「来やがったか。キリト」

「……俺は……俺は……」

膝から崩れ落ちたキリトはうわ言のようになにかを呟いてる。

「ハッ！サンタのわりに子供受けしねえ面だな」

赤と白の服に身を包んだモンスター。



サンタのつもりなんだろうが、その顔はグロテスク極まりない。

《Nicholas The Renegade》

背教者ニコラス、か。確かにサンタの名前に真つ先に挙がるのがニコラスだが、サンタなのに背教者とはなかなか皮肉が効いてるな。

背負った《アルゴノウト》を抜き放ち、肩に担ぐように構える。万全とは言い難いが、いざとなったらキリトを担いで逃げの一手だ。

「……アルト……俺もやる。サチが俺に何を託したのか、それが分かるまで足掻いて足掻いて、絶対に生き抜いてやる！」

「その意気だ。生きてりや良いことがあるなんて言わねえが、生きることが放棄すれば生きてまま死ぬことになる。そんなのはゴメンだろ？」

「キリト、アルト無事だったか!？」

「満身創痍も良いとこだがな」

互いの肩を借り、なんとかクラインたちのいるフィールドに戻ってこれた。

「《聖竜連合》は？」

「俺様と半減決着のデュエルで負けて退散してつたよ」

「クライン……これはお前が持つていてくれ。誰かが目の前で死にそうになった奴がいたら使つてやつてくれ」

《還魂の聖晶石》

HPがゼロになってから10秒間だけ使用でき、アバターが消滅してしまえばもちろん使えねえ。

これを用意した奴は本当に趣味が悪いな。

「アルト、もう大丈夫だ。……アスナによろしくな」

気付いてたか。まあ、用もなく会いに来れば感づくか。

「キリト……キリトよう、おめえは生きろよ！最後まで生きてくれ！」

「……じゃあな」

遠ざかっていく背中を追いかけることはしねえ。

……こつから立ち上がれるかどうかはキリト次第だ。

それでも俺は信じる。こいつの強さを。

「キリトの奴、大丈夫だよな？死んじまったりしねえよな？」

「さあな。死んじまえばそこまでの奴だったってだけだ。だがここで終わるような奴じゃねえ。必ず立ち上がれんぞろ」

さて、アスナに何て報告したもんか。

他の女のために命懸けてたって、馬鹿正直に話せばそこには修羅がいるだろうな。

「……そっか。亡くなった友達のために」

「酷え面してたな。その上、手に入ったアイテムは10秒以内じゃねえと使いねえときた」

結局、ありのままを話した。

捏造しようとも思ったが、死者を辱しめる真似もしたくねえしな。

「しばらくはそつとしとけ」

「……そうだね」

感受性の高いアスナのことだキリトの心情を察したからか、ベッドの上で丸くなって

るシフを撫でてるが、随分と意気消沈してんな。

……慰め方なんざ知らねえぞ。

なんとも言えない空気のままだが昇るまで無言が続いた。

## 第5刀：黒の剣士と狼剣士

明日奈はクリスマスデート出来ねえで残念だったな。2年目には12月にも入らなかったしな。

……悪かったから睨まないでくれ。

エギル、コーヒーも一杯だ。

クラインの奴もソロで動き回るキリトが心配で、自分のギルドに入れたがってたみてえだけど、なんで入んなかったんだ？

……見捨てた訳じゃねえだろ。

本当にお前は考え方がネガティブっつーか。

年が明け、なんとか立ち直れたのか前線にキリトの姿を見掛けるようになったが、さほど回数は多くない。

五十層で大きい被害は出たものの、アスナが所属する【血盟騎士団<sup>knight or blood</sup>】が戦線を立て直し、辛うじて勝利を納めた。

それ以前からであったが、この功績で【血盟騎士団】は攻略組に所属するギルドの中でも最強の座を射止めることとなった。

「誰か！誰か、私の願いを聞いてもらえないでしょうか！」

ゲート広場で土下座で懇願する男。多くのプレイヤーは関わりたくねえのか男を中心に円を描くように行き来してる。

「なあ」

声が重なり横を向けば見慣れた顔。

「キリト……」

男の話を聞けば、少し前に男が結成したギルド「シルバーフラグス」がオレンジプレイヤーのギルド「タイタンズハンド」に襲われ、リーダーである男以外のメンバーを殺したのだと言う。

唯一の生き残りである男は全財産を使い、結晶系アイテムの中でも高価で希少な回廊結晶を購入。「シルバーフラグス」を襲ったオレンジプレイヤーを黒鉄宮の牢獄に設定した回廊結晶で牢獄に送ってほしいとのこと。

「仇を討ちてえんだろ？なら殺してほしいって頼むもんじゃねえのか？」

「本当であればそう頼むのですが、殺したから殺されて、殺されたから殺して……それじゃいつまで経っても恨みの連鎖は断ち切れません。ですからどうか……」

「こ立派なことだ。」

「キリトはどうすんだ？」

「聞くまでもないだろ」

「そりゃそうだ」

マトモな思考をしてる奴じゃまず引き受けねえだろうが、ここにいる二人はマトモ

じゃないんでね。

遠ざかりながらもしきりに頭を下げる男を見送り、どうするかを考える。

「あの人の話じゃ女性プレイヤーをギルドに加入させて、少し経ってから襲われたんだよな？」

「てこたあ、その女もオレンジの仲間だろうな。時期を見計らいフィールドに出た瞬間、合図を送って仲間に襲わせる。自分じゃ手を出してねえだろうからカーソルはグリーンのまま。そうして次の獲物を探して同じことを繰り返してんだろ」

まさしくトロイの木馬だな。

ギリシヤ神話でトロイアもしくはトロイとも呼ぶが、トロイアとギリシヤの戦争でギリシヤ勢が兵士の中に忍ばせた大きな木馬を作り、トロイアの人々がその木馬をトロイア市内に運び込むように仕向けた。その結果、ギリシヤの兵はトロイアへの潜入に成功し、トロイアは滅ぼされたわけだ。

今じゃ、無害を装い相手に招き入れさせる罠としての意味合いもある。コンピュータウイルスにも同じ名前があるな。

「どうやって探すか……」

「……………あの男のギルドが襲われたのは三十八層。となると攻略組には手を出せねえから、脂が乗り始める中堅クラスのギルドが標的だろうな」



「とすると、四十層以下になるのか？」  
「もつと絞り込みは必要だろうがな」

「やだよ……ピナ……ピナアアア！」

青い破片となって散った私の友達。

三十五層の迷いの森でギルドの人たちと言い合いになってしまい、一人で行動してしまつたのが悪かつたのかもしれない。

全部私が悪いんだ……ロザリアさんと喧嘩しちゃって意地を張っちゃつたから……。

3体の《ドラランクエイプ》が私の目の前まで迫り、棍棒のようなものを振り上げた。

……やだよ。まだやりたいこともいっぱいあるのに……私も死んじやうんだ……。

諦めが私の心を支配し、死を受け入れるために目を閉じる。だけど、どれだけ経つても殴りられる衝撃がない。唸り声も聞こえなくなつてる。

恐る恐る目を開ければ、振り上げた姿勢のまま《ドラランクエイプ》が止まっていて、少

し経って青い破片となって散った。

青いポリゴンの向こうには、黒いコートを着た男の人。

その男の人の後ろにも《ドラクエイプ》がー

「あ、危ない！」

「大丈夫だよ」

男の人に降り下ろされた腕を岩を削り出したような剣を背負った人が左腕だけで受け止めた。

「勝手に動き回るんじゃねえ」

「お前なら追い付いてくれるって信じてたんだよ」

「ハッ！ならその信頼に答えないとな」

岩のような剣に手を掛けた瞬間、轟音と共に地面が割れるような衝撃が走り、《ドラクエイプ》が叩き潰された。

……ぜ、全然見えなかった。

「ゴメン。君の友達、守れなかった」

その声を聞いた途端、全身から力が抜けた。

他人の口から告げられた事実にも、堪えようもない涙が、次々と溢れ出してくる。

地面に落ちている水色の羽根。

そこまでふらふらと近づき、その場にへたり込んでしまった。深い悲しみと喪失感が湧き上がる。それは涙となつて表出して、止めどなく私の頬を伝つていった。

私が殺されそうになつた瞬間、ピナは私の身を守る様に《ドラクエイプ》に自分から飛びかかつて行つた。そんな行動は使い魔としてのAIには無い筈なのに。

ピナと出会つてからの月日が築きあげてくれた、データ以上の、きつと本当の心と友情と呼べるような何かを持つていたピナ。

そんな相棒を唯一無二の親友を、私は下らない慢心で、失つたのだ。

「お願い……私を独りにしないで、ピナあ……」

切実に願つて出した声に、返事が返つてくることはなかった。

「……大丈夫、なわけないか」

どれだけ時間が経つただろうか。数分の様な気もしたし、数時間経つていようような気もする。再び黒髪の男の人が口を開くまで、私は泣き続けていた。

何とか嗚咽を抑え込んで、彼の言葉に首を振る。

「……はい……でも、ありがとうございました、助けてくれて」

どうにかそれだけは言うことが出来た。

「……大丈夫だ、ソイツはまだ完全に死んでねえ」

「……ええ？」

岩のような剣を納めた灰髪の男の人から声が発せられた。

けど、一瞬何を言われたのか理解できなかった。

……ピナは、完全に死んでない……？

「そ、それって、どういう……」

「その羽根、《心》って名前付いてねえか？」

「……………」

言われるがままに、胸に抱きしめていたピナの羽根に触れると、《ピナの心》とハッキリと表示された。それを見てピナはもういないんだと思い知らされたみたいでまたポロポロと涙が流れ落ちた。不意に私を安心させるように優しく頭に手を置かれた。

「ふえ？」

「大丈夫だって。それがあれば、君の大事な友達を生き返らせることが出来る」

「えっ!？」

口を開けたまま顔を上げて、ぼかんと男の人の顔を見つめる。

「最近判った事で、まだあまり知られてねえんだがな」

「四十七層の南に《思い出の丘》っていうフィールドダンジョンがあるんだ。名前のわりに難易度が高いんだけどな。そこの天辺で咲く花が、使い魔蘇生用のアイテムらしー

ー

「ほ、ほんとですか!？」

灰髪の男の人の言葉を引き継ぐ様に発せられた黒髪の男の人の言葉が終わらない内に、歓喜のあまり腰を浮かせ叫んでいた。

けど――

「……四十、七層……」

十二層も上のエリアという事実には、その歓喜はすぐに萎えてしまった。

数値が全てなこの世界では、十二層という数字はどう考えても今日明日どうにかなるという差では決してない。

「うーん」

そんなあたしを見兼ねてか、黒髪の男の人がそんな風に唸った。

「実費と報酬をぼつちり貰えれば俺たちが行ってきたていいんだけど……使い魔を亡くしたビーストテイマー本人がいないと、肝心の花が咲かないらしいんだ」

「いえ……教えてもらっただけでも……頑張つてレベルを上げれば……」

「いや……実は三日が蘇生時間の期限らしくてな。それを過ぎると、蘇生不能だ」

「そんな……!」

思わず叫んでしまう。

あたしの今のレベルを考えると、到底三日間で攻略しに行ける状態まで持つていくの

は不可能だ。

……ピナを、生き返させられるかもしれないのに……!!

そんなやるせない思いと一緒にピナの羽根を抱きしめていると、二つのトレード申請ウィンドウが目前に表示された。

見上げると二人がああだこうだと相談しながらウィンドウを操作している。

「あの……」

「流石に、糠喜びさせて何もしないんじや、俺たちも寝覚めが悪いからさ」

「それって……」

「教えた責任はキツチリ取るってこつた」

「俺たちが持つてる余った装備。それに俺たちも一緒にその花を取りに行けば、攻略は難しくない」

小さく口を開いたまま、二人の顔を見つめる。

偶々通りかかって、殺されかけていたプレイヤーを助けた。欲している情報を偶々知っていたから教えた。ここまででならまだ判る。けど、助けたとはいえず知らずのあたしに自分たちの持つてる装備を与えてまでそのアイテム探しに協力を持ち掛けるなんて、そんなのこの人たちに何のメリットももない。

「なんで……そこまでしてくれるんですか……?」

「別に大した理由はねえよ。下らねえこと考えてねえで、黙って厚意には甘えとけ。それに言ったろ、教えた責任は取るってよ」

そう本当に何でもない様に告げた口調とは裏腹に、その瞳の奥には何かを隠しているように見えた。だけど、その隠している物が嫌な感じにも見えなかった。

首を動かして黒髪の方を見ると、灰髪の方とは逆に、返答に困った様に頭を掻きながら視線を逸らして、小声で呟いた。

「うーん……言わなきゃダメ？」

「……正直、信じられませんし」

「そうだよなあ、ただより高いモノは無いつて言うし……言っても、笑わない？」

「……それが本当のことなら」

「……はあ、わかった。言うよ」

意を決したように目を閉じて、深く息を吐いてから、言った。

「君が……妹に、似てるから」

「……………ふっ、くく！」

堪えようと思っただけど、ダメでした。

あまりにもベタベタな答えに、思わず噴き出してしまった。慌てて口を片手で押さえなければ、込み上げる笑いは抑えが効かない。

「わ、笑わないって言ったのに……」

傷ついた表情で肩を落とし、いじけた様に俯いた彼の姿が更に笑いを呼ぶ。

笑いを止めるために視線を他所に移すと、居心地悪そうに目を逸らしている灰髪の男の人が視界に入る。そんな仕草から、きつと彼も本当は同じ様な理由なんだろうーなあと、漠然と感じた。

悪い人たちじゃない……ううん、きつと、すごくお人好しで優しいんだ、この人たちが必死に笑いを呑み込みながら、この二人を信じようと、そう思った。

一度は死も覚悟したのだから、ピナを生き返らせるために惜しむものなんて何も無い。

感謝の意を込めて、ペコリと頭を下げた。

「よろしく願います。助けて貰ったのに、その上こんなことまで……」

トレードウインドウに目をやって、持っているコルを半額ずつ入力する。

「あの……こんなんじや、ぜんぜん足りないと思うんですけど……」

「いや、金はいいいよ。さつきも言ったけど、どうせ余り物だから……なあ？」

「ああ」

そういつて二人はお金を受け取らないでさつきとOKボタンを押してしまった。

「すみません、何から何まで……あの、あたし、シリカつていいいます」



名乗りながら、中層ではそれなりに売れている自分の名前に二人が驚くのを期待していたけど、どうやら心当たりは無いみたいだった。

一瞬それを残念に感じて、すぐにその思い上がりが今の事態を引き起こしたのだと反省する。

「よろしくな、俺はキリト。こっちは……」

「アルトだ」

順番に握手を交わす。

「んじゃ、さっさと抜けるか」

アルトさんの言葉に頷いてキリトさんがポーチから地図を取り出して歩き始めた。

その後を追いかけてながらピナの羽根を唇に当てる。

待っててね、ピナ。絶対、生き返らせてあげるからね……

キリトさんとアルトさんの案内のおかげで、無事に迷いの森を抜けて三十五層の主街区《ミーシエ》に無事に戻ってこれました。白い壁に赤い屋根の建物が並んでいて、窓から明りが見える。

「お、シリカちゃん発見!」

「随分遅かったんだね! 心配したよ!」

「あ、あのっ……」

正直に言えばこの人たちは苦手です。

私圭子じゃなくて私竜使いのシリカを見ているようで。

「今度パーティー組もうよ、好きなトコ連れてってあげるから！」

「お話がありますけど……」

「悪い、シリカは今俺たちとパーティー組んでるんだ」

「キリト、はつきり言っちゃえよ。テメエらに構ってる時間はねえんだってな」

「………んん？」

私を隠すようにキリトさんとアルトさんが間に割って入ってくれる。

「そ……そうなんです。少し急ぎの用事があつて」

「用事って、なんなの？」

「俺たちじゃ力になれないの？」

「明日四十七層に行くんだが、それでも来るか？」

「よ………四十七層………!?!」

「女にうつつを抜かす暇があんなら男を磨けよ。行こうぜキリト、シリカ」

アルトさんが二人の間を割って歩き、そのあとにキリトさんが続く。二人の姿が見えなくなつたところで前を歩く二人に頭を下げた。

「ごめんなさい……迷惑をかけて」

「気にしてないよ。人気者なんだな、シリカは」

「こいつを見てるようで見てねえ奴らだ。あんなことは日常茶飯事だろうよ」

会ってからそんなに時間は経ってないのにそこまで見抜けるんだ……。

「マスコット代わりにされているだけですよ、きつと。それなのに……【童使い】なんて呼ばれて……いい気になって……」

「誰だつてチャホヤさければ調子に乗るもんだ。そしてお前は報いを受けた。相棒の死つっー大きな報いをな」

「……………」

「アルト言い過ぎだつて」

「だが二度、同じことは繰り返す気はねえだろ？」

「アルトさん……」

「生き返ったら、ちゃんと行ってあげないと。『死なせてごめん。庇ってくれてありがとう、また会えて嬉しい』つて」

「キリトさん……そうですね。そうします！」

「ところでどうする？ 当日の移動を考えると現地の宿を使うって方法もあるけど」

「とは言っても夜も遅えからな……今日はここで1泊でいいんじゃないか？」

「ここつてチーズケーキが結構美味しいんですよ？」

「ははあ、お前の目的はそれか」

「い、いえつ。別にそんなんじゃないよ……」

なごみ始めたところで、私にとつて忘れられない声が掛けられた。

「あらあ？ シリカじゃない。へえーえ、森から脱出できたんだ。よかつたわね。でも今更帰つてきても遅いわよ。ついさつきアイテムの分配は終わっちゃったわ」

「要らないつて言つたはずです！ ……急ぎますから」

「あら？ あのトカゲ、どうしちゃったの？」

目ざとくピナがいないことに気付いて、酷く愉快そうに嫌な嗤いを浮かべて私を見つくる。

知ってるくせに……！

使い魔はアイテムと違つてストレージに仕舞うことも、どこかに預けることもできない。プレイヤーの傍からいなくなつてしまつたのなら、答えは判り切つてる。それが判つてて、ロザリアは私にそう言つたんだ。

あまりの悔しさに唇を噛みしめた。

「あーれえ、もしかして……？」

「死にました、でも！ ピナは、絶対に生き返らせます！」

「へえ、てことは《思い出の丘》に行くんだ。でも、あんたのレベルで攻略なんか——」  
「できるさ、特別高難度のダンジョンって訳でもない」

ロザリアさんの言葉を遮って、キリトさんがあたしをコートで隠すように前に出た。アルトさんが悔しさを身体を震わせる私をを落ち着かせるように、迷いの森でキリトがしてくれたようにと同じように手を置いて頭を小さく撫でてくれる。

「なあに？ アンタらもその子に誑し込まれた口？ やあねロリコンばかりで。まあ、見たとこそそんなに強そうじゃないけど」

「ハッ！」

ロザリアさんの挑発を、皮肉気に鼻で嘲笑うアルトさん。なんだろう、こう言っちゃうのはなんだけどすつごく似合う。

「は？ なにがオカシイってのよ？」

「いや？ 哀れだなど思ったただけだ、気にすんな」

「哀れですって？ このわたしが？」

「だって哀れだろ？ 見た目でしか人を判断できねえって自分で言ってるようなもんだし、俺に言われるまで気付きもしねえんだからな？」

「なんでつすつて……!?!」

「凶星突かれたら今度はヒステリックかよ。人のことをとやかく言う暇あんなら自分の

人間性磨いた方がいいんじゃないか？」

「あ、アンタ、黙って聞いてればいい気に！」

「今の内に行こう」

アルトさんがロザリアさんを挑発している間に、私はキリトさんに促されるまま宿屋へと入った。

「フンツ！まあ、せいぜい死なない様に頑張ることね！」

嗤いと怒りが滲んだ皮肉気な声が背中を叩いたけど、決して振り返ってなんかやらなかった。

フロントでチェックインを済ませてから、一階のレストランに入ってメニューをオーダー。向かいに腰掛けている二人にさっきのことを謝ろうとしたら、アルトさんからストツプがかかった。

「さっきのことで謝んのは無しだ。俺とコイツも口出したからな」

「うん、だからまずは食事しよう」

キリトさんがそう言うと、ちょうどウェイターが湯気の立つマグカップ3つを持ってきた。中には赤い液体が注がれていて、いい香りが漂ってくる。

「それじゃあ、パーティー結成を祝して」

「ん」

「はー」

キリトさんの言葉に合わせてカップを合わせて、赤い液体を一口啜る。

「……おいしい……」

その味わいは、昔お父さんに少しだけ貰ったホットワインに味が似ている気がした。でも、こんなメニューにはなかったよね？

「あの、これは……？」

そう聞くと、キリトさんは悪戯に成功した男の子みたいにニヤリと笑った。

「NPCレストランはボトルの持ち込みができるんだよ。俺が持ってた《ルビー・イコー》っていうアイテムさ。カップ一杯で敏捷の最大値が1上がるんだぜ？」

「えっ！ そ、そんな貴重なもの……」

「この世界の酒なんかストレージに入れてたつて旨味が増すわけじゃねえしな。そもそもコイツ、知り合い少ねえから開ける機会もねえし」

「お前に言われたかないから。てゆうか、この前呼び出して『飲むぞ！ 酒開ける！』とか言ってたのはどこの誰だよ？」

「条件だつて大量に食料調達させておいて全部食いやがったのはどこの誰だよ」

二人のやり取りを見ていて、クスクスと笑ってしまった。本心から笑えたのは、もし

かしたらこの世界に閉じ込められた以来初めてかもしれない。

色んな人にマスコット代わりにチャホヤされていた時にはいろいろ話しかけられはしたけど、こんな和やかで暖かなお話は無かったから、すごく懐かしく感じる。

カツプが空になってもその暖かさを手放したくなくて、しばらくそれを胸に抱いていた。

そうしていたら、ふと思ったことが口をついて出ていた。

「……なんで……あんな意地悪言うのかな……」

私の眩きを聞いた二人が言い合いを止めて、スツと目を細める。

「君は……MMOは、SAOが……?」

「はい、初めてです」

「そうか……どんなオンラインゲームでも、キャラクターに没頭すると人格が変わるプレイヤーは多い。善人になる奴、悪人になる奴……それをロールプレイングと、従来は言ってたんだらうけどな。でも俺はSAOの場合は違うと思う」

キリトさんの目が鋭さを増した。

「今はこんな、異常な状況なのにな……そりゃ、プレイヤー全員が一致団結してクリアを目指すなんて不可能だって判ってる。でも、他人の不幸を喜ぶ奴、アイテムを奪う奴……殺しまでする奴が多すぎる。俺は、ここで悪事を働くプレイヤーは、現実世界でも



心の底から腐った奴なんだと思ってる」

そう吐き捨てるように言ってから、ハツと気が付いた様にゴメンと謝られた。

「これは俺の推測でしかねえけど……」

と、キリトさんの話を黙って聞いていたアルトさんがお行儀悪く座り直しながら言った。

「どいつもこいつもこの現状に現実感を持ってねえんだよ」

「現実感？」

「そうだ。S.A.Oで死んだら『死ぬ』つつう現実を、どこかで信用してねえんだ。まあ、死んでも死体が残るわけでもねえし、葬式をするわけでもねえ。だから、ソイツの中にある倫理観や道德観が薄れちまう。けど、ここでの暮らしは無駄にリアルだから、人間としての地が出ちまう。人間つつうのは元々欲望に忠実な生きモンだからな。金が欲しい、美味しいもんを食いたい、人より上に立ちたい、強くなりたいたい、力を試したい。普段は理性で抑え込んでる筈のそういう欲求を満たすのには、S.A.Oは格好の場所だった。もし誰かを殺し、リアルで死んだのだとしても悪いのは自分じゃなくて自分をここに閉じ込めた茅場で、自分は被害者の一人に過ぎねえから責任は自分には無い」

そう語るアルトさんの口調は淡々としていて、どこか悲しげだった。

「けどよ、そうならもう人間じゃねえ。理性つつう抑止力を持たなくなった欲望の

塊は獣となんら変わりねえ」

そう言って黙り込んでしまう。キリトさんもアルトさんの言葉の意味を考えているように下を向いてしまっている。

なんとなく場の空気に耐えられなくなつて、思わず声を上げた。

「ならー！アルトさんとキリトさんは良い人つてことですよね!？」

「……いや、俺はそんなんじゃない。人助けだつて碌にしたことないし、仲間を……見殺しにしたことだつて……」

そう言つて苦しげに顔を歪ませるキリトさんが、何か深い悩みを抱えていることは、子供の私にも臍氣に判つた。そのせいなのかな、気付いたら握られたキリトさんの右手を無意識のうちに両手で包み込んでいた。

「キリトさんは、いい人です。私を、助けてくれたもん」

精一杯、あたしの気持ちを伝えようと思つてそう言うと、キリトさんから力が抜けて、口元に微笑が乗つた。よかつたあ、と安堵していたら、今度はククつと堪えたような笑いが聞こえてくる。アルトさんだ。

「こりゃ一本取られたな」

「ああ、俺が慰められちゃつたな。ありがとう、シリカ」

言葉と一緒に向けられた、キリトさんの優しげな微笑み。

胸の奥の方がずきんと、痛むのを感じて咄嗟にキリトさんから手を放して胸を抑えるけど、疼きは一向に消えてはくれない。

……なんだろう、これ……

「ど、どうかしたのか……?」

「シリカ?」

「な、なんでもないです!おなか空いちやつたな!」

自分自身よく判っていないその理由を上手く伝えることなんて到底できなくて。とりあえず、今はそう笑顔でごまかすことにした。

夕食を食べ終わった後、明日に備えて休むことになって、部屋に戻った。二人の部屋は偶然にもあたしの隣。

ちなみに、二人は相部屋だったりする。曰く、「別に知らない間柄でもないから、金が浮く方を選ぶ」とのこと。

部屋に入って、着替える前にキリトさんから貰った武器の練習をしようと思いつた……けど、どうにも集中できない。胸の奥にズキズキするものが居座り続けて、上手く

できなかつた。

「……………ふう、着替えて寝よう……………」

メニユーの全武装解除のボタンをタッチする。ポリゴンとなって装備が消えた下着姿でベッドに倒れこんだ。髪を結んでいた髪留めも無くって、肩まである髪の毛がポフツと枕に広がる。壁を叩いて呼び出したポップアップメニユーで部屋の明かりを落とせば寝る準備は完了。

全身に重い疲労感を感じていたから、すぐに眠れると思ってたんだ……………んだけど。

「……………眠れない……………」

ピナと一緒にたってからは、ずっと毎晩ふわふわの体を抱いて寝ていたからか、広いベッドが心細い。

ふと、左隣の……………二人が泊まっている部屋に意識が向いた。

もう少し、話してみたいな……………

そんな風に考えて、少し自分自身に戸惑った。今まで男性プレイヤーに積極的に近づくことは避けていた。なのに、出会ったばかりの二人のことが、どうしてこんなにも気になるんだろう。

ちらりと、視界右隅の時刻表示を確認すると、すでに二十二時近くで、知らず知らずの内に溜息が零れた。

……いくらなんでも非常識だし、やっぱり寝ちやおう……

そう思う頭とは裏腹に、体は勝手にベッドから降りていて。

……ちよつとノックしてみるだけ……

そうやって自分を言いくるめて、装備メニューから、持っている中で一番かわいいチエニツクを身に纏う。下ろした分目元に掛かってしまう前髪をお気に入りのヘアピ  
ンで留めて、姿見で恰好をチエツク。問題ないのを確認してドアを開けた。

廊下に出て数歩進んで、ドアの前で躊躇うこと数十秒、右手で控えめにドアを叩いた。

「……客か？」

「俺が出るよ。はい、今開けます」

そんな会話が聞こえてきた後、ドアが開く。

簡素なシャツ姿になっていたキリトさんがあたしを見ながら目を丸くした。

「あれ、どうしたの？」

「あの——」

……お話したいです……じゃあ、子供っぽ過ぎるよね……

二人よりあたしが年下なことなんて判り切ったことなのに、なんでか幼く見られるのが嫌で、どうにかこうにか口実を引っ張り出す。

「——ええと、その、あの……よ、四十七層のこと聞いておきたいと思って……」

「ああ、分かった。廊下に行く?」

「いえ、あの……よかつたら、お部屋で……」

反射的にそう答えてしまって、慌てて取り繕う。

「あつ、あの、貴重な情報を、誰かに聞かれたら大変ですし! それに、アルトさんも中にいることですし!」

「あー、んー……まあ、いいか……」

自分でも無理があるなあと思ったけど、キリトさんは困った様にそう言つて、中に入るよう促してくれた。

お言葉に甘えて部屋に入ると、窓際の椅子に座つてコーヒーを飲むシャツ姿のアルトさんと目が合う。

「ん? ああ、シリカだったのか。何か用か?」

「ああ、四十七層のことについて聞きたいらしい」

「なるほど。んじゃ、アレ出すか」

「そうだな」

「あの、アレつて?」

「このことさ」

言いながら、キリトさんはアイテムをウィンドウから呼び出したのは、小さな水晶が

収めてある小箱。何に使うのかはさっぱり判らないけど。

「きれい……なんて言うんですか？」

「《ミラーージュ・スフィア》つつつて、行ったことのある層を丸ごと映すアイテムだ」

アルトさんが説明してくれているうちに、キリトさんはアイテムを起動させて、テールの上の空間にホログラムが出現した。

「うわあ……！」

思わず感嘆の声を上げる。街の中の建物やダンジョン内の構造まで細かく映し出されていて、メニューから見られる簡易マップとは大違いだ。

「ここが主街区だよ。で、こっちが思い出の丘。この道を通るんだけど……この辺にはちよつと厄介なモンスターが……」

指先を使って淀みなく四十七層の地理を説明していくキリトさん。その声を聞くだけで、気分が柔らかくなっていく気がする。

「この橋を渡ると、もう丘が見え——」

「キリト」

不意にアルトさんが名前を呼びながら手で遮った。

「……………？」

顔を上げた先のキリトさんは、さつきまでとは打って変わって険しい顔でドアを睨ん

でいた。既にアルトさんは動いて、ドアを引き開けた。

「誰だッ！」

同時にどたとどたと駆け去る音。走り寄ってアルトさんの体の下から首を出すと、階段を駆け下りていく人影が見えた。

「な、何……？」

「……聞き耳立ててた野郎が居やがったな」

「え……でも、ドア越しじゃ声は聞こえないんじゃないや……」

「《聞き耳》スキルが高ければその限りじゃないんだ」

「ま、ンなもん上げてんのは、碌な奴じゃねえがな」

そう言っただけでアルトさんはドアを閉めて椅子に戻ってしまった。

キリトさんは考え込む表情をして、ベッドに座る。

言い知れない不安を感じて、両腕で自分の体を抱きしめながらキリトさんの隣に座った。

「でも、なんで立ち聞きなんか……」

「……多分、すぐに分かるさ。ちよつとメッセージ打つから、待っていてくれ」

そう言っただけでウィンドウからホロキーボードを表示させ、指を走らせていく。

それを横目に、私はベッドに丸くなった。



そうしているうちに、キルトさんの背中と、気付けば九カ月も会っていないルポライターの父さんが記事を書いている背中がダブって見えて。いつの間にか、不安もどこかへ消え去って、意識も微睡へと落ちて行った。

耳元で奏でられるアラームで意識が浮上していく。設定時刻は午前七時、いつもの起きる時間。

「んんん……ふあう……」

伸びと欠伸を一つして、何とは無しに辺りを見回す、と。

「おう、起きたか」

何て声をかけられた。

「あ、おはようござい——」

——います……と、続ける筈だった言葉は、どこか彼方へ飛んで行ってしまいました。

……え！な、何でアルトさんが……!?

「……どうした？」

「ふえ!?……あ、え……あの……」

唐突に予想外の状況に陥ったせいとか、あたしの頭は目下混乱の極みだ。

テンパって上手く言葉が出てこないあたしを他所に平然としているアルトさん。

そ、そうだ！　まずは落ち着いて昨日の事を思い出してみよう！！

とりあえずそう結論づけて昨日の出来事を振り返っていく。

ええっと、昨日は口ザリアさんと喧嘩して、ピナが死んじやって、キリトさんとアルトさんに助けてもらって、宿に入つて、寝る前に二人の部屋で四十七層のことを話して、それから、それから……

そこまで思い出して、はっとした。

わ、私……あのまま寝ちやつたんだ……

恥ずかしさのあまり頭に血が昇っているのが判る。

今、あたしの顔を鏡で見たら見事に真っ赤になっているに違いない。

「あ、あのっ！」

「状況把握できたか？」

「は、はい………？」

「起こそうかとも思ってたんだが、気が引けてな。ドアも開けらんねえし」

「い、いえ！　寝ちやつたのはあたしのせいですし、ベッドも借りちやつたみたいで……」

「それなら気にすんな。元々どつちかが椅子か床で寝る筈だったのが、二人ともそうなっただけだ。SAOなら何処でどんな姿勢で寝ても、体痛めることもねえしな」

そう言いながら親指で指した方に目を向けると、未だに床に横になっっているキリトさんの姿が。

「そろそろキリトの奴も起こすか……」

「あ、あのー！」

「ん？」

キリトさんを起こそうと向き直ったアルトさん呼び止める。

何で呼び止めたのか、自分で分からなかったけど、何かしら話さないと、と思って、さっき思い出した昨日のことについて聞いてみることにした。

「あの、昨日も聞いたんですけど、アルトさんは何で手伝ってくれるんですか？」

「勘違いすんな。別にお前のために手伝う訳じゃねえ」

「それは……嘘、ですよ？ キリトさんが妹さんのこと話してるときも、アルトさんちよつと変な顔してましたし」

私がそう言うと、一瞬驚いた様な目をしてから、気まずそうに溜め息を一つ。

「……意外とバレてるモンなのな。言わなきや駄目か？」

「できれば、聞きたいです」

もう一つ、今度は諦めた様に溜め息。

「……キリトと同じだ。妹分が二人いてな、それがお前と似てたからだ」

そう言つて顔を背けてしまふアルトさん。横顔から見える頬が少し赤くなつて、照れてるんだつてすぐに判つた。

「はいっ！」

やっぱり悪い人じゃなかつたんだ

そして、何故だか、胸の中に暖かいものが広がるのを感じた。

なかなか起きなかつたキリトさんのお腹をアルトさんが蹴り飛ばして起こして、しつかり朝食を食べてから四十七層の主街区《フローリア》へとやつて来た。

通称《フラワーガーデン》とも呼ばれていて、たくさんのきれいな花々に見惚れる。

心行くまで花の香りを楽しんでから立ち上がつて、ふと、周りを見回してみると、花壇の間の小道を歩いているのは男女二人連ればかり。皆しつかりと手を繋いだり腕を組んでだりして、見るからにカップル。

私たちは、どう見えてるのかな……

周りの光景からついそんなことを考えた。歳の離れた二人の男の人を連れ歩く私。

……男の二人があたしを取り合う三角関係？ それとも禁断の愛に目覚めた三兄妹とか……!?

そこまで考えて、浮かび上がった妄想を掻き消す様に首を思いつきり横に振つた。

わ、私！いい、一体今何をつ！

「おい、どうしたシリカ」

「顔が真っ赤だけど……」

「なな、なんでもありません！さあ攻略に行きましょう！ さあさあさあ！」

あんまりにもあんまりなことを考えてましたなんて言える訳も無く、無駄に元気よく宣言して二人の腕を引っ張って走る。

「う、うん」

「お、おう」

目をグルグル回しながらそんなことをしたせいで、二人に要らない心配を掛けてしまったしまったのは、ご愛嬌ということだ。

ゲート広場を出た後、思い切ってキリトさんに妹さんのことを聞いてみた。

すこし間を空けてから、ぽつりぽつりと話し始めて、私を助けてくれたのは自己満足だ、つてアルトさんと同じように言ったキリトさんの顔が、少し寂しいそうに見えて……。

「……妹さん、キリトさんを恨んでなんかなかったと思います。何でも、好きじゃないのに頑張れることなんかありませんよ。きつと、剣道、本当に好きなんですよ」

どうにかに言葉を探して、何とかそれだけは言うことができた。

「シリカには昨日から慰められてばかりだな……そうかな……そうだと、いいな」

そう言われて、何か暖かいものが心に広がるのを感じた。

今朝、アルトさんと話した時と同じように。

……そっか、判った。あたし、二人が心の内を話してくれたことが嬉しいんだ……

そんな風に自分の気持ちをそう纏めている内に、いつの間にか街の南門まで来ていた。

「さて……ここから攻略を開始していくわけだけど」

「はいっ！」

「シリカの今のレベルと渡した装備なら、このダンジョンの敵はそうそう危険な相手じゃない」

喋りながらあたしに水色のクリスタル、転移結晶を手渡してくる。

「とは言え、フィールドでは何が起こるか判らない。俺かアルトが離脱しろって言ったら、必ずその結晶でこの街でもいいから跳ぶんだ。俺たちのことは心配しなくいい」

キリトさんの目配せにアルトさんも頷く。

「で、でも……」

「約束してくれ。俺は……一度パーティーを全滅させてるんだ。二度と同じ間違いは繰り返したくない」

そのあまりの真剣な表情に、頷くしかなかった。

「心配すんな。そうならねえように俺もコイツも細心の注意を払う。ソイツはあくまで保険だ」

アルトさんの言葉にキリトさんはあたしを安心させる様にニツと笑った。

「うん、その通りだ。じゃあ、行こう!」

「はい!」

そう返事をして、意識を闘いへと切り替えた。

昨日みたいに、慌ててパニックになったりしない。そして、絶対にピナを生き返らせる……!」

そう、私は心の中で自分に言い聞かせた。

確かに言い聞かせた。言い聞かせてはいたんだけれども。

「きや、きやあああああ!?!なにこれえ!!? 気持ち悪い!!」

……何事も思った通りにはいかないもので。

人食いな花でも言うべきフォルムをした、気持ちの悪い大型植物モンスターと遭遇するたびに悲鳴を上げて、パニックって、何度気絶しかけたか判りません。

ピナ……私のこと慰めてね……

そんなことを思いながら、生理的嫌悪に苛まれる戦闘をなんとか凌いで思い出の丘への坂道突き進むこと数時間。とうとう頂上に到着した。

「うわあ……！」

「着いたな」

「やつとか……」

フロリアの花畑とはまた違う、空中にパツと浮かぶ庭園の様なその景色。

「ここもすつごく綺麗……やつぱり、ここSAOが全部偽物だなんて思えないなあ」

「つて、ちがう！ 《ブネウマの花》！」

見惚れてしまいかけたのを振りきって、道中二人から教えてもらった通り、一つだけ飛び出している岩に向かって駆け出した。

「……うわあ……」

岩に駆け上がると、まさに目の前で白いつぼみが花開くところだった。

完全に開ききった花へ手を伸ばして摘むと、ハッキリと《ブネウマの花》と表示される。

「やったあ……！」

「どうやら無事見つかったみたいだな」



「はい！ キリトさん、アルトさん、ここまでありがとうございます！」

「礼を言うのは街に戻って、ピナを蘇生してからにしろ。この辺はモンスターも多いしな」

「はい！ 早く戻りましょう、善は急げですよ!!」

「はいはい」

「急ぎ過ぎて転ぶなよ」

フローリアを出てきた時と同じように、二人の手を引いて急かす私に苦笑いを浮かべる二人。

ただどそんなことはお構いなしに、二人を引っ張って来た道をずんずんと引き返す。本当ならキリトさんから渡された結晶を使ってひとつ跳びで帰りたいところを我慢してるから、このくらいは許してほしいな、なんて思いながら。

どうしても逸る気持ちをどうかこうにか抑えながら来た道をどんどん下っていった。もちろん途中モンスターにも遭遇したけど、行きで結構な数を倒しちゃった所為か、それとも別の理由があるのかはともかく、行き程の苦労もなく麓に下りてこられた。

「ふう……ここまで来たたら街まであと一時間くらいですね！」

「そうだな。もう一息、頑張ろう」

「はいっ！ あつ、そうだ！ 街へ着いたら改めて何かお礼させてください！」

「いや、別にそこまでしてもらわなくても……詳しくは話してなかったけど、俺たちもここに全く用が無かったわけじゃないからさ」

バツが悪そうにそう言うキリトさんだけど、あたしは首を横に振る。それじゃあ、私の気が収まらないし。

「それでも、です。アルトさんにもお礼をするのは街に戻ってからって、さっき言われちゃいましたし」

「……そういう意味で言ったわけじゃねえんだが」

「私がそういう意味で解釈したんですから、それでいいんですっ！」

「ハア……分かった分かった、勝手にしてくれ」

「はいっ、勝手にしますね！」

呆れたように頭を抱えて言うアルトさんに、あたしはニッコリ笑って勢い良く頷いた。なんだかお礼の押し売りみたいになっちゃったけど、結果オーライかな。

そんな話をしながら道を進んでいって、小川に掛かった橋の真ん中ぐらまで来ていた。

「はははっ、今度はアルトがシリカに一本取られたな」

「うっせ、ついさつき励まされてた奴が言えた——キリト」

「?……ッ!」

擲掬われたアルトさんが言い返す途中で言葉を切ったかと思うと、不意にキリトさんの名前を読んで立ち止まった。けど、スツと細められた視線の先にあるのはキリトさんじゃなくて、半ばまで差し掛かった橋の対岸。突然呼ばれたキリトさんも一瞬困惑したような表情を浮かべたけど、直ぐに何かに気付いた様に対岸……正確には対岸に生い茂った木々へと険しい視線を向ける。

「ど、どうしたんですか、二人とも……?」

楽しかった雑談から一転した二人の雰囲気はどうしていいのか判らなくてそう二人に声を掛けると、返事の代わりにキリトさんの人差し指が唇にサツと添えられた。

黙ってろってこと?

何が何だか判らないけど、とりあえずその指示に従ってあたしが首を傾げながら黙っている、二人はチラッと一瞬だけアイコンタクトをとってから、アルトさんはあたしを背に庇うような位置に立って、キリトさんは少し離れる。

「バレてんの分かってんだろうが、出てきやがれ」

「えっ?」

少し大きな声で対岸に向かって声を発するアルトさん。

思わず声を上げてキリトさんの背中越しに二人が視線を向ける木立を凝視するけど、人影は全然見えなかった。だけど、それから数秒もするとつい最近見知った顔が木の影から姿を現した。

「ろ、ロザリアさん？なんで、ここに!？」

驚きのあまりそう叫んだ。けど、相手はあたしのことなんて眼中にないようで、アルトさんとキリトさんの二人に目を向けて不敵に笑った。

「アタシの隠密ハイテジツクを見破るなんて、見た目の割に高い《素敵》スキル持つてんのねアンタ達。ちよつと侮つてたかしら？ まっ、それはいいわ」

それから、今度は私に視線を向ける。

「随分と嬉しそうにしてたじゃない、シリカちゃん？ その様子じゃあ無事、《プネウマの花》を入手できたみたいね。オメデト。それじゃ——」

欠片もそんなこと想ってないような声音であたしに祝いの言葉を言うと、蛇の様に目を細めるロザリアさん。その瞬間、酷く嫌な予感がしてゾツと身体に寒気が走った。

「——その花、さつさとアタシに渡してくれる？」

「なっ?!? なに言つて……そんなことできるわけじゃないじゃないですか!」

「アンタの出来る出来ないなんて知つたこつちやないの。いいから花をよ——」

「そうはいかないな、ロザリアさん。いや……オレンジギルド、『タイタンズハンド』のリーダーさん？」

それまで黙っていたキリトさんが、ロザリアさんの言葉を遮ってそう言った。思ってもみなかった単語が耳に入ってきた所為で、私の理解が追いつかない。

「で、でも、ロザリアさんはグリーンのはずじゃ……」

「オレンジギルドつつても、ギルドメンバー全員がオレンジな訳じゃねえこともある。コイツらみたく、カモを見繕うためにスパイのグリーンをどつかのパーティーに潜伏させて、機会が来たら待ち伏せて襲う姑息な連中もいるってこった。昨日盗み聞きしてやがったのはあの中の誰かだろうよ」

「そ、それじゃ、二週間ぐらいずっとパーティーにいたのも……!」

「そういうこと。あのパーティーの戦力評価しながら、たあっぷりお金が貯まって、狩り頃になるのを待ってたの。ホントなら近々収穫の予定だったんだけどね? 一番楽しみな獲物だったアンタが抜けちゃうからどうしようかと思ってたのよ。そしたらさ、死んだトカゲ生き返らせるために《ブネウマの花》取りに行くって言うじゃない? アレって今が旬でさあ、結構良い値で売れんのよ。やっぱり、情報収集ってすごい大事よねえ? でも——」

私から目を離して、また二人へと視線を戻すロザリア。その瞳には嘲りの色が浮かん

でいた。

「——アンタ達、そこまでゼーンぶ判つててそのガキに協力したわけ？　ロリコンかなんか？　ホントに身体で誑し込まれでもしたわけ？」

「んなわけあるか。むしろ自分で言つてて分んねえのかよ」

「は？　何が言いたいのよ？」

「俺たちもアンタらを探してたつてことさ。それが答えだ」

キリトさんの言葉に、今までずっと浮かべていた嘲笑を歪めるロザリアさん。

「……なんですつて？」

「テメエら、十日前に三十八層で『シルバーフラグス』つつうギルドを襲つて、リーダー以外皆殺しにしやがっただろ。覚えてつか？」

「……ああ、アイツら。ええ、覚えてるわ。思つてたより貧乏で拍子抜けだったわ」

「……リーダーだった男は、毎日朝から晩まで、最前線のゲート広場で土下座して泣きながら仇討してくれる奴を探してたよ。でも、あの人は依頼を引き受けた俺たちにアンタらを殺せとは言わなかった。殺さずに黒鉄宮の牢獄に入れてくれて、そう言つたんだ。大の男が、恥も外聞も無く泣きながら地面に額を擦り付けてそう言つた気持ち……アンタらに判るか……!？」

決して大きくない声。

「だけど、すごく強い語気で放ったキリトさんの言葉を、ロザリアさんはフンツと鼻で嗤った。」

「わっかんないわよ、そんなモン。やあね、全く。ソイツもアンタ達もマジになっちゃってさ。ここで人殺したって、ホントにソイツが死んでる証拠なんかないじゃない。もしホントに死んじゃってたって、そんなんで現実に戻った時、罪になるわけないっての。だいたい戻れるかどうかも判んないのにさ、正義とか法律とか倫理とか……アハハハハっ!! ホント、笑っちゃうわよね。アタシそういう奴がイツチバン嫌いなのよ。この世界に妙な理屈持ち出して善人ぶってるアンタ達みたいな奴がね!」

醜く顔を歪めて嗤うロザリアさんの言葉を聞いて、アルトさんが昨日言っていた通りだなど、私は思った。

その様は、まさしく理性を捨てて、欲望塗れの獣に堕ちてしまった人間の成れの果て。とても同じ人間だなんて思いたくなかった。

「それでえ? アンタ達はそんな死に損ないの言うことなんか真に受けちゃって、アタシ達を態々探してたわけ? ホントにヒマなのねえ……まっ、アンタ達が撒いた餌にまんまと釣られちゃったのは認めるけど。でもこの人数、たった二人でどうにかなるなんてホントに思ってたの……?」

そう言いながらロザリアさんが木立の方へ手で合図を送ると、ぞろぞろと二十人近い

プレイヤーが木の影から出てきた。

余りの数の多さに顔から血の気が失せて行くのが分かる。

「ふ、二人とも、脱出しないと……」

恐怖のあまり目の前にいるアルトさんのコートを引っ張ってそう言うけど、なんでもないことのように首を横に振った。

「逃げろっつーまでは、結晶を用意してここで見てろ」

アルトさんは武器を抜かず、その場から動かないキリトさんへと加勢に行く様子もなく、ただ視線だけを向けた。その表情には心配している様子は全くない。

いくらキリトさんが強くなったって、あんな数無茶だよ……！

そう思って、今度はキリトさんにも聞こえる様な大きな声で叫んだ。

「逃げようよキリトさんっ！ アルトさんもっ！」

その声が辺りに響いた途端、武器を取り出してキリトさんに近寄って行った男たちの雰囲気が変わった。

「キリトに、アルト……？」

そして、その中の一人が、何かを思い出す様にブツブツと呟いた。

「黒尽くめで盾無しの手剣……灰髪の大剣使い……ま、まさかコイツら、【黒の剣士】と

【狼剣士】!？」



そう叫ぶと、思わずといった感じに数歩あとずさった。顔色も見るからに悪くて真っ青だ。

「そーいや、そんな呼び方されてたか。シフと一緒に戦ってたただけだろ。恥ずいたらねえつつの」

「いやいやいや。タイムした訳じゃないシフと戦ってる奴が『だけ』ってことはないだろ  
【狼剣士】さん」

「うっせえ【真っ黒黒助】」  
「勝手に呼び名を変えるなよ」

状況なんてお構いなしに……というか、ロザリアさん達が見えていないかのように雑談をする二人。

そんな光景に、なんとか声には出さなかったけど、私の心の中は大荒れだった。

ふ、二人とも落ち着きすぎだよ！ てゆうかタイムしてないって何!? もうわけわかんないよう……! !

「や、ヤベエよロザリアさん! こ、コイツらっ、ピーター上がりの攻略組だつ!」

私の内なる混乱を他所に、男たちは混乱に陥っていた。

不敵な嗤いを張り付けていたロザリアさんも、焦った様に声を裏返す。

「こ、攻略組がこんなところをウロウロしてるわけないじゃない! どうせ、名前を騙って

ビビらせようってコスプレ野郎共に決まってるわ！ それに、もし本当に【黒の剣士】と【狼剣士】って言っても、この人数が相手なら敵じゃないっ！」

「そ、そうだ！ 攻略組なら、すげえ金とかアイテムとか持つてんぜ！ オイシイ獲物じゃねえかよ！」

そう大柄な斧使いの男の言葉と共に氣勢を取り戻していく男たち。

眼を血走らせて得物を手に息を荒くする姿は、それこそ獲物を目の前にした野生の獣を想像させる。

「こんなの相手するなんて無理だよ！ 逃げようよ、ねえ！」

あの人数相手では勝ち目なんかない。そう思つて恐怖に震えながらクリスタルを握りしめて必死に叫ぶけど、やつぱりアルトさんはアタシの前に立つて加勢に行こうとしないし、キリトさんも構えない。

「さあ、アンタ達……ヤっちまいな！」

キリトさんのそんな様子を諦めと捉えたのか、ロザリアの声と同時に男達が一斉にキリトさんへ飛びかかる。

「オラアアアア!!」

「死ねやアアア!!」

取り囲んで剣や槍、斧、棍棒……あらゆる武器をキリトさんの体に突き立てる。同時

に放たれる幾つもの攻撃と幾条もの眩しいライトエフェクトが、キリトさんの体を揺らした。

「いやあああ！やめて！やめてよ！死んじやう……キリトさんが、し、死んじやうよつ！」

目を覆いたくなるような光景にそう叫ぶけど、男達が耳を貸すはずもない。

その様子に見ていられなくなつて、いつの間にか零れていた涙を拭い、短剣の柄を握つた。

「こんな……こんなの！もうこれ以上、見てられないよ！」

短剣を引き抜いて駆け出そうとした瞬間、柄にかけていた右手をアルトさんにグツと握られた。

「ストップ」

「と、止めないでください！ あたしじや役に立たないかもだけど、でも見てるだけなんて——」

「いいから落ち着け。あいつのHPを良く見てみな」

「——できない……え？」

そう言われて、視線をアルトさんの顔からキリトさんへ移すと、すぐに、気が付いた。HPが全然減つてない？……ちがう、ちよつとづつ減つてるけど、すぐに回復し

ちやつてるんだ！

私と同じように、男達も異変に気付いたのか戸惑いの表情を浮かべていた。

「なにをチンタラやってんのよ!?遊んでないでさっさと殺しなさい!!」

いつまで経っても終わらないリンチに業を煮やしてロザリアさんがそう叫ぶ。

その声に合わせて男たちの攻撃も激しさを増すけど、それでもキリトさんのHPバーが目に見えて減ることは全くない。男たちは動揺を隠せずに、じりじりとキリトさんから遠ざかっていく。

「……10秒あたり350前後くらいか?」

「ああ、それぐらいだ」

突然でてきた数字。私もキリトさんを囲っていた男たちやロザリアさんも判らずにいると、キリトさんがそれを察したように頷いた。

「350っていうのはアンタらが俺に与えるダメージの総量だよ。十秒あたりのな。俺のレベルは78。HPは約14500。俺を倒すにはアンタ達は410秒間、休まず殴り続ければいい……本来ならな。でも俺には《バトルヒーリング戦闘回復》のスキルで、10秒間に350以上の自動回復がある」

「まあ要するにだ。テメエらが何時間攻撃しようがそいつは倒せねえってことだ」

「そ、そんなの……そんなの、アリアかよ……」

「レベルに差があるからって……無茶苦茶すぎるだろ……」

「……そうだ。たかがレベル。そんなレベルの数字が増えるだけ。たったそんなことで、ここまで無茶で、どうしようもなく覆せない差がつく……ついてしまう。それが、レベル制MMOの理不尽さってものなんだよっ！」

何かに耐える様に、キリトさんは手を強く握りしめて叫んだ。

その気迫に気圧されたように、男達は更に後ずさる。

「……チツ、やってらんないっての」

不意にロザリアさんは舌打ちすると、腰から転移結晶を取り出した。

逃げる気なんだ！

直ぐにそう判ったけど、今から動き出しても間に合わない。そうは思った——

「転移——」

ピー——！

——んだけど、アルトさんが指笛を吹いた瞬間、灰色の大きな影がロザリアさんを襲い、その手から転移結晶を奪った。

「ヒッ……」

逃げ道を塞ぐようにロザリアさんたちの後ろに着地したのは、とても大きくて綺麗な灰色の狼だった。

口に啜えた転移結晶をその大きな牙で噛み砕き、アルトさんがオブジェクト化した剣を放れば、それを啜え構えた。

聞いたことがある。剣を啜えて戦う狼がいるって。で、でもそれは噂で本当にいるなんて……！

キリトさんが腰から転移結晶よりも更に青いクリスタルを取り出す。

「これは俺たちに依頼した男が全財産を使って買った回廊結晶だ。黒鉄宮の監獄エリアが出口に設定してある。さっきも言った通り、アンタら全員これで牢屋まで跳んでもらう。あとの面倒は〔軍〕の連中がしてくれるだろうさ」

「フンツ……もし、嫌だと言ったら？」

まだ抵抗する気力が残っているらしいロザリアさんが強張った笑みを浮かべてそう言ったけど――

「全員殺す」

――アルトさんが即答した言葉に、一瞬で笑みが崩れて顔を蒼褪めさせた。

「――つて言いてえところだが、それじゃ依頼主の意志に反するんでな。そんな時は……」

「これを使うさ」

そう言つてキリトさんがコートから取り出したのは、薄緑色の粘液に濡れた小さな短剣。

毒々しいで鈍く光る粘液が、何かしらの状態異常バッドステータスを引き起こすものだろうっていうのは簡単に想像がついた。

「Lv5の麻痺毒が塗られてる。コイツで一刺しすれば、俺たちでも10分は動けない代物だ。全員に放り込むのに、それだけあれば事足りる。さて、潔く自分の足で入るか、短剣を突き刺されて動けなくなつたところを無理やり投げ込まれるか……好きな方を選べ」

無慈悲に選択を突きつけられた男たちは、手に持っていた武器を投げ捨てて項垂れた。

それを確認したキリトさんはクリスタルを頭上に掲げる。

「コリドー・オープン！」

システムコールを認証すると、結晶は砕け散って青い光の渦が空中に出現した。

次々と男たちがゲートの中に入っていく中、ロザリアさんだけは一向に動こうとせず、とうとう最後の一人になっていた。

「……やりたきややってみな。グリーンのアタシを傷つけたら、今度はアンタ達がオレンジに——」

「言つとくけど、俺もアルトも基本的にソロだ。1日2日オレンジになることぐらい、どうつてことない」

そうやってロザリアさんに近づこうとするキリトさんを、アルトさんが手で制した。  
「……アルト？」

訝しげに声を掛けるキリトさんに返事をしないで、アルトさんは進み出ると、ロザリアさんの襟首を掴んで宙に吊り上げた。

「ちよ……やめて！離せつての！ちよつと魔が差したつてだけのことでしょ!?……話し聞けよ！ねえ聞いてつてば！そ、そうよ！アンタ、アタシと組まない？アンタほどの強さならなんだつて好き放題——」

そしてそのまま橋の外側に宙吊りにした。

「<sup>けいがい</sup>軽鎧ツつっても水の中に落ちりや、浮き上がつてこれねえ。お前が装備を全部解除するのが速えかHPがゼロになるのが早えか見物だな？」

「ツ！ツ！ツ！」

ロザリアさんはアルトさんの手を外そうともがいてるけど、命綱は外そうともがいてるアルトさんの手なんだ。

「……た、助け……いや……死……たく……な……い……」

「死にたくねえ？ああ、そうだろうな。けどな、今までお前たちが奪ってきたのは、今テメエが縋つてるもんだ！」

「……あつ」



ロザリアさんの体から力が抜けると溜息をついて、アルトさんはロザリアをコリドールに放り込んだ。

その直後、回廊そのものも消滅した。

背中を向けたままのアルトさんがどんな顔をしているか分からないけど、心配そうに狼さんがアルトさんに歩み寄って、頬つぺたを舐めた。

「……大丈夫だ、シフ」

アルトさんがシフと呼んだ狼さんの頭を撫でると嬉しそうに喉を鳴らして目を細める。タイムしてないって言うてたけど、アルトさんとシフちゃんの絆は私とピナに似てる。

「あ、アルトさん……えつと……」

その子？この子？……何て表現すれば良いんだろう？

「ん？……ああ、こいつはシフだ。タイムした訳じゃねえんだが、妙に懐かれてな。撫でてみるか？」

そう聞かれ、恐る恐る手を伸ばすと意図を察したシフちゃんが自分から顔を擦り付けてきた。

わっ！柔らかい！ずっと撫でてたいくらいフワフワしてる！

「すまなかった。シリカを囿にするようなことしちゃって。本当は俺達のこと、昨日の

内に言おうと思っただけ……怖がられると思って、言えなかったんだ。まあ、結果的に必要以上に怖がらせちゃったけど。シリカ、改めて街まで送るよ」

そうして街の方へ歩き出そうとする二人一頭に、咄嗟に声を掛ける。

「あ、あの！シフちゃんに乗っても良いですか？」

シフちゃんの大きさはアルトさんと同じぐらいだし、人が乗っても大丈夫だよね？

そう言うと、シフちゃんが私が乗り易いように伏せてくれて私が跨がれば、一気に視界が高くなった。それでやっと私もいつも通り笑うことができた。

「……やっぱり、二人とも行っちゃうんですか？」

無事《フロリア》の街に着いて、ピナを蘇らせるためにとつた宿屋の部屋。

そこで、私は二人にそう切り出した。

「5日も前線から離れちゃったしな」

「ああ。すぐに戻って遅れを取り戻さないとだから」

「……そう、ですよね」

一緒に連れて行ってください。私と一緒にいてください。

言いたい言葉は次々浮かんでくるけど、それは私の我儘だっけはつきり分かってたから、口に出して言うことは出来なくて。

「……わ、私……私……!」

溢れようとする気持ちを抑えると、出すことのできない言葉の代わりにそれは涙に形を変えて、頬を伝って零れていった。

いきなり泣いたりなんかしたら、二人の迷惑なのに……!

そう思つて涙を手で拭うけど、何度拭つても両目から無数に零れる涙は一向に止まってくれなくて。

そうしたら、とんつ、と肩に手が乗るのを感じた。

「俺たちの間にある、レベルだとか強さだとかいう差なんて、そんなに大したものなんかじゃない。所詮はこの世界で作り出されてる幻なんだから。そんなものよりもっと大事なものはたくさんある。だから、今度はリアルで会おう。そうしたら、また同じように友達になれるよ」

今度はポン、と頭に手が置かれる。

「そもそも、レベルが足りねえからつて上の階層に行っちゃいけねえ、なんてルールはねえんだ。会いたくなったら、いつでも会いに来ればいい。SAOこの世界は確かに偽物だけど、俺たちの心は本物だ。したいことがあるなら、すりゃいいんだよ。だから、そんなに泣くんじゃねえよ」

「はい……はいっ!」

返事をして、涙を拭って、笑顔を作る。そしたら、今度は涙は止まってくれた。

本当は、そのまま二人に抱きついてしまいたかったけど。

さすがに、それはちよつと恥ずかしいから……

その気持ちはぐつと抑えて。

「さあ、ピナを呼び戻そう」

「はいー」

ピナを生き返らせるために、プネウマの花の雫を羽根に垂らしながら、あたしは心の中でピナに語りかけた。

それは、あたしを助けてくれた、あたしにたくさん大事なことを教えてくれた二人の……たった二日間だけいた、あたしの大好きな、お兄ちゃんたちのお話し。

## 第6刀：闇を喰らう者

ごちそうさん。昼も食ったし、話の続きといくか。

シリカと別れたあと、俺とキリトも別行動をすることになった。元々、ソロで動き回ってたからな。朝別れて夜に会うことの方が多かった。

ま、俺はシフと行動することが多かったし、キリトも行く先々で女を引っ掛けてー  
イエ、ナンデモアリマセン。

なんだよ里香。……キリトがお前に《ダークリパルサー》を打ってもらうまで、俺はキリトとは別行動だったぞ。

それでも、顔を合わせる度に戦ってたが。

んーと、どこまで話したっけか？

「いい天気だな、シフ」

「シフー」

六十二層の主街区にある公園で、丸くなったシフの腹を枕代わりに寝そべってた。今のレベルは70。ソロの安全マージンを考えれば、あと5ぐらい上げとけば安心だな。

シフのお陰でレベリングも捗るし、2日3日もあれば十分だろ。

そう考えつつも、暖かな陽射しとシフの体毛の心地よさに抗えず、このまま寝てしまおうかとも考えた。

「ヨー！こんなところでお昼寝カ？」

「アルゴか……何か用か？」

「ようやく名前で呼んでくれたナ。別に用はないけど、お得意様が見えたからナ。声を掛けただけダ」

お前も暇だな。

「言つとくが、お前に構ってる暇はないぞ」

「今まさにお昼寝しようとしてたやつの台詞とは思えないナ」

俺たちの話し声で起きたんだろう。シフが目を覚まし、アルゴに顔を伸ばすが――

「に、にやあアア!!」

全力で数メートル後退った。

「オイラに犬を近付けるんじゃない!」

「犬じゃなくて狼なんだがな」

「どっちでも一緒だ!狼を品種改良したのが犬なんだからナ!」

起源を辿ればそうなるだろうが、【鼠】なら苦手なのは猫だけにしとけ。

初めて会ったときは、逃げるアルゴを遊び相手と勘違いしたシフが一日中追いかけて回してたんだっけ?自分よりデケエ狼が自分のことを追い掛けてきたら、そりゃトラウマにはなるだろうが、この様子だとリアルでも犬が苦手なのか?

「あー、お陰で目が覚めた」

《アルゴノウト》の強化素材はもうこの階層じゃ手に入んねえし、コルにも困ってねえからクエをこなす必要性もねえ。

キリトに喧嘩を売るのもありだがー

「暇を持て余してるみたいだな」

「特に用事もねえし、あいつみてえにあれやこれやと物持つ趣味もねえからストレージの整理もしなくていいいな」

「とかなんとか言ってるけど、シーちゃんに防具の提供してたみたいだな?となるト、下

層プレイヤー用に性能が高めの防具は取って置いてるのか？」

「こいつ……！どこでそれを……！」

「ニシシ、情報は時に剣より強いんだヨ」

「……それを言うってこたあ何かあんのか？」

「こいつがこの決まり文句を俺に言うときは大抵碌なことじゃない。

「五十層のボス部屋に大穴が開いたのは知ってるか？」

「1週間ぐらい前だったか。大騒ぎになったわりに、これといった動きもねえから、今じゃその話しも聞かなくなつたな。それがどうかしたのか？」

「昨日夜十二時を過ぎた辺りから、穴の底から何か呻き声みたいな声を聞いたってプレイヤーが増えてル。キー坊も行ったみたいだけど、特に何もなかったらしイ」

「それで俺に白羽の矢が立ったわけだ。

「シフ？」

「どうする？と鼻を鳴らすシフを撫で、メリットとデメリットを天秤にかける。

「デメリットは当然、情報が不確定なことだ。何かあるのか、何が起こるのかが不明瞭。無用心に近づいて死ぬこともあり得る。」

「メリットも何かあるのか不確定なことだ。誰も確かめてねえから、レアアイテムが存在する可能性がある。」



「分かった。引き受ける」

「毎度！何か情報が手に入ったら、高く買うヨ」

だから無事に帰ってこいつてか。回りくどい言い方をするな。

おー、確かに大穴だな。

目視で直径30メートル程の孔。誰が用意したのか、転落防止用の柵が孔をぐるりと囲っている。柵に近寄れば、坂道が螺旋を描いて下に続いているのが見えた。

ここからじゃ底は見えねえな。光量の関係も考えれば深さは20メートル以上つてところか？

「なんだ!? 扉が閉まったぞ!」

上層に向かおうとしてたパーティーか？ボスもいねえのに扉が閉まるなんざー

その時俺の耳に変な音が聞こえた。何かが転がるようなそんな音だ。

視線を孔に、正確には孔の円周をなぞるように伸びる螺旋の坂道に向ければ、白く回転してるもんが20近く坂道を登ってる。

咄嗟に回避して柵から離れれば、それが柵を破壊してドリフトして止まった。

骸骨と車輪？車輪と骸骨か？そんな表現しか浮かばないほど目の前のモンスターは常軌を逸していた。

棘付の車輪を体の一部とした骸骨、という表現が正しいのかもしれない。

《Wheel skeleton》

車輪骨組み。いや、車輪骸骨のが正しいか。

バウンドしながら迫る車輪骸骨を《アルゴノウト》で弾こうとするがー

硬エ！……違う。回ってつから回転部分に対する衝撃を受け流してんのか！

跳ね上げられた衝撃に身を任せ跳ぶ。真下を通過し、後ろ髪を数本引き千切られるが

やり過ぎせた。

「嫌だアアア！やめろおおおああ!!」

「死にたくない！死にたくないよおお！」

「何なんだよ！こい……！」

突進を受けノックバックしまた轢かれる。その繰り返しで轢き殺される奴、錯乱して武器を放棄するが後ろから撥ね飛ばされる奴、叫んでいる途中で轢き潰される奴。

阿鼻叫喚つてのはこの事か、と他人事のように思いながら真横を通り過ぎようとした車輪骸骨の横つ面を《アルゴノウト》で串刺しにし、まだ息のあるプレイヤーに群がる

車輪骸骨目掛け投げ捨てる。

親しくもねえ人間が何人死のうが知ったことじゃねえが、この事態を引き起こしたのは間違いなく俺だ。なら、この事態を終わらせるのも俺の役目だ。

嫌悪値が溜まったことで全ての車輪骸骨の視線が俺に集まる。投げた車輪骸骨が衝突した衝撃で孔に落ちた奴を除けば数は18、それでも一斉にこちらに来られれば間違いなく轢き殺される。

「シフ!!」

どこから入ってきたかは知らねえけど、シフの気配は感じていた。

車輪骸骨の波を飛び越え、俺の元に着地したシフの背に飛び乗り、間一髪で車輪骸骨の波を越えて孔の底へと続く坂道に着地する。

下がどうなってるか分からねえが、このまま車輪骸骨をボス部屋に放置すりや何人死ぬか分からねえ。扉も開かねえとなりや上層に上がるプレイヤーがいなくなる。

そうなりや、攻略組の戦力も減る一方だ。

イチバチの賭けだが下に降りるしかねえ。

孔の底は言ってみれば骨だらけ。

ポリゴンにテクスチャを張り付けたただけとは解っているが、言い知れない不吉さは感じる。

ここに来る途中で車輪骸骨たちはバランスを崩したのか道を外し、下に落ちていったがこの様子だと即死だったみたいだな。安易に飛び降りなくて良かったと安心した。

「グル……………」

「どうしたシフ？」

下に降りるにつれシフの様子が変だ。朝起きた時には体調？は良さそうだったが…………。

とにかく先に進もう。この孔が開いたままじゃボス部屋の扉も開かねえし、この騒ぎがあつたと知られりゃ五十層に人が寄り付かなくなる。

「先に進もう。行けるか？シフ」

「ガウ…………」

HPは減つてねえんだが…………何かに怯えてる？

奥にはこの孔と同じ大きさの洞窟が見える。先に何かがあるか分からねえことだらけだが、ここで立ち止まるよりかは事態は進展すんだろ。

洞窟の中は人間の顔と同じ大きさの鼠。中には人間大の鼠までいた。普通の鼠であつたならまだ良かったが、問題はその外見。目が取れかかつてたり、何かに食い千切られたのか骨が見えてたり、それが群れをなして襲ってくる。ハッキリ言えばグロイ。

SAOは13歳以下禁止だったよな？

「シフ、大丈夫か？」

「グル……………」

まだダメか…………。

「もうすぐで洞窟を抜ける。もう少しだ」

歩みが遅くなつていくシフを励ましながら洞窟を抜ければ、中世の建物が眼前に広がった。

ただ、街に生气はなく街全体が死んでる。

丁度ここは街を見下ろせる位置にある。体を落ち着けられる場所を見つけられるはずだ。

「…………あの教会まで行くぞ」

街の中も胸に孔の開いた黒い鎧の騎士だったり、亀の甲羅のような物を背負った黒い

ローブを着たナニか、中にはミイラのように骨と皮だけのヤツもいた。……最後のヤツはどこにそんな力があるのか両手斧を持ってたが。

不気味極まりなく統一性もねえモンスターだらけだったが、共通するのは死なないと言うこと。HPはゼロになるものの、すぐにフルまで回復しやがる。

殺すことができねえから身を隠しつつ、移動ルートを記憶し鉢合わせないよう最大限の注意を払ってようやく教会に辿り着いたものの、扉が開かねえ。

「おい！誰がいねえか！」

扉を乱暴に叩きつつ声をあげるが反応はない。

仕方ねえ扉をぶち破ってでもー

「……珍しいこともあるものです。まだこの街に正気の間人が生き残っているとは……」

若い女の声。NPCか？それともプレイヤーか？

「あんた誰だ……いや、それはいい。それより中に入れてくれ。相棒の様子が変なんだ」「救いを求める者を助けるのは吝かではありません。ですが確認を。貴方の体、そして貴方の相棒の体に暗い孔はありませんか？もしそれがあれば、残念ですが、教会の中へ入れることはできません」

暗い……孔？

危険ではあったが防具を全ての装備から外し、全身をくまなく探すがそれらしいものはない。シフも体毛を掻き分けて探してみるがシフにもない。

「大丈夫だ。それらしいもんは見当たらない」

「そうですか。少々お待ちを今鍵を開けますので」

鍵というよりは門かんぬきを引き抜くのに近い音が聞こえ、中から修道服姿のシスターが顔を見せた。

「……驚いた。相棒というのは狼だったのですね。どうぞ中へ。教会の中なら、亡者たちも中へ入ってこれません」

亡者？

中を案内され、暖炉の前でシスターが向き直った。

「私はフィリアノール教会のシスター、シラと申します。以後お見知り置きを」

「アルトだ。それでこつちがシフ」

「フウー……フウー……」

大分弱ってるな。

「この子もシフというのですね。地上の子供たちにここの空気は猛毒。すぐに解毒の用意を致します。暫しお待ちを」

猛毒!?

悪いシフ、知らなかったとはいえ長々と歩かせた。

「お待たせいたしました。この白湯と一緒にこの粉末を」

「これは？」

「亡者の骨を粉末にしたものです。ここの空気に適応させるにはここに住む生物を取り込む他ありません。大丈夫です。害はありません」

「藁にも縋る思いだ。信じるぞ」

粉末を飲ませ少し経つと鼻息も落ち着き、丸くなって寝息をたて始めた。本当に害はなさそうだな。

「礼を言う。あんたのお陰で助かった」

「困ったときはお互い様です。……しかし、懐かしいですね。大狼と共にある剣士。かつてこの街を守護していた騎士様のようにではないですか」

……聞きたいことが山ほどあるな。

「なあ、この街はなんだ。とてもじゃねえが人の住む街とは思えねえ。それに地下にある瘴に空がある」

「この街はもともと地上にありました。ですがとある魔竜の怒りに触れ、決して消えることのない炎に包まれました。次第に大地は炎を避けるように隆起し、この街は地の底



へと沈み決して明けることのない夜が訪れてました。そして人々は魔竜の炎を1ヶ所  
に集めることで、擬似的な太陽を作り出すことに成功はしましたが、更なる災厄がこの  
街を襲ったのです。その災厄が人々の不死化。決して死ねず、決して殺されない。最初  
の頃は人々は歓喜しましたが、次第にその異常さに気付いたのです」

「それが亡者……」

「はい。人々は不死となったと言いましたが、これは完全なる不死ではありません。こ  
ちらをご覧ください」

シラはシスター服の襟を緩め胸元を見せる。そこには黒い円が刻まれ、炎のように揺  
らめいている。

「これは刻印。完全なる不死ではないと言うのは、これを刻まれ死しても甦るのです。  
そしてその都度、記憶と人間性を失ってしまう。そうして最後には自身が失ったものを  
他者から奪うべく、さ迷い続ける亡者と成り果てるのです」

「あんたはさつき亡者たちはこの教会に入れねえって言つたな、ならあんたは亡者じゃ  
ねえのか」

「死して甦る度に記憶と人間性を失うのであれば、死なねば良いだけのこと。幸いなこ  
とに策を弄する時間は多くありますから」

クスクスと笑ってはいるが目は笑ってねえ。

「それで？騎士様ってのは？」

「狼の騎士。狼騎士と呼ばれたこの街の守護者です。大剣を振るえば無双。万夫不当とまで呼ばれた最強の騎士様です」

狼の騎士……ってことは――

「お察しの通り、騎士様もあなた様のように狼の友がおりました。奇しくもその名も同じく“シフ”、と」

成る程な。大剣使いのプレイヤー、シフという名の狼。この二つがフラグだったって訳か。

「かつて私にも友がおりました。ですが、闇を喰らうという使命の果てに正気を失ってしまいました」

暖炉の中を揺らめく火を見つめ、ふと思い出したように切り出してきた。

「もしかしたら私が今まで正気でいられたのも何かの思し召しかもしれません。私の友はこの教会の奥。さらに地下へと続く穴の先にあります。貴方の力で私の友を、そしてこの街を終わらせては貰えないでしょうか？」

「俺に殺せるのか？あんたの話だとここに住んでるヤツは不死なんだろ？ならそいつも不死である可能性が高い」

「確かに。ですが、私が意味もなく騎士様の話をしたとお思いで？あちらの剣をお持ち

ください」

指し示した壁には両刃の大剣。手に取り《鑑定》スキルを発動してみれば「狼騎士の大剣」の名。

……深淵特攻？

「かつて騎士様は「深淵歩き」の異名がありました。その名の通り、人々を襲う深淵を滅ぼすために自ら闇へと赴いたのです。数多くの闇を斬るために打たれたその剣ならば私の友もきつと……」

闇を喰らうヤツに対して深淵特攻の武器か。

「いいだろ。引き受けよう」

《闇を喰らう魔竜》

この魔竜つてー

「苦も楽も同じこと、命の色でございます。色なき命になんの意味がありませんや」  
……なんだ？ 頭ん中に靄もやが掛かかったみてえなー

「テメエ、シスターじゃねえな。なにモンだ」

「フフフ……私のこと知りたいたいのですか？ なんと強欲な殿方なんでしょう。闇なやを共にしてみたいものですが、残念です。私の友もはや待てぬと啼ないておりますので」

床が割れ深淵へと堕ちていく。

「っ……………」

頬を濡らす感覚に意識が覚醒していく。

『苦も楽も同じこと、命の色でございます』

ッ！あの腐れ女<sup>アマ</sup>!!

ガバリと体を起こすが、そこは薄く水の張った巨大な空洞。上を見上げても教会の床すら見えねえ。

……よく即死しなかったな。こんな浅い水辺じゃ落下の衝撃なんざ吸収すらできねえだろ。クソ！まだ頭が回らねえ。

ッ！シフ！シフはどこに……………!

見渡せばそこには巨大な黒い影。

《Dark eater midir》

闇を喰らう者ミディール

災厄が目を覚ました

## 第7刀：灰の大狼

咆哮。足元の水面が漣を立て、空気が痛いほど震えるのを感じる。圧倒的格上。だが逃げ場はない。

HPバー……6本!?フロアボス並みだぞ!?

開いた口が開き、白い光が収束していく。

自身の足元から縦に光が迸らせ、咄嗟に横つ飛びで回避したが足先を僅かに掠める。1拍置いて光が迸った痕をなぞる様に爆発。

爆風に煽られ不様に地面を転がる。

光線とか怪獣王かよ……。

背負った《狼騎士の大剣》の柄を握り、放たれる光条を避け、爆風に煽られ、それでも足は止めない。

一瞬でも足を止めれば待っているのは死。

上等だよクソツタレ!

尾を振り上げたのを視界の端に捉え、地面に着いた四肢に入る力具合、視線、体勢、重心からあの尾が薙ぐであろう軌道を視界に反映する。

跳んで真下を通る尾に大剣を突き刺し、そのまま背に向け一気に駆ける。この図体だ。体に取り付いた虫を振り払うのは簡単じゃねえだろ。

ミディールは翼を広げ飛翔。

遥か上にある天井にまばたきするよりも早く自身の背中を俺ごと叩き付け、降りかぶった右の前肢を落ちる俺に降り下ろし、地面に叩きつけられ跳ね上がったところを左の前肢で薙ぎ払った。吹き飛ぶ俺に難なく追いつき、情け容赦なく尾を降り下ろす。

HPの全損こそ免れたが、残ったのは数ドット。

陥没した地面に埋められ、ヤツの口に揺らめく炎が見えた。

……強過ぎんだろ……どうやって勝てっつーんだ……。

負けイベントだと言われた方がまだ納得できる。

だが、心強い援軍は無く。秘められた力が覚醒するなんて都合のいいこともない。

誰にも看取られることもなく、虫けらのように殺される。……死ぬ時なんざこんなもんか。

炎が収束しヤツの喉が白く光を放つ。白い炎を浴びれば、リアルなら骨も残さず蒸発するだろう。

……こんな死は俺が望む最後じゃねえ。

こんなところで死んで堪るか！悔いはねえと笑いながら死ぬるまで、俺は死ぬねえ！

ミディールの口腔から白炎が放たれ大地を穿つ。

凄まじいまでの爆炎と爆風。

確実に相手を仕留めるといふミディールの意思か、それともそのようなプログラミン  
グされた故か。

個人相手に放つには明らかな過剰火力。

勝利を確信した咆哮。

だが相手の死を確認もせずに注意を怠るのは、戦場においては命取りだ。

「アアアアアア！」

言葉というよりは雄叫びおたけに近い咆哮。

魔竜は爆心地を見るが黒煙に阻まれ、その奥は見えない。とー

視界がブレ、地面に頭を叩きつけられた衝撃で角が折れ、左の眼球が潰れる。辛うじて潰れなかつた右目の視界も血のように紅く染まる。

その視界の中で見えたのは体を回転させ、今まさに大剣を振り上げんとする殺したはずの人間。

顎をかち上げられ、満身創痍の体から放たれたとは到底思えない力によって、あの巨  
躯ぶが打ち上げられ背中から地面に叩き付けられた。

ある感情が魔竜の胸を燃やす。

それは憎悪。あるいは憤怒。

0と1の2進数で構成された魔竜。

その筈であるはずだが、あの魔竜が抱いている感情はデータを越えたものだ。

「……素晴らし〜」

口を突いて出た言葉は賞賛。

干渉し、超越し、塗り替えていく。

人の可能性、そのものだ。

気紛れで設定し用意したものだだったが、まさか挑む人間が現れようとは……。

ブレスを躲し、噛みつきを往<sup>い</sup>なし、尾を逸らす。

荒削りではあるが、経る毎に洗練されつつある。

数少ない隙を嗅ぎ分け魔竜を追い詰めていく。

難易度はソロ口では攻略できないもの。レイドを組んでも勝てるかどうかだ。

しかし――

彼が教会で出会った人物。

彼を魔竜の棲み家に落としただけでなく、実装はしたがその攻略難易度からあの街へ通じる道をすべて閉じたにも関わらず、システム外とも言えるナニかで孔を開けた。



NPC、ではない。かと言ってプレイヤーでもない。突如としてそこに現れた。

そうとしか表現できない。

「貴方が望むなら全てをさらけ出して構いませんよ？ 殿方の欲望に答えるは女の務めでございます」

「ッ！」

「ここは管理者でなければ入ることはできない。

つまり私だけが入ることの出来る統括管理エリア。

「誰かね？ここは極めて個人的なエリアなのだが」

「殿方の寝所に忍び込む術は嗜んでおりますので」

コロコロと笑っているが、踏み込んではいけない。

下手に踏み込めば骨まで舐<sup>ねぶ</sup>られるだろう。

「何が望みかね？」

「私が心地よいと感じられる全てでございます。殿方に嬲られるのも、嬲るのも。虐げられるのも虐げるのも」

苦痛も快樂も同じこと。そう彼女は語る。

「この世の全ては私の為。私の悦樂を阻まぬとお約束いただけるのならば、私も貴方の

夢を阻むことは致しません」

「おアアアアア！」

相手の全てから動きを読め。

《バトルヒーリング》  
《戦闘回復》のお陰で回復はしてるが一撃でも貰えばそこで終わりだ。

飛び上がり地面に吐くブレスは着弾地点から輪を描いて広がる。首を振りながらなら足元に潜り込めば当たらねえ。

だが後ろ足付近や尾の付け根近くにいれば無動作飛び上がり足元にブレスを吐く。まさかあのクソアマに感謝することになるとはな！

足と体、背中や翼にはダメージがほぼ通らないが頭、特に顔面には通る。

それも深淵特攻のお陰で一撃でバーの3割削れる。

無強化で、だ。

突進しながらの噛み付きを跳んで躲し、すれ違い様にヤツの角を掴む。

「らアアア！」

飛翔し、俺をふるい落とす為に滅茶苦茶な軌道で飛び回るが、大剣を逆手に持ち直しヤツの額に切っ先から鍰元まで一気に突き込んだ。

「ギアアアアアア!!!」

「ぐっ！」

運良く俺が落ちた教会の床の穴に激突し《狼騎士の大剣》から手を離すことで教会の中へと戻って来れた。

再び底に堕ちていくミデールを一瞥し、生きている実感を噛み締める。

……生きてる。俺はまだ生きてる。

Congratulations!! の文字が宙を舞いラストアタックボーナスが贈られてくる。

《暗い孔の刻印》

呪いじゃねえか……ツッコむ気力もねえよ。

効果は被ダメ30%軽減にデバフ耐性とSTRとAGIに補正、回復量20%増加、亡者特攻に……不死殺し？

「私の友を相手にあの健闘振り、思わず昂ってしまいました。どうです？ 戦いの興奮が

冷めぬ内にここで獣のように媾まぐわうというのは。恐らく炎のように燃え上がりー」

「黙れ淫婦いんぶ」

「つれない方。……それとも貴方にはこちら媾まぐわいがお好みでしょうか」

言うが早いか俺の懐に潜り込んだかと思えば、針の穴を通すような正確さの掌底を叩き込まれる。

地面を転がり、再び穴に落ちる寸前で縁ふちに掴まることで下に落ちることを防いだ。

「咄嗟に後ろに飛ぶことで衝撃を最小限に抑え込むとは、流石にございます」

深いスリットの入った修道服に包まれた脚を見せつけるようにしやがみ、縁を掴んだ俺の手を慈しむように指先で撫でる。

そして小指と床の間に滑り込ませるように動かしー

「ですが淫婦とお呼びになつたのは許しがたい屈辱です」

跳ね上げた。次は薬指に動かしー

「こう見えて慈悲深いとー」

「慈悲深い？ 違うな。テメエはテメエのことしか見てねえ。自分だけを見て、自分だけを愛してる。究極の自己愛だ。全くヘドが出るな」

俺の言葉が琴線に触れたのか無言で薬指が縁から外される。次は中指と見せかけ人差し指に狙いを定める。

「私は貴方のような人は嫌いなのです。口が悪くやることなすこと刺々しい。素直ではない殿方は大變氣に入りません」

人差し指も外され、最後の中指へと――

「くっ……!」

「良い顔です。とても虐めがいのある良い顔です。もし貴方がそんな殿方でなければ、一夜の妻となることも吝かでもないのですが」

「ハッ! 冗談! 俺もテメエみたいな女はゴメンだ! 人間の皮を被った悍ましい自己愛の怪物が!」

「人類とはみな未熟な獣。欲を食べ、欲に溺れ、欲に溶ける泡沫の実なのです。私はその欲を受け止める受け皿と――」

「それも一概にテメエの為だろ! 自分以外を家畜か虫けらみてえに見てる目えしてるぜ、あんた!」

「精一杯の虚勢。とても愛しく思います。次に会うことがあれば、閨の中で。永遠の極楽浄土をご覧にいらして差し上げます」

中指を外され、また穴の底へと墮ちることになった。

「……生きてる。投身自殺なんざ二度とごめんだ」

体を濡らす感覚に目を覚ませば、あの魔竜がいた空洞。

地面に突き刺さった《狼騎士の大剣》を引き抜き、武器の耐久値を回復させる《修理の光粉》を使用する。

装備画面を開き、《暗い孔の刻印》を装備から外そうとするが――

外れねえ!? 呪われた装備は外せねえってか!

何度タップしても装備を解除できない。デメリットはねえが、あの尼僧色欲魔と同じものを装備してるかと思うと虫酸が走る。

……まあいい。出口を探すしか。

結晶系のアイテムは持ってきてねえから、自分の足でマツピングしつつ上に行ける道を探すしかない。

とはいえ、ここの空洞は広い。まずこの空洞から出るだけでもかなりを時間を食うな。

洞窟を見つければその中を歩くが、十分な光源がなく歩くスピードはお世辞にも速いとは言えない。

「松明でもありやありがてえんだけどな」

たれば話、無い物ねだり。不毛だな。

無数の人の腕と長い髪を生やした蜘蛛、頭が靄のようなものに包まれた亡者、泥のようなスライム、毒矢を吹き、両手剣を振り回す青い頭巾を被ったチビ亡者、宝箱に人の腕と脚を生やしたミミック。

《暗い孔の刻印》の効果でこのエリアのモンスターの狩れるようになったが、不意を突かれねえよう慎重に動かねえと行けねえのは変わらねえ。

「チッ！」

横穴から飛び出してきた2頭の犬を大剣で叩き潰し、飛び掛かってきた1頭の首根っこを挿んで壁に叩き付けてから、串刺しにする。

正直、出てくるゲームを間違えてんじやねえかと思うモンスターばかりだ。キリト辺りがここに来たりや発狂してたかもな。

岩の体を持つガーゴイルを例にしても、頭が脳ミソだったり、山羊だったり、牛だつ

たり。

SAN値をゴリゴリ削って来る、気味悪いモンスターばかりだ。

やっとの思いで洞窟を抜ければ雪の降る幻想的な世界。満点の星が見え、青白い月が昇ってる。

オオオオオオンン！

今の声！シフ!?

後ろを仰ぎ見れば、こちらを見下ろす灰の大狼。

青白い月をバックに俺を見るその姿は、雪が降っているのも相まって幻想的だ。

「シフ！良かった……無事だったか」

安堵の声を漏らす、シフの目は暗く澱んでいる。

「ガアアアア!!」

飛び退き、俺がいた場所が踏み碎かれる。

シフの口元に青い光が集まり、それが霧散すれば歪な大剣が啞えられていた。

「シフ！俺だ！分からないのか！」

《Great gray wolf》

HPバーは1本。カーソルは……………赤。

どうしてだ！敵対フラグなんざー



『白湯と共にこの粉末を』

……ッ！あのクソアマア！

足を払う一閃を跳んで躲し、続けて振るわれた一閃を大剣を盾に防ぐ。地面に膝と手を着き、滑る体を止めて視線を上げれば空中で回転し遠心力を乗せた縦の一閃を横に掲げた大剣で受け止める。

「思い出せシフ！俺はアルトだ！」

「グルアア！」

シフの剣撃を凌ぎ、声を掛けるが止まる気配はない。

……何をムキになってんだ。どんだけ大事に思っても殺らなきや殺られる。そんなけだろうが。

「誰がお前に剣を教えたと思ってる」

こいつの真に注意すべきなのはその咬合力顎の力。

並大抵の防具なら、それごと噛み砕かれるだろう。

啞えた大剣を叩き折り、左前足を切り裂く。踏みつけを避け、斬り上げる。

傷付き倒れることが多くなってきたが、戦意は折れない。限界は訪れない。

正気を失ってんのか、自分の意思で俺と戦ってんのかは知らねえが、せめての手向けだ。俺の手で終わらせてやる。

「グウウウ」

「赦しは請わねえ怨めよ」

左肩に噛み付かれ、大剣を腹から突き上げた。

内側から切つ先が背中を突き破り、肩を噛み砕かんとばかりに力が込められる。

俺かお前。どっちが先に力尽きるか根比べだ！

加速度的に減っていくお互いのHP。

レッドゾーンに落ちても振り払うこともしない。

頬を舐める感触にシフの顔を見れば、暗く澱んでいた目に光が戻っている。

「シー」

フ、と続けるよりも早く青い破片となり宙に舞う。

「……くつ、うああああアアア！」

膝から崩れ、込み上げる感状のまま哭く。

それから先はよく覚えていない。

気が付けば五十層のボス部屋に戻っていて、足元にシフの形見《大狼の大牙》が落ちていた。

「アルト！」

「アルトくん！」

俺を呼ぶ声に意識を戻せば、キリトとアスナが駆け寄って来ていた。

血相変えてるがどうしたってんだよ……。

「良かった……無事だったんだな」

「メッセージ送つても返事がないし、本当に心配してたんだよ？ 私たちも後を追おうとしたんだけど……」

アスナの視線を辿れば大穴の影も形もない。後を追おうとして穴が塞がって立ち往生してたつてところか。

「……シフちゃんは？」

「シフは死んだ。俺が殺した」

キリトの肩を借りて六十二層の宿屋に戻り、ありのままを話した。地の底にある街のこと、その街で会ったクソアマのこと……そしてシフのこと。

「そんな……」

「なあアルト……その、なんて言えばいいか分からないけど……」

「……うしー！ウジウジすんのはこれで終わり！ウダウダすんのは性に合わねえからな  
！」

んだよ。キョトンとした顔しやがって。

「だってシフちゃんが……」

「他の誰でもねえ俺のこの手で殺したんだ。後悔は勿論あるが、だからってウダウダ考えてんのは違うだろ」

シフを連れ孔を降りなければ良かった、あのアマの言葉を鵜呑みにして、シフに白湯と亡者の骨粉を飲ませなければ良かった。今となってはそう思うが全ては後の祭り。重要なのはその経験をどう活かすか。

《大狼の大牙》をペンダントに加工して首からぶら下げる。あいつは今もここにいます。失ったことは悔いるが、それを理由に止まることだけはしねえ。

だが――

あのクソアマだけは必ずこの手で殺してやる

## 第8刀：フアランの不死隊

ーとまあ、シフトの別れは前触れもなく来た。

確かに失ったものは大きかったが、得るものもあった。

……泣くなよ。

さて続きだ。俺が《特双剣》スキルを手に入れたときの話だ。

六十七層の森林地帯にある毒沼の奥に霊廟れいびやうがあったんだが……知らない？

まあ聞け。

アルゴに頼まれて、そこの調査に向かったときだ。

「毒沼の調査あ？」

「そうダ。誰も足を踏み入れたがらなくて、情報が集まらない。奥に何かがあるのは分

かってるんだけどナ」

俺も行ったことがあるから分かるが、毒沼に足を踏み入れれば、徐々にゲージが溜まって最後には毒のバステになる。

それだけなら敬遠されねえが、問題はフィールドの不気味さ。

毒沼によつて半ば朽ちかけた木々、森が死に動物の声すら聞こえず、枝からはなんと表現すれば解らねえが不気味な袋のようなものがぶら下がってる。

本能的に近付きたくねえ場所だ。

あるボスから手に入れた装備品のお陰でデバフには耐性があるから、毒沼も走破できるとは思うが――

「やりたくねえ」

元々グロイのには耐性があるが、あの日の出来事のお陰でグロモンスターにまた相対したいかとなると答えはNoだ。

「なラ、オレっちの体を好きにしてもー」

「色仕掛けなんざ十年早え。成長してから出直してこい」  
そう言うのはあのクソアマでこりごりだ。

あれから2ヶ月近く探し回ったが、噂も聞かねえ。

間違いないS A Oにいるはずだが――

「どうしたアルゴ」

「人が気にしていることばかりズケズケ言って!!デリカシーは無いの!!」

「お、おおう……いや、でもだな？」

「言い訳しない!!」

「……はい」

「大体いつもいつもー」

「流石に言い過ぎたか？」

濁流のような罵詈雑言の果てに泣かれ、なし崩し的に調査に向かうことになった。  
滅多にキレねえ奴がキレると恐えつてのは本当なんだな。

解毒ポーションの買い貯めも出来たし、歩き回る分には問題はねえな。  
取り敢えず毒沼に足を踏み入れるがー

気持ち悪い……!

生暖かい泥が脚甲の隙間から入り込み、ヌルリとした感触が直に伝わってくる。視界の左下隅にゲージが表示され、ジワジワと溜まっていくがデバフ耐性の効果で溜まるスピードは遅い。

ゴポリ、と粘性の高い液体特有の気泡が抜ける音。  
毒沼の中に何かいる。

《Rotten slug》

腐ったナメクジ……腐れナメクジでいいか。

体色が沼と同じ色だから見分けづれえ、な！

《アルゴノウト》を振り上げ、腐れナメクジを泥ごと巻き上げて叩き潰すが、そこで失敗した。

衝撃で泥が飛び散り、頭から思い切り被つちまった。

「ブッ……口の中にも入った」

ホント最悪だ……。

ゲージが溜まり毒になれば解毒ポーションで回復し、またゲージが溜まり切るまで毒沼の中を進む。

所々には小さな島があり、そこには無数の掘くれた角を生やし人の姿に近いモンスター《Ghrus》や変な動きで迫る《Madghrus》、引き抜いた木を振り回す



バカでかい《Elder ghrus》。

短剣や木製の盾と槍を持ったグルーの攻撃にも毒付与があつたが耐性持ちだからな、あまり意味はなかつた。

それで取り敢えず奥まで来たまでいいんだが、高さ20メートルほどの石の扉が閉じられていて、これ以上は進めねえな。

「フ……フフフ。まさかこんな奥まで生きた人間が来るとはな……」

大剣を背負つたNPCが扉の脇に座つて、俺を見るなり嘲笑。

「この先に行きたいんだが」

「……正気か？……その刻印……そうか……フ……フフ」

刻印……《暗い孔の刻印》のことか？

「この先に進みたいなら、道中にあつた火を消すといい。……ここからも見えるだろう？」

炎が洩れる石の煙突が全部です。……また戻らねえといけねえのか……。

「余裕があるなら、梯子を登ってみるといい。あそこからなら正確な場所が判るはずだ」

カエルとトカゲを二つを掛け合わせたようなモンスターが吐き掛ける砂のようなブレスを躲し、斬り捨てながら進む。

ダメージがねえのが気になるな。毒とは違うゲージが溜まってたし。

確か名前は《Basillisk》。

バジリスクって言や、猛毒を持ち返り血を浴びただけでもその毒で人を殺す蛇の名前だよな？他にもコカトリスと同一視もされることがあって、目が合うだけで人を石に変えるとか……てこたあ、あのプレスを浴び続けければ石になって即死かよ。

……？あのNPCが言ってた梯子か？随分長えな。

塔に掛けられた梯子の下に集まってる腐れナメクジを蹴散らしてから、梯子に手を掛けるが、枝からぶら下がってる気味悪い袋のようなものから数体のグルーが落ちてきた。

犬のように四足歩行し、毒沼を上を跳び跳ねてる。

「うえキモ」

ヘイトが向かええうちに登っちまおう。

バカ正直に全部と戦う必要はねえんだし、それにハッキリ言っちゃえばあまり手応えがなくて拍子抜けしてる。確かに気味の悪いフィールドで敬遠してたところだが、グロいのに耐性があつて毒に対する回復手段を整えていければ、苦戦する所じゃない。

「おお……絶景だな」

梯子を登りきり、後ろを振り返ってみれば六十七層が一望できるほどの高さ。眼下の

目を向ければ、ぐるりと壁に囲まれた毒沼の森。そして木よりも高く聳そびえる石造りの煙突。

3ヶ所を線で結べば、正三角形。火を消したあと向き直る角度さえ間違わなけりや、迷うことはねえな。森ん中じや薄暗さと目印になるもんがねえから、方向感覚が狂つちまうんだよな。

取り敢えず塔を探索してから下に降りるか。

元は見張り台だったのか柵に囲まれ、塔を中心に回れるようになってる。途中、背中に結晶を生やした小さいトカゲを倒せば、《光る楔石》とか言うアイテムをドロップした。アイテム詳細画面を開けば、特定の武器を強化するのに必要らしい。

「なッ！シフ……？！」

塔の内へ入って見れば、無数の剣が突き刺さりその中心に鎮座する半ば石化した大狼。

見間違えたがシフにしては二回りデカイ。

「思いの外、引き摺ってんのか……」

受け入れたはずだ。受け止めたはずだ。

「あいつらはそいつの血を取り込むことで、不死の力を得た。不死となったあいつらを終わらせるのは、刻印を身に刻んだあんなだけだ」

「あんたは……」

「言い忘れてたな、俺はホークウッド。騎士にも成れず、戦士にも成れなかつた半端者だ。俺もあいつらも、この狼の血に誓いを建て、刻印をその身に宿した。だが、かの騎士の意思を継ぎ深淵と戦い続けたが、中には深淵に吞まれ正気を失う奴も出てきてしまった。頼む。あいつらを終わらせてやってくれないか？」

《群にして個》

半ば強制的に受注されたクエスト。

なんかそんな感じの敵キャラが出てくるゲームが記憶にあるクエスト名。

それはそれとして、刻印絡みとなるとあの女が関わってる可能性はある。未だNPCなのかプレイヤーなのかは判らねえけどな。

火の場所を覚え、毒沼で《発狂グルー》に追いかけて回されながらやつとの思いですべての火を消した。

そうして扉の前に戻ってみれば、鎮座した3つの皿を模した灯籠に日が点いていて重低音を響かせながら、人一人通れる程度には開いた。

石の扉を越えてみれば、其処そこ彼処かしこに剣が突きさり道のように続いている。

その先には3体の黒い物体。

## 《Corvian》？

鴉のようなつー意味とあの姿形から、鴉人ってどこか？

杖を持った鴉人を他の2体が崇めるように跪ひざまずいてる。何してんだあれ。

杖の鴉人は低い崖の上で2体の鴉人に対して何かを語ってる。分かりにくいから、あいつは語り部くわいぶの鴉人だな。

……語り部の方は後ろに回り込めるな。

二手に別れた道。1つは跪ひざまずいてる2体の鴉人のところに続き、もう1つは登り道で語り部のとこに伸びてる。

足音を立てないよう体勢を低くして、後ろに回り込み《アルゴノウト》で横一閃。腰から半身と泣き別れた1ーと思いきやポリゴンとなつて散る間際、甲高い叫び声を上げそれを聞いた残りの鴉人が背中から翼を生やしやがった。

自重から長時間の飛行は出来ねえみたいだが、崖を飛び越え1体は骨の様な短剣、もう1体は死神が持つていそうな大鎌を手に3次元軌道で迫る。

鎌の一撃をバックステップで躲して上段から降り下ろした大剣で叩き潰し、短剣のほうはあつちの間合まあひいにはいる前に遠心力を乗せた横薙よこはぎで吹き飛ばす。

……？この感覚……。

《暗い孔の刻印》が発動した感覚。あの街で嫌と言うほど感じていたから判る。こいつ

らも刻印持ちか。

刻印を持つ奴じゃねえと倒せない不死のモンスター。

ゲームバランスを崩しかねない仕様。……いや、あのNPCの口振りじゃ、刻印持ちじゃねえとここには来れねえのか。

《修理の光粉》で半分まで減った《アルゴノウト》の耐久値を回復してるときに見た。

黒い鎧に身を包んだ2人の騎士を引き連れた、深いスリットの入った修道服の女。

さして上げてもないAGIを全開に後を追い、女だけが残ってる状況を好機と捉え、後ろから大上段で振り落とす。

「女性を後ろから襲うのは関心いたしませんよ？」

必中を確信した一撃。

だが見えない手で受け止められたかのように、俺の体ごと大剣が空中で止まる。

「またお会い致しましたね。とても嬉しく思います。閨中でないのが残念ですが」

「答えろ毒婦！テメエ！シフに何をした！」

「毒婦とはまた人聞きの悪い。あの子の命を救ったのは私ですよ？ならばその命をどのように扱おうと、私の勝手ではないですか」

「テメエ……！」

《アルゴノウト》から左手を離し、《狼騎士の大剣》を装備せずオブジェクト化、それを

掴み毒婦に向け突き出すが――

「女性にそのような物騒なものを向けるものではありませんよ。向けるのであれば――」

またしても見えない壁に阻まれ、毒婦の視線が俺の目から下へと動き、腰からやや下で辺りで止まる。

「このまま握り潰されたくはないでしょう？ 少しの間、恥辱に耐えれば済むことです。前戯とはいえ手は抜きませんので、ご覚悟なさいませ」

「……………うオオオオ！」

毒婦の手が俺へと届く直前、今まで感じたことのないナニかを感じる。

衝動のまま体を動かせば、何かを斬った感触と共に拘束から解放された。が、地面に足をつけた瞬間に体から力が抜け堪らずに膝を着いてしまう。

「……………今のは……………なるほど……………そう言うことですか」

「……………どうということだ……………！」

声を出すのも億劫だ。

「システムを越える意思の力……………貴方はその一端に指先だけとはいえ、その領域に至ったということです。勿論、何事にも代償は必要ですが」

何が面白いのかココロココロと笑う。

システムを越える意思の力……？

まるで糸が緩むかのように意識が解れていく。毒婦の声も壁を隔てているかのよう  
に不鮮明だ。

「<sup>S A O</sup>ここではない何処かで、またお逢い致しましょう。ここでの目的は既に達せられ、貴方  
のお陰で思わぬ拾い物もありました。感謝していますよ」

「……ま、ちやがれ……！」

意思に反して瞼が落ちていく。

意識が覚醒し、体の感覚が戻ってくる。

「くッ……！」

……ッ！あの女は!?

<sup>S A O</sup>うつ伏せに倒れた体を起こし、周囲を見渡すがあの女もモンスターの影すらない。  
<sup>S A O</sup>ここ以外の何処か？ どういうことだ？

自分の意思で<sup>S A O</sup>ここから出ていけるのか？

もしそうだとしたら、あいつはー

……情報が足りねえ。



それよりも気になるのはあの女が言っていたシステムを越える意思の力……。  
不可視の拘束を斬り裂いたあの力のことか。

この力を使つたら意識を失つたつてことは、使う度に何かしらのデメリットがあるつてことか？

あの女は何か知つてる様な口振りだった。

……まあいい。今はクエストクリアを目指すか。

考え事に没頭していた頭を切り替えれば目の前には荘厳な建物。入り口の両脇には、  
剣を地に突き刺し、その剣に両手を預ける騎士の像が置かれてる。霊廟つてやつか？

扉に手を掛け押してみれば、軋んだ音を響かせながら開いていく。

霊廟の中は無数の死体が転がり、その奥では必要最低限の防具を身に付けた2人の剣  
士が殺し合つてる。転がつてる死体も殺し合つてる2人も同じ武器、同じ防具つてこと  
は何かの部隊なのか？

そう考えて、殺し合つてた2人の片方がもう片方の胴体に右手に持つた大剣で串刺  
し、刺された方は力なく地面に倒れる。

右手に大剣、左手に鉤の様な刃の短剣。

魔女の帽子を思わせる鉄兜、ボタンで留められ立てられた襟で顔は見えない。革鎧の  
下に着込んだチェインメイル。必要最低限の籠手と脚甲に左だけの肩当て。ポロポロ

に擦りきれた赤い外套。

大剣の切っ先を俺に真つ直ぐ向け、短剣を逆手に握った左手を右肩に当て十字を思わせる構え。

カツケエ……。

純粹にそう思う。

《Farron's Undead Legion》

ファランの不死……隊、か？

Legionは軍とか集団そう言う意味だから、部隊でも間違いないねえだろ。

HPバーは……一本？

転がる死体を飛び越え、隊士が迫る。

首を狙った一撃を退がることで躲すが足をなにかに掴まれ、視線を下げると死んでいたはずの隊士の1人が俺を見ていた。

怖エよ！

死んでると思ったが、死ねばポリゴンとなって散るはずだ。だが、こいつらはそんなことなく地面に転がってる。群にして個つてのは、こいつら全員で1人の敵つてことかよ。

足を掴んでる隊士の腕を斬り裂いて飛び退き、閉じられた扉を背にして部屋の中を見

れば、地面に倒れてた隊士達が立ち上がってくる。その数40弱。それぞれがHPバーが1本。

迫る2人の隊士が振るう大剣と短剣をいなし、胴を薙ぐ。そうして、何体か隊士を切り捨てたところで異変に気づいた。

この部屋に入ったときのように隊士同士で殺し合ってる。

ホークなんちゃらが言ってた正気を失ったってのはこのことか、正気を失って敵と味方の区別が出来なくなっただって訳だ。

仲間同士で殺し合い、HPがレッドゾーンに落ちた隊士から斬り捨て、ヘイトが俺に向かないよう走り回り、また斬り捨てる。その作業を繰り返し最後の1人をようやく倒せた。

「なんだ……う？」

倒したにも拘わらず、ポリゴンとなつて散ることもなく地面に倒れたままの隊士達から血のように赤いエフェクトが立ち上ぼり、最後に倒した隊士へと注がれていく。

大剣に炎が宿り、その体も火が点いたようにジリジリと燃えている。

ボス2連戦かよ……。

地面に大剣を突き刺し突撃してくる。

横っ飛びで躲し、後ろから斬りかかろうとするが奴が通った軌跡をなぞるように火柱が走り、退避を余儀なくされる。

大剣を振るえば同じように炎が走り、反撃できる隙が著しく減った。

Xを描くような斬撃を繰り返して飛び上がり、地面に大剣を叩き付ければ爆発。距離を離せば地面に大剣を突き刺さず、切っ先を向けたまま突撃しながらの突き。

炎を纏ってるだけあってその火力も高い。

こちらの一撃は短剣で受け止められ、その隙に炎を纏った大剣を振るう。

盾を持つより視界は広く、いざとなれば短剣で攻撃もできる合理性を突き詰めた攻防一体の型。

ポーシヨンも尽き、HPはイエローゾーンだが一撃でも貰えばそこで終わりという緊張感の中、この戦いに終止符を打つために最後の1撃を放つ。

大剣の重突撃単発スキル《ギガントマキア》

奴の胸に吸い込まれるように直撃し、奴のHPを消し飛ばした。

Congratulations!!

長かった。1時間も掛かってねえが体感時間は半端なく長かった。

扉が開き外に出てみれば、このホークなんちゃらとか言うNPCが立ってた。

「本当にあいつらを倒すとは……礼を言う。きつとあいつらも死に場所を探していただろう。これを受け取ってくれ」

特双大剣《フアラン》

不死隊が使ってた武器だろ？ 《特双剣》？

スキル画面を開けば、大剣の下に《特双剣》の項目。

習得条件は……不明。

「お前のお陰で不死隊は終わった。これも不要だろう。お前なら有効に使えるはずだ」

《不死隊の防具》

適性レベルにも届いてる。どれも装備出来るな。

……兜がねえんだけど。

問い質そうとすれば、いつの間にか毒沼の前に立っていて、後ろを振り向けば石の扉が閉められていた。

これで終わりか。ポジションもねえし、HPも心許ねえから転移結晶で街に戻るか。

あの女の言葉通りだとすれば、既にあの女はSAOにはいねえことになる。自由に入りできる立場の人間のか、それともあの女自体がなにかのプログラムなのか。

気になることは多くある。だが、取り敢えずはアルゴに報告に行くか。

## 第9刀：罪科

ま、結局はお前達が知らねえところで何度も死にかけたが、なんとか生き延びたって話だ。んで、見立て通りあの女はSAOから姿を消した。ハナからそこにいなかったみてえにな。

アルゴにも頼もうとも思ったが、個人的なことに巻き込むわけにもー  
んだよその目は。

「死に晒せキリトオオ！」  
「くたばれアルトオオ！」

火花を模したライトエフェクトが散り、甲高い音が響き渡る。殺し合い、ではない。

切っ掛けは些細なこと。

ボスドロップの振り分けだ。

ラストアタックを決めたのはキリトではあるが、そのラストアタックをアシストしたのは俺。そして肝心のドロップ品は使うことでステータスが上昇するアイテムだった。

ステータスを上げるアイテムはこの世界で、それだけでも希少価値が高い。レベルを上げてステータスを上げることで安定した狩りが出来るからな。当然っちゃ当然だ。

『なあキリト、レベルもステータスもお前が上なんだから譲ってくれるよな？』

『G j。いいアシストだった。次も期待してるぜ』

『……追い剥ぎだゴラァ！』

……今思い返してみてもホントくだらねえことだな。

「あゝも〜！またあの二人〜！」

「あ、リズ。今度はステータス上昇アイテムの奪い合い。レベルもステータスもお前が上なんだから俺に譲れ、って言うのがアルトくんの言い分。全く、キリトくんも譲ってあげてもいいのに」

キリトくんが素直に渡しても『施しは受けねえ』ってアルトくんが突っぱねそうだけ  
ど。

二人とも本当に素直じゃないんだから。

「これで23戦12勝だ」

キリトくんの突きを体を回転させながら受け流し、逆手に握り直した大剣の切っ先を  
向き直ったキリトくんの喉元に寸止め。《フアラン》って言ったつけ？あの大剣を使う  
ようになってから、アルトくんの動きが洗練されつつあるように見える。

キリトくんもアルトくんも楽しそうだなあ。

「アスナってば男にヤキモチ妬かない」

「そ、そんなんじゃないよー」

男の子同士の方が盛り上がるだろうし、仲良くなるのも早くて当然。異性よりも同姓  
の方が気軽でいい、と言うのもあるんだろうけど。

……？緊急会議？

目の前に表示されたメッセージを開封すれば、「血盟騎士団」の作戦顧問からだった。  
七十層のボス部屋が見つかったのかな？だとしても、緊急会議でなくてもいいと思うん  
だけど……。

「どうしたアスナ？」



「逃げんな！埋めんぞ！」

ちよつ！アルトくん引き連れてこっちに来ないで！というか、終わったんじゃないの！？

五十五層の主街区であるグランザム。そこで一際大きな建物を使用した【血盟騎士団】本部。

本部の作戦会議室には【血盟騎士団】だけではなく【聖竜連合】を含めた多くのプレイヤーが集められた。

……キリトくとアルトくんはまだ睨み合ってるけど。

「諸君、よく集まってくれた。状況を説明しよう」

殺人ギルド【ラフィン・コフィン啞う棺桶】、通称【ラフコフ】のアジトが発見された。

その言葉に会議室にざわめきが起きた。

この世界でHPがゼロになれば、リアルでも亡くなってしまう。だからこそPK禁止の不文律が存在してる。

にも拘らずPKを繰り返すプレイヤーの人達が所属するギルド。それが【ラフィン・コフィン啞う棺桶】、通称【ラフコフ】。

その存在が知れ渡る頃は、攻略組じゃない一般プレイヤーの人達が標的だった。今では攻略組の人達が犠牲になった報告もある。次は誰が狙われるのか、そんな漠然とした恐怖を抱えたまま日々を過ごしている人達がいる。

何度もアジトらしき建物や施設、フィールドを捕縛部隊が襲撃したけど収穫はなかった。私たちの動きが解っているのか、手掛かりもなく犠牲者が増えてしまっただけだった。

今回も空振りになるんじゃないか、そんな私の考えとは裏腹にこの情報は「ラフコフ」のメンバーが密告したのだと言う。『罪悪感に苛まれ、我々に密告したのではないか』と言うのが「聖竜連合」に今回の件を任せられた男性の主張。

嫌な予感がする。うまく言えないけど何か取り返しのつかなくなるような、そんな予感。

キナ臭えよな。

俺達討伐隊は「ラフコフ」のアジトである、ダンジョンの安全地帯の間近まで辿り着いていた。

【聖竜連合】幹部による指揮の下、ここまでは順調に事が運んだ。いや、上手く行き過ぎているとすら言える。

PKを愉しんでる奴が罪悪感に駆られ密告？

ないない。あり得ねえ。

「各員準備は良いか？」

リーダーがそう全員に確認をとる。

それに皆声を上げることなく頷くことで返答した。そして――

「行くぞ……3、2、1……突入っ！」

その掛け声の下、一気に全員が安全地帯の大部屋へと流れ込んだ、が。

「……おい、どういうことだ……？」

「誰も……誰もいないぞ！」

突入した目に入ってきたのは誰もいねえただの洞窟。皆が張り詰めていた緊張の糸が弛んでいくのを感じながら、俺は同時に当然か、などと考えていた。

「テメエら、かかれ！」

声が発せられるのと同じ、今まで姿を見せていなかった「ラフコフ」のメンバーが雄

叫びを上げながら物陰から身を躍らせ襲いかかってきた。

どっかから情報が洩れてやがったか……いや、あの情報こそが罠。誘い、包囲し、殲滅する。古来から用いられてきた待ち伏せ<sup>アンブッシュ</sup>。

内心舌打ちしながらも臨戦態勢を即座に取る。しかし、状況が悪すぎる。ほぼ全員の緊張が弛んだその一瞬の隙に、完璧なタイミングで奇襲を仕掛けられたせいで、完全に戦闘態勢へ移行できていない奴が多い。

人間、解けてしまった集中を再び紡ぎ直すには、大なり小なりそれなりの時間が必要だ。急に、しかも思考が状況に追いついていない状態でそれをしろというのは土台無理な話。それでも血と狂気に飢えた獣達はそんなものを待つてはくれない。

俺たちの戦いは圧倒的に不利な状況で開始された。

「オラー！」

「チクシヨウ！」

「ブツ殺してやる!!」

「ハツハア！」

「死ねエ！」

「うわあ!?!」

「クソがアアア！」

阿鼻叫喚の地獄絵図、正しくそんな言葉が似合う状況と化した戦場。負の感情で覆い尽くされた様々な咆哮がそこから聞こえてくる。

「ヒヤッハー!!」

「チツ！らあつ」

俺も周囲と変わらず攻撃を捌いている。

想定外の奇襲を受けるといふ最も最悪な状態から始まった戦闘は、ある種の膠着状態に陥っている。

奇襲により大きくその体勢を崩された討伐隊であったが、立て直すまでに思ったほど時間はかからなかった。

元々その大半を攻略組、しかも最前線のプレイヤーで構成された討伐隊だ。想定外の状況に対し冷静、且つ臨機応変な応対行動は、最前線の戦闘に求められる必須技能に他ならないからだ。

では何故、体制を立て直し、数も戦闘能力も俺達が勝っているのにも関わらず、膠着状態いや劣勢と言える状況なのか。

理由はおそらくたった一つ。意識の違い。

攻略組の中にレッドとなったことのある奴はまずいない。オレンジすらも稀。対し

て「ラフコフ」のメンバーは揃いも揃って全員が殺人者だ。

そこに大きな意識の違いが生まれてくる。

どれだけHPを削っても、投降することなく、形振り構わず戦闘を続ける。俺と刃を合わせている奴もそうだ。奇襲の段階から俺に襲いかかってきた奴のHPは既に半分以上どころか30%を切り、そろそろ四分の一になるうかというところまで追いつめてはいるが、その攻勢に陰りを見つけることは出来ず、むしろ一層激しさを増している。

「よう、どうしたあ!?!俺のHPは風前の灯って奴だぜ!」

「チツ……!」

「おっと危ねエ!何かキレが悪くなってねエか、オイ?」

会議の段階でもこうなった場合における対処も決定していた。HPの全損も止む無し。

しかし、それを実行に移すだけの覚悟を完全に持っている者は、討伐組の中には誰一人いなかった。

「も、もう……もう嫌だあ!」

そんな中、死をモノともしない幽鬼のような「ラフコフ」の氣勢に恐怖したのか、仲間一人が悲哀の声を上げながら剣を投げ捨てて、頭を抱えながら蹲ってしまった。

そんな機を、PKに対し何の抵抗もない連中が見逃すはずもなかった。

「ケケッ！」

「ぐっ……………」

恐慌状態に陥り蹲った男を横目で見て、気味の悪い嗤い声を発し、俺の腹目掛けて蹴りを放ち距離を開けると、すかさずその男の下へ駆けた。

「ケケッ、死ねよオ！」

「ひっ!？」

声に反応し小さく悲鳴を上げるのも束の間、男の首に短剣を突き刺した。

「い、嫌だ…………嫌だあ……………」

「イイねエ、最高だア！」

涙を流しながら死を拒み、何かに縋るように手を虚空へと突き出した男に歓喜の叫びと共に短剣を引き抜くと同時にその身体を消滅させた。

それが、この戦いにおける初めての死者が出た瞬間だった。

「……………」

「おやあ？だんまりかい？仲間が死んだってのに冷たいねえ」

…………ああ、面倒臭え…………。

「ハエ!？」

体を貫く感覚に変な奇声を上げ視線を下げれば、《ファラン》の刀身が半ばまで食い込

んでる。信じられない、と言う驚愕の色で顔を染め青い破片となって散った。

「……亡霊を装よそいて戯たわむるば、汝亡霊となるべし」

歌劇《魔弾の射手》の終幕ラストの一節。

狩りの魔王ザミエルを弄んだ狩人カスパール。その最後はザミエルによって地獄へと連れ去られ、谷底へと投げ捨てられた時、カスパールへと放った言葉。

意味的には、亡霊の振りをしているのだから、本当に亡霊となっても文句はないはず。そんな感じだったはず。

「ラフコフ奴らにはびつたりだな。

「……」

「オオオオオオ！」

「死ねよオ！」

「らあアア！」

一閃。

「4」

頭上から襲い掛かってきた「ラフコフ」メンバーを一瞥もせず、一回転半し遠心力を乗せた大剣で薙ぎ払う。

既に血で汚れた手だ。これ以上汚れることもねえだろ。



「デメエらは出口を固めろ！一人も逃がすな！」

俺の声に縮み上がっていた討伐隊の奴らは弾かれたように動き出す。一人も逃がすなどというのは流石に無理があるか。

横手から来た奴の首を掴んで走り、他の2人に押し付けながら《ファラン》で3人まとめて串刺しにする。

「7」

討伐隊の後ろから襲い掛かろうとした奴の後ろ髪を掴み、こいつも背中側から突き刺した。

「8」

殺し回る俺に武器を捨てる奴も出てきたが、逆に興が乗ったのか嬉々として戦い続ける奴もいる。

前後から振り下ろされた剣を姿勢を下げ、頭上に掲げた大剣で防ぎ弾かれた瞬間に円を描く一閃で、脚と胴が泣き別れになった。

「10」

2人を切り捨てたときには、もう殆どの「ラフコフ」メンバーは捕縛されたか投降、或いは殺されたか転移結晶で逃げたのか剣撃の音も悲鳴も聞こえなかった。

……終わった。これで俺も地獄行きか。

どんな理由があれ、他者の命を奪った時点で行き着く先は地獄だけだ。だが、それでも後悔はしない。

罪悪感がないわけじゃない。その罪を背負って生きると最初の1人を斬った時に決めた。後ろ指を指されようが、俺が犯した罪だからな。

討伐隊1ー1、ラフィン・コフィン26——これが、この討伐作戦におけるそれぞれの死者の数だ。

その内の二人は俺の剣によって、その身を散らせた。

後ろから忍び寄っていた「ラフコフ」メンバーが俺に向けてその刃を振り下ろしているのにギリギリまで気付くことが出来なかった。

『死ねエー!』

『ツ!……あつ……』

咄嗟に、条件反射の様に動いた俺の剣は、迫りくる敵の身体を両断していた。

【ラフコフ】メンバー2人目の命を奪ったのは俺だった。

その後は血みどろの殺し合いになったが、制圧しきるまでにはさほど時間が必要な

かった。

討伐隊の面々も意を決してその手で対峙する敵を殺めたというのもあったが、それ以上に、危険に陥った仲間の下へ瞬時に駆けつけ、逆に敵の命を奪っていくアルトの姿に鬼と幻視した多くの「ラフコフ」メンバーは十数分前までの死を恐れない態度から一転し震えながら武器を捨てて投降したということが大きかった。

多くの犠牲の下に「ラフコフ」の解散はなされたものの、その首領たる P O H、幹部のザザとジョニー・ブラックの名は死傷者と捕縛者のリストの中には無く、主犯格3人の内1人として捕縛も出来なかった。

そして、全てが終わった今。アルトとアスナの二人と共に、確認作業を行っていた広場から出て歩きながら、俺は自分が奪った命の、そしてその罪の重さから逃げ出すことしか考えることが出来なかった。

——仕方なかった、殺さなければ自分が死んでいた、奴らは死んでしかるべきだ、俺は悪くない——

自分を赦す言葉が頭の中で無数に浮かび上がるけれど、それが俺の心を癒してくれることは全くなく。

人をこの手で殺したという罪の意識に苛まれる中、ふと、鬼の……否、鬼神の如き活

躍を見せた俺のすぐ隣の男は、どう割り切っているのかと気になった。

それを聞けば、もしかすると俺自身の罪悪感も拭われるかもしれない、とも。

そう思ったら欲求を止めることは出来ず、俺はその疑問をアルトに投げかけていた。

「なあ、アルト……」

「あ？ どうした？」

「お前はさ……どうやって割り切ってるんだ？」

おずおずと切り出した俺に、アルトはいつもと変わらないような調子で返答する。

アルトが先の戦いで手にかけてのは実に10人。「ラフコフ」総被害の約半分をアルトは手に掛けた。

それでも俺の目から見て何かを思い悩んでいるような素振りを見せていない。やはり何かで割り切っているんだと思った……けれど。

「……それは、今日俺が殺した奴らのことか？」

「……ああ」

「割り切ってなんかないねえよ……割り切れるモンでもねえ」

その答えは、俺の期待していたモノではなく。

「なら——」

どうしてそんな風で居られるのかと、いつもと変わらないでいられるのかと。

そんな風に苛立った俺の心を鎮めるようにアルトは、ただ、と続けた。  
「決めたんだよ」

何を、とは聞けなかった。その瞳に宿る意思を見て、息を呑んでしまったから。

「名前も知らねえ奴の命を背負うなんざ俺はごめんだ。……人間として破綻してるのかもな。人を殺したと言うその罪を贖うことは簡単じゃねえ。だからその罪と咎を刻みつけて、生きていく」

俺にはそれしか出来ねえ、とアルトは言った。

そんな言葉を聞いて、俺は愕然としたんだ。

俺はその眼に焼き付いていたはずの死の恐怖に歪んだ顔でさえ、既に臃げなものとなっていたから。

「……強いな、お前は……」

自分でも気づかないうちに、俺の喉はそう音を震わせていた。

「強くなってるねえよ。ただ、立ち止まらないってだけだ」

そう言っただけを歩く男の背が、立ち止まってしまった俺には眩しいものに見えたんだ。

憧れたんだ、その心の在り方に、生き方に。

俺もこんな風に生きたいって、そう想ったんだ。

「……やっぱり強いよ、お前は」

既に見えなくなつてしまった背中に、俺はそう呟くしか出来なかつた。

「……やっぱり強いよ、お前は」

見送つたキリトくんがそう呟いた時、私はこのままじゃキリトくんが壊れてしまうんじゃないかつて、そう思った。

作戦が決行される前に感じた頼もしさはどこにもなく、ただただ年相応の少年が、私の目の前にいた。

憧れと羨望、そしてそれに追いつくことは出来ないと思つてしまつたかのような絶望、さらに自分が犯した罪の重圧、そんな色んなものがない交ぜになつた感情が、アルトくんの背を見つめるその瞳に宿つていた。

そして、私には、その絶望と罪悪感が目の前の少年を押し潰してしまふかのように見えた。

「大丈夫……大丈夫だよ……」

気づけば私は、彼の手を両手で包み込みそう言つていた。

私には、彼らの罪を、そしてその重さを理解することは出来ない。

何故なら私は、自分の手を汚さなかったから。

私は彼らの罪を赦すことも出来ない。

私が倒さなくちやいけなかった人はアルトくんが、私を後ろから不意打ちしようとした人はキリトくんが、代わりにその手を汚したから。

「大丈夫……君は、大丈夫だよ……君のおかげで、私は救われたから……」  
でもだからこそ、私は彼を支えたかった。

彼が私を救ってくれたように、私も彼を救いたかった。

アルトくんの生き方に憧れたのは私も同じだから。

「ありがとう……キリトくん……」

今はこんなことしか出来ないけど、いつか、私も彼を支えられるようになる、自分の心に誓いながら、日が落ちるまで私はキリトくんに言葉をかけ続けた。

そうすることが、今の傷ついた彼を、その心を少しでも癒せることだと信じて。

この時を境に、私の変化が起こった。

私が自分の感情に気付いたということ。まだまだその感情に素直になることは出来ないけれど、確かにその想いを認知はした。彼と、キリトくと共に在りたいという気

持ちを。彼との距離も、少しずつだけれど、近くなっていった。

六十七階層に購入した自宅に戻り、明かりを点けることなくベッドの上に身を投げた。

覚悟はあった。それでも人を殺したと言う事實は、肩に背中に確かな重圧として存在していた。

キリトにも言ったように、知りもしねえ奴の命を背負うなんざ願い下げだが、それでもその命を奪った事実だけは心に刻みつけ、その重さに膝を折らずに生きていくと決めた。

「まだ覚悟が足りねえか」

「何が足りないんだ？」

「お前……また勝手に入ってきやがって」

「鍵を開けっ放しにしてるアル坊が悪いんじゃないか」

そうかよ。



「ずいぶん弱ってるナ」

「お前の情報網ならもう知ってるだろ。人を殺した」

「一部じゃ鬼のようだったって言ってたゾ？アル坊がそこまでする必要はー」

「あつた。殺らなきやこつちが殺られてた、なんて言うつもりはねえ。俺は俺の意思で奴らを殺した。ここに囚われた時、少なからずこうなることは心のどつかで感じてた。

俺は俺の望む死に方をしたい。悔いはねえって笑いながら死にてえよ。俺の死に場所  
はあそこじゃねえ。だからー」

「もういい」

最後まで言うことはできなかった。

アルゴに背を向け上体を起こした俺を後ろから抱きしめられたから。

「アルゴ？」

「もういいよ。アルトはね？言い表せば鋼なんだよ。折れず曲がらず、傷付いてもその在り方を崩さない。でもね？鋼も叩き続ければいつかは折れる。熱を加え続ければいつかは熔ける。硬いけど脆い」

「なんだよ、それ」

「アルトは認めたくないだろうけど、バカみたいにお人好し。誰が傷付くなら自分が矢面に立つくらいにね。だから自分も気付けなくらいに傷だらけで、折れそうになって

る」

そんな姿を見てるのは辛いよ、と体に回された腕に力が込められる。

鋼、か。言い得て妙だな。

「悪い。少しだけ力を貸してくれ」

「……うん」

## 第最終刀：鋼の刃

罪の意識は消えねえ。

それは人間が持つ倫理やら道徳から来るもんだ。人間が人間である限り、犯した罪は一生背負って生きていかきやならねえ。

苦しむのは当然だ。

人間が持つ良識から来る罪悪感だからな。それでも前を向いて歩かなきやならねえ。後ろを振り向いてもいい。だが足は止めるな。生きるつつうのは、向き合うことだ。現実とテメエ自分自身にな。

「ーんで、七十五層でキリトと戦って負けたが、色々あつてどういうわけか生き残れ  
たって訳だな」

「[[[[[[「ふ〜ん」]]]]」

「むう」

「へえ」

意味深に笑う和人、明日奈、里香、圭子、エギル。

不満げに頬を膨らませる木綿季に冷ややかな微笑を浮かべる朝田。

「んだよ」

「青春してるなと思ってな。まさかアルゴとはな。人生何があるかわからないものだ  
な」

「見た目通り、老けてるな」

「お前だけ料金倍な」

理不尽な。

「それでえ〜？ツンデレ颯真はアルゴとどこまでいったの〜？」

「ツンデレ言うんじゃないわねえ。何もしてねえし、何もなかった。そもそもロリは恋愛対象  
にはならねえ」

「ガーン!!」

「木綿季!?!すっかりして!傷は浅いわ!」

「詩乃さん……ボク、精一杯生きたよ……」

「木綿季!?!」

「なに茶番してんだ」

つか、いつの間に下の名前呼び合う仲になってんだか。

「日も暮れ始めたな。そろそろお開きにするか」

「と言いつつ、次はA L Oで落ち合うけどな」

「ほんと、ゲーム廃人よねえ。あたしら」

「共通の趣味があるのはいいことですよ」

「私は行けないかな。ちよつとお母さんの実家に行かないといけないからその準備があるの。長くても三が日までは戻ってこれないかも」

家の用事なら仕方ないわな。

年末年始は回線も重くなるだろうし、年明けは各々自宅であつて形になるか。

G G Oのキャッシュを換金して、食いもん買い貯めして……ああ、まだ読んでねえ本もあつたな。最近はダイブしっぱなしだったし、年末年始はゆったり過ぎるか。

「兄ちゃん、帰ろ」

「颯真、送つてくれない？」

「人を足代わりに使うんじゃないやねえ。朝田はサイドカーに乗つて木綿季を膝に乗せろ……メットが足りねえな。そういう表にもう一台バイクあつたな。あれ使うか」

「それ俺の！」

家に戻り木綿季とALLOにダイブしたんだがー

「ヨ！久しぶりだナ！アル坊」

「何でお前がここにいんだ」

猫妖精<sup>ケットシー</sup>ではあるが、見慣れた髭を書いた女プレイヤーで聞き慣れたイントネーションとくれば該当するのは1人しかない。

「久しぶりだなアルゴ。SAOとは違うつつーのによく判ったな」

「オレっちの情報網を甘く見るなヨ。それに短剣と大剣の二刀流のプレイヤーなんて目立つに決まってるだロ」

「もつとも。」

「兄ちゃん、この人は？」

「アルゴだ」

「この人が。ボクはユウキ。よろしくね」

「よろしく。ユウキだからユーちゃんだナ」

「おいアルゴ、なんでまたこの時期にALLOに来た」

「まあまあその話は、全員が集まってからにしようじゃないか。オイラも久しぶりにキー坊とかアーちゃんに会いたいしナ」

そのアスナは今日来れねえけどな。

「アル坊はオネーサンに会えて嬉しいか？」

「あと十年経つてから出直せ」

蹴るんじゃねえ。

「ー」と言うわけデ、久し振りだナ。初めての人ハ、情報屋【鼠】のアルゴを、ご鼻屑に頼むゾ」

「人格はともかく情報屋としての腕は確かだ。保証する」

「人格はともかくつテ、どういう意味かナ？」

事実だろうが。

「貴女がアルゴね。私はシノン。よろしく」

「よろしくな、シノのん」

「し、シノのん？」

「諦めろ。変な呼び名を付けんのがこいつの癖だ」

「分りやすいだ口？」

キリトのログハウスをいつも通り、たまり場に選り駄弁つてる訳だが、どういわけかりズもシリカも来ねえ。来れないなんて言つてねえし、連絡も来てねえからなにかトラブルか？

「ん、シリカからメールだ。……今日は行けなくなつたつてさ」

「俺もリズから来たな。ドタキャンでごめん、だどよ。」

「と言うことは、私、アルト、ユウキ、アルゴ、変態の5人になるのね」

「シノンさん変態はやめてください」

「特ダネの匂いだナ。詳しく聞かせてくれるか？」

憐れキリト。お前は犠牲になる。弄るネタの、その犠牲にな。

と、ネタは置いといてあの画像はあ<sup>G</sup>つち<sup>G</sup>から<sup>O</sup>からこ<sup>A</sup>つち<sup>L</sup>に移してたよな？

「なんてことはないわ。確認しなかつた私も悪かつたけど、私がGGGでの変態のアバターを見て女の子だつて勘違いしたの。勘違いしてるつてわかつてた癖に更衣室で私<sup>G</sup>が着替え始めたときに男だつて言い出したのよ！その挙げ句！私の下着姿まで！」

「……うわあ」

アルゴ、素に戻つてる。

つかキリト、ある程度は察してたが流石にそれはない。

「戒めが必要だな。アルゴ、これがその時の画像なんだがー」



「やめろおおお!!」

取っ組み合いになった二人を無視して、私とユウキはアルゴの言葉に耳を傾けた。

「あの二人ってSAOでもああだったの?」

「毎回、つて訳じゃないのじゃないけどナ。どういうわけか、お互いに気に入らないらしいゾ? その癖、アイコンタクトもなしで連絡できるほどお互いを知ってるシ、理解してル。  
好意を持つてる  
 女の子の立場からしてみれば、ヤキモチ妬くナ」

「兄ちゃんもキリトも仲が良さそうだよね? でもお互いが気に入らないの?」

「シ、ユーちゃんにはまだ早いかもダ。気に入らないからこそ負けたくない。理解してるからこそ譲りたくない。追いつきたいから自分を認めさせたイ。お互いが自分より強いつて考えてるかラ、相手より自分の方が強いつてことを証明したいのサ」

「強さ?」

「アル坊は何事にも折れない鋼の心。けど、1度折れば元には戻らない。キー坊は心が何度折れても立ち上がれる不屈の心。背中を押している人がいる限り、何度でも立ち上がれる。お互いに強さを持つてるから、お互いを認めたくないのサ」

いい話っぽくなってるけど、後ろの方でポリゴンが碎ける音がしてるんだけど……。

「マ、要するニ、お互いが越える敵であり、背中を預けられる友であるつてとこだナ。そ

んな関係性がSAOの一部腐女子および貴腐人の女性プレイヤーに大好評だったゾ？」

最後はいらないわね。変な意味が含まれてそうだし。

「キリトくん？アルトくん？何をしてるのかな？」

「げえ！アスナ！」

「二人とも正座」

「いや、でも……」

「正座」

「……はい」

「今じゃすっかり尻に敷かれてるナ。攻略組トッププレイヤーだった頃の面影は何処へやラ」

攻略組……何回かアルトの話の中にも出てきたわね。

百層全てをクリアするために文字通り命を懸けて攻略してきた人達。

その中でも抜きん出た実力者が笑顔のまま怒るアスナと正座して背中を丸くした馬鹿変態とアルト二人。

「【閃光】のアーちゃんに【黒の剣士】キー坊、【狼剣士】、【双刃】、極め付きは【狂剣士】バーサーカーアル坊。なかなか壮観だな」

……？ちよつと待って。

「【狂劍士】？」

「ン？アル坊は言つてなかつたか？狂つた劍士と書いて【狂劍士】。狂犬とも掛けた二つ名なんだけド、『喧嘩も遊びも命懸けの方がおもしろえ』つて発言と戦つてる最中でも笑つてたことから付いた名前だナ。本人曰ク『狂つてるも何も、俺は今この瞬間を楽しんでるだけだ。知りもしねえ奴にとやかく言われる筋合いはねえな』だつてサ。オレっちも流石ニ、産まれてきた時代間違えてるんじゃないかと思つたヨ」

今この瞬間を楽しむ……。

「二十層位までは一部のプレイヤーに【狂劍士】つて呼ばれてたけど、シフを連れるようになってから【狼劍士】、最後に特双大劍《フアラン》を使うようになって【双刃】。最初の頃はあまり知名度もなかつたから【双刃】の方が有名になつたんだ」

「はい！質問！」

「なにかナ？」

「兄ちゃんとはどこで知り合つたんですか？」

教師と生徒みたいなやりとりをしたあとユウキの質問に私も自分で気付けないほど身乗り出していた。

「最初に会つたのハ、キー坊の紹介だつタ。前々から気になる情報はあつたシ、オイラも後ろ盾が必要だつたからキー坊の紹介を受けたんだ」

「?後ろ盾?」

「情報屋の職業柄、誰かの恨みを買ウ。それにビーターなんて悪名を背負ったキー坊と居れば、情報を独占してると思われル。だから、βテスターじゃない実力の伴った一般プレイヤーを後ろ盾にする必要があったんだ。オレっちに手を出せば、ただじゃ済まないって事を知らしめる抑止力みたいなものだナ」

「それで実力が伴ったアルトを紹介されたって訳ね」  
「まあナ。第一印象は最悪だったけど」

### 十層 転移門広場

「アルト、ちよつといいか?」

「なんだ?金なら貸さねえぞ」

「お前は俺をどういう風に見てるんだ!……んん!紹介したい奴がいるんだ」

「ヨ!【狂剣士】さん。オイラは情報屋【鼠】のアルゴ。よろしくナ」

ふーん。ソロの両手剣使って情報は間違ってたんだ。

灰の混じった黒髪につり上がった三白眼、女顔のキー坊と違って男らしい鋭い顔付き。纏ってる雰囲気も合間違って刃物のような鋭さを持っている印象でー

「パーティーの勧誘ならお断りだ。女の武器を使って他所の男にあたれ。……そのナリじゃ一部の特異な男しか反応しないだろうけどな」

……コイツ、ナンテイツタ？

「アルト……悪いなアルゴ。口は悪いけど実力は確かだ。俺が保証する」

「で？【鼠】がなんだって？」

「後ろ盾になってくれるプレイヤーを探してル。なにかと恨みを買うことも多いからナ」

「報復による抑止か。だがそれは人の理性に依るものが大きい。理性つータガが外れた人間獣には効果が薄いと思うが？」

へえ随分頭が回るんだ。

「その時ハ、情報屋に喧嘩を売ったことを後悔するだけだヨ」

「情報操作か。えげつねえな」

剣を振るうだけが戦いじゃない。

情報を集め、相手を制するのも戦い。時と場合によっては剣よりも強力な武器になる。

たかが情報されど情報、だ。

「Give and takeだ。優遇はされるんだろうな？」

「先立つものがあればナ。地獄の沙汰もなんとやらダ」

ニヤリ、と悪人笑い。

これが時代劇なら悪代官と越後屋の構図。

「交渉成立だナ。必要なことがあれば、メッセージを飛ばしてくレ。こつたも調べて欲しいことがあれば、メッセージを飛ばすヨ。勿論、報酬は出すゾ？」

「ホント、初対面だって言うのに失礼だよナ」

「兄ちゃんがごめんなさい」

「ユーちゃんが謝ることじゃないヨ」

初対面から失礼だったのはその頃から……いいえ、生まれつきだったのかな？

ふとアルゴの頬が赤くなっていることに気付いた。

「それからアルトに惚れたのね？」

「な！ななな、何を言ってるのかな?!私があんなデリカシーゼロ男をす、好きになるなん

てあり得ないし！」

それじゃ白状しててよ様なものよ。

「そ、そりやぶつきらばうな癖に偶に優しいし、デリカシーの欠片もないけど氣遣つてくれるときもあつたし……」

「むう〜」

「ユウキ、アルトの言葉を借りれば『好意は理性の外側にある感情』らしいから本人の意思じゃどうしようもないのよ」

「クールに決めてるシノのんだって、生中継されてるGGO本選でアル坊にキスしてたじゃないか」

「!!」

「あ、あれは違うのよー!リアルとGGOのアルトが同じ人だって判つたら、その……なんて言うか、感情が爆発したと言うか……」

「ホウホウ、シノのんは大胆だな」

なんでそうなるのよ!

「ア、アルゴはなんでアルトを好きになつたの?切っ掛けがあつたはずじゃない?」

「予想外の切り返しデ、オイラは困惑してるゾ?切っ掛けハ、そうだなー」

十六層のフィールドを感情に任せてズンズン歩いていく。

ホットントに失礼な奴！女の子の身体的欠点を弄るのはご法度でしょ！私はこれでも16だ。同年代の中でも女性的な起伏が乏しいのは自分でも自覚してる。

あの大馬鹿野郎は、あろうことかその欠点を突いてくる。勿論、からかい混じりなのは理解しているけど腹が立たないかと聞かれれば答えは否だ。

その時、右のふくらはぎに違和感を感じて視線を下げてみれば投擲用であろう小振り  
のナイフが刃の根元までズブリと刺さっていた。

それを確認した途端、体が痺れ力が抜けていく。

麻痺毒……！そんなのをプレイヤーに使うのは……！

「大当たり〜！」

「なわけないだろ。見ろよ。脚に刺さってる。良くて小当たりつてとこだろ」

林の影から二人のプレイヤーが現れた。

カーソルはオレンジ。その中でもPKを好むレッドプレイヤーだろう。



ナイフを引き抜こうと手を伸ばすけど、体が言うことを聞いてくれない。あと数センチなのに……！

「おい見ろよ。こいつ【鼠】じゃねえか？」

「顔の髭みたいなペイント……間違いないな」

「ならば、ちよびつと遊ばね？」

「……お前も物好きだな。あんな男かも女かも判らない体型の奴に」

「それがそそるんだよ」

「勝手にしろ。POHさんにどやされても知らないからな」

「こいつら……！」

「念のためもう一本いっとくか」

麻痺毒が塗られてるであろう投げナイフを引き抜いてゆっくりと私に近付いてくる。

「おい」

「あ？」

「知らないのか、オイラには用心棒がー」

「それがどうしたってんだ、よ！」

「くう……！」

麻痺毒でうつ伏せに倒れた私の背中にナイフが突き立てられる。VRじゃ痛みは感

じないけど、体に異物が入ってくる不快感に声が漏れる。

「お？なかなかイイ声で鳴くじゃん？」

突き刺したナイフを引き抜き、左の太ももを刺される。

「んう……」

「ハハ！おい！おまえもやってみるか!？」

「遠慮しとく」

使われているのが投げナイフだから然程ダメージはないけど、このまま続けられれば間違いない死ぬ。

右の二の腕、左肩、両手の甲。

私の反応を楽しむようにジワジワと刺すこともあれば、全体重を乗せるように一気に刺すこともあった。

「愉しそうだな。俺にもやらせろよ」

「あ？グエツ！」

聞き慣れた声が聞こえ、私の背中に馬乗りになった男の重圧が無くなる。なんとか首を動かして振り返ってみれば、馬乗りになっていた男が左手で首を掴まれ持ち上げられていて、もう一人の方は地面に転がってる。

「よう、無事……って訳でもなさそうだな」

私の腰とふくらはぎに刺さったままのナイフを見て、何をされていたのか察したのか首を掴んだ男を地面に叩きつけるように投げ捨て、刺さってるナイフを引き抜いた。

「レベル2の麻痺毒か。この階層じゃレア物だな」

《鑑定》のスキルで解析したあとそのナイフを私を襲った男たちに突き刺す。

「てめえ、こんなことしてタダで済むと思ってるのか！」

「俺たちはPOHさんのー」

「テメエらがどこの誰かなんて知るかよ。俺のクライアントに手を出したんだ。なら相應の報復は覚悟して貰わねえとな」

「両手剣のソロプレイヤー？まさかこいつ、「狂剣士」!？」

「あり得ない！なんでそんな奴が！」

「じゃあな。運が良ければ生き残れんだろ。オレンジを助ける物好きがいれば、だがな」

「その……ありがとう」

「クライアントを守るのも仕事だからな、気にすんな」

極力私に触らないようにか《クレイモア》を解除して、間に合わせの槍を装備、その柄に座らせるようにして私をおぶりながら主街区への帰路を進んでいた。

「どうして場所が分かったんだ？」

アルトは《追跡》のスキルを修得してなかったはず。

「ほとんどの奴は気付いてねえだろうけど、地面が砂とか土だとうつつすらだが足跡が残る。本来ならナイフとかで足跡をなぞって足の大きさだったり深さから体重を予想したりすんだが、あとを追いつけるだけなら足跡さえあればどうとでもなる」

スカウトつてヤツだなって付け加えてるけど、システムに頼らないシステム外スキルかな？ どういう生活してればそんなこと出来るようになるんだか。

変に多芸なんだから。

「……口が悪いのは許してくれとは言わねえが、多目に見てくれると助かる。何分、なにぶん中学まで本の虫でな。他人との距離感が、その……いや、言い訳だな」

……そっか。ただ単に不器用なんだ。面倒臭いなあ。

「ん、許してあげる」

肩に乗せてた手を離し、アルトの首に腕を回す。

「バっ！ 抱き付くんじゃねえ！」

「ん？ なにか言ったかナ？ オネーサンにドキドキしちゃウ？」

「外周区から突き落とすぞ teme エ……！」

「やらない癖二」

「だー！引つ付くな！」

「ニヤハハハ！」

「最初は理解だったけど、気が付けば引き返せない所にいたつてところかな？」

やっぱりツンデレよね。アルトつて。

口は悪いけど面倒見は良いし、バツサリ切り捨てることもあれば、空気を読んで相手を立てることもある。

「むう」

「ニヤハハ！ユーちゃんはヤキモチかな？」

「え？ううん。ボクはね、兄ちゃんを理解してくれる人が出来て嬉しいんだよ？でもー」

「胸がモヤモヤする感じ？」

「うん」

「それがヤキモチだよ」

多分、この娘もアルトのこと好きなんだろうな。

「アスナ……そろそろ」

「まだ駄目」

「……はい」

まだ正座させられてたのね。

「本当に面倒臭い男に引っ掛かっちゃったナ」

「でも、そこが良かったりするのよね」

「まあナ」

「兄ちゃん！」

「どぶっ！」

正座させられてるアルトの背中にユウキが飛び付く。床に頭からいったけど大丈夫よ。ライバルはいるけど負けるつもりはない。油断したら狙い打つから。覚悟しておいてね。

おまけ

「大体、アル坊はオレつちのこと口、ロリとか言うけど、18だからな！」

「は？ 同い年？」

「え？」

「あゝ、なんか、ホント悪かったな」

「同情なんていらない！」

「ぐえっ！ く、首！ 首絞めんな！」

## キヤリバー編

### 第1戦：地の底

和人からメール？

《エクスキヤリバー》を手に入れるから、ALOに集合？

あのマニア……人の予定も聞かずに来ること前提かよ。

……まあ行くんですけどな。

「ヨツンヘイムのダンジョン？」

「ああ。逆さ釣りのピラミッドみたいなダンジョンの最上？最下？層に刺さってるんだ」

「そのダンジョンに入るのにはトンキーの協力が必要なんです。あ、トンキーって言うのはお兄ちゃんと言つてヨツンヘイムに行つたときに仲良くなった邪神級モンスターのことでー」

仲良くなった邪神級モンスターって字面が凄えよ。

トンキーとやらの可愛さを語るリーファ<sup>面業</sup>を無視してパーティを確認すれば、キリト、



アスナ、シリカ、リーファ、リズ、クライン、シノン、ユウキ、俺。

「そのトンキーとやらは、フル装備の9人を乗せれる生物なのか？」

「ん、クエストフラグを建てたホストが何人のパーティを組んでるかで変わると思うゾ？勿論、上限はあるだろうけどナ」

つまりこの人数で乗れるかどうか判らない、と。

無駄足はゴメンだぞ。

「なるようになるだろ。駄目だったら、往復して運んでもらえばいいんだしさ」

行き当たりばったりかよ。パーティリーダーなら、堅実な作戦を考えて欲しいもんだ。ま、俺が言えた義理じゃねえけどな。

「いっよし！全武器耐久値の回復、終わったわよ！」

「後は買い出し組待ちか。《エクスキャリバー》のレアリティがレジエンダリーってことだあ、ダンジョンの難易度も相当なもんだろ？こんな脳筋パーティで攻略できるのか？」

魔法支援が出来るのはアスナとリーファぐらいなもんだ。

アスナは頭に血い昇れば周りの制止振り切って前が出るし、リーファはどちらかと言えば前衛職に向いてる。

パーティ全員が前衛職と言う超攻撃型の布陣。

唯一の後方支援と言えばシノンだが、こちらも物理属性の弓。出てくる敵の物理耐性が高ければ、そこで詰む可能性がある。

「ノーガードの殴り合いなんざ、ステゴロの喧嘩だけで十分なんだが」

「大丈夫だって。……アスナが自分の役割を忘れなければだけど」

「無理無理。【バーサークヒーラー】だぞ？素直に黙ってられるタマかよ。その点リーフアも……同類だったな」

「そうだな」

「ハハハハハ」

「キリトくん？アルトくん？何の話をしてるのかな？」

「!!!」

キリトと笑ってれば、聞き慣れたはずの声に親しみの色が一切無い冷たい声。

目の前にいるキリトは俺の後ろに視線を向け、この世の終わりのような顔をしてる。

………終ったな。

ゲームの中だと言うのに、ここまで命の危機を感じたのはSAOを含めてもダントツだった。

「まったく！本人がいらないとは言え、言って良いことと悪いことがあるでしょ！」

「申し開きの言葉もございません……」

「なにやってんのよ、あのバカ2人」

SAO時代  
「あの頃から変わってませぬ」

後ろでリズとシリカが何かを言ってるけど、悪いのはこいつであって俺じゃない！

「まあまあ、アスナよう。そろそろ許してやってもいいんじゃないか？こいつらが馬鹿やるのは前からなんだからよ」

クライン……！

「兄ちゃん、元氣だして！兄ちゃんがバカでも僕が頑張るからーあれ？」

無自覚な言葉の刃がアルトを襲う。

アスナたちと一緒に買い出しに行ってたユウキの言葉に、正座のまま床に突っ伏した。

「妹に止め刺されたバカは放っておいて、《エクスキャリバー》の噂はどうだったの？」

そう。俺たちが今日《エクスキャリバー》入手に集まったのは、クエストの達成報酬で《エクスキャリバー》が手に入ると言う噂を耳にしたからだ。

俺とスグが見たのはダンジョンの最下層に鎮座する《エクスキャリバー》。どう見てもダンジョン攻略で入手するものだ。噂が真実か確かめるよりも誰かの手に入る前に

俺たちが手に入れる。その為にSAOでも最高戦力と言えるメンバーとGGOで凄腕のシノン、俺に追い続けるほどの反射神経を持つユウキ。

俺たちを知ってるSAOサイババーが見れば、戦争でもする気かと思うだろう。

「街中、その噂で持ちきりだったよ。でも気になる点があつて、その情報を流したのがNPCらしいの」

「NPCが？」

「そうなんです。あるクエストをクリアすれば、その報酬で《エクスカリバー》が手に入るって」

変だな。NPCならその存在を<sup>ほの</sup>仄めかすだけでいいのに報酬で貰えることまでは言わなくていいはずなのに。

「大方、そっちは偽モンなんじゃねえの？キリトなら分かんじゃねえか？エクスカリバーならぬエクスカリパーってやつ

」

知ってる。その頃のテレビは解像度が悪くて、バとパの区別が分かり辛かったらしい。苦勞して手に入れたのにどれだけ強化してもダメージが1しか入らなくて、不具合なんじゃないかと製作会社に抗議までいったらしい。

それでも防御無視で必ずダメージが入るから、それを使い続けた猛者もいたらしい。

今でこそネタにはされてるけど。

そんなこんなでヨツンヘイムの象とクラゲを足したような邪神級モンスター・トンキーに乗せてもらい《エクスキャリバー》のあるダンジョンに向かっている。無事9人全員が乗ることができたのだが、トンキーの姿を見てからアルトの様子が少し変だ。

「兄ちゃん、クラゲ嫌いだもんね」

「嫌いなんじゃないやねえ、存在を認めたくねえだけだ」

何があつたんだよ。

「んとね。兄ちゃんが中学生に上がった頃、ボクの家族と一緒に海に行つたときに初めて見たクラゲを両手を掬つたんだけど、刺されて大変なことになったんだよね」

「よく憶えてんな。医者も『ここまでクラゲに刺された人を診るのは初めてだ。ミズクラゲでよかつたね』とか言つてたけどな」

ミズクラゲの毒は人間に対して殆ど無毒なんだとか。

「そもそも何でアイツらは存在してんだよ。プランクトン食つては大量発生して発電所

の排水口塞いだり、船のスクリューに巻き込まれてモーター壊したり、存在していいことなんざ何もねえだろうが。幻想的だーとか言つて飼つてる奴もいるみてえだが、両性同体の9割水分の生物のどこが幻想的だつてんだ」

余程トラウマなのかクラゲに対して随分と辛辣だ。

「初めて行つた海でクラゲに刺されて1時間もないうちに帰ることになつちやつたらね。思い出としては最悪なんだよ、きつと」

楽しい思い出作りにそんなことになれば、誰でもトラウマになつたりするだろうけど。ユウキの話じゃ海に行くのも初めてだつたらしいから、最悪の思い出作りになつただろうな。

「テメエら、なに笑つてんだよ」

「[[[[[[べつつづく]]]]」

「埋めんぞ」

止めてくれ。

その前に埋めると言う発想を止めてくれ。

「おい、あれ見てみろよ」

クラインの言葉に眼下を見下ろせば多腕の邪神の近くに多くのプレイヤーが集まり、トンキーと同じ水性型邪神モンスターを攻撃していく。

「キリトの話じゃ、邪神級モンスターは互いに敵対関係なんだろう？ それを利用した経験値稼ぎ……って訳でもなさそうだな」

邪神同士の縄張り争いもそうだけど、プレイヤーも見付け次第攻撃してくる。つまり、今見ているような共闘するとは考えにくい。

「シリカ、邪神級モンスターはタイムできんのか？」

「あり得ません。あらゆるスキル、アイテムでブーストしてもタイム出来る確率は0%のままです」

クラインの質問にシリカはバツサリと切り捨てた。

「ヘイトがプレイヤーに向かないように立ち回ってる線は？」

「ヘイトってのは視界に入っても溜まってく。1度も攻撃されねえってのはシステム的にありえねえ。シノンだってそれぐらいは判ってんだろ。あり得るとすりやNPCが流した《エクスカリバー》のクエストだろうよ。より多く敵対してる邪神を殺したプレイヤーに与える、とかな」

『慧眼ですね。暗き孔を刻みし妖精よ』

目の前に現れたのは巨人とも言えるウルズと名乗る女性。

彼女の話を聞けばここからさらに下層にある氷の国、ニヴルヘイムの王スリュムの謀略によって絶賛殲滅され中のトンキーの同族が数を減らせばウルズの力が弱り、《エ

クスキャリバー』を封印したあのピラミッドが天井を突き破り、アルヴヘイムへと届き、スリウムによって氷の世界に変わる。

スリウムの目的は世界樹の上にある黄金の果実。

その為に策を巡らせ《エクスカリバー》を模した《カリバーン》を報酬としてプレイヤーたちを操っている。

「時間制限付きのクエストか。その前にウルズ、お前に聞きたいことがある」

『なんででしょう』

「暗き孔と言ったな。なんでそれを知ってる。あれはSAOでのー」

『あれは体ではなく魂に刻まれる呪い。たとえ何度輪廻転生を繰り返そうと決して消えることは無く、その身を蝕む呪いなのです』

暗い孔って言えば、SAOでアルトがミディールってドラゴンを倒したときにL.A.ポーナスで手に入った外せない装備だったよな？

SAOのメインシステムであるカーディナルを内包した《ザ・シード》規格のALOならあってもおかしくはないけど、アルトがそれを手に入れたって話は聞いてない。

体ではなく魂に刻まれる？

アバターじゃなくてリアルの本人に影響が出るものなのか？

『お気をつけなさい。貴方と同じく、暗き孔を宿した者が貴方の前に現れるでしょう』



そう言い残しウルズは姿を消した。

アルトと同じ？

……まさか……。

ゾワリ、と全身の毛が逆立つ感覚にアルトを見れば、とても人には見せられない顔で笑つてる。

「あいつが……あの女が……<sup>アマ</sup>……<sup>ALLO</sup>……ここにいる……う？」

アルトがシフを失った遠因にして元凶。

シラと名乗ったシスター。

「くは……ハ、ハハ……ハハハハハ！ようやくだ！ようやく見つけたぞ！」

「……アルト、分かっていると思うけどー」

「大丈夫だ。切り替えはできる。アイツに関しては至極個人的なことだ。お前たちを巻き込むつもりはねえし、関わってほしくもねえ」

ダンジョンに辿り着き、先頭を切って歩くアルトの背中がどういふ訳かその瞬間、異様に小さく見えた。

## 第2戦：魔性菩薩

ダンジョンを進み順調かとも思ってたけど、そこは流石レジエンダリーウエポン獲得クエスト。配置されたモンスターの強さは並大抵じゃなかった。

「衝撃波来ます！3秒後！」

黒と金のミノタウロス相手に苦戦を強いられることになった。黒は魔法耐性が高く物理耐性が低い。こいつは早々にレッドゾーンに入ったが、直ぐに金の方と入れ替わり回復し始めた。金の方は物理耐性が高く属性込みのソードスキルじゃないとまともにダメージを与えられない。

「ああ！じれつてえ！」

タンク役のアルトが苛立ちを隠さずに声を上げる。

先読みと鉄壁とも言える的確な防御で、金タウロスの攻撃を捌いていくが、何度目か分からない衝撃波攻撃によって無理矢理距離を離される。

あの時みたいいな様子は感じられないけど、多分心の中は穏やかじゃないはずだ。

シフの仇。そいつがここに<sup>ALO</sup>いるかもしれない。

俺たちだって、シフのことを考えれば怒りを覚える。

アルトは人間関係の線引き範囲がとても狭い。

自分にとってどうでもいいか、そうじゃないかで区別してる。その内側の人間の為なら命を懸けてでも体を張る。

だからこそ、シフを自分の手に掛けたその時の心境は俺たちには分からない。

きつと自分の手で決着を着けないと気が済まないだろう。

その引き換えに自分の命が犠牲になっても。

『復讐を肯定する気はねえ。だが自分の思いに区切りを着けるためなら、俺はきつと……』

その先を言うことはなかったけど『自分の命と引き換えにしてでも成し遂げる』と続けたはずだ。

ただここはSAOとは違う。命懸けになることはないはずなのに、何故だろう？ 胸の奥がざわつくと言うか落ち着かなくなるのは。

「キリト！ 手え止めんな！」

アルトの声に我に帰れば、金タウロスの剣を跳ね上げ反撃に移ろうとしていた。

そうだ。このクエストに失敗すればアルヴヘイム全体が氷に包まれ、ALO自体が消滅する。

アルトの事よりもまずは、このクエストに集中しないと。

「あー！もー！魔法で一気に倒せないの!?アレ！」

「魔法を使っても同じよ。黒い方が前に出てくるだけ」

「皆さん！補助魔法いきます！」

「回復が必要な人から後ろに退いて！」

「ユイ！黒の方が戻るまで、どのくらいだ!?!」

「あと113秒です！」

アルトの言葉にユイは解析結果で応える。

2分も掛からない内に黒タウロスの方も戻ってくる。そうなくても黒い方に攻撃を集中すれば倒せるかもしれないけど、金の方が割り込んでくるはずだ。

属性込みのソードスキルは強力だが、その分発動後の硬直が通常のソードスキルよりも長い。

必殺を心掛けなければ、手痛い反撃を貰うことになる。

「<sup>イチバチ</sup>一八だ！かますぞ！」

俺もアルトもそれに関してなら奥の手がある。

伊達にアイツと毎日のように戦っている訳じゃない。

クラインが先陣を切り、リーファ、シリカ、リス、ユウキ、シノンと続く。

そしてアルトと共に合図もなく駆け出し、アルトが炎を纏った大剣の突きを繰り出

し、俺はその背を飛び越え冷気を纏った左の剣で顔面を切り裂き、飛び上がった勢いのまま金タウロスを飛び越える。

アルトが風を纏った短剣で4連撃を食らわせれば、俺は右の剣で炎を纏った突きを5連続で繰り出す。

最後には互いに炎を纏った剣で、立ち位置を入れ替わるようにすれ違い様に切り裂いた。

「……キリトテメエ、OSSは最高4連が限界とか言ってなかったか？」

「……そっちこそ。短剣から大剣に繋がれないって言ってただろ？」

連続攻撃のOSSにチャレンジはしたけど、アルトが言ったように4連続が限界だった。とは言え、そのままだとアルトに負けたような気がして、アスナと相談しながら編み出したんだ。

2人による連続ソードスキルで金タウロスのHPバーが消し飛び、ポリゴンとなって散り、器用にも座禅を組んで回復していた黒タウロスが立ち上がり、加勢しようとしたけど時すでに遅しだ。

「お座り」

クラインのそんな言葉に感情はないはずだけど、乾いた笑い声のようなものを上げた気がする。

物理攻撃特化のメンバー相手じゃ荷が重すぎる。

全快まで回復したにも関わらず、1分と保たず金タウロスと同じように爆散した。

「それはそうとキリトにアルトよう！きっきのおめえなんなんだよ！」

「言わなきやダメか？」

「当たり前じゃねえかよ」

「システム外スキルだよ。《剣技連携》スキルコネクって呼んでる。ソードスキル発動後に特定のタイ

ミングで別のソードスキルに派生できる。ALOに使われてるカーディナルじゃSAOであった《二刀流》とか《特双剣》とかのユニークスキルはないから、アルトとないなら再現しようってことになって」

「どこまで再現しても紛い物だけだな。結局は両手の得物で交互にソードスキル撃つてるだけだし、《特双剣》のメリットだったパリのダメージ補正もねえし」

高火力を連発出来ると言えば聞こえはいいけど、繋げば繋ぐほど硬直は長くなるし、タイミングはシビアだし、必ず違うスキルに繋がらないといけないから相手によつては打ち止めになる可能性も高い。

メリットもあるけどデメリットも大きい。

「ん〜」

「どうしたの？アスナ」

「なんかデジャヴってるよ、私」

七十四層の《グリームアイズ》戦の時か。

そう言えば《二刀流》も《特双剣》もあの時初めて人前で使ったんだっけ？

あの事件が終わってから1年経つんだな。

「なににせよ、ここは突破できた。ダンジョンに入る前は言いそびれたけどよ。今年最後の大クエストだ。無事に《エクスキャリバー》を手に入れてよ、明日のMMOTの一面を飾ろうぜ！」

クライン……。クラインも感じてるんだらうな。

外面は平静を装ってるけど、俺たちじゃ推し測れないアルトの内心を。

クラインだけじゃなくここにいる全員が。その証拠に全員がアルトのことを見てる。

せめて今だけはあのシスターのことを忘れて、クエストのことだけを考えてほしいと言おうクラインなりの励ましなんだろう。

「……そうだな。この瞬間は今だけのモンだ」

先を急ぐぞ、と続けみんなが頷き走り出そうとしたけれど、アルトだけがそこから動こうとしなかった。

「どうしたの？」

「兄ちゃん、置いてっちゃうよ？」

「お前ら、先に行け。少し……野暮用ができた」

肩越しに振り返るアルトの視線を辿れば、その先にシスター服に身を包んだ女性がひっそりと佇んでいた。

それを見た瞬間、全身の毛が逆立つ感覚に教われた。

なんだあれ……!

ヒトの姿をしているのにそうは見えない。もつと得体の知れないナニカじゃないのか……?

「パパ……あの人はなんなんですか……? 内包してるデータ群が人のそれとは違いすぎます」

「早く行け」

「ダメ……ダメだよ! 兄ちゃん!」

「構ってる暇は無いわ。一緒に行きましょう」

アルトの腕を引き一緒に行こうとシノンとユウキが促すが、1歩も動く気配がない。

2人の言い分も分かる。アレは戦って勝てるような相手じゃない。

「ふふふ……。随分な嫌われようですね。初めて御会いした方もいるはずですが……貴方の入れ知恵でしょうか?」

「キリト! クライン!」



我に帰ればこちらに飛んでくるシノンの姿。危なげに受け止めクラインを見ればユウキを同じように受け止めていた。

アルトが2人を投げて寄越したんだ。何故、と聞かなくても分かる。分かってしま  
う。

「こいつは……俺の獲物だ！」

巻き込みたくないし、関わってほしくもない。

アイツは確かにそう言った。でもだからって——

「さっさ行ってさっさとクエストを終わらせろ。俺よりもそっちが重要だろうが」

「……負けるなよ！」

「負けんじゃねえぞ！」

「相手見てモノ言え。それより——」

シスターに歩みだしたアルトが肩越しにこちらを見た。

「——そいつらを任せたぞ？」

「離して！離してっばー！」

「ハラスメントコードで訴えるわよ！」

「アイツに初めて『任せた』って言われたんだ。どんなに脅されても屈するわけにはいかない。

「にしてもキリト！さっきの女性がそうなのか!?俺にはお淑しとやかなシスターにしか見えなかつたけどな！」

……偶にお前の性格が羨ましいよ。

「外見も言つてた通りだったし！なにより！いくらアルトでも初対面の人間相手にあそこまで敵意剥き出しにならないだろ！」

「肩に担いだシノンを離さないようにしながらクラインに返す。さっきから踵が顎をかち上げてくるから視界が揺れてしょうがない。

「ユイちゃん！内包してるデータがどうか言つてたけど、どうかしたの!?!」

「本来、ゲーム内で使用されるアバターにはゲーム規定に則った容量が定められています。ですがさっきの女性が内包しているデータ総量はチートPC以上……もしかしたら、このALOよりも多くのデータを内包しているかもしれません」

「つまり!?!」

「規格の外側、端的に言ってしまうえば無敵に近い存在と言えるかもしれません。どれだけ傷付けても内側から漏れ出るデータが瞬く間に修復してしまうでしょう。もしそれが攻撃に使われたとしたら、人体にどんな影響を及ぼしてもおかしくありません。……ですが、それだけのデータを一体どこで？」

アルト……。

「皆……このクエストをすぐに終わらせてアルトのところに戻る！ 異論はあるか!？」

「……「ない!!」……」

道すがら牢屋に入れられた女性NPCを助けつつ、さらに下へと進んでいく。

スリユムと名乗るボスに追い詰められるものの、スリユムに関する神話を思い出したシノンの指示に従い、途中で拾った金色の金槌に雷を貯め、それを助けた女性NPCに渡せば見上げるほどの大男に変貌。スリユムを倒してしまった。

スリユムに関する神話。

それは、アース神族の巨人族に自身の槌《ミヨルニル》を盗まれてしまったツールが豊穡の女神フレイヤに変装し、これを奪い返すというもの。

つまりクラインが例のスケベ心を働かさなければ、俺たちは時間切れでクエストを失敗してしまうところだった。

……だけどNPCに連絡先を聞くのはどうかと思うし、アルトの状況忘れてないか？

女性陣にしばかれるクラインを無視し、あとは最下層の《エクスキャリバー》を抜くだけだと思っていたけど俺たちは忘れていた。

このダンジョンを保っているのは《エクスキャリバー》であり、それを引き抜けば崩れてしまうことを。

「ああ……ダンジョンが……」

「崩れてく……」

リーファとリズが迎えに来たトンキーの上で崩れてくダンジョンを見つめ、呆然と眩いた。

「アルトさん大丈夫ですよね？ちゃんと無事ですよね？」

「大丈夫、きつと大丈夫だから」

シリカの声にアスナが応えるけど、多分それは自身に言い聞かせるための言葉だろう。

「兄ちゃん……」

「アルト……」

ユウキとシノン。2人にかける言葉が見つからない。

みんな言葉少なくログハウスへと戻ってきた。

もしかしたらダンジョンの崩落に巻き込まれて、ヨツンヘイムに落ちたかもしれないと、くまなく探してはみたけど結局見つかることはなかった。

アルゴもクエストを無事終えることを信じて待っていたけど、ダンジョンで姿を見せたあのシスターの話を聞き黙り込んだまま。

フレンドリストを見てみればアルトの名前の横にはオンラインの文字があるから、リアルに復帰してないみたいだけど。

「なんだよシケた面して。葬式の最中か？」

聞き慣れた声に顔を上げれば、全身ボロボロで入り口のドアにもたれ掛かりながらも、いつもの皮肉げな笑みを浮かべたアルトの姿。

「無事……だったの？」

「当たり前だ。流石にダンジョンが崩れ始めたときは本当に死ぬかと思ったけどな」

震える声のシノンに茶化して返すアルト。

現実でも崩落に巻き込まれるなんて体験はまずないだろうから、ゲームの中とは言え相当焦っただろうな。

「あのシスターは？」

「さあな。崩落に巻き込まれないようにするのが精一杯だな。見失っちゃった」

そっか。逆にそれで良かったのかもしれない。  
復讐に身を焦がすなんてアルトラしくない。

アルトは椅子に座り足を組んで、頬杖を突く。

「流石に疲れた。姿見せたかと思えば、訳の分からないことをベラベラーっつておい、どうした？」

全員がアルトから距離を取った事を不審に思ってるだろうけど、それはこつちも同じだ。

「お前……誰だ」

「おいおい、俺以外になにかあるか？」

「アンタはアルトじゃない」

「兄ちゃんじゃないのは一目で分かるよ」

「伊達に用心棒として雇ってないからナ」

顔も声もアルトで間違いない。

でも仕草も癖も違う。

「大体ー」

「その顔で、その声で、もう話しかけないで」

「……致し方ありません。人前で着替える無作法、お許しくさいますね」

泥のように体が崩れていく。

……いや、泥の様なものの奥にその正体があった。

「再びお目にかかります。シラとは仮の名。私の本当の名前は殺生院。以後お忘れなきよう」

待て。なんでコイツがここにいる？

「さて、自己紹介も終えたところで、何故私がある方ではないとお見抜きになられたのか、お伺いしても？」

「アルトはね、人を茶化す時は右の口角が上がるのよ」

「足は左脚を下に組むシ」

「頬杖を突く手は左なんだよ」

「「なにより、恋する乙女を舐めるな！」」

「「いやそこ!?!」」

思わず突っ込んでしまった俺とクラインを誰が責められようか。見ろ、アスナたちだつて……あれ?なんか頷いてるんだけど……。

「アルトはどい」

「せつかちなのは嫌われますよ?あの方は、少々期待外れでしたので、ペロリと食べてしまいました。見かけ通りあまり美味ではありませんでした。証拠もこの通り、食べ残し

で申し訳ありませんが」

「…………え？」

誰の口から漏れた声なのかは分からない。けど、それよりも殺生院が放り投げ、床に突き刺さったものに目を奪われる。

肘から先を引き千切られ、鉤のような刀身の短剣を握り締めた左腕。

それは間違いなくアルトの左腕だった。



## 第最終戦：命の価値

「うそ……」

信じたくはない。だけど、目の前のものが現実だと訴えかけてきてる。

「食べ残しとは言え、喜んでいただけただけでなによりでございます。何も出来ず、私に食べられる瞬間のお顔を皆様にもお見せ出来れば良かったのですが……」

「ふざけるな……」

「はい？」

「ふざけるな！ 貴様ア!!」

背負った両剣を引き抜くと同時に、今までで最速とも言える速さで殺生院との間合いを詰め、交差するように降り下ろした。

「己が感情を御し切れず特攻。まさに獣の如し、でございますね。それでも私には届きませんが」

見えない何かに絡め取られたかのように、降り下ろした両剣が止まる。押しても引いても固定されたようにびくともしない。

「ここでは少々手狭にございます。戦うに相応しい場所を提供させていただきます。よろしく

う」

床のテクスチャが剥がれ、暗闇の中へと俺たちは落ちていった。

「……………」

無数の0と1が忙しく動く空間。

明らかに一般プレイヤーが訪れてはならない場所のような気がする。

「外装の裏側。称するならばアンダーグラウンド、と呼ぶべき場所でしょうか。ここならば存分に力を振るっても問題はないでしょう」

「なんでもありかよ……」

クラインの眩きに目の前の存在がどれだけ規格外なのか痛感させられる。

だからと言って膝を屈する理由にはならない。

逃げる？

あり得ない！アイツはアルトを、俺たちの仲間を手に掛けた。たとえ何も出来なくても背を向けることだけは絶対にしない！

「嗚呼、なんと勇ましい勇士たちなのでしょう。私を悪と断じ、討たんとするその気概。それこそが私の求めていたもの。ならば私もそれに相応しい敵として、あなた方の前に立ち塞がりましょう。生きとし生ける者、全ての苦痛を招き、十億土の彼方を焦がし、

共に浄土に参りましょうや」

殺生院の体が光つたと思えば、シスター服からより過激な服へと変わり、頭からは二本の角が緩やかな弧を描いて天を突く。背中からは蝶のような羽が生え、羽の表面は頭蓋骨のような紋様が浮かんでいる。

異形

そう形容するしかない姿がそこにはあつた。

「行き着く果ては殺生院。天上解脱、なさいませ」

時は少し巻き戻る。

「――そいつらを任せただぞ？」

遠ざかつていく仲間の背を見送り、仇敵へと意識を戻す。

「よろしいのですか？ 万に一つの勝機を態々――」

「これは俺の、俺だけの問題だ。テメエ自分の勝手に巻き込むわけにはいかねえよ」  
「随分と仲間思いなのですね」

「勘違いすんな。テメエ自分のケツはテメエ自分で拭く。そんなだけだろうが」

コイツはアイツらでも手に負える相手じゃねえ。

どういいうわけかSAOの時よりも存在感が増してる。

「それよりもテメエ、今まで何してやがった」

「何、とは？」

「しらばつくれんな。隠しきれれると思ってるのか？」

「あらあら。あまり女性を視姦するものではありませんよ？」

頭沸いてんてのかテメエ……！

「冗談の通じない方。廃棄孔と言うのはご存知ですか？」

「……人類が存続する上で、不要と判断された悪性情報の廃棄場だな」

「博識ですね。その廃棄孔と言うのは電子の海にもあるものなのですよ。不要と判断されつつも削除し切れなかったデータの残滓ざんしの流れ着く孔が。私は何をするにも脆弱な存在。ですのー」

「その孔に入り込み、片っ端から取り込んだ訳か。色欲に暴食に強欲。衆合地獄だけじゃ済まねえな」

## 衆合地獄

殺人と窃盜。そして邪淫の罪を犯した人間が落ちる八大地獄の1つ。約1兆年もの間、あらゆる責め苦を味わうらしい。

「なんと仏教についてもご存知とは、敬服の念を禁じ得ません」

「茶番はよせ。テメエの目的はなんだ？」

「……貴方と初めて出会った街をお覚えになられてらっしゃいますでしょうか？ 私は気が付けば、あの街に存在していました。誰も訪れず、ただ時間だけが流れるなか、あの街で起きてる事柄に心惹かれました。それはモンスター同士の殺し合い。嗚呼、なんと気持ち良さそうなのだ。ですが、残念なことに私は死ぬことができません。不死の刻印。それが身に刻まれているが故に。しかし何度か死を経験している内に私は気が付いたのです。幾度でも死ぬると言うことは幾度でも殺されることができると」

何を言っただコイツは……。

「その為に私は行動を起こしました。手始めにあの街のデータを取り込み私の一部とすることから。そうしている内に知りました。多くの人々が戦い、上へ上へと目指していることに。あの方々をここに招き、終わりのない快樂殺戮を催そうと考えましたのですが、突然世界が崩れ私は電子の海へと弾き飛ばされてしまったのです」

S A Oの終焉。ゲームクリアによるS A O世界の消去か。

「残念なことに取り込んだデータも消えてしまいました。嘆くことはありませんでした。何故なら目の前には無限に広がる電子の海。須郷様から頂いたカーディナルなるコピーデータを手に再び行動を起こしたのです。……話が逸れましたね。私には貴殿方のように現実に肉体があるかどうかすら定かではないので、全てのネットワークの消滅と引き換えに快楽を得ることで生きていると実感したいのです。その過程で私を悪と断じ、討たんとする勇士が現れるなら善し。もしそうでないのなら――」

「元の目論見通り、全ネットワーク消滅と引き換えに絶頂しようって？ 狂ってんな。ネットワークが消滅すればテメエも消える」

「もしかすれば、現実にいるかもしれない私が目を覚ますかもしれないでしょう？」

「知るかよ。現実じゃ殆どの物がコンピュータ制御だ。下手すりゃ全世界の原子力がメルトダウン起こして、地球が死の星に変わるぞ？ 只でさえ全ての電子機器が使えなくなりや、人類は石器時代に逆戻りだ。三年も経たねえ内に人類滅亡、仮にテメエにリアルな肉体があったとしてもテメエも死ぬ」

「おかしな事を。貴方は仰りましたね？ 人とは私一人だと。ならばそれ以外の命は私の為に使われるべきではないでしょうか？ その果てに私が死ぬとしても。今や私の手は電子の海全てに届いています。止める術は最早ありませんよ？」

これ以上の問答は無用。

そう言わんばかりに破戒僧に向け、大剣を降り下ろす。かつて感じた不可視の壁を切り裂きながら――

「なに!？」

ヤツの体がブレたかと思えばその姿が変わり、その頭を切り裂かんばかりに迫った大剣が右腕ごと宙に固定された。

「あなた様ならば、とも思いましたが未だこの程度なのです。その力には代償が必要。自らの命を惜しみましたか？」

「人を殺した以上、行き着く先は地獄だけだ!惜しむ命でもねえよ!」

「成る程。既に覚悟は出来ている、と。ご安心ください。例え地獄へと行き着く命だとしても選り好みは致しません」

ヤツの体から黒い泥の様な物が吹き出す。

本能で分かる。アレは容易く命を奪うものだ。

「恐れることはありません。脳を焼き切ることなどせず、私の中でゆっくりと溶かして差し上げます。永劫の苦楽をご堪能下さいませ」

「願い下げ、だ!」

右腕を掴まれる感触を頼りに短剣を振るい、これもまた不可視の手の様なものを切り裂きながら後退。襲い掛かる泥から逃れることに成功した。

「おおおオオおおー！」

咆哮からの突貫。

あれこれと考えてる暇はねえ。既に視界の左半分が見え辛くなってきてる。力を行使する為の代償。

この力がどこまで俺を貪り食うのかは分からねえ。

それでもー

「デメエは殺す！俺が！この手でな！」

どんな犠牲を払うことになるうが、コイツだけは認めるわけにはいかねえ！

「素晴らしい程の激情……私、思わず昂ってしまいます」

艶っぽい声と共に右腕を突き出したかと思えば、なんの前触れもなく青白い無数の腕が伸びてくる。

切り開く……のは無謀。

「ならー！」

床を踏み砕かんばかりに踏み締め跳躍。

腕の大群を飛び越え、尼僧に肉薄するがー

「ええ、識っていますとも。貴方の戦い方はあの魔竜との戦いですつと見ていましたから」





「ぐうー……ア……」

「さて、心は折れましたか？希望は潰れましたか？意思は消え去りましたか？ならば結構。全て私に委ねなさい。永劫の快樂の中で死を迎えることができますのです。これほど慈悲深い最後はありませんよ？」

ゆつくりと泥の中へと沈んでいく。

体も意志も。アイツらの顔さえ歪み消えていく。

そして今へと至る

「なんなんだよ……こいつ……！」

どれほど攻撃を浴びせても見えない壁に阻まれる。

なのにこっちは攻撃されたわけでもないのに一人また一人と脱落していく。

「なに、これ……」

「気持ち、悪い……」

「クソ……！」

「折れねえ……折れるわけにや……！」

アスナー！リズ！エギル！クライン！

「うっ……！」

「アルトさんの為にも、負けるわけには……！」

シリカー！スグ！

「兄、ちゃん……」

「アル坊……」

「アルト……」

ユウキ！アルゴ！シノン！

「……この程度ですか？やはり羽虫がいくら集まったところで虫は虫ですね」

「虫……？」

「ええ。虫が人に敵いますか？ほら、このように」



目を凝らして見れば、シノンの一矢が突き刺さった場所から見覚えのある刀身が内側から突き出ていた。

「あれは……あの剣は……!」

殺生院から吹き出した炎が、俺たちの前に集まり人型を成していく。

「よう、お前ら。待たせたな」

「アルト!」

失った左腕を炎で形作り、身体中至るところを燻らせているものその姿は間違いないくアルトだった。

「美味しいところ持ってくようで悪いが、あとは任せろ」

体の中を蠢く感覚に意識が覚醒していくのが分かる。

「おや？目が覚めたかね？」

「あ、んた……は」

「随分と手酷く痛め付けられたようだね。余程、君という存在が気に入らないと見える」

「か、やば……」

どうして茅場がここに？……ここはどこだ？

どこまでも広がる空間を繋ぎ止めるように、無数の目が付いた柱のような物が無数に見える。

自分の体を見れば、ゆつくりとだが少しずつ柱に取り込まれているようだ。

「ここはあの女の腹の中、というのが正確な答えだ。私も君も殺生院に取り込まれてしまった」

「あん、た……も」

「ふむ。意識が戻ったが消え掛かってしまっているようだ。如何に鋼の意思とはいえ、折れてしまえば脆いか。その影響か随分と侵食も進んでいる。君もこのまま柱の一部となってしまうだろう」

侵食……？……駄目だ。頭が……。

「私も気になることがあり廃棄孔へと赴いた方がいいが、突然あの女性が現れてね。何も

かもを取り込んでしまった。その場に居合わせた私にも目もくれず、私すらも取り込んでね」

「どう、して？」

「私が侵食されずに存在できているか？簡単なことだ。私のことなど指先ほども覚えていないからだ。それほどまでに多くのデータを取り込んできたのだろう」

つまりこの空間こそが、あの女が取り込んできたデータの集合体。だとすればAL0どころじゃない。下手をすれば現ネットワークに匹敵する程の膨大なデータが集積していることになる。

「頭は回ってきたかね？ならば確固たる意思を保つことを薦めよう。僅かでも隙を見せれば、あの女性は君を食らい尽くすだろう。随分と君を毛嫌いしているようだ。それとも体が痛むかね？ナーヴギアよりもセキュリティ面を強化したアミューズファイアとは言葉所詮はプログラム。脳から痛覚を切り出し、アバターに反映させるなど今の彼女なら造作もない」

つまりアミューズファイアであつてもあの女なら、仮想からでも人を殺せるってことかよ……。

「あんたは……ここになにを」

「することがないと暇だね。これほどまでの量のデータを消去するにはどうすべきか

と、思案していたところだ」

一番手っ取り早いのは核となっているあの女を消すこと。

……そうだ。それよりもー

「あの女、須郷からカーディナルのコピーデータを……」

「ふむ。やはりか。君も薄々気付いていたのではないかね？ 須郷君が起こしたSAOサバイバー誘拐事件。言っては悪いが、須郷君だけでは到底思い至らないことだ」

つまりあの女が須郷を誑かして、カーディナルのコピーと引き換えにあの計画を提供したってことか。

自分で考えたような事を言っていたが、結局は与えられたモンではしゃいでただけかよ。

「ならば答えは早い。この空間の核となっているカーディナルとあの女性を消すことができれば、このデータ群も霧散するだろう。霧散する衝撃でどれ程のダメージをネットワークに及ぼすか、検討もつかないがね」

「世界がどうなるうが、知ったことじゃねえ……」

「成る程？ だが、今の君では彼女の足元にも及ばないと身を以て知った筈だが？」

「だからなんだ。俺には何も無い。失うものなんざー」

「どうやら、侵食が脳にまで達してしまっているようだ」



何を言つて……。

「キリトくんにあすなくん」

……？誰だ？そいつら……？

「君の相棒とも呼べるキリトくん。君と彼はお互いに譲れないものの為に何度も剣を交えた筈だ」

『おい、アルト！』

『なあ？アルト』

『生きてるか？相棒』

親しげに俺に声を掛ける黒衣に身を包んだ少年。

「そのキリトくんの半身とも言えるあすなくん。時に諫め時には諫められ、時にはキリトくんと共に叱咤されていた」

『あ！アルトくん』

『ちよつと！アルトくん!?!』

『こら！2人とも!!』

怒った顔は恐えけど笑った顔は好感の持てる白衣の少女。

「思い出したまえ。君には決して、消えることのない絆で結ばれている仲間がいる筈だ」

『あ！アルトさん』

『アルトじゃない』

『アル坊』

『ようアルト』

『アルトじゃねえか』

『アルトさん？』

『ねえアルト』

『兄ちゃん！』

シリカ、リズ、アルゴ、エギル、クライン、リーファ、シノン、ユウキ……ああそう  
だ。俺には忘れられねえ、忘れちゃならねえことがある。

「息を吹き返したか。ならばその程度の拘束はないも同然だ。君はどうする？どうした  
い？」

俺がしたいこと……すべきこと……！！

そんなもん決まってるんだろ！

薄暗い空間に光が差し、その出所を探せば見覚えのある矢じりが空間を割り、突き出  
ていた。

「助かったシノン。お前のお陰で出口が見えた」

「ううん。アルトが無事なら、それでいいわ」

「どうして!?なぜ貴方は!?あのまま身を任せていけば!永遠の快樂と共に終焉を迎えられたというのに!」

「言つたろ?そんなモン願ひ下げだつてな」

「それよりもどうやって!?どうやってあの無間地獄を抜け出したというのです!」

「あの程度が地獄?だとしたら生温いにも程がある」

まあ、元より俺は地獄行きの身だ。下見できたと前向きに考えておこう。

「行くぞ魔性菩薩。テメエの存在の悉く俺が否定してやる」

打ち出される無数の腕を炎を纏った大剣のひと薙ぎで消し飛ばす。

「なっ!」

失った左腕を再現した炎の左腕の感触を確かめ、殺生院へ向け歩を進めていく。

「まさか!? 貴方は自身の命すら燃やし尽くすおつもりですか!？」

「簡単なことだ。足りねえモンがあんなら、命を燃やしてでも届かせるだけ。命自体に価値はねえ。だからこそ、そいつ自身の生き様で命に価値を付ける。俺の命でテメエを殺せるなら、俺は満足だ」

「だからだろうな。確実に死に向かつてるっつーのに恐れが全くない。いや、そんな感情すら燃やし尽くしちゃったからか? まあいいか。」

「後から卑怯だなんだと言われたくねえ。今からお前の左腕を切り飛ばす。いいな? 理解したな?」

「ッ!」

瞬間にも満たない刹那に殺生院の左腕が宙を舞った。

「貴方ごときの命1つで、ここまで……!」

「テメエは俺だけじゃなく、あいつらにまで手出しやがった。楽に逝けると思うな!」  
大剣を振るい、ゼロ距離から左腕を炸裂させる。

刻一刻と俺と言う存在が燃え上がり欠落していく。

左腕を炎で形作った方がいいが、感覚までは戻らなかつた。それどころか左腕全体も、大剣を振るう右手にも感覚がない。

左目も見えなくなり、音も聞こえない。

だが、その程度で止まる理由にはならない。

「地獄へ墜ちろ！魔性菩薩！」

「おいキリト……今アルトの奴何をしたんだ？」

「分からない。なにも見えなかった」

クラインの言葉に呆然と返すことしか出来なかった。

俺だつて自分の目を疑つてる。目の前で殺生院と戦つてるのは本当にアルトなのか？

「なんででしょう？とても綺麗なのに……」

「見てるだけで体が冷たくなつていく感じ……」

振るつた大剣の軌跡をなぞる様に炎が舞い、左腕を振るえば火の花が咲く。

「これって……！」

「どうしたの？ユイちゃん」

「アルトさんのアバターが内包するデータ量が、加速度的に減少しています！これじゃ本当に……」



煙が徐々に晴れ、微かに見える人影。

あのシルエットで女はあり得ない。つまりー

「やりやがった……アルトの奴、やりやがったんだ！」

クラインが喜びの声を上げてるけど、胸騒ぎが止まらない。どうしてだ？ 殺生院はもうー

ようやく煙が晴れアルトの姿が見えたけど、力なく体が揺れたかと思えば、そのまま背中から地面に倒れた。

慌てて駆け寄ってアルトを抱き起こしたけど、まるで氷のように冷たくなってる。

「おい！アルト！目を覚ませ！」

「パパ、そのまま寝かせてあげてください……」

「ユイ？」

「そこからは私が説明しよう」

「茅場、晶彦……」

「やあ、久しぶりだね。キリトくん」

茅場の口から聞かされたのは、データを超越したアルトの力。そしてその力を使って全ネットワークに延びた殺生院のプログラム全てを消去した。だが対価として自身の命を燃やし尽くしたということ。

殺生院についても教えてくれた。全ネットワークの消滅と引き換えに生きている実感を得ようとしていたこと。そしてその衝撃で現実にあるかもしれない殺生院が目を覚ますかもしれないということ。けどアルトによってどちらも阻まれた、と。

「それじゃ……アルトは……もう……」

「2度と目を覚ますことはないだろう。彼はそれを選び、そして実行した。殺生院によるネットワーク消失を自身の命と引き換えに防いだとも言える。尤も彼自身、そんな気は毛頭ないだろうがね。燃え尽きたあとに残るのは灰のみ。つまり、彼のアバターが残っているのは彼の意識の残滓、つまり彼が燃え尽き残った灰と言えるだろう」

「馬鹿野郎が……死んじまったら、なんの意味もねえじゃねえか!」

「でも、どうしてそんなことが……」

「アルトくんにできるのかと? その兆しは以前からあった。キリトくんはよく知っている筈じゃないかね? 思い当たる節はある筈だ」

俺が? ……まさか。

「思い出したようだね。推論になるが人前で初めて行使したのはSAOで最後に君とアルトくんが戦ったときのことだ」

ソードスキル発動中にその軌道を無理矢理ねじ曲げたあの一撃……。本来あり得る筈のない挙動だったからよく憶えている。



「……さて、私はそろそろ行くよ。ああそうだ。君は……シノンくん、だったね？君もアルトくんと同じ力を使つたようだが、金輪際その力を使わないことを奨めるよ。尤も使うことは、もうないだろうがね」

そう言つて茅場は姿を消した。

残されたのは静寂だけ。

「アルト……嘘、だよな？だつて約束したじゃない。私を置いてどこかに行かないでつて……約束、破るつもりなの？」

「やだよ……兄ちゃんともつといっぱいお話とかしたかつたのに……姉ちゃんだつて年明けに兄ちゃんを驚かそうつて色々準備してるんだよ？こんなのつてあんまりだよ……」

「アルト、オイラ……ううん私だつて色々料理とか勉強して、今度のバレンタインはアルトに美味しいって言つて貰おうと思つて頑張つたんだよ？不義理はアルトの流儀に反するんじゃないの？」

シノンもユウキもアルゴも。

アルトに声を掛けるが反応はない。

誰がこんな結末を望んだつて言うんだ……。

お前はいつもそうだ。なんだかんだ偉そうなこと言つておいきながら、自分のことは

棚に上げて勝手にしたいことをやる。周りの事なんて気にもしないで、自分の道をただ進んでいく。

今回だってそうだ。でも誰一人アイツに敵わなかった。だからアルトに全てを背負わせてしまった。言ってしまえば、アルトを死地に追いやったのは俺たちとも言える。

オオオオオオンンンン……

……今のは……。

いつか聞いた遠吠え。

周囲を見渡せば、見上げるほどの巨躯を誇る灰色の狼がこちらを見ていた。

——まさか、あれって……。

「もしかして……シフちゃん？」

そうだ間違いない。灰色の毛並みに金色の眼。

でもなんで……？

「ウウウ……」

横たわったアルトの匂いを嗅ぎ、周りをぐるぐると回り始めた。自身の主が目覚めないことを感じ取ったのか、煤けた鎧を啜え体を起こそうとしている。

「シフ……アルトは、もう……」

ピクリとアルトの指先が動いた様な気がする。

「……つたくテメエら……勝手に人を殺すな……」

「アルト……?」

「おう……言つただろ、負けねえつてよ……」

言つてないだろ……。

「「「「「アルト!!」」」」」

「どわっ!」

この大馬鹿野郎! 驚かすなよ!

茅場は命を燃やし尽くしたと言つていた。でもアルトはこうして生きてる。生きててくれた。

「どけテメエら! 重いんだよ! つか、どきくさ紛れて呼び捨てにした奴いたな!」

細かいこと気にするなよ。

揉みくちやにされたアルトを解放し、アルトの眼前には好意を寄せる3人の少女が立っている。散々心配させたんだ。覚悟を決めろよ?」

「言い訳はある?」

「私——オイラたちを不安にさせといテ、なにも何もないのは道理が通らないよナ?」

「兄ちゃんの馬鹿」

「何もねえよ。罵倒だろうが平手だろうが足蹴だろうが、抵抗はしねえ。好きにしろ」

「……この、馬鹿あ!!」

「おおう」

流石のアルトも泣く女の子には勝てないか。

抱きつかれたまま泣かれされるがまま。

「……悪かった。心配かけたな、お前ら」

「ガウ！」

「シフ……よう、また会えたな」

アルトが右手を伸ばせば、甘えるように自分から頭を擦り付ける。喉を鳴らし心地良さそうに目を細めてる。

「……よう相棒、まだ生きてるか？」

アインクラッド第七十四層でアルトに言われた言葉。

何を言われたのか頭が追い付かなかったのか、一瞬ポカンとして目を伏せて鼻で笑った。

「……当たり前だ。相棒」

結局、なぜ俺が生き残ったのか理由は分からないまま。

自分と言う存在が欠落していく感覚はまだ覚えている。命が削れていく感覚も。そしてあの女に引導を渡したあと、まるでテレビの電源を切ったように意識が途切れたのも覚えているが、こうして生きている。

「ほら、兄ちゃん！」

「ああ、分かったから引つ張んな」

あの女に引き千切られた左腕は、リアルに戻った今も軽く感覚が麻痺してる。これは一時的なものなのか、そうじゃないのか。俺には判断できねえけど命あつての物種だ。それに日常生活には問題ねえし。

あの女を消した方法は至って簡単。全ネットワークに広がったデータ群の中からあの女と核になってるカーディナルを切り離し、消し飛ばしただけ。とは言え、何万何億というデータの海の中からたった2つのデータを探すのは並大抵のことではなく、腹をかつさばき修復させることで目的のものを見つけられる確率を上げる必要があつた。例えるならボックスガチャだな。

右手に持ったスマホを見れば、画面の中でシフが丸くなっている。ユイの協力もあ

り、シフをスマホに転送することができるようになった。流石にデータ丸々ではなく思考と言語、デフォルメされた姿だけだが。

「シフ……まさかお前が？」

『ウ？』

「……いや、なんでもねえよ」

もしかしたらシフが俺の命を繋いだのかとも思ったが……いや、そう思うことにしよう。

人は自分に都合の良いように考える生き物だ。

シフが燃え尽きるはずだった俺を救った。それでいい。

何度目かになるエギルの店を貸し切つての打ち上げ。

金払つてんだし、楽しまなきゃ損だ。

「にしてもなんで《エクスカリバー》なのかしらね？普通は《エクスカリバー》でしょ？」

「《エクスカリバー》のキャリバーは銃の口径にも使われてるわ。牽いては人の器という意味もあるそうよ」

「へへ。それじゃ、もつと詳しい解説を颯真先生お願いします」

「人を辞書代わりに使うんじゃないかねえ。……元々はアーサー王伝説に出てくる黄金の剣工

クスカリバーが正解だ。キャリバーと呼ばれるようになった由縁は諸説あるが、アメリカがイギリスから独立した時と言うのが有力だな。綴りは同じでも読み方が違うつてのはよくある話だ。実際、カリバーもキャリバーも同じ綴りは同じ。つまりキャリバーはアメリカ、カリバーはイギリスつてことになる。ま、どっちの読みでも問題ねえ。ちなみにエクスカリバーは選定の剣カリバーを元に打ち直された剣つて説もある」

「颯真さん詳しいですね」

「アーサー王伝説はよく読んでたしな」

著者が違えば、物語も違う。  
大元の物語の流れは同じだが、人の解釈によつて物事の観点が違うから余計にのめり込んだんだよな。

「アルトつて名前もアーサー王伝説から来てたり？」

「正確にはそのモデルになった人間だ。ルキウス・アルトリウス・カストウスつてな。ミドルネームのアルトリウスから取つてアルトだ」

「ふん」

「んだよ和人」

「やっぱり颯真は厨二んぐう！」

「言わせねえからな？」

自由の効く右手で和人の口を塞ぐように驚掴みにする。

「おいエギル。裏口は何処だ？」

「なるべく穏便にな。飲食店で暴力沙汰なんか起こされれば、商売あがったりだ」

「心配すんな。フルコースだ」

「まったく安心できない!？」

なんとか口を自由にした和人が突っ込めば、店の中が笑いに包まれた。

「それじゃ宴もたけなわと言うことで二次会はA L Oに集合!」

「なんで里香が仕切ってるんだよ」

「いーじゃないのよ。ここに来れなくて寂しい思いをしてる人もいんの。長々とあたし

たちだけで盛り上がったってしょうがないじゃない」

アルゴのことか。いやユイとシフもだな。

「新生アインクラッドはどこまで攻略されてたっけ？」

「痴呆になるにはまだ早えだろ」

「表出ろこの野郎」

「上等だコラ」

「はいはい。和人くんも颯真さんも仲良し仲良し」

「仲良くない!!」



二次会の勢いそのまま突破された六十八層のボスにはご愁傷さまと言っておこう。  
いつかはそれぞれの道を歩むことになるだろう。

それまではこいつらと共に走ろう。

数少ない心から信頼できる仲間、だからな。

## ロスリック編

### Prologue (プロローグ)

あの魔性菩薩とケリを着け、無事年明けを迎えた。

左腕の感覚はまだ戻らない。片腕が使えない不便さを感じながら、年明けを迎えたわけだが――

「朝ごはん出来たわよ」

「通い妻かお前は」

満更でもない顔すんな。

あの1件以来、朝田の距離が今までよりも近い。

朝田だけじゃなくアルゴも木綿季も。

朝田は毎日飯を作りに来るし、木綿季は冬休みが終わるまで泊まると言い出すし、アルゴは何かと絡んでくる。

アルゴのヤツは学校が違う為、リアルじゃそうそう簡単に会えねえからか、ALOじゃシノンやユウキよりも引つ付いてくる。

六千人ものSAOサバイバー中、学生の数は約三千人にも及ぶ。小中高の様々な学生

に1つの学校では賄えず、各地区に建設された学校に地区別に振り分けられた。

俺や和人、明日奈たちは関東地区に割り振られ、アルゴは……どこだろうな？聞いても答えねえし、リアルルの名前も言わねえし。

「ふあくおはよ〜」

「飯食う前に顔洗ってこい」

「は〜い……」

「木綿季、寝惚けてるわね」

「昨日は遅くまでALLOにいたからな」

リアルルに戻ったのは日付が変わり、年が明けてから。そこからもテンション冷めきらない木綿季は空が白み始めるまで起きていた。

日の出が遅いこの時期に、空が白み始める時間はお察しだ。

「左腕の調子はどう？」

「相も変わらず」

左腕を動かしてみるが反応が鈍い。何かを触ったと言う感覚も曖昧だ。

なのに何故、同じように引き千切られた筈の右腕と両足は今も動かせるのか？あの女の中で見つけ繋げられたからか？

その話でいけば俺の左腕を見つ、繋げられれば良かったのだが見つからず、昨日口

グインしてみれば何事もなく左腕は存在した。

だが動きがぎこちない。いざというときの反応が鈍いから、動かさない方がマシだ。そのせいかキリトも本気を出さねえし、フラストレーションは溜まる一方だ。

「……ごめんなさい」

「お前らに非があるわけじゃねえ。そう簡単に頭下げんな」

こいつらが悪いわけじゃねえ。アイツの力を見誤り、引き千切られた俺が悪い。確かに不便だが、かと言って死ぬ訳じゃねえしな。

「ボク復活！シフおはよう」

『ガウ！』

簡単に手作りしたスマホスタンドに立て掛けたスマホに声を掛ける木綿季。画面にはデフォルメされたシフが映っている。

「そう言えばALLOの大型アップデートの話知ってる？」

「10日にあるメンテ後のやつだろ？新エリアに新モンスタがどうのつてヤツ」

「常設エリアらしいから、急ぐ事はないだろうけど……」

「そりゃな。メンテ後つてなりや人も集まる。今まで以上にリソースの奪い合いで殺伐としてるだろうな」

「先行公開の映像だと荒唐というか殺伐としてるみたいだから、雰囲気的には合ってる

んじゃない？」

雲の上の神殿だったり、森に囲まれた教会だったり、戦火燻る城だったり。少くとも新しいエリアは3つだな。

個人的に教会は忌避感を覚えるが。

「殺伐としてるのはやだな。どうせやるなら楽しい方がいいよね」

「お前の楽しいは剣を振ることだろうが」

「颯真が言えた立場じゃないでしょう。まったく、貴方といい木綿季といい。親戚とは言え、同じ血を引いてるって嫌でも分かるわ」

痛いところを突くな。

「た、確かキャッチフレーズは『王たちに玉座なし』だったか」

「露骨に話を逸らしたわね。死にゲーで有名な会社とのコラボらしいわ。難易度は馬鹿みたいに高いでしょうね。超高難易度を謳ってるくらいだし」

あそこか……。死んで覚えるを地で行くゲームだったな。

「ジャンル間違えてるだろ。ダークファンタジー路線で別のゲームとして売り出した方が売れるんじゃないの？」

「大人の事情じゃない？」

バツサリだな。

「兄ちゃんは参加するの?」

「当たり前だ」

左腕を使えなくても戦いようはある。

いつも通り全力で戦いに挑むだけだ。

火花が散り、剣撃の音が周囲に鳴り響く。

「アルト!新しい剣なのに随分と慣れてるじゃないか!」

「これでも軽いぐれえだ!欲を言や、もう少し刃渡りが欲しいな!」

リズに頼み新しく打って貰った剣。

それは剣というにはあまりにも大きすぎた

大きく、分厚く、重く、そして大雑把すぎた。

それはまさに鉄塊だった。

……ネタは置いといて、そこまで長大ではないが以前使っていたものより長く重いのは本当だ。俺の身長を越す刃渡り、《エクスキャリバー》よりも遥かに重いそれは、STR極振りしてる俺じゃないと振り回すどころか、まともに持つことすらできない化物つぶりだ。

その名も《Bersek》

英語では Berserker だからこっちはノルウェー語だな。北歐神話に出てくる軍神オーデインの祝福を受けた戦士を指す。

戦いになれば鬼神の如く戦うが、敵味方の区別がつかなかったらしい。その由来から戦いに狂う戦士、すなわち狂戦士と呼ばれるようになった訳だ。

名前の意味と由来を教えれば『バーサーカーなアルトにはピツタリじゃないか』とかキリトを指差しながら笑うもんだから、殴っておいた。誰がバーサーカーだ。

なぜこれの製作依頼したかと言えば、左腕が使えないハンデをカバーすべく刃渡りを長くして貰ったのだが、長くなるほどに耐久値が下がり、耐久値を上げるほど厚みが増し重量が増えたというわけだ。

ありつたけの金と素材を使いなんとか完成したもののリズにはもちろん持てず、研磨するときには俺が持っていないといけねえからハッキリ言や面倒だが、まあ製作しても

らった以上は仕方ねえよな。

試運転も兼ねた模擬戦と言うことでキリトに相手を頼んだが、やはり全力を出してこない。6割出してるかどうかと言ったところだろ。

砂塵を巻き上げながら《ベルセルク》を振り上げ、バックステップで距離を取ろうとしたキリトを空へ打ち上げる。返す刃で落ちてきたキリトの背中を捉え地面に叩き付けた。

良い武器だ。気に入った。

「これで157戦79勝目だ。」

「待て！これもカウントするののか？」

「当たり前だろうが」

「横暴だ！この暴君！」

……やるか？あ？

素手での戦いも辛勝ではあるが制し、一段落つけた。

俺相手に素手で挑もうなんざ10年早かったな。

メンテ開始まであと1時間を切り、次にログインできるのは明日の午後3時。メンテ



開始ギリギリまでゆっくりしようと言う話になったんだが、少し離れた場所でキリトとアスナは縁側に座る老夫婦のような雰囲気醸し立てる。

俺はユウキ、リーファ、シリカの冬休みの宿題を手伝ってる。宿題って言い方懐かしいな。

手伝うと言つても答え合わせ程度だが。

「文法が違う。組み立て直せ」

「英語嫌い（です）！」

単語の組み合わせで英文作るだけだろうが。頭から煙が出始めた三人を余所にアルゴの方へ意識を向ければ、なにやら作戦会議中みたいだな。

「高難易度のエリアで左腕が使えないハンデがどれだけ重いカ、アル坊だつて理解してるはずサ」

「この俺も行くんだ。大船に乗ったつもりでいろよ」

「泥船の間違いじゃないの」

「シノンさあん……」

シノンの毒にクラインは膝から崩れ落ちる。

こうか は ばつぐん のようだ

俺のことを気に掛けてくれるのは正直嬉しくはあるが、ほどほどにしてほしい。気を

遣われ過ぎて逆にこっちも気まずいからな。

朝田は家事全般を頼んでもねえのにやるし、アルゴと木綿季は何かと世話を焼いてくる。

……もしかして今の俺ってヒモ？

「どうしたの兄ちゃん？」

「……現実を見たら死にたくなつた」

「このままじゃダメだな。どうにかしてこの腕を――」

「……？」

「どうしたアル坊」

「……いや、何でもねえ」

誰かに見られてたような気がしたんだが……気のせいか？

「そろそろメンテ開始の時間だな」

「それじゃみんな、次に会うのは明日だね」

メンテ開始告知のウインドウがポップアップしたことで、それぞれがログアウトするなか、再び感じる視線。

……なんだ？

見られてる分には害はねえが、気が散ってしようがねえ。

さっさとログアウトするか。

ログアウトのOKをタップした瞬間、感覚がない筈の左腕に僅かだが熱を感じた気がした。

だがそれも一瞬、意識は既にリアルへと帰還した。

## 第1火：灰の審判者

「で？新エリアってのはどこから行くんだ？」

「うーん、前告知だとかかりび篝火って所で転送されるみたいだけど」

篝火ねえ。

今回挑むメンバーは俺、キリト、アスナ、ユウキ、シノン、クライン、ユイの7人。まずは様子見と言うことで少数精鋭でマツピングするところになった。

タンクが1、ダメージディーラーが2、ヒーラーが1、後方支援が1、遊撃が1。バランスは取れてる。

タンク役の俺がどこまでやれるかが問題だが。

「新エリアではヨツン Heim と同じく飛行は出来ないらしい。もういくつかのパーティが撤退してきてるみたいダ。武運を祈るゾ」

「良い情報があれば売るよ」

「お友だち価格で5割り引きの買い取りダ」

半額かよ。

「撤退組からの情報だと、旧ヨツン Heim にある捻れた剣が突き刺さった篝火から新エ

リア、ロスリックに行けるらしい。注意してほしいのハ、手に入れた武器やアイテムは各所にある篝火からこっちに帰ってこないト、手に入れても死んだ場合その場所にドロップすることだナ。欲張って良いことはないってことダ」

「強欲は身を滅ぼすか。身を以て理解してる」

正確にはあの女を見て、だが。

それはそれとして、アルゴが旧ヨツンヘイムと呼ぶのには理由がある。

キリトが《エクスキヤリバー》を獲得後、ヨツンヘイムは緑溢れるエリアへと変貌した。

ニヴルヘイムの王スリュムを討ったからかもしれないと言うのがキリトの見解。ユイも同じ意見らしい。確かにあれつきり多碗の邪神级モンスターも見かけねえしな。逆に像クラゲの方を見かけることが多くなった。

まったくもって忌々しい。

運営側も大層驚いただろうな。

正月休みが明けてエリアデータを見てみれば、ヨツンヘイムが氷の世界から変貌してんだからな。

「みんな聞いてくれ。新エリアの名称はロスリック。ストーリー的には人と竜の戦争後、人の世界に起きた異変を突き止める為に妖精が派遣されることになったってことら

しん」

「人の世界だから飛行は出来ないってか？妖精って設定はどこ行ったんだよ」  
「飛べることで難易度が変わるからじゃないのか？」

ふーん。

「とにかく、今回は様子見だ。無茶せず慎重にいこう……特にアルト」  
バーサーカー

「名指しすんじゃないねえ」

ぜってえ変な含み持たせただろ。

「これか？」

「これだな」

捻れた剣が突き刺さった篝火。

薪ではなく骨のようなものが焚<sup>く</sup>べてあるが。

「みんな、覚悟はいいか？」

「「「おう！」「」」」

「はい！」

キリトが篝火に手を翳し転送された。

視界が開ければ、そこは木も枯れた墓所。

不気味極まりないな。

「なんだか閑散としてるね。実装直後だからもつと人がいてもいいはずなのに」

「だな。もしかしたらサーバーを複数用意して、パーティ毎に振り分けてるのかもしれない」

「もしそうだとすりや、リソースの奪い合いになることは少ねえってことか？ だったら余裕はあるわけだな」

「アホか。性能がいい武器やら防具やらが出回るようになれば、集まってくるに決まってるんだろ。それにキリトの推測が当たってたとしても、その振り分けがランダムである以上ここに他のパーティが来るのも時間の問題だ」

「どんな強い敵がいるのかな？ ワクワクしてくるよ」  
「アルト2号」

「おいキリト聞き捨てならねえな」

「バカやってないで早く行きましょ」

後戻りは出来ねえみてえだしな。

道なりに進んでくしかねえのかなあ。

ローブを着たガリガリに痩せ細ったエネミーを蹴散らし進むが、短剣やボウガンを持つてゐるぐらいで脅威になり得ない。中には簡素な槍と木製の盾を持つてゐるヤツもいたが、これもまた然りだ。

「うわあ！」

岩場の切れ目を抜けると山の中腹辺りだろうか、なかなかの絶景が望める場所だ。ユウキが感嘆の声を上げるのも頷ける。

「皆さん気を付けてください。この崖から落ちれば即死のようです。篝火のワープポイントを確認してない以上、落ちてしまえばまた1からやり直します」

ここからがスタートって訳か。

つつても道幅は狭えし横並びじゃ2列が限界だな。とは言え戦うこと前提なら縦並びが順当だろうな。

「うーん。アルトの武器じゃ先頭は難しいかもな」

「このサイズじゃ振り回せねえし……しようがねえか」

振り回せば間違いなく左側の壁にぶつける羽目になる。

なら降り下ろせば、と思わなくもないが外した場合のリカバリーをする奴が全員後ろにいつから最善とも言いにくい。

外す気は毛頭無いが、万が一、億が一の可能性を考慮してだ。



シノン中は距離支援だから論外。

キリト、アスナ、ユウキ、クラインの誰かが矢面に立つことになる。

「はいはい！ボクやりたい！」

「ユウキ、か……」

キリトが問い掛けるような視線を投げ掛けてくるが、答えは決まってる。

「シノン、アスナ。いざという時は頼む」

「了解」

「よし！行くよ！」

意気揚々と歩き出すユウキに続き、広いとは言えない山道を崖下に注意しつつ歩いていく。

ユウキを先頭に進み続けて10分ほど経ったが、一向に篝火がない。チェックポイントとしてはそろそろ良いタイミングの筈だが……。

「あれなにかな？」

アスナの指の先には人工物であろう壁が見える。

彫刻の彫られたその壁は明らかかな人工物であることを示す。

「ようやくチェックポイントか……脱落者が出た割りには大したことなかったなあ」

「気い引き締めろクライン。『騙して悪いが』はよくある話だ」

ま、それを言っただけで生きてる奴はそうそういないが。

真つ直ぐ壁に設けられた門の向こう側に行きたいが、ローブを着たエネミーが多い。だが場所は開けてるから俺が行っても問題ないねえな。

そう視線でキリトに問い掛ければ、小さく頷く。

了承は得た。さて暴れるとしますかね。

「おおおおりやああああ!!」

隠れてた岩影から飛び出し、《ベルセルク》を横風ぎで払う。5体のエネミーをまとめて薙ぎ倒し、俺にヘイトが向いた瞬間キリトたちは奴らの視界に入らないよう姿勢を低くしたまま門を潜り抜けた。

……またか。

メンテ前にも感じた視線。だが視線を感じるが姿は見えない。煩わしいな。

実害は殆どない。無視するのが得策か。

視線の正体を知りたいが、それよりもあいつらに合流するのが先だ。大したアイテムもドロップしねえみてえだし、全部相手にすんのもバカらしい。

「なんだこれ？」

「なにかの石像……かしらね」

表面は確かに岩みてえだが、胸に突き刺さった捻れた長剣。背中側に突き出た切っ先を黒い蛇のようなものが無数にまとわりついてる。

「奥の扉は？」

「駄目。ビクともしなかつたよ」

「てことは、これをごとにかしなきやならねえ訳だ。

跪ひざまづき長剣の柄が手に届く位置ある。

怪しい。

「どうやらこの剣を引き抜かなきゃ駄目みたいです。それと同時にこの石像との戦いになります」

「ありがとうユイ。アルトこの剣を引き抜いてくれ。アスナは全員にバフを頼む」  
「それじゃいくぞ」

右腕と左足を使い長剣を引き抜いていく。

「バフの準備もオーケー。いつでもいいよアルトくん」

「今やってるつーの……！」

あともうちよい……!!

「うおあぶねえ!!」

引き抜いた瞬間、勢い余って半円を描くように振り抜いちまったが、些細なことだな。「全つ然些細じゃない!頭が泣き別れするところだったんだぞ!」

「パパ来ます!」

「切り替えろ!」

「俺が悪いのか!」

HPバーは1本。《Ash of Judge》

灰の審判……者でいいのか?

傍らにある斧槍を持ち、立ち上がるその姿はまさに圧巻。

4 m近い身長とずっしりとした体軀から繰り出される攻撃は強烈だろうと予想できる。

「全員散開!アルト任せたぞ!」

「任された!」

叩き潰さんとばかりに、頭上から降り下ろされる審判者の左手を《ベルセルク》で受け止めつつ体を回転させ往なす。

左右からキリトとユウキ、後ろからクラインが斬り込む。

「凧ぎ払いが来ます！3秒後！」

3人が回避し、俺は身を屈めることでやり過ぎしてから飛び上がり、がら空きになった審判者の喉目掛け渾身の突きを放つ。

数歩たたらを踏みながら後退するもすぐに体勢を立て直し、着地する寸前の俺をその斧槍で払う。

辛うじて防御は間に合ったが、弾き飛ばされ地面を転がる羽目になった。

固えし立て直しも早え。こいつを倒さねえと先には進めねえし、ここで死ねばまた最初からやり直し。

成る程。撤退組が出てきてもしようがねえな。

HPを見れば、ようやくイエローに落ちたところ。

……レッドまでもってけるか、つてとこだな。

右足を引き、切っ先を審判者に向けて構える。

「全員離れろ！」

キリトたちが離れ、俺にヘイトが向くがもう遅い。

円を描くような八連撃。そして振りかざした《ベルセルク》を審判者を切り裂きつつ地面に叩き付け、地面を真っ直ぐに走る衝撃波が審判者を壁まで吹き飛ばす。

「全員！氣い抜くな！まだ終わってねえ！」

《特双剣》の上位連撃ソードスキル《ナインライブス》。それを片手でも使えるよう再現したOSS。高火力に吹き飛ばし効果が売りだが、硬直が長えのがいただけねえな。見直しが必要か。

などと下らないことを頭の片隅で考えながら、砂煙に消えた審判者の動向を探る。

「なにあれ……」

シノンに同感だ。

砂煙が晴れ審判者が姿を現せば、背中からは黒い蛇のような頭が生え、左腕は自身の体よりも肥大化し背中と同じく黒いナニカが覆っている。

「崇○神？」

「ユウキ、それはアウトだ」

確かにそう思わなくもないけどな。

異形と化した左手を地面につき、それを支点に飛び上がる。

狙いは……俺。

斧槍の突きを横つ飛びで躲し、続けて繰り出されたタツクルを《ベルセルク》を盾に防ぐ。

重い……！

明らかに形態変化する前よりも力が増してる。

残り2割切ったつてのにバカみてえに広い攻撃範囲のせいで近づけねえ。

「シノン！狙えるか!？」

「やってみる!」

火矢を番え、放つ。

蛇のような頭に直撃し、鼓膜を破らんばかりの悲鳴が響き渡る。怯んではいるようだが、これだとこつちも動けねえし、闇雲に左腕を振り回すもんだから余計に近づけねえ。

被弾覚悟でやるしかねえか？

飛び出そうとすればキリトに腕を掴まれた。

「無茶するなって言っただろ!？」

「あいつの攻撃力は判ってる!一撃もらった程度じゃ死にやしねえ!」

「お前が無茶する度に心配するこつちの身にもなつてくれ!」

……………。

「真つ先に面倒事に頭突つ込むお前が言うな。んで?どうするよ?シノンの火矢でチマチマ削るか?」

「好きでやってる訳じゃないさ。ユイ」

「はいパパ。攻撃範囲は確かに広いようですが、逆に自身の周囲は範囲外ようです。懐に潜り込めれば勝機はあるかもしれません」

懐に潜り込めれば、ねえ。

仮にあの腕を掻い潜っても右手の斧槍が待ち構えてる。

「クラインあいつのタゲ、頼めるか？」

「あたぼうよ！俺さまに任せとけ！」

「シノン！火矢は使わないで、蛇の頭を狙ってくれ！」

「了解」

「アスナは今まで通り回復を頼む」

「任せて」

「ユウキは隙を見て、あの腕を掻い潜って足元に潜り込んでくれ。一撃離脱で頼む」

「まっかせてよ！」

「アルト、一緒に行くぞ」

「……了解だ。相棒」

キリトと並走し、審判者のヘイトを稼ぐために立ち止まったクラインの後ろで二手に別れる。

降り下ろされた左手を刀だけで受け止めたクラインの脇をユウキが駆け抜け、その丸太のような脚を斬りつける。

堪らず膝を着きながらも後ろに抜けたユウキに向け、斧槍を振るうよりも早く左右か



ら俺とキリトが審判者の胸を切り裂いた。

胸に三条のダメージジエフェクトを刻まれた審判者は制止。

1 拍置いて破片となって散った。

Congratulations!

お馴染みのファンファーレと共に祝福の文字が宙に踊るが、正直こっちはそれどころじゃない。

「……全員無事か？」

「……終わってみればあつけねえな」

ヒーラーのお陰で脱落者なし。

初見のボス相手に大金星だな。

「アルト、その……」

「別に気にしてねえ。勇気と蛮勇は違う。それぐらいは理解してるつもりだ」

「パパ、篝火が出現しました。アクティベートした方がいいのではないのでしょうか」

「そうだな。ちよつと行ってくる」

なににせよ、これでチュートリアルは終了。

次のエリアから本番だな。

その時、左腕から熱を感じた。

僅かではあるが暖かい、そう感じる程度だが。

「誰かな？あれ」

ユウキの言葉に俺たちが入ってきた入り口を見れば、傷だらけの騎士甲冑に身を包んだ……プレイヤーか？あれ。

視線は真つ直ぐに俺を捉え、どういう訳か戦意も感じる。

プレイヤーだとしても恨まれることなんざ……多すぎるな。

主に闘いを吹っ掛けたことが。

まあいいさ。誰であろうが武器を持ち、戦意を持った時点で皆戦士つてな。闘いを挑むつもりなら全力でやろうか。そっちの方が面白いだろ？

「名前は聞かねえ。怨むなら闘いを挑んだテメエを怨みな」

一足飛びで騎士甲冑に肉薄。

《ベルセルク》を降り下ろしー

「……はあ？」

何がしたかったのか。

恐らく盾でパライイでもしようとしたのか、盾を振ったものの空振り。がら空きになつた体を切り裂いた。

一撃でHPを根こそぎ奪い、数歩たたたらを踏み靄のように消えてしまった。

「何がしたかったんだ？あいつ」

「さあ？」

隣に来たシノンも首を傾げる始末。

「アクティベート終わったぞ。今日はこの辺で切り上げよう」

……そうだな。キリもいいし、今日はこの辺で終いだ。

左腕に感じていた熱は今ももう感じない。

なんだったんだ一体？

一抹の疑念を感じながらも促されるまま、アルヴヘイムへと帰還した。

## 第2火：火継ぎ

結局あの騎士装備のやつは何がしたかったんだ？

パリイを狙おうとした？

大方そうだろうが、パリイ主体のプレイヤーなら万が一外したときの保険で防御力は高めにしておく筈。

「今のアルトは放っておいた方がいいわ。話しかけても反応無いし」

「考え込むと周りのことは一切頭に入らないからナ」

俺を狙った理由はなんだ？

アイテム狙い？怨恨？それとも単なる気紛れ？

どれでもあるようでどれでもない気がする。

それに左腕に感じた熱。

あいつが消えたと同時に熱も引いた。

どういふこった。

情報が断片的過ぎる。

「はい、兄ちゃんそこまで」

「……ん？……ああ、おう」

そうだった。今日は昨日の続きだったな。

「ねえユウキ、今のどうやったの？」

「オレつちも気になる」

「秘密だよー」

なにこそこそ話してんだ。

「それじゃ今日のメンバーは俺にアスナ、アルトにユウキ、リーファとシノン。この6人で行くと思う」

……ああそうだったな。クラインはリアルの仕事で来れねえんだったか。

「1つ提案だ。恐らくだがこの先も審判者みてえなグロ……とまではいかねえがレーディングギリギリの奴が出てくる可能性もある。そういうのが駄目な奴は前もって言うて欲しい」

近づくのが嫌だから戦えませんってのもバカな話だからな。

「大丈夫だって。みんなそういうのには慣れてるさ。そういうアルトは大丈夫なのか？」

「大丈夫だ。問題しかない」

「駄目だろ！」

なにかの祭祀場らしき場所を探索してみたが、数人のNPCしかいなかった。

どいつもこいつも『灰の方をお連れください』としか言わねえし。誰だよ灰の方って。仕方ねえからユイの指示に従い、捻れた刀身を持つ長剣を祭祀場の中央にある受け皿のようなものに突き刺せば、炎が吹き上がり篝火の完成だ。

「ここから次のエリアに行けるようですよ」

「次のエリアってどこになるの？」

「ロスリックの高壁、だな」

と言うわけで高壁に来たはいいものの、なにすりゃいいんだ？前情報が一切無い。

詰み……ではねえと思うが。

「お兄ちゃんじゃなくてキリトくん。前は どうしてたの？」

「道なりに進んだだけだったしなあ。広いように見えて実はつてやつかもな」

「ある程度は自由に歩き回れるが、基本は一本道かもつてことか」

ストリーがある以上迷わないようにはなってる筈。

そう考えた30分前の自分を殴りたい。

「もの見事に迷ったな」

「だな」

2人であつちだこつちだと進んでみたものの、どっちも違うというなんとも言えない結果に相成った。

「2人揃つてこの有り様？」

「面目ない……」

頼むシノン、ダウン寸前の俺たちに追い討ちを掛けないでくれ。方向音痴じゃないだ。入り組んだこのマップが悪い。

「シノのん、ある程度は憶えた？」

「7割程度だけど。どこかのバカ2人があつちこつち連れ回してくれたお陰でね」

「ぐふう……」

本当に止めてくれ。俺たちのHPはもうゼロだ。

「ふふ。仕方ないわね。私が先導するわ」

シノンの先導のもとロスリックの中を進んで行けば、地上に近づくにつれ道中に鎧が散乱し始め、また左腕に熱を感じる。

「何かあったのかな？」

「鎧の造りも紋章も同じだ。内輪揉めかもな」

「これは竜……か？」

鎧の胸や盾に刻まれた竜の紋章はどれも同じ。となるとここに倒れてる奴らは全員同じ人間、もしくはは国に仕えてることになる。

考えられるのは派閥同士の争いだ。

人間界に起きたつつー異変と何か関係あるのかもな。

「ストップ」

「敵か？」

「嬉しそうに聞かないで。その通りなんだけど」

ここまで敵らしい敵もいなかったしな。不完全燃焼もいとこだ。どこかで見た覚えのある犬やらゾンビみたいなのが別だ。竜もいたが降りてこねえし、シノンが弓で削ればどっか飛んでっつしな。



「ほら、あそこ」

シノンの指差した先には、赤いマントをたなびかせる騎士。

剣と盾のスタンダードなタイプと槍と大盾を持ったタイプにあれば――

「あの時の人……だよな?」

ユウキの言う通り、騎士装備の奴が騎士2人を相手取つての大立ち回り。

以前よりも動きが洗練され、パリイをミスつてる様子もない。こここの騎士からドロップしたのか継ぎ接ぎではあるが装備も変えてる。

「ソロですかね?」

「どうだろうな。腕に相当自信があんなら、パリイをミスるつても考えにくいんだが」  
ここは超高難易度と銘打たれた新マップだ。仲間も連れずにソロで攻略に挑むくらいの実力があるなら、いくらSTR極振りとはいえ俺の攻撃で一撃死つても考えにくい。

「もっペン試してみるか。お前らは手え出すなよ?」

奴が騎士2人を倒し終えたところで声を掛ければ、逃げる様子もなく振り返る。

「準備万端か? ならやろうか?」

「……………」

「無口な野郎だ。それともドロップ狙いのマラソンを邪魔されて腹でも立ったか?」

「……………」

突然火の点いた壺を投げ付けてくる。

《ベルセルク》を盾に防いで距離を詰めれば、自爆覚悟でまた壺を投げ付けてくる。

俺が足を止めた隙に剣を突き出してくるが——

「甘え！」

剣の腹で受け体勢をずらす。

勢いのままつんのめる奴目掛け横風ぎを放つが、奴はその勢いのまま前転、やり過ぎしやがった。

「へえ……………」

盾を構えたまま、こちらの攻撃を誘うように右に左にと忙しく動く継ぎ接ぎ野郎。随分と軽快だな。パリイミスって即死した奴とは思えねえ。

右腕を左肩に乗せるように構え距離を詰める。そのまま振り下ろすと見せ掛けて回転、騙されバックステップした奴目掛け遠心力を乗せた一撃を振り下ろした。

これは盾で防がれたものの左腕は大きく弾かれ、がら空きになった体を刃を返さずそのまま振り上げて切り裂いく。

今度もまた地面に倒れると同時に靄もやのように消えてしまった。

「ん——？」

やはりドロップもなにもない。それに奴が消えたと同時に熱も引いた。  
「終わったか？」

「ん？ああ、終わったには終わったが……」

「気になることでもあった？」

アスナに何て答えたものか……。

「それよりどっちに進むの？目の前の城？それとも階段下の門？早く決めないとさつき  
の騎士がポップするかもしれないわよ」

ポップしてもいいんだがなあ。

「まずは城に行こう。なにか情報があるかもしれない」

俺的にはここに来る前にあった登り階段の横道が気になるんだが駄目か？……駄目  
か。

人が1人通れるくらいに開いた扉を潜り中に入ってみれば、等間隔に数人掛けの椅子  
が置かれ教会のような厳かな雰囲気がある。

……ミサでもやってそうな雰囲気だな。

「……おおこれはこれは。まさか妖精をこの目で見る日が来るとは  
しゃがれた老婆の声。

広間の奥にはローブに身を包んだ人物。声の主はあいつだろう。

「ダメだ。ここから先に進む道がない」

「あの梯子じゃないかな？」

ユウキが指差した先には伸縮式の梯子が見える。

あれを登るには何かしらのギミックもしくは条件があるってことか。

「私めの名はエンマ。妖精方がこの様などころに何用ですかな？」

「俺たちは人間界に起きた異変を突き止めるために来ました。ご老体、何かご存じではないですか？」

「猫被んなキリト」

「こう言うのは形から入らないと」

「三日坊主の口癖だな」

「うぐつ」

「はいはい二人ともそこまで。仲が良いのは分かっているから」

「仲良くない<sup>ねえ</sup>！」

「ここに来る途中で『膿』と会いませんでしたかな？」

「膿？あの黒い蛇みてえなヤツか」

「ええ。私めどもは暗く蠢くものと呼んでおります」

審判者そしてここに来る途中にいたゾンビみてえな奴。

後者の奴は周りにいたお仲間を薙ぎ倒して襲ってきたな。

まあ、それは置いておこう。

エンマの話を要約すれば、火が陰り始めたことで世界の終わりの前触れである膿が増え始めたのだと言う。

そして陰り始めた火とは、この世界を照らす原初の火であり、代々この城の人間は火を継ぐに足る人間を人為的に産み出してきたのだとか。

その人間のことを《薪の王》と呼ぶ。

だが今代の《薪の王》は火継ぎを拒否。それによって歴代の《薪の王》が呼び起こされ、再び薪として使われようとしたが歴代もまた拒否。各々の故郷に帰っていったんだと。

「火は燃え盛りいずれ陰るもの。その都度犠牲を払うのであれば、私めは王子たちの意思を尊重いたします。妖精方、あなた方がもし火継ぎを肯定するのであれば、呼び起こされた《薪の王》の方々と会ってみなされ。そこで真実を知るでしょう。それでも尚火を継ぎこの世界を延命するか、それとも火を消しこの世界を闇で覆うか。それはあなた

方の判断に託すと致しましょう」

「なんか思いの外、重い話だったな」

「世界の延命か終焉か。延命すればいずれまた誰かが犠牲になる。かと言って火を消せば世界全てが犠牲になる。小を切り捨て大を救うか、大小関係なく終わらせるか、か」  
どちらにせよハッピーエンドはないってことだよな。

「あのお婆さん、《薪の王》に会ってみろって言ってたよね？」  
「ああ。だがその《薪の王》が誰か、までは言わなかったけどな」

その《薪の王》つてのがボスキヤラなんじゃねえのだったのか俺の考え。  
だがその王が何人いて何処にいるのかまでは言わなかった。  
人工的な《薪の王》も今代以外の成功例は無かったらしい。

だから火が陰り始めたときに選出された《薪の王》の故郷を訪れる必要がある、と。

「そう言えば、あの祭祀場に王様が座るような椅子が5席ありましたよね？1つはもう座ってましたけど、もしかしたらー」

「その4席が《薪の王》の玉座って訳か」

慧眼だリーファ。

つまり4人の王と会わなきゃならねえ訳だ。

「いよいよRPGっぽくなってきたね」

「会うだけ……じゃ終わらないですよ？多分」

「大丈夫よりーファ。戦闘になったらアルトに押し付けなければいいんだから」

おいこらシノン。

「その《薪の王》だっけ？どれぐらい強いのかな？ワクワクしてきたよ！」

「だな。俺も楽しみだ」

「戦闘民族」

「埋めんどキリト」

民族だと日本人全員含まれるからな？

それから階段下の門を通り中へと入ったのだがー

「なあキリト、この広さから言えば」

「ああ。間違いなくボスだろうな」

奥行きに幅、どれも人が走り回れるほど広い。

だがボスの姿は見えず、SAOのスカルリーパーのように天井に張り付いてるのかとも思ったがそれも違う。

肩透かしをくらい、蔦に覆われた門にキリト触れようとした時、俺たちが入ってきた入り口から湿った音が聞こえた。

振り返ってみれば、空間が歪み灰暗い穴からくすんだ銀の鎧に身を包んだ獣が姿を現した。

いや、獣と言うには人に近い。四足歩行ではあるが、右手に巨大なメイスを持っていて。つまり武器を扱えるほどの知性があるということだ。

HPバーは2本。《Vordt of the Boreal Valley》

冷たい谷のボルドって読めばいいのか？

ツ！体格のわりに速え！

「散開！」

ずんぐりむっくりとした体格とは裏腹にメイスを振り上げながら20mはあった距離を一気に詰めてくる。アスナの号令と共に散開し、数瞬前まで俺たちが固まっていた場所にメイスが振り下ろされ地面を砕いた。

確かに速えが目で追ねえほどじゃねえ。それに速えのは突進するときだけ、それ以外



は見かけ通りトロい。

「冷氣ブレス攻撃来ます！5秒後！」

放射状に広がる冷氣が地面を凍らせ、空気中の水分をも凍らせて擬似的なダイヤモンドドダストが発生する。

「リーファ！ユウキ！」

「やっと出番だね！」

「頑張るよー！」

「シノン、矢は鎧に阻まれる。関節を狙えるか？」

俺の問いかけに不敵にシノンは笑って返す。

「誰に言ってるのよ。奴の目だって射抜いて見せるわ」

「頼もしいな」

シノンの肩を叩き、メイスを受け止めるキリトに向け走り出す。

「キリト！」

それだけで俺を意図を察し立ち位置を交代。

キリトは俺の肩を踏み台に飛び上がり、ボルドーの背中に乗って《スキルコネク剣技連携》を使った連撃で攻める。

背に乗ったキリトを振り落とすべく体勢を上げようとすれば、ボルドの後頭部目掛け

大剣を振り落として体勢を崩し、ユウキとリーファが両足の関節を切り裂き、シノンが奴の右目を射抜く。

絶えず奴の視界に入り続けることでヘイトを俺に集中させ、他の奴らが攻撃できる隙を作る。

左腕が使えない以上、鉄壁とまではいかねえが攻撃を捌くぐらい訊ねえ。奴のHPは既に最後の1本、そのレッドゾーンへと入ってる。

押し切れる！

そう思ったが、両腕の力だけで飛び出し俺の腹に頭突きを食らわせ、そのまま壁に叩き付けられた。

マズっ！回避は……間に合わねえ！

「兄ちゃんッ！」

振り下ろされたメイスがスローで迫るなか、俺の目はボルドへと迫るもうひとつの影を捉えた。

そしてボルドーに剣が突き立てられポリゴンとなって散る。

「悪い、助かったユウキ」

「へへーん！」

胸当てに押さえ付けられたことで、より板に近くなった胸を張りVサイン。

今回はユウキに助けられたな。

張り付いた蔦を引き千切りながら門が開いていく。

「わっ！わっ！見てあれ！」

「随分高所にある城だな。それに街とも随分と離れてる。しかも街と繋ぐ橋は壊れてるときだ」

アルトくんの言葉に私も素直に頷く。

眼下に見える城下街とは軽く500mは離れてるし、街に繋がる橋も門から出てすぐの場所が崩れてしまってる。これじゃ先に進めない。

「区切りもいいし、今日はここまでにするか。どう先に進むかはまた明日考えよう」

「そうだね。流石に私もくたびれたよ」

「あ！ならアスナさん、戻ったら温泉行きませんか？丁度、前に手に入ったパスの有効期限が今日までですし」

「いいわね。賛成！」

「ご一緒してもいいかしら？私もゆつくりしたい気分」

「ボクもボクも」

「それじゃみんな一緒に行きましょう。キリトくんもアルトくんもそれでいい？」

「アルト、あそこは一回退いて他のメンバーにヘイトを向けさせるべきだったろ」

「バツカ。俺にヘイトを向けさせたままの方が、他のやつらが攻撃しやすいだろうが」

「脳筋」

「やるか？」

納めた剣を引き抜き一触即発の雰囲気。

……まったく。

「はいはい。2人とも仲良し仲良し」

「仲良くないねえ！」

2人とも本当に素直じゃないんだから。

次のマップ解放とリーファの提案もあり一同揃って温泉に入り、一息淹れたところで情報交換と相成った。

「ンー。それはおかしいナ」

「おかしいって何がだよ」

「他のパーティの情報だト、協力NPCと一緒に攻略していくらしいゾ？ 祭祀場って場所もそのNPCがいて使えるようになるらしいカラ、なにか敵対フラグでも建てたんじゃないの力？」

「そう言や、祭祀場のNPCは『灰を連れて来い』とか言ってたな。もしかして灰ってあの継ぎ接ぎ野郎のことか？」

「敵対フラグねえ」

「止めろキリト。そんな目で見らんじゃねえ」

「まあアルトの戦闘狂は今に始まったことじゃないし、協力NPCがいなくても今のところは順調だし、なんとかなるだろ」

「そうね。直して欲しいとまでは言わないけど、抑える努力はして欲しいわ」

「もう、キリトくんもシノのんも少し言い過ぎよ。確かにアルトくんはあっちこっち飛び回っては闘ってばかりいるけどー」

「あー！ 分かった！ 好きなもん奢ってやるからもう勘弁してくれ！」

「ああ……出費が嵩む……」。

「イェーイ！ と喜ぶキリトたちを尻目に俺のテンションはだだ下がりだ。」

『薪にも王にもなれなんだ名も無き灰。故に灰は火に惹かれ、火を求めるのさね』

祭祀場にいた老婆に言われた言葉。

つまり、アイツが敵対した理由は他にあるんじゃないか？

火には心当たりがないことはない。だがあれはコラボエリア実装前の話だし、仕様外の現象と言っつていい。

俺たちが知らねえところで何か起きてるんじゃないかと思えながら、手痛い出費の計算を始めた。

「ふふふ……さあ楽しい遊戯はこれからですよ？皆々様方」

くおまけく

「どうしたんだリーファ」

「アルトさん……実はー」

「倒せない敵がいる？」

「はい。祭祀場の裏にいる。刀を持ったエネミーなんですけど」

「そいつを倒せばその刀をドロップするかもつてことか。……分かった。やってみるか」

「あいつか？」

「そうです。何回か挑んだんですけど足場が悪くて、それに気を取られちゃうんですよ」

「確かに。右側は壁だし、左は崖だしなあ……崖？」

「ねえシノン、なにも見えないよ？」

「ダメよユウキ。今のアルトは人に見せられない顔してるから」

どんな顔だコラ。

「まともに聞えねえなら、周りの環境を利用してやりやいいんだ」

まずは降り下ろしてきた刀を防いでー

「はいどーん」

そんな気の抜けた掛け声と共に脇腹に蹴り。

崖下に落ちていく敵を見下ろし、ポップしたウインドウを操作すれば《打刀》がドロップしたことを伝えてくる。

「ええ〜……」

「ほらリーファ」

「これでいいのかなあ」

「いいんじゃないの？」

ドロップしたってことはシステムのありつてことだろ？

細かいことは気にすんな。



## 第3火：呪いの大樹

「今日は3人だけか」

「シノンは2、3日実家に帰るって言ってたな。ユウキは藍……じゃなくてユウキの姉に宿題が終わってないのが見つかって家に連れ戻された」

その矛先は俺にも向き『兄さんが着いていながら、この有り様はなんですか?』と冷たく肅々と怒られた。

俺が悪い訳じゃねえんだ。

「冬休みも明けるからね。最後の追い込みなんだよきつと」

「最初の頃に終わらせとけば苦労しねえっつーのにな」

「返す言葉もございません」

当たり前だ。お前の課題を手伝ったのは誰だと思ってる。

「アルゴさんは?」

「協力NPCと和解する為の方法を探ってる。経過報告だと望みは薄いみたいだけどな」

敵対した奴がいなくてのが大きな要因だが。

「確かに灰……だったけ？灰がいれば起こるクエストとかあったかもなあ」

「それで弄るのはもう止めろ。昨日さんさん食い漁りやがっただろうが」

「アルトさんご馳走さまでした」

「おう、お粗末さん」

ただでさえ《ベルセルク》の製造費で金欠気味だつつののにトドメ刺しやがって。

「にしても広く感じるな」

「……そうだね」

いつものログハウスの筈なんだが、いつもの喧騒が無いだけで異様に広く感じる。

「なあ」

「ん？」

「なんでアルトはALOを始めたんだ？あんなことがあったなら、普通は忌避感を覚え

るだろう？」

「理由なら簡単だ。お前らがいるからな」

「……………」

「今のは忘れろ」

「アルトがデレたああ!!」

「デレツ!?ぎげんなテメエ！」

「ユイちゃん？」

「はいママ。今の録音データは皆さんに送付しました」

アスナアアア!! ユイイイイ!!

「殺せえ！一思いに殺してくれえ！」

「もう、元氣出してアルトくん」

「はは……終わった……なにもかも」

「打たれ弱いな」

と言うか弄られるのに慣れてないと言えいいのか？

感情表現がオーバー気味なVRならではだけど、アルトの頭上に黒い雲が見える。

「滅べ世界」



「ん?」

「懐かしいって?」

「こうして3人で攻略するのってSAO以来でしょ?」

ああ、そう言えばそうだ。

なんだかんだ言いつつ、この3人で集まってフィールドやダンジョンに挑んでいた。

憎まれ口を叩きつつもタンクとして誰よりも先に前に出るアルト。アルトにヘイトが集中した隙にアスナが間隙を縫い、俺がトドメを刺す。バランスも取れていて闘い易かった。

……うしろから俺ごと敵を叩き斬ろうとする戦闘狂に注意しないとだけ。

「もう! 私もいますよ! ママ!」

「ごめんねユイちゃん」

「さて、ここからどうやって進むか、だな」

橋は崩れていて前に進めない。

前に飛ばば難易度が変わるかもしれないとアルトに言っただけど、まさか前に進めないなんて。

「そう言やキリト、エンマからなにか受け取ってなかったか?」

「そう言えば。何に使うんだって思ってたんだけど……」

小環旗つて名前の小さな旗。オブジェクト化出来なくてどこで使えるのか疑問に  
なつて……使えるようになってる。

「これを掲げれば前に進めるのか？」

「さあな。だが前に進めねえなら、進むために必要なアイテムを寄越すのがRPGのN  
PCだろ」

「見も蓋もないな」

「ヒツ！ちよ、ちよつと二人とも！」

アスナの上擦った声に視線を前に向ければ、崩れた橋の下からなにかが這い上がつて  
くる。

脳ミソのような頭に青白い体。

敵……じゃないな。カーソルもHPも表示されない。

「向こう側に連れてつてくれる……のか？」

「どうだかな」

翼も生えてるし、飛ぶことはできそうだ。

「大丈夫だってアスナ。もしかしたら向こう側に連れてつてくれるかもしれないだろ  
？」

「そうだとってもそれは嫌！」

「ならここで待つてるか？あつちにも篝火はあるだろうから、アクティベートしてこつちに戻つて来れるだろ」

「置いていかれるのも嫌！」

「我が儘なお姫様だ。キリト、アスナを抱いとけ。リアルでも腕組んだりしてんだ。抱き締めるぐらい問題ねえだろ？」

「そういう問題じゃないんだけどな」

橋の向こう岸の門の上に降ろされる。

やっぱり運び屋だったんだな。

「生きた心地がしなかったよ……」

「終始絶叫だったもんな」

語尾に草でも生えてそうな口調でアルトがからかう。

うん。いつもの調子が出てきたな。

「……おかしいです」

「ユイ？」

「配置されているはずの敵がいません」

敵がいない？俺たち以外のプレイヤーがいるのか？

「少し前に誰かがいたのは確かなんですけど……」

「まさか灰、か？」

「恐らくですが」

「今のところドロップ品は俺たちの装備より弱い。戦う必要がなくなったって考えよう」

「えー」

えー、じゃない。二十歳にもなって何を言ってるんだ。

無人の街を歩き、ボロ小屋の中を探索していく。

「誰もいねえな」

「無人街って訳じゃなさそうだけど」

「街も荒れてるし、モンスターに襲われたのかな？」

どうだろう？モンスターに襲われたとしたら、もっと荒れててもいい筈。

「ツ！これは……」

「ん？どうかしたか？」

アルトの視線の先には、鳥籠のようなものに押し込められたNPCたち。廊下の両脇



に規則正しく並べられたそれは異様な雰囲気醸し出している。

「襲いかかってくるきたりしない……よね？」

「前を通った瞬間……ガア！」

「イヤアアアア!!……アルトくん？」

「悪かった。だから細剣を抜こうとするな」

アルトの悪ふざけをアスナが嗜<sup>たしな</sup>め、ため息を一つ。

「確かにあるあるだけだな。どれがそうか確かめればいいんだけど……」

「こう言うのは、飛び道具で確かめるのがベストなんだけどな。シンンもいねえし、慎重に行こうかとも思うがー」

「どうした？」

「あれ見ろよ」

顎をしゃくった先には両手に鎌のような物をもったエネミー。

「目が赤えな」

「ああ」

「定番で言や、強え奴だよな？」

「そうだな」

「キリト」

「最後まで言わなくていい。あいつは任せた」

確かに目が赤く光ってる。

そういう奴が通常の敵より強く設定されることはよくある。

だからってそんなに嬉々としなくてくれ。

「じゃ楽しんでくる」

「全部アクティブにして行くなあ!!」

アルトが前を通ったことで、全部アクティブになりガシャガシャと音を立てながらゆつくりとこちらに向かってくる。

アルトのバーサーカー!!

なんか侮辱的な意味合いでバーサーカーと呼ばれた気がする。

赤目は確かに速く、閉鎖空間の中で《ベルセルク》を振り回せねえから多少手こずったが、先読みで刀身を置いとけば自分から飛び込んできた。

「よう、生きてるか?」

「精神的に死ぬ」

それは何より。

「この先、出口まで誰もいねえ。さっさと進むぞ」

超高難易度と銘打たれてる割には手応えがねえ。

まだ序盤だからか？

遠距離から槍のような大矢が飛んでくるエリアをくぐり抜け、T字路で左を選択。奥にある木のようなものを崇めるエネミーの集団。

「なにやっつてんだ？あれ」

「宗教的な？」

「どちらにせよ調べんなら敵が邪魔だ」

敵はまだこつちには気付いていない。

数を減らすなら今の内だ。

半分ほど減らしたとき、大樹が動き始めた。

人のような手足が生え、立ち上がれないのか上体を起こし人のような動き。

HPバーは1本。名前は《Curse—Rotted Great wood》

呪い腐った大樹か？

足を振り上げ叩き付け崇めてた奴らを巻き込み、蹴散らしながら向かってくる。

「敵味方関係なしか！」

その胴体へ向け一閃――が

「固え!!」

刃が通らず、ダメージもない。

「皆さん!体についている卵のようなものを狙ってください!」

ユイの言葉に奴の体をよく観察してみれば、丸い卵のような物体。

枝に守られてる物もあれば、手足に剥き出しの物もある。

手と足を掻い潜って潰せってか?

――上等じゃねえか!

虫を潰すように叩き付けられる手を躲し、左足の卵を斬り付けるが、柔らかな弾力と

共に跳ね返される。

キリトとアスナも同様のようで困惑の色を隠せてない。

潰せはしなかったが同時に手応えもある。

柔らかく刃も通らなかつたが、あの中身は衝撃吸収性に優れてる。物理が通らねえな

ら。

「アスナ!魔法で卵を狙え!奴の攻撃は俺たちで止める!」

「分かつた!」

「背中は何させたぞ?相棒」

生意気言ってくれるな。

「ハッ！俺より先に死んでくれるなよ？」

視線は一瞬。

攻略法は見えた。

ヘイトを集中させ、アスナに向かないようにすりやい。

火力は高いが動きは緩慢。

「行くぞ！」

降り降ろされる手を躲し、左右に別れる。

「ダメージは通らなくても！」

「足止めぐれえは！」

キリトくとアルトくんが大樹の足止めをして、私が攻撃魔法で張り付いている卵を潰していく。

「うう〜」

「ママ、頑張ってください」

「ありがとう、ユイちゃん」

私が狙いやすいように大樹を回転させてくれる2人の為にも根を上げるわけにはい  
かないんだけど……。

卵が潰れ中身が吹き出していく様は、容赦なく私のSAN値を削っていく。

「……………え？」

そんな私に目もくれず、私の横を抜けて真っ直ぐにアルトくんに向かう影。

「アルトくん！」

間一髪、私の声に反応したアルトくんはその場を飛び退くことで影からの攻撃を避け  
た。

ロスリックの騎士装備に身を包んだ灰。

ここまで敵がないエリアがあつたのも灰が倒していたからかもしれない。

「アスナとキリトはそのまま大樹に集中しろ！灰の相手は俺がやる！」

アルトくんの声に切り替えようとしたその時、大樹が突然立ち上がろうとしたかと思  
うと、体制を崩して倒れた。その衝撃で地面が崩れ全員が下へと落ちてしまった。

落下したペナルティは受けなかったけど、大樹の表面が割れたかと思うと青白い大き  
な手が中から出てきた。

……………もうダメかもしれない。SAN値的に。

「デメエー！」

劍を両手で構え、下からのかち上げるような突き。

大劍の腹で滑らせて軌道をずらし、お返しとばかりに横風ぎに振るえば同じように盾で受け流される。

明らかに強くなってる。

いや、俺の攻撃が読まれてるって言えばいいのか。

まだ数回しか闘ってねえ筈なのにーッ！

胴体狙いの突きを前転で躲しつつ、劍から刀に持ち変えたかと思えば、同じように胴体狙いの突き。

咄嗟に避けたが脇腹を掠める。

左手の盾を背負い、球体状のなにかを取り出したかと思えば炎が吹き上がり発火。

「くそッ！」

刀から斧へと獲物を変え、両手で振るってくる。

バックステップで範囲外へと退避したが、着地寸前に火球が投げられ着弾。《ベルセルク》を盾にしたもののHPがイエローまで落ちた。

「アルト！」

「こっちは気にすんな！」

斧を跳ね上げ、そのままの勢いで柄頭で灰の顎を跳ね上げる。大剣を背負い左回し蹴りをヤツの腹に喰らわせ、よろめき隙を晒した灰を股下から切り裂く。

「一撃じゃ死なねえか」

耐久力も上がってんのか。レッドギリギリでHPの減少が止まる。

驚きもあるがやはりこう思う。

ああやっぱりー

「闘いつてのはこうじゃなきやな!!」

互いの全力をぶつけ合う。

それこそが闘いの醍醐味。勝つか負けるかなんぞ二の次だ。

「ハハハハハハハハ!!」



「ハハハハハハハハ!!」

そんな笑い声が聞こえてきてやっぱりかと思う。

闘いになるとテンションが振り切れる。強いヤツになら尚更そうだ。

「アスナ！」

「もうこれで終わって!!」

手が生えてきた割れ目へとアスナの攻撃魔法が叩き込まれ、大樹のHPはゼロになりポリゴンになって四散した。

「アルト！」

「手え出すな！こっつからが面白えんだ！」

ほんとバーサーカー。

灰も武器を変えて異なる立ち回りでアルトを攻めるが、それでも一步届かない。

理由は未来予知染みた先読み。

剣撃の音と炎が炸裂する音だけが響き渡り、苛烈で綺麗とも言える演武が目の前で繰り広げられる。

「楽しそうだね」

「そう、だな」

「不満？」

「え？」

「アルトくんの相手がキリトくんじゃないのが」

勘弁してくれ。俺はアルトみたいな戦闘狂じゃない。

でもー

「なんであそこにいるのが俺じゃないんだろうって思う」

アイツが左腕にハンデを持つてるから。

そう心のどこかで思っていたからかな。

全力では闘っていた。

でも本気を出していたかと言われればー

「これで終いだー！」

審判者との戦いで見せた《ナインライヴス》を浴び、HPを根こそぎ奪われた灰は消えてしまう。

今回も免罪はできなかつたな。

「あー！愉しかったー！」

子供のような顔のアルトはどこまでも楽しそうだ。

「今日はここまでにしよっか？」

「どうしたんだアスナ？……ああ、あのボスカ」

「ちよつと精神的に……」

SAN値チエックが必要かな？

「アルトール切り上げるぞー」

「了解だ」

次は全力で、本気で闘うからな？覚悟しろよ？

## 第4火：火の導き

「殺せえ！頼むから殺してくれえ！」

ALOに潜ってすぐに聞こえてきた声。

「なるほどナ、アル坊はオイラたちがいるからALOを始めたのナ」

「兄ちゃん！ボク嬉しいよ！」

「GGOを続けているのも私がいるからかしら？」

「黙れ！口を開くな！」

……ああユイが録音したあの音声データか。

本当に全員に送ってたんだな。

「こうなりやヤケだ！テメエらこの画像を見やがれ！」

「ヤメロオ！」

「離せキリト！お前も道連れだあ！」

お前！よりによってその画像か！

「頼むから殺してくれ……」

「可愛く写ってるじゃない？」

「もしかしたら女の子より可愛いんじゃない……」

「お兄ちゃん？え？お姉ちゃん？」

阻止できなかった……。

「はは……滅べ世界」

「もう二人とも……ユイちゃん？」

「ママのスマートフォンに転送済みです」

「今日の攻略は中止です。以後の予定もありません……」

「あざっした……」

「大丈夫だって！キリトが女顔なのもアルトがツンデレなのもみんな知ってるからさ

！」

「フオローになってねえんだよりズ！」

「女顔……やっぱりそっちの方向性しかないのかなあ」

「キリトくん戻ってきて！」

一悶着あつたものの攻略の続きだ。

「今日のメンバーは俺、アルト、リーファ、シノンの四人で行きたいと思います」

「意義なーし……」

「左に同じく」

「アスナさんは行かないんですか？」

「え!?!え、ええ。ちよつと、ね」

やっぱり昨日のボスの影響が響いてるか。

「ところでシノンさん。この画像どうやったたらスマホに転送できますかね？」

「私はユイちゃんに頼んだわ。音声データの方を、だけど」

「お前から聞こえてるからな」

「アルト、あとで覚えてろよ」

「今やるか？」

「嬉々として構えるな！」

「あのタマネギはなんだったんだろうな」

「なにかのイベントだとは思うけど……」

簡単なエレベーターの謎で悩んでいたタマネギもといカタリナのジークバルト。

エレベーターの謎を解き上に向かったのかと思えば、途中の階で降りて炎を纏ったデーモンを眺めてまたも悩んでいた。

探索のために戦闘を始めれば、ジークバルトも加勢。

勝利を納めた。

『またどこかで会うだろう』と言っていたから、なにかの長期イベントだと思う。アルトの奴が開口一番タマネギと言い、陰険な雰囲気にはなったけどな。

「森林地帯か……射線が通りにくそうね」

「全員、不意を突かれないように。それと木の陰には十分に注意を払ってくれ」

「木の上にもいたりしてな」

「それよりアルト、その大剣の調子はどうだ？」

昨日のボスからドロップした《亡者狩りの大剣》。

性能自体は《ベルセルク》の方が上だけど、特攻に《亡者狩り》の文字があり、この先の攻略に有効かもしれないと言うことで装備してるけど……。

「《ベルセルク》より軽いし、未強化品だから火力がなあ」

リズにも頼んでみたが強化出来ず、恐らく祭祀場にいた鍛冶屋がやってくれるんだろうと、話しかけてみても『灰を連れてきな』としか喋らない。

「亡者、か……まさかな」

「ん？なにか言ったか？」

「いや、なにも言ってるねえよ」

「キリトくん、アルトさんどうかしたのかな？」

あの大剣のステータスを確認してからだったかな？

どこか上の空うわの言うか、集中しきれてない様子だ。

「アルト？」

「ん？ああ悪いシノン。よし、行くか」

アルトを先頭に俺、リーファ、シノンと続く。

途中丸太を持った敵とエンカウントする場面もあったけど、何とか突破し蔦に覆われた遺跡のような場所に到着した。

——みんな丸太は持ったな！



……今になって毒電波が……。

「どうした？キリト」

「いや、なんでもない」

「まったく、今日のアルトと変態はどうしたのよ」

「シノンさん変態はやめてください」

「あら？男の子なのに女の子のフリしてたのはどこの誰だったかしら？私の記憶だと目の前のー」

「俺はただ道案内してもらおうと思っただけなのに、そっちが勝手に勘違いしてー」

「ふうん。私が悪いって言うの？」

「じゃれてねえでさっさと進むぞ」

俺が悪い訳じゃないんだあ！

「また、か」

「だな」

半ば崩れた遺跡の中を進むが誰もいねえ。

敵の一人でも配置されてもおかしくねえんだが……。

奥に進むにつれ、また左腕が熱を感じ始める。

と言うことは――

「いるな。確実に」

大樹戦の時は鬨に気を取られて気付かなかったが、この熱と灰はなにかしらの関係があるのは間違いない。

だが疑問が残る。

――ふふふ……

「ッ！」

「どうした？」

「……いや、気のせいだ」

気のせいだ。気のせい……のはずだ。

「進めないね」

リーファの声に意識を戻せば、道なりに続いていた道が煙のようなものに遮られてる。

「一旦引き返えす？」

「そうね。進めない以上、引き返して別の道を探すべきだと思うわ」

「そうだな。アルト……アルト？」

「ん？」

「……なんか今日おかしいぞ？体調でも悪いのか？」

「そんなヤワじやねえ。ちよつとした考え事だ。今日の夜飯何にすつかなってな。誰かさんみてえに3食。パスタはごめんだ」

「お前……」

「心配いらないわ。栄養のバランスも考えて作ってるから」

「アルトさんとシノンさんは同棲してるんですか!？」

「してねえ!」

誤魔化せ……てねえだろうな。だが深追いはしない奴らだ。こう言っておけばこれ以上は踏み込んでこねえだろ。

「引き返して探索し直すか。敵を倒せば進めるかもしれないねえ」

来た道を引き返しながら左腕の熱が引いていくのを感じる。

やっぱりアイツは……。

「リーファ！スイッチ！」

「了解！キリトくん！」

一旦遺跡をあとにして、浅い湖にいる子蟹を潰して回っていたら現れた巨蟹相手に戦っていた。

速く、固く、火力もある。

そんなのが3匹同時に現れ、苦戦を強いられていた。

「アルトが面白半分にするから！」

「子供を苛めれば親が出てくる！当然だな！」

「言ってる場合ですか！」

速いと言ったが、やはり蟹らしく横に速い。

前に歩き出したときは驚いたが、鈍重も良いとこだ。

「1匹ダウンした！アルト任せた！」

「応おうさー！」

口は大剣を突き入れ横に振り抜く。

その一撃でポリゴンになって散り、後ろから降り下ろされた鋏を振り抜いた大剣で弾く。

「残り2！さあ！さっさと来い！」

「なんでそんなに楽しそうなんだお前は！」

性分だからな。仕方ない。

「ちよつと！戦闘音に気付いて、新手が来てる！」

シノンの声に周囲を見渡せば、巨大な棍棒と曲線を描く大曲剣を担いだNPCがこつちに向かつて来てた。

「楽しくなってきたな！なあ？」

「お前だけだ！」

失礼な！

「どうするの!?!」

「陸に上がれ！障害物を利用して蟹の方を引き離す！」

2匹とも半分まで削ってつから持ったいねえ気もするが、命あつての物種だ。

「ちよいと失礼」

「え？ちよつ！」

シノンを小脇に抱え走る。

「軽いな！ちゃんと食ってんのか？」

「ツ！セクハラで訴えるわよ！」

おー怖っ！

「つて前！」

「甘え、よー！」

横風ぎに振るわれた大曲剣を飛んで躲し、NPCの顔面を足場に更に跳躍、頭上を飛び越え陸地へと着地する。

「さて、仕切り直しだ」

「もういや……」

「ゲンナリするのはまだ早いぞ」

「誰のせいだと……ああ！もう！」

ヤケクソ気味なシノン。

どうかしたのか？

「《ラージクラブ》に《流刑人の大刀》か」

ドロップ品を品定めするが大刀はともかくもクラブはなあ……。。

「エギルに使わせるか」

「残り物を押し付けようとするな」

いや、大刀の方もDEX器用さの必要値が高い。俺のステ振りじや装備できねえな。

結果――

「ゴミニ」

「ちよつと待て。どういう経緯を辿ってその結果になった」

「……………」

「……………」

「おい二人とも口から出ちや行けねえもんが出てるぞ」

人魂的なもんが。

「あれじゃないか？十字架背負った赤目」

「ああ、あれか」

磔はりつけにされる前に逃げてきたのか、十字架を背負った敵も乱入してきた。見た目に似合

わず機敏だったな。

……似た奴をどつかで見たことあんだよなあ。リサだかトレヴァーだったか、そんな名前の奴だった気がする。

あつちは十字架じゃなくて手枷だった気もするが。

「そつちじゃない!!」

「おおおう」

「抱えて逃げるのはまだ分かるよ!？」

「だからって人を抱えたまま敵に突っ込む馬鹿がどこにいるのよ!？」

どっつてー

「おいアルト、なんで俺を指差した」

「そう言うお前もだろうが」

「ああもう……この二人は……」

「お互い苦労しますね……」

再び遺跡を通過って煙に阻まれていた道に戻ってみれば、煙が晴れて通れるようになってる。

だがアイツはどこにもいない。

「なんだったんだらうね?」

「アルトの言う通り、敵がキーになつていたのか、別の要因があるのか……とにかく先に

進みましょう」

「篝火があるな。アクティベートするから、少し待っていてくれ」



「広さ的にボスがいるかと思っただがなあ」

「残念そうな声を出さないで」

最近シノンが手厳しい気がする。

最初にここに来たときに感じた熱はもう感じない。

あの道を塞いでいた煙は、アイツがここでなにかと戦っていたからじゃねえか？ つま

りこの先にアイツが進んだ可能性が高い。

NPCならリスポーンすんのも納得できるが、その度に強くなるってのはどう言うこ

とだ。そう言う仕様か、それとも別に理由があるのか。

強くなってるとは言ってもステータスだけじゃなく戦い方もそうだ。剣だけじゃな

く刀や斧、投擲や魔法のような攻撃もしてきた。プレイヤーだと言われた方が納得でき

るだけだな。

「またか」

「またね」

「まただね」

プレイヤーと同じように装備を変え、必要に応じて戦い方も変える。

そう言う風にプログラミングされているのか。

ユイと同じ様なAIなのか。

それに左腕に感じる熱との関係性。

戦い方に関してアルゴに聞けば、他のパーティではどうなのかを確かめれるが、左腕の事は俺自身に関係するなにか。

それに左腕だけに熱を感じるってのもおかしな話だ。

「まさか……」

「どうかしたか？」

確証はないが推測は建つ。

アイツは俺の左腕なのではないか。

突拍子もない話だが、アイツが近くにいることで熱を感じると言うことは、感覚が戻つてると言ってもいいかもしれない。

だが俺の左腕はあの女に引き千切られて行方知らずのまま。それが何故ここにあるのか。

考え込んだまま動かないアルトを俺とリーファで引き摺って進む。引き摺られてる

のに向に気づく気配がないコイツはどうしてくれようか。

「教会、かしらね」

シノンの言葉に視線を向ければ、木々の切れ間から建物が見える。

「教会と言うより聖堂ですかね」

「マップを確認してみる……【深みの聖堂】つて名前みたいだ。それ以外は載ってないな」

まだ探索もしていないマップだから仕方ないけど。

「新しいエリアなら近くに篝火があるかもしれない。そこまで行ったら一回戻って休憩にしよう」

「賛成」

「んーおう」

お前には聞いてないから。

返事はあるくせに反応がない。

ユウキがいればなあ。やっぱりメンバーに入ればよかったかも。

スイッチが入ればいつもこうだ。

断片的な情報から答えにたどり着くのはさすがだと思うけど、フィールドでは止めて欲しい。フォローするこっちの身にもなれ。

「取り敢えずはこんなもんか……どこだここ」

「……お前なあ。さつきから何を考えてたんだよ」

「……キリトはこの先、何人の女を落とすのかったな」

「人を節操なしみたいに言うな！」

「それは同感ね。行く先々で女の子を引っ掛けてるみたいだし。もしかして、女の子のフリしてたのも女の子を口説くためかしら」

「俺だつて好き好んで女の子のフリをしてたわけじゃないんだ……！」

「お兄ちゃん……」

そんな目で俺を見ないでくれえ！

「よしキリトを弄り倒したし、ノルマ達成だな」

「なんのノルマだ！」

俺の心配を返せ！このツンデレ野郎！

「はいはい。男同士でじゃれてないで敵よ」

シノンの視線の先には黒いローブに身を包んだエネミー。

最初のエリアで見た奴に似てると思ってたら、いきなり自分に火を点けて突っ込んできた！

自爆!?

「シノン」

「了解」

アルトが飛び出すと同時にシノンの矢がエネミーの頭に命中。怯みながら空きになった腹に大剣の突きが叩き込まれポリゴンになって四散する。

「弱っ」

「お前の火力が高すぎるだけだから」

「火力こそ正義ってな」

タンクが一番火力が高いってどういうパーティだよ。

「おや。私たちが先かとも思いましたが先客がいたようですね」

後ろを振り返れば、鎧に身を包んだ二人組。

「私はアストラのアンリ。こちらは相棒のホレイス。私たちはここに幽閉されているエルドリッチを倒すためにここに来ました」

聖堂の中へ促され入ってみれば長椅子と篝火。

そして無数の人を象った石像。

「それでエルドリッチって言うのは？」

「《薪の王》の一人にして人喰らいの異名を持つ悍ましい怪物です。人を喰らい続け蕩けた汚泥と成り果て尚、人を喰らい続けている」

「《薪の王》か。ようやく1人目だな」

「あなた方も《薪の王》を？」

エンマに言われたことをそのまま伝えるとアンリは呆れたように首を降るだけだった。

「成る程。《薪の王》に会い、この世界を救うか否かを決めると。《薪の王》は各時代で最

も力ある者になる。あなた方の旅路は決して容易いものではないでしょう」

「分かっているさ、それぐらい」

「簡単に乗り越えれんならハナからやつてねえ」

「あなた達はとても強い方だ。引き留めるのも野暮と言うものですね。私たちはここで少し休んでいきます。あなた方も1度戻られた方がよろしいのではないのでしょうか。あなたの方に火の導きがあらんことを」

「そうだな。戻ってアイテムの補充をしよう」

武器の耐久値も心許ないし。

「アルト、行くぞ」

「あ、ああ」

……やっぱり変だな。

篝火に手を翳し、転送される。

## 第5火：異形の聖堂

「いやああああ!!」

「ははははははー!」

「笑ってないで足動かせー!」

地獄を見た。あれはもう地獄だった。

地面から這い出る死体。それを躲し、水路に出ればヒルの集合体のような化け物。

それもやり過ぎ、墓地に出ればまた動く死体。

かと思えば、その腹からまたヒルの集合体のような化け物が出てくる始末。

俺はリーファをアルトはシノンを担当、全力で迷路のような聖堂の敷地内を爆走して  
いた。

女性陣は戦う以前に戦意喪失。

さすがのアルトもバカ笑いしてるが、剣を抜くことなくシノンを担当撤退。

SAN値チェックが必要だ。ああ、アスナとユイが恋しい。

「上から降ってくるー!」

「もう許してえ!!」

「口閉じてろー！舌噛むぞー！」

聖堂とは名ばかりなホラーハウス。

……このエリア、レーディング通ったんだよな？

外でこれなら中はどうなってるんだ。

「入り口はどこだ！」

「上に見えてる方が本堂じゃねえか!？」

小高い丘の上にある建物を見ながらアルトが叫ぶ。

それは分かっているんだよ！

小さい方から行けるかとも思ったけど、すべて鍵がかかっているって開けられなかった。反対側から開いて篝火へのショートカットになるんだと思うけど。

「また湧いてきたな！」

「もういやああああ！」

「ハア……なんとか撒いたみたいだな」



中庭の物陰で1度休憩。

ずっと追われてロクに探索もできなかつたな。

「アスナが探索から外れた理由が分かつたわ」

「はは……ははは……」

「リーファ戻ってこい」

アルトがリーファを正気に戻すために声をかけてるけど効果は薄いみたいだ。

ここからでも中庭に墓が見えるし、また出てくるんだろうなあ。無限涌きみたいだし、また担いで一気に駆け抜けた方が得策かもしれない。

「俺が1回見て回ってくる。ある程度したら戻ってくるから、大人しくここで待ってろよ」

「それじゃ俺もー」

「アホ。お前まで来たらいつらはどうする？護衛のためにお前も残れ。動きは遅えし、こいつで<sup>大</sup>薙ぎ払って進めば問題ねえだろ」

そう言い残して墓石の影に隠れながら進むアルトを見送り、3人でそのまま待機する。

「変なことしたら鼻の穴に火矢ぶち込むからね」

「しないから。神に誓ってそんなことはしません」

「こんな場所で神に誓ってもね」

「……アルトさん、少し様子が変だよな？」

やっぱりリーファもそう思うよな。なにか隠してるのは確かなんだけど、本人がなんでもないって言うてる以上は深く聞くのも憚<sup>はば</sup>れる。

「どこかのバカと一緒にで、また一人でなにか背負い込んでるんでしょ？ まったく、気に掛けるこつちの身にもなってるよな」

「アルトのことよく見てるんだな。やっぱり同棲してるーイエ、ナンデモアリマセンヨ？ シノンサン」

「お兄ちゃん……」

背負い込んでるとしてもいったい何を？

やっぱり左腕のこと、かな。

「そう言えば、灰がアルトを狙ってるって本当なの？」

「そうなの？」

「まだ数回しか戦ってないし、そうとは言い切れないよ」

大樹との戦いのときは、俺やアスナには目もくれず一直線にアルトを狙ってた。敵対してるとはいえ、パーティではなく個人を狙う理由は？ 灰をキルしたのがアルトだったから？

……なにか違う気がする。

「……まあいいわ。もしかしたらそう言うシナリオなのかもしれないし、今はこのお化け屋敷もビックリな聖堂の攻略でしょ」

「やつぱり行かないとダメ……ですよね？」

エギルとクラインにするべきだったかなあ。

「やつぱ無限涌きだ。一点突破するしかねえな」

「やつぱりか。先頭をアルト、しんがり殿が俺でリーファとシノンシノンを挟むようにして進もう。突っ走り過ぎるなよ」

「なら置いてかれないようについて来い」

敵を躲しつつ進んでるのはいいもののー

「矢が飛んでくるなんて聞いてないぞ！」

「敵も吹き飛ばしてくれんだ！文句垂れる前に走れ！」

ここに来る前の街で飛んできた槍のような矢。

塔の上から矢を射ていた巨人と話し、友情の証で《幼い白枝》と言うアイテムを貰ったけど敵ごと俺たちも吹き飛ばそうとしてないか!?

「あの距離からこの命中精度。銃を持たせたら相手にしたくないわね」

「言ってる場合じゃないですよ！」

「階段を登ればあと少しだ！そこまで行けば飛んでこねえ！」

そんなこんなで階段を登りきり、矢も飛んでこなくなつた。

「あの反対側の小屋には降ろせる梯子があつた。水路に繋がるショートカットだろうな」

「もうあそこには行きたくないわ」

「同感です……」

「屋根の上を通ることになるな。間違つても落ちんなよ？」

落ちたら即死、だよな。

再びアルトを先頭に行軍。

踊るように双剣を振るう敵や小柄で吹き矢を吹いてくる青い頭巾を被つた敵、自爆する奴や短剣を持った敵を蹴散らし、本堂の中へと入ることができた。

「静まり返つて逆にな気味ね」

「仮にも聖堂だ。騒ぐのはマナー違反つてな」

蠟燭立てのようなものを掲げて火球を撃ってくる敵をアルトが火球を防ぎ、その隙にシノンが射る。怖んだそいつを俺とリーファで切り捨て進む。

「おい見てみるよ」

廊下を抜け、眼下を見るアルトの視線の先には蹲うずくまった巨人。随分と広い。

「探索するところも多そうだ。これは骨が折れるぞ」

「……駄目ね。蹲うずくまったままだとダメージが殆ど通らない。探索するにしてもあの巨人は邪魔よ」

誰かが囮うさぎになって戦闘体勢にしないと駄目か。

「ま、俺だよな」

と言う訳で、巨人のヘイトを向けさせるためにアルトが下に降りたのはいいんだけど……。

「Help me!」

無駄に発音が良いのが腹立つ。

「本当にアルトさん1人でいいの?」

「大丈夫だって。アイツはあの程度じゃ死なないし、殺せない」

「へえ。随分と信頼してるのね」

「事実を言ってるだけだよ。現に今も余裕があるだろう?」

拳の振り下ろしを弾き、殴りを大剣の刀身に滑らせるように往なす。

本当に、どんな技量があればあんなことができるのか。

「あんたも大概だからね」

「いやいやいや。俺のは対人戦の延長だから。アイツみたいにプレイヤーもmobも関係なく先読みするような奴と一緒にされたくないから」

「一緒だから」

「一緒にしないで欲しい。」

「手え止めんな！」

「つたく、殺す気か」

「あなたも余裕あったでしょ？」

「うんうん」

「それとこれとは話しは別だ。キリト、あとでシバく」

「なんで!？」

人が巨人相手にしてるつつーのに談笑しやがって。

「それよりラストアタックボーナスでなにかドロップしたか？」

「収穫無しよ。経験値が美味しいのは確かだけど」

レベルが上がるだけじゃステータスが上がらないのがスキル制MMOだ。レベルを上げ、自分もしくはパーティに合ったビルドでポイントを振り分け、ステータスを上げることで初めて成長する。

ステータスに振れるポイントの他にもスキルを習得するためのポイントも存在するがそれは割愛だ。

それはそれとして、疼くように感じる熱はアイツがこの聖堂にいる証拠だ。

「……まったく。腕が疼くとか中二じゃねえんだから」

「なにか言った？」

「なんでもねえよ」

「あ、宝箱がありますよ」

部屋の真ん中にポツンと置かれた箱。

怪しいにも程がある。

「開けないのか？」

「無視だ無視。隠されてんならまだしも、部屋のど真ん中に置かれてるなんざトラップ以外あり得ねえだろ」

「そうね」

また廊下を通れば広間に出た。

……天井になんか居るだけど。

「シノン」

「了解」

シノンが射抜いたのは青い頭巾を被ったチビ。

そのまま奥に進めば重厚な鎧に身を包んだ騎士が現れた。

左手に大盾を持ち、右手にはメイスを握った巨漢。

「あの奥には何があると思う？」

「定番から考えればお宝よね」

「だよ……な！」

奴が盾を構えるより早く一閃。

吹き飛ばされ壁に叩き付けられながらもメイスになにかをエンチャント、その場を飛び退きメイスが叩き付けられた地面が数秒後に炸裂した。

「なんだそのエンチャント!?!欲しいな！」

「言ってる場合じゃないわよ！」

矢は盾に防がれ、メイスが叩き付けられた地面が炸裂するもんだから迂闊に近付くねえー！でも思ったか？



炸裂する範囲もメイスの攻撃範囲も分かった。

タネが割れた手品ほどつまらねえもんはねえつてな！

メイスを受け止め、俺の肩を踏み台にキリトが奴の頭上を飛び越える。

キリトに気を取られ、注意が逸れた瞬間にメイスを叩き落として胴を払う。半回転し、キリトの方を向けば二振りの剣で滅多斬り。

「危ねえ！」

「チッ！」

大上段から振り落とした大剣で真つ二つに切り裂けばポリゴンになって散った。

「今俺ごと殺ろうとしたよな!？」

「I don't understand what you are saying」

「なんで英語!? 肩竦めるジャスチャー止めるこの野郎!」

「楽しそうね」

「そうですね」

ギャンギャン騒ぐキリトを先頭にメイスを持った騎士がいた部屋に入ろうとして――

「うお!……アルト! いきなり剣帯を引つ張るな!」

「どうかしたの?」

「女性陣は部屋に入るなよ。キモいのがいるからな」

「なんで分かるんだ？」

「エコーロケーション、やってみろ」

音の反響具合で周囲の物体や壁、隠れた敵などを探るためのシステムスキル。コウモリが音波の反響で洞窟の壁にぶつからずに飛び回ると同じだな。

「……うわ、なんかいる」

「絶対入ってくんなよ？ フリじゃないからな」

崇○神でした。

「キモい……」

「もう探索は止めてボス攻略にシフトしないか？ 正気を保てる自信がない」

水が張った広場を突っ切り、反対側の廊下へ。教会へのショートカットを開通させ、教会外の井戸に落ちたジークバルト救出しようとも考えたが何もできないので、道中にあったリフトに乗りまた屋根の上を進む。天井裏の梁の上を進み、ナメクジに人の顔と腕を生やしたような敵を避けてさらに進む。

「ねえ、あれ」

シノンの指差した方向には巨人相手に弓を使って戦う擦りきれたロープの下に黒い鎧を着込んだ灰。

泥水を避け、足元に集まるスライムみてえな奴を躲し、的確に巨人へと弓を射る。

一連の動作に淀みはなく、流れるようにスムーズだ。

「結構やるな」

「ああ。だが足場が悪いから近付けてねえし、なにより火力が足りねえ」

俺たちの時はシノンの他にリーファの魔法援護もあったからなんとかなったが、灰ひとりじゃ火力不足ーーと思ったが、弓をしまったかと思えば火球を投げ、左手に持った杖を振れば鮮やかな青い光が巨人を射抜く。

青く光る瓶を飲み干せば、同じことを繰り返す。

そうして巨人をひとり倒し、奥へと進んでいく灰を見送る。

詠唱なしで二種類の攻撃魔法を使う？

いや、あの火球は手の火を増幅して使った印象があった。杖の方も制限はあるだろうが、無詠唱のアドバンテージはデカイ。通常の攻撃魔法とは違い、発動まで相手に知られることがないからな。

「また始まった」

「もうまた？」

大剣持ちとメイス持ちの騎士を蹴散らし、長い下り階段を降りていく。

「階段で引き摺って行こうとするんじゃないか」

「考え事に没頭してるアルトが悪いだろ？声かけても反応しないし、蹴りを入れても……いや、なんでもない」

「おい最後なんだった？」

「はいはい。じゃれてるとまた落ちるわよ？」

「落としたの間違いだろうか」

「大剣の重さもあって、私とキリトくんだけじゃ支えながら降りるのは無理ですからね」

お陰さまで後頭部強打だ。

リーファ、悪いって思ってたんなら謝らなくてもいいから、せめて笑いを堪えるのを止めろ。

「それにしても灰の奴はどこに行ったんだろうな。途中で見失ったし」

「俺たちと鉢合わせになってねえんだ。この先にいんだろ」

灰が進んだ道とは別の道でここまで来た。

鉢合わせでない以上、俺たちより先にここを通った可能性が高い。

「また煙だね。これじゃ進めないよ」

「消えるまで待つ？それともこの煙を出してる敵を探す……までもなかつたわね」

さつきまで感じていた熱が消えた。

つまりアイツはこの部屋で殺られたことになる。

行く手を塞いでいた煙は、ボス戦に第三者が入れないようにしつつ、逃げ道を塞ぐ役割もあるわけだ。

暗い青色のローブで統一したハゲ共。

普通の背丈の奴もいれば、ノッポやメタボな奴もいる。

《Deacons of the Deep》。HPバーは2本。

深みの主教たち、か。まさかこいつら全員を相手にしろってか？軽く数えても20は超えてるぞ。

大剣で薙ぎ払えば6人まとめて吹き飛ばすが、HPは減らない。

それどころか、人数が増えてやがる！

「これじゃ罅が明かない！」

「見つけた！体が赤く光ってる奴がいる！きつとそれが本体よ！」

シノンの言葉に視線を走らせれば、たしかに光ってる奴がいる。が、数秒後には光は消え、別の奴が光る始末。

「よーし！そうと分かれば！」

果敢にリーファが突っ込んでいくが、人垣に阻まれ逆に押し倒され人波に飲まれてしまった。

「お兄ちゃん！アルトさん！助けーちよつ！どこ触って……！」

「ひとりの少女に群がる聖職者たち。やれやれ、お前の妹はサービスカットに事欠かないな」

「言ってる場合か！」

「冗談に決まってんだろうが！」

集まりすぎて山になった主教たちをキリトと共に切り払う。

「シノン！本体が憑依するのに法則性はあるか!？」

「完全にランダムよ！数を減らして絞り込むしかない！」

「ダルいな。足止めれば火球は飛んでくるし、POPするスピードも速え。ならやることは1つだよな。」

俺が切り払い、無理矢理こじ開けたスペースをキリトとリーファが最短距離で本体に迫る。

それを繰り返すこと8回。ようやく1本目が削れた。

「本体が出てきた！全員警戒！」

キリトの声と共に、主教たちの人垣の中にただひとり王冠を被つてゐる奴が現れる。体に纏つてゐる光といい、主教たちをまとめてゐる奴に違いない。

「雰囲気が変わつた！なにか仕出かす前に一気にケリつけんぞ！」

数人が部屋の中央に鎮座する祭壇へ向けて祈りを捧げ、それに呼応し徐々に光を発し始めてゐる。

「邪魔だ！退けえ！」

横一閃。

同時に俺の両肩を踏み台にしてキリトとリーファが躍り出るが、主教たちに阻まれ僅かに届かない。ほんの少し肉壁が開いただけ。

「ッ！シノン！」

「これで終わらせる！」

放たれた一矢は狙いを違たがうことなく、僅かな隙間を縫い本体の額を射抜いた。

1拍置いてシノンが放つた矢を中心に氷塊が生まれ、人垣の内側から主教たちを押し退ける。

「ラストアタックだ！決めんぞ！」

「了解！」

シノンの矢が主教たちを食い止め、キリトとリーファが本体に斬撃を浴びせる。右足を引き、腰を落として体を開き大剣を腰だめに構える。

「キリト！リーファ！」

俺の声に視線を合わせることなく視線から飛び退く。

「だめ押しだからな。遠慮はいらねえぞ」

一足飛びで肉薄し、左肩からぶち当たって体勢を崩した瞬間にタメをいれた大剣の突きをぶちかます！

Congratulations!!

ファンファールと共に本体は散り、取り巻きたちも同様に散った。

「つはあくつつかれた。今日はもう働かねえ」

「ニート乙」

「引き籠り乙」

「……………」

「……またやってる」

「飽きないですねえ、二人とも」

あの水路に埋めてやるからな！



## 第6火：狼の騎士

「NPC成長システム？」

「正式名称はないからナ、便宜上そう呼んでるだけダ」

簡単に言ってしまうえば、闘えば闘うほど戦い方を覚え、様々な武器を扱えるようになるんだと。プレイヤー次第で特化型にするか万能型にするかは決めれるらしいが。

闘えば闘うほど戦い方を覚え、死ねば死ぬほど戦闘パターンを学習する。そうして成長させながら、ストーリーを進めていく、と。あの灰も闘い死にながら強くなってるのか。

「タイマンだとそこそこ戦えるみたいだけド、囲まれるとすぐ溶けるって言ってたナ。連続で攻撃を貰うほど受けるダメージが増えるらしいゾ？」

フルボッコには弱いってか？

なら主教たちとの戦って死んでも不思議じゃねえな。

リーファのときみてえに押し倒されたか、物量に押し切られたか、祭壇のギミックが発動したか。

ま、火力が足りねえことには変わりねえけどな。

「深みの聖堂から前には進めなかった。他に道は？」

「ン、ないことはないけど、あまりオススメできないゾ？参加してるプレイヤーが全員そこで止まってル。つまりー」

「強え敵がそこにいる」

「そう言うことだ。アル坊みたいな大剣を使うこと以外、詳しい話は聞けなかつた。情報屋の名折れだナ、ホント」

「攻略見ながらするのもゲームもつまんねえからな。それだけでも十分だ」

「グル」

「どうした？シフ」

「一緒にALLOにダイブしてもいつも丸くなって寝てるシフが膝の上に頭を乗せてくる。」

撫でてほしい……訳じゃなさそうだな。

「一緒に行くか？」

「ガウ」

と言うわけで、俺とシフにユウキの二人と一匹でアルゴの情報頼りに森の中で、お世辞にも綺麗とは言い難い沼をユウキを背に乗せたシフ共に進む。

「見通しが悪いな。臭いはどうだ？」

「フー」

「なんとなく、か。ちゃんと耳も澄ませよ？」

「バウ！」

「ははっ悪い悪い」

「シフの言葉が解るの？」

「ん？それこそなんとなくだ。声の高低、視線に仕草から大体は予想できる」

SAOでシフと共にいた期間は1年あるかどうかだが、寝食を共にし戦場を駆け抜けた友だ。完全な意思の疎通が出来なくても、通じ合うことは出来る。

「ねえシフ、ボクのことどう思う？」

「ウ？ガウ」

「むく分かんないよ〜」

「まだまだだな」

「翻訳して！」

「秘密だ。な？シフ」

「ウォーン！」

「断固抗議する！」

言つてろ。にしても、お前も大概口が悪いな。

遅くなったが、今回のキリトたちが来ていないかと言えば、課題が終わってねえんだと。

明日までの課題があつたのを今日になって気付き、今頃はヒーヒー言いながら課題に取り掛かつてるだろうな。

シノンバイトのシフトが入つて、リズとシリカ、アスナの3人はキリトの手伝い＋αだな。

「兄ちゃん、キノコが歩いてる！」

「はあ？目がおかしくなつ……………」

俺もかも知れない。

見た目はエリンギで二足歩行、両腕もあれば顔らしきものも見える。

……いやいやいや。いきなり方向性がブツ飛びすぎじゃね？聖堂にいたヒルの集合体ならまだ分かるが、明らかに生命体としての進化の方向性を間違えてるだろ。

目付きメツチャ悪いし。

「迂回するぞで」

「えー闘ってみたーい」

「ここじや足場が悪すぎる。どう動くか分からねえ以上、下手に手を出すのは悪手だ」  
アルゴめ、あんな奴がいるなんて聞いてねえぞ。

聞かなかった方が悪いって言われそうだがな。

迂回して進むも行く先々には大小のエリンギ。

一定のラインで配置されてるらしく、マップを開いてみても前に進めてない。

「しようがねえ。近くの島で待つてろ。1匹釣つてくつから、そいつ倒して一気に突っ切るぞ」

ラインから1匹だけ釣つて穴を開け、そこから前に進む。

それが最善か。

ユウキを乗せたままのシフが島の上に移動したのを確認してから、エリンギを釣るために木の影から様子を伺うが――

「よりにもよつて……」

一際大きなガタイのエリンギ。

他の奴にしたいが移動の時間を考えれば倒したところで、戻ったときにはリッププしてる可能性も高い。

やるしかねえよな。

後ろから忍び寄り一閃。

がー

怯むどころか反撃してきやがった！

裏拳のように振るわれた右腕を仰け反りながら回避。

続けて下から掬い上げる左腕を大剣で受け止め、切れずに吹き飛ばされ、水面に叩き付けられた。

動きは緩慢な癖にどういう腕力してんだ！キノコは繊維質だから筋肉質ってか？

などとくだらないことを考えながら、あいつらのいる場所まで釣っていく。

「倒したー！」

「喜んでねえでさっさと行くぞ」

攻撃を受けても怯まない。そればかりか、肉を切らせて骨ごと砕かんとばかりに振られる腕を掻い潜り、エリリングを討ち倒した。

あんなのを一々相手にしてられるか。

ーなんてフラグを建てなきやよかった。

「にーちやーん！ いっぱいいる!!」

「言わんでいい!!」

駆けるシフに振り落とされないう、必死にしがみついているユウキが叫ぶ。

どつから湧いてくんのか、右を見ても左を見てもエリンギだらけ。エリンギラインを突破したはいいが、奥に進むほどその数を増やしていくエリンギに内心辟易へきえきしていた。

当分はキノコは見たくないし、食いたくもない。

「兄ちゃん、まごごどご?」

「さあどこだろうな?」

一番やつちやいけねえことをやつちまったな。

ただひたすらに真つ直ぐ突つ切つちまったせいで、行き止まりにぶち当たり、引き返すしかない。

とは言えまた引き返してもエリンギに追われる羽目になる。

どうしたもんか。

「シフ、エリンギの臭いは覚えたか?」

「フランス」

「そうか。なら、シフの鼻を頼りに避けながら進むか」

「闘わないの？」

「キリトたちもいねえしな。ある程度探索して、篝火のワープポイントを使えるようにしとくのが、今回の目的だ」

深追いしたして死んでまた最初からつても面倒だしな。

それにエリア毎にボスが配置されてんなら、間違いなく最奥にはいるだろうし、3人で挑むとしても篝火を使えるようにしてからだ。

それにエリンギの攻撃を防いだお陰で《ベルセルク》の耐久値も心許ない。予備もあるが人数が少ない以上、個人の火力も高い方が安心感も違うしな。

シフの鼻を頼りに沼地を抜け、遺跡の中を進む。

耳が痛いほどの静寂の中、足音だけが異様に大きく聞こえる。

敵の姿も見えなければ、トラップの類たぐいもない。

にも拘かわらず、奥に進むほどプレッシャーのようなものが強くなっていく。

アルゴの言ってた大剣使いの敵、なのか？

「おや、またお会いしましたね」

「あんたは……アンリ、だったか」



「ええ。貴方がここにいるということは、あの主教たちを征したと言うことですね。流石です」

ホレス？ホレイス？だったかを伴った騎士装備のNPC。

顔も見えねえし、声も中性的で男か女か分かんねえな。

「あの聖堂にはエルドリッチはいなかったよな？」

「ええ。エルドリッチが眠っていた棺は空でした。恐らく本当の故郷へ帰ったのでしよう。棺の中にあつた人形がその行き先を教えてくださいました」

人形、か？

「この遺跡の下にある地下墓を抜けた先、冷たい谷こそがエルドリッチの故郷。そして冷たい谷は特殊な結界によつて護られていると聞きます。この人形こそが結界を抜ける唯一の鍵」

そう言や、主教たちを倒したときキリトがドロップしたとか言つてたな。聖堂をクリアしてからじゃねえと進めなかつたのか。

「ですが、お気をつけください。地下墓とは呼ばれていますが、そこはかつて砂の国カーサスと呼ばれていました。深淵の力に飲まれ滅んだと聞いていますが、全てを統べた霸王と共にその武力は健在とも噂されています」

その深淵を阻む為、彼の騎士が赴いておもむいているとも。

彼の騎士。

それが大剣使いの敵のことか？

深淵、大剣の騎士と言えば思い出すのはS A O時代の狼騎士。

あつちは設定だけで実際に会ったことはないが。

嫌な胸騒ぎがするな。

篝火を灯し、武器のメンテを終わらせてから奥へと進む。

「兄ちゃん、あれ」

ユウキが示した先には石造りの霊廟。れいびやう

……待て。あれはS A Oで俺がフアランの不死隊と闘った場所じゃねえのか？

思い返せば、あの沼地もグルーがいた毒沼に似通ってる。

偶然似てるだけか？それともー

そして霊廟の前にはシフよりも二回りは大きい灰色の狼。

「……中に入れてことか？」

俺たちの姿を視認した狼は扉を潜り、こちらを振り返ってる。

大狼に促されるまま霊廟の中へと入ってみれば、そこには一人の騎士が佇んでいた。

兜から伸びた蒼い房、白銀の鎧に兜の房と同じ蒼い外套、左手の大盾、そして地に突き刺した大剣。

剣を交えなくても判る。理解してしまう。

コイツには俺が万全でキリトたちがいても敵わない。

勝てる相手じゃない。

《Artorias the abyss walker》

【深淵歩き】アルトリウス

伝説と邂逅する

## 第7火：アルトリウス

「貴公、ここは何人なんびとなりとも立ち寄ってはならぬ場所。何用があつてここに来た」

「その先に用がある。正確にはその先の冷たい谷にな」

「深淵に濡れた地下墓をなんの加護もなく、か。勇敢なのか無謀なのか。どちらにせよここを通すわけにはいかん。通りたくばその力、この私に示してみせよ！」

次の瞬間には眼前に現れ、その大剣を降り下ろしていた。

咄嗟に《ベルセルク》を盾に防ぐも、その勢いのまま数メートル後ろへと押し込まれた。

重い！大剣や腕力だけじゃねえ！

「ほう………今のを防ぐか。だが——」

《ベルセルク》を大剣で抑え込まれ、左手の大盾の突端が腹へと突き刺さり、吹き飛ばされる。

「まだ青い」

「兄ちゃん！ツ！」

駆け寄ろうとしたユウキの眼前に大狼が立ち塞がる。

俺が闘い初めてから、シフと闘ってた大狼。

アイツは俺やユウキじゃなくシフに用があったのか。

「手え出すなよ？ユウキ。コイツは俺たちが束になっても勝機すら見えねえ化け物だ。でもな、だからって諦めるなんざ死んでもゴメンだ」

「兄ちゃん……」

「力量の違いを知らながらも立ち上がるか。良い戦士だ。私の配下であったなら、その名を馳せることも夢ではないだろう」

「アンタ程の騎士にそう言っつて貰えるとはな。恐悦至極つてか？けどな、あのバカキリト曰く俺はバーサーカーだぞ？騎士には程遠いつての」

騎士の誉れだの騎士道だの俺には縁えんのない言葉だ。

「そうか……それは残念だ」

「その言葉はそれなりの口調とそれなりの重さを持たせろ。透けて見えるぞ」

「手厳しいな。だが配下であったなら、と思っただのは事実であり本心だ」

……隙がねえ。どう打ち込んでも盾で防がれ、あの大剣で切り捨てられる。そんな未来しか見えねえ。

「特異な目を持つているようだが、些か頼りすぎだ」

後ろッ！

間一髪、弾き飛ばされながらも《ベルセルク》を盾に防ぐ。

クソツ！見えてんのに反応できねえ！速過ぎんだろ！

「成る程。姿勢、重心、視線、他にもあるだろうが、それらから相手の動きを読んでいる訳か。だが如何に相手の動きが読めていようと、反応できねば意味はあるまい？」

そこまで……こいつ、本当にNPCか？

確かに動きが読めていても、相手の動きが俺の反応速度を超えてれば意味がねえ。

それをたつた2合で見切りやがった……！

攻撃も防御も片腕じゃ限界がある。

それでも対人戦やmob戦でハンデを抱えながらも問題なく闘っていたのは単に先読みがあつたからこそ。

せめて左腕が使えれば……。

「……如何な理由か、本気では闘えないようだな」

「馬鹿言え。本気で闘えない？だからなんだ。確かに武人からすれば最大級の侮辱だろうさ。だけどな、万全じゃないから闘えませんつてのが、一番失礼だろうが」

剣を交える以上、万全で挑むのは当然。

武人でなくてもそれぐらいは理解してる。

だが相手の戦意に應えるのも武人だろ。

それにー

「アンタ程の強敵と闘えんだ。ケツ巻くつて逃げるなんざハナから考えてねえよ」

戦意は十分。

むしろここまでの敵と闘えることに感動すら覚える。

「狂バーサーカー……成る程。まさしくその通りのようだ。ならばその戦意に応え、私も

全力で相対しよう」

マジかよ……まだ上があるのか。

「兄ちゃん……」

なんつー声出してんだよ、ユウキ。

敵が強えほど奮い立つのが俺だ。

勝つか負けるかなんざ、闘いの果てに勝手にぶら下がってるもんだ。そんなものに興

味はねえ。

勝つに越したことはねえけどな。

左腕が使えない？ 闘い方が見切られた？

それがどうした。

方に1つの勝機でも、挑むのが人間だ。

「アルト！」

聞き慣れた声に後ろを振り向けば、見慣れた二振りの剣を背負った影。

「キリト、お前……」

しかし、靈廟の中へと入ったキリトを前を大狼が行く手を阻む。

「手え出すなキリト。これは俺の戦いだ。譲るつもりも共闘するつもりもねえ」

「分かつてるよ。俺は見届けに来ただけだ。ま、お前が死んだあとに挑むつもりだけだな」

「応援に来たのか、ハイエナしに来たのかどっちだよ」

大方、課題を投げ出してきたんだろうな。

アスナの暗い笑顔が目に浮かぶな、こりや。

「随分と嬉しそうだな」

「ハッ！馬鹿言え。情けねえ姿を見せたくねえ奴が増えただけだ。嫌でも奮い立つだろうがよ」

相手の剣先まで集中しろ。何一つ見落とすな。

「同じ手が私に通用すると？」

「あれこれと手を出す趣味はねえからな、1つの技を磨き上げてこそその技術だろ？それに付け焼き刃なんざ、アンタ相手に通用するとも思ってたねえ」

原石をヤスリで削り上げ、技術宝石へと昇華させる。



獣のような鋭い爪も牙も持たない人間だけの特権。

「その意気や良し。全力で来い！」

「言われるまでもねえ！」

どれぐらい打ち合ったんだろう？

騎士の姿が霞めば、それに反応したアルトが剣を振り上げ火花が散り、そこでようやく騎士の攻撃を防いだのだと理解できる。

俺ならどう戦うだろう。

相手の動きを見てからじゃ遅すぎる。

かといって、アルトみたいに相手の動きを正確に読める訳じゃない。

俺ソロじゃ勝てない相手かも。

この鬨は、騎士相手に一人しか闘えないんだろう。視線こそ向いていないけどシフト戦っている大狼が絶えずこちらを視界に入れてる。

加勢しようとするれば、間違いない割って入ってくる筈だ。

それにあの騎士は、SAOの攻略組のトッププレイヤーが闘って一太刀入れられるかどうかの相手だ。ここに来て一気に攻略難易度が上がったな。

「オオオオオオ!!」

「アアアアア!」

言葉と言うよりは咆哮に近い雄叫びを上げ、大剣が火花を散らす。

知覚を超えたスピードにアルトもよく喰らい付いてる。

でも1歩、それでも1手足りない。

原因は体を動かす度に慣性で振り回される左腕。

アイツの本来の闘い方は、大剣と短剣の二刀流。

相手の攻撃を短剣で防ぎ、その隙を大剣で突く。

異形とも言える型に、ALOでも無類の強さを発揮していた。でも本来の闘い方が出来ないのは、本人にとっても悔しく歯痒いはずだ。

「キリト……兄ちゃん、勝てるよね?」

「大丈夫さ。アイツの強さは力だけじゃない。システムを凌駕する意思、そして鋼の心なんだからさ」

アイツは負けない。アイツに勝って良いのは俺だけなんだ。

それだけは、誰にも譲るつもりはない。

横風ぎに振るわれた《ベルセルク》を掻い潜られる。

「見誤ったな？」

「そつちも、な!!」

手首を返し、柄で凶刃を逸らす。

テコの原理で振るわれた刃は大盾に防がれる。

一進一退。

あれだけの盾だ。構えれば視界の殆どは塞がれてるはずなのに、正確かつ的確にこちらの攻撃を防いでくる。

……いや、あの盾で防ぎやすい場所に誘導されると言った方が正確かもしれない。相手の攻撃を誘導するのは、さして難しいことじゃない。

視線や体勢からわざと隙を作り、そこを攻撃させる。

言ってしまうばそれだけだが、アイツの恐ろしいところはここまで打ち合ってもそうだと悟らせないこと。

最善も次善もそこを攻撃させるように帰結している。

言ってしまうえば、詰め将棋のようなものかもしれない。

圧倒的技量差。

ここまで差があるのだと見せ付けられてしまえば、笑いしか出てこない。

だが諦める理由にはならない。屈する理由にもならない。

それでも闘うのだと吼え続けることしかできない。

吼え立てる激情に身を任せ、剣を振るうこの時こそが俺に生きている実感をくれる。

……我ながら生まれてくる時代を間違えたかもな。

突き出された大剣を《ベルセルク》の腹で受けつつ後ろへと流し、柄頭を顔面目掛け突き出せば首を傾げるだけで躲かれ、そのまま斬り上げようとすれば勢いが乗る前に盾で防がれる。

「……このままでは、埒が明かな」

「どうしたよ急に」

「なに。このまま続けても共倒れになるのが目に見えている。次の1合、全身全霊をかけた決着を望む」

考えてることは同じか。答えは決まってる。

《ベルセルク》を後ろへと流し、構える。

アルトリウスも盾を捨て、両手で大剣を構える。

放つのは俺が信を置く大技《ナインライヴス》。

相手がどう動くかは分からないが、突進技であるこっちの方が速い。

合図はない。それでも俺たちは全くの同時に動き出した。

OSS特有の光を纏った《ベルセルク》を振るいかけ、アルトリウスが飛び上がった瞬間に剣の軌道を変える。

真上から振り下ろされた大剣と《ベルセルク》がぶつかり合い、金属が砕け散る音が響き渡る。

「……見事」

背中合わせになったアルトリウスの声が沈黙を破った。

「まさか、我が王より賜ったこの剣を折る戦士が現れようとは。貴公、名を聞かせて貰っても良いか？」

「……アルト、だ」

「奇しくも私と同じ名を持ち、私と同じく狼を友とする者か」

側に歩み寄った大狼に跨がり、こちらを見下ろす。

「力ある者よ。この先は深淵に濡れた亡国。深淵に吞まれたくないのならば火の力を得よ。火は古くから闇を切り裂くものが故に」

そう言い残し、狼騎士は霊廟から去っていった。

……なんとかなった、か？

立ち続ける気力もなく、その場にへたり込んでしまう。

「アルト！」

「兄ちゃん！」

「……ようお前ら、無事か？」

仰向けに倒れそうになる体をシフが回り込み、その体で受け止めてくれる。

「戦ってたのはお前とシフだけだろ」

「そうだったか？アドレナリンが分泌されまくって目の前のことしか頭に無かったからなあ」

アドレナリンは有限らしく枯渇するとうつつ病になりやすいとか。

「まあいいや、それよりそれどうするんだ？」

「これなあ」

刀身の半ばから折れ、耐久値限界でポリゴンとなって散った《ベルセルク》。

……やっちゃまったなあ。リズにしばかれるかも。

最後の1合でお互いの得物が折れる結果になった。

結局、ダメーヅも入んなかったし。物理ダメーヅ完全カットか？あの盾。

そういや『我が王』とか言ってたな。《薪の王》とは違うのか？

……駄目だ。頭回んね。

「取り敢えず、今日はここまでだな。篝火も出たし」

「そーいや、課題の方はいいのか？」

「……………手伝ってくれとありがたいです」

駄目だこいつ。

ユウキとキリトの肩を借りながらそう思う。

深淵に吞まれたくないなら火の力を得よ、か。

どういふことだ？

## 第8火：亡国の王

ああ〜頭痛え……

風邪ではない。物心ついた頃から風邪をひいたことがない。

では何故かと言えば、昨日のアルトリウスとの闘いが原因だ。  
情報過多で脳がSOSでも出してんだろ。

リアルに復帰してから続く頭痛に寝ることもできなかつた。

「よう颯真、随分と体調悪そうだな」

「うるせえ和人、ただでさえ苛立ってんだ。あんまイラつかせんな」

「ははっ、その状態でも不良首席様はテストの成績は上位みたいだな」

「うっぜえ……」

誰が不良首席だ。

「言葉遣いは汚いし、制服も着崩してる癖に勉強は出来るからな。教師陣もどう注意していいか分からないって言ってたぞ？」

「言わせとけ。結果さえ出してりゃ口うるさく言われることはねえんだよ」

「それはそれで問題があると思うけどなあ」



「あと二ヶ月もすりや卒業だ。それまでの我慢だろ?」

卒業後はS A O事件前のように大学に進むのか、それとも就職か。どっちもパツとしないんだよな。

「卒業、か。なんだかなあ」

「進学して学歴に箔つけるか、さつさと働いて安定して収入を得るか。それとも親の脛を齧る——」

「それはない」

「違うない」

どちらにせよ自分で食い扶持<sup>ぶち</sup>を得ないことには話にならねえけどな。

「にしても火の力を得よ、か。心当たりはあるか?」

「火の力……松明、じゃねえよなあ。エンチャントでもねえだろうし、宝箱を開けるための鍵みてえなもんか? 違うな。どっちかって言うど通行手形に近いか?」

そのまま進もうとすれば何かしらのバステがあるだろうし、下手したらそのまま進めねえってこともある。

まさか詰みか?

……いや待てよ? あの狼騎士は何て言ってた?

『力ある者よ。この先は深淵に濡れた亡国。深淵に吞まれたくないのならば火の力を得

よ。火は古くから闇を切り裂くものが故に』

人間は古く火、つまり光を得ることで闇を照らしその活動範囲を広げた。

それに倣ならうとしたら、やっぱり松明か？

それもただの火じや駄目だ。

深淵を祓うとしたらやっぱり聖火だよな。

「祭祀場の黒ローブの女」

「火守ひもりめ女？ だったけ？ 彼女がどうかしたのか？ 火守って言うくらいだから火の力について何か知ってるかもしれないけどー」

「その通りだ。ま、それで何もねえなら正真正銘、詰みだけだな」

やっぱり鍵は灰か？ あの聖堂以来姿が見えねえんだよな。

最初のエリア、火の祭祀場へと戻ってきた訳なんだが……。

火守女の前で跪く灰。その灰に手を翳した火守女。

身に纏った防具は以前と同じ、黒い鎧に擦りきれた黒ローブ。

だが、あちこちが燃えているように赤い光を放ってる。

あれには見覚えがある。

火の力つてのはまさか……。

いや、あり得ねえ。あれは仕様外の力であつて、プレイヤーがホイホイ使えるもんじゃねえ。それに――

「攻略のために命を削る？ S A O じゃねえんだぞ」

そう、あの力の代償は己の命。

マップ攻略のために自身を生け贄に捧げなきやならねえなんぞ S A O でもなかつた。

灰は立ち上がり、こちらに一瞥もくれず篝火の前に座り込んで靄のように消えた。

どつかに転移したのか？

……まあいい。

「おい火守女」

「またお越しになられたのですね。ですが灰の方が――」

「それはどうでもいいんだよ。深淵を歩くための火の力。なにか心当たりはねえか？」

「……でもし何もねえなら敵対してる灰に対する贖罪クエストでも見つけねえ限り詰みだ。」

救済措置ぐらいいは用意してあるはずだ。

「深淵を祓うの火の力……私は火守女。火を保ち、見届ける者。そのような力は持ち合わせていません」

だよなあ。

「ですが、かつて深淵から生きて帰った火守女がいたと聞きます。彼女のソウルがあればあるいはー」

というわけで、祭祀場の裏にある塔を登ってるわけだがー

「長い……」

ただひたすらに螺旋階段を登るのは苦行だ。

癒しと言えば、右手側の壁が壊れて崩れたのか時たま覗く絶景ぐらいか。

キリトは祭祀場で待機。

前に進める算段がつき次第、今日来れる奴らにメッセージを飛ばす手筈になってる。

黙々と足を進めていけばようやく頂上へと辿り着いた。

狼騎士に折られた大剣はS A Oで振るっていた《フアラン》を模した大剣《ドウンケルゼーレ》に持ち変えた。

意味はドイツ語で《暗い魂》とでも言えればいいか。

これと短剣を組み合わせて使ってたが左腕がこんなんだから、ストレージに突っ込んだままだったんだが、《亡者狩りの大剣》は強化出来ねえし火力を優先した結果、こいつを引つ張り出したわけだ。

そんなこんなで鉄格子の扉を開き、三方を壁に囲まれた床の出っ張りを踏めばどういう原理か上へと動き始めた。

摩訶不思議なエレベーターが止まり、また階段を登れば巨大な釣り鐘が鎮座し、その脇に火守女と同じロープを纏った死体が転がってる。

近くに寄ればウインドウがポップアップし、調べるのコマンドをタップ。

《穢れた火守女の魂》

これで終わりか。呆気ねえな。

長い階段を登ったにも関わらず用事が一瞬で済む。

割りに合わねえな。

エレベーターを降りて戻ろうとしたんだが――

「閉まつてる?」

外側から鍵をかけられたのか、ビクともしねえ。

「へへっ。すまねえなあ、あんた。だけど気を付けな。好奇心は猫をも殺す。あるもん

だぜ近づくべきでないってのは、もっとも少し遅い忠告だったかな？ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！

もう諦めて、そこで干からびていけよ。周りは女ばかりだ。むしろ男の本望だろう？ああ、後のことは心配するなよ。あんたの死体から、しつかり全部剥いでやるからパツチの老舗をご贖頂に願うぜ？ウヒヤヒヤヒヤヒヤッ！」

鉄格子の隙間から《ドウンケルゼーレ》を突き入れるが、顔面スレスレのところまで鉄格子がぶつかると

「よく回る口だ……穴あ開ければもつと回るんじゃねえか？」

「ウヒヤ……ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！強がりもそこまでにしとけよ。そこから出れない以上、あんたの剣は届かねえ。じゃあな、くたばった頃にまた来るぜ」

遠ざかっていく背中に苛立ち紛れに鉄格子に蹴りをかますが、《Immortal object》の文字。

……久々に見たな。

クソツ、氣い抜いてたな。

道の両脇は下に通じてるが落ちれば即死だろうし、死ねば折角手に入れたアイテムをドロップする羽目になる。

いやまあ、1回死んでまた戻ってくるってのも1つの手なんだけどな。

……ん？ありや何だ？

下を覗き込めば、壁から半ば飛び出た石造りの棺。他にも何か所か飛び出てんな。

あれを伝つて降りろつてことか？

それでもそれなりの高さがあるから、飛び移れたとしてもダメージは確実だろう。それに踏み外せば一気に下まで真つ逆さまだ。

「ま、なるようになるよな」

念の為《ダウンケルゼーレ》を装備から外し、装備重量を減らす。

落下ダメージの計算は落下距離と滞空時間から算出される。

装備重量を減らしたからといって、ダメージが減るわけじゃねえが、軽くなればなつた分だけ手段も増える。

アクロバティックなのはあんま趣味じゃねえんだけどな。

なんとか下まで降り、外へと出れた。

中は黒ローブを来たミイラ化した死体の山。

火守女の成れの果てなのか火守女になれなかつた奴の末路なのかは分からねえが、回復量を増やす指輪が手に入ったから良しとする。

「よう、アンタが言つてたのはこれか？」

「……はい。深淵に呑まれながらも命からがら逃げ延びた火守女のソウル。これがあれば深淵から身を守る火を造り出せるかもしれませぬ」

そう言つて火守女は螺旋剣の突き刺さつた篝火に近付き、その炎を掬い上げた。そしてその炎をキリトの胸に押し当てれば、吸い込まれるように消えていく。

「これで深淵からは身を守ることが出来ますが、あまり離れすぎないように注意してください」

効果範囲が決まつてんのか。

離れすぎると効果範囲から外れて深淵に呑まれる、と。

この感じからすれば、呑まれれば即死か？

「それで今日来れるのは？」

「……………」

「おい目え逸らすな……………まさか」

「そのまさか」

「おいマジかよ……………今日は止めとくか？」

「アスナ回復役もシノン援護役もいねえ。

シフはSAOの教会の時みてえな二の舞にはしたくねえし。

「……………」



「逃げるは恥、退くは負け、常に前向け」

攻略組として二人で動いていたときの標語。

と言うより、隣にいる奴に尻込みしると思われたくなかったただけなんだけどな。

「やるぞキリト」

「俺たちなら負けないさ」

拳を突き合わせ、狼騎士と闘った霊廟へと転送される。

「気を付けろ！再生するぞ！」

HPがゼロになっても少し経てば、飛び散った骨が集結して戦闘態勢に入る骸骨騎士。

通常の剣を振り回してくる奴もいれば、片腕でファルシオンを振り回す文字通り骨のある奴もいる。

ファルシオンってのは切っ先に向かうほど刀身が幅広になつてる剣のことだ。重心が切っ先にあるから一撃の重さに重点が置かれ、民衆が大量生産され安価で農具のように簡単に手に入れることのできた剣だ。

「アスナが来なくて正解だったかもな！」

橋の上で弓で狙われながら、ローブを巻いた骸骨剣士を橋の下に蹴り落としながら叫ぶ。

カーサスだったか？その兵士だったのかもな。

恐らく階級ごとに支給された装備が違うみてえだな。明らかに手強い奴に限って、ローブを巻いてるし武器の質も違う。

ホレイスとはぐれたアンリがいて、どこぞのトレジャーハンター映画のような大玉に階段を降りてるときに襲われ、篝火を灯したあと水路のような場所に出た。

「ヒデエ臭いだ。肉でも腐ったか？」

「腐る肉もない敵ばかりだけだな」

キリトと背中合わせになりながら前に進む。

横ステップの滞空時間が以上に長いショーテル持ちの骸骨剣士を叩き潰し、見た目が完全にオンボロな橋に差し掛かったところで、再びアンリを見かけた。

「ああ、貴方たちでしたか。結局あれから、ホレイスとは出会えませんでした。でも、私にも使命があります。ただあの子たちのために、一人でも向かうべき使命が……貴方たちも、きつとそうなのでしょう？ああ、強い人だ。私も、そうあろうと思います。貴方の旅に、火の導きのあらんことを」

ああ、それと、と付け加え

「霸王ウオルニールは深淵に呑まれる前、とある聖職者たちから深淵から身を守るための腕輪と聖剣を奪ったと聞きました。何かのお役にたてば幸いです」

つまりそのウオル……ニール？とか言う奴は深淵を恐れてたつっ—ことか？

橋を半ばまで来たところで、後ろからこのエリアで聞き慣れた金属音が聞こえる。

恐る恐る後ろを見れば、夥しい数の骸骨剣士の姿が見える。

恐らくこの前の部屋で散乱してた骨が橋の半ばに差し掛かったことがフラグになり、骸骨となって殺到してきたつとところだろう。

「橋の上で相手にできるかあ！」

そう叫んだところで前に視線を戻せば、橋のロープ目掛け剣を降り下ろそうとする灰の姿。

俺たちごと下に落とす気か！

無情にも降り下ろされた剣は橋のロープを切り裂き、支えを失った橋は真つ二つに折れ、上にいた骸骨たちは崖下へと落ちていった。

俺は崖の縁にギリギリ手が届き、キリトは俺の左手を掴んだまま宙吊りになってるけどな。

「灰の野郎……どういうつもりだ」

「お前がいたから殺しに来たんじゃないのか？」

「いいからさっさと上に登れ」

……俺の頭を踏み台にしろだなんて一言も言つてねえけどな！

あとで崖下に落としてやる。

登りきつたキリトの手を借り、俺も崖の上へと登ることができた。

「なあ黙つて橋にしがみついても落ちずに済んだんじゃないか？」

見れば、残つた橋の板とロープが梯子のように垂れ下がってる。

「それよりも灰の野郎どこ行つた」

「この先だろ」

物々しい扉を潜れば、金の調度品が無造作に転がされた広い部屋。

その中心には頭蓋骨を横した盃が鎮座してる。

そしてその前には盃へと手を伸ばす灰。

止める間もなく灰の手が盃に触れ、闇が盃から吹き出した。

「キリト無事か？」

「……ああ。けどどこなんだ？（こっ）」

坂道の上にいるのは間違いねえけど、先が暗すぎて見通せねえな。

「……ツールト、下」

王冠を戴いた巨大な骸骨。

右腕には1つ、左腕には2つの黄金の腕輪が填められている。

《High Lord Wolnir》

HPバーは3本。

こいつがアンリの言つてた霸王ウォルニールか。つまりここは深淵の中か。

先の見通せない闇の中。

闇は無そのものであると言う見方もある。ウォルニールは闇じゃなく無を恐れてたということだろうな。

坂を這いずって登ろうとするウォルニールに灰が剣を振るうが、硬すぎるのか弾かれない。

ダメージも碌に通ってない。

降り下ろされた右手を躲し、俺とキリトも剣を振るうが同じように弾かれる。

クソ硬え！カルシウム握り過ぎだろ！

「……アルト！腕輪だ！両腕にある腕輪を狙え！」

「腕輪？……ああ！成る程な！」

深淵から逃げるために聖職者たちから奪った聖剣と腕輪。

ウォルニールが深淵に吞まれて尚、逃げようと足掻いてるってことは、その聖剣と腕輪のお陰か。

「おい！腕輪を狙え！」

灰にそう伝えれば了承したように頷いたあと、降り下ろされた左手を避け、腕輪を攻撃し始める。

灰との初の共闘か。

なにかしら心変わりかあったのか、こつちを狙う素振りもない。

それはそれで都合なんだけどな。

キリトと同時に振るった一撃で腕輪が破壊され、ウォルニールは大きく後ろへと下がる。なにかに引つ張られたと言ってもいいかもしれない。

それに腕輪を壊しただけでバーが1本消し飛んでる。

成る程。バー1本辺り腕輪1つか。分かりやすい。

確かに攻撃範囲は広いが大振り。動きを見てからでも十分に間に合う。それに腕輪自体の耐久値もさして高くねえ。

攻略法さえ判れば温いボスだな。

灰が左腕の腕輪を破壊し、最後の1つを俺とキリトで壊せば、ウォルニールが闇の奥へと引きずり込まれるように消えていく。

呆気ねえな。

視界が白に染まったかと思えば、元の盃のあつた部屋に戻り、噴出した黒い煙が盃の中へ吸い込まれていく。

「あれ？灰は？」

辺りを見渡しても姿が見えない。

部屋の奥を見れば閉じられてた扉が開いてるし、先に進んだのかもしれない。

「篝火もあるし、ここまでにしよう」

「区切りもいいしな」

地下墓はあんまり探索できなかつたな。

広すぎるつてのもあるが人手が足りねえのが原因だ。回復役が一人でもいればまた違ったんだろうが。

「にしてもゲームばっかやってるな、俺たち」

「ゲームして金を稼げんなら、言うことなしなんだけどな」

「ゲーム廃人」

「そう言うキリトもだろぅが」

転送しますか？のウインドウにOKをタップし、キリトと拳を突き合わせたと同時に視界が白く染まった。



## 第9火：神喰らい

《Sulyvahn's beast》 サリヴァーンの獣

見た目は犬。口を開けば鱗。おまけに雷属性のブレスときた。

俊敏かつ攻撃範囲が広く事故率が高い。

事実、腹の下に潜り込んだキリトが攻撃を回避しきれず、一撃でレッドゾーンまで落ちた。

今はキリトが回復中で、戦列の立て直しを図るため俺とユウキ、シノンで相手取ってる。

HPも2本あり、まだ1本目の半分までしか削れてない。

「つぶねえ、な！」

噛み付きを躲し、飛び上がりながら顔面の右側面目掛け斬り上げる。

「やああああ！」

派手にぶつ飛んだところをユウキが喉元に剣を突き刺し、尻尾まで一気に斬り開く。

こいつと戦うのはこれで2回目。

1度目はイルシールに入る前の橋の上。そして今戦ってる街から離れた水辺。

橋を渡ってる途中で後ろから現れたもんで、そのまま市街に入ったらあつちは入れないのか、結界に阻まれるように消えた。

街に入るには鍵になる人形が必要なんだったか？

確かに街に入ったとき、空間が波打ってた気がするが。

「いい加減寝とけ！」

「ブレスを吐こうと空を仰いだ瞬間に体をコマのように回転させ、遠心力が存分に乘った風ぎ払いを奴の顔面に叩き込む。」

雷らしく水に拡散するブレスを吐かれるわけにはいかねえ。

形容しがたい悲鳴と共に爆散。

《法王の右眼》とか言う指輪をドロップした。

ふーん、攻撃が連続するほど攻撃力が上がるか。手数が多いキリト向けの指輪だな。

3mはある身長 of 曲剣持ちの騎士や火を操る魔女、銀騎士闘とったりして、一際大きな建物の前にたどり着いた。

銀騎士と闘っているとき、後ろからアホみてえにデカイ弓で射抜かれかけたことは根に持っていない。ないっつらない。

「ボスだな。キリト、さっきの指輪は装備したか？」

「ああ。けどアスナから以外の指輪を填めるのはなあ……」



「お前が渡したんだろ！」

「疑いもしねえで装備したのはお前だろ」

黙つてのはあの水辺で闘った奴だろうな。

街に戻れず獣に成れ果てた姿か。あんな最後は御免蒙る。

「あ、貴方がたは人ではなく妖精ですし、その魔力も効かないかもしれません……恐らく」

「ああ良かったあ」

「安心しろ。もしそうなくても一撃で首落としてやるから」

「安心できない!？」

篝火を灯したあと、再び聖堂の前へ。

ここに来る前に、教会の入り口に並べられた壺と子供らしき石造に違和感あんだよな。と言うことで片っ端から大剣を降り下ろしたら、擬態でもしてたのか1つが甲羅を背負った老婆？へと姿を変え、一撃で死んでしまった。

キリトたちに非難の目で見られたのは言うまでもない。

そう言えば昨日、灰と共闘したが前までみてえな熱を感じなかったな。別人か？それ

ともー

「兄ちゃん、戻ってこーい」

「……………ああ、おう」

考え事すると周りが見えなくなるのは悪い癖だな。

直す気は毛頭ないが。

「まったく。ボス戦かもしれないのに気を抜きすぎよ」

「かも、じゃなくて確実に、の間違いだろ。こんな仰々しい建物にいんのが雑魚だったら肩透かしもいとこだ」

そう言いながら視線の先に居るのは、身長が4mは超そうかという偉丈夫。

《Pontiff Sulyvan》法王サリヴァーン

「……………ほう、貴様ら人間、ではないな。このサリヴァーンが治めるイルシールに何用だ」

「エルドリツチを知ってるな。そいつを出せ」

「エルドリツチ……………エルドリツチ……………はて？身に覚えがないな」

「白々しい。テメエには用はねえんだ。知らねえなら、大人しくそこを退け」

「お前、また……………そんな言い方したら……………」

「私も侮られたものだ。通りたくば、力づくで押し通れ！」

「ほら！言わんこつちやない！」

二振りの剣を抜き放ち戦闘態勢に入った瞬間、俺たちの脇を影がすり抜けた。

降り下ろされた剣を弾き返し、がら空きになった胴体へ右手に握った剣を土手っ腹に突き刺した。

「一撃……?」

HPの減少は1度も減速せず、根こそぎ奪った。

しかしサリヴァーンの体はポリゴンとなって散ることなく、煙のように灰の体へと吸い込まれていった。

データを取り込んだのか?

そして左腕に感じるジリジリと燻るような熱。

まさか……こいつは……!!

「アルト!?!」

《ドウンケルゼーレ》を振り上げ、間合いに入ると同時に振り払うが、煙でも斬ったように消えちまう。

逃がしたか。

地下墓で共闘した時とは何かが違う。

何が違う? クソ、感覚的なモンを言葉にすんのは難しいな。

「大丈夫?」

「……問題ねえ。先進むぞ」

聖堂を抜けて上を目指す道中には、火球を飛ばす聖職者の他に死体に紛れ込むように倒れる巨人。

両手に持ったマラカス野郎と短槍を持った2人のNPCを突破し、屋根を伝って上を目指したーんだが

「キリト！お前が餌だ！さっさと行け！」

「嫌だよ！なんで空中で曲がる矢を避けながら進まないで行けないんだ！」

そう。キリトが言った通り、放たれた矢が空中で曲がる。

それはもう意思でも持つてるかの様に曲がる。

ただの矢ならまだ良い。いや、良くはないが問題は太弓から放たれる大矢。明らかに人に向けるもんじゃない。

……こつちには対物ライフルを人に向けるスナイパーがいるけどな。

「なに？」

「いや、なんでもねえ」

人じゃなく竜でも狩るための弓だと言われたほうがまだ納得ができる代物。それが避けた方向に曲がるもんだから、まともに喰らって吹っ飛ばされた。

一撃で半分もってかれたし、射ってくるのは1人や2人じゃない。

弓を構えてない銀騎士を含めば5、6人はいる。

奴らの射程範囲に入れば、一斉にあの大矢が放たれ全滅するな。間違はなく、それでも道幅は狭く、即死を免れたとしても着弾の衝撃で屋根から落とされる。

つか、どう射れば矢が空中で曲がんだよ。

「アルト、あの矢を弾き返せる？」

「どうだろうな。いけなくもねえと思うが、弾き損なえば下に真つ逆さまだ。ユウキ、お前のAGIで突つ切れるか？」

「んゝ出来ないことはないかもだけど、2人からが限界かも」

「流石ユウキ。キリトとは違うな」

「俺に何か恨みでもあるのか！」

「恨みなんざねえよ。ただー」

「ただ？」

「弄りがいがあるから、退屈しねえなあ」と

「落ちろ！俺の為に死んでくれ！」

「止める！押すな馬鹿！矢で首から上が無くなる！」

組み合つた俺とキリトの顔の間を例の大矢が通過した。

慌てて塔の影に戻れば、シノンが呆れた様子で声を溢す。



「何してるのよ、バカ2人」

「でも見てて飽きないよね？」

「まあね」

「お前が落ちろ！」

……なんか不毛な戦いをした気がする。

取り敢えずユウキを先行させ、狙いを定めた瞬間に俺を踏み台に跳躍したキリトが肉薄。一刀の元に切り伏せた。

あとはその繰り返し。

物影から大弓を射ってきた銀騎士もいたが無視し、塔の階段を登ってその先にあつたレバーを動かせば、どういう原理か塔全体が上へと上昇する。

「【神の都 アーノル・ロンド】か嫌な予感しかしねえな」

「神様は嫌い？」

「どっちかかって言えば無神論者だ。それに色んな神話を読んできたが碌な神がいねえ。ヘラ然りイシユタル然りな」

イシユタルとは古代メソポタミア文明に於いて、戦《いくさ》と豊穡の女神らしいが、神々に甘やかされて育った。

そして、人類最古の王と呼ばれるギルガメツシュ王に求婚したが相手にされなかったことに激情、天の雌牛をギルガメツシュ王が治める都、ウルクを襲わせたがギルガメツシュ王とその親友であったエルキドウの活躍もあり事なきを得る。

が、その戦いでエルキドウが落命。その遠因たるイシユタルは不倶戴天の敵となつたとか。

個人的にはイシユタルの冥界下りの話は面白かったが。

……どうでもいいな。

都と言われてる割には建物は目の前の荘厳な城だけ。

「こんな城に住んでみたいわね」

「夢見る少女って訳でもねえだろうに」

「失礼ね。女の子はいつでも夢に生きてるのよ」

「現実を見ろよ」

夢じゃ飯は食えねえ。

夢を膨らませんのを悪いとは言わねえが、現実との折り合いをつけねえとな。

槍持ちと剣を持った銀騎士に足止めを喰らったが長い階段を登りきり、扉の前に辿り

着いたが内側から開かねえと駄目だだな。

左側の塔から城の中へと入れたが、中は暗く床は泥のようなものがぶちまけられている。

「汚ねえな」

「確かアンリの話だとエルドリッチは、蕩けた汚泥になったって話だよな？」

「この泥がそうだって？だとしたら本体はあの奥か」

正門とは反対側に位置する部屋。そこからこの泥が流れてきてるみてえだしな。

「貴方がたは……と言うことはホレイスはもう……」

泥で満たされた部屋の中で汚泥と対峙するアンリの姿。

部屋の奥には、王冠で顔の半分を覆った長杖を携えた上半身に芋虫のような下半身の異形。

その下半身からは人骨のような物が突き出っていて、絶えず泥を吐き出している。

「おや？新しいお客人かな？見ての通り、来るべき深海の時代に備え、神の力を取り込むのに忙しいのだから」

「アンリ、あいつが？」

「ええ。人を喰らい遂には神を喰らい始めた怪物エルドリッチです。そしてあの子たち

の仇」

アンの言うあの子たちってのは大方の予想はできる。

「……ああ、そうか。あの玉座へと連れ戻しに来た王狩りか！もう嫌だ！生きたまま焼かれ！気を失うことも許されず！贄となるのはもう！」

突然の叫びと共に戦闘態勢に入った。

《Aldrich, Devourer of Gods》HPバーは4本

神喰らいのエルドリッチ

杖を弓に見立て金の矢を番え、天井に向け放ったかと思えば列を為してこっちに降ってきた。

「比喩で矢の雨が降るとは言うが、ホントに降らるか普通!？」

「文句を言う前に走れ！」

キリトの号令と共に散開。

降り注ぐ矢の雨の範囲外へと逃げれたと思ったが――

「追尾!?!しかも俺かよ！」

ヘイトが向いている人間をホームミングするように緩やかな弧を描いて曲がり追尾してくる。

「シンン！チャフか何かねえか!？」

「ここはGGOじゃないし、熱源探知でもないんだから必要ないでしょ！」  
ならどうやって追い回してくんだ！

エルドリッチが長杖を降れば、回避先を潰すように蒼白い槍が飛んでくる。  
魔法使いタイプのボスか！

「俺ばつか狙うんじゃねえ！恨みでもあんのか！」

「お前タンクなんだから！逃げ回るな！」

「無茶言うんじねえ！ならせめて魔力カット率の高い盾でも持つてこい！」

「それこそ無茶だ！」

なら無茶振りすんじやねえ！俺の専門は物理攻撃だけだ！

それに俺に攻撃が集中してんなら、最低限のタンクとしての役割は果たしてんだろ。

長杖から生えた鎌のような刃での攻撃や弾幕を凌いで着実にHPを削り、ようやく4本あつたHPをゼロにできた。

……終始俺を狙つてたのは腑に落ちないけどな！

エルドリッチの体がポリゴンとなって散るかと思いきや、また煙のように俺たちの後方、部屋の入り口の方へと流れていく。

後ろを振り返れば、法王騎士装備に身を包んだ灰。

キリトの制止の声を振り切り、大上段で《ダウンケルゼーレ》を振り下ろせば左手に

持った板のような盾で防がれる。

兜の覗き穴スリットから見える金色の瞳を捉え、それまで見て見ぬ振りをしていた予感が真実へと変わる。

「何故、とは聴かねえ。だがー」

手首を返し、塚頭で兜を弾き飛ばす。

キリトたちが息を飲む声が聞こえるが、俺の眼は目の前の存在を捉えて離さない。

「俺の左腕を返してもらおうぞ……魔性菩薩！」

「……あらあら、種明かしは最後に行おうと思っていたのですが、このような半端な場所で見抜かれてしまうとは……やはり、貴方の腕を依代としたのは間違いだったのやもしれませんね」

「生きていた？……違うな。バックアップデータを俺の左腕を核に再構成でもしたか」

「半分外れです。灰と呼ばれるNPCに私のデータを組み込み、成長した頃合いを見計

らい取り込む。そうすることで以前とまではいかずとも、私の体を取り戻すのは十分に可能。ですがー」

鎧が弾け、見慣れたシスター服へと変わる。

「貴方の腕を組み込んだのは間違いでした。私の意思を跳ね除け貴方を襲うなど、誰が考え至りましようや。引き千切られたデータ片とは言え貴方の一部。やはり、自らのあるべき場所に帰ろうとしたのか、貴方の体を奪い貴方に成り代わろうとしたのか」

コロコロと鈴を転がすような笑み。

そして右手は腹、よりやや下に。

「どちらにせよ、これは私と貴方の子のようなもの。可愛がつて下さいまし」

取り出された炎は徐々に人形ひとがたを為し、炎が散ればそこにいるのはSAOで俺が装備していた不死隊装備に身を包んだ灰。

右手には大剣、左手には短剣。

そして魔女の帽子を思わせる鉄兜は、相手に不吉さを感じさせる。

「既に最低限の目的は達せられました。少し気になる殿方おんがたが居られるので、貴方とはここで暫しのお別れです」

「行かせるとでもーッ！」

飛び出しかけた俺の眼前に炎を纏った大剣が遮り、その下から俺の首を短剣が狙う。

テメエの戦い方は俺のソレだ。誰よりも理解してんだよ！

剣撃の音が泥にまみれた部屋に響き渡り、剣圧で泥が吹き飛ぶ。

「アルト！」

「手え出すな！こいつは……こいつらは俺の敵だ！」

誰にも手出しはさせねえ！

「それでは皆々様方、お次は此処ではない何処かでお逢い致しましょう？」

灰を蹴り飛ばし魔性菩薩に向けて大剣を振るうが、刃はその体をすり抜ける。

「今の私は言ってしまうば、水面みなもに写った月のようなものです。此処に居て此処に居ないのです」

その言葉を最後に陽炎のように揺めいて姿を消した。

灰も煙のように消えてしまう。

「クソ……」

ボスを倒した達成感は無く、胸を焼く憎悪が俺の中で燻っていた。



## 第10火：双王子

今日のメンバーは俺、アルト、クラインの3人。

昨日の1件以降、口数が少なくなったアルトが不安だけど。

気を取り直してイルシールから地下牢を通り、次の《薪の王》が居るらしい【罪の都】へ。

というのも、イルシールの厨房でうたた寝をしていたジークバルトの話だと《薪の王》の1人がそこに居るらしい。

地下牢はいつぞやの動く死体やその腹から出てくるヒルの集合体にSAN値を削られながら、下を目指した。

アイテムを取った瞬間に叫ぶ死体に思わず悲鳴をあげてしまい、アルトに失笑されたのは蛇足だよな。

途中で牢の中に閉じ込められていたジークバルトと会ったけどここからじゃ、助け出せないから後回しに。HPの最大値を減少させてくる獄史に苦しめながらも地下牢の篝火へのショートカットを開通させ、罪の都へと辿り着き一息着いた。

途中にあった座禅を組んだ像が気になったけど。

篝火への道の途中で岩の体をした火の灯った燈籠とうろうのような槍を持ったガーゴイルに襲われた。

翼で防御を固めダメージも碌に通らず、攻めあぐねたけどアルトの一撃で大きくバランスを崩して袋叩きにした。

罪の都を探索し、頭が人の手をした赤ちゃんに会ったり、貞〇のように髪の毛の長い無数の腕を生やしたナニカと戦ったりして、無事ジークバルトを牢屋から救い出すことに成功。

そしていよいよ《薪の王》と対面したんだけど、対話はおろか話すら聞いてもらえず戦闘へ。

《Y h o r m   t h e   G i a n t》

巨人のヨーム、で良いのかな？HPバーは6本もある化け物でこっちの攻撃はミリ単位でしか削れなかった。

けど加勢に来たジークバルトの嵐を打ち出す剣技だけは別で、一撃でHPバー一本の半分を削った。

ジークバルトにヘイトが向かないよう全員で立ち回り、攻撃されそうになったら、アルトが小脇に抱えて走り回った。

戦うこと30分？1時間は経ってないはず。

ようやく巨木と見間違えるほどの巨体が倒れた。

ジークバルトの話では昔交わした約束を果たしたのだとか。

約束の内容までは話してくれなかったけど、民に請われ《薪の王》となったヨームが玉座から離れ、ジークバルトが約束を果たしに来た。

もし自分が玉座から逃げたら殺して欲しいってことなんだと思う。そのために自分を殺せる武器を友に託した。

俺だったらどうだろう？ 剣を向ける覚悟は出来るだろうか？

火が陰ればこの世界は闇に包まれる。かと言って《火継ぎ》が行われても今のようない悲劇が起こる。

火を消すか否か。

どちらにもハッピーエンドは無いとアルトは言っていた。

突然足元が光り輝いたかと思えば、俺たちはロスリツクのエンマのいた広間へと転移していた。

誰かに襲われたのか血まみれで倒れ、そこかしこに火の手が上がってる。

エンマは王子に火を継いで欲しい事を言っていたけど、その王子は火継ぎを拒否していたんじゃないか？

突然扉が閉まったかと思えば、扉の上にあるステンドグラスに暗い穴が現れ、そこか

ら艶かしい動きでナニカが床へと降り立つ。

《Dancer of the Boreal Valley》

冷たい谷の踊り子

まさかのボス2連戦。

こつちも消耗していて、苦戦を強いられたけどなんとか撃破。

後ろに回ったクラインが踊り子の尻に釘付けになっていたところを、アルトが蹴り飛ばしたのは余談だ。

梯子のギミックを作動させ、上へと登れば死体が安置された安置所のような部屋に繋がっていた。

その部屋にいた騎士は高壁にいた騎士よりもHPが多く、バフに回復もする魔術師もいたけどセオリー通り、騎士をアルトが請け負いその間に魔術師を倒す。

そうしているうちに外に出れば太陽が黒く変色し、空も絵の具を溢したように紅く染まっていた。

「これって……」

「驚くことでもねえよ、いよいよ火が消えかけてるってこつたる」

そんなことを口にするアルトの横顔は何の色も写さず、能面を張り付けたように無表情のまま。

アルトが魔性菩薩と呼んだシスターが生きていた。

いや、データだから生きていたって表現はおかしいけどアルトにとつては不倶戴天の敵。

アルトの話ではネットワーク全体に広がったデータ群を消し去った訳じゃなく、その核になっていた《カーディナル》とあのシスターだけを消し飛ばしたらしい。

そうすることで残されたデータ群も不要なものとして、いずれ人の手によって削除される筈だった。

その削除される筈だったデータ群を集積することで思考データを復元し、失った体を取り戻すために今回の新エリア実装に伴い配置されたNPCの灰に自分と何処かで回収していたアルトの左腕を組み込んだ。

灰がフィールドエネミーやボスを倒すことでデータを吸収し、そのデータを取り込んでついに体を取り戻すことに成功した、と言うのがアルトの予想。

何故そんな回りくどい事をしたのかは解らず、『奴が言うところの戯れだろ』と言うのがアルトの言。

そして思い出すのは炎を纏ったアルトの姿。

もし……いや、アルトは間違いなくアイツと戦い、己の命と引き換えにしても引導を渡そうとするだろう。

気になる殿方がいるって言ってたよな。

殿方って言うんだから男に間違いないだろうけど……

「キリの字よお」

「ん？どうしたクライン」

「アルトの奴どうかしたのか？蹴られた時もいつもみてえな手加減した感じじゃなかったしよ？」

「……ボス戦だったからだろ」

「おいおい、誤魔化すのは無しだぜキリの字。俺たちや仲間だろ？ならよー」

「ゴチャゴチャうるせえ。遅れんなら置いてくからな」

2頭のドラゴンが守る城を抜け、離れに繋がっている大橋に辿り着くと岩のような鎧を着た敵が立ち塞がっていた。

《Dragon Slayer Armour》

竜殺しの鎧？HPバーは5本もある。

稲妻を纏った大斧と円形の大盾。がっしりとした体格と鎧も相まってかなりの威圧感を放ってる。

見た目からもかなりのパワーファイターだと予想が出来る。

大盾を構えゆつくりとした足取りでこちらに迫ってくる様は、まるで壁が迫ってくる

ような錯覚を覚える。

「回り込め！一カ所に固まんな！」

真つ正面から挑んでも勝ち目は薄い。

それにあの大斧だ。まとめて凧ぎ払われる可能性もある。それで橋の下なんかにとされたら目も当てられない。

重量感を感じさせない跳躍からの大斧の振り落とし、振り返り様に大盾の叩き付け、大斧を掲げ落雷と共に振り下ろし。

こっちの攻撃をもつとせず、攻撃を振り込んでくる。

特殊攻撃は少なく、純粹に強いタイプだ。

戦闘開始から1時間半かけ、ようやく最後の1本までHPを削ったところで大斧を両手で構えた。

「戦闘パターンが変わるぞ！全員集中！」

今までの鈍重な動きからは想像できない速度でアルトに肉薄すると、床を一時的な鞘に見立て振り抜いた。

床の摩擦抵抗がなくなると同時に視認するのが難しいほどの速度で振り抜かれた大斧は、咄嗟に構えた大剣を盾にしたアルトを軽々と吹き飛ばす。

吹き飛ばされたアルトは橋の中央に置かれた噴水の縁に叩き付けられ、その手から大

剣が弾き飛ばされ噴水の反対側に突き刺さる。

エルドリツチの時もそうだ。アルトを集中的に狙ってくる。

確かにタンクとしてmobのヘイトを稼ぎやすいスキルを習得してるけど、ここまで集中的に狙われることはなかった。

やっぱりあのシスターが手を加えた？何のために？

「ボサつとしてんじやねえ！」

「あ、ああ、悪い！」

振り抜かれた大斧の柄を掴み、その刃が体に触れるギリギリで防いでいた。

それでも徐々に押し込まれてる。

クラインと共に後ろから切り裂き、よろめいた所をアルトの蹴りが入り、たたらを踏みながら橋の手摺へと退いた瞬間、重さに耐えられなかったのか橋の一部が崩落、下へと落ちていった。

苦戦した割りには呆気ない終わりに3人で暫く呆然としてた。

「邪魔だ！退け雑魚共！」



大書庫にいる頭を蠟で固めた敵を蹴散らしながら上へと向かう。本棚に近づけば蒼白い手が生え、見たことの無いゲージが貯まっていく。

アルトの話ではゲージが貯まると即死するとか。

と言うのもS A Oで似た攻撃をしてきた敵がいたらしい。

ゲージが減少して消えるまで待機して、それから進むを繰り返しているせいで、攻略スピードはお世辞にも早いとは言えない。

「……………」

「アルの字、どうかしたか？左腕の調子でも悪いのか？」

「悪いもなにも、感覚が鈍いのが普通だとしても？」

「あ、いや、そりや……………」

「…………悪い。クラインに当たったって仕方ねえのにな」

やっぱリストレスは溜まるよな。

左腕の事、シスターの事、そして灰の事。

どうすればアルトの左腕は元に戻るのか。灰を倒すだけじゃ元に戻らないのは分かっている。シスターと決着を着けるなら、万全でなければ戦う以前の問題だ。

「…………お前らに言っただけねえ事なんだが、灰が近くにしていると左腕が熱を持つ。最初の頃は気のせいで済ませれる程度だったんだが、最近は燻つてると言うか少しずつ燃えてる感

じだ」

まるで骨まで焼かれてるみてえだ、と左腕を擦る。

熱量に比例して灰も強くなってる、ってことか。

確かに灰と戦つてるところを見てるだけでも、強くなつていつてるのは分かっていたことだ。

あれ以上強くなるなら、戦つて勝つのは簡単な事じゃない。

それでも戦わなきゃならない。

魔性菩薩が関係しているからじゃない。復讐でも私怨でもない。

ただ奪われたものを取り戻す。それだけだ。

長い階段を登り3人の騎士が守っていた部屋の中に入れば、部屋中が傷だらけで見るからに高そうな調度品も無惨に散乱してる。

最奥は部屋を見下ろすように黒いローブで頭まですっぽりと覆った人物が座ってる。

## 《Lothric, Younger Prince》

## 王子ロスリック

「おや、王狩り……ではないようだ。人ならざる妖精が、このロスリックに何用かな？」  
「アンタは火継ぎを拒否した。理由を聞かせてもらっても……ああああ!!めんどくせえ  
！火継ぎを拒否した理由を聞かせろ」

無理して敬語使おうとするから……。

「このロスリックで密かに行われていた業を知っておいでかな？」

「人工的に《薪の王》を作り出そうってやつだろ。簡単に言っちゃえば人間の品種改良だ」

「そう。悍ましい業の果てがこの私。ただ贄となるために生を受け、このような枯れ木の体で生まれた。世界を繋ぐ？私には無関係だ。そのように生まれたが故にそうなるべきだと？」

「知らねえよ。だがテメエの身勝手で必要のねえ血が流れたのも事実だろ。仮にも王ならそれらしく振る舞ったらどうだ」

「……そうか、お前たちも世界の贄になれと言うか」

その言葉と共にロスリックの前に現れたのは、王冠で目元を覆った膝歩きをする騎士。

「ここは人喰いの城。何人たりとも生きて戻れないと知れ。たとえそれが妖精であったとしても」

《Lorian, Younger Prince》

王子ローリアン

……そうか。エンマは王子たちって言ってたよな。

ロスリックとローリアン。

火継ぎを拒否したロスリックとそのロスリックを守るローリアンを同時に相手にしななきゃならないのか。

「お前たちも休むと良い。世界の終わりは間もなく訪れる」

ローリアンの体が光に包まれたかと思えば、俺たちの目の前に現れその右手に持った剣を振るってくる。

振るわれた剣をクラインが受け止め、その隙に俺とアルトが斬り掛かるけどまたローリアンの姿が消え、3人まとめて後ろから風ぎ払われた。

「ロスリックがローリアンを援護してるのか！」

「おいおい！どーすんだよ！近接職じゃローブの方に行けねえぞ！」

「……心配いらねえよ。ここにいるのは俺らだけじゃねえ」

アルトの視線は部屋の入り口に向けられ、そこには身体中を燻らせた灰が佇んでい

た。

「諸刃の刃だが、敵の敵は味方つてな。互いに削り合わせて漁夫の利だ」

美味しいところを一人占めならぬ三人占めか。

「くだらねえ事考えてんじゃねえぞ」

「言い掛かりだ！」

何で分かるんだよ！

それからローリアンのヘイトを灰に向けるように立ち回り、時には灰が倒されないよう割って入る。

だけど灰の戦い方はアルトのソレ。

振るわれた剣を悉く左手の短剣で弾き、体勢を崩したところを右手の大剣で斬り裂く。

両手の剣だけでなく蹴りも混ぜた戦い方は正にソレ。

「……………」

苦虫を噛んだよう表情で事のなり行きを見守るアルト。

今にも飛び出しそうな体を理性で抑え込んでるんだろう。

その証拠に力を入れすぎて大剣の切っ先が震えてる。

「……………ああ、兄上。今お側に」

力尽き倒れたローリアンの傍らに転移したロスリックが耳元で何かを囁けば、剣に炎が灯り全損したHPがフル回復した。

再び膝立ちになったローリアンの首に腕を回してロスリックが背負われてる。

HPはそれぞれ独立して2本ずつ。

ローリアンの攻撃の際をロスリックの魔法が潰す。

離れた場所に転移したかと思えば、ローリアンの剣にロスリックの魔力が集まり巨大な剣として振り下ろされる。

ーエクス……カリバー！

毒電波が……！

攻撃範囲は前一直線だけだし、前動作も分かりやすくて結構長めだったから、簡単に回り込めてローリアンのHPを削り切ることができた。

倒れた衝撃でロスリックが床に投げ出されたけど、すぐにローリアンに覆い被さって何かを呟けば、1本だけだけどHPが回復する。

「チッ！ロスリックを先に叩かねえと駄目か！」

ローリアンの後ろに回り込むのは簡単じゃない。

少しでも回り込もうとする動きを見せれば転移で逃げられ、転移が間に合わないときはローリアンの剣が周囲を風ぎ払う。

ローリアンの剣技、ロスリックの魔法。

互いの短所を補う戦い方は、そのまま強さに繋がってる。

それでも攻略の糸口は見えた。

向こうのコンビネーション、俺たちの連携。

どっちが上か白黒つけようか。

「灰よ、妖精たちよ、心しておくがよい。貴公らもまた、呪いに囚われているのだと……」  
アルトと灰は暫く睨み合ってたけど用がないのか、ロスリックを倒したことで現れた  
篝火で何処かに転移した。

思い出すのは、灰に取り込まれていくロスリックが遺した言葉。そして戦闘中にロス  
リックが灰に向けて放った『薪の調達者』という言葉。

薪の調達者と《薪の王》。

灰に吸収された《薪の王》。

《薪の王》は火継ぎをした王の事なんだよな？

ソレを取り込むってことは灰が《薪の王》になるってことなのか？それとも魔性菩薩の糧になるのか。

分からないことが増えたな。



## 第11火：古竜の頂

行き詰まった。

ロスリックを倒し、ロスリック城を探索してみたけど先に続く道はなく、最後の《薪の王》への手掛かりもない。

それに、ここまで進んでいるのは俺たちだけで、アルゴの情報網もアテになりそうもない。

「アルトも考えてくれよ」

「ロスリック城を全部探した訳じゃねえだろ」

「いや、行ける場所は全部行つたろ？」

「踊り子と戦つて降りた梯子を上つた脇に道があつたらうが」

《Oceiros, the Consumed King》

「邪魔だ！犬っころー！」

アルトの咆哮と共に放たれた一閃は容易にレッドゾーンまで減っていたHPを削り、その命を刈り取った。

なんの感慨も感じさせず大剣を背に戻し、奥へと進んでいくアルトの後を追った。奥には座禅を組んだ竜人のような像。

「これって……」

「地下牢の奴と一緒にだな。何でここにあるかは知らねえが、何かのヒントか？」

ヒント……地下牢とこの銅像との関係性……？

オスロエスは竜の力とか言ってたような……。

「あそこで銅像と同じポーズをしろってことか？」

確かに遠くに巨大な竜が山にもたれ掛かっていたから、多分あそこには探索できるエリアがあるかもしれない。

「あっち行ったりこっち行ったり、振り回されてんなあ」

「少ないヒントから自分の力で新しいエリアを発見する。RPGの醍醐味だろ？」

「移動するのが面倒なのは変わらねえけどな」

「物臭乙」

「いつペン死んでみるか？新しい発見があるかもしれないねえぞ？」

やめて！乱暴しないで！

「死に晒せ！」

「ーってことがあつたんだ」

「キリトも兄ちゃんも、二人だけでボスに挑むとかズルいなあ！」

「3時間くらい掛かったけどな」

ヒーラーがいないから絶えず動き回り、隙らしい隙を見つけてからそこを突く。

それを繰り返すこと数十回、ようやく倒れたんだっけ？

やっぱボスに二人で挑むのは無謀の一言に尽きた。

それでも倒せたのは互いの役割をハッキリと理解し、互いをフォローし合い最高効率で動いていたからだ。

もちろんパーティが増えればそれだけ楽ができるけど、ヘイトが分散して暴れまわる可能性もある。

絶えずヘイトを集中させ、こつちに攻撃が向いたときも割って入ってくれるタンクがいるだけで随分違う。

でも受け流した攻撃が俺に飛んでくるのはどういう見なのか、きっちり問い詰めた  
い。

イルシールの地下牢に転移して右へ。

あらかじめ解放していたショートカットの扉を潜り、エレベーターを降りる。

ショートカットのお陰で地下牢の中を歩き回らなくて良いのはありがたいよな。

「……やっぱりな。ロスリック騎士と同じ鎧。コイツらはここからどつかに行こうとして、ここで力尽きた。そう見るのが自然だな」

座禅を組んだ竜人の像。その周りには半ば朽ちかけた鎧の数々。

その鎧の造りからロスリック騎士と同じだと判断したアルトは竜人の像が見据える山へと視線を向ける。

そこには力尽きた竜がもたれ掛かっている山脈。

けどそこへと続く道はないし空も飛べない。

ロスリック城から不死街へと連れていってくれたデーモンを呼ぶ小環旗も使えない。

「あのさ、この像と同じポーズを試してみたら？」

「ハナからそのつもりでここに来たんだ。話聞いてたか？」

「ボス戦のところだけ！」

アルトが頭を抱えてるけど、それを無視して像と同じように座禅を組む。

これでなにもなかったら頭が痛いどころじゃないな。  
そう考えてる内に意識が遠のいて行く感覚、そして竜の声が聞こえた気がした。

肌を撫でる風邪の感触に意識が覚醒していく。

目を開けばそこは雲を眼下に見下ろす山の上。

岩場の向こうには遺跡のような人工物も見える。

慌ててマップを開いて確認すれば、「古竜の頂」の文字。

「多分ここが最後の《薪の王》がいるエリア……」

《薪の王》は3人倒していて玉座は5つ。

1つは既に埋まっていたから残っているのは最後の1人になるはず。

《火継ぎ》について話を聞くはずなのに倒してどうするんだ、と言うツツコミは無視する。

「アルト？ユウキ？」

声が聞こえない2人に声を掛けながら後ろを振り向くけど誰もいない。

……え？もしかして俺だけ？

## 第12火：無名の王

急いで篝火を灯し、アルトたちにメツセージを飛ばす。

頭巾のようなものを被った小柄なエネミーに追われながら、だ。

歪曲した刃を持つショーテルや両手に短剣を持った奴が殆どだけど、口から火球を飛ばしてくるし気が抜けない。

「いきなり消えっから何事かと思っただぞ」

「目の前からパッと消えたよね」

灯した篝火に転送されてきたアルトとユウキ。

二人とも柄に手を掛けて臨戦態勢のまま軽い口調。

頼もしいのはいいけど、俺を先頭にしないでくれ。

俺はタンクじゃない。

俺を先頭にしたまま石造りの門を潜り開けた場所に出た。

嫌いな予感がする。

影が差し、上を見上げれば黒い影が地面へと落下してきた。

砂煙が晴ればそこには丸太を思わせる二本足に巨大な皮膜を備えた一對の翼。

《Ancient Wyvern》

いにしえ

古の飛竜。HPバーは……7本!?

首をもたげ、空を仰いだ口元には火が揺らめいているのが見える。

「ブレス攻撃来るぞー!」

口から放たれた火炎は地面を焼きながら放射状に広がる。

炎が過ぎ去ったあとには残り火が揺めき、熱せられた空気の波が今でも肌を灼いている。

「バカ正面から挑むのは無理だな!」

「この手の敵にはなにかしらギミックがある筈だ!」

「そんなの見当たらないよ!」

飛び上がり巨大な爪による踏みつけを避け、辺りを見渡すが

半ば倒壊しかけた遺跡だけで、それらしいものは見当たらない。

「クソ!」

アルトが噛み付きをスライディングで躲し、大剣を下から顎目掛け振り上げる。

頭をかち上げられ大きく仰け反っているが、与えられたダメージは微々たるもの。このメンバーで一番火力の高いアルトですらその程度なら俺やユウキだとマトモにダメージを与えられない。

このままじゃジリ貧だ。なにかー

その時、飛竜の頭上へと影が落ちその手に握った剣を飛竜の頭へ深々と突き刺した。ほぼフルに近いHPがその一撃で消し飛び、砕け散ったポリゴンが影へと吸い込まれていく。

「デメエ……」

地を這うような声。

誰の、なんて確認しなくても判る。

呼び止める間も無く駆け出したアルトの大剣が影ー灰を捉えることなく宙を薙いだ。

外した訳じゃない。灰の姿が忽然と消えてしまった。

「チツ……」

アルトは苛立ちを隠そうともせず、舌打ちと共に大剣を背に戻した。

「兄ちゃん……」

「お前らが気にすることじゃねえ、さっさと進むぞ」

俺たちが気にすることじゃないって……。

いや、きつと強がりだ。

いつもはふざけた発言や戦闘狂の一面が強いけど、アイツは誰よりも強くあろうとし



てる。

今回だって自分が招いた結果だからと極力巻き込まないようにしているのも薄々勘づいてる。

けどさー

「それじゃダメなんだ」

いつだってお前の後ろにいるんだ。その背中を守れないほど俺たちは弱くない。

頼ってくれとも信用してくれとも言わない。

ただ俺たちがいることは忘れないで欲しい。

「お前が行けこの野郎!!」

「またやつてる……」

《Havel The Rock》と《Havel The Warrior》

岩のような大盾と重鎧に身を包み、多少の被弾は無視して牙を思わせる重量武器を振り回してくる強敵だ。

防御ごと叩き潰してくる剛撃に岩を体に纏わせて防御を固める魔法。移動速度の遅

さを火力と防御力でカバーする典型的な脳筋スタイル。

ギリギリで回避しようにも攻撃の余波で足止めされるし、攻撃が通つても微々たるもの。

幸運なのは攻撃が大振りで単調なことか。

それでも、ゆっくりと歩く姿は壁が迫ってくるようだ。

魔法の効果が切れている内に最初の一人がヘイトを集めて、残ったメンバーが攻撃する作戦になったが俺とアルトが一番槍役を押し付け合っていた。

理由は簡単。

二体のハベルを仕留めるまで攻撃を受け続けなきゃならない。なら回避主体の俺よりも防御の上手いアルトの方が向いてるだけど左手が使えない以上、攻撃を受け止めれるのは片方だけ。

「言い合つてないで、兄ちゃんときりつで片方ずつ受ければいいでしょ！」

「……………ああ、成る程」

「ハア…………」

それもそうだ。

岩を纏つた体に剣を弾かれながらユウキが攻撃できる隙を作っていく。

纏つた岩が弾け飛んだ隙を見逃さず、ユウキは目にも止まらない連撃を浴びせる。

繰り返すこと十数回、漸く二体のハベルは倒れた。

「つ、疲れた……」

「貧弱黒助」

「表出ろこの野郎」

「もういいから」

大小の蛇人を蹴散らしながら、エリアを歩き回るけどボスらしいエネミーもそれらしい場所も見当たらない。

「どこにもいねえな」

「最後の《薪の王》はここのはずなんだけどな」

現段階で探索できるエリアはここだけ。それにmobも手強い奴ばかりだから、当然ボスも配置されているはず。

その時目に入ったのは巨大な鐘。

そしてその前に佇む灰の姿。

まさかー

飛び出したアルトを止めようとしたときにはもう遅かった。灰がなにかを操作した瞬間、耳を塞ぎたくなるほどの轟音で鐘が鳴り響く。

とたんに快晴だった空が雲に覆われ、叩き付けるような雨と共に風が吹きつける。

俺たちが怯んでる間にあろうことか灰は装置の前に集まった雲の上に飛び乗り、そのまま巨大な門を潜っていった。

「灰が進んだってことはー」

「間違いなく《薪の王》がいる。あの野郎、俺たちを利用して無傷でボス戦に行きやがった」

ロスリックが言っていた《薪の調達者》。

つまり、《薪の王》を狩る者。

何故《薪の王》を狩る必要があるのか、問い質さないといけないな。

灰の後に続き、俺たちも雲の上に飛び乗り門を潜った。

「ほう……王狩りだけでなく、妖精までもが私の命を求めるか」

巨大な鳥にもドラゴンにも見えるモンスターに跨がった大男。そしてその手に握られた大剣の柄を伸ばしたような雷を纏った剣槍。

《King of the Storm》嵐の王

その圧倒的な存在感に思わず後ずさってしまふ。

「あんたも《薪の王》か？」

「かつてそう呼ばれたこともあるが、今はただの無名にすぎぬ。妖精よ、そのような問いを投げなんとする？」

「《火継ぎ》を拒否しアンタは逃げた。その理由を聞かせろ」

後ずさった俺たちとは違い、物怖じしないアルトの胆力には流石に驚かされる。

……違う。アルトが見てるのは《薪の王》じゃなく、その剣槍に串刺しにされた灰だ。「理由、か。私は《火継ぎ》を拒否したわけではない。古より世界を支配していた竜たちの時代が終わりを迎えたように神々の時代もまた終わり行くものだ」

「つまりアンタはその神々の時代とやらも終わらせて、新しい時代の幕を切ろうとしたってわけだ」

「時代は移ろうもの、不変などありはしない……我が父はそれを認められぬのだろうか」  
父？

「妖精よ、私に《火継ぎ》を強いるか？それともすべてを忘れこの世界より去るか、選ぶとよ」

「答えになつてねえんだよ。《火継ぎ》を拒否したのは他の理由があんじゃねえのか？新しい時代のために《火継ぎ》を拒否したってんなら、アンタは最初からそうした筈だ。に

も拘らず、呼び起こされてから《火継ぎ》を拒否した。辻褄が合わねえよな？」

「……聡明だな、暗き孔を穿つ妖精よ。これがなにか知っているか？」

劍槍を振るい串刺しにされたままだった灰が俺たちの足元へと転がってくる。まだHPがゼロになっていないが事切れたかのようにピクリともしない。

「火の無い灰と呼ばれているが、その本質は王狩り。かつての《薪の王》を狩って回り、王から得たソウルで自らを《薪の王》足らしめんとするこの世界のシステムだ」

《火継ぎ》が行われなかった際の保険。

かつて不死の呪いに蝕まれた人間を利用して《はじまりの火》を保っていたが、その延命も雀の涙程度。ソウルと呼ばれるなにかを多く内包した人物を焚べる方が、より長く《はじまりの火》を保つことができた。

だからこそ《薪の王》と祭り上げたが火は陰るもの、《火継ぎ》を行う歴史の中で拒否する者もいた。

火を絶やさないうための補助機構、それが灰。

《薪の王》のソウルを喰らい火を継ぐに十分なソウルを蓄えたところで《はじまりの火》に焚べる。

「惨い……」

「犠牲の上でこそ命は成り立つ。だが無理な延命は命そのものを歪めかねえ」

「その通り、貴公らも見た筈だ。地は死に絶え用を成さず、王たちの故郷がロスリックへと流れ着いている様を」

リアルであれば地殻変動どころの騒ぎじゃない。まるで地球そのものが縮んだかのような、そんな有り様だ。

「私も最初は王狩りを滞りなく進めるためと思っていたが、それは違った。この世界に不要なものを省き、より少ないソウルでこの世界を維持するためだった」

ゴムが伸びたまま縮まなくなるように、剣を研いで磨耗していくように、世界もまた消耗していく。

既に《はじまりの火》を継ぐだけじゃ世界を維持できなくなっている。

「私は我が父を裏切り、名を奪われたが火を継ぐに十分足るソウルを持っていた。謀略に嵌まり火を継いだーいや、継がされたが、私は友と共にこの世界の終わりを見届けるつもりだ。一度ならず二度までも父を裏切ることになろうとはな。父の騎士を手に掛けた以上、対立は免れぬが」

「それで？世界が滅ぶにせよ滅ばないにせよ、テメエは終わりだ。灰に殺されるか、その父とやらに殺されるか、世界と共に死ぬか」

「辛辣だな、暗き孔の妖精よ」

「つたりめえだ。テメエは戦うことを選ばなかった。その力があるにも拘らず、静観す

る道を選んだ。自分の父親に嵌められた？だからなんだ？話だ。要するにテメエは逃げたんだよ。テメエ自身からも父親からもな」

「ほう？」

ヤバイって、そんな言い方したらー

「何もかもから目を逸らして生きるのは簡単だ。だが力には責任が伴う。今のテメエの在り方は俺が一番嫌ってるもんだ。テメエ自身からも目を逸らして逃げる奴を見ると虫酸が走る」

「私が父からも私自身からも逃げているか。言い得て妙ではあるが、それだけの大口を叩くのだ。それに伴う覚悟はあろうな」

アルトのアホオ！

竜が飛翔、それと同時に嵐の王の左手に雷が発生し槍に見立てて投擲。

散開して回避したが、体勢を立て直す前にアルトの後ろに竜が着地し、劍槍を降り下ろす。

振り向き様に大剣を降りあげて劍槍を弾くが、体が開いたところに竜のブレスを喰らい大きく吹き飛ばされる。

幸い即死は免れてるけど、一撃で六割近くが持つていかれてる。すぐさま立ち上がり横風ぎで払うが竜が跳躍、真下にブレスを吐き出す。



「調子に、乗んな！」

吐き出された炎を切り払いその体勢のままのアルトを踏み台にユウキと共に跳躍、嵐の王へと肉薄する。

頭に三条の剣閃が走り、怯んだ竜が落下。無防備の竜の頭に断頭台の如くアルトの大剣が降り下ろされた。

「ぬう」

「まずは足をもらおうぞ！」

降り下ろしたまま一步踏み出し回転、遠心力を乗せた横風ぎが炸裂し竜のHPを削りきった。

伏した竜の頭を一撫でして剣槍を突き刺した。

途端に吹き荒れる嵐。

《Nameless King》

HPバーは五本。

「ゆくぞ妖精たち。我が槍、打ち破ってみせよ」

死闘はまだ始まったばかりだ。

「ぬうん！」

「クソツタレが！」

劍槍と大劍が火花を散らし、雷が杭のように撃ち込まれる。

一進一退。アルトの方が押し込まれてるが、徐々に無名のHPも削れてる。

雷を落とす、衝撃波を放ち、劍槍を振るう。

距離関係なく豊富な攻撃手段で立ち回り、三対一をものともしない。

アルトは絶えず間合いの内側に張り付いている。そこだと大劍も振り回しづらい間合いだけど片手が使えないハンデをもともせず、刃だけでなく柄頭による打撃も混ぜて攻撃を加えていく。

「見事。だがー」

「グッ！」

「まだ青い」

左手に持ち直した劍槍の石突きがアルトの腹に突き刺さり、そのまま放り投げられる。

「させない！」

倒れたアルトに降り下ろされた劍槍をユウキが受け止めるが、続く薙ぎ払いで吹き飛

ばされた。

「この……！」

「野郎！」

俺とアルトの前後同時攻撃は劍槍と左手に受け止められ、二人まとめて弾き飛ばされた。

「口だけ達者かと思つたが、それに見合うだけの實力はあるようだ。だがまだ未熟」  
「クソが……」

偶然か故意か三人同じ場所に倒れ、無名の王は雷を纏つた劍槍を振りかざす。

「暗き孔を穿つ妖精よ、大海を知れ」

「俺より強え奴がいることぐらい知つてるっつーの」

「ならば良し。誇つて逝くがよい」

「ああ。テメエの負けだ」

「なにーグッ！」

無名の王の背中に一条の矢が突き刺さつた。

戦う意思が残ってんのは分かったた。

あのクソアマの依り代になっていたが、アレも俺の一部だからな。

「寝坊が過ぎんじゃねえのか？ 灰」

「……………」

「黙だんまりかよ」

「貴様ら……………」

倒れたまま右手にクロスボウを構えた灰。

死んだフリをして機会を窺ってたつてところだろうな。

「お前らもいつまで寝てんだ」

「寝てないさ。ちょっと休んでただけだ」

「まだいけるよ」

全員、一撃でも貰えばその時点でアウト。

まさに真剣勝負。

「さあ行くぞ。蹂躪されるか圧殺するか、質と量の戦いつてやつだ」

正面から俺が突っ込み、後ろに隠れてキリトが続く。

剣槍の間合い寸前で二手に別れ、装填し直したクロスボウのボルトが放たれる。

「小賢しい！」

劍槍で叩き落とし左手に雷の槍を投擲する直前、ユウキがその脇をすれ違い様に切り裂く。

注意がそれた瞬間に左右からキリトと共に切り払う。

「この……舐めるなあー！」

劍槍を振り降ろせば地面を雷が迸り、ジャンプで回避したがそれは悪手。空中だと体を捻るぐらいしか回避のしようがない。

「灰ー！」

再び装填し直したクロスボウを無名に向け放つが当然の如く防がれる。勿論そうなのは承知の上。追撃を防げただけ御の字だ。

雷の槍を身を屈めてやり過ごし、続いて放たれた劍槍の突きを跳んで躲し、奴の頭をかち割る勢いで大劍を振り落とすが劍槍の柄で防がれる。

「……………見事だ。妖精たち……………そして火の無い灰よ」

無名の胸から劍の切っ先が生えていた。

後ろから灰が劍を突き刺したのだと考えなくても分かる。俺もそうするだろうしな。

「全ての《薪の王》は倒された。これで我が父の待つ《最初の火の炉》への道も開かれるだろう。……………願わくば新たな時代の幕開けになることを祈る」

無名がポリゴンとなって散り、灰に吸い込まれていく。

「灰、テメエとの決着は全部終わってからだ。テメエとはそれまでの共生だ」  
「……………」

いよいよストーリーも終盤だ。

今回の無名との戦いで得た教訓は俺たちだけでは攻略できないということ。

アルゴの情報通り、相手が少数もしくは一人の時の戦闘力は高い。それに《最初の火の炉》はラスボスがいるステージの筈だ。

ならこいつは戦力になる。

「見敵必殺なお前にしては随分、讓歩というか丸い答えだな」

「ラスボス戦でこいつは役に立つ。それだけだ」

「戦ったり共闘したり、兄ちゃんみたいだね」

ユウキ、お前今日飯抜きな。

## 第最終火：火継ぎ

いよいよ、ロスリックも大詰めか。

無名の王との激戦を制し、リアルへと帰還した。

ベッドに横になりながら左手の感触を確かめるが、以前と変わらず感覚が鈍い。

あの戦いの中で確かに感覚が戻った気がしたんだが気のせいか？短い間だけだったが、確かに以前のように動かさせた気がした。アドレナリンでそう感じたただけかもしれないが。

『戦つたり共闘したり、兄ちゃんみたいだね』

ツンデレとでも言いたいのか木綿季の奴。

確かに思考は似てるかもしれないねえけど俺はツンデレじゃねえ。

……下らねえこと考えてねえでさっさと寝よう。

「と言うわけで今回は灰も交えて最終戦に挑みたいと思います」

「何がと言うわけで、だ。状況説明は簡潔且つ手短にしろ」

「そうね。なんの説明もなくただ集まってるだけだし、いきなり最終戦に挑むなんて言われても要領を得ないわ」

「いや、メールで伝えたはずだよな!?!分かったって返信もしてただろ!?!」

「身に覚えがねえな」

祭祀場に集まった俺、キリト、シノンそして灰。

ヒーラーも欲しいとこだが、肝心のアスナは家の事情で来れねえし、リーファも部活があるとか言ってたな。クラインは仕事だし、エギルはゲームのし過ぎでカミさんにとどやされたらしい。リズとシリカは知らねえ。

玉座と言うにはあまりに悲惨な椅子に《薪の王》の生首が置かれてる風景は下手なホラーよりも恐えな。

「偉大なる《薪の王》たちよ。いまや火は陰り、王たちに玉座なし。貴方たちの火を継ぐ者へ預けたまえ」

火守女曰く灰を本当の火継ぎの王にするための儀式らしい。そうすることで祭祀場の篝火から《最初の火の炉》へと行けるんだと。

継承の儀式とやらも終わり、いよいよ《最初の火の炉》へ向かう。



「ここが《最初の火の炉》……」

「なにもねえな」

火の消えた祭祀場が出れば、宙に浮くステージとそこまで続く道。

ここから見えるのは黒く変色した太陽と膨大な量の灰、下には見覚えのある建物や大地が流れ着いている。

「あれって無名の王が言ってたー」

「幾度となく繰り返し返してきた世界の延命で不要とされた国や大地だろうさ」

そこに住む人間も恐らくは故郷と共に同じ最後を辿ったことだろう。制作者がそのNPCを作っていたら、だが。

アーチを潜れば多種多様な無数の武器が地に突き刺さり、菊に似た白い花が点々と咲いていた。

そしてその中央に鎮座する人影とその脇に立つ騎士。

「狼騎士アルトリウス……」

「久しいな、妖精たち」

「テメエ……その様はなんだ」

ぶらりと垂れ下がった左腕。

明らかに力が入っていない。

「左腕のことか……なに、深淵を祓うのに少々手こずってしまつてな。幾分不便ではあるが貴殿も同じだろう」

野郎とお揃いとか誰が喜ぶんだよ。

初めて会つた時よりも鎧はひび割れ、蒼い外套も半ばから千切れてる。

「既に我が王はなく、残つたのは火を継いだ薪の化身となつてしまつた。灰に火を継がせたくば、この化身を打ち破つてみせよ」

アルトリウスの言葉と共に立ち上がる人影。

《Soul of cinder》

直訳するなら消し炭の魂。奴の言葉を借りるなら灰の化身とでも言つたところか。

つまりこいつは今まで火を継いできた《薪の王》や火の無い灰の集合体か。

熱で歪んだ騎士鎧に捻くれた刀身の螺旋剣。

戦いの火蓋は切つて落とされた、が——

「貴殿は戦わぬのか？」

「そうしたいのは山々だがな。そうすれば必然的にアンタに背中を向けることになるだろ？」

後ろから斬り掛かるなんてことはしねえと思うが保険はあつた方がいい。それに――

「アンタとの決着も着いてねえしな」

剣を折つたことで見逃されたが、あのまま続けていたら確実に俺が負けていた。見逃されたという事実が俺のプライドを傷付けた。

「ふ……ならば隻腕同士、決着をつけようか」

「正直キャラじゃねえんだが……いざ、尋常に」

「勝負！」

大剣と大剣が火花が散らす。

吹き荒れる風よりも速く打ち合い、刀身が悲鳴をあげてぶつかり合う。

渾身の一撃を放てば技巧の連撃で打ち落とされる。

相手も万全とは言い難いが、それでも小手先の技が通用しないのは最初の一戦で骨身に染みてる。

なら正面から俺の戦い方で、俺の望む決着を着けるだけだ。

後ろに退がったかとも思えば飛び上がり、串刺しにせんと迫る。後ろに転がりながら下がり、大剣を突き刺した衝撃に舞い上がった砂煙に乗じて突きを繰り出す。

そう簡単に一撃を入れられるとは思ってないが、地面に突き刺さった剣を僅かに引き抜

き切つ先をずらすことで回避。

つんのめる寸前で踏み留まり、鋭い斬り上げを右足を軸に回転し降り下ろした剣で叩き落とす。

「随分と腕を上げたようだな」

「馬鹿言え！着いてくだけでも精一杯だつーの！」

嘘ではない。隻腕になり、万全とは言い難い状態でもこいつの剣に一切の曇りが無い。

「ところでお前の狼はどうした!?!」

「シフならば我が友が建てた私の墓を守っている」

こいつ生きて帰るつもりがねえのか！

「元よりこの命、我が王へと捧げたもの。王と共に散らせるのならば！この上ない僥倖だー！」

「アホが！人の為と書いて偽だ！テメエ自身を納得させるための嘘でしかねえ！」

「たとえ欺瞞だとしても私が抱く忠誠心は本物だ！」

お互いに距離を取り、霊廟の時のように自身が信を置く技で決着を着ける。

「これが最後か……愉しかったぞ、アルト」

「俺もだ。アルトリウス」

弾かれるように動き出し互いの剣が交差した。

「パターン変わるぞー！」

剣、槍、曲剣、杖。

螺旋剣を様々な形態に変化させ、豊富な攻撃手段で攻めてくる。

オーソドックスな剣にリーチに優れた槍、毒霧や火球にアクロバティックな動きで攻める搦め手の曲剣、魔法攻撃の杖。

「いのー！」

シノンが放った一矢は、化身が翳した左手を貫くことなく触れた瞬間に燃え尽きる。

最後のボスだけあって手強い。攻撃できる隙が少なく、様々な戦闘スタイルで翻弄してくる。

それでも倒せない訳じゃない。

隙が少ないだけで攻撃できるチャンスは必ずある。

再びシノンの矢に気を取られた瞬間に灰と共に畳み掛ける。アルトの言う通り、灰の戦闘力はかなり高い。攻撃できる隙を見極め剣や槍、槌、大剣、双剣などを器用に使い

分け、距離が空けば魔法や弓を使う。

……鞭は趣味か？

HPがゼロになり膝を突く化身。

が、体から炎を吹き出し全損したHPがフル回復する。

「冗談でしょ……」

「攻撃パターン変わるぞ！」

さつきまでのような武器が換わることはないが、剣を振るう度に撒き散らされる炎が接近を許さない。

攻撃自体は単発のものが多く、手数よりも一撃の重さを重視しているんだろう。

「オオオオオらあー！」

横から鉄塊が化身を撥ね飛ばす。

「アルト！」

「おう。待たせたな、お前ら」

「アルトリウスは？」

「あいつなら逝った」

殺したではなく逝った、か。

「んだその顔」

「別になんでもないさ」

NPCだったけど騎士とは斯くあるべしを体现した騎士だった。その在り方をアルトも認めただんだ。

「第二ラウンドか……骨が折れるな」

変身をあと二回残してます、にならなきやいいけどな。

第二形態の化身の強さは並大抵じゃなかった。

特に攻撃範囲が尋常じゃない。

大剣に分類されるだろう剣を振るい、剣の軌道をなぞるように炎が走る。剣に炎を纏わせての四連撃からの地面に突き刺しての爆発。

「調子に、乗んなー！」

剣撃を掻い潜り、必中を確信した一撃。

「ガッ……」

予備動作のない蹴りに背中から地面に倒される。そして左手に集まる雷。

あれって無名のー

間に合わない！

化身とアルトの間に割って入る影。

「お前……」

胸に雷の杭を打ち込まれた灰。即死こそしなかったが、そのまま地面に叩き付けられた。

「シノン！ 援護頼む！」

「了解！」

「テメエ何で俺を庇った！」

「……………」

「黙ってちや分からねえだろうが！」

クソ、回復魔法でも取得しときやよかった。

灰が取り出したオレンジに光る瓶を引ったくり、やつにぶっかける。

「我は汝……………汝は我……………」

灰が自分の胸を自分の左手で貫いたかと思えば、揺らめく炎のようなものを取り出した。

まさかこれは——

「借りは返した」

「アホが貸した覚えもねえよ」



取り出した炎を俺の左腕に押し付ける。

歯車が噛み合う感覚と共に左腕の感覚が甦ってきた。

「最後は任せる。それまで休んでろ」

ウインドウを開き装備を替える。

馴染んだ二振りの武器を引き抜き構えた。

「キリト、シノン。速攻で終わらせるぞ」

「アルト……お前……」

「戻ってきたわね。【双刃】が」

大剣と鉤短剣。機動性を重視した防具。

負ける気がしねえな。

振り下ろされた螺旋剣を交差させた短剣と大剣で受け止める。吹き付ける炎に怯ま

ず弾き返した。

「キリト！」

「任せろ！」

スキル：コネクト  
剣技連繫

畳み掛けられるSS。発動後の硬直時間の延長と引き換えに放たれる威力は折り紙

付きだ。

「スイッチ！」

「応さー！」

横風ぎの剣を滑り込んで躲しつつSSを放つ。

大剣から短剣、短剣から大剣へと繋げOSS《ナインライヴス》で締める。

「スイッチ！」

「任せなさい！」

動き始めを見極め、関節を射抜くことで身動きを封じる。

「決めろ！」

俺の呼び掛けに灰が応じ、かつて灰に打ち込んだ《ナインライヴス》で化身に止めを

刺す。

「オオオオ……」

消え入りそうな断末魔と共に化身が消滅する。

苦戦したがなんとか倒すことができたな。攻撃範囲広すぎるだろ。

化身を倒したことで現れた篝火に灰に肩を貸して近付く。

この火を継ぐか消すか。それは灰の判断に任せよう。

「お見事です。灰の方、そして妖精の皆様」

灰を見守っていると祭祀場にいるはずの火守女が姿を現した。今までどこにいたん

だこいつ。

「灰の方、本当によろしいのですね？」

火守女の問いかけに灰が頷くと篝火の前に跪き、篝火から炎を抜き出した

「はじまりの火が消えます。すぐに暗闇が訪れるでしょう」

火を消すのか。それが正しい気もするが――

「そして、いつかきつと暗闇に小さな火たちが現れます。王たちの継いだ残り火が」

輪郭が溶けるように暗闇に消えていく。

「灰の方、まだ私の声が、聞こえていらつしゃいますか？」

「問題なさそうだな」

「まあな、1ヶ月近く殆ど動かしてねえから不安だったが、VRの中じゃ特に問題ねえな」

右手で大剣を握り、左手で短剣を振り回す。

灰が返還した左腕。

ユイの話じゃ自意識に目覚めたAIに昇華したんじゃないか、とのこと。確かにそうじゃないとじゃないとアルトを庇うなんて行動に走る理由にならない。

でも何故VRの中で左腕を奪われたことを切っ掛けにリアルでも後遺症が残ったのかは分からないまま。

「俺復活！さあ戦るぞ！今闘るぞ！じゃねえと殺るぞ！」

「怖いわ！このバーサーカー！」

アルトが万全になったのは正直嬉しい。

でも、だからって早速戦いを吹っ掛けてくるな！

「アルト君の病気が……」

「見事に再発したわね」

「別にいいんじゃないか？ここ最近で一番楽しそうだし」

「よおうし！キリの字とアルト、どっちが勝つか賭けようぜ」

「別に止めはしないが、あとで二人にしばかれても知らないからな」

頼むからこの戦闘馬鹿を止めてくれ！

「逃げんなキリト！」

ギヤアアアア！

## 幕間

## つかの間の休息

「よう、楽しんでるか？」

「颯真か、お前こそ左腕のリハビリは順調なのか？」

「ん、多少筋肉が落ちちまったが日常生活には問題ねえさ」

A L O のアップデート、そして仇敵と旧友との再会。

なんやかんやあり左腕も元通り。

そして今日はA L O 拡張マップ、ロスリック最速クリアを祝してダイシー・カフェを貸し切つての打ち上げと相成った。S A O 組いつもの面々に朝田と木綿季を加え、騒がしい時間を過ごしている。

エギルと亮太郎の大人組は酒を飲んでおり、俺も混ざろうとしたが遠回しに止められた。何故だ。

《番外編：大人の嗜みを参照》

「そう、か。まあなんにせよ良かったよ。お前いつも無茶するからさ」

「面倒事に頭突っ込む奴に言われたくねえな」

「なんだかんだ手を貸してくれる奴がいるからな」

うっせ、と短く返す。

サツとカウンタ―席から女性陣が陣取ってるテーブル席へ視線を流してみれば、朝田も木綿季もハブられることなく溶け込めてるようだ。

ま、そんなことする奴等じゃないことは分かってはいるけどな。

「……なあ俺つてそんなに頼りないか？」

「あ？どうしたいきなり」

「お前が自分の身も顧みないで突き進んでいく背中を見るとさ、まるで自分の命なんてどうとも思っていないんじゃないかって」

「俺はその場の判断で最適解だと思う行動をしてるだけで、俺自身を軽視してるわけじゃねえよ」

「それでも刺し違えるような戦い方をしなくてもいいだろ。茅場から聞いたぞ。あの力は自分の命を削るものだって」

「……好きでやった訳じゃねえさ。ただそうでもしないと奴を殺せなかった。それだけさ」

話は終わりとばかりに強引に絶つ。

俺と価値観が違う和人だからぶつかる。

だからこそ好ましく思える。遠慮なく物言いするこいつだから。

「外道な手を使うのは論外だが、最短最速で目的を果たす為ならどんな手でも使うぞ」  
倫理も論理も関係ない。後ろ指差されようが最善を尽くすのなら躊躇う必要もない。  
これまでもそうしてきた。これからもそうだ。

「……止めても無駄なんだろう？でも今度同じようなことしたら絶対に許さないからな」  
「保証しかねるが善処しよう」

「政治家みたいなこと言うなよ」

「信用できないってか？」

「……お前、本当に後ろから刺されるぞ」

「否定しないお前も大概だからな？まあ刺されるは怖いし、俺にはまだ生きる理由がある……いや、できたからな」

「その理由ってというのは？」

「……ま、気が向いた時にな」

なんだよそれ、と口を尖らせる和人を横目に女性陣のテーブルからくすねてきたドリンクをコップに注ぐ。

「大人つてのは狡いぐらいがちょうど良いのさ」

「お前も学生じゃないか」

「思ったことを口にする年齢は過ぎたって話だ」

「どの口が言うんだよ」

チン、と互いのコップが交わる。

「これからもよろしくな相棒」

「全くすこしくし目を離せば、すぐ二人の世界に入るんだから」

「まあまあリズさん、それだけアルトさんのことを心配してたんですよ」

「本当にね。自分の命を擲つような真似はしてほしくないわ」

けどそれは叶わないことなんだろう。彼は何でもないことのように話してはいるけれど、自分の命を軽視している節がある。

大人びているのに時折見せる子供っぽい一面。

傷付くことを恐れないのに失うことを恐れている。

退かず媚びず、ただ前だけを見据え歩き続ける。

その背中を見て頼もしく思える反面、一抹の不安がある。



彼は傷付くことを恐れない。どれだけ傷付けられても歩き続ける。それはきつと呪いのようなものだ。

必要とあらば自分という存在を削ぎ落としてでも前に進み続ける。

立ちはだかるもの全てを薙ぎ倒して進み続ける。

いつから、どうしてそうするのかは分からないけれど彼にも分かっている筈だ。その道を進み続けた先にあるのはきつと——

「どうしたのよ明日奈、難しい顔しちゃって」

「……え？う、ううん。何でもないよ」

「せつかくの打ち上げなんだから、難しいことは止めにして楽しまなくちゃ損よ」  
それは分かっている。

けれど一度覚えた不安は早々に拭えない。

「兄ちゃんのことでしょう？」

「木綿季……」

ズバリと言い当てられ返す言葉を見失う。

「兄ちゃんはどうだ！つて決めたら折れるまで進む。僕が物心ついたときからそうだった。自分の考えを曲げるのも曲げられるのも嫌い」

でも、と言葉を区切り

「きつかけは……多分、僕と姉ちゃんだと思う。『叔父さん、叔母さんの分も立って歩いて』って。兄ちゃんに少しでも立ち直って欲しくて言ったんだ」

ご両親が事故に遭い、自暴自棄だったあの人を立ち直らせようと発した言葉。

木綿季はその言葉のせいで自分を省みなくなつたと思つてるんだ。

仮にそうだったとしてもー

「木綿季もお姉さんも悪くないよ」

「そうそう、馬鹿みたいに突つ走るアイツが悪いんだから」

「追い抜いてその手を引っ張つて振り回してやればいいわ」

「うん！」

あの背中に守られるだけじゃない。あの背中を守れるようになる。その為にもっと強くなるろう。

頼るだけじゃない。頼られるぐらいに強く。

「?おい、颯真なに飲んで……つて誰だ!?颯真にアルコール飲ませた奴!」

「おい馬鹿!脱ごうとするな!」

「あついんだよ!キリトものめ!」

「ゴボボボボ!」

……あつちは大惨事になってるけど。

## オーディナル・スケール編

## Prologue

次世代ウェアラブル・マルチデバイス《オーグマー》

拡張現実<sup>A</sup>を最大限に利用したマシンであり、インカムに似たそのデザイン性と覚醒状態で利用できる利便性と安全性から瞬く間に世間に浸透した。

《オーグマー》の台頭に一番影響を受けたのは携帯会社だろう。《オーグマー》を起動すればメッセージを送れるし、スマートフォンの強みだったアプリが《オーグマー》用に開発されている。

「シフ、足を動かしてみろ」

『ガウ』

さらに《オーグマー》の人气が爆発した理由はARMMORPG《オーディナル・スケール》の存在が大きい。

ランキングの順位を上げれば、《オーグマー》のスポンサー会社から様々な恩恵が受け取れる。

人気商品の優先購入券だったり、飲食店の割引や無料サービスetc. etc. …

人間の欲を利用した上手いやり方だと言うのが俺の見解。

「反応がまだ遅いか……油圧式だと馬力はあるが即応性がないのがなあ」

VRとAR

住み別けはできていると思うが、いかんせん現実で恩恵があるのがデカイ。VRにダイブする人間の数が減少傾向なのがその証拠だろう。

VRは駄目だがARならいい、そういう親御さんも増えてんのが影響してんだろうな。

「骨格は大体出来上がってんだが、やっぱり動かすとなると問題は動力と関節だよな。装甲はスライド式にすればある程度の自由性が確保出来んだが……」

VRだと脳から体への伝達信号を塞ぎ止め、ゲーム内のアバターに反映する。つまりリアルで何があっても気付くことが出来ないのが最大の欠点。死銃事件が良い例だ。

反面ARならば覚醒状態で利用でき、ゲームだけでなく《オーグマー》が出回る前にスマホでやっていた動画やネットの視聴、さらには摂取カロリーの計算など利便性に富んでいる。スマホのように第三者に見られることもないしな。

「動力は出力を程度確保してえから鉛を使うか？……いや、それだと重量がなあ」

そして最近SAOサイバーたちに取材が来た。

主に最前線で戦っていた攻略組にな。

《SAO事件全集》なんて陳腐な名前の本になるそうさ。

「駆動系は人工筋肉で解決できるとして……」

内容は攻略組に参加していたプレイヤーの名前と所属ギルドなぜ攻略組になったのか、など。

出版され次第、取材を受けたSAOサイバーには無料で配布されるそうさ。正直言っていていらねえけどな。

『ガウ』

「メール？明日奈から？珍しいな」

『今日は参加するの？キリトくん寂しがってるよ？競う相手がいないって』

『筋肉つけてから出直せって伝えておいてくれ』

「さて……」

『負けるのが怖いのか？だって』

早えよ。つかキリト……。

『キリトに直接電話してやるから覚悟しとけて伝えてえろ』

今日の夜九時……間に合うかギリギリだな。

《オーディナル・スケール》にもレイドボスが存在する。

参加し戦闘に貢献できればランキングに関係するポイントが貰える。

とはいえリアルでの運動能力が問われるARは、あのモヤシには厳しいだろう。  
『ガウ』

「楽しそうだった？そりやそうだ。弄るネタが増えるんだからな。ともかく集中も切れた。今日はここまでにして帰るぞ」

キリトはARを渋々やってる印象がある。

VRじゃ無類の強さを発揮するアイツもARじゃ運動不足のモヤシだ。真面目に運動すれば結構いい線いくと思うんだけどな？

話を《オーグマー》に戻すが、SAOサバイバーがすし詰めにされている帰還者学校に在籍してる奴ら全員に《オーグマー》が与えられた。無料でだ。

裏がありそうな話だがSAO事件が原因でゲーム自体を敬遠してる奴もおり、そのトラウマを克服する為と云うのが学校側の主張。

ゲームのトラウマをゲームで克服する。

荒療治な気もしなくはない。

使えるモンは使わせてもらう。それにー

『ウ？』

「なんでもねえよ」

触れはしなないがリアルでシフと話せんだ。

使わねえと損だろ。

「直接電話するってさ」

「アスナ……」

「最近アルトの奴付き合い悪いよなあ」

最近のアイツは機械工学の本とか読み漁ってるってシノンが言ってたな。何をするためなのかは分からないけど。

「しっかしここ最近、VRする連中も減ったよなあ」

「原因は《オーグマー》だろ？ゲームするだけで色んなサービスを受けれるんだから、やればやるだけお得だろ？」

「その割りにはあまり乗り気じゃないよね？」

「俺は良いんだよ」

どういわけかVRより燃えないんだよな。

VRとの違和感が抜けないというか、差異に戸惑ってるというか。そんな感じ。

「そうそう！《オーグマー》と言えば俺たち【風林火山】も《オーグマー》を買い揃えて



よ。本格的に《オーディナル・スケール》を始めることにしたぜ」  
「その心は？」

「VRよりARの方が出会いがある！」

スクールドに刺されてしまえ。

……アルトの口の悪さが伝染したかな？

「ホント懲りないわね、アンタ」

「シノのん、いらっしやい」

「ええ、お邪魔するわ」

「アルトの様子はどうなんだ？」

「問題ないみたいよ。ただ落ちた筋肉を戻すために筋トレの日々みたいだけど」

一ヶ月近く動かしてないとそうだよな。

そう言えばアルヴヘイムに入ってくるプレイヤーが少なくて手応えのあるやつがないって嘆いてたな。闘争が生きる糧みたいなアイツにとって死活問題かもしれない。

前のPvPの大会だって不完全燃焼で不機嫌になりながら優勝してたし。お陰で朝まで付き合わされた。

まあアイツが治ったのはいいことなんだけど。

「ユウキは？」

「風邪を引いたらしいわよ？ 昨日アルトがお見舞いに行ってるから」

「甲斐甲斐しいねえ」

「年寄り臭いぞクライン」

片道十時間位か。左腕が治ったばかりなのに随分アクティブだな。じつとしてるアイツも想像できないけど。

「アルゴは？」

「ロスリックの情報をまとめて、あちこち飛び回ってるみたいよ。まあアルヴヘイムに入ってくるプレイヤーが少なくなってるから商売繁盛とはいかないらしいけど」

ロスリックをクリアできたのは俺たちが最速だった。その後もクリアしたパーティーの数も増えたけど、途中で攻略を止めたプレイヤーも少なくない。

火を消す選択をした灰の協力者である俺たちは、あのあともロスリックに行ってみたが暗闇のまま。

『火継ぎは終わり、世界は暗闇に閉ざされた』

そんなメッセージが出てくるだけだ。

後味の悪い最後だったがアルト曰く

『世界創世記曰く世界の始まりは暗闇だったんだと。もしその通りなら、いずれ人の手で新しい世界が始まるさ』

らしい。

さすが歩く辞書、人間図書館、生き字引。

本人の前では口が裂けても言えないけどな。どこかの山に埋められるか海に沈められそうだな。

「ツキシシー……誰か噂でもしてんのか？」

四月に入ったが肌寒い夜が続く。体調管理はちゃんとしねえとな。せつかくリアルでも戦えるようになったんだし、楽しめねえと損だ。

我がら危ねえ思考だけだな。

「《オーディナル・スケール》起動」

《オーディナル・スケール》の設定はやや複雑だ。

まず世界征服ならぬ次元征服を企む「ユナイタル」が送り込んでくる生物兵器、通称「DBA」。それに対抗する国際防衛組織「ジ・オーダー」、それに所属する「アダプト」。プレイヤーはアダプトの一員となりDBAと戦うつてのが、大まかなストーリー。

アダプトの持つ武器はDウエポンと呼ばれ、DBAに対抗できる唯一の武器。だがDウエポンはプレイヤーにも効果があり、ジ・オーダー内で勢力が分散する原因となった。

D B A 殲滅を第一優先とするガーディアン。

人類同士の戦闘も辞さないアグレッシブ。

秘密裏にユナイタルとの共存を目指すオービター。

殆どのプレイヤーはガーディアンに所属する。

もちろん俺はー

「ランキング四桁が二人、いいカモだな」

## 第一節：意志

「ふあくあ」

「デカイあくびだな」

「最近寝不足でな」

《オーディナル・スケール》で戦うのも面白いが、やっぱりコイツキリトとの戦いほど熱中できねえな。

原因は《オーディナル・スケール》起動時にDウエポンとなるコントローラーにある。手の中に収まるそれが武器になる特性上、武器同士で打ち合えないことだ。武器の重さも再現できないのもそうだな。拡張現実の限界。

流石に本物を持って歩くわけにもいかねえしな。

そうそう武器は二種類ある。

剣と銃。接近戦か射撃戦。

どちらも相応のリスクを払いそれに見合ったりターンを得る。どっちを選ぶかはプレイヤー次第だが、いつでも切り替えることはできる。

俺は剣を使ってる。銃は肌に合わない。

「颯真もやっぱり《オーディナル・スケール》やってるのか？」

「やっぱりとはなんだ。……まあ、やってるにはやってるがボチボチだな。他にもやることがあるから、あんま時間がとれねえんだよな」

「朝田から聞いたぞ、機械工学の本とか読み漁ってるって」

「ん、まあな……お前ならいいか」

「なにがだ？」

「他言無用だぞ？」

そう言っつて連れてきたのはとある大学の研究室。

S A O事件前に俺が通っていた大学だ。

「教授は出払ってるみてえだな。かえって好都合だ」

「こんなとこで何を？」

「ま、見てからのお楽しみだ」

間借りしてる一角にあるシートを掛けられた物体。

それに手を掛け一気に引き剥がす。

「っ！これって……」

「まだ試作の域をでねえが、現実におけるシフの体……になる予定だ」

まだ内装だけがフォルムは狼のそれ。

チタン製の骨組みに人工筋肉を使い軽量化と耐久性を向上、光ナノファイバーでCPUと各センサーの伝達を効率化した。

外装は体を丸めるなどの動作を滑らかにするために細分化、スライドさせて格納させるのに手こずってる。

「一体いくらするんだ……これ……」

「さあな。教授もいい経験になるつつつて費用はあっち持ちだ。今のところ順調だが問題は動力。車とかの鉛を使ったバッテリーじゃ軽量化した意味ねえ、蓄電池じゃ嵩張る上に稼働時間に不安がある」

俺の仕事はシフが満足できるように仕上げること。俺が納得出来るものじゃねえと安心してシフに預けれねえ。

「いやでも、前通つても今は部外者だろ？研究室を好き勝手使つていいのか？」

「……………それはそれ、これはこれ」

「国家権力のお世話になるのは嫌だぞ!？」

「教授から許可はもらってる。大丈夫だ」

恐らく、多分、きつと、may be。

「もう一度言っておくが他言無用だぞ。アイツらにはサプライズで驚かせたいからな」

「《オーディナル・スケール》にS A Oの階層ボスが出てきてるのは知ってるか？」  
「え？そんな告知はなかったろ？」

「その筈なんだが、俺が戦ったのは《イルフアング》に《アステリオス》だけだが、ネットの掲示板じゃ結構騒がれてる。『S A Oを追体験できる』ってな」

S A O事件全集が発売されて飛ぶように売れた。その事でS A O内で起きた戦いの記録を誰もが目を通すことになる。

となると次に連想するのはなにか。

乗り遅れたS A Oを体験してみたい。

そこに帰結する。

良くも悪くもS A O事件は衆人観衆の目に触れた事件であり、他人事ではなかった。もしかしたら自分もS A Oに囚われていたかもしれない。

そう考えつつも心のどこかではS A Oに憧れのようなものがあつたのかもしれない。S A O事件のあとに発売されたA L Oの人氣がその証拠だろう。それにあのデスクゲームがクリアされたのも追体験してみたいと思わせる一因かもしれない。

『これはゲームであつて遊びではない』



S A O が発表されインタビューを受けた茅場の言葉。

今ならあの言葉の意味が分かる。あの世界で確かに生きていた。笑い、怒り、嘆き、泣き、そして戦った。

遊びだなんて感覚は微塵もない。生きるために誰もが必死だった。生き延びるために剣を取った。それを聞き齧っただけの奴らがあの世界を体験したみたいだなんてー

「すごい怖い顔してるぞ、大丈夫か？」

「なんでもねえさ」

S A O に関してはいい思いでばかりじゃねえ。だからってそれを土足で踏み荒そうなんざ虫が良すぎると思わねえか？

もつとも？それは個人的な意見だし、それこそ身勝手な話かもしれねえけどな。

「少し根を詰めすぎじゃない？」

「悪いが手は抜けねえ質でな」

外装に使う金属、総重量から計算できる運動性能 e t c ……。

その他にも手を加えないといけない箇所はゴマンとある。

俺もシフも満足できるものを仕上げないといけない。

「気分転換に外の空気でも吸ってきたら？」

「……そうだな」

朝田の提案に乗り、バイクに火を入れる。

そういや、アキバのUDX広場でSAOボスが出るんだったか。開始三十分前に告知とは運営も鬼だな。

ちらりと腕時計に目を落とせば十時少し前。

時間も時間だし戦いは終わったあとか。

結局、運営からSAOボスを出現させる意図の説明はなかった。何を考えてんだか。都内のコンビニで休憩がてらコーヒを飲んでると携帯の着信音がなった。キリトから？

「《カガチ・ザ・サムライロード》が出た？」

『ああ、颯真の言う通りSAOのモンスターがボスとして出てきてるみたいだ。しかも貰えるポイントも他のモンスターよりも多い』

「なんの意図があつてSAOのボスを……」

《カガチ・ザ・サムライロード》は第十層の階層主だった。

主催者にS A O関係者がいるのか？

単なる運営のサプライズか、別の目的でもあるのか。

《オーグマー》に關してもそうだ。

VRは仮想と現実の区別している。リアルで叶わないことをVRで、と願う奴らもいる。

だが《オーグマー》——ARは仮想と現実の垣根を越えるものだ。VRと同じように画面の向こう側にいたキャラに自分になれる。だが下手を打てば傷害沙汰になりかない。戦っているのは現実であり生身の自分だ。

プレイ中に足を滑らせ高所から落下、プレイヤー同士の喧嘩など注意する点は多くある。

全て自己責任と言われればそれまでだが。

「お久しぶりですね。【双刃】アルト」

「誰だテメエ」

S Fチックな服の上にロング丈のパーカーを着た男。

「こいつ、どこかで……」

「覚えていらつしやいませんよね、僕のことなんて」

「そうだな。どうでもいい事を覚えておくほどお人好しじゃねえし暇でもねえ」

「あの時もそうでした。まるで路傍の石でも見るような目で僕を見ていた」

「何が言いたい」

「貴方にとつて攻略組の人間、いや貴方を取り巻く人間以外はどうでもいい、ただそれを言いたかっただけです。それではまたいずれ」

「気色悪い奴だ。自分に酔ってんのか？」

「つか、アイツもS A Oサバイバーか。世間は狭いな。」

カフェで寛いでるところに見慣れた二人組が席に座ってんのが見えた。

「デートの邪魔すんのも面白いがユイもいるだろうし、ここは黙って見つからねえように——」

「颯真！」

「氣い遣ってんだから声掛けんなアホ！」

「結局のところ俺を見つけたのはユイだった。」

「薦められるままに席を移動した。」

「ランキング二位がS A Oサバイバー？」

「うん。私の記憶が正しければ、だけど」

「んで、そいつが【血盟騎士団】所属だった、と」

百人を越える団員の中で顔まで覚えてるなんざ、よっぽどの実力者だったんだろうな。

「……颯真さん、顔に出てます。当時の彼は一度も攻略戦に参加してないです」

「つまり逆か？ 臆病者だったから覚えてるって？」

「臆病……とは違う気がしますけど」

とはいえ【血盟騎士団】に所属できたってことは、攻略する意思があったってことだろう？ でないと茅場ルーヒースクリフが許可しねえはずだ。

戦えねえ事情があったのか？

「ノーチラスってプレイヤーネームだったんだけどー」

「脳散らす？ 頭でも砕いたか」

「颯真……」

「失礼」

「んん！ それで《サムライロード》と戦ったときは全くの別人だった。体操選手顔負けだったよ」

へえ臆病者が一転して戦士になったってか？

それだけの実力があんならSAOでも戦えたと思うんだが、SAOとOSは違うってことなのか、もっと別な理由があるのか。

「ひとまず了解だ。俺の方でも考えてみる。デートの邪魔して悪かったな」

「ううん。呼び止めたのは私だし」

さいで。

「じゃあなユイ、あんな二人を困らせるなよ？」

「颯真さんほどじゃありません」

「言われたなあ颯真」

「うるせえ」

しっかりと自己陶醉サバイバーといい二位の奴といい、変な奴が多いな。

ノーチラスとランキング二位が同一人物つてのは明日奈の証言でほぼ確定でいい。

話題にもしたが戦いに尻込みしてた奴が打って変わって何十万ものプレイヤーの中で第二位つてのが腑に落ちない。

実力があるとして攻略戦に参加しなかった理由は？

フルダイブ不適合者？

まああり得なくもない。一瞬のミスが文字通り命取りになるデスゲームの中じゃ格上が相手になる攻略組において致命的だ。

単に怠けていた？

いや、明日奈の話じゃ真面目な野郎だったみたいだし、これは除外していい。

自分の実力に自信が無かった？

だとしても一度も攻略戦に参加してねえことはないはずだ。これも除外していいな。

もし奴の実力がOSで芽吹き始めたのだったら、なぜOSを始めたか。戦うことを恐れてんなら一番敬遠しそうなんだが。

戦う意志がねえならSAOで攻略戦に参加しなかった理由にはなるが、OSを始める理由にはならねえ。

いやまあ、SAOと違って命が懸かっている訳じゃねえから始められたってのもあるかもしれないが腑に落ちねえ。

死ぬのが恐えなら第一層にでも引き込もってりゃいい、にも拘らず奴は〔血盟騎士団〕に所属した。

安定した武器と防具が手に入れたにも拘らず、攻略することなく所属していただけ。

よく追い出されなかつたな。

チグハグな野郎だな。めんどくさいにも程がある。

## 第二節：疑心

「颯真さん、来たんですね」

「まあな。今日は体を動かしてえ気分だな」

「もう……そんな理由でボス戦に挑むのは颯真さんぐらいですよ」

代々木公園前で「風林火山」の面々と明日奈と合流したんだが……一人足りなくね？  
「連絡が取れなくなってるな。全員で挑戦するって約束しちまつてるから、アイツが来るまで「風林火山」は待機だ」

「風林火山」のメンバーが音信不通、ね。

「ま、大方アイテム拾いに夢中になって遅れてるだけだろうし、おめえさんたちは先に行ってな」

「参加できなくて悔しがんじゃねえぞ？」

「それじゃ私たちは先に行ってますね」

「気いつけてな」

電話にも出ず、メールの返信もない。

それにメッセージに既読も付かないとなるとトラブルにでも巻き込まれたんじゃ



ねえの？

「にしても夫も連れずに夜歩きとは感心しねえな」

「お家だつて近いし、何かあつたらアルトくんが守つてくれるでしょ？」

「やめてくれ。お前に怪我でもさせようもんなら、俺がキリトに殺される」

「冗談抜きでそうなりそうだな。アスナのことになると一気に頭に血い昇らせやがるしな。」

「……帰りは送つてやるよ」

「ふふ、ありがと」

……時間だな。

『みんな行くよ！ミュージックスタート！』

「なんだアレ」

「イメージキャラクターのユナだよ？知らないの？」

「どうでもいい」

にべもなく切り捨てる。

アスナの話じゃユナとやらの歌にはプレイヤーのバフ効果があり、そいつが出現するバトルフィールドはボーナスステージとか言われてるらしい。

歌を聞いてバフ効果……どっかで聞いた覚えがあるな。

《The Storm griffin》

グリフィンって読むが意味はグリフォンと同義。

やっぱりSAOで出てきたまんまだな。

「アスナ、攻略手順は憶えてるな？」

「もちろん。タゲお願いね」

「任された」

にしても、態々コントローラーをもう一つ買ってきたというのに――

「しつくり来ねえな」

両手の直剣と短剣の感触を確かめるが金属特有の重さがない。その分、手軽に振り回せると前向きに考えよう。

降り下ろされた鋭い爪を左の短剣で受け止め、右の直剣を振るう。それに反応したグリフォンは飛び上がり、翼を羽ばたかせる。

あの動作は――

「アスナ！」

「つてえ！」

途端に上がる砲火。

成る程、銃火器のプレイヤーを集めて簡単な対空砲火を作ったのか。さすが元「血盟

騎士団」の副団長様。指揮能力は今だ健在ってか？

「今よ！ 畳み掛けて！」

アスナの号令と共に走り出すプレイヤーたち。

ラストアタックを奪い合い、思い思いに武器を振るう様を見て、まるで餌を見つけた蟻のようだとかなり失礼な事を考えつつ両手の得物を構え直し、グリフォンへと叩き付けた。

「結局、クラインの奴ら来なかったな」

「何かあったのかな？」

「さあな」

仲間が来ねえから帰ったとしても電話に出ねえのはおかしくねえか？ 運転中でも他のメンバーに任せればいい。

……なんか嫌な予感がする。

「さて送迎宜しくね」

「……強<sup>した</sup>かだな、お嬢様」

近くを通る救急車に気を取られたが、帰りは送ると言った以上は断れねえよな。

サイドカーに明日奈が乗り込んだのを確認してから、エンジンに火を入れる。メット

積んでおいて正解だったな。同席者がノーヘルで補導とか笑えねえ。

「んじやナビ頼むぞ」

「任された」

「真似すんな」

『動力はどうするか決まったかね』

「オーグマーと同じようにワイヤレス受信機と蓄電池、それと関節にコイルと磁石を使ったハイブリットにしようかと」

『成る程、ドローンからの電力供給がなされている内は関節の稼働で発電し、圏外ならば蓄えた電力で稼働させる。蓄えた電力が尽きる前に再びドローンの圏内に戻れば問題ないだろう。中々よく考えられている』

「ドローンが飛び交つてるのを見て思い付いただけですよ。それに教授が考案した大容量蓄電池のお陰です」

とはいえドローンが飛んでいるのは都内近郊。俺の住んでる地域は疎<sup>まば</sup>らだ。

コンセントからも充電出来るようにしないと。

『制御プログラムはどうするのかね。こちらはまだ手を付けていないが』

「そつちは問題ありません。知り合いに頼んでありますので」

『そうか。なら制御プログラムはそちらに任せよう。機体の組み立てはあと三日もあれば終わる』

「分かりました。ではまた、重村教授」

敬語は疲れる。慣れねえことはするもんじゃない。

CPUメモリも問題ない。あとはシフに動かしてもらい問題がなければOKだ。

ALOでシフと再会してから計画していたこと。

リアルで動かせるシフの体を作る。

その実現まであと少し。

携帯の着信音に確認してみればエギルの文字。

「どうした？バースロミュー」

『アンドリューだ。最後の二文字しか合ってねえじゃねえか。分かりにくいポケを入れてくるな』

「悪かったな。それで？」

『クラインー遼太郎が病院に運ばれた』

「よう和人、お前も同じ口か？」

「颯真だつてエギルから教えてもらつたんだろ？」

クラインだけじゃなく【風林火山】のメンバー全員が病院送りに搬送された。代々木公園近くで通行人に発見され、救急車で運ばれたそうだ。

あの日、近くを通つた救急車がそうなんだろう。

仲間同士で言い合いになりつてのは【風林火山】じゃあり得ねえ。つまりアイツらを病院送りにした奴がいる。

「憶えてねえ!？」

「SAOの記憶がごっそりな。まあ楽しい記憶ばかりじゃねえから忘れちまつた方がー」

「ふざけんな!!」

怪我人だろうが知つたことじゃない。激情のままクラインの胸倉を掴み上げた。

「忘れた方がマシ？寝言ならもつとマシな事を言いやがれ！お前はあの世界で死んでいった奴らに向かつて同じことが言えんのか！俺たちSAOサブバイブがあの世界の事を忘れたら、死んでいった奴らをもう一度殺すことになんだぞ！」

忘れるってのは無かったことにすることだ。

それをこいつは……！

「見損なつたぞ」

叩き付けるように手を離し、病室を後にした。

「実はさ……明日奈もS A Oの記憶が無くなつてた……」

「……原因は」

「医者によれば、脳をスキヤニングされた影響かも知れないって」

スキヤニングされた影響で脳にダメージを負い、結果S A Oでの出来事を忘れたーいや、奪われたつて方が正しいな。

「オーグマー、か」

「多分な。明日、大学に行つて重森教授に掛け合つてみる。オーグマーの開発者ならスキヤニング機能のことも知つてるはずだ」

「分かつた……クラインはなにか言つてたか？」

「泣いてた。記憶を奪われたこともだけど、それを良しとした自分が情けないって」

「……そうか」

「それとクラインたち【風林火山】を襲つた犯人はランキング二位だ。名前はエイジ……」

ノーチラスだ。シリカを突き飛ばして庇ったアスナがモンスターにキルされて記憶が……」

モンスターにキルされて記憶を奪われる。

標的はSAOサバイバーか。

「アイツはSAOボスが現れる場所にいる」

「そうだな。《サムライロード》、《グリフォン》、そして明日奈の時もSAOボスだった」  
SAOサバイバーが現れやすいのはSAOモンスターが現れる場所か。攻略方が解ってるモンスターの方が戦いやすいし、ポイントも旨い。

よく考えられている。

「ユイに頼んで次のSAOボスが現れそうな場所を分析してもらってる。二手に別れてしらみ潰しに回ろう」

「了解だ。平行してお前は順位を上げとけ」

ランキングにはポイントの獲得以外にも上位のプレイヤーを倒すことで順位を上げられる。だが相手が二位となれば十位圏内でないでデュエルができない。

戦うならば、まずデュエルの権利をもぎ取らなきゃ話にならねえ。ランキング関係なしにボコればいいかもしれねえが。

「颯真」



「あ？」

「エイジは……アイツは俺の獲物だ」

「……分かった」

俺のが移ったか？にしてもやっぱり明日奈のことになると頭に血い昇るなコイツ。

《Farron's Undead Legion》

「なんだコイツら！死なねえ！」

そりやそうだ。コイツらは隊長格の奴を殺らねえ限り隊士は延々と蘇ってくる。

阿鼻叫喚の地獄絵図。

四十人近くいる不死隊に翻弄されて、チームプレイは瓦解した。

フアランの不死隊。

六十七層のコイツらも出てきたか。

仕様を変えてきたようで、赤目の奴がいねえから同士討ちは期待できねえ。参加プレイヤーの数を考えれば妥当かもしれないが。

気になるのは、コイツらの事をあのインタビュウで一言も喋ってない。

しかも奴らと戦ったのは俺だけだ。

にも拘らず、こうして再現され出現してる。

つまりOSの運営にはサバイバーじゃなく開発に関わった人間がいる？しかも全てのSAOボスを知りうる人物。

或いは、今も封印されているSAOサーバーにアクセスしてデータをコピーした奴がいる？

前者は可能性としてはあり得るかもしれないが、後者は余程の人物じゃないとサーバーに近付くことすら出来ねえ筈だ。

……考えるのはあとだ。見た限り二位の奴はいない。ここじゃねえみたいだな。他の場所にもSAOボスが出てきてるみてえだからそつちかもな。

お前から手に入れた戦い方が、お前らに通用するか試してみるか。

「お見事ですな【双刃】」

「……お前がランキング二位のエイジか？それともノーチラスの方がいいか？」

立体駐車場で後ろから掛けられた声。

振り向かなくても判る。コイツがエイジだと。

「昔の名前なんかどうでもいいでしょう?」

「そうだな。お前なんざどうでもいい」

「つ……あのときもそうだった。彼女を目の前で失った僕を見て、貴方は今と同じ言葉を吐き捨てた。『戦えねえ腰抜けなんざどうでもいい』」

……ああ、あの時か。

「あの時の腰抜けが今じゃトッププレイヤーか。なんだ? 称賛の言葉でも期待してんのか? だったら他を当たれ」

「おや、戦わないんですか? 誰よりも何よりも強者と戦いたがる貴方が」

「挑発のつもりなら赤点だな」

「【風林火山】を病院送りにし、アスナさんの記憶を奪ったのが、僕だとしても?」

ハンドルに伸ばした手を止め、エイジを見据える。

「それとも負けるのが怖いとか?」

「強い言葉を吐きたがる気持ちは分からなくもねえが、あまり吠えるな。底が透けて見えるぞ」

「つ……」

「それにテメエの相手は俺じゃねえ」

コイツはキリトの獲物だ。他人の獲物を横取りする趣味はねえ。

「二つ教えてやる。虎の威を借る狐つてな。力を見せ付けてえなら、自分の実力だけでやってみろ」

忌々しげに顔を歪めた奴を鼻で笑い、駐車場をあとにする。

服の上からだつたから確証はねえが、筋肉の付き方に違和感を感じた。

あんな細腕で大の男を抑え込んで、腕の骨を折れるわけがねえ。

しかもクラインの腕は鈍器による殴打での骨折ではなく、なにか強い力でへし折られてるらしい。それに腕にはハッキリと掴まれた跡も残つてた。

医者は『プロレスラーとでも喧嘩したの？』と首を傾げる始末だ。

考えることが増えたな畜生。

## 第三節：確信

「なんで不機嫌なんだよ」

「別に」

取り付く島がねえ……。理由はなんだ？ 一人であちこち動き回ってたからか？

「隠してることがあるんじゃないかしら？」

「そうだな。アル坊は隠すのは上手いけど、嘘は下手だからナ」

隠してるってなにをー

「浮気がバレた夫の「図」」

キリトオオ！

「馬鹿は放っておいてシフのことよ」

「シフがどうかしたか？」

「隠してることがあるんじゃないかしら？」

馬鹿な、あれはまだキリトにしかなー

「まさかお前……」

「反省も後悔もしてない」

「OK。遺言はそれでいいな？」

「Noー」

取り合えずキリトをボコして本題へ。

「ホントならエギルの店に全員集めてからの予定だったんだが……簡潔に言やシフの体を作ってた。明日には試作機がロールアウト予定で、シフに試運転してもらおう」

本来なら喜ばしいが、目の前の問題のこともある。先送りしてえとこだが、教授も試運転の様子を見に来ると言っていた。平行してやるしかねえか。

横目でアスナの様子を窺ってみれば、無理して取り繕った笑みをこぼしてる。

記憶を奪われると言うことは、そいつを構成してる基盤を奪われるのと同義だ。記憶がない恐怖は当人しか分からない。

……クラインには悪いことした。

奪ったSAOの記憶で何をしようとしているのかなんぞ興味もねえ。御大層な建前も動機も知ったことか。

どこの誰かは知らねえが必ず報いは受けてもらう。

協力者と黒幕がいる。電子工学と脳医学に精通し、尚且つS A Oサーバーにアクセス出来るもしくはS A Oのボスに精通した人物。

だが黒幕は一人とは限らない。複数ならば最低でも二人以上いる。

『少し気になる殿方が居おられるので、貴方とはここで暫しのお別れです。それでは皆様方、お次は此処ではない何処かでお逢い致しましょう?』

なんで今思い出す?

……まさかあの女が言つてた殿方つてのはエイジのことか?それとも黒幕の方か?

地獄に垂らした蜘蛛の糸に縋る人間を恍惚な笑みを浮かべて蹴り落とし、利用するだけ利用して旨味がなくなれば容赦なく切り捨てるだろう。

仮定に過ぎないが今回の裏にも奴がいる。

これは予感じゃない確信だ。

奴を言葉で現すなら、人を人とも思わない化生。

自己愛の怪物。破戒僧。

N P CのエラーかS A Oに閉じ込められたストレスか。

理由は分からないが奴は変生した。

有象無象の区別なく舐り尽くす魔性菩薩へと。

人の手に負える相手じゃないとしても、俺はあの女を殺すだろう。

勝てる勝てないじゃない。戦うことに意味がある。

「ユナのライブ？」

「そうよ。颯真も行くでしょ？」

「俺はパス」

「和を以て貴しと為す、よ」

「どこで覚えたそんな言葉」

物事を円滑に進めるには人と仲良くなり、いさかいを起こさないのが一番。

そんな意味だった気がする。聖徳太子の言葉だな。

「まあ、貴方がアイドルの曲を聴くタイプじゃないのは知ってるけど明日奈の為よ」

「明日奈の？」

「彼女が無理して笑顔を取り繕ってるのは知ってるでしょ？だからユナのライブで励ましてあげようってことよ。ちなみに発案はシリカよ」

「あいつが行きたいだけなんじゃねえのか？」

シリカ  
珪子のユナに対するのめり具合は軽く引く。



女性陣だけでカラオケに行つたときなんてユナの歌ばかり熱唱してたらしい。

本来の目的は何処に行つた。

ちなみに俺は歌つたあとに生暖かい目で見られてから行つてない。音痴というわけじゃない。絶対に。

「聞いてる？」

「聞いてるから包丁をこつちに向けんじゃねえ。つか、なんでお前はまだ俺の部屋で料理作つてんだ。腕も治つたんだし、自分で作れるつての」

「一人分も二人分も変わらない、から？」

「いや、変わるし疑問符を外せ」

「私のことが嫌いになつたの？」

包丁を両手で構えたまま目のハイライトを消して、にじり寄つてくんじゃねえ。

お前そんなキャラじゃねえだろ。

「分かつた。好きにしろ」

「分かればよろしい」

お前といいアルゴといい我の強い女が多すぎだろ。

にしてもユナのライブねえ。

OSで記憶を奪われてることを考えりや、そのマスコットキャラも疑うべきなんだろ

うが、そんなことや女性陣になに言われるか分かったもんじゃねえ。特にシリカ。

……そういえばキリトの奴、教授の所に行つてくるとか言つてたな。確かに教授はオグマーの開発者で電子工学に造詣ぞうけいが深い。だがあの人がスキヤニング機能なんかオグマーに搭載させるか？

確かに個人の好みまで反映させるシステムがある以上、ある程度の個人に合わせた調整が必要だ。迅速に且つ個人の手を煩わせない為にデータ収集機能は搭載させているはず。

その為の脳内スキヤニング？

だが脳内スキヤニングで脳内ネットワークに干渉し、記憶をデータ化し収集するにはかなりの出力が必要になるはず。

それにS A Oでの記憶だけを選別するとすると、高度な技術力を要求されるはずだ。

「んー？」

「……また始まった」

O Sを標的にしたコンピューターウイルスの可能性は限りなく薄い。

第一にオグマーのセキュリティウォールは鉄壁と言えるほどに強固だ。それを突破しようものなら足が着いて今頃はポリ公のお世話になつてるだろう。

第二にS A Oの記憶を奪う動機について。

データ化した記憶を集めて結合すれば、SAOで何があったか個人を問い詰めることなく説明はできる。

直感ではあるが、それが目的ではない気がする。

それにあの女が影にいるのなら、その程度で終わらせる筈がない。あのホスト崩れの時ですら、技術を提供した見返りに《カーディナル》のコピーを手に入れていた。

なら今回も自分の利になる何かを見返りとして——いや、己への捧げ物として要求する筈。

……和人からメール？

「よう和人、少し待たせたか」

「いや、俺も今来たところだ」

「カプルの待ち合わせじゃねえんだから、周りに勘違いさせること言うんじゃねえ。それで？」

「はぐらかされたよ。限りなく黒に近いグレーってところだな」

黒幕もしくは協力者の可能性あり、か。

「重村教授はロボットにも詳しいんだよな？」

「専攻は電子工学だからな。必要な機材と材料がありや、なんでもとは言わねえがある程度のは作れんだろ。シフの義体だって組み上げれるぐれえだしな」

人工筋肉を使ったシフの義体を作れんなら、それを応用してマッスルスーツも作れんだろうな。

それが実現すれば、色んな物に応用が……いや逆か？マッスルスーツを作れるからシフの義体を作れた。

もしそうなら、エイジの違和感にも説明がつく。

点と点が繋がり、歯車が噛み合う感覚に思わず椅子を倒す勢いで立ち上がる。

和人が狼狽えてるが知ったことか。

「ああ！そうか！そういうことか！クソツタレ！」

「お、おい。いきなりどうした？」

「どうしたもこうしたもあるか！教授……いや、重村がエイジの協力者だ！オーグマーを作り、自在にコントロールできる唯一の人間」

「……SAOと同じ」

「SAOの記憶にこだわる理由は知らねえが……ああ！クソクソクソ！クソツタレ！」  
腸が煮えくり返る、怒髪天を突く。

表現なんざどうでもいい。

SAO事件前のように教師面してたのもそうだが、オーグマーの開発者であることを知りながら疑いもせず、教鞭を頼んだ自分に腹が立つ。

「おい、落ち着けて」

「落ち着け？落ち着いてなんざいられるか！」

「仮に重村がエイジの協力者で黒幕だったとしてもなんの証拠もない。それに俺たちの言葉と重村の言葉、世間はどっちを信じると思う？」

「分かっただよ！そんなこと！」

まさか和人に糺されるとはな。俺もヤキが回ったか。

確かに俺たちの言葉だけじゃ菊岡も動けない。

それに目下の問題は――

「エイジと戦って明日奈の記憶を取り戻す」

「勝てたら記憶を返すって？まさかそんな言葉を鵜呑みにした訳じゃねえよな？」

「当たり前だ。でもアイツは間接的にでも明日奈を傷付けた。許せるわけないだろ」

「なら勝って振じ伏せろ」

タネは割れてる。

外付けの力に頼ってるようじゃキリトには勝てねえ。

自分の弱さを呪い続け向き合ったキリトと奴とじや文字通り格が違う。

フルダイブ不適合者だろうがただの臆病者だろうが関係ねえ。過去自分と向き合う奴に過去自分を否定するような奴が勝てる筈がねえ。

「それで颯真はー」

「お前の獲物がエイジであるように俺には俺の獲物がある」

なにを企んでるかは知らねえけどよ、例え地の果てだろうと悉く殺し尽くしてやる。

これは復讐でも怨恨でも、ましてや誰かに頼まれたモンでもねえ。

奴が気に入らない。認めるわけにはいかない。

奴を否定する理由はそれで十分だろ。

## 第四節：疑念

和人の奴は鬼のようなレベリングをしてるらしい。

明日奈が関わった時の行動力は呆れ返る。

デュエルで戦って勝つことができたなら明日奈の記憶を返すらしいが、見通しが甘え気がするな。

恐らくエイジは下っ端で都合よく使われてるだけ。そんな奴にシステムを操作できる権限は持たせない筈だ。

にも拘らずキリトに対してアスナの記憶を返すなどと言ったのか。

アイツには記憶を奪う以外にS A O サバイバーに対して復讐心や憎悪に近い感情を感じる。

それも攻略組に対してより強く。

【血盟騎士団】に所属してた頃の話聞いてみたいが、生憎とアスナ以外の知り合いがない。

『彼女を目の前で失った僕を見て』

あの言葉はS A O 第四十層でのことか？

その時、攻略組は階層ボス攻略中で終わった頃に届いた「風林火山」からのメッセージでクライアントに請われ同行。辿り着いた時にはすべてが終わっていた。

【風林火山】に所属してたねじり鉢巻の話だと一人のプレイヤーが自身にヘイトを集中させて、その隙にトラップに引っかけたパーティと救援部隊を逃がしたそうだ。

その時に見掛けたのが【血盟騎士団】装備のプレイヤー、ノーチラス……だったはず。『どうしてもつと早く来てくれなかった』。

膝を折り顔を絶望で濡らしたまま吐き出された言葉に俺もいつものように返した。

『死ぬのが怖えなら圏内に引き籠つてろ。戦う意思もねえどうでもいい奴のために動き回れるほど、攻略組は暇じゃねんだ』

そんな感じで返した覚えがある。

当時のやり取りは大して重要じゃねえな。

ヘイトを集中させたプレイヤーってのがエイジの言っていた彼女なんだろう。

どういう関係かまでは知らねえが、剣も取らず誰かを守ろうなんざ烏滸がましいだろ。

……いや今戦えてることを考えれば、当時から戦う意思はあると考えれる。なら何故戦わなかったのか。

「フルダイブ不適合者……」



ナーブギアとの不適合で何かしらの不具合を負ったプレイヤーを指す。例えば目が見えない、音が聞こえない、手足の感覚に違和感があるなど症状は人それぞれ。

該当するプレイヤーを見聞きしたことはないが、俺が知らないだけで不適合者は確実に存在していた。

となると理性よりも生存本能が優先して伝達される症状だろうか。戦うという理性よりも生きたいという生存本能が勝り、戦うことができない。

そう考えれば戦えなかった理由も説明できる。

「ま、だからって同情もしねえけどな」

言い方は悪いが運がなかったとしか言えない。

トラップに引っかけたパーティも戦えなかったアイツも救助に間に合わなかった俺たちも。

話を聞く限りでは、自らの意思でヘイトを集中させて他の奴を逃がすために自ら囚になり死んだ。そうしなければパーティも救助部隊も全滅を免れなかったから、そのために最善を尽くした。

もしかしたらアスナを失ったキリトとも言えるかもしれない。守りたいものを守れず、救いもなく、励ましてくれる相手もおらず、道を踏み外した。

あのクリスマスの延長線上の姿。

「はあ……疲れた」

「すげえ……ほとんど一人で倒しちまった……」

「何者だアイツ……」

「あの戦い方……SAO攻略組【双刃】のアルト!？」

……俺の戦い方は特殊な自覚はあるがこうも簡単にバレるもんかね？

SAO事件全集の発売と同時にでどこの書店にも長蛇の列ができ、SAO発売当初の熱気のように飛ぶように売れて開店から数分で売り切れたそうだ。

それによつて名前を真似る不届き者もいるらしいが、大半は綴りを変えたり振もじった奴らもいる。

SAOサバイバーの殆どは当時の名前らしい。俺もそのまま《aァrァtァoト》だからバレル可能性も高いわけだ。

「まあ、だからなんだって話だけどな」

俺は俺だし、あの頃を忘れないための自分を戒める鎖であり、あのお人好したちとの繋がァルトりとしてこの名で通してァルトる。

この名前じゃなきやダメな訳じゃねえがもう一人の俺である以上コインの表と裏、鏡合わせの関係だ。

つまり切つても切れない存在。無くすことも失うことも出来ない俺の一部だ。俺から何かを奪おうとするなら、それ相応の覚悟はしてもらおう。

「ようユイ、キリトの様子はどうか？」

「都内をバイクで走り回ってSAOボスを倒し、ランキングが十位に入りました」

「この短期間でよくやる。」

「アスナの様子は？」

「いつも通りですよ。表面上は、ですが……」

「だろうな。そういう奴だ、あいつは」

辛くても必死に隠して気丈に振る舞う。

周りの心配はするがされたくない。

なんともまあ年頃のお嬢様だな。必死に取り繕ったところで必ず綻びが生じるものだ。

そこら辺は和人に任せよう。慰めるとか励ますとかは専門外だ。

「にしてもユイが一人で会いに来るとか珍しいな」

「アルトさんは何か隠してることはありませんよね」

断言、か。両親に似て勘が鋭いな。

「なんのことだかな」

「誤魔化さないでください。パパも言っていました。今のアルトさんは《エクスキヤリバー》のダンジョンに潜る前と一緒だって」

あんま心配かけたくはねえんだけど、いずれはバレるし観念して正直に話す……のもなあ。

「まさかとは思いますが、あの女性絡みではないですよね？」

「……………」

「沈黙は肯定と受け取ります」

「なに言っても無駄なんだろ。ああそうさ、須郷の時と同じで今回の裏にアイツの影を感じてる。これはもう確信に近い直感だ」

裏で糸引いてるのか自分の手のひらの上で踊ってるのを見てほくそ笑んでるのかは知らねえが、ほぼ間違はなくアイツがいる。

「ただし、誰にも伝えるな。アイツが現れるとしたら最後の最後、奴の計画が大詰めになったとき必ず現れる」

「でも……」

「でもじゃねえ。それぞれが優先すべきことはなんなのか、成し遂げなきやならねえこ

とはなんなのか考えろ」

ライブ当日

「よく電話を掛けたな？重村」

『やれやれ、私を教師と呼んでいた君が行きなり呼び捨てとは……大方、私がSAOサバイバーたちの記憶を奪っている黒幕などと考えているのかね？』

「オーグマーの脳内スキャン機能、それにエイジとか言うあんたの協力者が着ていた人工筋肉内蔵型。パワードスーツ、それだけありや黒幕じゃないとしても今回の件に一枚噛んでることぐらい考え付く」

『君はよく頭が回る。もしそうだとしても私がやったという証拠はあるのかね』

「そんなもん必要ねえさ。今回ユナのライブにはSAOサバイバーが大勢集められる。そいつらの記憶を奪ってなににするつもりだ。SAOの再現でもしようってのか？」

SAOボスの出現、SAOサバイバーへの襲撃、脳内スキャンによる記憶障害。

全てが無関係だと考えるほど馬鹿じゃねえ。

『……私は取り戻すだけだ。娘を』

「娘？」

『娘に良い顔をしたい。そんな愚かな考えで私は娘を失った』

まさか、重村の娘は……

『勘の良い君のことだ。おおよその検討はついているのだろうか？その通りだ。娘に私のコネを使つて与えたナーブギアによって脳に修復不可能なダメージを負った』

「死んだアンタの娘と会つたであろう不特定多数のSAOサイバーから奪い取つた記憶を繋ぎ合わせ、電脳として生き返らせるつてか？馬鹿言つてんじやねえぞ！死んだ人間は元には戻らねえ！例え成功したとしても、それは限りなく真に迫つた偽物だ！」

『君には分からないだろう。子を亡くした親の悲しみが怒りが絶望が！例え悪魔との取り引きだとしても私は娘を取り戻す！』

悪魔との取り引き……やっぱりあの女か。

『何を犠牲にしても私は成し遂げて見せる。君と言葉を交わすのもこれで最後になるだろう。君は良い生徒だった』

切られたか……まあいいさ。

今日のライブが分水嶺<sup>ぶんすいれい</sup>。

重村の目論みが功を奏するか、あの女がすべてを台無しにするか、俺たちが防げるか。

「和人が、どうかしたか？」

『お前に頼みたいことがある』

「俺に？」

『エイジと戦う上で必要なことだ』

ライブ開催まであと十時間を切った。

## 第五節：変生

まったく、いきなり呼び出したかと思えばあの野郎、余計な体力使わせやがって。

バイクを走らせてライブ会場へと向かう道すがら、サイドカーに載せたシートに目をやる。

稼働テストは合格したが本格的に動かすとなれば、今まで見えなかった問題も出てくる筈。人目に付かせたくないが、場合によってはしょうがない。

「すごい人混みだな」

「初のARライブだからじゃない？」

別に仮想アイドルが世の中に浸透したのは昨日今日の話じゃねえだろ。一昔前は二次元のキャラが世界各国でライブしてたらしいし、受け入れられる下地はあったのかも知れねえけどな。

「俺来る必要なくね？」



「協調性の欠片もないのね」

「仲良し小良しは苦手なんだよ」

なあなあで済ませれるのも仲間内だけ。

こいつらは……まあ、その、あれだ。付き合わされるのも悪くはない、そう思える。

「兄ちゃん、あつつい」

「中に入るまで我慢しろ」

不平を訴えるのは季節外れの厚着にマスクで完全防護した木綿季だ。

病み上がりなんだから連れてきただけありがたいと思え。お前の両親に許可をもらった以上、お前に何かあれば俺の責任になるんだからな。

「なんだかんだ言いながら連れてくる辺り、完全なシスコンね」

「シスコン言うんじゃねえ」

こいつがどうしても行きたいってうるせえから連れてきただけだ。置いて行こうとすれば泣き始めるもんだから渋々アレを載せたサイドカーに乗せて来た。とは言え横浜まで往復してたら時間がねえから途中で拾う形になったが。

話は変わるが昨日の夜、アルゴにSAO第四十層での出来事を聞いてみたところ確かにトラップに引つ掛かったプレイヤーを救うために攻略組二軍と攻略組志望の中層プレイヤー数名が出向いたそう。この攻略組二軍ってのがレベルが足りず最前線で戦

えなかった【風林火山】のメンバーだ。ノーチラスもこの中にいたんだろうな。

プレイヤーの全滅を避ける為にレアスキル《吟唱》でモンスターのヘイトを集めたのが《Yuna》、重村の娘。

《吟唱》にはプレイヤーにバフ効果があるがモンスターのヘイトを集めやすいデメリツトもある。

それを逆手に自身にヘイトを向けさせ、その結果プレイヤーの全滅は免れた訳だ。

そしてSAOのユナとOSのユナ。

重村は自分の娘を生き返らせると言った。つまりOSのユナは別の存在と考えるのが自然か。

SAOサバイバーから奪い取った記憶の中からユナの情報を抜き出し、繋ぎ合わせることでユナに限りなく近いナニカを産み出す。それこそが重村の計画。

信用していた。

偶々大学近くのカフェで義体の構想を練っていたときに再会し、設計図を見た教授……重村が協力を申し出たときも二つ返事で応じた。

今思えば俺がSAOサバイバーだったから偶然を装って近付いてきたんだろう。

『かけがえのない人を失った時どうするかね？』

あの研究室でそう問われた。

『思い出と共に生きていきます。取り戻せないからこそ、かけがえのないと言えるでしょうから』

『君らしい答えだ』

俺に何を伝えたかったのか分からないが、俺の答えが重村の望んだ答えじゃなかったのは何となく理解した。

何かを切り捨て何かを得る。それが生きることだと理解しているが、犠牲を強いるのは違うはずだ。何を犠牲にしても娘を生き返らせようとする重村の覚悟は立派だと  
言えるかもしれない。

でも俺は認めない。

本当にかげがえのない人だというのなら、そいつを辱しめるようなことはしないし出  
来ない筈だ。

『君は他者との境界線が極めて狭い。寄せ付けず踏み込ませず、許可なく立ち入ろうとする者を徹底的に攻撃する。まるで野生の獣のようだ。そんな君だから理解し難いのかもしれないな』

俺が何を理解出来ていないと言うのか。

無くしたくないものだってあるし、失いたくないものもある。

『今は理解できなくても良い。いずれ理解できるようになる』

「和人の奴はどうした？」

「トイレらしいわよ？」

これはまたバタな嘘を。大方エイジと会ってんだろ。

ドームに人が集中してつから地下駐車場だろうな。

オーグマーを着けるフリをしてコードレスイヤホンを着けようとした手を両サイドに陣取った朝田と木綿季に止められ、白い目で見られた。

地下三階の駐車場で奴と相對した。

「約束通り一人で来たぞ。腕づくでも返してもらおうぜ、明日奈の記憶を」

「急かさないでくださいよ【黒の劍士】さん」

「そういうお前はノーチラスだな。死の恐怖に打ち勝てず、戦うことを拒否したー」  
「今の僕はエイジだ！」

突然の咆哮。

「よくご存じですね。僕なんかのこと」

「詳しい奴がいてな。他にも色々知ってるぜ」

「そうやって【閃光】さんだけじゃ飽きたらず、ユナまでたぶらかすんですか」

「なんの話だ」

「……まあいいです。しかしノコノコやって来てN.O. 2の僕に勝つつもりですか」

「やってみなきゃ分からないだろ。お前だってN.O. 1じゃないみたいだしな」

なにがなんでも勝つ。短時間での付け焼き刃だが、アイツの手を借りたからには敗北は許されない。

手首に巻いた重しを外した。

あの馬鹿に見つかって倍の重量を巻かれたせいで、連日筋肉痛だった。今じゃ自分の腕とは思えないほど軽く感じる。

「オーディナル・スケール、起動」

『最初の一合目で相手の力量を確かめろ。相手がどれだけ速かろうが、初動さえ見誤らみあやまなきやお前の反応速度なら十分間に合う』

初動からの初撃は辛うじて反応できた。

想像してたよりも速い……！それでも！

『相手の視線、重心、呼吸……他にもあるが、この三つだけでも鋭敏に感じ取れ。GGOで予測線が予測できんなら、それだけでも相手の行動を予測できる筈だ』

リアルじゃVRの時みたいに動けないのを知っているながら何度も投げ飛ばされて地面に叩き付けられた。下はコンクリートだったのにあの馬鹿！

超人的な三次元機動に翻弄されながらもなんとか食い下がれるのは、アイツの肉体言語による攻略法のお陰だ。

「流石、SAOをクリアに導いただけのことはある！」

「こんなもんか二位つてのは！大したことないな！」

エイジは支柱を切り裂き、破壊判定による砂煙で視界を遮られた。

「最前線のプレイヤーしか皆の記憶に残らない！僕やユナみたいな弱虫は蚊帳の外だ！」

「ッ！SAOで悠那といたのか!?」

「ああそうさ！彼女が消える瞬間もな！」

後ろからの奇襲を声を頼りに辛うじて捌く。

辛うじて反応するのが精一杯で反撃できない……！

「自分の弱さを呪ったよ。大切な人が危なくなっても足がすくんで動けないんだからな！」

首の後ろにで光っている装置に目を奪われた瞬間、投げ飛ばされて背中を壁に叩き付けられた。

「SAOなんてクソゲーの記憶、貰ったって良いじゃないか！」

大振りの一撃を避けてエイジの後ろに回り込み、赤く光る装置に手を掛けた。

「お前の強さの正体はこれかあ！」

引き千切ったのはパワードスーツの電源装置。

超人的な三次元機動も規格外の怪力も人工筋肉による恩恵であり、電源がなくなってしまうばパワードスーツもただの重しになる。

逃げたくなるような現実も大切な人を失う気持ちも分かる。でもだからってー

「過去を否定するのは彼女すら否定することだ！そんな奴に負けるわけにはいかない！」

色んな人に支えられて今の俺がある。だけど過去を否定すれば支えてくれた人たちすら否定することになる。

自分の弱さも辛い過去も向き合っていかなきゃ駄目なんだ。

「これで終わりだ」

「クソおお！」

パワードスーツのアシストに頼りすぎたな。強さの正体は外付けの力であってお前自身の強さじゃない。

雌雄は決した。

「さあ明日奈の記憶を取り戻す方法を教えろ」

「……もう手遅れなんですよ。なにもかも」

手遅れ？

「ここにはSAOサバイバーが集められている。そいつらから奪ってやるのさSAOの記憶を、そうして悠那を生き返らせる」

目の痛い光のオンパレードが突然止まり、閉じていた目を開ければ暗闇がドームの中を支配していた。

「ん？終わったのか？」

「どうかしら？まだ一曲しか歌ってないわよ」

困惑のざわめきのなか、ドーム内すべて人間が装着していたオーグマーがOSを立ち上げた。

そしてステージの中央に巨大な蓮の蕾が出現した。

ファイナルイベント？

「墮ち行く先は殺生院。顎あごの如き天上楽土。一寸の虫にも五分の魂と申します。もはや何人なんびとたりとも私からは逃れられません」



## 第六節：魔性

「オメエら、オーグマーを外せ！今すぐにだ！」

「でも颯真——」

「早くしろ——」

あれは存在自体が猛毒だ。少しでもあの女を美しいと感じたなら既に手遅れ。あの女の操り人形になる。

何度か相對したことがあるこいつらなら、ある程度の抵抗力はあるだろうが万全を期すならオーグマーを外してあの女を意識外に追いやるしかない。

「——おや？やはりいらつしやったのですね」

ステージに出現した蓮の蕾が花開き、中からあの女が姿を顕した。相変わらず人を人として見てねえ目をしやがって。

意識を向けられた瞬間、背筋をなぞられる感覚に襲われる。五感を刺激し、意識を漂白し、自己を塗り潰す。

気張ってねえと俺もされるがままだな。ただでさえ一度は心を折られた。二度目はねえ。

「テメエが何をしようが知ったことじゃねえが、テメエの存在は認めねえ」

「久しい邂逅だと言うのにつれない御方。大抵の殿方は咽び泣き私を求めると言うのに」

「テメエを求めろ？そいつらも見ろ目がねえな」

前の席の背もたれを足場に奴へと向かう。

「……本当に嫌になります。私を悪と断じ斬ろうとする希少種を排斥するケダモノ達」

「なにをーおわつー！」

突然なにかに足を掴まれ体勢を崩した所を上から押し潰された。

「キアラさまあ……」

「キアラさまあ……」

「こゝの……邪魔だ！退け！」

あの女に魅了された奴らが何かうわ言を呟きながら俺の上のし掛かってくる。

がむしやらに体を動かして上に乗っかってる奴らを振り落とし、オーグマーを筆り取れば事切れたように身動きひとつしなくなった。

そうして奴に向き直れば、幽鬼のような足取りでこちらに向かってくる観客たちの

姿。

「流石、私を殺しうる英傑。ですが無辜むこの人々を相手取りながら私と戦うなど叶いませ

ん」

「俺の限界をテメエが決めんな。邪魔なら黙らせりやいい。道を塞ぐなら退かせばいい。行く手を阻むなら押し通れればいい」

OSを起動し、仮想現実の剣を構えー

「止めろー」

駆け出そうとした俺の腕を掴んで引き止めたのはキリトだった。

「邪魔すんなキリトー」

「プレイヤーのHPがゼロになれば、空を飛んでるドローンがオーグマーの出力を上げて脳内スキャンを起動させる！そうなればー」

「ナーヴギアよろしく脳が焼き切れる、か」

重村：……そこまでして娘を生き返らせたのか！

これはもはやSAOと同じテロだ。

「クソ！開かない！」

菊岡にドーム内の異常を聞き地下駐車場から駆けつけたのは良いものの、ドームへ入

るための扉全てがロックが掛かり入ることができない。

重村の娘、悠那を生き返らせるためにSAOサバイバーの記憶から悠那の断片を繋ぎ合わせることでAIとして甦らせる。

それは娘への愛であり、SAOサバイバーに対する復讐でもある。

金属の擦れる音に意識を戻せば、メタリックグレーのボディを持つ大型犬ほどの狼に似たロボットがマニピュレーター状の尻尾を扉の緊急用メンテナンスポットに差し込んでいた。

「まさかお前……シフ、か？」

俺が見たのは剥き出しのコード類やフレームだけだったけど、サイズ感は一緒だし何となくシフの面影がある。

恐らく扉の電子ロックをシフがクラッキングしてるんだろう。自意識に目覚めたAIであるシフや今はいないユイにとって繰り返すだけのプログラムは紙切れのように突破できる。

「頼むシフ……なにか嫌な予感がする」

lockの文字がunlockへ変わる。

壊す勢いで扉を開けドーム内の様子を見てみれば、ゾンビのように揺れながら歩く観客とステージに咲いた蓮の花、その

中央に颯真の不倶戴天の敵、殺生院の姿。

それを認識した瞬間に鼻を突く甘い臭いと耳に触れる蠱惑な声に視界が揺らぎ、思わず膝を突いてしまう。

だけど今は膝を折つてる場合じゃない。

プレイヤーのHPがゼロになれば上を飛んでるドローンから電力供給を受けたオーグマーが高出力の脳内スキャンを行い脳を焼き切ってしまう。殺生院と戦うのに邪魔だと判断すればアイツは躊躇いなく剣を振るうはずだ。そうならば「ラフコフ」の時と同じことが起きる。

そんなことはさせたくない。

二階の観客席から飛び降り、駆け出しかけたアルトの腕に飛び付いて止めた。

「……随分と不粋な真似を為さるのですね」

「どうしたよ？いつもの顔が崩れてるぞ？」

「茶々をいれるなアルト」

さて、どうしたもんかな。

「シフ、いるか？」

キリトと同じように二階の観客席から飛び降り、灰色のボディを反射させ俺の側に着地したのは実践稼働させたシフ。

この上を電力供給用のドローンが飛び回ってつからなバッテリー切れの心配もない。

「邪魔する奴らのオーグマーを外してくれ」

「お前は？」

「決まってるんだろ。あの女を殺す」

「私を殺す……臆面もなく吐き捨てられるのも貴方ぐらいのものです。ですが、ほらこの通り」

奴が両手を広げれば各階層のSAOボスマンスターが出現した。

「大悟も解脱も指先ひとつで随喜自在。それでは戯れといたしましょう？」

「何故だ！貴女は娘を生き返らせてくれると、そう言った筈だ！」

「これは異なことを仰りますね？確かに私は生き返らせると口にしましたが、貴方の娘が、とは一言も申ししておりませんよ？」

「なんだと……」

「希望を与えられ、それを取り上げられたとき、ヒトはとても良い表情カオを覗かせる。死の恐怖によつてかつての記憶を励起させ、それを読み取る。確かにそれならば貴方の娘を生き返らせるのも可能でしょう。ですが私は貴方の娘を生き返らせるために力をお貸ししたわけではありません」

「ならばなぜ……」

「この世の命すべては私のために行使されるべき。私の体を取り戻すために、そして永劫の命を得るために貴方を利用したに過ぎません。ではごきげんよう、貴女は最後に味らい尽くすといたしましょう」

「……なぜ……私はただ娘を……」

「私はそんなこと望んでない。大丈夫、私はお父さんの中で生き続けるから」

「お………らあ!!」

「( )のお!!」

何匹斬った？まだ十も殺ってねえと思うが……。

「動きが鈍ってきてるんじゃないか？良かったら手を貸そうか？」

「馬鹿言え、まだまだ余裕だつーの。そういうお前だつて息があがつてんじゃないか」とはいえこのままじゃジリ貧だ。

《フェイタルサイス》の代名詞とも言える大鎌が視界の端に映る。とはいえ俺もキリトも他のボスの攻撃を受け止めていて対応できない。

殺られる！

そう覚悟したとき白い影が俺たちの間に割って入り、結界のようなものでその鎌を受け止めた。

俺たちが知ってるユナの対照色と表現すれば良いのか、雪のように白いユナが俺とキリトを救った。

「SAOサバイバーの記憶からの自己補完が終われば、あの人は誰にも倒せない」

「どうすればいい!?!」

「今はSAO第百層ボスのリソースに依存してる。それを倒すことができればもしかしたら……お願い！【黒の剣士】！【双刃】！」

「アミスフィアなんか持ってきてー」

「大丈夫！オーグマーでもフルダイブできる！オーグマーはナーヴギアの機能限定版だからー」



オーグマーにフルダイブ機能が……しかも機能限定版って……。  
「……分かった」

「私たちもやるわ」

リズ、シリカ、シノン、ユウキ、エギル……

「……キリト、そつちは任せた」

「お前は？」

「あの尼僧が隙だらけの俺たちを見逃すとも？」

それにまともに相手取れるのは俺だけだし、フルダイブ中ならアイツの影響も受けねえだろ。

SAO百層ボスがどれだけ強えか分からねえが、アイツの影響力で手下紛いになられ  
ても俺が困る。

「みんな、怖くないの？」

アスナ……。

「そりゃ怖えさ。でもな誰だつて恐怖と戦つて生きてんだ。怖くて挫けそうでも立つて  
前を見据える。戦えなくてもそれができりや上出来だ」

「アスナ、ここで待つてくれ。必ず君の隣に帰つてくるから」

真面目な顔してよくそんな臭い台詞を吐けるな。

「アルト……」

「兄ちゃん……」

「そんな顔すんな。あんな奴に二度も負けねえよ」

観客席の最後列にユナの援護を受けながらSAOへとダイブしていく面々を見届け、俺は安全地帯から足を踏み出した。

『アルト約束してくれ。必ず倒して戻ってくるから、あの力だけは絶対に使わないでくれ』

……ホント単純で助かる。何でお前達だけ行かせたのか。アイツとまともに戦えるだけじゃねえ、アイツを殺しうるのも俺だけでアレだけだろうがよ。

「良い機会です。ひとつ尋ねても良いでしょうか？」

「なんだ？」

「なぜ貴方は私の前に立ち塞がるのです？」

なにを言うかと思えば――

「簡単なことだ。テメエを見逃せばこいつらも被害に遭う。それだけは見過ごせねえ」

かけがえのない大事な仲間だからだ。

代替の利かない心を許せる戦友だからだ。

命張る理由はそれだけで十分だろ。

目の前に広がるのは魑魅魍魎、百鬼夜行……表現なんざどうでもいい。観客はシフが何とかしてくれる。それ以外の全ては殺すべき敵だ。

「覚悟を決めろよ？ 魔性菩薩。テメエの存在悉くを殺し尽くしてやる」

「目には色を、耳には言葉を、口には蜜を、鼻には香を、そして肌には荒ぶる熱を……万色悠滞、蓮の華に御還りなさい」

## 第最終節：可能性の獣

《An incarnate of the Radius》

SAO第百層ボス。

戦乙女のようなボスはたった五人じゃ太刀打ちできる相手じゃなかった。

被ダメージを減衰させる防御フィールドにHPを回復させる大樹の雫、バトルフィールドそのものを己の武器にする超能力のようなものに植物を操る能力まで持っている。

「負けて……たまるかぁ！」

アイツだってコイツ以上の敵と戦ってるんだ！勝てる可能性が限りなくゼロに近くても諦める理由にはならない！

が、そんな俺の思いとは裏腹に最初の善戦も嘘であったかのように覆され、俺は握り締められたまま壁に叩き付けられエギルとリズは植物に絡め取られた。

シノンも奴の目から放たれたビームの爆風に巻き込まれ安否不明、ユウキは槍を受け止めるので身動きが取れない。果敢に飛び出したシリカは上下から動き出した岩塊に挟まれ押し潰されそうになっていた。

『申し上げたはずですよ。ヒトにも劣る獣が私に敵うはずがないと。ましてや、あの方

のような力も持たぬ有象無象に私を打倒するなど叶いましょうか？ですが……ふふふ、嬉しく思います。私を打倒せんとする英傑が牙を剥き、無謀にも挑まんとする。昂りすぎて思わず、貪り尽くしてしまいたくなくなってしまふではありませんか』

よく喋る……！

百層ボスを取り込んだ殺生院の喜悦を含んだ声を聞き流す。幸いなことにリソースの殆どを現実の方へ割いているせいも、ドームの方の殺生院より脅威を感じない。それでも手も足も出せないのが現実だが。

「次！」

迫り来るSAOボスを薙ぎ倒し歩を進める。

自分自身そのものを薪として力を行使する。

鎧袖一触でSAOボスは薙ぎ払えるものの問題は奴の信者となった観客たち。シフがオーグマーを外して回ってくれているが焼け石に水、観客が多すぎて減ってる気がしない。

己を消費して力を行使してる以上、長期戦は自殺行為だが道が開かない。雲霞うんかの如く

押し寄せる観客たちが僅かに拓けた空間を封殺するせいだ。

「よく粘りますね。以前の貴方なら邪魔する者全てを殺し尽くして私の眼前に立っていただけでしょうに」

「ああ、そうだな。だが仮にそうしたとしても、お前に勝てたとは言えねえ。テメエを否定し尽くして初めて勝利と言える。怪物風情が人間を舐めるな」

万人を救うなんざ俺にはできねえし資格もねえ。俺に出来んのはこの手が届く範囲を守ることぐらいで、それ以外に牙を剥くことだけだ。

「吼えたてる獣ほど矮小なものはございませぬ。愛玩動物として愛でてあげましょう」  
進化の袋小路に迷い混んだ人間であるからこそ、あらゆる可能性を秘めている。

そう重村は言っていた。なら俺がそれを証明する。可能性の獣たる人間の力をな。

飛び上がり同じように跳んだシフを足場に跳躍。観客の肉壁を飛び越えステージの上でほくそ笑む奴に目掛け炎を纏った剣を突き出す。

「拡張現実だったのが仇あだになったな！ 仮想の体じや現実の俺は止められねえ！」  
「侮らないでください！ このまま貴方の脳を焼き払って差し上げます！」

己の全てを燃え上からせ力を限界まで行使する。

奴を殺すのが先か俺の脳が焼き払われるのが先か。

その前にそつちを頼むぞ、キリト。

「なんだ……う？」

戦意を滾たぎらせたアスナと合流し反撃に打って出ようとした矢先、奴の体が燃え上がり悶え苦しみ始めた。

あの馬鹿野郎、使うなって言っただろ……！

『まだです！まだ終わらせない！』

悶え苦しみながらも動き始めた瞬間、風の渦が奴を閉じ込めた。

「お兄ちゃーん！お待たせー！」

スグ！お前その姿ALLOの……

「パパ！ママ！皆さんを呼んできました！」

ユージーンにサクヤさんとルーさん、レコン、それにクラインまで……銃を撃ってる人たちは知らないけどGGOから連れてきたのか？

「これも使ってください！」

ユイが手にした光が俺たちを包み、光が治まればSAO当時の装備に変わってる。

「このSAOサーバーに残ってたセーブデータから皆さんの分をロードしました！シノ

ンさんとユウキさんの分はおまけです！」

……そうか。元はカーディナルの一部だから、SAOサーバーにも《ザ・シード》規格のGGOにもアクセスできる。

突然吹き荒れる風と共に舞う灰に閉じた目を開けば、焼け爛れ歪み捻れ煤けた鎧に身を包んだプレイヤーが目の前にいた。見覚えのある螺旋剣を引き抜き、肩に預けながらこちらを振り向く仕草はアイツを連想させる。

まさか……お前……。

「……よし、みんなやろう！」

反撃の狼煙だ。

心強い援軍もいる。ぶん殴りたい奴もいるし、奴には悪いがさつきと終わらせる！

ALOのプレイヤー達が奴の周囲を飛び回りながら、すれ違い様に切り裂き、気を取られた瞬間に魔法を叩き込む。

GGOプレイヤーたちは遠距離から攻撃を叩き込める利点を最大限に利用して常に弾幕を張り、HPを削りながら身動きを封じる。

「行くよ！アスナ！」

「任せてユウキ！」

奴の頭上までアスナをユウキが運び、共に直滑降しながら剣撃を浴びせる。



仰け反った瞬間にリズとシリカが攻撃を仕掛けるが防御フィールドに阻まれるもののスイツチしたエギルの渾身の一撃によって叩き割られ、そのまま頭をへこませるほどの痛撃を与える。

異形の剣を持った剣士が左手を振るえば、白い紋様が地面に現れ、様々な装備に身を包んだ剣士たちが現れる。

奴の放つ木の根に押し潰され、吹き飛ばされながらもその数は減らず、杖や布のような物を振り魔法を放つ奴もいれば弓を射る奴、体によじ登り剣を振るう奴、火炎壺を投げる奴もいる。

……一人だけ半裸に近い奴が投げてる茶色くて見るからに不潔そうな物体には触れないでおこう。

「ありがとうな、灰」

ロスリックで幾度とアルトと戦い、殺生院に利用されていたアイツがまさか手を貸してくれるなんてな。

「……借りを返しに来たにすぎん」

素直じゃないのもアイツにそっくりだな。

「行くぞ！アスナ！」

「うん！」

地面から押し潰さんと放たれる根をスグとシノンが撃ち落とし、振り落とされた剣を灰の雷の槍が弾き飛ばす。

『こんな……なんの力も持たないケダモノに……』

「俺<sup>私</sup>たちを舐めるなあ!!」

アスナの《フラツシング・ペネトレイター》が弾け、怯んだ奴の懐に潜り込み、《スターバースト・ストリーム》を発動する。

最後の一撃を奴の顔面目掛け振り下ろし、HPが尽きたボスはポリゴンとなつて四散した。

『……これでSAO完全クリアは果たされた。おめでどう、と言いたいところだが、早く戻った方がいい。彼の身を案じるのであればね』

分かつてるさ。お前に言われなくてもな、茅場。

「そんな！何故!?!」

狼狽え始めた奴を見て確信した。

やったか、キリト……なら、あとは――

「残るはテメエだけだ！殺生院！」

「まだです！まだ私には多くの信者達がー」

突如ドームに響く歌声。その歌の影響なのか、傀儡となっていた観客たちが糸の切れ  
た人形のように力なく倒れ伏した。

一ヶ所だけスポットライトに照らされた場所には白いユナが歌い、その傍にはS A O  
時代のキリトがS A Oボスたちに見たことのない大剣を振るっていた。

「こんな……こんなことが……私の計画は……」

「他人を利用し、弄んだ報いを受けるときだ。同情はしねえし憐れみもしねえ。ただ甘  
んじて受け入れろ」

「まだ……まだ私はアアア!!!」

もう体の感覚を殆ど感じねえんだ。これ以上、お前に付き合う義理はねえよ。

奴の腹に突き刺した剣を引き抜き、袈裟に切り落とす。

無数のエフェクトとなつて散つていく奴を見届け、俺の意識は暗転した。

「……い……い……い！おい！颯真！」

「つるせえな。耳元で叫ばなくても聞こえてる」

おちおち寝てもらえねえな……。

自由の利かない体を無理矢理起こし、朝田と木綿季に肩を借りなんとか立ち上がれば会場内に倒れる観客たちが見える。

「大丈夫だ。全員気を失ってるだけで命に別状はないってさ」

「……別に気にしてねえよ」

「颯真こそ大丈夫なの？」

「兄ちゃん、嘘はダメだよ？」

「すげえ眠い。さっさと帰って寝る……前に熱いシャワーを浴びてえな」

冗談めかせば『しようがないな』とでも言いたげな笑みを浮かべる面々。

正直なこと言ってるのに笑うとは何事だ。

「ありがとう【黒の剣士】、【双刃】」

白いユナか……なんか薄くなってるねえか？

「私も百層ボスのリソースの一部で形を保ってたから、そのボスがいなくなれば私も消えるの。S A O サバイバーの記憶障害の原因は死の恐怖。それに打ち勝った貴女ならきつと思いい出せるわ」

『みんなの前で歌えたから心残りもないしね』

そう言い俺の前に立ち、悪戯気な笑みを溢した。

「【双刃】もS A Oでいつも私の歌を聞きに来てくれてありがとう」

その言葉に両肩に回された腕に力が込められたのは気のせいだと思いたい。そんなことでもしてた気もしなくもない。

「颯真？あとで聞きたいことが出来たわ」

「右に同じーく」

「……お手柔らかにな」

遠退く意識を繋ぎ止めながら朝田と木綿季の質問攻めを受け、気が付けば日を跨いでいた。

……今日、寝れるかな？

ライブで起きた観客の意識不明の原因はライブの演出として使用されたガスが原因とされ、後日ユナのライブが改めて行われた。

そうそう、オーグマーの開発者である重村雄大はカブラ社社外取締役を辞任し表舞台から姿を消した。

娘を取り戻そうとする意思は尊敬するが、その手段は心底気に入らない。それしか手段がなかったのかもしれないけどな。

そういや、昨日は和人と明日奈が星を見に行く日だったな。なんでもS A Oで交わし

た約束らしい。

あの世界での出来事はなかったことにはできないし、してはいけない。ずっとついて回る影法師みたいなもんだ。生きていくうちに忘れてしまうかもしれないが、それまではその記憶と共に生きていかなきゃならない。

……そろそろ限界だな。アイツらには最後まで迷惑をかけるが……これが最後だ。

……まだアイツらと馬鹿やってたかったな……。

「こんなところに連れてきて、なにをさせるつもりかね？ 罪に問われなかったことには感謝しているが……」

「簡単なことですよ。貴方にしかできないことです」

「っ！これは……」

「ようこそ、ラースへ」

## Epilogue (エピローグ) という名の prologue (プロローグ)

「颯真が意識不明!?!」

『ええ……詳しいことは病院で話すから早く来て』

明らかに元気のないシノンの声に冗談やドッキリじゃなく真実なのだど悟り、慌ててバイクを走らせて都内の病院へ急ぐ。

受付を通し、颯真の病室へ駆け込んでみれば死んだようにベッドに横たわる颯真とベッド脇の椅子に座るシノンの姿があつた。

「シノン! 颯真に何が!」

「脳にダメージがあること以外は判らないそうよ」

脳にダメージ?

「そのダメージ自体は軽微らしくて直接的な原因ではないらしいけど……」

考えられるとしたら殺生院の攻撃を受けたことによる昏睡、もしくはあの力の代償。

「……悪いけど少し外に出てくる。木綿季にも連絡はしたけどまだ知らせてない人もいるし」



「あ、ああ……」

力なく立ち上がり言葉少なく部屋を出ていくシノンの背中を見送り、点滴を打つために晒されてた左手に触れる。

多分、みんなに心配かけないように今の今まで気張ってたんだろうな。お前のことから、殺生院を殺したから俺の役目はもう終わり、なんて考えてるかもしれないけどそんなことはないからな？

憎まれ口も振ってくる微妙に古くさいネタも、お前にはやることがまだあるし、シノンたちのことだってある。全部放り投げてるなんて筋が通らないだろ。

「連絡が取れる人には颯真の状態を伝えておいたわ。とは言っても意識不明だったことぐらいだけ」

それぐらいしか言えないよな。

原因も判明してないし、目を覚ます目処めどもない。

まさに八方塞がりであれに俺たちにできることは何も無い。

歯痒くて何もできない自分が嫌になる。

ポケットに突っ込んでたスマホが振動し、着信を知らせる。菊岡から？

『やあキリトくん、少しバイトを試してみる気はないかい？』

——ト。キリト！

「……んっ」

シノンの声で俺は意識を覚醒させた。

「あんた、人の話聞いてた？」

少しむっとした顔で尋ねるシノン。

そうだった。俺はシノンにGGOで今度行われるBOBに出てほしいと言われていて、エギルの店で待ち合わせた。参加の経緯を聞く折について最近行われたBOBの話になって……その途中、ほんの少しの間意識が飛んでいたようだ。バイトの疲れが出たのだろうか。

とはいえ、俺も何も考えずに聞いていたわけではない。

「あ、ああ。BoBに出たサトライザーって奴のことだろ？シノン倒して『Your soul will be sweet』。『君の魂はきつと甘いだろう』とか言ったつていう。もしかしてだけどき、そいつ本職なんじゃないか？シノンを圧倒した実力とか、その観察眼とか踏まえるとさ。軍人とかかもな」

「えっ……観察眼って、まさかあんたも……」

「いやっ、俺が言ってるのは戦場を把握する能力のことだから。そもそも、そんないかがわしいことをシノンで考えられるわけないだろ」

「当たり前でしょ。もしそんな目で見てたら両目を《ヘカート》で撃ち抜くから。でも流石に軍人っていうのは——」

とシノンが言いかけたところに

「やっほ——シノのん！」

俺の彼女でもある結城明日奈がやって来た。

明日奈がやって来ることを知らなかった俺は、ひどく驚いたものの、二人の説明に納得がいった。確かに俺一人では心もとないだろう。

颯真のこともあるし、本当ならゲームなんかしてる場合ではないんだろうけど、アイツが守ろうとしたのは今まで通りの日常であり、俺たちはそれ応えないといけない。そんな感じがする。

アイツは今も病院で眠り続ける。

菊岡に話を通して国立の病院へ移してもらい、完全な介護体勢を敷いてもらった。自分を磨り減らしながらも殺生院の企みを阻止した対価としては十分だと思う。

木綿季は泣いていた。SAOに囚われたときを思い出したらしい。スグが同じ思いを味わった者として慰めていた。

一人の人間に多くの人間が振り回され、多くが犠牲になった。守り通せたのはささやかな日常で対価として差し出したのは大事な仲間だった。

「——まあ、二人とも助っ人として呼んだってこと。二人には大会一月前にコンバートしてもらおうとして……あんたの怪しいバイトについて、聞かせてもらいましょか。」

説明を終えたシノンはじつと俺に視線を向けて思いよもらないことを言ってきた。なんでシノンがそれを、と思うもすぐに納得する。シノンはアスナの親友だ。俺がアスナにバイトの話をした以上、伝わるのは当然か。

「リースってとこのSTL、ソウル・トランスレーターっていうBMIIーフルダイブマシンのテストプレイだよ。本体がやたらとデカイ」

「へー、じゃあそんなに大きいなら、そのフルダイブマシンは業務用？」

「いや、そもそも普通のフルダイブとは別物らしいし、機密保持の為にそこでの記憶は持ち出せないから俺もよくわからないんだ」

「は、はあ!」

アスナの疑問への俺の答えに、シノンは思わず叫んでいた。

「別物? 記憶が持ち出せない? どういうことよ」

「うーん、大本から説明するか。量子脳力学つてのがあってな、あのマシンはそれを下敷きに作られたんだ。魂とは何かつて、考えたことあるか? ラースはそこに一つの結論を出したんだ。説明すると脳には脳細胞の構造を支える頭蓋骨でもある骨格、マイクロチューブルつてのがあるみたいなんだ」

「は、はあ……?」

「その骨は管状で中に光子、エバネツセント・フォトンつていう量子があつて、常に確率的な揺らぎとしてそこにある。それが人間の心、つまり魂らしい」

何を言っているのかさっぱり、といった様子のシノンと考え込んでいる様子のアスナ

「……なら、ラースのSTLは人の魂に直接アクセスするつてこと?」

「まあそういうこと。光子はキュービットつて単位のデータで記録されてる。つまり、脳細胞自体が一つの量子コンピュータとも言える訳だ」

「ちよつとキリト。私もう無理。限界きてる。」

「わたしも……」

ついに二人とも白旗をあげた。まあ俺も正直そこら辺はよく分かつてはいない。

「アイツならどうだろ。妙に博識というか知識の幅が広いし、もしかしたら理解するかも。いや、脳筋の節もあるし」

「だよな。まあ話を続けると、ラースはその人間の魂に名前を付けた。それが『フラクトライト』。人間の魂にアクセス出来るから、記憶の操作も可能だと」

「何やら考え込む二人。少しの静寂の後、アスナが口を開く」

「……もしかして、STLの世界で見たり聞いたり触れたりしたものは私たちの意識レベルでは本物ってこと？」

「そういうことだな」

「……信じられないけど、一度くらい見てみたいかも。デザイナーのいない、現実世界以上のリアルワールドを」

「実際、そんな世界が創れるわけ？」

「うーん……厳しいな。それにはゼロから文明を創る必要があるから……」

「それは随分と気の長い話だね。」

と、二人はこの言葉を冗談と受け取って笑った。

しかし、いや恐らく

「可能かもしれない。仮想世界の中の時間を加速させるんだ。フラクトライト・アクセスレーション、略してFLA。確か今の最大倍率は3倍だったかな……」

「ふうん。なんかやつてることが凄すぎて現実味を帯びない話ね。それってどんな世界だったのかな」

「覚えてはないけど……確かアンダーワールドってコードネームだった」

そこから何か思い浮かばないものか、とキリトとシノンが揃って首を捻ると、アスナが呟いた。

「ラースって名前もだけど、不思議のアリスからとっているんじゃないかな。確か原題は『アリスズ・アドベンチャー・アンダーグラウンド』だったかな」

「へえ……キリト、どうしたの？」

「うーん。今何か思いだせそうだったんだけどな……」

「そんじゃ、シノン」

「じゃあね、シノのん」

「またねアスナ」

日も暮れはじめた頃、俺とアスナは、シノンと別れた。

あの二人には黙ったままだけど俺がラーズのバイトを請け負った理由は颯真のことに帰結する。脳に直接アクセスできるなら、意識のないアイツを外側からのアプローチで覚醒させることができるんじゃないかと、そう考えたんだ。

勿論、後遺症の不確定要素を排してからでなければ、とてもじゃないが実行できない。菊岡は胡散臭くはあるが、ある程度の実績を積ませることができれば、颯真の回復のために使用するのも吝かちかではないと言っていた。

颯真を被験体にするのは気が引けるけど、他に頼れるものもない。藁にも縋るつていうのはこういうことなんだな。





「和人君!! しっかりして!」

——朦朧とした意識の中で、その声を聞いた。意識が途切れる直前に俺は、何か言わなくてはと思い、力を振り絞って…

——明日奈、ごめん。

## 幕間

## 微睡みの夢

朝5時。まだ日の光も微睡みを残す時間帯。

私——朝田詩乃は自室をあとにし、隣に住む彼の部屋を訪れる。慣れた手付きで電子錠にスマホを翳し、ロックが解除されたことを確認して扉を開ける。

シン、と静まった部屋に微かに聞こえる寝息。

部屋の中を覗いてみれば床に敷かれた布団の中で彼は静かに寝息を立てて、彼に抱きつくように彼の親戚である木綿季が顔を緩ませて眠っていた。

ベッドの方は毛布がはね除けられてもぬけの殻、恐らく寝相の悪い木綿季が寝惚けたまま彼の布団に忍び込んだのだろう。

彼はというと眉間に皺を寄せ寝苦しそうではあるが木綿季をはね除けることなく眠ってる。

——本当に身内には甘いわよね。

初めて朝御飯を用意するために彼の部屋にお邪魔した時は、私の気配を感じ取ったらしく既に起きていた。

少し経った頃には、部屋にお邪魔しても起きていることはなかったけれど、寝顔を見ようと彼の顔を覗き込もうとした瞬間、うつ伏せに組み敷かれた。すぐに私だと分かり『悪い』と一言だけ言って私の上から退いた彼はバツが悪そうな顔をしてたっけ。

きつと彼の根底にあるのは他者に対する不信任感。

アルゴの話ではS A O事件の際、基本的に誰かがいる、若しくは誰かが安易に入れる場所では眠る事はしなかったと。人間が一番に無防備になる瞬間を嫌っての事だそう。過去に何があったのか問い詰めることは憚れる。きつと私にはまだ聞く権利はないだろう。

私は信用されていないのか、と少しだけ傷付いたけれど普段の彼を見ていれば努力はしているのだろうと思う。実際、日が経つ毎に私が部屋に入っても目を覚ましている事が少なくなってる。

——寝ているのに気配で目を覚ますなんてホント野生の獣みたいよね。

まだ人に慣れていない犬や猫が物音や足音に敏感な反応をするのと一緒だ。明日奈も彼の第一印象を野生の狼のようだと行っていたっけ？

言い得て妙である。

人一倍警戒心が強く、自身の縄張りを踏み込ませず、許可なく立ち入れれば容赦なく牙を剥く。

明日奈の話によれば、これでも随分マシになった方なのだとか。『アルトくん矯正計画』なる話は聞かなかったことにする。

——さて、そろそろ朝御飯の支度を始めないと。

初めて彼のキッチンで料理を作り始めた頃に比べ、随分と調味料も調理器具も増えた。彼自身あまり料理をする方ではなく、有ったのは砂糖と塩、醤油に味噌ぐらいだった。

普段何を食べてるのか聞いても『腹が膨れれば十分』という返答。栄養の偏りもサプリメントで解決だそう。

それこそ中学校に通ってた頃までは健康に気を使っていたらしいけれど、今では食事を使う時間を頭を使う時間に回した方が有意義だと言っていた。

それでは駄目だと私が食事を用意することを強硬、渋る彼も料理を並べられては食べる他なかった。

口では文句を言っても、残さずに完食し『美味かった』と感想も言ってくれた。私の作戦勝ちだ。

《オーグマー》を装着し、もう一度彼と木綿季が眠る部屋を見る。木綿季が寝ていたベッドの上で丸くなっているシフの姿があった。

私と視線が合うと挨拶なのか2回ほど尻尾を振る。

拡張現実における仮想体であるシフは彼の家族であり、幾重もの死線を共に越えてきた戦友。その目はどこまでも優しく、今だ眠る二人を守護するが如く見守っている。

誰に似たのだろうか、なんて答えの分かりきってる問題は早々に頭の片隅へと追いやる。

言うまでもなく彼あるいは彼女は彼に似たのだ。敵には容赦なく身内にはどこまでも甘い、そんな彼に。

水を張った鍋に乾燥昆布と鰹節を沈めて沸騰する前に取り出したあと、味噌を溶かす。

——朝は軽めに、かつ栄養の取れるもの。

朝食はその日1日の原動力。昼食までの間、体と頭を動かす為に必要なエネルギーを摂ってもらわなくちゃいけない。

「おはよう、よく眠れた?」

後ろからかけられた声に振り向けば、彼がリビングからキッチンへと出てくるところだった。

「甲斐甲斐しいなんてそんな事ないわよ。あなたの食生活は偏りがちだし、なにより木

綿季に同じ食事をさせる訳にもいかないじゃない」

彼の軽口には私は同じように軽口で返す。

木綿季はまだ成長期。なら栄養を考えて献立を考えないと。

「はいはい。まだ時間がかかるからシャワーでも浴びてきたら？あ、着替えはちゃんと持っていてきなさいよ？また半裸のまま歩き回ったら通報するから」

憎まれ口を叩きながらリビングへ戻った彼は布団の中で未だ夢の中にいる木綿季をベッドへと移動させて、敷いていた布団を干し、畳んでいたテーブルを敷き、着替えを持って脱衣所へと消えた。

少しの間が空いて水の流れる音が聞こえてくる。

彼もシャワーを浴び始めたことだし、私も早く終わらせないと。

ご飯にお味噌汁、焼き魚にお漬物。

あとは…ほうれん草のお浸しかな？

「え？シャンプーの替えなら…つつつつ!!」

腰にタオルだけ巻いて出てきた彼に手に持っていたお玉を思いっきり投げつけてやった。

私は悪くない。

「どうしたの兄ちゃん、その顔……」

「木綿季、気にしなくてもいいわよ。学習しない颯真が悪いんだもの」

木綿季も起きてテーブルを囲い朝食を取り始めた矢先、木綿季は颯真の顔に赤く丸い跡が付いてることを追求する。

お味噌汁を混ぜるために使い高温だったそれは見事に颯真の顔へと命中してその爪痕を残した。

今なら投げナイフでヘッドショットも出来るかもしれない。

「ハア……悪かったわよ。咄嗟だったからついね」

「??????」  
「ご機嫌斜めな彼。」



頭の上にハテナを浮かべる木綿季。

小さく笑みを零す私。

ささやかで儂い、それでも確かにそこにある小さな幸せ。ずっと続けばと思い願った日常。

そこで私は目を覚ます。

懐かしい夢を見た。まだ彼がいつ目覚めるとも分からない眠りにつく前の夢を。

まだそれほど日が経っていないのに彼の声だけが酷く不鮮明だったような気もする。なのに夢の内容は酷く鮮明だった。

『君もアルトくんと同じ力を使ったようだが、金輪際その力を使わないことを奨めるよ』  
思い出すのは茅場昌彦の言葉。

プログラムを超越する力とその代償。

もし私が彼と同じ力を使用した代償が記憶であるなら、彼はどれだけの代償を払いあの力を使用したのか。

あの一瞬だけ使った力の代償が記憶であるなら、あの女を消すために彼の支払った代償は？

分からない。分からないけれど……

「また声を聞かせてよ……また軽口を叩いてよ……」

ガラスで隔たれた向こう側。

機械に繋がれた彼は何も答えない。

## アリシゼーション編

## アリシゼーション予告編

激闘の果てに意識不明となった三神颯真。

颯真が守った日常を謳歌すべく、いつも通りに過ごす面々に新たな影が忍び寄る。

「……は……どこだ？」

目覚めれば見知らぬ世界

「そういえば自己紹介がまだだったね。僕はユージオ。よろしくキリト」

新たな世界で出会う新たな友

「《メガロス》だ……」

「め、めが……？」

「《メガロス》だよ」

破壊の徒、暴虐の化身



「お前は……」

「私を殺しうる英傑が誰かに利用されている。それがどうしようもなく我慢ならないのです」

魔性なる尼僧の嘆き

「暗黒神ベクタが家臣「竜狩り」オーンスタイン、我が槍にて果てること、誉れとして逝くがよい！」

いぎ、推して参る!!」

ダークテリトリーの先陣を切る竜狩りの騎士

「お前ら……誰だ。どうして俺を知ってる」

記憶をなくした友は何を思い、何を為すのか

「さあ立つてキリト。僕の親友……僕の英雄……」

「ああ立つさ。お前のためなら何度だって……！」

心が折れない限り、負けではない

託されたものを見失わない限り、死は別れではない

「イミテーション・ナインライブス」

「十万の人工フラクトライトの命は、一人の自衛官のそれより軽いんだよ。感情で物言う子供には理解できないかもしれないけどね」

「ごちやごちやうるせえな、仮初めとはいえ命を弄んでる奴が命の価値を語るんじやねえよ」

計画に立ちはだかる計画を壊す者ラーズグリーズ

「戦う理由は見つかったか？相棒」

「顔も知らねえ千人か身近な一人かなら、俺は躊躇うことなく後者を選ぶ。お前を助けるためなら、他の命を踏み台にすることも厭わない」

「俺とお前は鏡合わせだ。向かい合ってはじめて自分の形を知る。似てはいるが、酷く歪だ」

かつての友と対峙する

「It's show time」

「SAOから続く因縁……ここで断ち切る！」

棺桶は嗤う。復讐を果たすまで

「お前がどこの誰かなんぞ興味はねえ。人の女に手を出したんだ。楽に死ねるだなんて思っただけよな」

負の心意に対抗するのは自身を焼き焦がす熱を宿した鋼の意思

「本気とかキャラじゃないんだけどなあ。でも戦<sup>や</sup>るなら本気<sup>マジ</sup>で戦<sup>や</sup>ろうか！その方がおもしろいだろう？」

「自分のケツは自分で拭く。俺が産み落とししてしまったモンは俺がこの手で殺し尽くす」

狂気の研究者が纏う己の分身

「命自体は平等に無価値だ。だからこそテメエ自身の生き様で価値をつける。と言っても清算されるのは死んでから、だけだな」



これは命の価値を問うお伽噺

フェアリーテイル

## 第一章：アンダーワールド

……………どこだ、ここ？

空気に匂いがある。

覚醒直前の断片的な思考のなかで、ふとそんなことを意識した。ここはどこだろうか。花の匂い。草の匂い。樹の匂いに水の匂い。

聴覚からは小川のせせらぎ。陽気にさえざる小鳥の声や、虫の羽音が流れてくる。

少なくとも、自分の部屋ではなさそうだ。俺はもう少しだけ眠りの余韻に漂っていたという欲を押し退け、両眼を開き、ゆっくりと上体を起こす。どうやら森の中の開けた草地に寝転んでいたらしい。

何故こんなところにいる？何も分からない。記憶喪失、なんて物騒な単語が頭をよぎる。

俺の名前は、桐ヶ谷和人。十七歳。川越市で母と妹と三人暮らし。茅場晶彦によつて生み出されたVRMMO『ソードアート・オンライン』、ゲーム内での死が本当の死に繋がるといふデスゲームの中で俺はソロプレイヤーとしてダンジョンに潜り、そんな中で色んな出会いがあつて、最終的に俺とヒースクリフ茅場の戦いで俺が勝利したことでこの事

件は終わった。その後、囚われたアスナを救う為に『アルヴヘイム・オンライン』をプレイし、そこでリーファと出会ったり、菊岡の頼みで死銃事件の調査の為に『ガンゲイル・オンライン』をプレイし、そこでシノンと出会ったりした。最近はALOを仲間達と共にプレイしている。

「……よし、大丈夫だ。」

やや安堵しつつ、更に記憶を辿る。

俺はエギルの店でシノンとGGOの話をして、アスナと合流してお喋りをしてからアルトのお見舞いに行ったあとシノンと別れ、アスナの家がある世田谷へ向かって、彼女は優しい日溜りのような笑顔をみせて――

記憶は、そこで途切れている。

俺は必死に思い出そうとするも、浮かぶのは点滅する赤い光と息苦しさのイメージだけ――

ん？　そういえば今の俺の服は手持ちの服のどれでもない、麻の半袖シャツだ。そこで俺はようやくある一つの可能性にたどり着く。

「……なんだ」

要はここは仮想世界ってことか。俺はつい安堵の息をもらす。経緯はよく分からないがいつの間にかVRMMOにフルダイブしていたらしい。

早速、現実世界へ戻ろうと俺はいつものようにログアウトするためにウィンドウを開こうと手を振る。しかし何も起こらない。

「え？」

何度繰り返しても、結果は同じ。右手でも、左手でも。

俺は先程よりもさらに大きな不安に駆られる。

よく考えると、この世界は仮想世界というには妙にリアルだ。もしかして本当にどこか関東の森とかにやって来ていたのか？と、途方に暮れていると、ある考えが浮かんできた

「……が……アンダーワールドなのか？」

思い浮かべるのは、アスナの言葉。アンダーワールドで見たり聞いたりしたものは、俺達の意識レベルでは本物。それが真実ならばこの世界はアンダーワールドの可能性が高い。もはやそう考えるしか領けない状況だ。しかし、一体何故？

……それよりも

「み、水う」

俺の喉の渇きが限界だった。

美しい川の水が喉を潤していく

「ふはあ〜」

さて、十分に水分を補給した。先ずはこの森を抜けようと俺が歩き出そうとしたその時、斧だろうか、明らかに人の手による音が聞こえた。その音に俺が振り向くと――

右手にさざめく川面。左手に鬱蒼と深い森。正面にはどこまでも伸びる緑の道。そこを三人の子供が歩いていく。黒髪の少年、亜麻色の髪の少年に挟まれて、麦わら帽子を被った女の子の長い金髪が眩しく揺れる。彼らの後ろには一人の青年がいた。逆光でよく見えないが、その後ろ姿はどこかで――

これは――記憶？

遠い遠い、もう二度と戻れない日々。永遠に続くと信じ、それを守るためなら何でもすると誓い、しかしあつけなく消え去ってしまった――

あの懐かしい日々。

――あれは、俺達……？

そんな筈のない突拍子な考えが自然と浮かんでいた。

俺は即座にその考えを否定する。

川越市にはここまで綺麗な森や川はないし、あの三人には会ったこともない。

しかし、どこか懐かしさを感じたような……

奇妙な感覚は拭いきれなかったが、今は進まなくてはならない。チクチクと残る不安をひとまず忘れることにして、俺は音のする方向へと足を向けた。

……一言でいうと、デカイ。森の中に突如として現れた大樹のものはや自然界の樹木とは思えない圧倒的な存在感に、俺は口を開きっぱなしだった。

全長は何メートルあるのだろうか。ALOの世界樹ほどではないとはいえ、天にまで届きそうな巨樹を見上げる。

梢など全くみえない大樹の根元を見ると、誰かがいた。

俺は咄嗟に身構える。この世界がどんな世界かまだわかっていない。いきなり襲われるなんてことも有り得るのだ。

しかし、よく見てみるとその人影は俺と同じ歳位の青年で、特に武装などはしていないかった。

俺は一先ず安心し、警戒を緩める。

ややウエーブのかかったアッシュブラウンの髪 of 少年が不思議そうに俺を見て、口を開いた。

「君は誰？どこから来たの？」

と日本語で少年は言葉を発した。明らかに外国人の顔で凄く流暢な日本語を発したことに衝撃を受けつつも、まず俺は彼の正体——彼がNPCなのか、俺と同じプレイヤーなのかを探ろうとまずは比較的 안전한 単語を用いて会話を交わす。

「俺はキリト。あっちから来たんだけど、道に迷っちゃって……」

「あっちつて……ザツカリアから来たのかい？」

早くも窮地。どう答えるべきか慎重にならないと。

俺は慌てる心を落ち着けて、ゆっくりと語る。

「それが自分がどこに住んでいたか、どこから来たのかよくわからないんだ……」

「……驚いた。《ベクタの迷子》か、本当にいたなんて……」

「べ、べくた……？」

「ある日突然いなくなったり、森なんか突然現れる人をそう呼ぶんだ。闇の神ベクタの悪戯だって」

ううむ、雲行きが怪しい。そんなにもこの世界の用語をだされてもな……このままでは何も分からないままだ。

ええいままよ！

「ログアウトしたいんだ。」

「ろぐ……？今なんて？」

確定した。彼はこの世界の住人だ。少なくとも、ここを仮想世界だとは思っていないらしい。

その反応から、察した俺は咄嗟にユージオの問いを誤魔化す。

「いやっなんでもないよ。ところで泊まれるところってあるかな？」

「うーん。シスター・アザリヤなら助けてくれるかも。僕も一緒に行つて事情を説明するよ。……あ、仕事があるから、すぐには無理かも」

「大丈夫、待つてるよ。よろしく頼む。」

「そういえば、名前言つてなかつたね。僕はユージオ。よろしく、キリト君」

ユージオとの話は興味深いものばかりだった。まず、彼らは《ステイシアの窓》という機能が使えるのだ。これは、天命ー要は寿命を見ることができるといふこと。確認の仕方は簡単。右手で物を二回ほど叩き、出てきた《窓》の値を見るだけだ。仮想世界とはいえ、ここはあまりにリアルで、仮想世界という実感が無かつたためにこんなことができると思つていなかった俺は衝撃を受けた。

ユージオは俺と共にパンを食べながら、自分の話をしてくれた。

「ずーっと昔はお弁当を持ってきてくれる幼馴染がいたんだ。でも、その子は……六年前に二人で北の洞窟に探検に行ったときの帰りに迷つて闇の国との境にまで来てしまったんだ。そこで彼女はつまずいて、外の地面ー闇の国に掌をついてしまった。知つてるだろ？禁忌目録に『決して足を踏み入れることならず』って書いてある。本当に一瞬の出来事。たつたそれだけのことで彼女は整合騎士に目録に違反したとして央都へ連れていかれたんだ……あの時、僕は助けようとしたけど、全く動けなかつた……」

ユージオはかすかに自嘲の色を浮かべた。



禁忌目録、闇の国、央都、整合騎士

気になることは多かつたが、俺は何と声をかけていいか分からなかつた。暫しの静寂の後に俺は訊く。

「その子、どうなつたんだ？」

「さあ……審問の後、処刑するつて言つてたけど……でもね、キリト、僕は信じてる。アリスは、きつと生きてるつて」

アリスーどこか、懐かしい響きだつた。

「なら、探しに行かないのか？」

「あのねえ、キリト。天職を放り出して旅になんて出られないでしょ」

呆れ顔をしていうユージオ。どうやらこの世界には天職なるものがあるらしい。R PGとかでいう勇者や魔法使いやらのことだろう。

「あ、ああ。ところでお前の天職つて……？」

ここだと見えないか、と笑つてユージオは俺を連れて巨樹の幹を回る。長いこと巨樹の外周を回つた後、俺は衝撃を受けた。そこには、巨樹の幹にこれまた大きな切れ込みが入つていたのである。

「きりり……？」

「まあ、そういうこと。このギガスシダー、恵みを吸いとる悪魔の樹を切る刻み手が、

僕。」

「といって近くに置いてあった斧を握るユージオ。」

「そんな天職もあるのか……この切れこみはユージオが?」

「そう……と言いたいところだけだね。この巨樹のきこりは僕で七代目。つまり、七代かけてもこの程度の切れこみしか入っていないのさ。切っても切ってもきりがない。一日に切り込んだうちの半分近くは次の日には元に戻ってるんだ」

七代でこの切れこみか。確かに切れこみは大きいとはいえ、七代かけてと言われると小さく見える。何代かサボっていたのではと疑ってしまう程だ。

「……なあ、ユージオ。俺にも手伝わせてくれないか?」

「え……?別にいいけど、どうして?」

「ちよつと、その巨樹がどんなものか知りたくて……それに、もしかしたら俺が切り倒せるかもしれないだろ?」

なんて格好よく言ってみたはいいものの、結論から言うとなんか全然出来なかった。何度か良い当たりもあったが、天命は50位しか減っていなかった。ユージオには初めてのわりにはすごいと誉められたが、俺はやや違和感を隠し切れなかった。

他のVRMMOの時や、リアルともまた違う。恐らく今の俺の身体能力は、この歳の男性の平均かやや上程度だろう。そして、この疲れ。VRMMOでも疲れることはあつ

た。しかしあれは長期間プレイしたが故の疲れであって、剣を振るうという行為に対する疲れではなかった。しかし、この世界では斧を振るう度に筋肉が疲労していった。本当に現実染みた疲れに俺は違和感を感じた。

ルーリッドの村に足を踏み入れた。眼前に広がるのは中世のヨーロッパを思わせる町並み。俺は、ユージオが事情を不思議そうな目で見てくる村人達に説明し、シスターの下でお世話になることになった。

「えーっと。あとわからないことは？」

「大丈夫。いろいろありがとう。」

セルカというシスター見習いの明るい茶色髪の少女に礼を言う。彼女は一瞬だけ表情を緩め、すぐに鹿爪らしい顔に戻ってうなずいた。

「じゃあ、おやすみなさい。」

「……ああ。おやすみ、セルカ」

一人になった俺は、先程出会ったルーリッドの村の人間的過ぎるNPC達に疑問を抱きつつも深い眠りに落ちていった。





## 第二章：《メガロス》

からーん。

「うー、あと十分……いや五分……」

「だめよ、起きなさい。」

「三分……さんぶんだけ……」

尚も肩をつんつんしてくる。セルカは優しいな。直葉なんて布団を剥がして叩き起こしてくるというのに。

「もう五時半よ。早くしないと礼拝に間に合わなくなるわよ」

まだ五時半じゃないかと思いつつ、長そうな説教をセルカが始めたので、そそくさとベッドを降り、シャツを脱ぬごうとする。

「なつーと、とにかく、早く来なさいね!」

セルカは顔を赤くしてそそくさと出ていった。

意外と初うぶなんだな。

着替えを終えて朝の礼拝を行った。俺は無信仰だが、教会で過ごす以上当然のことだと考え、信仰というよりは感謝をして礼拝した。その後朝食をシスターやここで暮らし

ている子供たちと摂る。朝食はかなり簡素なもので、正直、現実世界のものとは比べるとやはり目劣りしてしまう。この大人数だ。シスターたちもそこまで贅沢はいつていられないのだろう。俺は恵まれていたのだといまさらながら実感する。とはいえ、味覚はちゃんと機能するようで、その味はどれも本物のように感じた。

広場に行く、そこにはユージオがいた。

からーん。

丁度鐘の音が鳴り、先程の鐘の音色と違うのだと気づいた。

「……なるほど。」

「おはよう、キリト。どうしたんだ？」

「おはよう。いや、ここでは時計じゃなくて一時間ごとに変わる鐘の音で時間を知ってるんだなって。」

「トケイ？」

しまった、時計は存在してなかったのか、と冷や汗をかきつつ時計の説明をする、

「えっと……なんか丸くて、三本の針で時間を示しているやつなんだけど……知ってるか？」

「うーん？……あつ！それって時刻みの神器のこと？大昔にあつて、神様の怒りを人々が買って壊されたとかいう」

「ん？あ、ああ。それぞれ」

「キリトのいたところでは、トケイって呼んでたのか…もしかしたら故郷を探すヒントになるかもね」

故郷はわかるんだが、帰り方がな…

色々と考えた結果、この国？の首都らしい央都に行くのが一番の近道だろうということになった。

「さて、僕は仕事に行かないと。キリトはどうする？」

俺は少し考えた。探検もしたいが、央都にいつて調べたい俺としては、央都に行くためにユージオが必要だ。それゆえにユージオの天職について調べる必要がある。

「……今日も仕事手伝っていいか？」

「もちろん、そういうと思ってた」

ユージオはパンを二人分用意していた。そんなユージオに感謝しつつ、この世界のシステムについて考えながら仕事場へ向かった。



「うああ、もうダメだ、もう振れない」

俺は悲鳴をあげて斧を放り出して崩れ落ちた。

ユージオの差し出したシラル水を食べるように飲む。

「でも、キリトは筋がいいよほんと。かなりまともに当たるようになってる。」

「……それでも、まだユージオには及ばないからな」

溜息をついて座る。

幸い、この世界でもアバターを動かす勘やイメージ力はかなり機能するようだった。

それに、反復練習はアイコンクラッドですつとやっていた俺の得意分野だ。根気なら、

ユージオにも負けない。

いや……待て。俺はいま、何か…。

ー!?

その思考は突如として感じた違和感にかき消された。

なんだ、これー

森の奥から突如感じた空気に、俺は思わず身震いする。

ユージオも何か感じたようで、

「……？」

不安げな表情をしていた。

予感がする。何かとてつもないものが、現れたような。

「ユージオ……行くこう」

見たい。もしかしたらそれはこの世界のシステムに関わる何かかもしれない。元の世界に戻るかもしれないと思つたら、恐怖より興味が上回り、呆然とするユージオを連れて俺は森の奥へと足を踏み入れた。

「……酷い」

木々は薙ぎ倒され、地面は割れ、水が濁流となつて割れた大地を流れていく。

「《メガロス》だ……」

「め、めが……？」

「《メガロス》だよ。キリトが来る二ヶ月ぐらい前かな？突然現れて破壊の限りを尽くしたんだ。目に入るもの、動くもの、人も動物も区別なくね」

今じゃ災害のひとつだよ、と目の前に広がる惨状を見つめながらユージオが溢す。

「整合騎士も《メガロス》討伐に挑んだけど、結果は返り討ちにあつて討伐隊は壊滅。唯一生き残った騎士も手足を折られてて騎士としての生命を絶たれたらしいよ」

そんな怪物がこのアンダーワールドにいるなんて……。

「大丈夫、《メガロス》は夜しか活動しない。今まで何度か同じ光景を見てるし、襲われたこともないから」

俺が絶句しているのを《メガロス》に怯えてると受け取ったユージオが励ますように話してくれる。

「フオーウ」

……？なんの声だ？

「どうしたのキリト？」

「いや、今なにかー」

「フオーウ」

「やっぱりなにか聞こえる」

「え？僕にはなにもー」

こっちか！

微かに聞こえる声を頼りに倒木を飛び越えていく。

辿り着いたのは折り重なった倒木の山。

「いきなり走り出してどうしたの？」

「なにか声がー」

「ンキュンキュ」

木々の隙間から出てきたのはリスに似ても似つかない白い体毛で四足歩行の動物。現実でも見たことのない生き物だ。

「すごいやキリト！この子はね、見つけた者に幸運を運ぶって言われてるんだ。本当に実在したんだ」

「幸運を？」

「そうだよ。きつと《メガロス》が暴れて、それに巻き込まれたんだね。木に押し潰されなくて良かった」

白い蛇とか白いライオンとかの類いなのか？

「あつ！あんまり近づいちゃダメだよ。警戒心が強くて人前に現れるのなんて滅多にな  
いんだから」

「あ、ああ悪い」

確かに触ろうとした手をすごい見てる。心なしか飛び退こうと重心も移動させてる  
し。

「名前は何て言うんだ？」

「え？知らないの？キャスパーだよ」

キャスパー……有名なのか。

「きつとこれから良いことが起きるよ。キャスパーを見たしね」

「そういうものか」

「そういうものなんだよ」

「ふーん、海馬にダメージがあるね」

「原因はなんでしようか？」

「さてね。どちらにしろこちらには好都合だ」

「これが君たちの正義か!？」

「必要な犠牲ですよ。この国の未来に繋がる必要な、ね」

「だからと言ってー」

「教授ーいえ元教授でしたね。元教え子を巻き込むのは気が引けますか？全S A O サバイバーを巻き込んだあなたが」

「……………」

「彼にも役割は与えています。彼らを次のステージへと昇華させるための必要な役割をね」



「うああああ!!」

「静かに起きれないの？」

「……………ああ悪い」

「随分うな驚おどされてたみたいだけど大丈夫？」

夢、だよな？内容は思い出せないけど、とても嫌な夢を見た気がする。動悸が治まらず心臓が張り裂けんばかりに脈動してる。

今日も今日でユージオの手伝い。

俺達は昼食のパンを食べ、ユージオはセルカが実はアリスの妹だということや、最近南にゴブリンの集団が現れておかしい事が多いこと、偉い人にしか使えない天命を回復させる《神聖術》の話をした。



「? ユージオ、なに読んでるんだ?」

「これ? 《ラーズグリーズの悪魔》っていうお伽噺だよ」

「歴史が大きく動くとき北の海よりラーズグリーズが現れる。はじめには漆黒の悪魔として

ラーラーズグリーズはその力をもって大地に死を降り注ぎ、やがて死ぬ

ラー暫しの眠りのあとラーズグリーズは姿を現す。

ラー英雄として現れる。

「多分、ラーズグリーズは気付いたんだと思う。自分本意に力を振るつてもなにも残らないって、だからその力の人々のために使うことにした。僕はそう考えてる」

ラーズグリーズ……たしか颯真が言ってたな。

『計画を壊す者もしくは戦いを終わらせる者として伝えられてるヴァルキリーの一柱だ』

……だからなんでそんなに詳しいんだよ。

まあアイツの部屋で北欧神話の本を読んだ俺が質問したんだけど。

そしてユージオは『お伽噺と言え』と物置小屋からあるものを運んできた。

『《青薔薇の剣》。これもお伽噺じゃそう呼ばれてる』

「お伽噺ってラーズグリーズのか?」

「ううん、『ベルクーリと北の白い竜』ってやつでね。果ての山脈を探検にかけたベルクーリは、洞窟の奥深くで白竜の巢に迷い込むんだ。竜は昼寝中で、彼は巢の周りの宝のなかの白い剣を見つけて持ち帰ろうとしたら、足元から青い薔薇が生えてきて、ぐるぐる巻きにされちやつて、倒れた音で白竜が目を醒ましたってお話」

続きを尋ねるがユージオは長くなるから、と端折ってしまった。

「まあ、いろいろあつて許してもらつて、剣を置いて命からがら逃げ帰つたつていう他愛ない話さ」

「じゃあその竜は今も？」

「いや……六年前にアリスと探検したときにはもういなかった。あつたのは宝の山だけだった。この剣は、三年前に運んできたんだ。ここまで運ぶだけで三ヶ月かかったけどね」

俺は暫く剣を見ていて、あることを思いついた。

「……ユージオ、ギガスシダーの天命を調べてくれ」

「この剣で斬ってみるの？……23万2315だね」

「見てろつて、重い剣は重心の移動で振るんだ」

俺は《ホリゾンタル》を模倣した右中段水平斬りを見せるも、踏ん張りきれずふらつき、俺は反動で顔から大樹の苔こけ突つ込んだ。

「わあ！言わんこつちやない！」

「……けど、劍の力は本物らしいな」

そこにはギガスシダーに切り込んでいる《青薔薇の劍》の姿があった。

「な？とりあえず天命みてみるよ」

頷き、ユージオは窓を食い入るようにつめた

「23万2314……切り込んだ場所が悪いんだ。ちゃんと使いこなせれば、もつと天命を減らせたと思う」

試行錯誤しギガスシダーに《青薔薇の劍》を打ち込み続け、二万ほど天命を削れた頃には日が傾いていた。

今日はここまですてまた明日、とユージオと共に帰途へ着いた。

ギガスシダーの上から見つめる一匹の獣に気づかないまま。

「うっはあ〜」

風呂に浸かって俺は今日の疲れを癒した。

もう俺がこの世界にきてから三十時間以上が経つ。今の俺は大ピンチでもあり、ラーズの真の目的を探る大チャンスでもある。

「あれ？まだ誰か入ってるの？」

声が脱衣場から聞こえてきた。

恐らくセルカだろう。

「キリトだ。もう上がるから……あと、今夜時間あるかな？」

「……で、話って？」

「アリス。君のお姉さんのこと。ユージオから聞いたんだ」

「……そっか。ユージオ覚えてたんだ……今でもアリス姉様のことがなにより大切なのね……」

「セルカは……ユージオが好きなんだ？」

俺が言うのとセルカは顔を真っ赤にして言った。

凶星か。

「なつ、そんなんじゃないわよ！……なんだか、堪らないの。みんな私と姉様を比べる。でもユージオはそんな人じゃないけど私を避けてる。姉様を思い出すからって。……そんなの私のせいじゃない！私は、姉様の顔すら憶えていないのに……」

小さな背中が震える。俺はどうすればいいのかわからなかった。しばらく沈黙が続く。

「……ごめんなさい。なんだか、少しだけ楽になったわ」

「……君はセルカだ。アリスじゃない。自分は自分だから、自分にできることをすればそれでいいんだ」

「……そうね。あたし自分からも、姉様からも逃げてたのかもしれない……もうこんな時間。あたし戻るね。明日は安息日だけお祈りはあるからちゃんと起きるのよ」

「が、頑張ってみる」

一瞬だけ微笑んで、セルカは部屋を出ていった。

俺は顔を閉じてアリスの姿を想像しながら眠りについた。

「……ふうん。彼も良い仕事をするね」

「自意識はなく破壊衝動に身を任せてるだけですが……う？」

「それでもだよ。確かにこちらからのバックアップがあるとはいえ、ここまでの戦果を出せるのは彼の戦闘力故さ。ソフトにハードが追い付けない場合どうなるか、それは君たちもよく知っているはずだ」

「……そう、ですね」

「感情のないAIが進化するためには恐怖と痛みが必要だ。その恐怖を乗り越え、痛みから逃れるためにより人間に近い脅威判定を備え、対象を排除する。そうした脅威判定

を備えることで新機軸のAIが産まれる。それこそが我々の目的なんだからね」

## 第四章：果ての山脈

からーん。

鐘が鳴ると同時に目を醒ました俺は、やればできるものだ、と思いつながらベッドから降り、窓を開け放つと、大きな伸びをして朝の冷たい空気を胸一杯に吸い込んだ。

着替えてから井戸で脱いだ麻の服を洗う。ちよくちよく洗わないと天命の減りが早いらしいっていうのもあるけど、洗ってない服を着ると言うのも精神的に嫌だ。

朝食を食べるために食堂に向かう途中でシスターからセルカの姿が見えないという話を聞いた。

こんなことは初めてでどうしたらいいか分からないと。

胸騒ぎが収まらないまま、広場へ向かい少し経つと広場に入ってくる亜麻色の髪を見つ駆け寄せた。

「やあ、おはようキリト」



「おはようユージオ」

「セルカがいなくなつたんだ。探すの手伝つてくれないか？」

「え？セルカが？」

「ああ。こんなこと初めてらしい。ユージオは、セルカの行きそうな場所に心当たりはないか？俺は昨日、セルカとアリスの話をしたから、もしかしたら――」

そこまで言つて俺は今更ながら、胸騒ぎの正体に気づいた。

「――果ての山脈だ！セルカはアリスの話を聞いて、そこに向かつたんだ！」

半ば駆け足で山脈へと向かう。

道中の踏まれた足跡から子供が果ての山脈に向かつたことはわかっている。セルカが万が一にも闇の国に入つてしまわぬように早く連れ戻す。そうして俺たちは果ての山脈へと足を進めていった。

「着いたよ、この洞窟だ」

俺たちはようやく大きな洞窟の前に到着した。洞窟はかなりの高さで幅があり、勢いよく流れる小川の左側に、二人が並んで歩けそうな岩棚が張り出していた。奥のほうは

真つ暗闇で、時折凍りつきそうに冷たい風が吹き抜ける。

「おい、ユージオ……灯りはどうするんだ？」

俺が訊くとユージオはいつの間にか拾っていた一本の草穂を掲げた。俺が唾然とするなかでユージオが口を開く

「システム・コール！リット・スモール・ロッド！」

システムコール!?

驚いたのも束の間。草穂の先端に青白い光が灯った。神聖術だよ。練習したんだ、とユージオは微笑む。言葉の意味は知らないらしい。俺は改めて此処が仮想世界なのだと実感した。

「なあ、俺にも使えるか？」

「素質のある人なら一日でも使えるし、出来ない人は一生掛かっても出来ないって。さすがに今すぐには無理じゃないかな」

興味本位で訊いてみたが、魔法―神聖術を使うのはすぐには無理そうだ。ここでは一先ず諦め、洞窟の中へと足を進める。途中で凍った水溜まりに踏み割られたようなヒビが走っていた。

「……間違いないみたいだな。全く、無鉄砲というか恐れ知らずというかなんとというか」と、俺がぼやくとユージオは不思議そうな表情をして、

「別に、此処にはもう白竜もいないし、それどころかネズミやコウモリすらいらないよ？」  
どうやら変なエネミーとかは出てこないらしい。そうか、と力を抜こうとした。その時だった。

妙な音と樹脂の焼けるような匂いと僅かに混ざる生臭い獣臭、そして――

『きゃあああ!!』

女の子の悲鳴が聴こえてきた。

「まずいー」

「セルカ……」

俺とユージオは同時に叫ぶと、凍りついた岩に足を取られつつも全力で走り出した。

呼吸は乱れ、空気を求め喘ぐ度に激しく胸が痛む。しかし、速度を落とす訳にはいかない。セルカを犠牲になど出来ないのだ。

不意に、行く手の岩壁にオレンジ色の光が揺れた。どうやら奥はドームのようだ。俺達は意を決して同時に飛び込んだ。

すべてを視ろ、そして最適な行動を起こせ――可能な限り早く。

ほぼ真円のドーム。床は氷に覆われ、端の方にはセルカが倒れている。中央部分だけ大きく割れていて、その周りに三十を超える『異形』が集まっていた。

身長は俺の胸ほどまでしかない。しかし、その体躯は幅があり、異様に長い腕と鋭い

爪は逞しい。革の鎧と、鑄物の蛮刀を身につけ、肌はくすんだ灰緑色

ＲＰＧではお馴染みの低級モンスター《ゴ布林》そのものだった。

俺はほんの少し安堵した。ゴブリンのステータスというのは、大抵かなり低く設定してある。

しかし、こちらに気づいた一匹が視線を向けた瞬間。俺は骨の髄から凍りついた。その異様に大きな黄色い目玉には、僅かな不審と驚き、そして残忍な悦びと飢え——悪意があつた。

こいつらも只のプログラムじゃない!?

俺は既にここの住人の正体に行き当たっていた。彼らは恐らく何らかの人造メデイアに保存された、《人工フラクトライト》なのだ。現実世界の人間のデータを基にフラクトライトを生成し赤子から成長させる。

それ以外にこの状況を説明出来ない。

つまり、ラーズの目的は——真なるＡＩ、人工の知性を創ることだ。人間を鑄型にすることで。

しかし、このゴ布林は人間のそれとは思えない。ならばこの本物としか思えない強烈な悪意は一体……。

「おいおい、見ろよ！——まーた白イウムの餓鬼が二匹も転がりこんできたぜえ！」

途端に、ゴブリン達の喚き声が溢れ、こちらに餓えた視線をぶつけてくる。

「どうする、こいつら捕まえるかあ？」

「男のイウムなんぎ、売れねえよ。そいつらは殺して肉にしろ」  
殺す。

その言葉に俺は少し戸惑う。もし、この世界で俺が死んだらどうなるのだろうか。セルカや、ユージオは一体どうなるのだろうか。とにかく、やるべきことはひとつ。

「ユージオ、セルカを助けるぞ」

「う、うん」

凍りついていたユージオの体がびくりと動き、詰まりながらも返事を返す。やはり芯は相当強いらしい。

「まずは前の四匹を突破。俺は左、ユージオは右のかがり火を池に倒せ。そしたら床の剣を拾って俺の後ろを守ってくれ。俺がでかい一匹を片付ける。……行くぞ一、二、三！」

俺たちは雄叫びを上げながら走りだす。その様子に驚いたゴブリンは眼を丸くして立ち止まっている。そこに全力のタックルを喰らわせたなら、すぐ俺とユージオはかがり火に飛びつき水面へ蹴り飛ばした。

暗闇に包まれるなか、ほのかな青白い光がみえる。ユージオの神聖術による光だ。ど

うやらゴブリンはその光が苦手らしい。顔を覆ったり、うずくまったりしている。俺達は、今がチャンスだ、と剣を拾って駆け出す。

「ぐるらあつ！この《蜥蜴殺しのウガチ》様と戦う気かあ！」

「違う！戦うんじゃないー勝つんだ！」

そう自分に言い聞かせるように叫び、距離を縮める。剣を左肩目掛けて袈裟懸けに斬り降ろすが、敵の反応も予想以上に早く、肩当てを砕くに止まった。横殴りに振り回される蛮刀をぎりぎり掻い潜る。

がら空きの脇腹へ水平斬りを放つが、やはり防具を弾いただけで、手傷を負わせられない。

単発攻撃では埒があかない。そう判断した俺は、SAO時代に何度も反復し体が覚えられたソードスキルの型を再現しようとする。その刹那、剣が微かに赤い光を放ち、体が自然に動いた。

片手剣三連撃技《シャープネイル》は、真正正銘の本物だった。《ライトエフェクト》と《システムアシスト》が稼働したのだ。つまりソードスキルは存在する。以前《ホリゾンタル》を使った時には成功しなかったのに何故、と考えを巡らせていた俺は失念していた。

此処が只のVRMMOでない。

ゴブリンはポリゴンのモンスターと違い、攻撃を受けても一瞬も動きを止めようとしなかった。そして振り回された刀を俺は回避できず、吹き飛ばされた。

「キリト!!」

ユージオの叫びが聞こえ、かすり傷だと返そうとするも左肩から全身の神経が焼き切れるほどの痛みが弾け、涙が溢れた。

「っっっ!!?!」

「こんな! 仮想世界が、あつて、たまるか……!」

現実世界の痛みにはまったく慣れていない。VRMMOではヒットポイントの減少でしかなかったのだから。

俺はこの時初めて魂に直接アクセスするという言葉の意味をようやく知った。

「……………取り敢えず、お前らを八つ裂きにして食い散らかしてやる……!」

痛みにも悶絶している間にウガチが俺の目の前に来ていた。

俺は、終わるのか。振り下ろされる刀を眺めながら、しかし、その刃は俺の元へは届かなかった。

「キリト……キリト……!!」

気づいた時には目の前で亜麻色髪の少年が真っ赤な血を流して倒れていた。

「ユージオ……………」





なら、と奴の注意を引かないように這いずってなるべく音を立てないようにユージオに近付き容態を調べる。

青ざめた瞼はぴくりとも動こうとしない。ほんの少し開かれた唇に弱々しい息遣いをかんじるが、今にも止まってしまいそうだった。

俺はユージオの肩を叩き天命を確認すれば残りの天命は244。恐らくあと八分程しか時間は残されていない。

「……待ってろ、すぐ助けるから」

ドームの片隅、岩影の奥にユージオを運び、今も暴れまわってる奴の視界に入らないようにする。

考えろ。

思考を止めるな。

最適解を導け。

今度は、ドームの隅で倒れているセルカの元へ全力で走る。幸い大きな怪我はしていないようだ。

「セルカ!!目を醒ましてくれ!!」

するとライトブラウンの瞳が見開かれ、喉の奥から小さな悲鳴が漏れるも、俺を認識したようでひどく驚いた顔をしていた。

「キリト……なの？」

「ああ、助けにきたよ。セルカ」

その瞬間、セルカは顔をくしゃつと歪ませ、俺に抱きつく。俺はセルカを両腕で抱え走り出した。

「泣くのはまた後で！それよりユージオが！」

すぐにセルカにユージオを診てもらおう。セルカはユージオの深い傷に触れた途端、その手を引つ込めてかぶりを振った。

「……無理……こんな傷……あたしの神聖術じゃ……」

あたしのせいで、と泣くセルカ。

「無理でもいい、やってみるんだ！君は次のシスターなんだろう!?アリスの後を継いだんだろ!？」

セルカの肩がびくりと震え、しかし力なく落ちる

「……ごめんなさい……私は姉様のように……ごめん……ごめんね、ユージオ……」

「馬鹿野郎!!ユージオは君を助けに来たんだ！俺だってそうだ！アリスじゃない、セルカを助けるために！」

セルカの肩が大きく揺れる。

一瞬の静寂



ヤバイ！見つけた！

これだけ派手な光だ。見つからない方がおかしい。

「《メガロス》……」

「こいつが……?」

森を薙ぎ倒し、地面を割り、目に入るもの区別なく破壊する災害。その正体が目の前の化け物だつていうのか？

まだ神聖術の途中だ。ユージオが完治してない以上、俺たちは動けない。

「フォーウ！」

その巨大な手が届く瞬間、聞き覚えのある鳴き声が聞こえ俺たちの間に割って入った。

「キヤスパー……?」

「え?キヤスパー?本当に?」

白い体毛に包まれたその姿は人間違えるはずもない。

毛を逆立てて威嚇しているけど、キヤスパーの大きさを考えればあの手で掴まれただけで容易くその命を握り潰される。

「■■■■……」

「なんだ……?」

つい先程までの敵意は鳴りを潜め、踵を返して洞窟の奥へと消えていった。考えるのはあとだ。今はユージオを安全な場所まで運ばないと。セルカの手を借り、ユージオを背負って洞窟を後にした。

敵意の消えたときの《メガロス》の目……。

俺たちを知ってるかのような、そんな感じがした。

俺とユージオとセルカは次の日の朝、シスターに呼び出されて村の広場を訪れた。そこに居たのは村の人々だった。みんな俺たちの顔を見て、安堵していた。

話を聞くと、日が暮れても子供が3人帰ってこないと捜索隊を出そうか話し合い、出発する寸前までいったそう。そこに帰ってきた俺たちから事情を聞いたシスターが止めに入ったらしい。

彼らの思いやりに感謝しようと、俺が声をあげようとしたとき、村の人々の中から一人の男性が出てきた。ルーリッド村の長でセルカとアリスの父、ガスフト村長だ。

その後、村長からの叱責を受けた俺たちは事情を説明しろと迫られ、北の洞窟に野営していたゴブリンの集団のことで《メガロス》と遭遇したことを話した。

けど村長達は子供の戯言だと笑い飛ばすだけ。

確かにアレを見たから分かる。アレは対峙しちや、戦つちや駄目なやつだ。

SAOで培われた勘が警鐘を鳴らし、体は意思とは無関係に逃げようとしていた。

あの巨大な手が近付いた時、もう駄目だとも思った。俺はここで死ぬのだと。

俺たちを助けてくれたのがキヤスパー、幸運の獣。

だけど《メガロス》はキヤスパーに怯んだ訳じゃない。上手く言葉に出来ないけど、正気に戻った？そんな感じ。

肝心のキヤスパーは洞窟を出たときに何処かへと走り去っていった。またどこかで会えるかもしれない。

打楽器のように軽やかに澄んだ音が、空高く拡散した。どうやらユージオも調子が良いらしい。竜骨の斧を軽々と使い、かなり真芯に当てている。それも当然だろう。今朝、自分の《窓》を開いたときにオブジェクト・コントロール権限、システム・コントロール権限、天命の最大値が大きく上昇していた。つまりレベルアップしていたのだ。それとなくセルカにも確認したところ、神聖術が妙に上手くいく気がするらしい。セルカは戦闘はしていない。つまり、俺たち3人がパーティー扱いされ、全員に経験値が入ったのだろう。

そこはまだわかるのだが、やはり気になるのは――

「なあ、ユージオ。お前が倒れてたとき、誰か……女性の声とか姿とか感じなかったか？」

「セルカのこと？……うーん。言われてみれば、なにか暖かさを感じたような……？」  
『セントラル・カセドラルで待ってる』そう言っただけで俺たちを救った誰か。そして死を予感したときに走った走馬燈のような光景。渦巻く思案を一度中断し、作業に集中する。

「いや、なんでもない。次は俺の番だな」

「そういえば……セルカにはちゃんと伝えたのか？」

「もちろん。早朝に教会の近くで会ったときにね」

なるほど。だから今朝はセルカの機嫌が良かったのか。今朝のセルカの言葉を思い出す。

『私、自分らしく生きたい。姉様の代わりじゃない、私自身として。……だから、その……ありがとう』

と、顔を赤らめて足早に去っていった。彼女が幸せに生きられるよう、俺も応援しないとな。

……俺も仕事に集中しないと。俺は央都に向かわないといけないのだから。

ふと、俺はあることを思い付いた

傍にあった一本の剣——《青薔薇の剣》を掲げる。

「キリト、持てるのかい、その剣が？」

「まあな」



ユージオを前にして俺は片手剣単発ソードスキル、《ホリゾントル》を繰り出す。技のイメージと融合したシステムアシストが動きを加速させ、斬撃に凄まじいスピードと精密な照準を与える。痛烈な衝撃音が轟き、ギガスシダーの巨木がびりびりと震えた。

「今のは……剣術かい？その、流派の名は……う？」

「……アインクラッド流だ」

咄嗟に思い付いた名だが、それ以外にはあり得ないと感じた。俺の技は、あの浮遊城で身に付け、磨いたものだ。

数秒後、顔を上げたユージオの眼には毅然とした強い輝きがあった。

「——僕に、アインクラッド流剣術を教えてください。もしかしたら、何かの規則に違反するかもしれないけど……」

ユージオは少し顔を俯く。

彼は今、葛藤しているのだ。掟と、自分の意思とで。

運命を自分の意思で切り拓こうとしている。

「……でも、僕は……強くなりたい。なくしたものを……取り戻すために。僕に、剣を、教えてくれ」

「……解った。付いてくれるな？」

——こうして2人での、修行が始まった。





## 第五章：天職

甲高い音が空へと響き、森全体を揺らしてゆく。

「せああっ！」

ユージオの放った片手剣単発ソードスキル《ホリゾンタル》は仄かに赤く光るエフェクトライトを放ちながら、吸い込まれるように切れ込みへと向かっていった。

俺が型を見せて、それを模倣する。ユージオのセンスはなかなかのもので、俺が何度か型を教え込むと少しずつだが出来るようになっていった。

もしかしたら、俺よりも覚えが早いかもしれない。俺もうかうかしていたら、あつと  
いう間に抜かれてしまうだろう。

ついにその時はやって来た。

水平斬りを受けた巨樹が、それまでにならない不気味な軋み声を発した。

俺達は唾然とし、次いでギガスシダーの幹を仰ぐと、驚愕で凍りついた。

地面の方が傾斜しているのでは、と錯覚するほどに巨樹が重力に屈して頭を垂れる光景は非現実的なものだった。

大きすぎる自重に耐えきれなくなった巨樹は、石灰のような欠片を辺りに撒き散らしながら周りの樹木を圧潰していった。

俺達はその光景をただ見つめていた。

赤々としたかがり火が、集う人々の顔を明るく照らし出す。楽団の陽気なワルツと、それに合わせて踊る人々の靴音や手拍子が夜空へ舞い上がる。村中が活気で満ち溢れ、喧騒が絶え間なく聞こえてくる。

俺達は少し落ち着いた場所でその様子を眺めていた。

ギガスシダーが切り倒されたことを知った人々はまたも村会議を余儀なくされた。なにやら不穏な意見も飛び交ったらしいが、最終的にはガスフト村長の鶴の一声で、祭を催し、ユージオは法の定める通りに遇することになった。

真実を知り、脱出するために央都へ向かう。その計画の最大の障害だったギガスシダーは切り倒した。あとは…

「なあ、ユージオ……お前、このあと……」

「あつー！いた！何やってんのよ、お祭りの主役が」

続きを口にする前に、甲高い声が頭上から降ってきた。カチューシャも飾り、赤いベストと草色のスカートを身に付けていた少女——セルカが両手を腰にあて、胸を仰げ反らせて立っていた。

「ダンスに参加しなさいよ貴方達」

「あ、いや……僕、ダンスは苦手で……」

「お、俺も、記憶喪失だし……」

「貴方達ねえ……やればなんとかなるわよ!!」

セルカは俺達を有無を言わせず広場の真ん中まで引きずり、威勢良く突き飛ばされ踊りの輪に吞まれる。

最初は戸惑い、見様見真似で踊っていたが、そのうちどんどん楽しくなってきた、気がつくともステップを踏む足も軽くなっていた。

——そういえば、以前もこうしてダンスをしたことがある。シルフの剣士リーファ。彼女の微笑みを思い出し、胸が痛くなる。

俺は、早く帰らないと。SAO事件あるときも、彼女はずっと俺の帰りを待ち続けていた。俺には待つてくれる人がちゃんといえるのだから。

俺がホームシックの切なさに浸っていると、唐突に音楽が終わった。周りを見回すと演台には、ガストフ村長が立っていた。

「ルーリッドの村を拓いた先祖達の大願はついに果たされた！悪魔の樹が倒されたのだ！我々はこれで、新たな畑や放牧地を手に入れるだろう！」

再び歓声が沸き上がる。それが収まると、村長は

「オリックの息子ユージオよ、ここに！」

すると、緊張の面持ちでユージオが壇上に上がる。隣の男性が父親だろうか。表情は誇らしげというより戸惑っているように見える。

「余り似ていないな」

なんとというか、見た目も髪の色以外似ていない。恐らく精神も。

ユージオが村長の隣に立ち、広場に向き直ると、大きな歓声が浴びせらせる。

「掟に従い——ユージオには、自ら次の天職を選ぶ権利が与えられる！」

——なんだって!?

ダンスなどしている場合では無かった。ユージオに念押しをすべきだったのだ。ここで、僕は麦を育てますなどと言われてしまえば、万事窮するのだ。

ユージオはなにやら迷っていたが、暫くの後、腰の《青薔薇の剣》の柄を握り宣言した。

「僕は——劍士になります。ザツカリアの街で衛兵隊に入り、いつか央都に上ります」  
静寂の後、村人にはどよめきが広がる。皆、苦々しい顔をして、なにやら話していた。  
「ユージオ、お前はまさか……いや、理由は問うまい。よかろう、ルーリツドの長として、ユージオの新たな天職を劍士と認める。」

俺はつい安堵の息を漏らしていた。これで央都に向かうことができる。

「待つて貰おう！」

と、一人の若者が前に出てくる。セルカから話を聞くと、彼はこの村の衛士長らしい。俺が見守っていると、なにやら話は二人が決闘をし、勝った方の意見が聞き分けられることになったようだ。

「ど、どうしよう……なんだか大ごとになっちゃったよ」

「いや、劍は使うけど寸止めだよ」

「ふうん……でもその劍だとなあ……いいか、アイツじゃなくて、劍を狙え。《ホリゾンタル》一発で終わるはずだ」

「本当に……？」

「ああ」

要領を得ないユージオだが、俺の真意を伝えると納得したように頷き衛士長と向き合  
い、



ついに試合が始まった——

僕は《青薔薇の剣》を正眼に据え、左手左足を引いて腰を落とす。

「——始め！」

その合図が聞こえた瞬間、相手が仕掛けてくる。

威勢の良い掛け声とともに、彼はそのまま上段からの斬り下ろしを——しなかつた。

相手の剣が、空中で大きく軌道を変える。上段斬りに見せ掛けての水平斬り。《ホリゾンタル》での迎撃は難しいだろう。

そう《ホリゾンタル》なら。

——ああ、やつぱり

僕は衛士長——ジंकを知っている。彼が決して無能ではないことを。彼の努力を。だから、彼が何か仕掛けてくることは分かっていたのだ。それがただ、漠然と不安だった。それでも。僕はキリトの言葉を思い出す

——不安があるならそれでもいい。だけど恐怖に飲まれちゃダメだ。臆病なら臆病者なりの戦い方がある。

——僕は、臆病者だ。

整合騎士が怖かったから、アリスを救えなかった。

決まりを破るのが怖かったから、アリスを助けに行かず、巨樹を切り続けた。

また目の前で誰かを失うのが怖かったから、キリトを庇った。前と同じ過ちを犯すのが怖かったから、強くなろうとした。

僕はいつだって怯えながら生きてきた。でも、それでも…君を助きたい。この想いだけは、嘘になどしたくない。

——今更、勇敢な騎士にはなれないけれど、君を助けに行くよ。アリス。

後にキリトに教えられるはずの技だった斜め斬り《スラント》を放つ。それは稲妻の如く閃き、水平斬りの途上にあつたジンクの剣を叩き、粉碎する。

——その日、臆病者は、運命に抗った。

アルヴヘイム南西部、シルフ領首都スイルベーンは夜の帳に包まれ、店々は固く鎧戸を下ろしている。

——現実時間午前四時。最もアクセス数の少なく、静寂に包まれた街並を眺めているのは水妖精族ウンデイナーネの女性。

水色の長い髪を垂らし、窓を見つめるその姿は憂いを帯び、いつも透き通るように白い肌はその白味がさらに増していた。こめかみを抑え、何やら思い詰めているその姿は、まさしく疲労困憊といったところだ。

「大丈夫ですか、アスナさん？」

「二人とも、無理してたらいざというときに頭が働かないわよ」

気遣わしそうに訊ねるのは長い鮮やかな金髪を一つに結っている風妖精族シルフの少女——リリー  
フア。

彼女の声もまた、元氣そうに聴こえるものではなかった。

そんな二人に忠言アドバイスを告げたのはアイスブルーの髪に三角の耳を伸ばした猫妖精族ケットシの少女——シノン。

アスナは二人に目を向けると、こくりと頷いた。

「うん……あとでベッドを借りるわ。本当、睡眠魔法がプレイヤーにも効けばいいのに」  
「揺り椅子で寝てるお兄ちゃんは、なかなか眠気を誘うんですけどね……」

リーファの呟きにアスナとシノンは口許を力なく綻ばせる。

「それじゃ、改めて……結論から言うと、お兄ちゃんが所沢の防衛医大病院に運ばれた証拠は見つかりませんでした。完全面会謝絶、ユイちゃんが病院の防犯カメラに侵入してもお兄ちゃんは映っていなかった。つまり、防衛医大病院には居ない可能性が高いです」

「……………」

三人の間に重い沈黙がはしる。

——事の始まりはSAO：《ソードアート・オンライン》時代のとある出来事まで遡る。

仮想世界での死が現実世界での死に繋がるというデスゲームの中でも、自分たちから進んでPK：《プレイヤーキル》を行う人々がいた。《レッドプレイヤー》を名乗る彼らは一人のプレイヤー《P\_oH》によって組織された。そのギルド名は「笑う棺桶ラフィン・コフィン」。

彼らは悪逆非道な殺戮を繰り返し、多くの人々が犠牲となった。

そして結成から八ヶ月後、アインクラッド攻略組による討伐部隊の手によつて壊滅させられた。

死闘の末、ラフィン・コフィンで生き残り、牢獄に送られたのは十二人。そのなかにも、死者の中にも《P O H》の名は見つからなかった。

そして時は流れ、S A O から生還。アスナたちが須郷の手によつて仮想世界に囚われた事件も、キリトやリーファを中心に多くの人々の力で解決。何とか現実世界に戻り、平和な日々を送っていたある日、G G O で銃で撃たれた人間が現実世界でも死亡しているという不可解な事件：《死銃<sup>デス・ガン</sup>》事件が発生する。

キリトとアルトがシノン達と協力して突きとめた犯人は、《ラフィン・コフィン》の生き残りである《赤眼のザザ》そしてその弟。さらに彼らにはあと二人、仲間がいた。それが《クラディール》と《ジョニー・ブラック》。

ザザと弟が逮捕されクラディールは自殺。しかし、ザザのS A O 時代の相棒で、《死銃》事件の犠牲者のうち二名を殺害した実行犯でもある《ジョニー・ブラック》だけは行方を眩ましていた。

——そしてほんの二日前、事件は起こった。

行方不明だった《ジョニー・ブラック》による襲撃を受けたのだ。結果、桐ヶ谷和人

は《死銃》事件で殺害に使われた薬品——サクシニルコリンを注射され、意識不明の重体となった。

その場に居合わせたアスナは、すぐさま救急車を呼ぶもキリトは心停止状態に陥ってしまう。

——それを何も出来ずにただ見ていることしか出来ない自分が、何よりも悔しかった。

その後、奇跡的に心拍が戻りなんとか一命を取り留めたと聞いたアスナは、安堵のあまり失神しそうになったが次いで告げられた、脳にダメージが発生した可能性があり、最悪の場合はこのまま意識が戻らないだろうという言葉で再び不安感に襲われる。

直葉に連絡をとり、その日は駆けつけた直葉とキリトの母と共に一夜を過ごした。

その後、一旦家に帰ったアスナ。するとキリトの母から連絡があり、自宅近くの病院へ転院することになったはずのだが……………

キリトはどうやら、病院に転院せず何者かによって拉致されたという。この状況でぐっすり寝ろというのは無理な話だろう。

「犯人は、キリト君が入院した途端その情報を入手できて、本物の救急車を自分の目的のために出動させられる人間……そのことはもう敵と呼ばせてもらうけど、敵の力はかなり強大なものね」

「いっそ、警察に届けるのは？」

もつともなシノンの提案だが、アスナはかぶりを振る。

「データ上ではキリトくんはあそこに存在する事になつてる。恐らく警察は動いてくれないわ」

「……でも、どうすれば……というかそもそも敵は何でこんなことをしたのかな？ お金

……はないとして、恨みはありうるけど」

「いや、確かにキリト君に恨みを抱く人はいるだろうけど、こんな強大な権力を持つ人物となると……」

考え込むリーファとアスナ。そこに、シノンが少し自信なさげに呟く。

「あのさ……根拠はないけど、敵はキリトのVRMMOでの能力を求めてたんじゃない？……魂に直接アクセスできるなら、意識不明でもフルダイクは可能でしょ？」

「！まさか、ラースが!？」

「え？あの、お兄ちゃんがバイトしてたとかいうあそこですか!？」

二人が驚き、ラースについて考えていたところ、ユイがやって来てさらに衝撃の事実を伝える。

「——キリト君が、ヘリで何処かへ連れていかれた!？」

「はい、恐らくは日本の何処かだと考えられます」

「なにそれ、ラースつてもしかして国と繋がってたりするわけ?……キリトにもつとちやんと聞いておくんだった。あの時は……確か、アリスが何とかって」

「ラースっていうのは不思議のアリスに出てくる豚だか亀だかって奴のことね。それにしてもアリスか……キリト君、聞き覚えがあるのかなんとか」

「もしかしたら、ラースの研究所で聞いたのかもですね。何かの頭字語かな?」

「あつ!それなら確かキリト君が前に……確かアーティフィシャル、レイビル……インテリジエンスみたいなの……」

「恐らくArtificial Labile Intelligence……《高適応性人工知能》です。これが、私のようなトップダウン型でなく、ボトムアップ型を示しているとするれば、その人工知能は人間と真に同じレベルに達しうる存在のことですね。」

「……そんな、じゃあラースの目的は、真の人工知能を創ること?」

「やっぱり、国と繋がってるのかな。バイトを紹介したのつて総務省の菊岡さんだし……でも、国絡みなら隠蔽されてて何も分からない……」

「いえ、分かるわ」

手袋はないというリーファの言葉を遮ったのはシノン。

「予算よ。そんな莫大な資金、流石にちよろまかすことは出来ない筈。国会の予算を見



たら、何かの名目で予算に計上されてるんじゃないかしら」

「えつと……該当するものは見当たりませんでした。一つ。海底の油田やレアメタル鉱床を探すためのAIの予算が。優先度に対して額が大きいので、検索フィルターに残ったようです。プロジェクトは《オーシャン・ターゲット》に置かれていますね」

「あ、それ知ってます。確か海に浮くピラミッドみたいな……」

「待って。ユイちゃん、その画像出せる？」

「はい」

そうして目の前に現れたのは、確かに黒いピラミッドのような代物。四方の角からは突起が突き出し、カメの様に見える。

「でもこの頭のところ、ちよつと平らに突き出して他の動物にも見えない？」

「あー、そうですね。ちよつとブタにも見えますね。泳ぐカメブタだあ」

と、無邪気な声でリーファが言う。直後、自分の言葉に打たれたように両目を見開く。「カメでもあり……ブタでもある……」

三人は互いに見つめ合い、声を揃えて叫んだ。

「——《ラーズ》！」

「息ぴったり合わせたとこ悪いな。悪いお知らせだ」

答えに行き着いたところで姿を表したのはSAOでもお世話になっていた情報屋

【鼠】アルゴ。

「悪い……お知らせ？」

「アルトが病室から運び出されて行方知らずになつた。運び出されたのはキー坊が襲われた少し前になる。入院してた病院も転院する話をそのまま鵜呑みにしてみたみたいだ」

多分アルトくんを拉致したのもラースかもしれない。

でも一体何のために？

一体何が起きてるの？

言い知れぬ不安に胸の奥がざわついた。

## 第六章：旅の門出

『記念すべき300戦目は俺の勝ちだな、キリト。何でも1つだけ言うことを聞くとて約束だったよな?』

『バカ言うな。200戦目は俺の勝ちだったぞ。その時の約束がまだだ』

ああ、これは夢だ。

『さてなんのことやら』

『お前この野郎!』

まだアイツが覚めることのない眠りに就く前、日常を謳歌していた何でもない平穏な日々。

『まーたやってる。あのバカ二人』

『好きに戦やらせておけば?気が済めば戻ってくるでしょ』

『ふふつ、シノのんもすっかり馴染んだね』

『俺はキリの字に2000』

『俺はアルトに3000だ』

『ならオレたちは大穴でアーちゃんに4000出すヨ』

俺とアイツが些細なことで戦い、それを見ていたリズ、アスナ、シノンが呆れながら観戦して、クラインとエギル、アルゴが賭け始める。

『兄ちゃん！頑張れー！』

『キリトくんも負けるなー！』

『あつ……武器が壊れちゃいましたね』

『あんたらー!!』

『ギャー!!』

ユウキとリーファが応援をしてシリカが武器が壊れたことを知らせれば二人まとめてリズにしばかれる。

何度も繰り返していた日常だったけれど、不思議と充実していた。失われた時はじめてその価値を知る、とは誰の弁だったか。

口が悪くて捻くれてて粗暴で義理堅くて情に厚い。

いつの時代の人間だよ、とツツコミたくなるときもあるけど一貫して言えることはー

仲間思いのお人好しだ。

いつも通り5時半に目が醒める。苦手だった早起きが、この世界に来てからは出来るようになった。その事実にも、今更ながら感嘆する。これなら、直葉に叩き起こされることもないだろう。これもセルカのお蔭だ、と俺は昨日のことをふと思い出す。

——試合はユージオの勝利。その流れるような美しい剣捌きに全員が啞然としていた。

ユージオの勝利を疑っていた訳ではない。俺がみっちり教えたのだ。自慢する訳ではないが、そこいらの衛士ならば勝てる位には鍛えたと自負している。

俺が驚いたのは、ユージオが俺の想像を遥かに越える剣捌きをみせたことだ。片手剣ソードスキル《スラント》。俺が教えても、見せてもいないその技をまさか使うとは思ってもいなかった。

思い浮かぶのは、一人で懸命に剣を振り続けるユージオの姿。あの技は、練習の中で

偶然見つけたのだらう。しかし、無駄のないあの動き。

もしこの先、彼が研鑽を積んで俺と彼が本気で戦う時がきたら一体……

やけになって林檎酒を飲み過ぎた俺は、セルカに引きずられるように教会に戻った。

『全く、さすがに飲みすぎよキリト』

と水を差し出すセルカ。冷たい水が、頭を冷やしてくれる。

『その……悪かったな。ユージオと話したかったら？明日にはもう……いや、まずは謝らないとな。ごめん。勝手にユージオを連れ出すみたいなことになっちゃって』

『……本当、あんたは……』

少し頬を赤らめた後、呆れ顔をしたセルカは続ける

『確かに少し寂しいけど、嬉しいの。ユージオがあんなに笑うようになって、自分からアリス姉様を探しに行くって決めてくれて。それに、前も言ったでしょ？私は私なりに生

きていく——だから安心してユージオを連れて行きなさい。貴方達が、姉様を連れて戻ってくるのを待つてるから』

そのあどけなさの残る微笑みは慈愛に溢れていた。

『ああ、ありがとう』

『ごめん』と一言口にし、セルカに顔を近づけ、真つ白な額に軽く唇を付ける。

セルカは暫く固まり、その後、顔を真つ赤にしてこちらを睨み付けた。

『あなた……いま、何を……?』

『うーん……《剣士の誓い》みたいなものかな』

ひとつ間違えれば禁忌目録違反よ、と呆れ顔のセルカ。

『で? 誓いつて?』

『約束だ。必ずアリスを連れて帰ってくるよ。俺は剣士キリトだからな』

——今思い出すと少々恥ずかしいものがあるが、まあ酔いのせいだろう。気にしたら負けだ。

俺はいつも通り礼拝をして、朝食を食べた。セルカが俺と目が合う度に顔を赤らめているように見えたのは気のせいだろう。うん。

旅立ちの朝は、見事な快晴だった。

セルカが作ってくれたお弁当の重みを感じながら、俺とユージオはザツカリアへと続く道を南へと歩いていった。

ギガスシダーのあつた森への分岐点までやってきた。すると、ユージオの顔がぱつと明るくなる。そこには一人のおじいさんが俺達を待ち構えるように立っていた。

「ガリツタじい！来てくれたんだね！会えてよかった！」

なるほど。確かユージオの《天職》の前任者だっけか。ガリツタ爺はユージオの肩に手を置き、優しげな瞳をユージオに向ける。

「まさか、俺が指の長さほどしか刻めなかったギガスシダーを、倒してしまうとはな……どうやったのかだけでも、教えてくれんかのう？」

「えつと……この剣とー」

ユージオはちらりと俺を見た。

「キリトのお陰だよ！とんでもないやつなんだ」

どんな紹介だ、と思いつつ、ぼーつとしているネルの頭を掴んで2人で頭を下げた。



顔を上げた俺たちの顔をガリツタ爺は厳しく見つめていたが——程なくしてふっと緩んだ。

「なるほど、そなたらが《ベクタの迷子》か。変動の相じやな」

そう言われて、俺は《ベクタの迷子》としてこの地に降り立っていたということを出した。……本当に謎が多いやつだ。

「さて、折角の旅立ちを邪魔して悪いが、少々付き合ってくれんかね?? 儂からの餞別をやるう」

「……いいよね?」

「ああ、もちろん」

ガリツタ爺について歩くと、倒れたギガスシダーの元に向かっていた。すでに樹皮には細い蔦がはい回っていて、この世界の植物の生命力に驚く。だが、よく見るとギガスシダーの枝は一本たりとも折れていない。恐るべき強靱さに苦笑すら浮かべながら、俺たちは樹の先端までたどり着く。

「いったい、( )に何があるのさ?」

「( )れじや」

ユージオがぼやくと、ガリツタ爺は一本の枝を指さした。ギガスシダーのてっぺんにある真っ直ぐな枝で、結構な長さに渡って小枝一本生えていない。

「これが、ギガスシダーのすべての枝の中で最もソルスの枝を吸収した一本じゃ。切り落として北セントリアのサードレという細工師に渡せば——その青銀の剣に勝るとも劣らぬ剣が仕上がるだろう」

「ほ、ほんとうかい?? ガリツタ爺……そうだよ、僕らは2人なのに剣は昨日まで一本しか無くて、この先困るなあと思ってたんだ」

ユージオは目を見開くと、《青薔薇の剣》を握って先端の枝を見下ろす。だが少し手が震えていたし——その枝は俺が振るうことになるのだから、ユージオにチェンジを申し出ることにした。

「ユージオ、俺がやるよ」

「……うん、ごめん。ちょっとと思うところがあつてさ……ギガスシダー、倒れちゃったんだなって……」

返す言葉がなかった。規律と変わらぬ生活を何よりの信条としているフラクトライトたちにしてみれば、ギガスシダーが倒れたという衝撃は筆舌に尽くしがたいものがあるはずだ。

俺は《青薔薇の剣》を受け取ると、迷わずに枝の根元に振り下ろす。きん、と硬い音を立てた枝は、綺麗に折れた。それを剣の腹で受け止めると上に放り、左手ですしりと掴む。ガリツタ爺がそれを重さを感じさせない手つきで軽々と受け取ると、革袋に手早

く包んだ。

「これでよし、じゃ」

「……ガリツタじい、本当にありがとう。僕、僕……頑張るよ」

「うむ。……どれ、時間を取らせてすまなんだな。僕はもう少しギガスシダーを見ていこう。……さらばデュージオ、そして旅の若者よ」

透明な瞳でギガスシダーを眺めるガリツタ爺に深々とお辞儀をして、俺たちは来た道に戻り始めた。

まずは、ザツカリアの街まで歩く。その延長線上に央都がある。色々なことがあったけれど、ようやく一歩前進だ。

「フオウ！」

「あれって……キャスパー？」

「え？……本当だ」

特徴的な鳴き声に視線を巡らせて見れば、草むらの影からこちらを見ている白い獣キャスパーがいた。

……見れば見るほどなんの動物なのか分からないな。

大きき的にはリス、犬のように四足で歩く。

鳴き声も現実の世界では聞いたことのない特徴的なものだ。

そのキャスパーがユージオの前まで来たかと思えば足の周りを回り始める。

「警戒心が強い……なんだよな？」

「うん、そのはずなんだけど……」

ユージオが屈んで手を伸ばせば、キャスパーはユージオの手に飛び乗り腕を伝って肩まで登ってしまった。

「懐かれたみたいだな」

「そう、なのかな」

「フオウフオウ」

てしてしと短い前足でユージオの頬を叩く。

肩から降ろそうと手を伸ばすが、器用に肩から腕、腕から腕へと飛び移って最終的には頭の上に乗る『止める』とばかりに頭を掘り始めた。

ず、随分攻撃的だな。

「わあああー！めんー！めんー！」

「連れていくか？」

「いてて……離れてくれないし、それしかないかな」  
「フオウ」

気を取り直してザツカリアへと歩き始めた。

「はて？ここは一体どこでございましょう。どうしたものでしょうか、なにも思い出せません……名前……そう、確か私の名前はー」

「殺生院キアラ」

## 第七章：新たななる相棒

ルーリッドの村を飛び出してから、早くも2年が経過していた。

ザツカリアの剣術大会では東ブロックと西ブロックに分かれ、それぞれユージオと俺が優勝した。その優勝者2名だけがザツカリアの衛兵隊への入隊が決まるというもの。

そして、その半年後には無事に帝立修剣学院への推薦状を手にし、央都セントリアに上った。そこでの入学試験で無事上位12人に入った俺たちは《傍付き練士》となり――同じく2年生の席次トップ12である《上級修剣士》から直接指導を受ける立場となっていた。

それから1年。そろそろ先輩が卒業し、俺たちが上級生となる番がやってくるのである。2年生の終わりに行われる卒業検定試験で勝ち抜き、帝国修剣大会をも勝ち抜いて俺たちの属するノーランガルス北帝国の代表になり、四帝国統一神前大会で優勝すれば、ユージオは《整合騎士》になれる。俺はその次の年にでもなればいい、さらに言えば別に禁忌目録を犯すとかでもいいだろう。そうすればセントリアの中央にそびえる《セントラル・カセドラル》の中へと足を踏み入れ、俺たちは各々の目的を果たすことになる。

とにかく、俺たちの旅にもようやく終わりというものが目に見えてきたのだ。

俺はムクリと起き上がり、気の抜けた欠伸をして何故安息日であるにもかかわらず、俺は早起きをしたのかを考えた。まだユージオは寝ている。今日は3の月の7日……

「あ、そうか。今日はとうとう、《あれ》が出来上がる日か……」

俺は湧き上がる興奮を抑えようともせず、いつもなら俺を起こすユージオを起こしに向かった。

「見ろい、この有様を！」

目の前でバラバラと広げられる黒い砥石を見て、俺たちは顔をひきつらせた。

「この《黒煉岩》の砥石は1つで3年は使えるはずが、この1年で！この化け物枝を削ったら6つも消費してしまっただわい！」

「い、いやあ、ほんと、すんません……」

ルーリッドを出る時にガリツタ爺に餞別として貰ったギガスシダーの枝。俺たちは



セントリアに来るなり、言いつけ通りサードレという細工師を頼り、劍として成形してもらおう頼んでいたのだ。

どうやらガリツタ爺の知り合いだったらしいサードレは俺たちの持つ杖をたつぷり3分絶句して眺め、5分間検分したあと、1年時間をくれと言ったのである。そして、今日がその約束の日であった。

「そ、それで、劍は出来たんですか……？」

がみがみと文句を垂れ流すサードレを遮ってユージオが言うと、サードレはふんと鼻を鳴らして麻布に包まれたそれを机の上に置いた。ゴトリ、といかにも重そうな音が響き、それがちよつとどころでは無い優先度プライオリティを持つことを予感させた。ごくりと喉を鳴らす俺を見て、サードレは口を開く。

「おい、若いの。まだ研ぎ代の話をしていなかったな」

「うっ！」

「大丈夫だよキリト。念の為に、僕、お金全部もってきたから」

ユージオに肩にぽんと手を置かれ、冷や汗が吹き出る。1つで3年は使える砥石を6つも消費してしまったのなら、この劍を鍛えるのには通常の何十倍もの費用がかかっていることになる——

「——タダにしてやらんこともない」

と思ったのだが、思いがけぬ温情を見せるサードレに俺たちは安堵のため息をつく。しかし、話はそれで終わりという訳にはいかないようだった。

「ただし、お前さんがこれを振ることができたら、の話じゃ。このクソ重い杖を北の果てから持ってきたのだから見込みはあるうが、こいつ剣になった途端、一層重くなりよつた。鍛冶師や細工師はテラリア神の加護でどんな剣でも運ぶことなら出来るはずなのじゃが、この剣は儂でもメール運ぶので限界じゃつた」

化け物——という言葉が脳裏に浮かんだ。

改めて剣を見てみると、麻布越しにも関わらず空間を歪めるような存在感を感じる。ソルスの光を300年吸収し続けた《ギガスシダー》としての圧倒的な格を、まざまざと見せつけてくるようだ。

麻布をそつと解くと、直ぐに漆黒の剣の姿が顕になる。ギガスシダー時代と変わらぬ、ほんの少し透明感のある質感を残したまま、シンプル且つ精緻な装飾が随所に施されていた。俺はそれに手を伸ばしかける一方で、とある相反する感情を抱いてもいた。

これで、俺たち2人の剣が揃ってしまった。2年前の旅立ちの時に予感した、あの理由のない不安。

それがじんわりと体の芯を冷やしていく。俺はそれをぐつと堪えて、腹に力を入れると鞘から剣を抜いた。《青薔薇の剣》とそう変わらないはずしりとした重みが腕に加わる。

「おお……」

剣を掲げた時、俺は何度となく感じてきた感動のようなものを覚えた。第1層で《アニールブレード》を握った時、そして、50層で《エリユシデータ》をドロップした瞬間、リズに《ダークリパルサー》を打ってもらった後、そしてアイツの意思と共に託された《アルトリウス》を握った時、

歴代の愛剣たちを手に入れた時と同等の痺れのようなものを脳の奥に感じたのだ。直感的に、この剣は間違いなく俺のものだという確信を得る。

黒い刃に見とれる俺を見て、サードレが低い声を発した。

「……お前さんに、そいつが振れるか？」

俺は答える代わりに店内に客がいないことを確認すると、空いたスペースに向かって剣を構える。狙うは向かいの壁にかかるバックラーだ。俺はこれから、この剣と共にこの世界を駆ける。その《意志》をサードレの前で見せる、絶好の機会だ。

「……シッ！」

剣を振り下ろすとともに、空気が裂ける重い音が響く。剣先は地面に当たる寸前で止めたものの、床板がみしりと鳴った。

末恐ろしいほどの力だ。俺は心強すぎる新たな相棒に体を震わせた。

「……ふん、学院のひよっこ剣士が、その剣を振りおったか……」

サードレはにやりと笑う。俺たちが砥石代がチャラになったと喜んだ——その瞬間、壁にかかっていた盾が床に落ちるのを目撃した。かなり重厚そうな音を立てた盾はしかし、無残にも真つ二つに割れている。

「……な」

「キリト……」

「——お主……」

疑いようもなく、俺が斬ってしまったのだろう。盾までの空間は5メートル程はあり、俺がどう頑張っても《ソードスキル》なしで刃を届かせられる距離ではないが、この場でそれが出来たのもまた俺だけなのだ。腹に響くような声を出したサードレに錆びたブリキの玩具のように顔を向けると、そりやあまあ怖い顔をしていらした。

が、そのまま雷が俺に落ちることはなかった。

「その黒いひよっこが盾を壊したのは、どういうわけだと思う?」

「え……?」

「答えは《意志》の力じゃ。何事も信念を持てば実現する。願ったことは叶うのじゃ。儂も『生きているあいだにあの黒い大樹を剣にしてみたい』とこの数十年願い続けてきたのじゃからな……」

ふつと遠い目をするサードレを見て、俺は納得した。ガリツタ爺は俺たちへの餞別と

してだけではなく、きつとかつて知り合ったサードレのためにこの枝を切り出すよう勧めたのだろう。

「お主もお主もまだまだ若い。わざわざ北から出てきてここに居るからには、やらねばならないことがあるのだろうか？ここで腐っていてもいいことは無いぞ？」という訳で、いいものを見せてくれたんでな……あの盾のことも無かつたことにしてやろう。その剣を振るい、儂の名を広めてくれればそれでいい。じゃが、今後の研ぎ代は割引きせんからな！」

それを聞き、俺たちは飛び上がった。

「——本当に、ありがとうございます！」

その後、アズリカ女史の元で剣の持ち込み申請を終えた俺は、安息日ではあったが学院敷地の端っこで剣を振っていた。

「……………せいっ！」

理由は1つだ。

明日、俺が《傍付き》として1年師事してきたソルティリーナ先輩に、《アインクラツド流》の奥義——すなわち、これまでほとんど使ってこなかった連続技を見せる、と約束してしまっただからである。

練習用の木剣では、連撃数の多いソードスキルを使うことが出来なかった。故にユージオから《青薔薇の剣》を借りようかと思っていたところに、ちょうどこの剣が出来上がったのだ。明日のために、どれほどの技が使えるのかを確認しておかねばならなかった。

2 連撃技《バーチカル・アーク》。3 連撃技《サベージ・フルクラム》。4 連撃技《バーチカル・スクエア》……

それらを一切の淀みなく成功させ、ひとまず息を吐いた。これで、コイツが《青薔薇の剣》と同程度の優先度を持つていることが物理的に証明されたわけだ。《窓》を見た時にはクラス46とあり、《青薔薇の剣》よりも高い数字だったのが半信半疑だったのだが、それは嘘でも何でもなかったようだ。

しかしこうなると、この先もやってみたくなる。《青薔薇の剣》では5連撃以上の技を使うことが出来なかった。ならば、この剣ならば——

俺は左肩に剣を構えると、力を溜めていくイメージを持つ。剣はチカチカとオレンジ

の光を散らす——これまでの技とは違う、不安定なものだった。

やはり、5連撃は無理か。いや、やって見ないとわからない。

「……………うおつ……………」

口から気合いを迸らせ、スキルが発動するギリギリの淵を超える。エネルギーが俺の体を通して刃に宿り、左上から袈裟斬りに振り下ろされた剣は地面につく前に跳ね返る——筈だったが、システムによるアシストを得られずに地面に突き刺さった。

俺の右手首にえげつない反動がかかり、堪らずそのまま剣を振り抜いてしまった。思いのほか湿った音を響かせて、黒い剣が学院の土を掘り返す。

「あ……………」

その行く先を目で追うべく、くるりと振り返った時。そこに人影があるのが見えた。金の髪を坊主にまとめ、上級修剣士だけに許されたカスタムされた制服——首席上級修練士、ウオロ・リーバンテインが俺のことをじっと見つめていたのだ。そこに土塊がまっすぐ飛んでいき……………べちゃり、と嫌な音を立てて真珠色の制服に泥ジミがついた。俺の顔色がさつと青くなる中、俺の気のせいではなければ、ウオロは微かに目を光らせた。「——確か、セルルト修剣士の傍付きの、キリト初等練士……………だったな？」

## 第八章：心意そして暗雲

《意志》の力、とサードレ氏に言われた時、密かにどきりとしていた。俺はそれを確かめるために、この地では咲かないゼフィリアという西帝国原産の花を咲かせる実験を行っていたからだ。

ウオロ口主席修劍士との懲罰試合後、呆けた顔のユージオを連れてソルテイリーナ先輩の部屋で打ち上げをした。明日見せるはずだった剣技を、前倒しでウオロ口主席との戦いの中で使ってしまったからである。

そしてそこでベロベロに酔ってしまったユージオを部屋に送り届けた俺は、もう一度ゼフィリアたちの様子を見よう、と花壇に向かっていた。

実のところ、花の栽培を始めたのはそれだけが理由ではない。ひとつはソルテイリーナ先輩がゼフィリアの花を見たがっていたから、というところでもなく健気な後輩心からだが、暇だったから、という残念な理由もある。——だって、安息日にユージオと遊ぶにしても、ユージオは神聖術の勉強をしていからな。俺は必然的に一人ぼっちになるわけだ。

ぼっちゲーマーが異世界で土いじり始めました。



なんてどこぞのラノベみたいなコピーが浮かんでしまいうくらい、残念で、しかし楽しい作業だった。

すっかり夜のとぼりが降り、しんと静まり返る花壇で思い切り息を吸った時、俺はここにあるはずのない香りを嗅ぐ。上品な花の香りではなく、ベタついた下品な香水の香りだ。この香りには覚えがある、と顔を顰めた時、予想通りの粘ついた声が降ってきた。「……おやおや、キリト練士。ちようど良かった。今から貴殿を探しに行こうと思っていたところなのだよ」

「……何の用だ」

ライオス・アンティノスト、ウンベール・ジーゼック。

何かと俺達平民に突つかかってくる貴族様だ。俺の無愛想な返事にウンベールは顔を歪めるが、それをライオスが制する。

「無論、先程の戦いに賛辞を送ろうと思つてな。かの主席修剣士であるリーバンティン殿と引き分けるとは……実にあっぱれ」

「いやまったく、まったく。あのような曲芸じみた剣技にはリーバンティン殿も面食らったというところですかな」

「……あんたら、褒めるのか喧嘩を売ってるのか、どっちなんだ」

ちり、とこめかみが疼くような感覚に襲われ、俺は声を低くして唸る。ライオスとウンベールはひとしきり笑うと、俺の胸ポケットに何かを差した。

「……ははは、我々は平民に何かを売ることにはしないのだよ。施すことはあっても、な。ということ、貴殿の曲芸……いやさ、健闘を讃えて、これを進呈しよう」

「いい気に乗るなよ、無姓の輩」

からからと笑うライオスに続いて、ウンベールは捨て台詞を吐く。そのまま俺を通り過ぎ、乱暴に扉を閉め、2人が寮舎に消えても俺はその場から動くことが出来なかった。なぜなら、俺の胸に刺さっていたのは、この半年俺が失敗を繰り返してようやく育て上げた今にもほころびそうなゼフィリアの花だったからだ。

俺は吸い込まれるように白い素焼きのプランターに近づく。そして、喉の奥から嘎れた声を漏らした。

……プランターに健気に育っていた23本の花は、1本残らず引きちぎられていた。迂闊、だった。

この世界の住人は、こんな、酷いことはしない——出来ないと思っていたのだ。

ルーリッドの村でユージオと話したように、禁忌目録に人のものを壊すべからずという条文がある以上、こんな、ことは……

と考えたところで、齒を砕けんばかりに噛み締めた。人のものは壊せない。だが、このプランターに入った土は、誰のものでもない京都の原野から持ってきたものだ。そこに生えた花も誰のものでもない、とあの二人が解釈したならば……。

なんて、狡猾なんだ!?!いや、違う。アンダーワールドにはユージオたちのような善良なフラクトライトだけでなく、《禁じられていないなら何をしてもいい》と平気で言う輩も存在するのだ。現に俺も、《それは禁止されていないだろ?》という論理で、ここまで旅をしてきたというのに。

「……………めんよ……………」

ほとんど声にならない声でそう言い、散らばった蕾をかき集める。鮮やかな青緑色の蕾は、手のひらに集めるたびにその色を褪せさせ、ついに——光の粒となって消えた。天命が全損したのだ。

その瞬間、両の瞳から涙が滴るのを感じた。

「はは、なんだよ俺……………花千切られて、泣く、とか……………」

ここでようやく、俺はこの花たちに込めていた第3の思いを自覚した。見知らぬ土地に知り合いもなく放り出されたことの孤独を、同じく過酷な地で懸命に咲こうとしている花たちと分かち合おうとしていたのだ。

——信じなさい。異国の地で育った花たちの力、そして、それをここまで育てたあな

たの力を。

その時、不思議な声が聞こえた。どこかで聞いたことのある声だ。ルーリッドを出て以降、何度となく俺たちを助けてくれた、暖かい声。

「……でももう、みんな、死んでしまった」

でも、今度ばかりはもう無理だ。花たちは既に光となって消えてしまったのだから。だが、俺が掠れた声で呟くと、声は力強さを増した。

——大丈夫。土に張った根はまだ生きようとしているわ。それに、感じるでしょう。ここに咲く花たちが……小さい仲間を助けようとしているのを……。あなたなら、その願いをゼフィリアに届けられる。

——それに……あなたにはそんな弱々しい言葉は似合わない。忘れてしまった？あの城での日々を。あなたはいつだって、剣2本を持って困難を乗り越えてきた。

「——っ!」

俺は目を見開いた。

なぜ、それを知っている?というかそもそも、この声の主は——  
だが、声はその疑問に答えることは無かった。

——さあ、涙をふいて、立ち上がりなさい。あなたのイメージ……《意志》の力を、《シ

ンイ》の力を……花に届けて。

とん、と見えない手に背中を押された気がした。俺は制服の袖で涙を拭うと、顔を上げる。そこには、花壇の聖花たちが溢れんばかりの神聖力を湛える姿があった。導かれるように両手を差し伸べて、願った。

「頼む。命を、少しだけ分けてくれ……」

すると、花から伸びる緑の線が一斉に1箇所を集まり、燃られ、大きな光のリボンとなった。震える指を動かすと、それはゼフィリアのプランターに一直線に伸びていく。リボンは丁寧にゼフィリアたちを包み込んで——土に消えた。

「——あ」

そして、ゆつくりと、しかし着実に、ゼフィリアたちは再びその茎を伸ばし始めた。瑞々しい葉が茎から分かれる。丸めた頭が慎ましげに顔を覗かせ、丸く膨らんでいく。

それを見た途端、再び暖かい涙が頬を伝うのを感じた。

なんて、美しい力なのだろう。この世界はただの仮想世界じゃない。現実をも超える美しさを、生命力を、《意志》を備えている。

「……ありがとう」

それをすっかり見届けてから、俺は一言呟く。このプランターは俺の領地だ、と宣言するが如く、校章のピンを外して土に刺した。

1ヶ月後、ゼフィリアたちは無事に満開となり……俺はソルティリーナ先輩の満面の笑みと、そして涙を見ることが出来た。

そしてさらに1ヶ月後、奴が姿を現した。

夜が明ける前、悲鳴にも似た喧騒に目を覚ませば寮の中も慌ただしい様相を見せていた。

「ユージオ何かあったのか？」

「《メガロス》だよ」

《メガロス》

その単語に寝起きの頭が一気に冴えた。

「大丈夫だよ。整合騎士が央都の外で迎え撃ってるから」

「……なあユージオ、少し見に行かないか？」

「え？」

寮を抜け出し、なんとか央都の外に出て物影に身を潜める。そしてその光景に目を奪われたんだ。

それはまるで神話の再現のようだった。

圧倒的な暴力の化身に対し、飛竜に跨がり攻め立てる騎士たち。  
だが――

「なんだよ……あれ……」

騎士たちの攻撃は《メガロス》に対して毛ほどの傷も負わせることなく弾かれる。

石斧剣が振り下ろされれば、地面が割れ衝撃波が物影に隠れた俺たちにまで届いてきた。

無数の火矢に曝されそちらに気を取られた瞬間、《メガロス》の後ろから別の整合騎士が7本に分裂した鞭で拘束し、レーザーのような光に貫かれた。

さすがの《メガロス》でも思ったのもつかの間、貫かれた胸に空いた穴は瞬く間に塞がり、その咆哮が空気を震わせる。

傍にいた騎士を左手で持ち上げて握り潰し、上空を飛んでいた整合騎士をあらうことか跳躍だけで接近し、飛竜ごと右手の石斧剣で両断する。

「怯むな！攻め立てよ！」

「夜明けまで何としてでも守り抜け！」

整合騎士だけでなく央都に駐在している騎士たちも果敢に《メガロス》へと挑んでいくが量を磨り潰す質、とでも言えばいいのか石斧剣のたつた一振りで先頭を走っていた騎士たちが宙を舞った。

まさに暴虐の化身。以前にユーゾオが災害のひとつと言っていた意味がようやく理解できた。

人が嵐に敵わないように過ぎ去るのを待つしかない災害だ。

やがて太陽が顔を覗かせ始めるにつれ《メガロス》の動きが鈍り始め、やがて完全に動きを止めた。

そうしているうちに無数の鎖で拘束し、飛竜で懸架して何処かへと運んでいった。

それは勝利ではなく、一時的に災害を遠ざけただけ。生々しい災害の爪痕と疲弊して座り込んだ騎士たちが最後に残された。



「……しかし菊岡二等陸佐の進める《アリス・プロジェクト》とこちらで進めている《メガロス・プロジェクト》を同時に人界で進めて宜しいでしょうか？ 暗黒界でも同じ成果は見込めるでしょうし、下手をすれば鉢合わせになる可能性も……」

「それはあつちも了承済みだよ。鉢合わせたら鉢合わせたで、お互いにとって有益であることに違いはないからね」

「しかし……」

「君もしつこいよ。《プロジェクト・アリシゼーション》は我々にとって最重要項目。より効率的に進められるのなら使えるものは使う、それが《メガロス・プロジェクト》だったはずだ。君もそれに賛同したからこっちに参加したんだろう？」

「それはそうですが……」

「それとも重村元教授に感化されたのかな？ 民間人を巻き込むのは気が引けるって？」「そうです！ 意識のない民間人を拉致してー」

「それがなにか問題？」

「なっ……」

「君、なにか勘違いしてないかい？ これは治療の一環だよ。桐ヶ谷……なんだったかな

？《アリス・プロジェクト》に協力してる彼が菊岡二等陸佐と交わしたSTLを使用した治療。事実、彼は夢見心地でこちらの思惑通りにことを進めてくれている。win-winの関係さ。まあもつとも、彼が目覚めるかどうかは別問題だけどね」

## 第九章：オーシャン・タートル

キリトくんもアルトくんもいない。

あの二人がいなくてもだけでダイシーカフェの中は随分と静かだ。

キリトくんの心音をモニターしていた位置データから港区に運ばれ、そこからヘリでまたどこかへと運ばれたのは判っている。

運ばれた先は《オーシャン・タートル》ローラーズで間違いない。恐らくアルトくんもそこに運ばれているはずだ。

でもそこから進展はない。

部外者である私たちが国の管理する施設へ足を踏み入れる許可が下りる筈もなく、二の足を踏むことになった。

「失礼します」

店内へ入ってきたのは中学生くらいの女の子。

あれ、この子……木綿季に似てる……。

「すまない。今は貸しきりでー」

「ね、姉ちゃん……」

「何処にいるかと思えば……初めまして木綿季の姉、紺野藍子です。以後お見知りおきを」

木綿季のお姉さん……？

「成る程、あなた方が兄さんの……ひとつお尋ねしたいことがあります。兄さんは何処ですか」

「それ、は……」

木綿季と同じく彼女は彼の身内。知る権利がある。

でも正直に話していいのだろうか。

彼が姿を消したのには国が絡んでいるかもしれないなんて。

颯真さんは脳にダメージを負い、その治療のために搬送されたが何者かによつて拉致された。

目的は恐らく和人くんと同じでそのフルダイブ能力、或いは情報処理能力。

何に利用しようとしているのかは不明のまま。

掻い摘まんだ説明になってしまったけど、彼女には知りうる限りの情報を伝えた。

「兄さんが傷付きながら戦っているのを知りながらこの体たらく。何故兄さんがあなた方を仲間だと言っていたのか理解できません」

「姉ちゃん！」

「あなた方は都合良く兄さんを利用していただけじゃありませんか！ 兄さんを理解してくれる人が出来たと喜んでいたので……！」

敵意を宿した目と言葉。

木綿季といい、彼女といい、本当に——

「……ほんつと颯真そつくりだわ」

「そうですね。本当に颯真さんそつくりです」

そう、本当に彼にそつくりだ。

「私たちが颯真さんを利用してたって言われても仕方ないかもしれない。でもね藍子ちゃん、私たちが颯真さんから受けた恩を忘れた訳でもないの」

口ではあれこれ文句は言うけど、あれこれと手を回してたりしてくれていた。

落ち込んでいるときでも容赦のない物言いは下手な慰めよりも心に響いた。

人を慰めるのが下手でぶつきらばう、他人に興味がないのに人が好きなお人好しで、悪意を向けられるのに慣れてるのに私たちに向けられれば悪役を買って出ても守ろうとする。

本当にちぐはぐで面倒臭い性格だけど、どこか憎みきれない私たちの仲間。

「大丈夫、なんて無責任な事は言えないけど私たちを信じてほしいな」

「その言葉を信用できる証拠はあるんですか」

「SAOで紡いだ絆。それじゃダメかな？」

SAOだけじゃない。ALOでも肩を並べていた。

その時間で育んだものは血よりも固い絆だ。

「……………」

「姉ちゃん、お願いボクたちを信じてほしい。絶対に兄ちゃんを連れ戻してみせるから」  
「……兄さんだけではないでしょう？ 兄さんの相棒である桐ヶ谷和人も連れ戻さなければ兄さんに怒られるわよ」

「っ！うん！」

「信じてくれるの？」

「荒唐無稽と吐き捨てるのは簡単ですが、仮に真実であったなら、あなた方でなければ兄さんを助けることができない。それぐらいは私でも理解できます」

兄さんをお願いします。

そう言い残し藍子ちゃんはダイシーカフェを出ていった。

「なるほどねえ。あのバカの戦闘狂の一面は木綿季、ツンデレはあの子に引き継がれてるわけか」

「もう、リズ？」

「ボクは戦闘狂じゃないよ!？」

覚悟は決まった。あとは――

「ねえみんな、和人くんと颯真さんに繋がるかもしれない細い糸があるの」

神代凜子さんの協力により、凜子さんの助手としてオーシャン・タートルへと辿り着いた。

カツラとサングラスを外して持つて来ていたキャスター付きの大型のスーツケースを開けば、青い顔をしたシノのんが体育座りの姿勢で納まっている。

データの改竄をしても、神代さんの助手が二人もいたら怪しまれると考えた苦肉の策。

X線による手荷物検査がなくてよかったと胸を撫で下ろしたけど。

「ふう……さすがに意識が飛び掛けたわ」

「ゴメンねシノのん。予想外に時間が掛かっちゃった」

「やつぱりこのサイズなら木綿季の方が良かったんじゃない？」



「そんなこと言って一番乗り気だったのはシノのんじゃない」

提案した私ができる立場じゃないけど、スーツケースに隠れることを真つ先に選んだのは彼女だ。

シノのんもアルトくんが絡むと驚くぐらい行動的だよな。

そして改めて菊岡誠二郎と対面する。

「やれやれ……そんな古典的な方法で侵入を許してしまうとはね。セキュリティの見直しが必要な」

菊岡から語られたのは軍事転用可能なAIの開発プロジェクト「プロジェクト・アリス・プロジェクト」と自身が担当する「アリス・プロジェクト」。

《敵を殺せ》《人を殺すな》

この二つの相反する命令を自身の判断で実行できるAIを開発することこそが菊岡の目的。

そのために今までどれだけの人工フラクトライトが犠牲になったのか。

「十万の人工フラクトライトの命は、一人の自衛官のそれより軽いんだよ。感情で物を言う子供には理解できないかもしれないけどね」

「アルトの……颯真の言葉を借りるなら『ごちゃごちゃうるせえな、仮初めとはいえ命を弄んでる奴が命の価値を語るんじゃないやねえよ』ってとこかしら。答えなさい、颯真はどこ」

「確かに彼なら間違いなくそう言うだろうね……本来ならば三神颯真くんは六本木のS  
TLによる治療を行う予定だった。和人くんとの取引通りね。だけど彼もまたVR適  
正を買われ、ボクとは別のプロジェクトへ協力……いや強制されている」

「あつれー？菊岡二等陸佐、仲間外れは良くないなあ。僕も混ぜてくれないと」  
人の神経を逆撫でするのような気の抜けた声。

ヨレヨレの白衣に後ろに撫で付けた金髪、そして人を人として見ていない目。  
外見でわかる。真つ当な研究者じゃない。

「主任……違うプロジェクト同士の接触および過干渉は禁止されているはずですか？」  
「いいじゃん細かいことはさあ。で君たち誰？」

「結城明日奈」

「朝田詩乃」

「へえくまあどうでもいいんだけどね。それより人聞きが悪いじゃないか、まるで僕が  
被検体に実験を強制させてるみたいにさ」

「事実でしょう？【メガロス・プロジェクト】は元々、人工フラクトライトのみで行われ  
る計画だったはず。計画に一切関係のない民間人をここへ運び込むだけでなく、颯真く  
んを巻き込むなんてー」

「いやいやいや、嘘は良くないし、君が言える台詞じゃないなあ。桐ヶ谷和人は以前から

バイト名目でアンダーワールドにダイブさせられていた。記憶の消去はしてみたいだけ、その程度で一般人を関わらせてません、なんて筋が通るとでも思ってる？それに君だって意識のない一般人を拉致同然にここへ運び込んだる？君が先か僕が先かなんて些末な問題だよ」

「そんなこと関係ない！あなたたちは意識のない人間を都合良く利用しているだけ！そんなことがー」

「少し黙れよ、おまえ」

シノンの激情は吐き捨てられた言葉に掻き消された。

「金切り声でキーキーと猿みたいにさあ。少し考えればわかるだろ？僕たちは計画を完遂させたい。彼らはここのSTLで治療を受けられる。どっちにも損はないだろ？」

「主任、これ以上の干渉は妨害行為と見なし即時退室を求めます。もしこれを承諾頂けない場合はー」

「あーあー分かったよ。邪魔者はさっさと消えますよ」

ひらひらと手を振りながら部屋を出ようとして

「あーつと被検体……ミカミだったっけ？ソレもアンダーワールドにいるからさ、会えたらよろしく言っつてよ」

「……菊岡さん、あの人は」

「本名不明。判っているのは周りに主任と呼ばせていることと人格破綻者であり優秀な研究者であるということだけ」

「それで「メガロス・プロジェクト」って言うのは？あの男が統轄している以上、真つ当なプロジェクトじゃないのは目に見えてわかるけど」

「わざと敵を殺さず血を流させ行動不能にし、救助に來た敵を殺す。仲間の死体をつラップとして利用し誘き寄せて殺す。感情のないAIでは成し得ない人間本来の攻撃性・残虐性を学習させ効率良く敵を殺すAIを開発する。それが「メガロス・プロジェクト」さ」

もしそのAIが完成し戦場に投入されれば、より少ない時間と人材で戦況を変えることも可能だと言う。

しかし人道的見地から凍結されていた筈の計画。

だが主任がここへ赴任してきたと同時に再開したのだと言う。

「メガロス・プロジェクト」に欠かせないのは他者への攻撃性の高い人物、つまり三神

くんが該当する。間違いなく主任は三神くんを目を付けていると確信して、桐ヶ谷くんをここへ運び込み主任の目が逸れている内に六本木へ移動させる手筈だったんだ」

主任が三神さんに手が出せない内に「アリス・プロジェクト」を完遂させることができる。できれば「メガロス・プロジェクト」を打ち切らせることができる。できなくとも三神さんを目覚めさせることができれば、と。

だけど和人くんをここへ運び込んだ時には三神さんは既に主任の手の中。

その時の顔は今でも忘れないと言う。

「君たちには本当に申し訳なく思っている。しかし、三神くんを無事に取り戻すためには「アリス・プロジェクト」の完遂が必須事項なんだ」

「いけない奴ツスけどね」

「ふふ、比嘉くんは三神くんのこと毛嫌いしてたものね」

「当然ツスよ。口は悪いし人の機材は勝手に使うし、もう散々だったんすから」

そういうえば三神さんも同じ重村研究室に通ってたんだよね。

茅場晶彦、須郷伸之、比嘉健、神代凜子、そして後沢<sup>エイジ</sup>鋭二。

事件の関係者に重村研究室の人間が関わっているのは、単なる偶然なんだろうか。

「やあヴァサゴ……それともP O Hって呼んだ方がいいかな？ 役者は揃った。お膳立ても時間は掛かるけど問題なく。タイミングは知らせるからって今のボスに伝えといてよ」

『了解だ、ブラザー』

『It's show time』

## 第十章：メガロス征伐

ユージオが禁忌を犯した。

俺も他人事ではないのだけど、その衝撃は大きかった。

気になるのはユージオがウンベールの腕を切り落とす前に現れたと言うローブの男。

『選べ。このまま見過ごして後悔するか、その剣を抜いて後悔するか。なにも為せず悔やむよりも、なにかを為して悔やむべきだ。こんな下衆をのさばらせたくないならな』

『お前の剣はお前の心と共にあり、お前の心はお前の意思と共にある。その剣を抜くのなら覚悟を決めろ。この世界と相対する覚悟を』

め  
そう言い放ちライオスを一蹴、ユージオが覚悟を決め剣を抜き放つたときに苦しみ始

め  
『気付かれたか……金髪優男、黒を頼む』

そう言い残し、窓を破って姿を消したのだと言う。

金髪優男はユージオを指しているなら黒は？

人か物か、あるいは何かの比喩か。

そしてアリス・シンセシス・サーティ。

ユージオの幼馴染みと同じ名前の少女。

『言動には気をつけなさい。私には、お前たちの天命の七割までを奪う権利があります』  
『メガロス征伐のため雑事に人員を避けないと言うのに余計な手間をかけさせる……』

『メガロスを殺す……？』

『ええ。あの天災を幾度となく退けて来ましたが、それもはや限界に近付きつつあります。五十名はいた整合騎士もメガロスとの戦いの折り、二十名が命を落とし配下の騎士たちも既に千人余りが散りました』

最初こそ捕獲しようとして試みたが捕獲隊の全滅という結果に終わり、それから幾度とメガロスと戦闘したものの殺す度に蘇り、その脅威を増しているのだという。

『殺せないメガロスを殺せるのか？』

『死なないのなら死ぬまで殺すだけです』

その時、彼女の瞳に宿っていたのは敵意と殺意を煮詰めたようなドロリと濁った妖しい光だった。

『お前たちをここで殺すのは簡単ですが、メガロス征伐のために戦力は一人でも多い方がいいと判断され、生かすことになりました。よってお前たちには洗礼を受けてもらいます』



ライオスの殺害、ウンベールの傷害により禁忌目録を犯し、洗礼とやらを受けるために独房にユージオと押し込められてしまったけれど大人しく待っているはずがなく、央都へ来てから姿を消していたキャスパーが独房の鍵を持ってきてくれたお陰で無事脱走。

キャスパーの案内に従い、長い螺旋階段を上り終えてから五分ほど走っただろうか、東西に延びる長方形の広場に辿りつくると北側のベンチに白銀の鎧を身にまとった騎士が座っていた。

ゆるく波打つ長髪にやや細めの体軀、左腰にはやや反りのある長剣が携えられている。そして、両の肩当てからは、濃い色のマントが垂れていた。

ひよいつと持ち上げられた右手に光っているのは、ワイングラス。見ればベンチにはボトルも一本置かれている。

「へえ、俺達にもそのワインを振る舞ってくれるのかな」

「残念ながら、これは君たちのような子供……しかも罪人が口にできるものではないよ。西帝国産、百五十年物だ。香りくらいなら分けてやらないこともないがね」

キリトの物言いに、整合騎士はあくまで穏やかに対応した。ワインを一息に飲み干した騎士は立ち上がると、続けて思わぬ台詞を口にした。

「さすがに、我が師アリス様の慧眼であることよ。囚人の脱走という、万に一つの事態を見事に予期なさるのだから」

「あ……アリス様？我が、師……？」

啞然として繰り返した。

俺の言葉に整合騎士は鷹揚と領き、気障な台詞を続ける。

「君たちの脱走に備えて一晩ここで過ごせと命じられたものの、正直私もまさかと思っていたからね。一瓶のワインを共に夜明かしするつもりでいたのに、こうして本当に現れるとは」

微笑みながら、騎士はワイングラスをベンチに置いた。空いた右手で長髪を掻き上げ、ほんの少し語気を強める。

「もちろん、すぐに地下牢に戻ってもらうがその前に少々厳しいお仕置が必要だな。もちろん君たちも覚悟の上だろうね？」

薄い笑みは消えていないのに、長身瘦躯のシルエットから圧倒的な闘気が吹き付けてきて、一步下がりがりそうになるのを懸命にこらえた。

「なら、もちろんあんたも、俺達が無抵抗にお仕置きを受けるとは思っていないよな」

「ははは、威勢がいいね。まだ学院も卒業してないヒヨコだと聞いたけど、大したものだ。その空元氣からに敬意を表して君たちの天命が残り一滴まで減らす前に名乗っておこ

う。私は整合騎士、エルドリエ・シンセシス・サーティワン。ほんのひと月前に《召喚》されたばかりで、いまだ統括地もない若輩だが、そこはお許し願おうかな」

騎士の長広舌を聞いた途端、後ろでユージオが軽く息をもらしたが、その反応に注意を向けられなかった。なぜなら小憎らしいほど美声で述べられた台詞にはいくつか重要情報が含まれていたからだ。

まず整合騎士の名前には法則性があることが、これで明らかになった。整合騎士のアリスや《エルドリエ》が個人名。続く《シンセシス》が共通名。そしてラストネームは、名前ではなくは番号だ。英語なのでユージオには判らないだろうが、恐らくアリスが三十一番目、そしてこのエルドリエが三十一番目――。

しかも、彼は『ほんのひと月前に召喚された』と言った。召喚という言葉は意味不明だが、エルドリエが最も新しく騎士に任ぜられた人間。しかも少なからぬ数の騎士が世界各地を警護するためにカセドラルから離れ、メガロス征伐のために多くの騎士が徴集されているはずなので、塔内にいる騎士は多くても十数人というところではあるまいか。

だがそんな計算も、眼の前の新米騎士を撃破しなければ、捕らぬ狸の何とやらだ。

左斜め後方に立つユージオに向けて低く囁いた。

「戦うぞ。俺が先に相手するから、ユージオは合図を待つてくれ」

「う、うん。でも……キリト、僕……」

「言つたら、もう迷つてる場合じゃないんだ。あいつに勝てなきゃ、とてもカセドラルは上れないぞ」

「いや、迷ってるわけじゃなくて、僕、あいつの名前……ううん、後にしよう。了解。だけど無理はしないでね、キリト」

作戦が伝わっているのかやや不安なユージオの反応だが、のんびり打ち合わせをしている暇はない。

二歩前に出て広場のゲートを潜り、右手に巻き付けていた鉄鎖を解いて緩く握った。それを見た騎士は、ほうつというように眉を軽く動かした。

「なるほど、剣もなしにどうするのかと思っていたが、その鎖を武器にするつもりかこれなら、少しは戦いがましい戦いを期待できそうかな？ならば私も剣ではなく、こちらを使うとしよう」

さっと背中から引かれた右手が握りしめるのは、剣帯の後ろ側に留められていたらしい二つ目の武器——純銀の輝きを帯びる、細身の鞭だった。

愕然とする俺の視線の先で、鞭はエルドリエの右手からパラパラと解かれ、蛇のように石畳の上にわだかまった。

見た感じ四メートルほどあるような気がする。それに加え、薔薇の茎のように鋭い棘

が螺旋状に生えていた。

「それでは……公理教会と禁忌目録に背いたあげく、牢破りまでしたその覚悟に敬意を表して最初から全力で相手させてもらうよ」

俺たちが反応する間もなく、エルドリエは右手の鞭に左手をかざすと、凜とした声で高らかに叫んだ。

「システム・コール！」

「……まったく。少し目を離せばこつちのコントロールから逃げるなんて……君の精神力を少し見くびってたかな？ まあ、どれだけ足掻いたって君は僕の手のひらの上。それに君の存在が正しい具合に人工フラクトライト達に影響してるみたいだし、今回は多目に

見てあげるよ」

狂気の手を浮かべ嗤う。

「あつちも時間が掛かるみたいだし、面白いものでも用意しておこうかな？ SAOサー

バーに残つてた没データ」

《Dragon<sup>竜</sup>Slayer<sup>狩</sup>Ornstein<sup>リ</sup>》

《Executioner<sup>処</sup>Smough<sup>刑</sup>》

「ベクタの家臣にでもしておこうかな？ ボスがあのアカウントを使うみたいだし……にしてもダークテリトリーに何か居るみたいなんだよねえ。人工フラクトライト一人分の空白があるのは分かってるんだけど……」

## 第十一章：世界の真理

整合騎士エルドリエ・シンセシス・サーティワンとの戦闘は熾烈を極めた。

予測可能だった鞭による攻撃は予測困難な軌道を描き、蛇のように襲いかかってくる。

「中々によく粘る。禁忌を犯していなければ良い騎士に成れただろうに」

しかし、その激闘もエルドリエが苦しみ始めたことで終わりを告げた。

ユージオの記憶から導き出されたエルドリエの過去。

そしてエルドリエの額から顔を覗かせる三角柱状の結晶。

きつとあれが、アリスが別人のように変わってしまった原因。

ユージオの呼び掛けにエルドリエ・ウールスブルグとしての記憶を取り戻しかけた

その時、空からの強襲に中断せざるおえなかった。

飛竜に跨がり弓を構える深紅の騎士。

頭上からの砲撃と見間違える程の弓撃に曝され、身を隠す場所を探しながら庭園を逃げろしかなかった。

しかし、謎の声に従い逃げた先に見えた活路。





界の真実。

公理協会最高司祭アドミニストレータの正体と狂気。

アイツがいたら間違ひなくキレそうな事ばかりだ。

「そうじゃ。こいつをお主にやろう」

「これは……？」

彼女から手渡された一冊の手帳。

促されるまま開いてみれば、これは日記のようだ。

取り敢えず手持ちにあったこれを日記にしようと思う。

最初に感じたのは何かが肌に刺さる感覚。

それから閉じた瞼を貫く光。

鳥類の囀り、肌を撫でる風。

ゆつくりと目を開けば憎たらしいほどに澄んだ青空が視界一杯に広がっていた。

そして疑問。

どうして俺がここにいるのか。

俺は——だれなのか。

あれから森を散策した。

山の麓にある洞窟の中も調べた。

洞窟の最奥、山の向こう側だろうか？まるで境目であるかのように地面の色が違う。

向こう側は、またあとで調べよう。

見た限り自然はない。つまりあちら側で食料確保が難しいってことだ

野兎を仕留め血抜きをして焼いただけの簡素な食事をしながら、森を貫く様に生える巨大な大木へ視線を向ける。

明日は向こう側を散策しようか。

頭痛が酷い。まだ日が落ちる前だが今日は休もう。

混乱の極み、とはこの事か。

眠る前までであった森が地震と嵐が同時に襲って来たかのような悲惨な有り様だった。

木々は薙ぎ倒され、狂ったように濁流が割れた大地を削りながら流れる。

眠る前と後で周りの風景が一変していた、というのは以前にもあったような気がする。

頭が痛い。

洞窟の中が騒がしい。

どうやら緑色の体をした生物が騒いでいるようだ。

どうみても友好的な生物ではない。

見付からないように隠れておくのが懸命だ。

数ページ捲り

日が落ちた後の記憶がない。ここ幾度かある現象だ。

一際大きな壁に囲まれた街を見下ろせる場所に居たはずが、気が付けば洞窟の中にいた。

洞窟から出てみれば、そこは初めて散策した山だった。

未だ戻らない記憶の手掛かりにと、あの街へ向かったというのにまた振り出しだ。

頭の奥が酷く痛む。

酷い雨だった。

叩き付けるような豪雨と落雷。

なんとか人混みに紛れ街の中へと入ったはいいが、どこから手を付ければ良いのか。適当に歩き回れば知り合いでもいるかもしれないと、歩き回ったのが悪かったのかもしれない。

それにしても、あの金髪優男に言った『黒』とはなんなのか。また謎が増えた。今日は頭痛がしない。良いことだ。

今は人気のない裏路地で体を休めている。

最近では頭痛だけじゃなく、体も痛むようになってきた。

身に覚えのない傷跡もある。

俺の体に何が起きているのか。

ああ今日もまた日が落ちる。

俺は――

「ここで日記は途切れている。

この日記の持ち主は、あの日ユージオが話したローブを着た男だろうか？

「どうしてこれを俺に？」

「その日記を記したのはお主と同じ、外界から来た人間だからよ。名前までは知らぬがな」

日記の通りだとするとこれを書いた人は何かの実験を強制されているように受け取れる。

「まさか……メガロス？」

可能性は捨てきれない。

そしてこの人は記憶喪失の可能性もある。

「まあそうであろうな。この世界の日暮れと同時に外側からの干渉が強まっておる。そして最近では昼夜問わずになりおった。メガロスが何者であれ、アドミニストレータとしてはこの世界を維持せねばならん。じゃが……」

【最終負荷実験】

人界とダークテリトリーとの戦争。

メガロスの征伐が目前に迫り、成し遂げたとしても疲弊した戦力では勝ち目はない。

「勝つにせよ負けるにせよ外界の観察者たちには望む結果であろうな」

「外で何が起きてるんだ？」

「……ふむ。ワシにも詳しいことは分からぬが、分かることがあるとすれば二つの計画が同時にこの世界で行われておるということ……いや、一つは目的が達せられずとも構わないようじゃが」

「どういうことだ？」

「メガロスを用いて事を進めておるようじゃが、一貫性がない。ワシの目から見ればただ闇雲に暴れさせておるだけと言える」

「それが目的だとは……？」

「ふむ……メガロスではなく、それに影響されたフラクトライトが目的か。あるいは暴れる事で得られるデータか。どちらにせよ、碌でもない計画であることに違いはあるまいて」

「そう切り捨て彼女は再び口を開いた。

「ワシはこの世界の終末を仕組んだラースを……そんな神を断じて認めぬ。故にワシは唯一の結論に至ったのじゃ。アンダーワールドを人界もダークテリトリーも全て纏めて無に帰す」

「俺の助力でアドミニストレータを打ち取り、カーディナルが全権限を取り戻す事ができたなら、この世界を消滅させる。」

正常な世界が分からない彼女がこの世界を正す方法がそれしか思い付かないのだと。「今はアドミニストレータが優先じゃ。メガロスに気を取られている今が最大の好機。見逃す手はない」

ワシと手を組むか否か。

提示された条件はアドミニストレータを討ち取れば、ライトキューブに親しいフラクトライトを残したままこの世界を消去する。

つまり、ユージオやセルカたちを助けられる。

悩む必要なんてなかった。

「分かった。承けるよ。でも考えるのは止めない。最後に待ってるのが悲劇でも回避する方法があるかもしれない」

「……樂觀的じゃな。この世界の残酷さを知らん。じゃがそれが人間なのかもしれんな」

「待たせたな、ユージオ」

「あ、キリト……その人は？」

「この人はカーディナル。整合騎士と戦う上で力を貸してくれる」

「戦うものにもお主たち武器がないじゃろ」

「あ……」

忘れてた……。

「はあ……お主たちの武器はセントラル・カセドラルの三階にある」

「アドミニストレータは？」

「このセントラル・カセドラルは日に日に高さを増しておる。今は百階に迫ろうと言うところかの」

ひゃ、百階……。気が遠くなりそうだな。

「お主たちの武器は確かに強力じゃ。しかしそれだけでは整合騎士には勝てん。あやつらには武器を数倍に強化する術がある」

「それって【武装完全支配術】ですよね？」

「然り」

そうやって彼女は手を叩く。

目の前に現れる羊皮紙。

びっしりと書かれた内容に目眩が起きそうだ。



「しっかりと読んでおくのじゃぞ……ああ言い忘れておった。整合騎士は額にモジュールを埋め込まれておる」

そのモジュールが埋め込まれた人間の記憶を奪っている元凶。

そしてアリスを取り戻す為には記憶を揺さぶるだけでは足りず、アドミニストレータが寝所に隠した記憶の欠片を取り戻す必要がある。

「この短剣を使え。本当はアドミニストレータに使うために用意した予備じゃが、一度で決めれば問題あるまい」

「うっ……責任重大だな」

その短剣で刺されればカーディナルの一時的に支配下に置かれ、記憶の欠片を取り戻す間の時間稼ぎになるんだそうだ。

「分かりました。説得に失敗したときはこれを使います」

「うむ」

まずは剣を取り戻して、百階まで登りアドミニストレータを討つ。その間の整合騎士を相手取ることもあるだろう。

やることが多いなあ……。

「メガロス征伐が近付いておるとはいえ、整合騎士は間違いなくセントラル・カドルに配置されておるじゃろう。あの女は慎重じゃからな」

扉を開き彼女は告げる。

「地獄の業火に焼かれるか、全てが無に帰すか。全てはお主たちの手に委ねられておる。行くがよいキリト、ユージオ」

「それにしてもキャスパーが懐くとはもう」

「え？知ってるのか？カーディナル」

「然り。そやつはワシの機能を一部とはいえ共有しておるからな」

「え？？」

## 第十二章：廻り始める物語

下品な笑い声が狭い部屋に木霊し、この部屋の主である私はそれを黙ってみていくことしかできなかつた。

——嗚呼、これは夢だ。あの人と初めて言葉を交わした日の夢。

『いい加減五月蠅え！そんな馬鹿騒ぎしてえなら他所でやりやがれ！』

お世辞にも人柄が良いとは言えなかつた。

遠藤さんたちの笑い声が壁越しに響いていたらしく、不機嫌そうなのを隠そうともせず怒鳴り込んできたのだ。

連日とはいかないまでも隣から聞きたくもない笑い声が聞こえてきたらそれは怒るだろう。

私だつてそうする。

遠藤さんの男友達が少しビビらせてやろうとあの人の顔へ拳を振るつた。

だがそれは脅威にすらならないとばかりに受け止められ、逆に捻り上げられる結果に終わる。

『これ以上馬鹿騒ぎ続けるつもりなら家主共々ここから追い出す。なんならこいつの腕

一本イっとくか？」

ドスを効かせた地を這うような声に我に帰った遠藤さんたちは、引つたくるように自分の鞆を手に我先にと逃げ出していったんだ。

『……ふん』

不機嫌そうに鼻を鳴らし、私に視線を合わせた。

『誰かを利用する馬鹿は嫌いだ、唯々諾々と利用されてる馬鹿はもつと嫌いだ』

そう言い残しあの人は自分の部屋へ戻っていった。

次の日、呼び鈴の音に部屋から出てみればあの人が工具箱片手に立っていた。

『お前独り暮らしなんだってな』

言われたことに反応出来ずに固まっていると工具箱を床に置き、扉のチェーンロックの部分にナニかを取り付け始めた。

電池ボックスとそれに繋がれた赤と黒のコード、そして何かの回路。

電池ボックスはチェーンロックの固定具へコードはドアノブへ、回路は電池ボックスの横へそれぞれ固定していく。

手慣れた手付きで20分足らずで作業を終わらせたらしくさっさと工具をしまっていく。

『簡単な防犯だ。部屋にいるときは鍵とチェーンロックを掛けてここのスイッチをオン

にして、このランプが光ってんのを確認しろ。もし誰かが開けようとすれば電流が流れるようになってる……とは言って精々スタンガン程度だけだな」

どうして？と訪ねてみても不機嫌そうに鼻を鳴らすだけで答えてはくれなかった。

その後、『なにか問題はないか？』と何度か声を掛けられた。

目は合わせず、ぶつきらぼうに。

まるでドラマとかに出てくる不器用な父親のような物言いに小さく嘖き出してみれば、また不機嫌そうに鼻を鳴らした。

——器用なのに不器用なヒト……。

休みの日はバイクを弄ってるか部屋にいるのか微かに物音が聞こえてくる。

リアルな姿があの人と知らずに出会ったアルトの背中を追い、信じ求めてきた強さを碎かれあの人に惹かれ——

「——ん」

「あ、おはようシノのん」

「ええ、おはよう明日奈」

ここ数日眠れなかったことが祟ったのか、それとも少なくとも表面上は無事な彼の姿を画面越しに確認できたからか、押し寄せてきた睡魔に抗えず眠ってしまったようだ。

恐らくトドメはスーツケースの中に潜り込んだことだろうけど。

「人の気も知らないで貴方はアンダーワールドの中でも相変わらず、なんでしょうね」  
菊岡の話では常に変態キリトの位置情報を確認できているものの肝心のアルトの姿を確認できていないそうさ。

少なくとも無事でいてくれるはずだ。

「キリトの様子はどうか？」

「担当医さんもいるし心配することなんてないんだらうけど……」

不安そうな様子でガラスで隔たれた向こう側で眠る、愛しの彼へと視線を這わせる明日奈へ言葉はスピーカーから鳴り響く警報が掻き消した。

『外部から侵入者！ 繰り返し返す！ 外部から侵入者！』

歯車は廻り始める。

『ではまず確認しておくぞ？まずユージオとキリトはセントラル・カセドラル三階に保管されたお主たちの剣を回収、そして【エンハンス・アーマメント武装完全支配術】の習得。この二つが最優先になる』

整合騎士と戦いになる以上は剣は必須。

そして俺たちの切り札となる【武装完全支配術】もまた然り。

整合騎士を打ち倒しながら、セントラル・カセドラルを駆け登り、アドミニストレータを討つ。

やるべきことは明白ではあるものの、気の遠くなるような話だ。

でも膝を折る理由にはならない。

勝負は心が屈した時点で勝敗が決まる。

悪足掻きに過ぎなくても抗い続ける。

それがアイツの背中を見続けて学んだこと

『じゃがメガロスがこのセントラル・カセドラルへ侵入したことがアドミニストレータに知れた今、徴集されていた騎士たちもここへ集まってくるじやろう。時間が経てば整合騎士だけでなく無数の騎士たちも相手取ることになる。行動はなるべく迅速にな』  
『でもメガロスはどうしてここに？』

『さてな。ラーズに何かしらの意図があるのか、或いはメガロス自身の意思か』

カーディナルは語った。

メガロスの元となっているフラクトライトは人間が持ちうる攻撃性や破壊衝動を極限まで引き出されているのだと。しかしその反面、常人ならば僅か数分で廃人になるほどの強い負荷が脳に掛かる。

俺よりも早くアンダーワールドに現れたことを考慮し現実での時間に置き換えて考えれば、既に手遅れの状態である可能性は高い。つまりメガロス自身の意思でセントラル・カセドラルへ侵入したとは考えにくい。

しかし、あの手帳——日記を読む限りでは自意識はしつかりしてる。それに深紅の騎士から俺を庇い、カーディナルの待つ扉の向こう側へ手荒ながらも送り出した。

つまり……………どうということだ？

ああ……………こんがらがってきた……………。

『ラーズからのバックアップがある以上、あの怪物を討ち倒すのは無理じやろうな。傷を負い、時には死してもラーズの操作ひとつで再起動しおる』

惨い……………。

意思を奪われ、ただ命じられるがままに戦いを強いられる……………あれ？どこかで同じようなことがあったような……………？



『わしはこの部屋からは出れん。もしここから出れば、すぐさまアドミニストレータがワシを捕捉し、有無を言わさずを消しに掛かる筈じや。そうなればアリスという整合騎士を救う手だてもなくなる』

あの大図書から出られないカーディナルの目と耳になっているのがキャスパー、幸運の獣。

あの日記もキャスパーを通して手に入れたらしい。

「お前……もしかして凄いのか？」

「やっと分かったのが、スケコマシ  
「フオフオフオウ、フオファ」

……なんかすごい罵倒された気がする。

## 第十三章：暴虐の化身

大気を震わせる咆哮、その手に握られた石斧剣が振るわれる度に風が逆巻き、完璧に避けた筈の体を崩される。

その一撃一撃が必殺であり、牽制もフェイントも読み合いも一切ない。

小手先の技は小賢しいとばかりに踏み潰し叩き潰す。

ようやく負わせた傷も目に見える速度で塞がり、こちらが疲弊していくばかりだ。

暴虐の化身《メガロス》

悪夢のような……いや寧ろ悪い冗談であつて欲しい馬鹿げた存在。

「ユージオ！合わせてくれ！」

「分かった！」

うるさい羽虫でも追い払うように振るわれる腕でさえ、マトモに受ければ致命傷になりかねない。

丸太のような豪腕が屈んだ背中を掠め、振り切った左腕が虫で潰すかのように上から振り落とされる。

回避も防御も間に合わない。

でも俺は一人で戦っている訳じゃない。

「はああああ!!」

意識外からの咆哮に顔を向けたメガロスの眼前には《蒼薔薇の剣》を掲げたユージオの姿。

振り下ろされた切っ先がメガロスの左目を切り裂き、一瞬の停滞を見逃さず右脇腹を切り払い距離を取る。

しかし傷も瞬く間に塞がり、傷を負わせる前よりも強く押し潰されんばかりの殺気をぶつけてくる。

「■■■■■■■■■■!」

床に罅を走らせながら踏み締める。

来る……!」

「二人とも!下がりなさい!」

金木犀の騎士が俺たちの前に躍り出ると同時に瞬間移動と錯覚するほどのスピードで彼女の前に出現、大きく振りかぶり放つ横風ぎは初速で音の壁を超え、彼女諸共余波によつて俺たち二人もまとめて吹き飛ばされた。

壁に叩き付けられ、意識が遠退く。

メガロスの咆哮を身で受けながら、彼女と共に奴と戦うことになったのか思い出して

いた。

セントラル・カセドラルを駆け上がり、幾度か整合騎士を破り、また駆け上がる。完全武装術の体得も完全とは言えないが、発動させることは出来るようになった。そうして辿り着いた50階。

あまりに異様な雰囲気足を止める。

鼻を覆いたくなるような濃密な鉄の臭い。

そこにヤツは居た。

全身を血に染め、空気が震えていると錯覚するほどの殺気、濃密に漂う死の気配。

暴虐の化身《メガロス》

右目は金、左目は深紅の光を放ち口からは呼気と共に蒸気が吐き出される。

たてがみのような腰まで届く灰の髪をなびかせ、次なる哀れな獲物犠牲者を探すように唸り

声を上げ――

目が合った

途端に空気が破裂するが如き濃密な殺気を叩きつけられ、俺もユージオも足を竦ませてしまう。

「キ、リト……」

「ああ、分かつてる……」

先に進むには《メガロス》を打ち負かすしかない。

退却は出来ない。時間が無い。

それになりより——

「■■■■■■■■■■！」

この死神が背を向けることを許さない。

しかし何故だろう。コイツに背を向けることを許さない自分がいることにも気付く。

「やるしかない、いけるか？ ユージオ」

「う、うん」

お互いの愛剣を引き抜き眼前の敵へと構える。

俺たちの戦意を感じ取ってか僅かに《メガロス》が笑ったように見えた。

哀れな獲物への嘲笑か、新たな闘争への歓喜か、或いは——

「ま、ちなさい」

突然、傍らから聞こえた声に眼前の敵から注意を引き剥がされる。

俺たちが入ってきた入口の脇、何かが叩きつけられひしゃげた壁の下に金の鎧に身を包んだ少女が蹲うずくまっていた。

「あれはあなた達の手に見える怪物じゃない。禁忌目録を犯したお前たちは洗礼を待つ身。大人しく牢へ戻りなさい」

ユージオの想い人、アリスがそこにいた。

「アリス！」

「この状況でそんな悠長なことは言つてられないだろ。それにアイツはもう待てないつてさ」

アリスに気を取られた瞬間に殺そうと思えば殺せたはずだ。しかし奴は俺たちに干渉せず、ただ戦意を滾らせたまま逸る体を抑えつけているように見える。

岩から削り出したかのような石斧剣を既に事切れた騎士から引き抜き、夥しい血に濡れたそれを肩に担ぐように構えた。

何度も見た、幾度も剣を交えたアイツと同じ構え。

「四の五の言ってる暇はない。共同戦線だ」

「仕方ないですね。しかし《メガロス》のあとはお前たちです。それを忘れないように」

「……………！」

奴の咆哮と共に戦いの火蓋が切って落とされた。

「キリトー！」

ユージオの声に飛びかけた意識が戻ってくる。

眼前には《メガロス》の右脚が断頭斧の如く振るわれていた。

思考を置き去りに見ても構わず、身を投げ出すことで辛うじて回避に成功。

俺の背後にあつた壁に激突したものの、まるで障害にもならないとばかりにそのまま振り抜かれた。

飛来する破片から身を守りつつアリスとユージオに合流した。

石斧剣による力任せな攻撃だけかと思えば、石斧剣による攻撃が間に合わないと判断した瞬間に唯一の得物を放り投げ一撃一撃が必殺の徒手空拳へと切り替わる。

僅かに掠めるだけでも体勢を持つていかれるというのに、それが連撃で襲ってくる。

本当にめちやくちやだ。

「エンハンス・アーマメント」！」

ユージオの「武装完全支配術」が解放され《メガロス》は氷塊の中へと閉じ込められた――

「■■■■■■■■■■！」

かに見えたが、自らを閉じ込める氷の檻を粉碎し、まるで力の差を見せつけるように咆哮。

《メガロス》は1度殺した技に耐性を持ちます！同じ技は通用しないと思いなさい！」

そう1番厄介なのがアリスの言葉通り、死亡耐性能力とも言うべき能力。

致命傷、あるいはそれに準ずるダメージを受けた際にその攻撃に対して高い耐性を持つようになる。

1度はユージオの「完全武装支配術」で動きを封じ込めることに成功したが、それも含め今では僅かな間しか動きを止めることが叶わない。

戦えば戦うほどに、殺せば殺すほどにその不死性と耐性の高さによって蹂躪される。

「お前、【完全武装支配術】は？」

「辛うじて」

まだ完全には習得出来ていない。しかし奴を打ち倒す為にはなりふり構ってられない。



「合わせなさい。あの壁の向こうは外。《メガロス》を外へと押し出し、現状を打破します」

既にアリスの【完全武装支配術】も《メガロス》に致命傷を負わせていて、傷を負わせることは難しいらしい。

しかし傷を負わせられなくともその衝撃までは殺せない、と。

…やるしか、ないか。

「分かった。タイミングは合わせる」

作戦会議は終わりか？ そう言わんばかりに床を踏み鳴らし、こちらへと歩み寄ってくる。

その歩みは緩慢、しかし一足飛びで彼我距離を無にするほどの脚力がある以上は気は抜けない。

「【エンハンス・アーマメント】！」

アリスの持つ金木犀の剣は刀身が花卉へと変化し、その一枚一枚が岩をも砕く威力を誇る。

そして俺が持つ剣はギガスシダーの硬さ・鋭さ・重さを攻撃力へと変換する。

ユーゾオの青薔薇の剣の【完全武装支配術】で足を止める。

一瞬でいい、その一瞬で決着をつける！

再び閉じ込められた氷の檻から脱却した《メガロス》の胸元目掛け俺とアリスの剣が振るわれる。

しかし――

「なっ……!」

「そんなのありか……!」

俺たちの剣はまるで兇戯と言わんばかりに、振り払われた左腕に弾かれた。

そして果敢に挑んできた哀れな獲物へ待っていたのは断頭斧の如き回し蹴り。

《メガロス》を追いやるはずだった壁へと逆に俺たちが叩きつけられる。

肺の空気を全て吐き出し、咳き込みながらも見上げた先には石斧剣を振り上げた《メ

ガロス》。

「バケモノめ……」

アリスの震える口から吐き出される恨み言も今まさに振り下ろされる石斧剣を鈍らせるには至らない。

石斧剣を握る右手に力が籠もるのを認め、何かないかと探るが何一つ目の前の脅威を退かせる手立てが思い浮かぶことは無かった。

突然、壁を貫き降り注ぐ雷。

その雷によって床が崩れ、俺とアリスそして《メガロス》はセントラル・カセドラルの外へと吐き出された。

なにかに受け止められている感覚に目を開ければ、俺の横には気を失ったアリスが横たわっていて、俺たちを受け止めているのが巨大な右手だと分かりハッと顔を上げる。

俺たちを受け止めた手の主は先程まで殺し合っていた《メガロス》だった。しかし先程までの戦意や殺意は微塵も感じることが出来ない。

「お前……俺たちを助けたのか？」

《メガロス》は何も答えずセントラル・カセドラルの外壁へと手を近付ける。

「んっ……」

「アリス、気が付いたか」

「お前は……っ！ 《メガロス》！」

急に暴れるなって！

「とりあえず落ち着いてくれ。この状況じゃお互い満足に戦えないだろ」

後半は《メガロス》へと言葉だが、当の《メガロス》はセントラル・カセドラルの上へと視線を向けていた。

その横顔から読み取れるのは戦いを邪魔された憤りか、或いは俺たちよりも優先するものを見つけたのか。

「《メガロス》も俺たちに興味がなくなつたみたいだし、俺たちも真似して剣を突き刺してぶら下がるか。アリスも《メガロス》の手の上にいたら気が気じゃないだろ？」

その気になればこのまま握りつぶすことも出来るが、俺は《メガロス》がそんなつまらないことはしないと確信に近い思いを抱いていた。

「殺し合っていた相手の温情で生かされるとは…」

外壁のつなぎ目へ剣を突き刺し、問題ないことを示せばアリスも難色を顔にしながらも俺と同じように剣を刺してぶら下がる。

俺たち2人が手から離れたことを確認すると空いた右手を外壁へと突き刺した。そして刺していた左手の石斧剣を引き抜き、右腕の腕力で壁を壊しながら上へと跳躍、そしてまた右腕を突き刺すを繰り返し、あつという間に見えなくなつた。

「なんだというのだ、奴は…」

確かに。理性のない殺すためだけの存在かと思えば、まるで人間のような一面を覗か

せる。

「とりあえずの提案なんだが、中に戻るまでは休戦ってことにしないか？」

「……この状況では仕方ない。だが中に戻った時、お前の天命も尽きるものと思え」

ユージオとは分断されてしまったけど、目下最大の危機は去った。

だけど《メガロス》の目的がなにか分からない以上、また殺し合うことになるかもしれない。

さっきの1戦のおかげでどう足掻いても殺される未来しか見えないけど、その時はその時だ。